

墮天使に愛された言霊
少女

ひきがやもとまち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自作である「IS学園の言霊少女」の主人公セレニアがインフィニット・ストラトスではなくハイスクールD×Dの世界に転生していたらと言う設定の作品です。基本はそのままでありますが、非常識の度合いが増した世界なのでセレニアの毒舌がさらにキツイです。それと、差別化を図るために百合色を強くしましたが主人公はノンケです。

注：今作はあくまでもギャグ作品です。主人公が常識っぽい事を言うのもシリアスギャグの一環でしかなく、リアリティなど一切求めておりません。

リアルな世界感のハイスクールD×D二次創作をお求めの方には合わない可能性が高いので、バカ話を読んで笑えりやそれでもいいという方以外にはお勧め致しません。ご

承知おきください。

目次

プロローグ「非日常に惚れられた常識人」

1話「神と愛の在処」 16

2話「これよりセレニア教は原作への武力介入を開始する」 38

3話「常識（セレニア）VS非常識（神代の堕天使）」 57

4話「女神さまのお父さん（？）」 74

5話「世界全ての敵（主人公のお父さん）」 88

6話「ニヤルラトホテプが泣く頃に」

101

7話「第五勢力『混沌帝国』参戦」 117

8話「夏休み前、ようこそイゼルローンへ」 135

9話「深く静かに原作を浸食せよ」 149

10話「動乱の予兆を告げし（自称）凡人」 175

11話「ノリノリタ麻ちゃんによるスパルタ特訓！」 190

12話「戦闘に武力介入して、戦争を始めます！」 209

12 if 話「もしも12話がギャグ展開ではなくシリアス展開だった場合の回」	223	16話「大虐殺です」	332
13話「冷静なる蒼眼」	239	17話「まじめに書いた原作6巻の言霊解釈編『序章』」	353
墮天使に愛された言霊少女の日常	さい	18話「ロスヴァイセが無くコロニー」	369
しよ	256	19話「混沌帝国皇帝令三〇六六号。『神様暗殺計画』発動ス」	380
14話「冥界の終わりが始まり、帝国による終わりが始まる」	270	20話「言霊少女は悪神の悪意を弄ぶことを良しとする」	398
「天野夕麻の優しさは不器用ですから」	283	21話「言刃トル」	430
15話「悪魔たちの黄昏」	297	22話「大決戦前までです」	449
15・5話「15話に書く予定だった内容を一話にまとめてみた回」	316	23話「その主人公たちに歴史あり」	464

	24話「異常なる血の紅」	476		「ディオドラ戦前、姫島家の事情話にセラ ニア母娘が介入していたら」	639
	25話「この世わずかな悪役の概念」	491		「クソツタレ悪魔たちに相応しい生と死 を」	669
	26話「最低最悪なシナリオに万雷の座 布団を！」	509		32話「ディオドラとのレーディング ゲーム会場戦闘編・ギャグバージョン」	693
	27話「墜ちた覇龍に英雄の一撃を！」	541		ボツ案「セラニアが自分で戦う場合の設 定話」	710
	28話「言霊少女を愛した元墮天使少女」	568		墮天使に愛された聖なる言霊少女	735
	29話「Newライヒ！な日常」	591		33話「ディオドラ、弱いまま知識だけ 持ってコンテニュー」	749
(戦争編)		616			

34話「ひねくれディオドラ理論、ひねく

れセレニア理論」／「ひねくれ者たちと愚

劣なる赤！」—— 773

先行予告篇「ディオドラがドライグイツ

セーを言葉で蹂躪する会話シーンのみ」

—— 793

ディオドラ編完結回「当初に想定してい

た内容でディオドラ編を締めさせてもら

いました」—— 797

第7話の「カオスロード」—— 845

35話「体育館裏のセレニアダーク」

859

墮天使に愛された言霊少女ちゃん

875

37話「そうさ、京都にいこう『私たちも

一緒です☆（混沌帝国三幹部）』*ただし

別校のセレニアは出てきません」

902

38話「宇宙的恐怖、京都に立つ！」

917

39話「たまたま先祖が英雄だった運の

いい人たちご一行様です」—— 935

40話「地球英雄伝説VS外宇宙英雄伝

説」—— 947

41話「反英雄さまたちご出馬です」

970

4 2 話 「そして戦争の夜は始まった……」

984

4 3 話 「魔王・天粕夕麻編。魔王勇者×殺

人鬼×日本の英雄派？」

1002

「ラスト・バタリオンな墮天使を」

1025

外伝 「ハイスクール伝説」

1036

? 話 「京都修学旅行編に魔王(笑) 降臨」

1043

4 5 話 「若手最強決定戦にスポット参戦、

決定です」

1075

4 6 話 「異種族の大物たちと私たち帝国

軍と」

1089

4 7 話 「異住セレニアの家臣として生き
るとはこういうことだ」

1099

4 8 話 「リアス・グレモリーの眷属として
『お前が本当に守るべきはナニカを考え
ろ!』」

1116

プロローグ「非日常に惚れられた常識人」

私には、常々疑問に思っていたことがあります。

それは、「なぜ現代学園バトルファンタジーの主人公は、あからさまに怪しい町中で気絶している少女を自宅に連れ帰るのか」です。

だって、そうでしょう？

自分に医療知識も自宅に医療器具があるでもなく、学生が居候を養える甲斐性があるはずもなく、家主たる父親に相談もせず、身元不明、経歴不明、前科の有無も不明。そもそも氏名すらもわからない。挙げ句の果てに普通の見た目で平凡な町の一角に気絶して倒れている絶世の美少女。

……これでトラブルに巻き込まれなければ奇跡でしょう？ 普通に考えて。しかも、言うに事欠いて「厄介事はごめんだ」ですよ？ アンタが自分で厄介事を家に連れ込んで、家族友人丸ごと全部巻き込んだんだと言いたいです。

——いえ、訂正します。『言いたかった』です。過去形です。

だって……… 現実に不可能ですからね、目の前で倒れてる女の子を見捨てるな

んてー

「やだ、なんであの子の目の前に女の子が倒れてるの？」

「突然、空から落ちてきたのよ。怖いわねー、事故かしら。あの子も助けてあげればいいのに……」

「見て、倒れてる子は怪我してるのに、あの子は見てるだけよ。なんて薄情なのかしら……最低」

「倒れてる子は病院になんか連れてかれたら警察に色々聞かれるんだろ。最近の警察は質が悪い奴も多いから大変だろう。せめて落ち着くまで面倒見てやれよな」

「まったく……最近の若いモンは、まったく」

「……いくらでも自分勝手な倫理的人道的性善説を唱える事が可能な、無関係で無責任な聴衆の方々。できれば黙るか自殺して下さい。それか、せめて携帯をしまつていただきたいです。」

「——主人公は倒れている女の子を連れ帰るのではなく、連れ帰らざるをえなくされるのです。人畜無害を自称する一般大衆の暴君たちによって……」

「……誰ですか、民衆の民衆による政治だの基本的人権だのと言って、最弱の

民衆を最強にしたのは？

「おかげで、真の最弱である『部外者の転生者』つまりは私が関わり合いたくもない『原作』に参加するためのフラグが建ってしまったじゃないですか……」

勘弁して下さいよ、本当に……ああ、なんだか胃が痛い……」

「いきなりでなんですが、私には現代日本で男子高校生をしていた前世がある女子高生です。いわゆる転生者という奴ですね。」

「もつとも、よくある異世界転生と違い私にはなにも特典は与えられていません。異能にも目覚めないでしょうし、目覚めたくありません。」

「ええ、絶対にいりませんよ、そんなモノ。厨二バトルに巻き込まれる事に憧れなんて微塵も感じません。」

「上条さんみたいに毎度死にかかってたら、一般人の身体は持ちません。普通に死にます。俺たちの戦いはこれからだ！は、戦い続けられる強者だけが言える言葉です。」

「だからこそ、私はこの歳まで原作『ハイスクールD×D』にはいつさい関わらないよ」

う注意してきました。

舞台となる高校と違う学校に入学し、同じ市内に住んでいても極力近づかずに過ごして、原作キャラの名前を聞いたら即逃亡。

逃亡中の犯罪者みたいな生活でしたが、別に不便はなかったので気にはしませんでした。厨二バトルに巻き込まれる可能性を思えば格安の安全商品ですよ。

ーそうやって、学園ラブコメバトルファンタジー世界に転生してからずっと 原作とは関わらない”をモットーに生きてきた私だったのですが……

……どうやらそれは、今では過去形で語らねばならなくなった様ですー

「お母様、お皿はこれで宜しいでしょうか？」

「ああ、ありがとう。ついでに冷蔵庫から昨日作り置きしたビーフシチューも取り出しておいてくれるか。セレニア用のおかずだ」

「ふふ、お母様はほんとうにセレニアさんのことが大好きなんですネ。……気持

「確かに私は自分の名前さえ思い出せず、身分すら定かではない不束な女ですけど．．．それは今だけです！」

将来は絶対にセレニアさんの奥さんに相応しい女性になって見せますから、まずはお付き合いを始める前に「夕麻」と名前で呼んでくー」

「謹んでご遠慮させて頂きます」

「ぐはっ！」

盛大に吐血して仰け反る天野さん。

．．．あれ、なんかデジャブが．．．？ 気のせいですかね？

「すみません、私ぼっち生活が長いものでそういうのに慣れてなくて。名前で呼ぶのはハードルが高いのでまずは知り合いから始めませんか？」

「くっ．．．千里の道も一歩からと言うことですね．．．！」

いいでしょう、受けて立ちます。そして、いつか必ずセレニアさんに私の愛を受け入れさせて見せます！ 覚悟しておくことですね！」

「．．．．．告白するか脅迫するかどうかにして下さいよ．．．．．」

美人ほど頭が悪いのはバトルラノベの特徴なんですか．．．？ だからいつも人質になつて味方をピンチに陥らせるような人がメインヒロインになつたりするのかもかもしれませんねえ．．．。いえ、どの作品がとは言いませんが。

ーまあ、今の会話で分かったと思いますが、この残念な居候さんがこの前私が拾わざるを得なくなった、空から落ちてきた不審者の美少女、『天野夕麻』さんです。

正確には、この名前には（仮）が付きます。

本人の言葉通り自分の名前も思い出せないそうなので、着ていた服に貼られていたプリクラ写真に書いてあった名前の一つを拝借しました。

写真には彼女の他に、金髪ツインテールで目つきの悪いゴスロリさんや美人で背の高い露出狂さん、不審者という単語が服を着たような男性が写っていましたが、どれも見覚えがないそうです。

・・・それにしても、「ドーナシーク」、「カラワーナ」、「ミッテルト」って・・・どれも、すごい名前ですよ。一緒に写っている方々に書かれていたので、おそらく彼らの氏名なんでしょうけど・・・厨二感が凄まじすぎます。

その上、「天野夕麻Ⅱ至高の墮天使レイナー様」とわざわざⅡ付きで紹介されていますし・・・。どんだけ自己顕示欲が強いんですか、この人・・・マジ引きます。

・・・とりあえず、この写真一枚で彼女が原作関係者であることは確定しました。

なぜなら「ハイスクールD×D」の世界は、悪魔と天使と墮天使が争いあっている地

球が舞台だそうですから。墮天使と書かれている以上、彼女は墮天使なんでしょう、たぶん。

もちろん、たんなる厨二病看者である可能性も否定できませんが、こんな残念な厨二病は正直イヤすぎるので墮天使だと仮定します。

全国の厨二病看者を敵に回したくはありませんからね……。

「さあ、（ゴ）飯の準備ができましたし、頂きましようセレニアさん。

あ、私の作ったひじきとレバナニラのお味は如何ですか？ 鉄分豊富で嬉しいですよ。このおうちに住まわせて頂いてから不足気味になっている私にとっては、命を繋ぐ健康食品なんですよ♪」

「……なぜ鉄分不足に陥っているかは聞きませんが、今後私には貴女が入浴した後に一度お湯を抜き、改めて入れ直してからでないとお風呂には入らないことにします」

「そ、そんな……何故ですかっ!？」

「気分です」

言わずとも分かりなさい、変態。

今を見れば分かるでしょうが、天野さんは奥ゆかしそうに見えるだけで実体は肉食系です。

黒髪ロングで巨乳なお淑やかそうに見える大和撫子の皮を被った、完全無欠のビッチです。きつと、記憶を失う前は酷い性格だったに違いありません。ボンテージとか着てそうですよね、きめえ。

そんなビッチで肉食系で男を誑かすのに長けていそうな典型的悪女な彼女ですが、厨二作品のお約束通りに記憶を失って倒れているところを助けて介抱した私に惚れました。

ベタ惚れではありません、ヤンデレです。

ナイスポートしても可笑しくないレベルの酷い状態です。キモいし怖いです。

なにせ、回復したんだから早く出て行けと遠回しに言ってみたら全く伝わらず、逆に気を使ってくれたと解釈されて、その晩にはベッドに忍び込んできた程ですからね。日本語は難しいです。

ちなみに、二階の窓から突き落としました。堕天使なら怪我もしないのでしよう。

原作知識によると、堕天使とは元は神に仕えていた天使が邪な感情を持った結果、地獄に堕ちた存在だそうですが……愛情⇨欲情は邪な感情に入れても良いのでしょうか？

入れて良いのなら、彼女は二度堕天したことになります。この場合はなんと呼べばいいのでしょうか？ 堕堕天使？ 堕天使改？

.....ダメです、私に厨二ネーミングセンスはありませんでした。発想が貧相すぎます。なんですか「改」って。ザクですよ、それは。

「ああ、そう言えばセレニア。夕麻ちゃんの入学手続きが済んだから、明日彼女を学校まで案内してやってくれ。道筋はおまえも知ってる場所だ」

「.....はい？　今なんて言いました？」

「ん？　夕麻ちゃんを学校に入学させたと言ったが.....なにか変か？」
「変でしょ。むしろ、異常事態ですよそれ」

厨二にありがちな展開ですが、だからと言って易々と納得できる内容ではありません。断固抗議します。

「いいですか？　彼女には学校入学に必須の身分証明書も親族も戸籍も住所録もないんですよ？　それらを手続するには役所での手続きが必要で、うちと養子縁組みをするにしても、最低数ヶ月の時間がかかります。まだ、彼女を拾って一ヶ月ですよ？　いくらなんでも早すぎるでしょ。どんだけ優秀なんですかお役人様は」

お役所仕事のエリート営業マンを超えてどうするんですか、市役所じゃなくて大手上場企業に就職すべきでしょ。むしろ、ヘッドハンティングしなさいよ。

「しかも、身元保証人になろうにも、うちは彼女と無関係で親御さんと会ったこともなく、委託されることもできません。

なによりも、今の彼女は国家の庇護下にはない完全なアウトローです。歩く法律無法地帯です。存在していない存在です。これでどうやって、学校入学なんて言う大量の書類が必要な行為を行ったんですか？」

隣の椅子に座っている天野さんが「歩く法律無法地帯って．．．」とショックを受けていますが、墮天使なら立て直すでしょう。否定されるのは慣れているでしょうからね。

そんな事よりも今は母さんの答えです。

なんと答えるのかと思っていると――

「ああ、だから私立校にした。学園長が昔の知り合いだから融通を利かせてもらって書類を偽造させたのさ」

何のことはありません。たんなる犯罪計画の自供でしたよ。

「．．．．．犯罪では？」

「裏口入学だってバレなきやそのまま卒業して資格をもらえる。学校によっては収入源の一つにしてるってニュースで言ってたぞ」

「マスゴミの話を実に受けなくてください。ちゃんとしたマスゴミの意見を聞きなさい」

「どうせ、どこも営利目的だ。大した違いはないさ」

・・・どうしましょう、うちの母が反社会思想家です。

「役所も学校も国民に快適な生活を提供するための場所という建前のもと造られてるんだ。国民のために利用されるのはむしろ本望だろう」

「戸籍と住所録のない天野さんは、日本国民にカウントされませんか?」

「日本で生まれた子供たちは、すべからく日本国民としての権利を与えられてしかるべきなのさ」

辞めてください、そういう時事ネタは。巻き込まれたくないので。

・・・それと、そう言う話を実の娘にするのは親としてどうなんでしょう? 子供に悪い影響を及ぼすとは考えないんですかね。私、まだ十七歳の高校二年生なんです
が・・・。

影響を受けやすい年頃なので、もう少し配慮してください。

「しかし、学校側は受け入れられるんですか? 教育現場にいない学園長個人はともかく、担任になる教員が難色を示すと思います」

身元不明で空から落ちてきた美少女なんて、騒動の元ですからね。いわば時計が見えない人間時限爆弾です。何時爆発するともされない危険物を押つけられて喜ぶ人間はいないのでは?」

「最近は学校教員の不祥事が多いからな。あいつのところに怪しいのがいるらしい。多

「少のリスクを負ってでも炙り出したいんだそうだ」

「なるほど・・・生き餌ですか。仮に何かあっても存在しない者には危害は加えられない。つまり、トカゲの尻尾切りが容易と言うことですね。

いざという時には生け贄にするつもりで天野さんを受け入れた、と」

「うがった見方だが、それもまた真実の一端。違法も癒着も使い方次第で毒にも薬にもなるさ。

「暴力と正義の境目なんて曖昧極まりないんだから」

「納得しました。そう言うことでしたら、私は構いません。明日は休日ですし、水先案内人を務めさせていただきます。

「ーそう言うわけですので、明日はよろしくお願いしますね、天野さん・・・天野さん？」

先ほどから妙に静かだった彼女は、自らが作った血反吐の池に沈んでいました。

右手の人差し指が書き記した文字は「マイハニー」。

・・・ふむ。

「まあ、存在しない人間が死んでも誰も咎められないので、被害は軽微ですね」

せいぜいが床とテーブルを拭く手間が掛かる程度です。

私は特に気にはせず食事を再開しましたが、このことを翌日には深く後悔する事にな

りました。

天野夕麻さんが入学することになった学校の名は『私立駒王学園』。

『ハイスクールD×D』お主な舞台であり、主人公『兵藤一誠』が通っている学校であり、メインキャラクターの殆どが関係者として出入りしている『オカルト研究会』がある場所です。

最悪の出会いを予想できない無能力者の私には、未来を気にせず普通に食事を楽しむことしかできません。

願わくば、原作との出会いが予想したものとは違う、友好的な形で終わる綺麗な未来であるといいんですが……。

．．．しかしー

「天野さん、ひじきとレバニラ役に立って良かったですね。鉄分補給による血液増量は今の貴女にとつて急務ですよ」

食事療法はやはり偉大です。

みんなを満腹にさせられる正義こそが、真の正義です。

力で押しつける正義は悪と同義。明日も、なるべく平和な一日でありますよう

に．．．．．

つづく

1話「神と愛の在処」

現実世界からの転生者である私、異住・セレニア・シヨートはさっそく後悔していました。

今まで、この世界『ハイスクールD×D』とは関わり合わないよう意識してきたつもりでしたが、どうやら転生の神様は転生者に楽をさせたくないようです。

だからこそ、

今こうして、私の前で原作が物乞いをしているのでしょうか……

「えー、迷える子羊にお恵みを〜」

「えー、天に代わって哀れな私たちにお慈悲をおおおー！」

「……………なに、アレ。」

祈り(?)を捧げながら乞食のまねごと(本物の可能性大)をしている白いローブを着た美少女が二人。

……………怪しすぎて近寄れる人が居ません。警官までもが遠回しに見守っ

ているだけです。見間違いでなければ、あの目は可哀想な生き物を見つめる瞳ですよ、確実に。

——あれは、どう見ても原作キャラですよね間違いないく。

いえ、むしろ、そうであつて下さい。あんなのが普通に住んでる世界で生きていくのはイヤすぎます。死んで再転生したくなりますから、切実に。

・・・正直なところ、私も関わりたくーいえ、視線を向けることさえしたくないのですが、今ここで彼女たちを放置した場合どうなるかを考えると、そもいきませぬ。

なにしろ、私の隣で同じ原作が「あらあら・・・なんて浅ましいんでしょか。人にタダで物を恵んでもらおうだなんて・・・どれだけ凶太い神経を持つてるんでしょ。同じ女として恥ずかしいです」とブーメランにしか聞こえない罵声を優雅に吐いています。

この人さえ居なければ無視して問題ないでしょうが、この残念美人さんの立ち位置がわからないまま原作の舞台には近付きたくありません。

下手したら死にます。たぶん、私を道連れにして盛大に。

だって、ヤンデレですもん。そりゃ、死ぬときは一緒にされますよ。

拒否権？なにそれ、美味しいの？ といった具合に。

「・・・・・・・・仕方ありませんか・・・・・・・・」

嘆息しつつ、私は二人に近寄って食事に誘います。

喜ぶ二人とは対照的に周囲の視線が冷たいです。むしろ、凄く痛いです。絶対零度で冷たさよりも激痛を感じるんですよ。RPGの攻撃魔法だとそうなってます。

つ、辛い・・・・・・・・。そして、胃が痛すぎる・・・・・・・・。

ーだというのに・・・・・・・・。

「もう、酷いですよセレニアさん・・・・・・・・。せつかく二人きりのデートだったのに・・・・・・・・。今度ちゃんと埋め合わせはしてくださいね？」

・・・・・・・・・・・・・・・・こいつ、マジ殺してえ・・・・・・・・。

「なんだって!! それじゃあ、彼女も天界関係者である可能性があるのか!? なんていう偶然・・・・・・・・いや、むしろ神の定めし運命なのか・・・・・・・・?」

「簡単には信じられないけど・・・空から落ちてきたのなら天使である可能性が高いものね。教会としても無視は出来ない案件だわ」

ファミレス「デラーズ」まで二人を連れてきた私は、「お布施という事で好きな物をどうぞ」と薦めたところ、二人は物凄い勢いで注文と飽食を繰り広げました。

彼女たちはヴァチカンから来た聖職者だそうですが・・・これって七つの大罪に触れるんじゃないですかね・・・？ いえ、宗教に詳しいわけではないので素人考えですけれど。

「わかったわ。教えられる範囲でよければ教えてあげる。ご飯は美味しかったし、神に仕える聖職者たる者、礼には礼をもって返さなくちゃね」

「そうだな。ここまで馳走になって何も返さないなど異教徒以上に許されざる悪だ。安心して我々を頼るといい」

「助かりました、ありがとうございます。ぜひとも等価値の情報を提供していただければと思います・・・・・・。ええもう、本当に」

私は先ほどウェイトレスさんが置いていった伝票を一瞥した後、ため息を堪えながら笑顔で応じました。

・・・まさか、生きている間にファミレスで一食一万円以上の出費を経験する日が本当に来るなんて思っていませんでしたよ・・・。

——等価値の情報を持ってなかったら教会に賠償請求しましょう。

もしも持っていて黙秘するなら、このネタで脅迫します。法治国家日本で無銭飲食がどれほどに重い罪か思い知ればいいです。惨めな気持ち思い出としてヴァチカンに強制送還されなさい。

ヴァチカン関係者が他国で食い逃げしたのを上は決して見過ごしません。神はいつだって、私たちを見守っているんですよ……？

——きつと、教皇陛下から有り難いご褒美を沢山賜れますよ……くくく。

「それじゃあ、簡単に説明してやろう。まずはそうだな……私たちの自己紹介からはじめるか」

そう言つて彼女、ゼノヴィアと名乗る青髪で目つきの鋭い美人さんが教えてくれた内容は——まあ、よく言つてお約束通りでした。

——その昔、悪魔と堕天使が冥界（簡単に言うと地獄）の覇権を競い争っていました。悪魔は人間と契約し代価として力をもらい、堕天使は人間を操りながら悪魔を滅ぼそうとする。

そこに神の命を受けて悪魔堕天使双方を倒しに天使乱入。壮絶な三つ巴戦勃発。全勢力が大打撃を受けて勝敗が付くことなく停戦。

そのまま緩衝地帯である人間が住む地上へと戦場を移し、うだうだと何千年もの間小

競り合いの消耗戦。

今では悪魔以外の二勢力は人間と交わらないと子孫も残せず、悪魔は強大な力を持つ純血種が激減。まさに厨二設定の定番ですね。

でもまあ、それはさておきー

「……悪魔と堕天使が消耗しきったところで両方を殲滅した方が楽だったのでは？」

「……」

沈黙するお二人。

見れば、冷や汗もかいています。

もしかして気づいてなかったんですかね？ 神話の戦いつてツツコミどころが多いことで有名なんですけど……。

それでも信仰心ならゼノヴィアさん以上に見える栗色ツインテールの元氣娘、紫藤イリナさんが勢いよく一般論に反論してきます。……勢いだけでしたが。

「か、神がそんな卑劣な真似を悪魔なんかにするはずないじゃない！ 奴らは悪でこっちは正義なのよ！」

「『卑劣な悪魔』だからこそルールを守る必要がないのでは？ こちらがルールを守っても向こうは守らないからこそ『卑劣』なんでしよう？」

「う……」

勢いをなくして失速する紫藤さん。

「……いえ、いくらなんでも失速しすぎですから。急ブレーキかかりすぎですよ。かえって危ないから減速ぐらいにしておきなさい。」

「まあ、それがダメなら墮天使に協力して悪魔を滅ぼした後に返す刃で墮天使も滅ぼしてもいいですし、どちらかに策を授けて互角に戦わせて消耗しきったところに攻め込んでもよかったですね。どちらを選んでも天使の犠牲者は少しくらいは減ったと思います。」

命は大事にしないと。せっかく神様から与えられた宝物なんですし」

「か、神はなぜそうしなかったんだ……」

「ああ、主よ……私は生まれてはじめて貴方の采配に疑問を抱きました……。愚かな罪人をお許し下さい……」

くず折れて自問し始めるゼノヴィアさんと、なにやら懺悔をし始めた紫藤さん。

「……ここ、ファミレスでお客さんが多いんですけど……。視線、痛いんですけど……。」

私が胃の痛みに悩み始めるなか、先ほどから妙に静かだった天野さんが急にパンツと柏手を打つと、

「思い出しました！

たしか「こかびえる」っていう人が言ってたんですよ。「先の三つ巴の戦争で四大魔王だけじゃなく、神も死んだのさ。神が使用していた『しすてむ』が機能してるから神への祈りも効果がある。それを「みかえる」の奴は利用して天使と人間をまとめているのさ」って。

なんだか厨二ワード満載ですけど、こかびえるさんという人は中学生か高校生なんですよ？ 外国人にしても珍しい名前ですよねえ」

ー唐突すぎる記憶の回復によってもたらされた、意味深で厨二的で問題発言っぽい発言内容でしたが、これは原作に影響を与えたりは……

「……………」

……………めっちゃしそうですね。

顔面蒼白で凄まじく傷ついたお顔をしている二人を見て、私も思わず頭を抱えました。

ーこれはどうやら……………崩壊しましたね。原作という名の世界が。

破壊神天野夕麻さんは、実績だけを見れば、どうやら悪魔の王を超えたみたいです。

「あ、このチョコパフェすごく美味しい！ セレニアさんも一口どうですか？

・・・それ・と・も♪ あくん、して欲しいんですかー？
 きやつ、いやくん！ 私つてばダ・イ・タ・ン♪ きやはっ

・・・もう、本気でこいつ殺したい。

「・・・ウソだ。・・・ウソだ」

「・・・」

力なくうなだれて「ウソだ」とつぶやき続ける紫藤さんと、呆然とした顔で空を見上げるだけのゼノヴィアさん。

・・・開いてますよ、口。しかも涎でてます。美少女台無しですから閉じなさい。

天野さんの衝撃の記憶復活（結局あの台詞だけでした。ご都合主義すぎますよ）の後、私たちは近くの公園へと場所を移しました。

食べ終わったのにいつまでも居座ると同じ店を利用しづらくなりますし、周囲から氷の矢とか槍のごとき鋭さで降り注ぐ視線の刃に私が耐えられなくなったのもあります。

ただ、一番の理由はこのお二人。

生きた屍と化した美少女エクソシスト（悪魔を滅すると言っていたので）のお二人が自暴自棄になって周囲の被害も省みずに暴れ回る可能性があったので、暴れ出しても被害を最小限に押さえられるようにとここへ。

まあどちらかと言えば、このまま亡者と化して祓われる側になりそうな勢いで落ち込んでいますし、たんなる杞憂でしたけどね。

「……………ウソだ……………ウソだ……………ウソだ……………ウソだウソダウソダウソダ」

……………うん、紫藤さんはこのままだと明らかに不味そうですね。

なんでも彼女は新派、プロテスタントだったらしく、神様の死は現実逃避すら出来なくなるほどの大ダメージだったようです。

対するゼノヴィアさんですが、こちらは軽微ですね。たんにショックで気が抜けているだけです。我に返ればすぐに治るでしょう、きつと。

おそらく彼女が旧派、カトリックなのも大きいのではないのでしょうか？ キリスト教を信じている一般信者達にとってはキリストの方が神より身近に感じて、「神は居ない、けどキリストは実在した」と言われれば受け入れ可能なのかもしれません。

まあ、新約聖書はキリストの言葉で埋め尽くされてるらしいですからねえ。ネットでチラ見してから二度と手をつけてないから偉そうに語る資格はないんですけども。

ですが、今回に限っては――

「――別に気にすることもないでしょう？　もともと貴女たちにとって神など、その程度」としか扱われてなかったのですから」

「なっ……!!？」

衝撃を受けて一時的に立ち直る紫藤さん。

信仰心を侮辱されたとしても誤解したのか、その手に持つ「ナニカ」を握りませんが――「だって貴女達、一度も神に会ってないんでしょ？　ただ「居る」と言われてきた者を信じてきただけで。だったら今まで通り信じればいいじゃないですか。

どうせ初めから居なかったわけですから、神の奇跡も全部真つ赤な偽物です。その「偽物」を信じてきて問題が起きなかったのなら、これからも問題は起きませんよ。

所詮、会ったこともない存在なんて、居ても居なくても全く同じ存在でしかない」

「……っ!!」

これが、一般的な日本人であるところの私の考え。

困ったときのみ頼るだけの存在ならば、実在するかどうかなんてどうでもいい。鯛の頭も信心から。

信じる者は救われるのなら、居ないものでも信じた方が得だ。神も宗教も人が生きていく上で必要だから生まれ、必要だから絶る。生きるのに邪魔になったら捨てるだけ。

衣服と同じ。冬物は夏になったら押入の中へ。冬が来るまで出番はない。

——極端すぎることは自覚していますが、私の考え方はそんな感じですよ。

与えられた命だとしても、自我を持った以上は「死ぬ」と言われて「畏まりました」とは言えないのが人間です。

ましてや、「殺せ」と言われて「畏まりました」と無関係な人間を異教徒と決めつけて殺す輩はただの人殺しです。

神の代理人を名乗るのなら、法という正義で裁きなさい。犯罪を正義と言った時点で、彼女たちはテロリストとなら変わりがない。

「貴女達は今まで「教会」の命令で殺してきたんでしょう？」「神はこう仰られた」と言っ

て殺害を命じてくる教会幹部達の言葉通りに。
だったら、これからも同じ事をすればいいんですよ。今まで一度だって「神からの命令」を実行した事なんてないんですし、なにひとつ変わらない。だって居なかったんですからね、神様。命令も出来ませんし、言葉すら伝えられません」

彼女たちが神の言葉と教会の言葉に疑問を抱かなかった時点で、それは「偽物」です。「偽物の信仰心」です。

だって、「汝の隣人を愛せよ」といった神を信仰しながら「異教徒を殺せと神は仰られた」と命じる教会の命令を同一視してきたのですから。

それは「盲信」であり「信仰」ではない。

……話が長くなりましたが、まあ、ようするに。

「貴女達が信仰していたのは「教会」です。「神」が居なくても問題はありませぬ。なぜなら「貴女達の頭の中」にしか神は居ないからです」

「!?!?」

針金から姿を変えた剣を振り上げようとして、地面に落としてしまったそれを拾おうともせずに紫藤さんが虚ろな目で私をーいえ、あれは何も見てませぬ。強いて言えば「神の栄光」の残光でも見てるのかもしれない。

……さて、困りました。

なんとなく言ってみただけの言葉で空気が重くなつたと思つたら、二人の聖職者がゾンビになってしまいました。……どうしましょうか、これ。

私としては、厨二ラノベを読むたびに感じていたことを言ってみただけというか、お約束設定にウンザリだったのでちよつと気分転換したかっただけなのですが、思いの外効果があつたみたいですね。

……むしろ、効果有りすぎじゃないですか、これ？

天野さんの言ったことが真実であるのを前提にしているようですが、別に真実とは限

りませんよ？ だって、彼女が言っただけですし。

天野さんどころか彼女たちも神様に会ってないわけですから、生きているのか死んでいるのかなんて、誰にも解りませんって。

もしかしたら、教会のお偉いさんに聞いても無駄かもしれません。

だってミカエルですよ？ 神様の次に偉い人ですよ？ 天使なんてRPG以外では名前すら聞いたことのない私ですら知っている超大御所です。

そんな超越的存在が・・・たかが人間の元代表に真実を教えてあげる必要があると思えます？

キリスト教が世界の覇者だったのは何百年も前ですよ？

今では日本以外でも信者は減ってるし、信者が教えを曲解して犯罪犯したり、自己正当化の口実にしたりするのが当たり前の世の中です。

そんな中で天使たちが人間を信じられるかどうか・・・いえ、信じさせるためにも嘘偽りのない信仰心を捧げさせようと神の死を隠すのではないのでしょうか？
．．．．．
あくまでも、私の妄想ですけどね。

．．．．．しかし、これを言っても余計に落ち込みそうなんですよね、この人。なんで宗教家って面倒くさい人が多いんですかね、二次元だと。

解決法が見いだせずには全員で沈黙しているとー

「静まりなさいー！」

「!?!」

はじめから誰も喋ってません。

「記憶が戻りました。私の名前はレイナーレ。」

かつては墮天使総督アザゼル、副総統のシエムハザら愚物の愛を得んと外道に落ちた末に、無様で惨めな末路をたどった下種な鴉だった者ー」

うん、厨二感満腹ですね。すごく痛い。

「しかし！ 今は違う!! 私は生まれ変わったのです！

ーそれは、真の愛を知り、真実の愛を得て、至上の愛へと至ったゆえに……
そう！ 今の私は墮天使レイナーレではなく、愛の天使……『愛天使レイナーレ』です
!!」

「お、おとおおっ?!?!」

……カッコ悪。厨二力低……。

「さあ、見なさい。

これが……これこそが私が至上の愛によって得た『愛の証』ー『性装』と『愛の

翼』です!!」

「そ、それは最高位天使の持つ一二枚の翼っ!?」

一二枚もあると邪魔そうだなあ。毛繕いとか大変そうです。

「……それよりも、ボンテージが愛の証って……. っただけ歪んでるんですか、その愛。愛と書いて『犯す』と読むとか言ったら『愛の天使』と書いて『ストーカー』ってルビ振りますからね?」

「さあ、貴女達も偽りの愛からさめる時です。

祈らせるばかりで何も与えてはくれない、捧げさせても何一つ報いようとはしない……. そんな邪神への信仰心など捨てて共に真実の愛を掴むのです。

そう……. 真実の愛を与えてくれる至高の女神——『愛女神セレニア様』への信仰へと目覚める時は今なのです!!」

「お……. おおおおおおおっ!!!」

——おい、待て。ちょっと待て。今なに言いやがってくれましたか、このビッチ。

「せ、セレニア様! ぜひと私の愛を捧げさせて下さい! そのためならどのような苦痛も恥辱もご褒美です!」

「わ、私もです! 真実の愛を得られるのなら信仰も純潔も捨てられます!」

「黙りなさい、このビッチども。風俗嬢にでも転職すればいいじゃないですか。半径1

メートル内に入らないで下さい、変態が感染します」

あ、不味い。つい本音が……。

「は、はああんうっ♪」

………そこでなぜ、色っぽい声と表情で悶えるんですか、貴女達。

……二次元の聖職者って変態しかいないんですかね？ 麻婆と愉悦が大好きな神父

さんより酷いんですけど、この二人。

「良い覚悟ですね。」

では、まず初めにセレニア教の性装として私と同じ服を与えましょう。これに着替えて、まずはセレニア様への愛と信仰を強めるのですよ」

「は、はいっ、レイナー様！ 誠心誠意努力いたします！」

ああ、このような恥ずかしい服を着た私をセレニア様に見て貰えるなんて……それだけで私の人生の帳尻は合ったようなものだ……」

「私も……。こんな恥ずかしい格好でセレニア様にご奉仕できるなんて夢みたい……。ドブに捨ててしまった今までの人生もこの瞬間の為にあったのなら感謝しほうだいな……」

………ダメだ、この人達……早く何とかしないと………

「……ん？」

あれ……。ゼノヴィアとイリナって、どこかで聞いたような気がしてきましたね……。厨二作品らしく登場キャラが多すぎるみたいでメインの数人しか原作知識を与えられていないんですけど、その中にいたのかもーあ。

「……ヒロインじゃないですか」

てつきりサブキャラだとばかり思っていました、二人とも立派なヒロインです。えっと、確か設定はー

ゼノヴィア。ヒロインの一人。バスト87センチ。

紫藤イリナ。ヒロインの一人。バスト87センチ。

「……おい、待てやコラ」

なんで名前以外のプロフィールが、バストサイズだけしか載ってないんですか。これだなにを分かれと言うんですか？ なにをしろと言うんですか？ ヒロイン達のバストサイズ知識だけを与えられた転生者って、もしかして私が最初なんじゃないですか？ 滅茶苦茶いやな記録なんですけど。これ以上なく不名誉な名譽なんですけど。

誰か「いや、お前は二番目だ」と言ってお下さい。お願いします。

「あ、羽が生えたわ。色はピンクなのね」

「私もだ。やはり性装に着替えたおかげで成長が速まったみたいだな」

「いやいや、速すぎますから。なんで卵から孵ったばかりで羽が生えるんですか。……て言うか、なんですか羽って。貴女達人間でしょ？」

ちよつと考えている間に、二人は露出狂にしか見えないあんまりな服装へと着替え終わっているばかりか、背中には六枚の翼までもが生えています。

言っていたとおり色はピンクで……完全にイケないサービスをするお店の従業員さんになってますね……。

だって、黒いボンテージにピンクの翼ですよ？ どこから見てもコスプレでは済まないレベルです。猥褻物陳列材です。即刻通報しましょう。

「さすがはこの愛無き時代にあつて、信仰という形ばかりではあつても、愛の一種を真剣に祈った乙女達。私の見込み通りに『転生』したようですね」

「『転生』……？」

またなにやら新しい単語が出てきました。

勘ですが、ニュアンスからして私がした『転生』とは別物だと思われれます。

だって、死んでませんもん二人とも。私は死んだから、今ここでこうして胃の痛みに苦しんでるんです。

．．．．．なぜでしょうか、自分の言葉に矛盾しか感じられないのは．．．

「墮天使は元々、神に仕えていた天使が邪な感情を持ったために地獄に堕ちてしまった存在です。

しかし、私たちはその逆——邪な偽りの愛に仕えていた者が真実の愛を持ったために昇天した存在．．．すなわち『転生愛天使』です！」

「止めて下さい、これ以上頭の悪い造語を作るのは」

原作をこれ以上壊さないで下さい。

この時点でたぶん再建不可能な域に達していますよ。たぶんですけど。

「さあ、貴女達も愛しなさい。そして、祈るのです。

この世がセレニア様の愛で満たされて永遠の安らぎと女の幸せを得られることを．．．．．ラーメン」

「ラーメン」

「炭水化物か」

「ラブ」と「アーメン」を掛け合わせたんでしょうけど、食い合わせ悪すぎでしょう。ただの中華料理じゃないですか。横浜中華街か秋葉原にでも行きなさいよ。美味しい店がいっぱいありますから。

「ああ、今日はなんと良い日なのでしょうか．．．。こうして新たな同胞と真実の理解者

を得られました・・・。

この日を最愛の記念日にするためにも、私たちは美味しい物を食べに行かなければいけません。そうですね？ 二人とも」

「仰るとおりです、レイナー様。私も空腹故に愛で腹を満たしたくなったところですよ。ケーキでお腹は満たしても愛がなければすぐに空っぽになります。「パンがなければケーキもいらぬ。欲しいのは愛だけ」という言葉もあります」

「ありません」

愛でお腹は膨れません。心が膨れても空腹ではいずれ餓死します。

「では、参りましょう。私たちの出会いとセラニア教の誕生を祝い、盛大な誕生祭 ♪ラブリマス♪を盛り上げるのです！」

「おとおおおつ!!」

「止めて下さい、お願いですから。私が恥ずかしくて死にますから。」

「ー聞いてますか？ 聞こえてますよね？ 聞けやオラ。・・・ねえ、聞いて、お願いだから」

私の言葉などなんの意味もなさずに町へと繰り出す、ボンテージ姿の痴女三人。

「ーすつごく行きたくないですけど、行かなかつたら絶対に大問題を起こしますよ

ね、あの三人……。

「……ああ、なんで原作に接触したその日に原作崩壊を…….しかも、変な方向に盛大すぎるほど……」

もはや原作通りの展開など望めないでしょう。私自身、原作を読んだことはありませんが、絶対こんな話じゃないはずですよ。

……つーか、こんなのバトルファンタジーじゃないじゃん。ただの変態コメディじゃん。誰が読むかつ！

…….ところで、学校見学はどうなったんですかね？
つづく

2話 「これよりセレニア教は原作への武力介入を開始する」

どしや降りのなか、私たち三人は深夜デートを楽しんでいます。

・・・少なくとも、二人は”楽しんで”いるみたいですね。言うまでもなく、私は仲間外れの三人目ですが。一生仲間に入りたくないのですが。

ー衝撃のと言うには無理が有りすぎる、驚天動地の出会いのあと、私の自宅へと拠点を移したゼノヴィアさん、紫藤さんペアを我が母はあつさりを受け入れました。

曰く、「嫁候補はいくら居ても困らない。最終的には愛人でもいいと言わせれば済む」との事です。・・・本当になにを娘に教えてくれているんですかね、あの合法口リ母は・・・

ーその後の家での生活は思いたくないので言いたくありません。

とりあえず、私のプライバシーがこの世から消え去ったとだけ言っておきます。残りはお察し下さい。

「雨の中での散歩も良いものね。・・・とくに人気がないところが」

「ああ、それに深夜という時間帯も良い。・・・とくに人目がないところが」

お巡りさ〜ん。助けてえ〜。

ここに自分が変態であることを隠していない変質者が居ます。襲われそうなのですが、撃退しても自宅で待ちかまえてます。どうすればいいですか？　――諦める？…ですよねえ。

はあ…今日は天野さんが夕飯の準備で居ないことだけが不幸中の幸いですよ。あの格好の三人に囲まれながら歩くのは、一般人のノミの心臓にはキツすぎるのです。胃に悪いし痛いです。

「…ん？」

「あれ？」

「…？　どうかされましたか、お二人とー」

「ヒヤハハハハハ！」

私の台詞が終わる前に響いてくる可笑しな笑い声。

…こんな笑い方する人って実在したんですね。どう聞いてもわざとやってる様にか聞こえないんですけど…。――厨二さん？

「これはアレだな。いわゆる変質者だな。即刻通報しなくては。日本の深夜に変態が彷徨っているのは教育上よろしくない」

「だね。夜中にあんな奇声を上げるような奴は変質者で間違いないからね。良い子のみに悪い影響がでる前に刑法で裁いてもらわなきゃ」

「……………呼んだら貴女達もまとめて職質されるんですが……………」

その後、問答無用で警察署へと補導されて留置所で一泊です。

だって、今着てるのローブの下にはあのボンテージですよ？ もともと着ていた戦闘衣とかいいうのよりも露出度上昇しすぎの。

完全な変態さんです。貴女達こそ通報されるべきでしょう。

「バッチコイ！ ナイスタイミング！ 以前のお返しついでに試させてくんねえかなあ？ どっちが強いなあ、オマエんとこのクソ魔剣とお、この聖剣エークスカーリバー、とさああ！」

……………。

「変態確定だな」

「変態確定だね」

「変態確定ですね」

本当に酷い変態も居たものです。

完全に厨二です。妄想と現実をごっちゃにしすぎです。

この世界『ハイスクールD×D』には聖剣エクスカリバーが実在しているようですが、どうやら原典である「アーサー王伝説」とは無縁のようですね。

だって、間違いなく使い手を選んでいませんもん。選んでおいてアレなら聖剣自体が

ナマクラなんでしよう、確実に間違いないように。

「うらああああああ！」

「てやああああああ！」

なにやら叫び声がしたと思ったら、道路に二人の少年が飛び出してきました。

一人は、天野さんが通うことになっている駒王学園の男子用制服を着た美少年。

もう一人は……コスプレイヤーですね。改造神父服を着て舌を出しながら剣を振っている、見間違いのような厨二さんです。

「……ん？」

片割れのコスプレイヤーさんがこちらに気付きました。

ニヤアと、まさにザ・厨二の笑い方で笑顔を作り、話しかけてきます。口調までもが厨二でした。

「これこれは、教会所属の聖剣使い様じゃありません、か！　こんな所で奇遇ですねえ。もしかしてえ、俺様ちゃんを殺してきたのかなあ？　そ・れ・と・も、そこに転がってるお仲間ちゃんの敵討ちでちゆかあ？」

「……うわ……」

私たち三人の声が重なります。

厨二です。ものすごいレベルの厨二です。鳳凰院凶魔もビックリです。

まさか、外国にもここまでハイレベルな厨二病患者がいたとは……やはり世界は広がったのですね。

「お前達は……そうか、教会の手先か」

もう一人の金髪イケメンさんが敵意むき出しの口調で私たちを睨みつけながら吐き捨てるように言い放つてきます。

「悪いが、これは僕の戦いであり復讐だ。手出しはしないでもらおう。邪魔立てするならお前達から始末する」

「別にかまいませんよ。勝ち残って生き残ったほうに奇襲をかければそれで済みますし、そのほうが楽です。できれば手の内をさらけ出しまくって戦ってくれれば、もっと楽ができるんですが」

「……………」

びたつ、と音が聞こえるほどに鮮やかな一時停止。

どちらも剣を振りかぶったままの姿勢で止まってしまいました。……リモコンでも押し間違えたかな？

「……おい、聖剣使いさん。おたくら何時からそんなキツタネエ手を使うように成り下がりがやがったんですかねえ？」

「ごく当たり前の戦術的判断ですが？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

再び黙り込むお二方。

なにか不思議なことを言いましたかね私？

ああ、民間人が変質者の喧嘩に介入するのは可笑しいですね、確かに。

ただ、この二人はあきらかな危険人物なので放置するわけもいきません。

いえ、私一人なら何もできないので放置という大義名分のもと隠れてやり過ごしますが、ここには一応のエクソシスト（自称）が二人もいるので不意打ちぐらいはできるだろうなと思いました。

「敵か味方かも分からない相手が交戦中なのです。投降するならよし、さもなければ撃破するのは安全政策上の常識です。誰が居住区で剣を振り回す犯罪者をそのまま放置しますか。まして、犯罪者に戦士としての礼儀を守る必要はありません。あらゆる手段を用いて殲滅あるのみです」

若干ナチズムが入ってしまいました。

昨日みた「HELLSING」の影響ですね。少佐の真似は日常生活では控えましょう。友達どころか社会的地位をなくします。

「ーああ、思い出した。確かアレだ、えーと・・・はぐれエクソシストの・・・プリーズ・キルミー、だったかな。なんか、そんな感じの名前で、以前は正統派の少年神父で

したが、今では教会から身分を剥奪、ヴァチカンから追放されて墮天使達の下部組織に雇われて、悪魔を召喚した民間人を殺して回る始末屋にまで身を落としたとか・・・」

「ちよつと待つてくれないませんかねえ。だーれが、プリーズ・キルミーなんですか？」

俺は殺す方で殺される方じゃないんですけどもお」

プリーズ・キルミーさんが何か言ってるのを聞き流しながら、私は今し方ゼノヴィアさんが言っていた内容を吟味します。

身分剥奪、国外追放、テロリストの下部組織に雇われた鉄砲玉、民間人を殺して回る犯罪者・・・つまり、

「住所不定無職の逃亡者ですか・・・可哀想に・・・」

「ぶろううううっ!？」

私のごく普通の解釈を聞いたプリーズ・キルミーさんが、なぜか盛大に吹き出しました。

なにか面白いことでもあったんですかね？ 見れば、もう一人の制服の方も口元を押さえて笑いを堪えています・・・。

「お、おとおお前、ななな何言ってくれちゃってますか、このガキはああああっ!! お、おとお俺は人を殺すのが好きな快樂殺人者だし、法の裁きなんて剣一本でどうとでもなりますしい、住所なんか無くたって生きていくのに不便ないですしい。問題

「私、涙が出てきたよ……」

一気に同情ムードに包まれた私たちに、プリーズ・キルミーさんが「だああああああ!!」と地団駄を踏み始めます。

ヴァチカンにもあつたんですね、地団駄。日本文化がイタリアにも根付いていて嬉しい限りです。

「ふむ……。転生愛天使としての力を実戦で試したかったのだが……。さすがに、アレを斬るのは忍びないな」

「だよねえ……。完全に苛めになっちゃうし。……ここは『彼女』に任せたら？ せっかくセレニア様に拝謁する機会だし、先輩として見せ場を譲ってあげましょうよ」

「なるほど、アイツか。確かに適任だな。」

よし。では——」

「忠勇なるセレニア教徒よ——愛女神セレニア様の威を示せ！」

『御心のままに』

「うおおおおお!! て、どこから出てきやがりましたか、てめえわあ!!」

プリーズ・キルミーさんは、突如として背後に現れた白いゴスロリ服を着た魔法少女っぽい小さな女の子に驚いて一気に距離をあけます。

かなり警戒しているみたいですけど・・・魔法少女を警戒する快樂殺人者っていったい・・・やはり“自称”を頭に付けるべきなのでは？

「マジカル☆ミルたん、参上だによ♪」

.....
はっ、すいません。魔法少女の名乗りがあまりにお約束すぎて硬直してました。

だって.....ここまで空気を読まない人がまだいたなんて.....世界が広いに

もほどがあるでしょう、いくらなんでもこれは無理ですよ。

「なにフザケやがってますかああああ!!」

ほら、やっぱりプリーズ・キルミーさんが怒っちゃいました。

彼は持つてる剣ー聖剣でしたっけ?ーを振りかぶって振り下ろします。

相手は小学生くらいの小さい女の子、これで決まりかと思いきやー

「ピンチに召喚、『マジカル☆名状しがたきボールのようなもの』」

がきいん!

「なにい!」

ー受け止めましたね、ボールで。．．おかしくないですか、それ?

「今度はこつちの番だによ♪『マジカル☆冒読的な手榴弾』」

どごおん!

「うおわああっ!」

ー敵が吹き飛びましたね、手榴弾の爆発で。．．やっぱりおかしいですよね、こ

れ?

「さあ、今度は決め技で魅せるによ♪『マジカル☆宇宙CCC』」 おらおらおらおら

おらーっ!!!

どいどいどいどいどいどいどいどい!!

「ひびくあひびくおひびく!」

「ー殴られてますね、拳で・・・って、もうコレ魔法でもなんでもないじゃん。ただの腕力じゃん。どこに魔法少女の要素がある!」

「彼女はもともと『彼』だったのですが、魔法少女になりたいという夢を叶えるためにセレニア教に入信し、望みを叶えるために必死に祈り、願い、捧げ続けて誰よりも速く願いを具現化しました。今の彼は彼女です。『魔法少女ミルたん』、それが彼女の本名となったのです」

「・・・願っただけでTS出来てしまう私ってなんですか？ 何者ですか？ むしろ、『名状しがたきナニカ』じゃないんですか?」

「神です」

「それ絶対に善神じゃないですよね? どちらかと言えばーいえ、完全に旧支配者グレート・オールド・ワンですよね? 世界を救うことなんてないでしょ? 滅ぼすだけでしょ? 人の願いを叶える振りして世界に災厄をまき散らす存在でしょ?」

「縫りつきたい気持ちでゼノヴィアさんの袖をつかみ詰め寄りながら問いつめますが、まるで効果がありません。」

「彼女の精神力こそが神の金属オリハルコン製だと思えます。」

「クソがあ! こうなったら持つてるエクスカリバー全部をつかー!」

「さあ〜て、みんなが待つてるこの時間、必殺技での決着だあ〜♪
行つくよ〜『マジカル☆

ニヤルラトホテプしようか〜ん♪』

だによ♪」

「おい」

ちよつと待〜

「うぎやああああああ?!」

ー見たくないし表現したくもない『ナニカ』に食われていくプリーズ・キルミーさん。あとには血溜まりも血生臭さも残りません。全部食べられています。

・・・やっぱり名前が良くなかったんでしようね。次に生まれ変わったら『イエス・ウィ・キャン』と名付けてもらってください。

「.....本当に、何をどうしたら『あんなモノ』を喚べるんですか?いえ、それよりも『何処』から喚んだんですか? あんなのがこの世界にいたら崩壊するどころじゃないんですけど」

崩壊以前に食われます。地上どころか天界も冥界も例外なくこの世の全てが、で

す。・・・もう原作どころじゃねえ・・・。

間近で目撃している制服姿の彼なんて、恐怖のあまり現実逃避して蝶々の数を数えます。精神が崩壊しても治せる魔法とか有るといいですね。

その様子を見定める視線でゼノヴィアさんが評価を下します。

「未熟で未完成だが、二日でコレなら及第点といったところか」

「及第点・・・？」

・・・アレが？

邪神呼び出しおきながら及第点あげてすませるつて、貴女どんだけですか。ここま
で傲慢で尊大な人、クトウルー作品にも出ませんよ。・・・人間に限っては、ですけど。

「なにはともあれ、ご苦労だったミルたん。さあ、こちらがセレニア様だ。頭が高い、控
え居ろお！」

「ははあー！」

「・・・え？」

なんで私頭下げられてる？ なんで跪かれてる？ 私何かしましたっけ？ むしろ、
何かしてしまいましたっけー？

「初めて御意を得ますセレニア様。わたくしめはセレニア教徒ナンバー1054番ミル
たんともうします。以後、お見知り置き願えれば光栄です」

「あ、はい。よろしくお願ひします．．．?」

返答が疑問系になってしまったのは、彼女の言動が戦闘時と比べて変わりすぎている以上に発言内容に見過ごせない部分があったためです。

今彼女は、『ナンバー1054番』って言ったような気が．．．

「あ、私が頑張つて信者を集めましたあ！ 誉めて貶してえ貶めてえ♪」

「死ね」

「はあふうんっ♪」

くそう、罵声を通じない。これだから変態は．．．。

．．．あれ? 待てよ．．．。

「．．．貴女達と出会つてからまだ三日しかたつてないんですけど、何時の間に布教を?」

「私たちセレニア教徒は、愛女神セレニア様のご加護により時間を自由に操れるのです」

「．．．．．完全に神を超えてるじゃないですか．．．」

勘弁してください。今度こそ、本気で勘弁してください。

これは、無理です。原作がどうのじやないです。完全になにか別のモノです。誰か助

けてえー。

「ーとところでミルたん。愛幻郷の建設は順調か?」

「はっ! 一両日中には新世界『愛幻郷』が完成し、我らセレニア教にとっての拠点及び

聖地として機能します。そして、その中央に聳えるカダス大神殿にはセレニア様の居室と、その美巨乳を忠実に再現した高さ100メートルの巨大神像がー」

「止めてください。ホントそれだけは止めて、お願いだから」

黒歴史が具現化するよりも辛い。辛すぎる。二度と転生しないように地獄の奥底に墮とされたくなつてしまいます。

あと、愛幻郷って完全に幻夢郷じゃないですか、ドリームランドじゃないですか。これ以上世界を増やさないでもえませんか？

舞台が増えると物語が破綻とかいうレベルで収まりません。完全に別世界になってしまいます。もう、これ以上壊れたら戻れなくなる寸前でしょう。．．．寸前のはずです。いえ、そうであつて下さい。手遅れなんて事態には責任持てませんって。

「．．．．．そう言えば、セレニア教徒っていま何人くらー」

「今日の時点で10万人を超えました」

「．．．．．宗教法人が作れそうですね」

「お望みとあらば直ぐにでも」

「謹んで辞退します」

これ以上変なことに巻き込まれたくないです。

．．．完全に手遅れになり始めていることは分かっていますが、それでも受け入れたく

ない現実だつて有るんですよ。

それが、生きている証です。私は生きている限りは諦めません。

「……あれ、そう言えばセレニア教徒つて願つたら叶うんですよね？ しかも、

TSとかみたくないことでも。そして、転生愛天使……」

「……一応聞いておきますね。新しい教徒の中に転生愛天使は——」

「覚醒が遅れています。それでも実戦に耐えうる者は十数名。とくに、松田、元浜、森沢の三名の転生愛天使はミルさんに次ぐ実力者たち。たかが上級悪魔ごとき敵ではありません。もちろん三名とも、TSと性装の装着は済ませております」

「あ、そう……」

見たくないし知りたくないからいいです、その報告。

「——なぜ、私に祈るだけでTSしたり天使化したり時間を操れるようになったりするんですか。私ホントに何者ですか、ただの転生者じゃないんですか、特典与えてもらつてたんですか、訳がわからなすぎます。」

「はあ……、もういいです。今日は帰つて寝ます。疲れたので一刻も早く寝たいです」

寝て起きた時には、世界はもう少しマシな物になつてたり——

「では、私が全裸で添い寝を」

「なら、私はお目覚めになられたときに口づけの準備を」

「まだ子供が寝る時間です。もう少しだけ起きてます」

寝ても起きててもやっぱり逃げられそうにありません。

いったい、この世界はどうなってしまうんでしょうか・・・？

私のせいで原作どころか世界まで崩壊するなんて事だけは無しに願いたいです。

ああ、胃が痛い・・・私が願ってもいつこうに治らない胃の痛みを誰か和らげてくれ
たりしませんかねえ・・・

「お、おい木場！ どうした、なにがあつたんだ!？」

「・・・・・・・・・・うへへ・・・・・・・・壁の中にネズミが・・・・・・・・あはは・・・・・・・・窓に、窓
に・・・・・・・・」

「木場あああああつ!？」

3話「常識（セレニア）VS非常識（神代の墮天使）」

「——つまり、各陣営から聖剣を一本ずつ奪ったグリゴリの幹部墮天使が日本に、それもこの駒王町に潜伏中。その件についてヴァチカンから派遣された聖剣使いたちは、私たちに一切の不介入を依頼するつもりだった……と、そういうことね？」

「……そう……らしいです……」

「この町を縄張りになっているのが、現魔王サーゼクス・ルシファアの妹である私、リアス・グレモリーだと知っておきながら、その要求が通るのが筋だと……そう思っていたと言う事よね？」

「……そう……らしいです……」

「挙げ句は、本来なら到着したその足で此処に挨拶と要求をしにくる予定だったのに、あなたと出会って腑抜けたことが原因ですっかりド忘れしていた……と、そういうことではないのかしら？ 教会側の聖剣使い二人の「飼い主」セレニアさん？」

「……そう……らしいです……最後の以外は」

「……ああ、もう！」

「なんで私が怒られてるんですか!? 私なにもやってないでしょう!? そんな裏事情

知りませんよ！　つてか、聖劍に関することも今朝知ったばかりですし！　むしろ、「そう言えば貴女たちはどうしてヴァチカンから来たんです？　聖劍がどうか言ってますんでしたっけ？」つて私が訊ねなければ永遠に忘れてましたよあの二人！　今日も四人で秋葉見物にいきたいとかほざいてましたしね！

仕事しろ殺潰し共！　しないなら、せめて居候先に迷惑かけんな！　．．．お願いだからこれ以上は堪忍してくださいよ、ホント。

話を聞いた後、大急ぎで駒王学園職員室に電話をして取り次ぎを依頼、顧問の先生の許可を得て校長先生からも部外者が学校内に入るお許しをいただいてから、ようやく駒王町悪魔側の代表者、リアス・グレモリーさんとの面会を果たしたのは御の字ですが：．．．．．なんで私が代表者として一人で来る事になったんの？

「ずいぶん言いぐさね。それは牽制かしら？　もしかして、私たちがその墮天使と関わりを持つかもしれないと思ってるの？　ー手を組んで聖劍をどうにかすると？」
「．．．おそらく教会側上層部はそう判断しているのでは？　あいにくと宗教に疎い日本人である私には聖職者の気持ちは想像することしかできませんが、分かる話ではありますし」

一気に緊張感が増す室内ー駒王学園オカルト研究会部室。

ただ説明してるだけで殺気立たないでくださいよ．．．。言つたでしよう？　私の

想像”だって。主人公の兵藤さん（たぶんですが、グレモリーさんの背後にいる男子生徒）が熱血漢でオツパイソムリエと言う事は原作知識で教えられていましたが、ヒロインのグレモリーさんも実は相当に沸点が低くてプライドが高そうです。

この作品って、もしかしくなくても熱血キヤラ中心の少年少女による成長物語だったりします？ 悪魔と墮天使と天使が三つ巴で殺し合いを、何も知らされていない民間人が居住する日本の住宅地で行っている最中に青春ラブコメ？ ・ ・ ・ あ、ちよつとだけ罪悪感薄れました。これなら余裕が持てます。少しだけやる気が出たので説明再開です。「当然でしょう？ 悪魔と墮天使たちの戦争中、教会側——人間は双方へのエネルギー供給源、ひらたく言えば電池扱いされてたんですよね？ そんな相手のことは、たとえば神様から信用しろと言われても出来ませんって。

人間は感情の生き物で、だからこそ貴女たちのエネルギー源になり得ている．．．違えますか？」

「——それは！」

「ああ、別に貴女たちグレモリー一派の行っている活動内容に関して非難するつもりはありません。と言うよりも、現在の悪魔側についてなんかどうでもいいんです。重要なのは、悪魔と墮天使が人間を下等生物と見なして見下し、電池扱いして使い捨てることを良しとしてきた過去。ひいては、その過去の栄光に未だ縋りつきたがっている害虫共

です。

どこにでも復古主義は居ますし、それを口実にして自らの無能を正当化する輩は後を絶たない。そして、それらを掣肘する力は現在の所、貴女の兄上、現魔王陛下を始めとする二大勢力の首脳陣には無いのではありませんか？」

「……………どうしてそう思うの？」

「あるのなら今回の事件は起きてないでしょう？　ドーせ、墮天使幹部さんの目的は戦争の継続でしょうしね」

「「!?」」

なんか、また緊張感高まってませんか？　素人なんでよく分かんないですけど…………。

なにか可笑しい事言いましたかね私…………？正直、記憶にないです…………。

「戦争継続って……………どういう事よ!?　説明しなさい!」

「どうも……………普通はそうなるでしょう?」

三つ巴の戦いが千年以上続けば厭戦気分にもなりますし、とうぜん戦争継続は難しくなります。そうなれば首脳陣に対しての下からの信頼は下がる一方です。支配者とは民の意向を無視できない存在ですからね、停戦なり終戦なりの方向に話を持って行くのは自然な流れ。そろそろ終戦条約協定を決める為の会議を始めても早すぎませんかし、ぶっちゃけ遅すぎるくらいだと私は思います。

人間の戦争なら「勝っても意味がない」と判断した時点でやめます。得られる物が無いのなら、戦争に価値などない。欲しい物を手に入れるために行うのが戦争です。誇りや名誉で殺し合うのは何百年も前に廃れた騎士や武士だけで十分。時代に合わないから滅びた人たちと同じ事をしている貴女たちは、何を以って人間よりも上位種と名乗っているのか一度お聞きしたいものです」

まあ、当然ですよ。太平洋戦争だって馬鹿げた戦争でしたし、だからこそ馬鹿にされている。戦死者遺族の方々を憐れ、誰も口にはしませんが。

「そして、戦争継続派は決まって幹部級を中心にした少数派しか居ません。自分一人だけで戦っても勝てず、下からの支持も得ていない。そんな戦うことしか知らない猪武者がとる行動は常に一つ。トーテロによる混乱の誘発、これだけです。

混乱を蒔けば民の敵国への不満と怒りが抑えられなくなり紛争が起き、紛争がやがて戦争になる・・・政治を知らない職業軍人が考えることはいつも同じですね。民からの理解も得ずに戦争なんて始められないのに」

国の経済が成り立たないと戦争どころじゃないんですけどね。

民の生活を破壊しておいて「我は国のため、民のために敵を殺し尽くすのだ！」なんて言つてたらそりゃ反乱起きるわ。んで、「反逆者どもが！ 非国民が！」つて国民殺しまくつたら裏切り者予備軍と士気の下がりまくつた弱兵しか周囲に残らんわ。

裏切り者予備軍と弱兵率いて「さあ、戦争を始めようか」・・・出来るか！

戦争やりたいのなら、まず支持集めるや！ 理解させて味方集めて敵を減らせや！ それが戦争だろうが！ 勝った方が正義で、強い奴が正しい？ いつの時代の少年漫画だ！ 時代遅れの放火大好き包帯男か！

・・・いや、面白かったけどね？ 斉藤さんカッコ良かったですし。

「ようするに、敵の狙いは貴女ですよりアス・グレモリーさん。聖剣もこの町も、貴女一人をおびき出すための餌として使うつもりなんです。・・・あくまで素人考えですけども」

「ーっな!?」

「現魔王陛下の妹君である貴女を殺せば必ず主戦論が台頭する。もしも彼らと墮天使側の主戦論者の繋ぎをつけた上で事に及んでいる場合は、もう何をしたところで無駄です。失敗することも折り込み済みで計画するのが謀略と言うものですから。そうでないことを祈るしかないですね」

「な・・・なんて事を・・・ 悪魔共め！」

いや、悪魔は貴女たちですから。つか、悪魔にとって「悪魔め！」って罵倒になるんですね。初めて知りました。

「イツセー、朱乃、子猫、祐斗。すぐに討伐準備を始めてちょうだい。私の領地で墮天使

に好きかってされた挙げ句、目的が私個人だったなんて・・・そんなの誇りあるグレモリー家の一員として許せないわ！」

「ですが部長。相手は墮天使の幹部。それも、旧約聖書に名前が残るほどの大物です。私たちだけでは些か荷が重すぎます。すぐさまサーゼクス様に打診して加勢を求め、シトリー派にも協力を仰いだ方がよろしいでしょう」

「朱乃！」

「リアス、あなたがサーゼクス様にご迷惑をおかけしたくないのはわかるわ。あなたの領土、あなたの根城で起ころうとしている事でもあるものね。しかも御家騒動のあとだもの。けれど、幹部が来た以上、話は別よ。あなた個人で解決できるレベルを超えていくわ。ーまして悪魔全体の問題にまで発展してしまっている。ここは魔王の力を借りましょう」

朱乃という名前らしい黒髪巨乳美人の女子生徒、特徴から考えて原作ヒロインの一人である姫島朱乃さん。バストサイズは102センチそこまで思い出さなくていいんですよ私の記憶力！

と、とりあえず彼女はグレモリーさんのことを最初に「部長」という敬称で呼び、次に「リアス」と呼び捨てにしました。これは二人の仲がそれなりに深いことを意味します。

どう見ても欧州系にしか見えないグレモリーさんと純和風美人のお嬢様姫島さん。正直、この二人を結びつける物が見えません。日本の名家と欧州貴族ではあらゆる面が違いすぎて色々と衝突しそうですが・・・姫島さんの生まれに何か関係でもあるんですかね？

魔王の妹であるグレモリーさんの方に問題があるとは思えませんし、白人種が黄色人種の家臣と親しすぎることは他の重臣たちを不快にさせます。そこまで考えると子供時代に親しくなるとは考え辛い。

悪魔と繋がるとしたら欲望が元になり、最も強い欲望は憎悪。誰かを憎み、殺したい。もしくは憎い血の呪いから解き放たれたい・・・こんな所でしようか？ まあ、他人事なのでどうでもいいんですけど。

とりあえず、目前の問題から解決しますか。

正直なところ、私にとって今回の件は始めから最後まで完全に他人事。

天使墮天使悪魔、どれとも一切関係しない電池種族人間のさらに下等な屑でしかない私には、もうほんつとーにどうでもいい。

早く帰って授業の予習復習がしたいです。頭の出来が悪いんですから、それぐらいしなないと置いていかれます。

学生の本分は勉強ですが、それ以上に人間である以上戦いに勝つても得る物がなく、

評価もされず、成績は下がるんです。補習はいやです。

なので、簡単に終わって楽な手を提案しましょう。

「あの、そんなにお兄さんに迷惑をかけたくないなら有りますよ、かけない手。いえ、どちらかと言えばお兄さんのお手伝いが出来る手ですかね？ しかも楽で被害も出ず、墮天使に貸しが作れます」

「・・・バカバカしい。そんな良い手があるなら始めからやっているわ。私を甘く見てるの？ 異住・セレニア・ショート。だとしたら許さな〜」

「普通に墮天使側に抗議すればいいんですよ。「お宅の三下が家のシマで好き勝手やっているが、どう落とし前つけてくれるんじゃないか」って。それで済みます」

『・・・はい？』

部屋中全員の頭に疑問符が付きました。

「そんなに意外な案ですかね？ 少なくとも帝王学を教わってると思われるグレモリーさんなら考えつくかなと思っただけですが・・・」

「言っただけでしょう？ それぞれの勢力は条約締結の交渉中だって。」

ここで部下の、それも幹部が暴走して、それを他の勢力が解決してしまつたら多少無茶な要求だつて飲まざるを得ません。そんな最悪な状況を招かないためには自分たちの手で始末をつけてしまおうしかない。本来なら現地の被害は気にならない状況ですが、

現地が交渉相手のお膝元ですからね、被害なんか出したら元の木阿弥。必ず最大戦力を投入して一気呵成に仕上げますし、そうせざるをえない。

そして、事前に報告してあげた悪魔側に墮天使側の代表は感謝を示さざるを得ず、条約締結の場では有利に立てます。あとは魔王陛下の交渉力次第ですけどね。期待して待て、です。

あ、ちなみに条約交渉自体が存在していない場合は今回の事件自体が起きてませんか？ 考慮する必要はありませんよ？ わざわざ魔王のお膝元で起こすには大きすぎる事件です。長期間戦争中の国家は大義名分がないと小競り合いしか出来ません。その大義名分を得たいから事件を起こすんです」

言い終えると、なぜか皆さんドン引きしています。

傷つくんで止めてもらえませんが、その邪神を見た時みたいな目。家の居候と違って私は邪神なんか喚べませんって。

「で、でも墮天使に渡りを付けている時間的余裕があるか分からないでしょう？ 敵が聖剣を奪ってからそれなりの時間が経っているわ。今から交渉を始めては間に合わないけど、だからっていきなり墮天使の上層部と連絡なんて取れないわ。私たちには墮天使の仲間なんてーいらないもの」

グレモリーさんが言葉の途中「墮天使の仲間」の部分で姫島さんを見やって口籠も

り、躊躇いを振り切るように言い切りました。・・・つまりはそう言うことなんでしょ
うね。面倒くさい関係です、原作ヒロインズ。

「その点は私に伝手がありますのでご安心を。ただ出来ればグレモリーさんのお名前を
使用させていただきます。人間の私の言葉では説得力皆無なので」

「え？ 別に良いけど、人間のあなたが墮天使の誰と関わりをー」

グレモリーさんからお許しを頂けたので早速連絡を。

携帯番号は、と。ありましたね。

通信機能は便利ですが赤外線がないと使えないのは困りものですね。

私、スマホなので相手のアドレス打ち込んでもらったんですけど・・・なんですか、こ
の『女神様のお嫁さん♪』って。スッゲー削除したい。

とりあえず、メール送信。

「は〜い！ お呼びになられましたあ？ マイ・スウィートエンジェルプリンセスク
イーン・セレニア様〜♪」

「これ、レイナーレええ!? (様!?) (夕麻ちゃん!?)」

・・・はあ、めんどい・・・。

「……まあ、そのなんだ。お前さん等には礼を言うべき何だろうな。……正直
訳分からのんだけど」

「……そうね。最後のそれには私たちも激しく同意するわ、墮天使総督アザゼル。……
本心から、ね」

複雑そうな顔で、自分たちがアルビオンだとか白竜公だとか呼んでた白い鎧の……
はつきり言っちゃうとコードキアスに出てたランスロット・アルビオンそっくりなよく
分かんない方に連れられていった、十枚の黒い翼を持つスタボロの男性を見送るお二
人。

たぶん、あの人が墮天使幹部の……コカインさん？とか何とか言う方なんでしょう。
聖書に載ってるから強いそうですが、よく分かりませんでしたね。

だって、見てませんもん戦うとこ。

天野さんに「貴女が知ってる墮天使の偉い人に連絡を」と言ったら、いきなり消え
て、またすぐに現れたときには片手に着流し姿の男性を襟首掴んで持っていました。

訳が分からない、そう言いたそうな表情でしたので、また私が折衝役。自分たちもな
んかやれや原作キヤラ。

自己紹介の過程で天野さんのことも無理矢理納得させました。面倒事は厄介事に混
ぜて言質を取ってしまうのが一番楽ですね。折角なので彼女の入学許可も貰っちゃい

ました。

墮天使総督とか言う、たぶん偉い人の前で許可出しちゃいましたからもう取り消せません。

やったねセレちゃん、大勝利ー！

『……せつかく出会ったのにこの状況ではな』

『……いいさ、いずれ戦う運命だ。こういうことは……あつてほしくなかつたなあ。とりあえず、また会おうドライブ。……死ぬなよ』

『ああ。じゃあな、アルビオン。……本当に気をつけてな』

なにやら物凄く重苦しいテンションでナイトメアもどきと兵藤さんの赤い籠手（なんか勝手に現れました。誰も呼んでないのに）が話してましたけど、お二方とも何故か私を意識していたような……しかも、妙にビビってませんでしたか？　ー本気で、何故に？

「コカビエルの企みには気付いてたんだが、俺が直接手を下すのは色々マズいと思つてな。今まで静観してたんだが、そうもいかなくなつちまつた。ーまさか、こつちが名乗る前に魔王の妹の前で正体バラされて、しかも町に潜伏してることも知られちまつたらなあ……流石に動かざるをえんわ」

「色々和不味いと言うのは、三勢力の代表たちが行っている終戦条約締結交渉のこと？」

「・・・え、なに、そこまで知られてんの？ 三勢力のトップとその側近だけが知ってる最重要機密事項なんだが・・・。」

「ーどこから漏れた？」

「そこにいる人間の女子高生から聞いたのよ。ちなみに彼女が気付いた理由は「単なる常識です」だそうよ」

「・・・嘘だ、絶対に嘘だ」

頭を抱えてうずくまる、この場で一番偉い人。・・・見た目は軽いのに意外と苦労人だったたり？

まあ、よく考えれば当然か。状況も理解せずに起こせるはずもない戦争始めたくて交渉相手の妹殺そうとした人が幹部を務める軍のトップですし。

後で胃薬をプレゼントしましょう。ストックが山のようにあるので。

「悪いんだが近くこの町で三竦みのトップ会談を執り行いたい。・・・許可してもらえますか？」

「良いでしょう、許可します。今度の件での貸しはその時に返してもらえれば不問にしましょう。墮天使総督アゼザル元帥」

「感謝する、魔王サーゼクス・ルシファアの妹リアス・グレモリー殿。この御恩には必ず報いる」

「期待しているわ」

ものすつごい上から目線のグレモリーさんと、軽薄そうだけど立場上下手にでざるを得ないアザゼルさん。

まあ、今回はなあ。仕方ないかもしれせん。

せめてグレモリーさんたちのピンチを助ける形で介入できてれば多少は面目も保てたんですけどね。形の上では完全に対応が遅れまくって悪魔に借りを作ってしまった代表です。下の者には言わないでくださいと、頭を下げるしかないですよ。

その後、兵藤さんとアザゼルさん。シスターでヒロインの一人でもあるアーシアさんと天野さん。聖剣使い同士らしい金髪イケメンの木場さんとゼノヴィアさん&紫藤さん。過去に何かあったらしいアーシアさんとゼノイリ二人。最後に幼馴染だとかで兵藤さんと紫藤さん。

どうやら知り合いだったらしい、これら全部の人間関係の処置を私がこなす事になりましたよ、何故か分かりませんがね。な・ぜ・か・分かりませんがねえ!!

超大事な事なので二度じゃなくて三度言いました！

疲れた！ 眠い！ 死ぬ！ 早くお家帰るーっ!!!

「ところで、お前にもトップ会議に参加してもらいたいんだが。人間側の代表として

な。
．．．．．おい？ 大丈夫か？ なんで目を回して．．．き、救急車ーっ！！
．．．．．ばたんきゅー．．．．．
つづく

4話 「女神さまのお父さん(?)」

私たちの住むこの世界には、知られていないだけで結構な悪魔の皆さんが生活してらっしゃるんだそうです。

ただし、彼ら彼女らの多くは生まれたときから悪魔だったのではなく、元は人間だった人が素質を見いだされて悪魔に転生したものと、その御家族が占めているのだそうです。

なんでも、悪魔は昔の戦争で数が激減したのに出産率が低く、敵種族との戦争は継続せねばならなかったので数集めが必要だったとか。

「ーかと言って、質で劣る雑魚がいくらいても格付けの役に立たない。強力な下僕という手下を持つことこそ名門悪魔にとって力の象徴。その為に実力主義、成果主義、結果良ければ全て良しを大義名分として素質ある人間を悪魔に転生するよう勧誘してきた、と。」

つまり、そういう事でよろしいんですか？ グレモリーさん」

「『……………』」

なぜか沈黙されてしまいました。・・・おかしいですね、なにか変なこと言いました

か私? 正直、思い当たる節がないんですけど……。

「えつと……なにか間違つてましたか?」

「い、いえ、その……間違つてはいない、とは思うんだけど……もうちよつとオブラートに包んでもらえないかしら異住・セレニア・シヨート。

私たち悪魔は身体が強靱だけで、心が鋼鉄で出来ているわけではないんだから……」

「……? かなりマイルドな表現にしたつもりだったんですけど……ダメでしたか?」
『ええ!!? あれがマイルド!!』

「……なぜか悪魔たちから人でなしを見る目で責められてる一般人の私です。解せぬ。」

「それはさて置くとして、どう考えても悪魔さんたちの自業自得なのでは?」

自国民だけで戦えなくなるまで数を減らしておいて、なんで戦争をやめなかつたんです? 中世期の騎士や武士の戦いだって勝敗が決したらさっさと和睦の道を探しますよ? 一億総玉碎にロマンでも感じていたんですか?」

「別にそういう訳ではないのだけれど……私たちには悪魔の誇りと矜持というものが——」

「誇りや矜持で国民が養えれば良かったですねえ。それなら貴女の一族は歴史に残る名君しか輩出しえない伝説的な存在になれていた事でしょう。」

そう「なれない」のが残念ですね」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

再び場が沈黙に満たされます。

今この場にいるのは、私を含む前回のコ・コカインさん事件の際に出会った駒王学園オカルト研究会のメンバーと（不本意ながら）正式にセレニア教徒の聖印を授与されたゼノヴィアさん紫藤さん、あと女子高生状態の天野さんです。

「少し多すぎませんか？ 部屋が流石に狭く感じるんですけど・・・」

「申し訳ありません。魔王様の妹君から受けた直接のご招待、真に身に余る光栄とは存じますが、この話はなかったことに・・・」

私は謝辞を述べた上で「勧誘交渉」の席を立ちます。背中からは何か言いたそうにしている方が何人かいらつしやるのを感じましたが、声に出して引き留められたわけではないので無視します。

私は人間であり、言葉を介さずにテレパシーだの念話だので交信できる手段を持ち合わせておりません。伝えたいことがあるならハッキリ言葉にしていただかないと私には伝わりませんし、理解できるはずもない。

「なぜ分からない」この台詞を使う主人公ほど言葉で相手に思いを伝える努力を放棄しがちです。ああいう手合いが嫌いな私に対して同じ対応を求めるのは向こうの勝手で

すが、こちらが応じる義理など世界中どこを探したってありやしません。

だからこそ、私には関係ない。

今日この場に私たち四人が招かれたのは、前回の功績を称え、現魔王サーゼクス・ルシファー陛下の御妹君であらせられるグレモリーさん自らが、直接私たちを彼女の眷属の一員として転生悪魔に迎え入れたいと打診されたからです。

ハッキリ言ってお笑い草でした。

彼女、リアス・グレモリーさんは現魔王陛下の妹君であり、まさに深窓の御令嬢という形容詞がふさわしい気品と高貴さを併せ持った王族らしい王族の女性です。

だからなのでしょうね。

彼女は人間が悪魔に転生出来ることを、この上なく名誉なことだと頭から決めつけている。民主主義の理念をまるで理解できていないし理解する気もない。ただ、自分たちより劣る人間が作り出した人間用の文化、その程度の認識しか持ち合わせていない。

人間が転生した悪魔は同胞。

人間のままでいる限りは下等な人間。

私には、それが許せないー。

「待つてくれ！ 悪魔は別に人間に対して危害を加えてない！ むしろ、街の人たちのために働いてるんだ！

俺なんかはまだ未熟だけど、他の皆はそれぞれ色んな人たちの役に立つて感謝もされてー」

原作主人公、兵藤一誠さんが私を呼び止めます。

ーが、その言葉は逆効果でしかありませんでした。火に油をそそいだけでした。私にブチ切れる正当性を与えたことだけが彼のはなった言葉の戦果だったのです。

「兵藤さん。それほど言うのであれば、あなたはよほど多くの転生悪魔の皆さんとお会いになったことがあるのでしょうかね」

「・・・え？」

「どうしました？ 私はなにか変なことを言いましたか？ 別に自分の見ている世界だけが世界の全てと言うわけではありませんよ？」

あなたの知らないところで転生悪魔さんが虐げられているかもしれない。殺されているかもしれない。殺しをやらされているかもしれない。モルモットにされているかもしれない。生け贄として解体されている可能性も無くはない」

「悪魔はそんな事しねえ！ 悪魔は良い奴らなんだ！ 悪い奴らから街を守ってるんだ！ 何も知らない奴が知った風なこと言うんじゃないよ！」

「なぜ、そう言いきれるんです? その根拠は? あなたは悪魔になって日が浅いと聞きました、どれだけ悪魔について学んだのですか? あなたが知っていることは全ての悪魔に適用可能な真理ですか?」

「そ、それは・・・」

口ごもる兵藤さんを見て、少しだけ彼の内側が見えた気がします。

彼はつい最近、悪魔の醜悪な部分を見せられたのでしよう。嫌悪感に襲われて怖くなるほどの恐怖と不快感を味あわされたのだと思います。

そして恐らくー彼はその時、グレモリーさんに救われたのではないでしょうか?

子供にとつて救われるという行為が持つ意味は極めて大きい。時には、それが自分の人生を決定づけてしまう事すらある。

ようするに Fate の衛宮士郎さんです。彼のアレは完全なサバイバーズギルトでしたが、私は兵藤さんに彼と似たモノを感じています。

衛宮さんとは違つて性的なことに対する興味は年齢相応、もしくは年齢上限を越えるほどにある。

にも関わらず心の一部が子供のままだ。ここまで純粹さを維持しつつ高校生になれる人も最近では珍しい。経験か環境か生まれ持った特性か、どれでもいいし何でもいのですが、結論として彼の心は外見よりも遙かに幼いのではないかと、私は推測せざる

をえませんでした。

「人を信じるのは良い。大切なことですし必要なことです。私はあなたのそう言う所は尊敬します。」

ただ、自分に都合の悪い面から目を背け、都合の良い部分だけが真実だと、こちらが絶対善であちらは絶対悪で、正義の方が正しく皆もそれを望んでいる。そう決めつけて自分の勝手な願望を相手に押しつけるのはお辞めなさい。あなたとは違う正義も理解する努力をしなさい。

否定された方はあなたを憎むでしょうし、その憎しみの矛先はあなたに向くとは限らない。あなたが強くなればなおさら相手はあなた以外の、あなたにとって大事な人たちを狙うことでしょう。

それらの脅威から皆を護るのに、あなたの手は何処まで伸ばせますか？ どれだけの人数をどれほどの脅威から護りきれると考えておいでなのですか？

「.....」

「悪魔だろうと人間だろうと、しよせん身体は一つで脳も一つだけです。二つの場所に同時存在できたとしても、二つの事象を観測するのに脳の要領では足りなすぎる。」

それを実現するためにはペンタゴンのスパコン級の頭脳が必要になると思いますけど、兵藤さん、学校での成績は？」

「べ、べつに俺の成績と力は関係ないだろ！ 話逸らそうとするんじゃないよー！」

「成績というか、勉強する意欲の問題です。やる気がなければ頭脳労働は出来ませんし、普段からやってこなかったことが土壇場で出来るわけもない。仮に出来たとしても、その場限りでは火事場の馬鹿力ですし、使いこなせるようになったとて「どのように使えばどういった脅威から護れるか」を考えず、力を力としてのみ使い続けていけば、あなたに待っているのは唯一つ。暴君としての人生ですよ」

完全な極論ですが、彼のようなタイプは細かいことを言っても理解しないし、したがらない。感性だけで生きる感受性が極めて強いタイプです。こういう人は分かりやすさを、ようするに単純明快さを好む。

シンブルな方が正しく理屈っぽい方が悪い。眼鏡のイケメンエリートを見ると無条件で「なんか嫌な奴」と悪印象を抱くような、そんな人種の気配がプンプンするんですよ、この人からは。

「自分の正義を貫くことだけが正義となる。自分以外の正義を認められなくなる。絶対的正義とは、この世でもっとも正しい人を指す言葉。ではなく、悪の基準を作り周りに受け入れさせる者。善と悪を司る天秤を自らが手にした者。」

人はそれを悪と呼んで侮蔑し、悪を制度化して正義とする者を暴君として恐れ敬いませす」

室内に沈黙が満ちますが、それは今までとは比較にならない濃度のモノでした。重苦しくて息苦しい。

窒息しそうな雰囲気に含まれながら、私は少し言い過ぎたかもしれないと反省します。

正直に白状するとーカッとなつてやらかしちやいました！ ごめんなさい！ 出来心だつたんです！ 許してください！！

こういうのは冷静になつてから改めて振り返るとー恥ずかしさで死にたくなりますね！ 床をごろごろ転がりたいですね！ 頭を壁に叩きつけてドンドンしたくなりますね！

恥ずかしい！ 恥ずかしい！ 恥ずかしくて死んじやいそう！

むしろ、誰か私を殺してくださいーっ！！！！

もうイヤ！ なに、あの嫌味つたらしい偉そうな台詞の羅列！ どこの愉悦神父だよ！ 私の願いは今さつき自分で記した黒歴史を消すことだよ！ ようやく願いが叶わないよ！ つか、聖杯使つても絶対無理だよ！

うーーー(T|T)、にやーー(∨<)、うにやーー(TOT)!!!!!!
もう、わけわからーっ(@|@)!!!!!!

『おいおい銀髪の嬢ちゃん、今の相棒に余計なこと吹き込んでくれんなよ。ただでさえ

単純バカで落ち込みやすいんだ、今の言葉で三日は眠りにつくために自家発電して疲れないといけなくなつたぜ?」

「おおおうい!! ちよつと待つてドライグさん! それはこの場で絶対に言っちゃいけないカミングアウトだと思っただけどおおつ!」

『いいじゃねえか、相棒。事実なんだからな。それに、今更だろ?』

昨日も会つたばつかの銀髪嬢ちゃんをオカズに「はあはあ、ロリケツトオツパイのセレたん可愛い: : ペロペロしたいし、クンカクンカすーはーすーはーもしてみたい。他にはあの子の幼い大事な部分をー」

「言つてねえ!そこまでは言つてねえよドライグ! ウソばつかつくんじゃねえつ!!」

ーたくつ、何も分かつてない奴だなお前は。いいか、よく聞けよ? 俺が言った内容は「週間銀髪ロリ巨乳」を元に妄想した完璧でパーフェクトでマーベラスなエロエロもうそ: : : う: : : 」

「あら、まだ台詞が終わつてないわよ? 早く最後まで言つてお仕置きされましょうね

♪

「す、すみませんでしーうおわあああつ!!!
た、助けてドライぶふうつ!」

部室内で集団リンチが発生してしまいました。母さん、事件です。: : : つて、遊ん

でる場合ではないですよね。

とりあえず、私のとるべき対応としては――

「……ありがとうございました、ドライグさん。恩に着ますし、恩返しはいつか必ず」
『ん？ いや、気にすんな。正直に言えば、あのまま嬢ちゃんの話聞かせ続けるわけにやいかなない事情があるんでな。』

俺の方の事情も混じってるからには、別に嬢ちゃんを救うためだけに相棒へ泥をかぶせたも言えねえし、恩に着るこたねえよ』

小さな声でそつと語りかけてみたところ、やはり声そのものが届いていなくてもドライグさんとは会話出来るようです。

まあ、聴覚器官ありませんし発声器官も存在しない、正体不明な生き物（であるのかどうかすら不明）ですからね。物理法則を無視されても気にする方がバカらしい。

「それでも助けていただいたのは事実です。なにかご要望がありましたら出来る限り添う形で動きますよ？」

『人間の嬢ちゃんに助けを求めることなんざ……いや、待てよ。そこの三人の嬢ちゃんたちは、銀髪の嬢ちゃんの仲間だったよな？ だとしたら結構な戦力になる。』

リアスたち悪魔は数を軽視しているが、時に子悪党の猿知恵が原因で英雄が命を落としたりもするもんなんだ。使える奴らは確保しときたい』

うん、やっぱり私は戦力外通告ですよ。だと思つてましたから気にしませんけどね。

でも、天野さんたちを招くのはどうかと思うなあ……。

戦力としては十分すぎる……て言うかマジでチート級なんですけど性格がなあ。滅的で吐き気を催す這い寄る混沌を彷彿させますからね、この人たち。

味方にいるときこそ尤も警戒しなくちゃいけない味方つて、味方と定義できるんでしょうか？ どんなに取っ繕つても普通に利敵行為だと思ふんですけど……。

「私はセレニア様の忠実なる信徒。セレニア様が羞恥で頬を染めながらも冷静さを保とうと必死に取り繕つているときのお顔を拝見させていただいた恩を返せと言うのなら悦んで」

「私もだ。あの顔を思い出すだけでご飯三杯と食パン一斤、ついでにジャンボカレーライス山盛りを五人前くらい、余裕でイケる」

「甘いわねゼノヴィア！ 私なんか、もう濡れてるわ！ ビシヨビシヨよ！

戦闘衣は下着をつけないで着るものだから、ちよつと気持ち悪くなつてくるくらいなんだから！」

ぎやあああああつ！！！！

変態と変人と恥女がいるううううつ！！！！

性犯罪者のオンパレードだあああああつ!!
助けてドラえもーっん!!!

「大丈夫ですよセレニアさん!
いつもニコニコ愛する娘の隣に、
這い寄る混沌ニヤルラトホテプ!
お呼びとあらば、即参上!!」

「」.....

えっ?
っづく
.....

5話 「世界全ての敵（主人公のお父さん）」

目が覚めると、そこは自室のベッドの上でした。

「……あれ？ 私は確かオカ研の部屋でニヤル子さんと……」

「あつ、目が覚めたみたいですねえセレニアさん♪」

「ご気分はどうですか？ 爽快ですか？ 軽快ですか？ 朝令暮改ですか？」

「それ……もう♪久しぶりにパパと会えて嬉しさに身を震わせていたりしますか？」

「しますよね？ いや〜ん♪ パパ困っちゃいますう〜♪」

「うふ。母娘そろって、お・ま・せ・さ・さ・ん♪」

むしろ不快感に身を震わせていますが、それがなにか？

まあ、そんな事よりも重要なことがあるのでそつちが優先。

つか、それ以外は今どうでもいい。

「……なんで、いきなりオカ研から自室？ チャプターがいきなり飛びましたけど……」

「なにかしました？……えつと、お父さ……ん……？」

「はい、貴女のパパですよセレニアさん♪ 英語で言うゴッドファーザー」

「たぶん、邪神であり父でもあると言いたかったんでしようが、それだと名付け親という

意味なので格が下がっちゃいませんか？

いえ、名前を授けた親の方が実の親より大事っていう設定のファンタジーはよくありますけども」

うん、原作通りの怪しい英語。この人は間違いない、あのニヤル子さんです。

そうなると、この怪現象にも一応の説明はつきますね。なにせ頭に「宇宙」の一字さえ付ければどんな理不尽だろうと可能にする方々です。魔法とか悪魔とか天使とか墮天使なんかメジヤありません。どちらかと言えば彼らの方がまだ話が通じるでしょう。

なにしろ、めちゃんこアホらしい動機だけを理由に、宇宙規模のスケールで事件を起こす人たちがばかりですからねえ。先日のコカ・コカインさん？の方が遙かに誠実な信念のもと事件を起こしていたでしょう、たぶん。くわしい事情知らないので断定できませんけども。

「答える気も話を聞く気もなさそうですし、首を縦か横に振ることで答えと解釈させて頂きます。そのつもりで反応してください。」

「ー私に「黄金の蜂蜜酒」とか、そういうクトウルー的な何かを飲ませて眠らせたりしませんでしたか？」

「.....」

首を縦にも横にも振らず、上を向いて口笛を吹き始める私の父（自称）
つくづく原作通りの方でした。

こんなのが今生における私の父——泣きたい。つか、マジで自殺したい。
最低な父親すぎて涙よりも血涙が流れ出しそうです。

「……分かりました。もう聞きません。

仕方がないので、母さんに相談してみま——」

「ちよちよちよ——と待ってプリーズ！」

落ち着こう、まずは落ち着きましょう。話せば分かりますから話し合いましょう。人類は対話によって人とは違う存在とも解り会えるのだとガンダムを名乗る少年も言っていたじゃないですか！」

「それ言ったときにはもう言っただけだったよな……まあ、うろ覚えですけど」

本当に話していると疲れる人です。真尋さんの気持ちがよく分かりました。

いや、この世界では母さんがあの役をやったのか……今の性格になったのも納得ですね。

しかし、今はそれどころではない。

なぜなら、仮に私が飲まれた薬が「ファイト一発、黄金の蜂蜜酒D。黄色の印のハストウル製薬」だった場合、ちよつとしたデメリットが付与されているからです。

それは、一時的な昏倒。

原作の真尋さんが飲んだ際には9、8秒しか眠らなかつたようですが、それを数えていたのも教えてくれたのも無理矢理飲ませてきた張本人ニヤル子さん。信用も信頼もできる訳がねえのです。

ベッド脇の目覚まし時計（日付表示機能付き）に目をやると、やはり時は過ぎ、平日から休日になっていました。

ついでに言えばア、アザ、アザ・トース・・・？とかなんとか言う名前の墮天使総督さんから来るように言われた三大勢力の会談の日で、開始予定時刻を大幅に超過してしまいました。

「完全に寝坊してるんですけど・・・」

トップ会談の場で、寝坊したから遅刻しましたって言い訳通じますかね？ 失礼きわまりないですけど、それを言ったら相手はこちらの了承も得ずに会談参加を決定したわけで、お互い様といえなくもない。

痛し痒しですねえ。

「大丈夫です！私にお任せください！」

こんな事もあるうか、友達のハスタ郎くんからハスター星人の人ならば誰もが所持してるポピュラーな乗り物、ビヤーカーを借りてきてます。

宇宙基準の制限速度は時速三〇〇キロで、私の愛車のシャントッカーでも時速一二〇キロ、ビヤーカーにいたっては光速移動が基本ですから浦島効果で時間逆行なんてちよつちよいのちよいです！

このニャルラトホテプ星人のトップエース、ニャル美に不手際など存在しねえのですよー！」

「男性名は『太』から『太郎』になって、女性名は『子』から『美』に変更されたんですか。マイナーチェンジの幅狭いですねえ、本当にマイナーなチェンジしかしてない……ところで浦島効果ってそういうのでしたっけ？」

この調子でいくと、そのうちクー美さんとか出るんでしょうね。

ー出てこないで欲しいなあ……場がよりいつそう混沌化するだけです。あと、私の胃が大惨事になるので絶対にイヤです。もしもの時には即刻お帰り願いますよ。

あと、公務員が道路交通法を違反しまくっていて自白までしてくれましたが、何処の誰に通報すれば取り合って頂けますかね？

「さあて、飛ばしますよおー。落ちると危ないので、しつかり掴まっついてください。

なにしろ、このビヤーカーはプレアデス星団にあるセラエノ図書館まで、ほぼ瞬間移動に近い速度で恒星間移動できますからね」

「原作よりも原典の方を設定に採用したんですか。さすがはニャル美さん、マイナーな

チエンジでも宇宙規模の変化を及ぼす」

ようするに、さらに面倒くさい人になったという事。

前途多難極まりないですね、私も世界も原作も。

俺は、目の前で自分の背中に形の異なる二枚の翼を広げた朱乃さんの姿に、思わず言葉失っていた。

「汚れた翼……。悪魔の翼と墮天使の翼、私はその両方を持っています。

この羽が嫌で、私はリアスと出会い、悪魔となったの。ーでも、生まれたのは墮天使と悪魔の羽、両方を持ったもつとおぞましい生き物。

ふふふ、汚れた血を宿す私にはお似合いかもしれません」

自嘲する朱乃さん。

そんな、朱乃さん。そんな風に言わないでくださいよ……

「それを知ってイツセーくんはどう感じます？ 墮天使は嫌いよね？ あなたとアーシ

アちゃんを一度殺し、この町を破壊しようとした墮天使にいい思いを持つはずがないわよね」

俺は心中をハッキリと言う。言わなきゃいけない。

さつき会った天使のミカエルさんから与えられた『聖剣アスカロン』。これを渡すときミカエルさんは言ってたんだ。

『あのときのように再び手を取り合うことを願って、あなたに——赤龍帝に願をかけたのですよ』

——と。

『歴代のなかでも最も宿主が弱い』と、包み隠すことなく直接俺に告げてきた上で「俺に期待してくれた」んだ。新米悪魔で、まだ三下でしかないこの俺に！

この場で嘘ついちゃまったら男じゃねえ！

「はい。俺はだて——」

「地球の娯楽を汚す、悪い蝙蝠はいねがああああつ!!!」

どつがああああああつんっ

!!!!!!!

「うおわあああああつ!？」

「きやあああああつ!？」

なんか屋根が吹っ飛んでっただけど何があつたの!？」

え、敵襲？ それとも誤爆？ あるいは核実験？

て頭が回らない。

訳が分からずに呆然とする俺と、着物をはだけたまま翼と羽を出しっぱなし状態の朱

乃さん。

部長に見られでもしたらお仕置き確定の惨状で、もうもうと立ち上る煙の中から「ソ

レ」は姿を現した。

「やれやれ、目的地が近すぎたせいでカーナビ見てる間に通り過ぎかけて慌ててブレー

キかけたら屋根に激突しちゃいましたよ。

ーでも、おかしいですね？ ここにこんな神社があるなんて情報、惑星保護機構か

ら派遣されてる地球担当者からは、上がってきてないんですけーおやあ？」

俺を視界に収めた「ソレ」は、にやり、と口の端を歪めて嗤った。

ぞくりー。

俺は本能的な恐怖を覚えた。

俺を構成している全てが警告を発する

“アレ” は不味い。

“アレ” とは戦うな。

“アレ” と出会ったら即逃げろ。

“アレ” はー 『悪夢そのもの』だ。

「誰かと思えば、この前うちの娘にガン飛ばしてた弱っちい蝙蝠じゃありませんか。元気でしたか？その後、体調に変化は？ありませんよね？ある訳がありませんよねえ？」

「だつてーあんなに“手加減して上げた”んですから、そりや怪我なんてしてる訳ないですもんねえ？」

「・・・っ！」

手加減。確かにアイツは今そう言った。

あの時、こいつと同じ銀髪を持ったロリ美少女を勧誘している最中に突然乱入し、「くおら、誰の許可を得て地球の娯楽に手を出してんですかあ！」と意味不明なことを叫びながら俺たちを蹂躪して去っていった女。

俺や木場、子猫ちゃんに朱乃さん、部長までもが全力で当たったのにかすり傷一つ負わせられなかった文字通り化け物。

ーいや、違う。そうじゃない。そんな“生易しい存在”なんかじゃ断じてない。

こいつは敵だ。俺たち悪魔にとつての敵じゃない。

この世界に生きるすべての人たちにとつて絶対的な敵だ。

俺はーブーステッド・ギアの所持者として、赤龍帝を宿す者として、ドライグの相棒として、こいつをー倒す！

『ははは、いいぜ相棒。今までで最高の怒りだ。アーシアの嬢ちゃんを殺された時もここまでじゃなかった。』

なんだ？ 柄にもなく世界を護る勇者にでもなりたくなつたのか？』

「そういうんじゃないやねえさ。ただ、こいつを放つて置いたら世界が滅ぶ。皆が死ぬ。こいつに殺され尽くす。木場も子猫ちゃんも朱乃さんも母さんも父さんも松田も元浜も、そして部長もーみんな死ぬ。殺されちまう。」

皆を護るためにはコイツをここでぶちのめすしか道はねえ。だったら、やるだけだろ？』

『はっ！ 一丁前の男の台詞を吐きやがって。いいだろう、俺も乗った。相棒と一緒に命懸けてやる。』

「はぁーはっはっはっはっは！」

怯えろ！ 竦めえ！ モビルスーツの性能を活かせぬまま死んでいーぐへはあっ！」

「・・・ほえ？」

な、なんだ・・・？ 何が起こったんだ・・・？

なんでアイツ・・・頭に“フォーク刺して”のたうち回ってんの？

「ち、ちよつとセレニアさん！ いきなり頭にフォーク刺して動き止めるって、アンタ何処の誰からこんな非常識な方法をー」

「母さんからですが、それが何か？」

「なんでも御座いません」

即座に土下座かます名状しがたきナニカ。

しかも、土下座してる相手はコイツと同じ銀髪を持った無表情で小さい、でもオツパイは大きいけしからん身体の持ち主ー

「え・・・セレニア・・・？」

俺たち悪魔が手も足も出ない、ドライブでさえ戦ったことがない、そんな化け物が土下座してる相手を俺は知っていた。

異住・セレニア・ショート。

つい最近知り合ったばかりの女の子で、何を考えてるんだか本気で解らない不思議

ちゃんなーただの人間。

「人間に化け物が……土下座……？」

朱乃さんも信じられない物を見たかのように、そう呟いた。

セレニアは「あく……」と誤魔化すように後頭部をかきながら抜けてしまった天井から覗ける空を見上げ、俺たちに向かって小首を傾げる。

「とりあえず、姫島さんの背中にあるモノについてご説明願えませんか？」

なにかしら妥協案を提示できるかもしれない

いつも通り確信も自信もない、ごく普通の常識を口にしてみただけの口調でされた提案に俺たちは、特に深く考えることもなく頷いてしまっただけ後悔したのだが、

「ーそれは、良かった」

ホツとしたように呟く時に見せたセレニアの、はにかむような微笑みに、

「うん、可愛いから許す」

と、全会一致で無罪判決を下したのだった。

何処の世界のどんな奴だろうと可愛いんだったら護つてやるべきだろう！

可愛い正義！これぞ真理！これだけは絶対に譲れねえええっ!!!

つづく

6話「ニヤルラトホテプが泣く頃に」

「なるほど・・・それで姫島さんは墮天使と悪魔双方の翼を・・・」

兵藤さんと同じモノを出していただけ恐縮しつつ、それを飲みながらも私の脳裏をよぎるのは

「ー」場の空気を徹底的に混沌化する父のせいで壊れかけた状況を改善するために大見得切ってしまった私を誰が責められようかー

と言う自己弁護な屁理屈による自己正当化の言葉でした。

いや、本当に重かったんですよあの空気。兵藤さんは殺気剥き出しで睨んでるは姫島さんの格好はあられもないわ、父は父で悪ノリするわで収集つかない事この上ない。

仕方なく適当な理由探してたまたま目に入った姫島さんの左右で異なる形をした羽だか翼だかを口実にして納めはしましたが、それが根本的解決に結びつく可能性など有り得るはずもなし。

おまけに姫島さんから聞かされた事情（彼女の過去話でグレモリーさんとの出会いの話でした）を聞き終えた私が抱いた感想はー

（なんかーものすつごくベタなお約束だなあ・・・）

—その程度でしかなく、素直に心からでた感想がこれの時点で私は自分がひねくれている事を自覚せざるを得ませんでしたよ、割とマジで・・・。

傷ついた墮天使の男性を救った日本の神道に身を置く名門一族の娘。

それも由緒ある神社を任されていた優秀な巫女。その二人の間に生まれた娘が姫島さんで、親族はこぞって彼女を「汚点」と罵り、逃げた先で追いつめられ、止めを刺してきたのは彼女の大叔父にあたる初老の男性。

殺されかかったところに介入して彼女を救ったグレモリーさんと、それを補佐したグレモリーさんの兄である魔王陛下と、陰から力添えした墮天使総督のアザ：アザ：トースさん。

最終的には彼女を解放して部下とともに去っていく大叔父は、彼女が「姫島」の姓を名乗ることを許したって事は——

「明らかに大叔父さん、脅されて追っ手役をやらされてますよ、それ。

ついでに言えば彼が一番姫島さんの身を案じてます。悪魔との交渉が上手く行ったのも、悪魔に交渉を持ちかけたのも多分その人でしょう。

アザ・トースさんという協力者にご登場願ったのもほぼ確実に彼でしょうしねえ。一番の功労者じゃありませんか。良い叔父さんを持ちましたね姫島さん」

私としては常識的なことしか言っていないつもりなのですが、なぜか二人の表情が凍り

付きます。

・・・なぜですかね？ 普通に考えれば解りそうなモノですけども・・・。

「ち、ちよつと待てよセレニア。どういう事だ？ だつてそいつは朱乃さんを殺そうとした連中の大将だつたんだぞ？」

そいつが朱乃さんを殺すよう命令したに決まつてんじやねえか！」

「有り得ませんし、不可能ですよ。

彼は古くから神道に属する一派の大本に属し、一緒にいた方々もその縁者ばかりだったのでしょうか？」

ならば彼らは大叔父さんの監視役もかねた処刑人です。「彼が裏切れば一族郎党皆殺し。助かりたければ必ず任務をやり遂げろ」そう指示されていたはずです。これでは外部に援軍を求めるしか手はありませんし、彼らはいくまで「自分たちの勝手な都合で介入してきた」事にしないといけません。一族と姫島さん、双方を救う手段はそれだけです。

彼に選択肢など、始めから存在しない」

お茶をすすりながら、どう話を転がして誤魔化すかと考えながらも私は適当に思い付いたことを述べてお茶を濁しました。

お茶だけに、なんちて。・・・忘れてください。

「ついでに言えば、姫島さんのお父さん。バラ・・バラモスさん？も似たような理由で動けなかったんでしょうね。

姫島さん母娘を見守るために近所で過ごした結果、かえって二人を危険にさらしてしまい妻には先立たれて幼い娘は一人で逃亡。

心労に押しつぶされそうになりながら、必死に仲間の墮天使が彼女を殺しにくいのを押しとどめていたのでは？」

「はあ!？」

なぜか大声を上げる二人です。本当によく分からない反応だ。

別にいいですけどね、時間さえ稼げれば。

私はやぶ蛇を避け、適当に彼女たちへと話を合わせつつ言い訳を模索し続けます。・・・ああ、こう言うときにチート知識欲しい。転生特典として今からでも付けてくれないかなあ。

「人間たちにとって墮天使との間に生まれた子供が汚点と言われる理由はなにか。

外見が人間と違ってているから？ 大叔父さん自身が子鬼を使役しています。本来は人の敵である鬼であれども戦力として利用する方々が、今更黒い羽を持つてから殺すとか理由にならないでしょう？

ならば理由はシンプルー墮天使は人を殺してる。それも沢山、山のように。彼らが

国と人々を護るために戦ってきた相手には墮天使も含まれていたんでしょ？」

息をのむ心配がしましたが、今の私にはどうでもいいので無視。

お茶を飲んで時間を引き延ばーああ！もうカラじゃないですか！

ええと、お茶の葉お茶の葉・・・。

「だ、だったら墮天使たちにとつて朱乃さんは仲間だろうか？」

部長だつて人間の俺をこうして仲間にしてくれたんだしー」

「悪魔には転生悪魔という制度があるそうですが、転生墮天使つてあるんですかね？」

あるのならば確かに仲間扱いされてもおかしくないですけど、ないんだつたら普通に下等生物との間に生まれた汚点でしょう。

まして、自分たちから見たら汚点でしかない子供を上司が可愛がつている。自宅通勤してまでですよ？ 強さが全てな悪魔と似た思考の墮天使さんたちにとつて愉快な道理がない。無力な子供を殺して自分たちが絶対勝てない上司の顔が歪む姿を見てみたい、そう思った方も多かつたと思いますよ。

墮天使したということは欲望を持ったという事だつたはずですから。欲があるなら見栄もプライドも嫉妬もあるでしょうしね。七つの大罪的な考えだと」

カラになつた湯飲みの底を覗みながら必死にない知恵を振り絞る私。

考えろ、考えるんだセラニア！父がトイレから帰ってくる前に全てを誤魔化せる言い

訳を！

空気読まない這い寄る混沌にアドリブは無理な以上、この場で頼れるのは戦力外通告を受けた私のみ！・・・ダメじゃん。

「それと兵藤さん。あなたもグレモリーさん達には感謝した方がいい。今のあなたが生きていられるのは彼女たちのお陰なのですから」

「あ？ 今更なに言ってるんだ？ 俺は部長にずっと感謝しっぱなしだぜ！

なんだって俺を蘇らせてくれてオツパイも触らせてくれて、その上ご褒美の約束をー」

「それだけではありませんよ、兵藤さん。あなたは現在進行形で魔王グレモリー一族に庇護されることで生き延びられている。

彼女と彼女のお兄さんがいなければ、あなた今頃何度殺されてるか解ったもんじゃありませんよ？」

「・・・へ？」

きよとんとする兵藤さん。

私が言うのもなんですが、どうにも危機意識が足りないのは現代日本人ならではのしょうか？ ちよつと考えれば解りそうなものですがね。

まあ、悪意や嫉妬と言ったものと無縁だからこそ、この純粹さ。

仕方がないことですか。

「あなたは破格の待遇を魔王陛下下の妹君から受けている。

本来ならば悪魔にとって電池でしかない人間が、魔王陛下下の妹の側に侍り、彼女の所有物たる複数の女性悪魔、姫島さんや塔城さんと気安く接し、格上であり先輩でもある彼女たちのことをまるで対等の友人のように扱い礼儀を示そうとしない。

数千年間続く伝統ある王国の重鎮達にとってあなたは自分たちの誇りを汚す害虫だ。あらゆる手を使い苦しめた上で殺してもまだ足りない。それほど憎らしい存在のはず。にも関わらず、今日もあなたは彼女と行動をともに出ること前提でここまで来た。それもまた彼ら嫉妬深い名門から見れば妬ましい限りだ」

「……………」
そこまで言うてから、ようやく私は青ざめて硬直している兵藤さんの姿に気が付きました。そして思います。

あ、やばい。ボンヤリしてるうちに言い過ぎたっばいーと。

ーど、どど、どうしましょう!?! また私やりすぎちゃいました!最近こういうのばっかりです!

なにかフオローしないといけませんよね、やっぱり!

でも、フォローしようにも私、彼については「オツパイソムリエな主人公」以外の情報与えられていないんですけど！ なにこの原作情報、クソじゃん！

くう・・・またしても頼れるのは頼りにならない自分自身の頭脳だけって、なにこのムリゲー。攻略記事見てやり直したい。

もしくは、強くてニューゲーム。

「ーですから兵藤さん、あなたは今まで通りに無謀で無知で無節操で無自覚で無防備で無深慮で自分勝手な庶民でいてください。」

それがグレモリーさんにとって最大の武器となるはずです」

「・・・ほえ？」

今度は姫島さんも間抜けな声を出して間抜け面をさらしました。

よっしゃ、成功。意表を突いたことを言って防壁を崩し体勢を崩した上でなら私如きにも勝機はある！

今こそ、一気呵成に畳みかける時！

「これから行われる三大勢力会議の場において、第四勢力が必ず介入してきます。それは魔王陛下の予定に入っている事ですから当然のことです。」

彼は三大勢力共同の元、古い因習にとらわれた旧時代を滅ぼそうとしている。敵と味方と双方が流す大量の血によって洗い流すことだね」

「なっ!？」

「う、嘘だ!サーゼクスさまはスゲエ良い人なんだ!

そんな酷いことをする人じゃねえ!」

「本人もしたくしてする訳ではないでしょうし、今回の件も現段階では詳しい作戦内容は教えられてないでしょう。なにしろ、三大勢力にあつて悪魔は飛び抜けて立場が弱い。」

『反対派を一掃できて、冥界に平和がもたらせて、これからは残りの勢力とも仲良くできる手があるよ』と唆されたら裏があると解つていても、その手を取らざるをえませんよ!」

「聞き捨てなりません!」

それまで顔面蒼白になつて黙り気味だった姫島さんが声を荒げます。

「この程度の推測でいちいち傷ついて尾を引いてるようで、よく人の欲望を糧とする悪魔に転生する気になつたものです。」

「ここからが問題の焦点だというのにね……。」

「わたくしたち悪魔が天使や墮天使如きに劣っている?」

「そんなはずは有りません! ええ、絶対に! 現にわたくしたちはレイナーレを倒し、コカビエルの野望も阻止して見せたではありませんか!」

私よりも大きな胸を張る姫島さん。その姿からは悪魔だというのに神々しいまでの誇りと矜持が感じられます。

そして、だからこそ分かりました。

やはり彼女たちの世代には——「呪い」が引き継がれているのだ、と。

その呪いこそが三大勢力の戦争が未だに潰えられぬ原因。そして同時にグレモリーさんにとって変わらない兵藤さんが絶対に必要な理由でもある。

「姫島さん、兵藤さん。あなたがたは大昔に行われた大戦争の勃発理由について何処までご存じですか？」

「……？ わたくしたち悪魔と堕天使は冥界の覇権を奪い合い、その戦力として悪魔は人間と契約して代価をもらい、堕天使は人間を操りながら悪魔を滅ぼそうとし、ここに神の命を受けて天使が悪魔と堕天使を問答無用で倒すために介入してきた。——この程度の一般的なレベルまでしか知らされておりません。

これ以上のことを調べるには魔王様の許可が必要ですし、それ以外にも——」

「ああ、そこまでで結構ですよ。重要な部分はいま話していただいた中に含まれていまずので」

「……？ いったい何の話さ——」

不機嫌そうにする姫島さんを片手をあげて制したあと、私も勿体ぶりにすぎたことを自

覚していたので単刀直入に現実的問題点を伝えます。

「悪魔は代価をもらい、墮天使は人間を操り、天使は神の命を受けて。

悪魔だけが戦うのに人間を絶対に必要としている。にも関わらず、悪魔は人間を自分と対等とは思っていない。あくまでも下。下等で劣った生き物扱い。これでは早晚、悪魔は自分たちのエネルギー源を使い潰して自滅する。悪魔だけが滅んでしまう。

この運命を回避するためには、他勢力との戦争状態を解消して戦う力を必要としなくなる以外に道はない」

「・・・!!」

再びお二人の顔色が悪くなりますが、先ほどと違って今度は今にも倒れそうなほど真つ青です。・・・お葉だしたほうがいいかな？ でも、悪魔に効くか分かんないしなあ・・・。

「おそらく大戦争で死んだ大魔王様は、この事実を知っていたんじゃないかと思えます。力だけでトップにはなれても国家を造るには至りませんし、跡を継いだ方達が造ったのだとしたら部下の教育も考えておいでだったでしょうからね。そんな方に分らないほど難しい理屈でもない。当然の帰結ですから。

そんな方がこれほど劣悪な状況を生む思想を良しとはしないでしよう。勝つまでの間だけ、天使墮天使双方を滅ぼすまでの間だけこの思想を使わせ、その後の占領政策に

おいては徐々に緩和していく予定だった。

でも、大魔王様は死んでしまった。残されたモノ達も多くが亡くなり世代交代がおり、絶対的支配者不在の中で思想は形だけが悪魔の中に伝わり、やがて伝統となった」沈黙が満ちた中で誰も動かず、仕方がないので自分で煎れてきたお茶を啜り一息つける。

あゝ、お茶美味しい。

個人的にはMAXコーヒーの方が好きですが。

「この思想を滅ぼすことが、現魔王陛下下の戦争目的なのではないでしょうか？ それによつて冥界を効率的な官僚政治へと移行する。

グレモリーさんがよく使う「グレモリー家の名誉」という表現から察するに冥界は複数の名門貴族がそれぞれの領地と軍隊を持った、謂わば封建国家なのでしょう？ それでは血筋が重要視されすぎてしまい若手の育成や制度改革が滞る。

平時であればともかく自国民だけで戦線維持できない現状にあつては改革に着手するしかない。しかし、それをすれば古い名門が必ず邪魔をする。元は大魔王様の元で同格の将だった人たちが。勝てるとしてもできれば戦いたい相手ではありません。同盟相手との関係は外交において最大の焦点ですからね、できるならば無力化させて従わせる道をとるでしょう。

それが今回の会談、と言うわけでしょうね、きつと」

お茶を飲み終わったので顔を上げると、お二人が目を丸くしていました。

いやいや、驚くの早すぎるでしょう。あなた方の出番が関わってくるのは此処からなんですからしつかりしてくださいよ。

「ここで始まりに戻ります。」

兵藤さん、あなたに求められている役割は、おそらくヒーローです」

「ひ、ひーろー?」

「はい、子供たちのあこがれ正義のヒーローです。」

弱きを助け強きをくじく、上からの圧力や権力者の横暴には決して屈しない理想的な主人公。それが墮天使総督さんがあなたに求めている役割だと私は推測しています」

「は? え? アザゼル先生が俺に?」

・・・先生? また何か王道な単語が出てきましたね。担任か顧問にでもなつて教え子たちを導く役でもやる気なんですかね。

まあ、それはいいです。どのみち他校生の私には関係ない。

「三代勢力のトップの中で、あの人だけが始めから駒王町にいました。」

飄々と振る舞っていたとしても、仮に実務のほとんどを側近にやらせていたとしても、トップは中央にいるだけで周囲に安心感を与え平穩をもたらす。わざわざ交戦中の

敵国家が支配している勢力圏内に遊学する必要もないですし、なによりも先日聞いた話の流れできに彼はこれまでに起きた事件の概要をほぼ把握しているようでした。

彼が仕組んだか、あるいは知っていて泳がせたか。どちらにせよ、彼には何かやりたいたいことが有るみたいですね。

その中で冥界の民心を集めることを期待されるヒーローが兵藤さんというわけです」「な、なんで俺!? 俺めっちゃ新入りで役立たずだぞ今の時点では!

悪魔の仕事で上手くいった事なんて殆どねえし!

「役立たずの落ちこぼれが主を助け、主を守り、やがて主と結ばれる。」

人はこれを立身出世物の王道主人公、すなわち庶民のあこがれヒーローと呼びます」

「……!!!」

うん、今日何度目でしょうね、お二人が驚愕の表情浮かべるの。

いい加減飽きてこないもんでしょうか? お二人とも意外と気が長い。

「ここまでは墮天使総督の思惑通りなのでしょうが……たぶん、彼は会談の席で完全な失態を演じます。その時こそあなた方グレモリー一派の出番になるので覚悟だけはしておいてくださいいね?」

「ち、ちよつと待てちよつと待て!」

何でそこまでわかるんだよ! 今まで上手くいったんだろ! だったらこのまま

上手くいく可能性だってあるじゃねえか！」

「今回は対処する戦力が必要最小限しか用意できない環境です。

なにせ、日本の駒王町が舞台だ。三勢力全てにとつて兵力が配置しづらいからと言う名目で選ばれたことになっているのでしようが、実際は違うのでしようね。

『敵から狙われやすく、誰が来るか目算がついていて、そいつは自分たちなら勝てる相手だから』おそらくは、これが伏せられている本当の理由であり、同時に彼が失敗する理由でもある」

「な、なんで……」

「なぜ『敵の誰が来るか分かるのか』答えはここにありません。

すなわち情報を敵から持ってこれる奴が側近にいる。ただし、その人物が情報を持つてこれるのは敵が意図的に流している部分が含まれているから。

これだったら一応納得する事はできません？」

もう私の方が見飽きたお二人の驚愕の表情。

話しは終わりましたし、そろそろ父もしびれを切らす。トイレの帰りに「伏せ」を命じただけでは十分程度が限界でしようからね。

私もそろそろお暇しよう。なにしろー

誤魔化せましたからね！あの醜態を！あの混沌を！

、這い寄る混沌がもたらした理不尽にセレちゃん大勝利ー！
やったねセレちゃん、おめでどう！

こうして父を連れて神社を後にした私は知ることとなったのです。

ほんの数時間さかのぼるだけだったはずのビヤーカーによる時間逆行ですが、実際には丸々一日以上さかのぼっていたという驚愕の真実にー！。

この後、母と二人で行った父へのお仕置きは、良い子に見せられるものでは決してないので割愛します。

とりあえずは父が泣いてました。それだけは時間を操っても変えられない事実であり真実です。

7話「第五勢力『混沌帝国』参戦」

「…つまり、昨日訪れた神社はこちらの世界ではなく別の平行世界であり、ビャーキを飛ばしすぎたせいで亜空間跳躍をしてしまった。

あちらの世界で起きたことはこちらの世界では起きておらず、夢のようなものでしかない。でも、夢は集合無意識の表面にぼつかりと浮かんだ小島みたいなもので人類すべての深層意識は繋がっており、それは平行世界の人間にも通用する。

だから昨日の出来事は夢という形で兵藤さんと姫島さんも追体験したに等しい。…そう言うことですか、お父さん？」

「ザツツ・ライト！ さすがはセレニアさん！お見事な理解力です！

いや、やっぱり私とフィリシアさんの娘だなあ。これなら将来、安心して銀河の中心にある国立大学、宇宙MARCHに進学でそうですねー」

「えい」

「ぎやあああああつ!？」

ちよ、なんばしよるとですか!? 下手したら規制されてシーン描写できなくなりますよ!？」

「自分から自粛したので大丈夫です。」

とにかく、今後はそのご都合主義は控えてください。私はともかく他の方々に迷惑がかりますから。宜しいですね?」

「……………はい」

うん、これでよし。これ以上の混沌化は阻害できそうで良かったです。

本当にこの人が全力出しちゃうと原作のほぼ全てが無に帰しかねないですからね。多少は手加減していただかないと。

「とはいえ、戻ってこれた時間軸が会談に先立つ半日以上前というのは有り難いですね。折角なので有効利用しましょう。」

ゼノヴィアさん、紫藤さん。お使いを頼んでも良いですか? 行ってもらいたい所があるのですが」

「イエス・マイ・ロード」

なぜに英語。しかも、セバスチャン風って…………。

教会所属の聖剣使いが悪魔を真似る理由が分からない…………つか、むしろ背教行為なんじゃ…………。

「天界と冥界の代表さんにアポイントメントを取ってきてください。新参者としては会談を始める前に顔合わせと挨拶ぐらいはしておくの礼儀でしょうから。」

連絡取ろうにも駐日大使館がないみたいですし」

なんで緩衝地帯に大使館を置かず、そこいら中で起きてる下っ端同士の小競り合いに武力介入だけしてるのか理解できませんけども。

普通はそういう時こそ大使館の役目なのでは？ 王族配置して武力鎮圧だけさせてるって時点で関係悪化は避けられないでしょうに・・・つくづく不思議な世界観です。「承知いたしました。では魔王の元にはイリナが幼馴染みを通じて連絡させますので、私は教会の方を。幸い、今はまだ教会に籍は残っておりますし」

「・・・まだ、除籍してなかったんですか？」

「はい。それどころか派遣先から戻らずに音信不通として認識されているものかと」

・・・ダメじゃないの、それ？ 完全な行方不明者じゃん。搜索隊とか出されてると思うんですけど・・・そんな中に突然帰って来て「上に取り次げ」と傲岸不遜な態度で言われたら、どんな聖人君子でも激怒するんじゃない・・・。

でも、他に人がいない。伝手もないしコネもない。始めから私には選択肢が存在して
いない。

・・・なに、このクソゲー。バランス悪すぎでしょう。やっぱり攻略みてからやり直したい。

「・・・まあ、限られた人員で対処しないとイケない以上、仕方ありません。今回の件が

終わった後に報告しましょう。その時に除籍すればなんとかなる・・・かなあ・・・？」
「おそらくは。所詮、信仰心の薄い国に作られた支部です。権力も影響力も発言力もないに等しく、力持つもの（聖剣使い）に楯突く勇氣は蛮勇としか思いますまい。

勝者が歴史を作り、最終的に生き残っていたものこそが勝者です。彼ら弱きものにとつては生き残ることこそ戦争であり勝利です」

「・・・夢のない話ですねえ・・・いえ、私が言っていることかどうかは微妙ですけども・・・」

教会所属どころかヴァチカンから派遣されてきた聖剣使いの騎士様が言うとなあ・・・庶民が言うのとは言葉の重みが違いすぎますよね・・・。

「はいはい！ セレニアさん、パパは何をすればいいでしょうか？」

お望みとあらば敵本拠地に取り込んで被害を気にせず、宇宙CCC100連発をー」

「お父さんには私の護衛をお願いします。

一撃でも掠ったら死ぬ脆弱なこの身を預けられるのは最も信頼できる人しかいませんから。

ー父さん、私を守ってくださいね・・・？」

「むわあああつつかせなさあああついで！！！！！！

このニヤル美、命に代えてもセレニアさんをお守りしますとも！ タイタニック号に乗ったつもりで安心していてください！」

「良かった……。じゃあ、私の側から離れず、私の言うことをよく聞いて、私の指示がない限り勝手な真似は謹んでくださいね？」

「ー信頼して、いいですよね……。？」

「むをつちろんですよ、セレニアさん！ 宇宙で私ほど娘の命令に忠実な父親はいないと自負しておりますから！ 何があってもセレニアさんの側から一步も離れず、命令されないかぎり一言たりともしやべりませんとも！」

良し。これで最大のイレギュラーを排除できた。ミッションクリアー。

場をかき乱すことにかけては宇宙一の人ですからね。大人しくしていてくれるなら虫唾が走りそうな演技だっして見せましよう。

すべては原作維持のためです。名誉ある我慢なので耐えてください、お父さん。

「とは言え、受けて側のままでは先手先手を取られて不利になる一方なんですよ……。かと言って戦力は限られすぎてますし……。せめて最低限の情報だけでも集めておきますか。」

天野さん、お願いしても？」

「畏まりました。必ずやご期待に応えてお見せ致します」

で、現在会談中。

場所は駒王学園の新校舎にある職員会議室。時間帯は深夜。

・・・なんで悪魔と堕天使のホームみたいな時間を選んだんでしょうか？ これだと二対一の構図ができちやうんですけど、天使さんはそれでもいいの？

つか、魔王だけ二人いるんですけど？ 警備兵まで全員悪魔だし。

もともと冥界の支配権を巡って争っていた二大勢力に介入してきた一大勢力である以上、天使が一番狙われやすいんですが。最悪の場合、「協力して空気読めないKY天使滅ぼしてから、改めて闇の陣営同士で殺し合おうぜ。それまでは休戦な」といった展開になってもおかしくないんですけどねえ。

まあ、代表者が気にしてないみたいだから、別にいつか。

「これで参加者が全員そろった。それでは会議を始めよう」

議長役らしい魔王サーゼクス陛下の開会の言葉を受けて会議が始まりました。

それ以降はとくに記すことはありません。

単なる形式的な会話での様子身とジャブの連発。正直、欠伸がでそうなほど退屈な流

れです。

当事者本人たちより詳しく内情を把握できる組織をもった魔王様が妹にコカインさん事件の顛末を説明させ、その後には当然のように墮天使批判。墮天使総督も不利を承知で会談に臨んでいる以上、何を言われても柳のごとく受け流し。

やがて提案される和平締結。参加者のトップは全員がはじめからそのつもりで開催された会議なのでから当然の流れだし、不利な立場であるからこそ流れを掴みたい総督殿がワザと傲慢な態度をとり、不意打ちの形でこの提案をするのも意外性は皆無。

退屈だ・・・寝たい・・・。

グレモリーさんたちだけが怒ってますけど、なんで王族なのに腹芸ができないんでしょうかね、あの人。フィクションでよくある我が儘貴族っぽいです。

そう、例えば銀英伝つながりで銀河帝国の門閥貴族のような・・・って、ダメだこの想定は。今の私がカイザー・ラインハルトだと彼女と敵対してしまう。メンドいから絶対にイヤ。

「さて、話し合いもだいぶ良い方向へ片づいてきましたし、そろそろ赤竜帝殿のお話を聞いてもよろしいかな」

神様亡き後、残されたシステムを使って天界を運営してきた天使長のミカエルさんが兵藤さんに問いかけ、彼は金髪シスターのアルジエントさんの事でミカエルさんから事

なんて盗人猛々しいにも程がある。あげく、先ほど交わされた会話の中に「人間」に対する賠償は一言も出てこなかった。

ようするに、彼らは全員同類です。自分たち異形の者同士でしか対等な関係を結べない。

強さが全てで弱さは悪だ。その考えに染まった戦争狂どもです。

戦争屋と仲良くなりたいとは死んでも思いませんよ私は。

「い、異住・セレニア・シヨート……あなた、なんて暴言を言うのよ！」

仮にもこちらは天使勢力の長なのよ！ それをあなたは——！」

「私は別に無神論者ではありませんが、信仰心の持ち合わせもありません。正直に白状すれば神様とやらの名前すら知らない。そんな奴に天界で一番偉い人だから礼儀を守れと言ったって無意味ですよ。」

日本人である私からみれば、彼はただの不法入国者でしかありません。ビザもパスポートも持たずに国内を彷徨かれて問題起こされると迷惑なのでさっさとお帰り願いたいですね」

「あ、あなたは——!!!」

髪と同じく顔を真っ赤に染めるグレモリーさん。

無礼は承知ですし、そもそも先方が礼儀を守っていない以上は守る必要性すら感じま

せん。

不法入国は立派な犯罪です。犯罪犯せば神だろうと天使だろうと犯罪者です。天の理とやらは天界の法であり人界の法は別にあります。守る気ないなら来るんじゃねえバーロー。

「ふふふ……。さすがはセレニア様。お見事な人間ぶり。

〃元〃 墮天使レイナーレ、感嘆の極みです」

「同じく、〃元〃 聖剣使いゼノヴィア。信服いたしました」

「わたくし 〃元〃 プロテスタント紫藤イリナも、改めて御身への忠誠を誓います。願わくば真なる神としてこの世界、いえ、全宇宙を支配なさいますよう」

『はあ!?!』

よけいな茶々を入れられたああああーっ!!!!

そのせいで空気変わっちゃったああああーっ!!!!

全員が理解不能な表情してるううううーっ!!!!

もうヤダこの人たち!なんで空気読まないの!?!今のは言っちゃダメな言葉で言っちゃダメなタイミングだったでしょおお!!?

たまには迷惑以外も寄越せよ穀潰しども！　これから十分かそこで胃に穴があくぞ絶対に！

祝福じゃなくて痛みだけ与えるお前らが天使に転生ってどう考えてもおかしいだろうがあっ!!!

「おい、今のは聞き捨てならないぞ。レイナーレ？　レイナーレって言ったかお前！

アイツは死んだはずで此処にいるはずがーって、本物じゃねえか!？」

「お、お待ちなさい戦士ゼノヴィア、戦士イリナ。あなたたちは教会から洗礼を受けた見事な信仰心を持つ気高き神の使徒だったはず・・・なにゆえ魔道に墜ちたのですか!？」

あと、聖剣はどこに!？」

「リアス、危険だ。下がっていなさい。ここは私たちが片を付ける。

危険因子の排除は和平会談締結前におくべきだ」

「いやいやサーゼクスちゃん、ここはこの魔法少女レヴィアたんの出番じゃないかな？

悪魔の敵はまとめて滅殺なんだから☆」

「部長、ここは俺にまかせて早く避難を！」

「ダメよイツセー！あなただけを置いてはいけないわ！　私もあなたと一緒に戦うわ

！」

「部長・・・！」

結局は混沌と化してしまった会議場。

いいですけどね、別に。

なんとなくこうなる予感はしてましたからシヨックは少ないので。

ただ、原作崩壊を助長したと確信できて痛い、マジ痛い、心臓は快調でも胃が痛い。死んでしまいそうです。

ああ、こんな時にこそヒーローはいるはずなのに……。

誰か助けてヒロエもーんっ！！！！

バタンっ！

「失礼いたします！ セレニア陛下、やはり不満分子どもが動き出しましたぞ！

第三十二偵察部隊隊長松田からの報告によりますと、敵兵力は魔術結社『マーリン・アンプロジウス』所属の魔術師約三個師団。

サーゼクス、ミカエル、アザゼル三名が展開している防壁内に無数の転移用魔法陣を設置しているらしく、遅滞行動によってこちらを足止めする事によって時間を稼ぐ意図がある模様。詳細は次の伝令がお持ちいたしまー！

「伝令！ 敵はグレモリー眷属がひとりギヤスパー・ヴラディを呪術に特化した魔女タ

イプの女性魔術師が洗脳によって強制的にバランス・ブレイカー状態へと持ち込み、彼の能力『フォービトン・バロール・ビュ』を強化し効果を増大。魔王クラスのうち誰か一人を戦線から離脱させることが目的のようです。潜伏場所は旧校舎オカルト研究会部室」

「さらに伝令！ 敵の指揮官は魔王レヴァアイアタンの血族カテレア・レヴァアイアタン！ 目標はセラフォルに奪われた『魔王レヴァアイアタン』の座を奪い返し自らが魔王となること。なお、旧魔王派の殆どが敵方に付いたと報告が上がりました。

これ以上の情報は現時点では不明」

「敵拠点に潜入中の諜報員、コードネーム『ブラジャー』から緊急連絡！

『我、敵の首魁ヲ発見。首魁ノ名ハ、ウロボロス・ドラゴン・オーフィス』 繰り返ス 首魁ノ名ハ、オーフィス』 以上です」

「敵軍主力が掲げている旗印を視認しました！

敵軍は三大勢力の不平派危険分子及びセイクリッドギア所有者の人間をも含む混成集団『カオス・ブリゲード』。ロンギヌス所有者も複数名確認」

「内応した敵将より密告がもたらされました。

『墮天使軍に所属している白竜皇ヴァーリはこちらが潜入させたスパイである。魔王が分散した後、墮天使総督アゼゼルを背後から不意うちするよう命令されている。十分に

警戒されたし」

『・・』

「・・・まったく、俺も焼きが回ったもんだ。身内がこれで、正体不明の嬢ちゃんの下
が超優秀とはな・・・」

「・・・すみません・・・」

もう謝罪の言葉もないです・・・むしろ、弁明すらできない惨状です。

バランスブレイカーっていうのが何か分かりませんが、少なくとも原作（世界のバ
ランス）が崩壊（ブレイク）してしまいました・・・。

これ本当にどうすればいいんでしょう・・・？

情報が勝敗を分けるというセオリーに従った結果がこれってどうなん？ 勝敗どこ

ろか趨勢すら決してしまいそうです。

「セレニア様、セレニア様」

「・・・はい？ ああ、貴女は確か最初に報告にきた女生徒の・・・」

「はい。転生愛天使の元浜と申します。

先ほどお伝えした内応者の黒歌という猫又が、報酬として妹と平和に過ごせる世界を要求してきておりますが、如何致しましょう？

一応、猫都市ウルタールを割譲して猫女王国ウルタールにする準備は出来ておりますが、やはり主権者たるセレニア皇帝陛下の裁可なしに決めてもよい案件ではないので、今作戦が終わりしだい帝都ルルイエへ凱旋されますようお願い申し上げます」

「どうか、始まる前から終わった後の話しを戦闘に際してするんじゃないですか。不謹慎ですよ。」

「はぁ・・・分かりましたよ。行きますよ、行けばいいんでしょう。」

「なにかも諦めて流されることにします。」

「・・・ところで、帝都ルルイエってどこにあるんですか？」

「深海？ 幻夢境？ レムリア大陸かムー大陸？ ハイパーボリア？ アラオザル？」

「レン高原？ シュトレゴイカバル？ アーカム・・・は町名だから違いますか。」

「今更どこに連れてかれたって驚いたりはしませんけどね」

「衛生軌道上に建設した『機動宇宙要塞イゼルローン』の中核です。」

「現在では500万人が暮らす大都市として機能しております」

「……………」
大気圏を突破できるそうですよ、私の信者は。

すごいですよ、月のグラナダに都市建設とか言ってたのが十数年前なのに、うちは衛生軌道上面で作って人も住んでるんだって。

宇宙は広くてすごいなあ。

「……………」
無理」

あまりにも想像を絶する展開に私の頭はオーバーヒート。

倒れてから後のことはなにも覚えておらず、目が覚めたら翌日になってました。戦いはどうなったのか誰も教えてくれません。

グレモリーさんたちは無事でしたし、アゼルさんも失った片腕をロボット義手に代えてご機嫌そうです。オカルト研究会の顧問就任もおめでとうございます。

……ただ、なんで皆さん私に今までと同じに接するの？ 怪しさ爆発ですよ、私が。誰からも疑いの目を向けられないのが辛いつて変な話ですけども。

天野さんに事情説明を求めたところ、一言こう呟きました。

「神の残したシステムって．．．便利ですよね」

私にはそれ以上を聞く勇氣は存在せず、おかげで日常が戻ってくるようになったのです。

時々、邪神たちを餌付けしているゼノヴィアさんが何を餌として使っているのか知りたくなりますが、私は絶対聞きません。

平和とは、あえて真実から目を逸らすことで守られるモノなのかもしれません：。
クトウルーだけに。うん、上手くない。むしろ怖いだけでしたね、本当に悪夢な世界です。

．．．知らないきや．．．よかったなあ．．．
つづく

8話「夏休み前、ようこそイゼルローンへ」

「——お話は伺いました。我々としても協力者である貴女に報いるのは当然のことと考えており、都市一つを含む地方一帯を領地として割譲し、新生ネコ王国の建国を視野に計画を進めています。

私は素人故にその手の話には疎いので、内容に関しての説明は彼女から」

私はテーブルに着いてはいても好奇心を抑え切れないらしい黒歌さんのブンブン振られている猫尻尾を眺めながら、

（猫の尻尾つて嬉しきで動きましたっけ……？）

それとも、あくまで猫は猫。猫又は猫又と言うことなのでしようか……。

あまり認めたくない現実ですね……）

私は相手に気取られないよう注意しつつ、心中でだけ吐息し外に目を向けます。

無限に続く星の群が私を見返してきました。

凍てつく空間、無数の拒絶、人類にとつての憧れであり、いずれは至る場所。

その場所に私たちは数世紀単位で先んじて到達し、女の子とお茶しました。

どんなナンパだ、贅沢すぎんだろ、自重しろ。

「それにしても、すつこいわよねえこのお城。サイオラークやバアルのと比べても脚色にやいんじゃない？」

「いったい作るのに幾ら掛かったのか聞いてみたいものだけにや？」

「概算で、一兆五〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇混沌帝国マルク程です。」

冥界の基準でたとえるならば、魔王陛下の王家を初めとして全ての貴族の皆様方から全財産を没収し、山として積み上げた分の五十倍程かと」

「……え？」

イタズラな目つきで問いかけてきた黒猫悪魔のお色気おねーさん、黒歌さんに対して辛辣な答えを返して黙り込ませたのは私……ではなく、先ほど彼女への説明役を任せた転生愛天使の一人でした。

彼女は笑顔のまま、詳しく説明してくれます。私の指示通り、丁寧に丁寧に――

「まず、この要塞都市イゼルローンは直径六〇キロの人工惑星として建設されました。

本来であるならば恒星に惑星の一つとして配置し軌道を維持するところをセレニア様の御為改造に改造を重ね、現在では移動要塞として機能しております。

宇宙港は最大で二万隻の艦艇を收容可能、整備工場は同時に四百隻を修復できます。病院のベッド数は二十万床、兵器廠は一時間に七千五百本のレーザー核融合ミサイルを生産でき――」

「はい、ストップストップ。相手の思考回路が止まっていますから、死んでますから。いえ、死んではいませんけど死にかけてますから」

相変わらず世界観の違いすぎるスケールの話に付いて来ることができず、黒歌さんの脳は外部からの情報を一時的にシャットアウトしてしまつたようです。こういう所は人間と変わらないんですね。なんだか安心できました。

「……はっ!? ま、まさか此処つて空の上じゃん!? 落ちたりしにやいの!?!」

「…….そこからですか。ええ、大丈夫ですよ。」

だって、ここには本来水も空気も重力すらありませんから」

「なあ〜んだ、それなら安心〜じゃにやあああああついで!!」

大暴れ黒歌さん。不謹慎ですが、ちよつとだけ楽しい。

とは言え、いつまでもこれでは話が続けられません。強制的にでも話を前へと向けさせます。

「ところで貴女からご要望のあつた妹さんの一件ですが。これに関して私どもの見解を述べさせていただくと、今すぐ貴女と彼女を引き合わせるのには同意しかねるとしかお答えしようがありません」

途端、彼女の雰囲気が一変する。

毛を逆なでた黒猫みたいに剣呑で不機嫌そうな空気を全身からこれ見よがしに発散

し、

「……なんですよ」

とてもとても不満そうに、気に食わない返事したら食い殺してやるとも言いたげな態度で、ぶつきらぼうに吐き捨てられます。

本来のーと言うより、彼女が今いる世界においては本来、これが正しくあるべき姿なのでしょう。駒王町が穏やかすぎただけであり、世界各地で小競り合いを何千年も続けてきた彼らの戦いは、もつともつと凄惨なモノだったはずなのです。

兵藤さんは、おそらく何も知らない。知らされていないのか、知っている者が側にいないのか、あるいはそれすらも魔王陛下の計画なのか想像も付きませんが、とにかく彼が自由意志で悪魔になり、悪魔であり続けることを選んだとは言い難い状況になってきましたね。

まあ、彼の場合グレモリーさんが誘えば悪魔だろうと天使だろうと関係なく靡きそうではありますが……。
ともかく。

「理由は複数あります。

第1に、貴女の妹、塔城白音さんは今現在グレモリーさんの眷属として傳えています。

これは彼女自身の意志でもありますが、おそらく勢力強化を図りたい魔王陛下の意向も

働いていることでしょう。出来るならば貴女にこれ以上の危険は犯させたくありません」

「……………」

「第2に、彼女の周囲は常に仲間たちで固められており、不用意な手出しの仕方は出来ません。そうなると今度団体で行くらしい冥界において混乱に乗じてコッソリとしかないのでしょうか、これだと完全にテロ組織の一員として貴女が見られてしまう。」

「迎えに来た」と言う言葉が「浚いに来た」に変換され、守る側の「渡さない！」が「誘拐犯の妹の私なんかを！」とヒロイックナルシズムへと直結してしまうことにも成りかねません。バカバカしすぎるので、これは絶対にしたくない」

「……………まあ、それは確かにねえ」

「第3についてですが……これは貴女にとつてかなり辛い現実を聞かせなければいけなくなります。その事を予めご承知いただきたいのですが……彼女の中での貴女は自分を捨てて逃げ出し、泣いても叫んでも助けに来てくれなかつた酷い姉、妹が苦しんでいるときに遊びほうけていた碌でなしと認識されている可能性が極めて高いんですよ」

「なっ……」

口と目をいっばいに開けて、マシユマロを詰め込んでみたいなあとは妄想させてくれるほど愛らしい表情を見せる黒歌さん。こういう所で見せる無防備な子供っぽさが、元来

の彼女らしきなのかもしれません。

調べられた情報によると、彼女たち姉妹は幼い頃に親と帰る家を亡くし外道悪魔に拾われ、成長の過程で引き取り手の悪魔を殺し単独で逃亡。以来、各地を転々としながら荒んだ生活を送ってきたと有りました。

ようするに、思春期を経験していません。子供が大人になるには絶対に必要な通点である思春期が存在したことすらない。これは彼女の精神が見た目ほど成熟していない事を示すのではないかと私は推測すると同時に悪魔と人間の精神構造がどこまで似通っているのかを調べさせてみようかと決意しました。

俺とお前らは別の生き物なのだ。相容れるわけがない。

ファンタジーによくあるお決まりのフレーズですが、これと同じ言葉はギャング映画や刑事ドラマ、果ては学園モノですら良く見かけるほど出尽くした感がある言葉でもあるのです。

もしかしたら、これらの矛盾は互いに互いのことを知らずに語り、言うなれば世間知らずな厨二思想のぶつかり合いに過ぎないのではないかなとも考える私は平和ボケしすぎなんでしょうか？

「ち、ちよつと待ってよ！ 私は一秒たりとも白音のことを忘れた事なんて無いわよ！

いいえ、むしろ私が！ 私こそが白音をこの世で一番愛している存在なの！ ポツと

出の御貴族様なんか私の白音愛と比べたら取るに足らないんだから！」

「はい、それは知っています。今貴女から聞いたからです。」

では、彼女は？ どこでそれを知り得るのですか？ 誰がそれを教えてくれるのですか？ 魔王陛下自らが派遣した追撃部隊を単独で壊滅させた程のバケモノの妹だと言つて罵る輩から守つてくれる存在、王妹殿下がそれを教えているとでも？

ハッキリ言いますが彼女にそういうのを期待してはいけません。彼女は善人であり、貴族らしく優雅であり、気高く高貴な皇族らしい皇族ではありませんが・・ぶつちやけ王位継承権のほぼ無い王の妹に過ぎません。帝王学など対して教える必要もない。

むしろ、現実感覚を教えてすれさせるより綺麗なままアイドルとして使つた方が効果的だ。ついでに言えば見栄えもいいですね。世間知らずのお嬢様にはお似合いの役割ですよ」

些か以上に辛辣過ぎる意見だったためか黒歌さんにドン引きされました。

悪魔にそれやられるとマジヘコむわく。

「そ、それに彼女を今の今まで庇護して育ててくれたのも事実上グレモリーさんです。」

謂わば里親とでも言いましょうか？ 冷たい里親ならいざ知らず、優しい里親だと幼い子供は心を開きやすい。貴女から話を聞く限り、白音さんの幼少時代は素直でよい子だったのでしょうか？ だとしたら愛情に満ちた家庭の空気が悪意から彼女を守つてき

た一面があるのも否定できなくなりませぬ」

「ぐ、ぐぬぬ……」

「それにまあ、現実問題として十年近くの間音信不通だった姉がいきなり現れて「就職したから一緒に暮らしましょう」と言ってきたら、貴女それ信じますか？」

「……信じにやい、絶対に疑う、全力で」

「でしようねえ」

借金のかたに売られるフラグしか見えませんもんねえ。これを信じる人が居たら、どんなにわざとらしいオレオレ詐欺にも引かかるとしよう。別名、カモネギ。

「……でもっ！ 悔しいじゃにやい！ 私はこんなに！こんなに、白音のことを愛しているのに！ それを伝えにいけないなんて！ それを伝えちゃいけないなんて！

悔しすぎるじゃないのよおっつ！」

慟哭の黒歌さん。もしくはムンクな黒歌さん。

今にも暴れ出しそうな……と言うか今現在机といすの上でドツタンボタン暴れています、本格的に暴れ出そうとする前に誤解を解いておきましょう。

「落ち着いてください黒歌さん。別に貴女と妹さんを合わせないなどと言つてはいませんよ？」

そのための条件交渉をするためにこの場を設けたんですから、早く席に着いて書類を

「ご確認ください」

「……ふえっ？」

お目目をパチクリ。ここでも年不相応に子供っぽい、白音ロー子猫さんと良く似た姉妹らしい表情をのぞかせる彼女に好意を抱きつつ、私はこちらが提示する条件を抜粋します。

「まず貴女には一度カオス・ブリゲードのヴァーリ・チームに戻っていただきます。あ、別にスパイをやれとか捨て駒にするためではなく、一番自然に妹さんと会えるのがこの組織だっただけです。誤解なさないようお願いしますね？」

記憶の改竄は済んでいます。これを使うのは業腹でしたが、今回を最後と決めて神の残したシステムとやらに介入させました。地球に住まう全種族、全存在の記憶を改竄しましたので、貴女がカオス・ブリゲードを一時的にでも抜けていたのを知っているのは私たち地球軌道上にいる者たちだけです。

空間をねじ曲げてる良く分からないナニカは面倒だったので適当に砲撃して地球圏内へと追い込み、強引にシステムの影響下へ落としましたしね。

なので勢力に関係なく貴女が存在と立ち位置は此処にくる前の時点まで遡っています。色々と齟齬が生じるでしょうが、何とか誤魔化してください」

「え、あ、はい」

「それで肝心の要点たる貴女と妹さんの密会場所ですが……これも面倒くさいので、眠っている最中の彼女を意識だけドリームランドへ連れ出し、そこで貴女と朝日が昇るまで延々と語り合っていただけです！」

「あ、そうなんですか……って、はいいいいっ!？」

「おお、なにやら斬新な反応だ。これは新しい。」

「もちろん、相手に逃げ道を与えないよう細かい場所は厳選して選んであります。」

まず、狂気山脈の先にあるとも言われる凍てつく凍河に立てられた瑪瑙の城カダス。

次に、灰色の荒涼とした土地に人間もどきが住まうレン高原。

最後に、観光名所として千の塔が建ち並び、インクアノク産出の美しい瑪瑙で塗装された道が通り、金色のガレー船に乗船して空にも通じる海へと至る光明の都セレファイノス。

「ー以上の三つがありますけど、どれがお好みでしたか？」

「最後の以外を選ぶ奴っているの!？」

「いるんですよねえ、これが。主にクトウルー神話に登場する人間たち。」

「ーまあ、いくら好条件を提示したとて人様の夢に問答無用で介入する手は選びたくはありませんでした。」

「が、状況がそれを許してくれません。」

「実は今度、グレモリーさんが夏休みを利用して実家へ……冥界の魔王城へ里帰りすると伝えてきましてね。正直、思いもしない展開だったため対応に苦慮している所です。出発した後、彼女は王族の友として賓客扱いされ、貴女はお尋ね者の賞金首。絶対に会うことが出来なくなるんですよ……」。

計算外とは言え、さすがに宣戦布告がなされ交戦状態に入ったその直後に王族が一カ所に集まり大々的なパーティーを開くとは想像の埒外すぎました……」

「ま、まあ確かにあれ聞いた時には私も驚いたけど……」。

テロ組織から戦争仕掛けられて初戦では不意打ちまでされて、極めつけに今度は犬猿の仲のバアルやアガレス、アスタロトまで含めた「新鋭若手悪魔たちの会合」よ？

これだけは言わないうできたけど今だから言っちゃうわね。

……魔王サーゼクス・ルシファアアって、頭良さそうに見えるだけで実はただの脳筋なんじゃにやいかしら？」

「……反論できません」

そうなんですよねえ。あの魔王様、絶対に乱世における統治者には向いてない。

強さは絶大、それを抑える思慮も有る。カリスマ性もありますし、同族を家族として愛し慈しむ優しい心も持っています……が、とにかく現実を見る目がない。

現実が立ちはだかったとき「みんなで力を合わせれば」とか言い出すタイプの勇者型

魔王。それでいて勇者ほど周りと親しく接しては居らず、公務もあつてか王としての立場を崩さずに一步引いた場所からみんなを信じて任せている。いや、任せようとしている。

ところが、現実はどうですかからねえ。

「情報部からの報告によると、アスタロトの一派だけでなく旧魔王派に連なるアスマデウスまでもが現魔王派を見限りカオス・ブリゲードと接近、接触を繰り返しているとの事ですが・・・」

「ダメじゃん」

「・・・ですよねえ・・・」

本当、どうする気なんでしょうかねこの状況を。実力行使しないと改善に向かう兆しは皆無なんです、まだみんなを信じて任せるつもりなんでしょうか？

ここでアスタロトはともかくアスマデウスが・・・冥界における旧時代の象徴までもが裏切り者として粛正された場合、混乱が収まっても弱体化は避けられません。

ましてや彼らはすべて、カオス・ブリゲード本体の人員ではない。失ったところで何ら痛痒を感じない一種の捨て駒です。そんな連中に振り回されることとなる魔王様には同情を禁じませんが、自業自得でもあるので正直微妙です。

「どうにも魔王陛下は三種族による大戦争さえ回避できればという思いが強すぎる感が

ありますね。それが枝葉で生じている諸問題の抜本的解決に望まない消極姿勢の根拠になつてゐるような気がします」

「余計な刺激を与えて眠りこけてるドラゴンを起こすより、炎の寝息で住人が焼け死ぬのを黙つて見ていた方が多少マシだつて考へてるのかしら？」

「……たぶん」

完全に開いた口が塞がらなくなつてゐる黒歌さん。

彼女は冥界の現実を弱者の立場で見してきた第一人者、上の人たちがいかに間違つた認識を根拠として愚かな決断を下しているか、ちゃんと情報さえ与えれば正確に正当へとたどり着ける、この世界では大變に希有な方です。

うん、やはり彼女しかいませんね。

「黒歌さん、貴女と白音さんとの再会タイミングはそちらに委ねます。私たちは毎日決まつた時間に彼女の意識を夢の国へと連れだし、貴女と会つていた時間のことは「妙に現実感のある夢」として処理するよう細工することに専念しようと思ひます。」

なので、貴女と「目覚めの世界」で再会した時が彼女にとつて「離ればなれだった姉との数年ぶりの再会」になる。カオス・ブリゲードの一員としての再会ですが、それはそれでギャップ萌えが狙えますし、味方に襲われている彼女を来援して助けてもいい。

とにかく知識面でのアドバンテージを活かしてください。貴女はおそらく、兵藤さん

を初め脳筋ばかりのこの世界において唯一の活路となりえる可能性を持っている」

「そ、そう？　そこまで言われるとお姉さん照れちゃうにゃ〜♪　・・・でも、ヒヨウドウサンって誰にゃん？」

「とにかく人材が足りません。強さはあるのに考えることが嫌いで、権力欲は強い人が多くて、でも統治する気はなくて、そんなダメダメな人たちが上に立つてるこの世界には貴女のような賢い、もしくは考えようと思えば考えられる存在が絶対に必要なんです。

ですから黒歌さん。我々は貴女とーいいえ、私は貴女こそ共に歩めるパートナーとして求めたい」

今日一番の驚きの表情。黒歌さんは百面相な女性ですね。

・・・あと、背後から黒くて禍々しくて吐き下を催すナニカがナニカを垂れ流してる
心配がするのは気のせいだと思いたい・・・。

つづく

9話「深く静かに原作を浸食せよ」

「冥界も列車で行くんですねえ」

「新眷属の悪魔は、この正式なルートで入国する決まりなのですわ」

兵藤さんと姫島さんが悪魔ならではの常識について語り合っている様ですが、人間である私は我関せずと聞き流し、車窓に映る景色に目を向けています。

見渡す限りどこまで行っても青、青、青。

青一色の空間がどこまでも続いているかのよう錯覚させらそうになる道程を一時間ほど我慢すれば目的地に到着するそうです。

そうすると、東京駅から新幹線で宇都宮まで行くのと同じくらいの時間で世界間移動が可能という計算になるわけですが、これは時間と距離の関係を考慮した場合、長いのでしょうか？ それとも短いのでしょうか？

物理的距離の問題を有しながら東京から大阪まで、早ければ三時間以内で到着できる現代日本と、次元の壁を越えて異空間トンネルを通り、異世界へ一時間近い代わり映えない景色の中を列車旅行させてくれる現代冥界。・・・うむ、激しく微妙だ・・・。「えっ!? マジですか!」俺、以前、魔法陣で冥界にある部長の婚約パーティーに乗り込

んじやいましたけど!？」

.....は？

「あれはサーゼクス様の裏技魔法陣によつて、転移したものですから、特例ですわよ。もちろん、二度は無理ですけれど」

「そ、そうなんですか.....。あつち行つたら即監獄行きは勘弁ですよ.....」

ホツとしている兵藤さんには悪いんですけど、いやいやいやいや、安心しちやダメでしょそこは。

え、なに。この世界、国家主権者自ら法規則無視してんの？ しかも、その方法が裏技で、挙げ句は婚約パーティーに部外者乱入されるのに使われちゃつたら言い訳聞かないじゃないですか。どんだけ権力のごり押ししたんですか魔王様。あと、どんだけ大金投入して隠蔽工作したんですか魔王様。

戦争前なのに、開戦前なのに、大戦争になるかもしれない、始まりの会談前なのに。あく、ダメだわこれ。かんつぜんに終わつてるわ、冥界の統治機構。そりやカオス・ブリゲートに参加する跳ねっ返りがそこいら中にいるわけだわ。

だーつて、統治者自身が法を尊重してないもん。まず、隗より始めてませんもん。むしろ始めてない隗が人にやれつて言つてますもん。やつてみせず、言つて聞かせて、やらせてみて、ほめてやつたが人は動かず。なぜなら自分が動いていないからである。

・・・山本五十六の爪の垢でも煎じて飲めよマジで。

あく、なんかいきなりやる気なくなっちゃったなあー。始めてきた地で最初に見たのが為政者の執政って、どんだけだよって感じく。バカバカしくなったら一人で帰ろっかなー？

・・・まあ、現実としては私必要ないんですけどね、この場には。必要なのは天野さん、ゼノヴィアさん、紫藤さんの三人だけで私はオマケ。戦力外通告されてる身なので居なくても全然問題ナツシング。

とはいえ、じゃあ帰れるかと言えばそうでもない。原作キャラたちから見れば要らないこの私ですが、天野さんたち放って帰るとかマジあり得ん。人間核弾頭を野放しにする危険性と比べれば、私のストレスくらい些細な問題ですよ、ふっふっふ・・・。

あく、胃が痛い。

「特例ですから、裏技魔法陣の件もだいじょうぶですわ。けれど、主への性的接触で罰せられるかもしれないわね」

「なんですと!?!」

「眷属同士のスキンシップは何ら問題ありませんわ。こんな風にー」

「ぬはっ!」

「主から奪うって言うのも燃えますわね」

「あ、朱乃、いい加減にー」

「リアス姫、下僕とのコミュニケーションもよろしいですが、例の手続きはよろしいですかな？」

「・・・はあ・・・」

異能バトルの異世界列車移動で必ず行われるお約束通りの予定を消化しつつ、私たちが乗る列車は一路グレモリーさんの実家グレモリー領にある、グレモリー本邸前へと進んでいきます。夏休みを利用して彼女の帰省と眷属たちの修行を兼ねた里帰り小旅行。

普通に進んでくれさえすれば、多少のごたごたは予定調和の原作ストーリーと言うことで大目に見ますが、我慢してくれそうにない人たちが若干名混じっているのが心配ではありません。

何事もなければよい、このささやかな私の願いは果たして天の神（代理）のミカエルさんには届くのでしょうか？ 届いたところで彼に叶える権限はあるのでしょうか？ トップ不在の数千年間を維持してきて限界に達したからこうなっている現状を見るに、あまり期待は出来そうにありません。

願わくば、せめて私の処理できる範囲内で事件が起きてくださいますように・・・

「会長たちと分かれてからずいぶん経ちますね・・・」

今日初めてあつたダンボールくん（女子制服姿なので「さん」かもしれませんが）が、携帯ゲーム機に目を落としながら呟きました。コミュ症なのかヒツキーなのか、初対面時から私たちと視線を合わせる事なく延々とゲームだけして一人遊びし続けている女装美少年——いわゆる男の娘。

彼の言葉通り、グレモリーさんたちは途中で駒王学園の生徒会長副会長さんたちが挨拶してきた後どこかに行つてしまい、未だに戻つてきていません。

列車内にいるのか、はたまた途中の駅で下車したのか。どちらでもいいですし、どちらでなくてもいいのですが、いい加減そろそろ無味乾燥すぎる景色にも飽きてきましたので多少の変化くらい与えて欲しいものです。正直、気が滅入る。

「それだけ、冥界は広いってことだろうなあ」

『まもなく、グレモリー領に到着します』

「お、いよいよ到着か」

兵藤さんが彼の疑問に答える形で呟かれた言葉に被さるようにして流されたアナウンス。それは私に退屈な時間の終わりを告げる福音ともなり、ようやくテンションも盛り返せそうでホツとします。

「ふふふ、ご覧なさい」

姫島さんの妖艶な声につられ、見慣れた車窓に改めて目を向けてみると、

「うわー！ この広大な土地がすべて!？」

「ええ、グレモリー家の領地ですわ」

「こ、こんなに広いんですか!？」

「日本で言うところの、本州くらいのは広さがあるらしいよ」

「な!？」

それぞれがそれぞれの驚きの言葉を並べる絶景の部類に入る光景。

山と森に囲まれたセフィロトの木を連想させる配置の町並み。無駄にだだっ広くて機械類がまるで存在していない自然豊かな未開の地。

冥界という場所は私が思っていたよりずっと綺麗で興味を引かれない、ファンタジーの魔法王国に大きく劣る景観を持った素朴な世界でした。

「なにこれ、しょっぱ．．．」

「田舎だな．．．」

「地味ですわ．．．」

「ま、まあまあ」

そしてなぜか、同伴者で超未来SF科学宇宙都市在住の帝国軍上級幹部三人を宥めに

回らなければいけないくなる私です。・・・なんでこうなるの。

その後、突如として響く衝撃と揺れる車内。

短時間に少人数が一斉に放つ悲鳴と叫声。

一部の例外（常在戦場の心構えが基本の帝国軍人たち。ちなみに私は皇帝なので含みません）を除き、車内すべての乗客が驚き狼狽えてバランスを崩して倒れ込む中、列車自体も完全に停止したことを告げる『緊急停止信号』が届いたことを告げるアナウンスが流れ、事故でもあったのかと戸惑いのささやきが聞こえだした頃になってようやく説明役が現れました。

それも、このグレモリー専用車両を所有しているグレモリー家のお姫様リアス・グレモリーさん同伴で。見え透きすぎて嫌になる仕様です。この後の展開が自ずと予測できさる。

「近々お偉いさんが集まるからなあ。念には念をつてことかもしれん」

「よく言う・・・」

思わず声に出してしまい、相手に届いてしまったのか目配せされてしまいました。

いわく、〃今だけは黙っていてくれ〃という意味なんでしょう。

やれやれ、今度は何を企んでいるのやら。

「お偉いさん?」

「どうも動きそうにねえなあ。ちよつと様子を見てくる。じゃあな」

軽く手を振って冥界内では完全な部外者の異種族首魁が平然と国王直轄地に進入していくのを誰も不審に思わないあたり、この悪魔さんたちの危機意識と国際常識のなさが少々心配になってきます。

今でこそ和解したとはいえ、数千年間命がけで戦い続けていた敵の首領が首都に単独降下するのです。普通であれば市民感情を考慮して力付くでも止めるのが臣下の勤め。

それを全く行わないどころか、むしろ彼のことを全面的に信賴している節まであるのは彼らの長所でもあり短所でもある部分でしょうね。

裏切られることを恐れて敵を信じない愚は犯さないのが利点。その一方で信じた相手に裏切られるといつまでも尾を引くのが欠点。

どちらも一長一短がありますが、こと兵藤さんに限って見た場合、欠点の方が大きく作用しそうな気がしますね。良くも悪くも単純で裏表がなく、人が良すぎて人の欠点を見ようとしません。逆に自分が「嫌な奴」と感じた相手には徹底的に偏見をむき出しにして後先考えずに噛みついていく。

ドラゴンと言うよりも忠犬。主と仲間を守るために戦い、敵は悪い奴としか考えられない近視眼。私も偏見混じりになってしまいました。そういう心証を彼に抱いています。

「アースガルズの代表を加えて協議する予定なの」

背中を向けて去っていくアザトースさんを見送り、大きく溜息を付いたグレモリーさんが補足そして、そう言いました。

「アースガルズ？」

「いわゆる北欧神話さ」。

悪魔天使墮天使の他に、ギリシャ神話のオリュンポスや、アジア神話の属するシムセン、その他いろいろな勢力があるんだ」

金髪美青年の・・・確か名前はバキさん？とかなんとか言う方が解説してくださいましたが・・・やっぱりクトゥルー神話は入ってないんですね、当然ですけども。

・・・イゼルローンに置いてきたお父さんに今の会話聞こえてたらどうしましょう・・・最悪、冥界が今日で終わっちゃうんですけども。全然北欧神話と関係ない黄昏が冥界を飲み込んで闇へと溶かしちゃいそうなんですけど・・・気づかなかったことにして置きましよう。

「なるほど・・・ヴァーリを連れてった奴、孫悟空って言ってたもんな・・・あ、じゃあ協議って言うのはカオス・ブリゲードとの？」

「ええ、テロリスト対策よ。アースガルズを加えてのね」

兵藤さんの疑問にグレモリーさんが当然のこととして答え、その答えにまた私は頭を

抱える負のサイクル。

もうヤダ、なんでこの人たち目先の問題ばっか重要視して大切な基礎を疎かにしがちな・・・？

「この状況下で、また新たに新参者を対等な条件で参戦させるって・・・軋轢生じない訳がないじゃないですか・・・！ 本当になに考えてんですか魔王様は？ 味方を増やすために開いた会議が、味方が敵に回る口実に利用されるって本末転倒すぎるんですけど・・・」

戦争に目がいきすぎてる・・・カオス・ブリゲードへの対処を口実に、それに対処するには全種族が垣根を越えて協力しなきゃダメだという、自分の理想を実現する通過点と思いこんでしまっている。

数千年間続いた戦いを終わらせるための試練、もしくは種族間の抱える痛みと怨恨を断ち切るために絶対に乗り越えなければいけない、全種族共通の障害。

未来を勝ち取るため、過去を振り切るための聖戦。

――そんなもの、有りはしないのに。

――夢も未来も、それぞれが作っていく物で、与えられるべき物じゃないのに。

――押しつけがましい理想なんて・・・弾圧とやら代わり映えしないのに。

「――ほんっと、面倒くさい状況になっちゃいそうですよねえ・・・」

嘆息しつつ冥界の未来に思いを馳せていた私は、塔城さんの「外が・・・！」という
呟きで意識を現実へと引き戻すと、その直後に足下が消失するという珍事に襲われるこ
とと相なりました。

「……は？」

意識がブラックアウトする瞬間まではハッキリと覚えているのに、今行る場所には覚
えが全くない異常事態。

いやはや、魔法世界なんでもありませんね。これなら超科学相手でもなんとか戦え
なくはない・・・やっぱ無理そうですね。止めときましよう、うん。

「痛い・・・あ、どこだ!？」

「強制転移か・・・っ!」

「部長さんは・・・?」

「先生の姿も・・・」

「見あたりませんわ・・・」

つまり二人はグルだつてことですよ。

「ーそう言うおうかとも思いましたが黙ったとききました。これ以上めんどくさい事態はゴメンなので。」

「静かにしろ。ートカゲが来るぞ」

ゼノヴィアさんが緊張感のない声で静かに兵藤さんたちにとつての危機が到来したことを警告してあげました。彼女なりの優しさなのでしょうが、もう少し声に緊迫感を持たせないと、たぶん平和ボケした日本人には伝わらないと思いますよ？

がらがら、がらがらと小さな崖崩れを発生させながら、動く小山がゆつくりと姿を現します。

「ーードラゴンー」

翼があつて牙もあり、鱗の生えた尻尾と長い首。

何のひねりもない見たまんまのドラゴンさんがそこに立っていました。

そして、攻撃。初手は火炎のプレス、炎の息です。

「ーー！ どうやら味方じゃないみたいだね・・・！」

「つ！！ 子猫ちゃん、いけない！」

バキさんが応戦体制に入った途端に塔城さんが一人で突貫。小さな拳でドラゴン相手に肉弾戦を挑みまーって、それいくらなんでも無謀すぎませんか？ 威力がどうの防御力がどうの以前にリーチの問題で。下手したら届く前にはたき落とされますよ？

ハエみたいに、ぺちつと。

ぶうんっ！

案の定、尻尾に迎撃されて敢え無く沈む塔城さん。初見の強敵にいきなり拳で突っ込んでいたら、そりやこうもなりますよね。

「部長がご不在故、わたくしが指揮を執りますわ。祐斗君とゼノヴィアちゃんとイリナちゃんはドラゴンを引きつけてください。イツセーくんはその間にセイクリッド・ギアを。アーシアちゃんは子猫ちゃんを。わたくしと天野さんは上空より支援に回ります」

『はい、副部長！』

姫島さんの号令の元、一丸となって行動するオカルト研究会の面々。

ーそう、オカルト研究会の面々は彼女に従いました。ですが、残る三人。私も入れれば四人。これら異分子とも呼ぶべき部外者たちの反応は……

「拒否する。詰まらん戦に振るう剣など持っていない」

「私もパス。セレニア様以外の命令受けて戦いたくないしー。やりたい人たちだけで勝手にやればって感じかなー」

「私も不参加ですね。この場にある帝国軍最高指揮官として皇帝陛下をお守りする義務を優先させて頂きます」

「「なっ!?!」」

オカルト研の皆さんが驚愕の表情を浮かべて私たちを見ます。何を考えているんだと言いたげな表情で。

それに対する私の返答は。

「戦いたくないと言ってる人に対して無理にでも戦えと命令できるほど、私は傲慢にはなりきれそうにありません。本人の意思で戦いを望むなら止めませんが、そうでないのなら自己責任で自由意思のもと選択の自由を行使してください。私はそれを尊重します」

「くっ……っ！」

姫島さんの浮かべる苦悩の表情は切実で、これが如何に不味い状況かを物語っています。

ーが、ハツキリとぶつちやけちやてしまえば天野さん一人でたぶん勝てるんですよ、この大きなトカゲさん。だって、模擬戦闘で似た様なのと何度も剣を交えてましたし。

“科学では解明できない過去を司る魔術と、魔術では到達できない未来人類の技術を積み重ねる。それら双方が繋がりに至った究極の到達点『帝国魔導学』”

化学の成績は悪く、魔術にいたっては完全にズブのド素人でしかない私は黙って首を振る機械と化して説明を聞いてたシステムですが、あれよく考えるとすごい発明ですよ

ね。一定空間内限定とはいえ、ドラゴンだろうとダンジョンだろうと過去の歴史だろうとも再現できてしまうんですから。

・・・理屈はゼーんぜん分からなかったですけども。

ーとはいえ、今の姫島さんがその事実を知るはずもなく、苦戦を承知で保有している戦力のみでの対処を迫られる結果となったのでした。

「ちつ、やるしかないか・・・ブーステッド・ギア！」

真つ先に割り切って突撃したのは予想通りに兵藤さん。考えるよりまず行動な点はこの際評価できます。考えてもどうにも成らないときは動いた方が良い。

こうして始まるドラゴンVS駒王学園オカルト研究会による壮絶な戦い。

それを見守りながらーもとい、飾らずに言えば見物しながら、私たちは偉そうに論評を交わし合っています。

「それぞれの能力は一流の域に達している、もしくは達する可能性を示唆して余りあるな。」

・・・まあ、今はまだ些か以上に拙い腕だが・・・」

「でも、実戦経験少な過ぎでしょ。あれじゃ新兵のダンス以下よ。アヒルの行進だわ。」

どうせイツセー君のブーステッド・ギアしか切り札持って無いんだから、それ以外の全てをブラフか陽動に振り分けた方が得策じゃないのかしらね？」

「二理ありますわね。ですが、彼らはあれが持ち味であり強さの秘訣。個性の強さがそのまま戦闘力に反映される特殊な戦士たちです。

極論するならば、一人一人は何ら恐れるべきモノを持たない、ただの雑兵にすぎません。集団でこそ力を発揮し、集団でしか力を発揮できない家族単位の組織なのです。

結局、どこまで行っても彼らはリアス・グレモリー個人に仕えているだけの私兵集団に過ぎず、国や国王に制御され、統制された軍隊ではない。

一人のために国家と戦うことはできても、国家のために国家と戦うことができない。戦士であっても兵士ではない。軍人とはどうてい呼べませんし、呼べるようになる日は永遠に來ない。

その程度の相手ですわ」

「ー言いたい放題だなあ、おい。

こっちは見ているだけなのにねえ……。

「よーし、そこまでだ」

「部長と、先生!?!」

聞き覚えのある中年男性の声と兵藤さんの声で我に返り視線を彼らに戻すと、いつの間にもやら戦闘は終わっていたらしく、崖の上にアザトースさんとグレモリーさんが立つて苦戦の末倒れた兵藤さんを見おろしてシニカルな笑みを浮かべていました。

「このドラゴンが悪魔あ!?!」

『久しいなあ、ドライグ』

『ああ、懐かしいなタンニーン』

アザトースさんから事情を（この戦闘が彼らを鍛えるための茶番であり、グレモリーさんから許可も得ていたことなど）聞き、ついでにタンニーンとか言うらしいドラゴンさんの曰くありげな過去についても少しだけ触れてから、話は本題に入ったみたいですね。なんかシリアス風味です。

『ふん、サーゼクス殿の頼みだと言うから特別に来てやったのだ。その辺を忘れるな、墮天使の総督殿』

「みんな、怪我はない？ ごめんなさい、あなたたちを騙すような真似……。私は反対したのだけど、お兄様まで賛成してしまって……。」

「こいつらの力が伸び悩んでいるのはリアス、お前のその甘さと迷いにも問題があるんだぜ」

「迷ったことなんか……。!」

「不意をつかれてどこまで力を出し切れるか、ちゃんと確認しておきたかったんでな。」

おかげで今後の修行方針が決まったよ」

「墮天使が考えそうなことですわ」

「俺はお前等を強くするためなら何だってする。なにしろ、先生だからな。」

「——ついでに言えば、その嬢ちゃんも真つ先に俺の思惑に感づいてたぜ？ 事が始まる前から「今度は何企んでんの？」って目を隠さず向けてきてた。」

お前らに足りないのは、そういう考える頭だつて事さ」

「……………」

私を引き合いに出されて場の空気を悪くされると、私がやたら責任感じるんですけども……。しかも、フォローもできないポジションってどうよ？ すごい最低じゃない？

「やい、ドライブグ！なんで先に知り合いだつて言わねえんだよ！」

『端から茶番だつて分かつてることに俺が口出ししても仕方なからう』

「ちやばん？」

『タンニーンの奴、力の千分の一も出してなかつたからなあ』

はあ、あれで千分の一以下なんですか。スゴいのかスゴくないのか基準が分からないので良く分かりませんが、とにかく訳わかんないことだけは分かりました。

とこころで——

「さっきから気になってたんですが・・・タンニーンさんより大きい生物って、この山には住んでないんですか？」

「「は？」」

「大きい生物ですよ。ああ、いえいえ、ドラゴンである必要性はありませんよ？ ああ言うのが非常に珍しい奇種だつていうのはいい加減理解できましたし。ドラゴン以外でドラゴンより大きな生き物ってこの小山には住んでないのかなあと」

「「ドラゴン以外でドラゴンより大きな生き物・・・？」」

その場にいる全員が首を傾げて考え出します。

「やばい、思考の袋小路に迷い込ませちゃったでしょうか？ 早めに解消した方が良いでしょうかね？」

「ドラゴンより大きな・・・おっばい？」

「イツセー先輩は黙っててください。・・・でも、そうですね・・・ドラゴン以外では例えばクラーケンとか海の生き物になるような・・・」

「あと、考えられるのは巨人族だね。これも非常に大きくて多種多様な見た目を持つてる」

「それはともかく、どうしてそんな生き物をお探しになってますの？ 普通の人間が出

会うことばど一生に一度たりとも無いでしょうに・・・」

親切にも皆さんからアイデア提供していただき感謝していると、姫島さんが疑問の声を上げました。そこで私もハツとなり、「そう言えば紹介していなかったですね」と後頭部をポリポリしながら恥ずかしさを紛らわし、一步引いて彼を登場させるスペースを用意します。

「実は、お見合いの仲人を頼まれました。彼の同族を探してたんですよ」

「お見合い？ 同族？」

「はい。今から紹介しますね。」

「こちらが最近知り合ったー」

空間に入れた切れ込みから、にゅつと出てきた巨大な眼球が彼らを見つめ、

「.....」

硬直する彼ら（タンニーンさんも含む）を後目に、見上げるほどの巨人が徐々に全長を表していきます。

全長数十メートル。十五メートル程度のタンニーンさんだとちよつとだけ背が足りなくて並べない、青白い身体。丸い頭部に巨大な眼。人間と同じ二本の腕と五本の指。そして、魚のような下半身。

見れば見るほど雄大な姿形を持つ、まさにこれぞ人魚と呼ぶべき異形。

「ヒトガタのガツタくんです。数日前、深海探査艇での深海調査中、偶然出会ったので逆ナンしてみました。見た目に違わずシャイな方で、人生初ナンパの私には正直ありがたかったです」

『『☆※×●△↓!?!』』

おお、なんかいきなり全員外国人に。・・・ドラゴンが話す外国語って言うのも以外と乙なものです。これもひとつのワビサビ？なのででしょうか？

「い、一誠君！　ここ、こういう動物の類は君の得意分野だろう？　ほら、昔犬に良く懐かれたって話をしてくれたじゃないか！

——だから、アレもその要領で行けばあるいはー」

「ししししてない！　そんな話はしたことないし、しててもしていない！　あと、アレと犬を同列に扱うのは無理がありすぎる！　絶対に別モンだぞアレ！

——そもそも、生き物かどうかも分からねえ地球生物ってなんだよ!?!」

『い、いや落ち着け相棒！　それを言うならアレは本当に地球の生き物なのか?!』

俺の数千年にわたって蓄積された記憶の中にあんなキテレツなモンが入ってた事は一瞬たりとも無いはずなんだが!?!』

『わ、私としたことが・・・。腰が抜けて動けない・・・』

「ち、ちよつとタンニーン!!?　あなたそれでも聖書に記された悪魔なの！　しやつきり

しなさい！そして立つて戦いなさい！

「あーあの訳わかんない正体不明のナニカと全力で。私たちがお兄様の元まで逃げ切るまで体を張って……！」

『はらはらはらはら！ 人を捨て駒の肉壁にしようとするな魔王の妹！』

あと、どんな理由があろうともアレと戦うことだけは拒否する！ なんかこう……訳が分からんから！」

なにやら背後で皆さんが混乱しまくっています。

それにしても、ずいぶん良いようですね。会ったばかりの人に向かって「訳が分からない」なんて。しかも、言うに事欠いてその理由が「自分の知ってる知識にないから」とは……つくづく傲慢きわまりない考え方です。

ここは説明して分かり合って頂くしかないでしょう。

誰でも最初は相手を知らないのです。知らない相手とは仲良くなれないと言っているのであれば、知り合った後で仲良くなればいいだけです。

「彼の種族、ヒトガタはニンゲンとも呼ばれている北極や南極の海で目撃された事例のあるUMAAー未確認生物です」

「UMAA!? 今、ユーマって言いやがったのか、このイカレ民主主義者!?!」

「あ、すみません間違えました。既に今、私たちが彼のことを知っているのでUMAAでも

未確認生物でもありません。ただの確認された生物です。そこいらの犬さんや猫さんと同列に扱っても良い、普通の生き物ですよ」

「犬猫がこんなに気持ち悪い姿してて堪るか、クソボケええええ!!」

「む。失礼ですね、彼は深海5000メートル超えたあたりから生息し始める生物たちの中では格段に流麗なシルエットをした生き物だというのに・・・」

「ちよつと待て! 今、聞き捨てならない一言が混じっていた気がするぞ!」

「ーもしかしてあれか。こいつみたいなき生き物が地球の深海にはまだ他に居るか・・・?」

アザトースさんが冷や汗を浮かべながら当然のことを確認してきます。

見ると、他の皆さんも一様に青い顔して私の返答を待ちわびて居られる様子。

やれやれ・・・そんなに期待されても、私にはごくごく平凡で当たり前な常識的回答しか持ち合わせがないんですが・・・。

「もちろん居ますよ、いっぱい。当然じゃないですか?」

海は広く、深い。月までの距離、およそ380,000kmにたいして深海はたったの1万メートルしかありません。

ですが、人類で初めて月に到達したアポロ11号使っても深海には到達できないんです。海は謎と神秘と生物の宝庫なんですよ。

——なので、これくらいの生き物はそれこそ山のようにいまー」
 『ぎやああああああああああつ!!!』

．．．．．皆さん、走り去つてしまわれました．．．。

何がいけなかつたんでしよう．．．？ ガツタ君は．．．別に問題ありませんね。
 特に危害を加えたわけでもないですし、大人しくてよい子です。

．．．では、なぜ．．．？

「うーん、どうして皆さん、ああも驚き戸惑っていらつしやるのでしょうか．．．？」

ガツタ君には分かりますか？」

「．．．異住さん、皆さんはきつと照れ屋で恥ずかしがり屋さんなだけです。初めてあつた僕に緊張してしまっただけで、決して悪意のある行動だつたとは思えません。

どうか彼らを、許してあげてください。そして、今まで通り仲良くしてあげてください。微力ではありますが、僕もお手伝いいたしましょう」

「ガツタ君は優しいですねえ。では、とりあえず彼らの向かつた先ーおそらくグレモリー本宅でしょうーに私たちも向かいますか？」

．．．いきなりで不躰ですが、エスコートをお願いしても？」

「僕でよろしければ喜んで。」

それではお嬢さん、お手をどうぞ」

かくして私が冥界に到着したその日のうちに、本来オマケでしかなかったはずの私の顔がデカデカと冥界中のテレビに映し出され、「海魔王」の名を連呼する叫びにグレモリー領全体が包まれることとなるのですが、それは幕間の民間に流布した都市伝説。決して大筋と関わり合うことはない外伝にすぎない話です。

「私、セレニア様が崇拜されるのは能力だけが理由じゃないって、今ハッキリと分かりまくったわ」

「なんだ、イリナ。今頃分かったのか？ あのお方はお前如きの常識で計れる方ではないぞ。」

「ーなにせ、世界の法則すら飛び越えていることに気づきもしない、マイペースすぎるお方なのだからな・・・」

「マイペース・・・良い言葉ですね。それに便利な言葉でもあります。」

「ーそれ以外、あの方の性格を表現する単語が存在していませんから・・・」

「「まったく・・・陛下の支配領域はどこまで広がっていくのか我々でも予測が、全くつけられない・・・」」

宇宙に混乱と恐怖と悪夢をバラマキまくる事を活動方針にしている帝国軍の大幹部三人はそろって嘆息し、自覚のない我々が総大将、宇宙の法則をごく自然に無視する少

女の後ろ姿を見送った。

：・ 確実に人里が大パニックに包まれることを確信しながら、ヒトガタの頭上にちよ
こんと座る行儀正しい幼い主に対する新たな畏怖に頭を深々と垂れながら――。

つづく

10話「動乱の予兆を告げし（自称）凡人」

『リアスお嬢さま、おかえりなさいませっ！』

怒号のような声が轟くと空には火花が打ち上げられ、兵隊の皆さんが空砲で祝砲を放ち、軍楽隊……ではなくて普通の楽隊っぽい悪魔さんたちが一斉の音を奏で始めて、空にはブルーインパルスもどきがアクロバット飛行っぽいを行っています。

この世界の基準が私の中でのみ狂いだしてから、早数週間。

正直、これを初めて見た私の感想は「シヨボいなあ……」だった瞬間、私はもう日常には戻ってこれそうにないなど、確信できました。

同時に、隣に目と口を丸くしながら突っ立っている兵藤さんとアルジエントさんたちの方がよっぽどマトモな反応の仕方をしてらっしゃって羨ましいなあとも。

（速度の基準が「光」になっちゃってますからね、最近の私は。キロだのメートルだのではよく分からないです。重症すぎますね、精神病院行きたいです。

……でも、行ったら行つたでその場所の名前は「ピースリー臨床心理学診療所」なんでしょうからねえ。行く気しないと言うよりかは、絶対に行きたくありません。

悪夢の世界で悪魔の作品をこれ以上浸食するのは、断じてNo.)

心に決めつつも私は、それが無理だと言うことも何となく分かっています。

ーだって、つい三十分前に起きた都市全体規模の集団ヒステリーが、今では影も形も残ってませんから。なにをしたのか、なにかされたのかさえ分からないし分からせない存在が現れている時点でハイスクールD×D世界は間違いなく、終末へと向かっています。

いずれ訪れるであろう末世に対抗できるのは、原作主人公である兵藤さんだけ。

期待させてもらいます兵藤さん。頑張ってください。

……まあ、おそらく元凶の大本は私なんですようけどね……。

『リアスお嬢さま、おかえりなさいませ』

どこぞの伊集院家にでも雇われていそうな執事&メイドさんたちがズラリと揃って頭を下げ、その列の前を悠然とした步調でグレモリーさんが歩んでいきます。

「ありがとう、皆。ただいま。帰ってきたわ」

満面の笑みで返す彼女に笑顔で応じる使用人ご一同。それを見て天野さんが「ちつ」と小さく舌打ちするのを目で咎めてから、私は意識を前へと戻します。

気持ちは分かりますけどね。使用人が主に対して示す礼儀としては馴れ馴れしすぎ。鼎の軽重が問われます。

ましてや今は戦時体制のほず、指導者一族が軽く見られて良い情勢であるはずは断じ

て無い。にも関わらず無駄と浪費の象徴とでも呼ぶべき主の帰還祝いの盛大さ。改めてこの世界、いえ、悪魔の皆さんが戦争慣れしていないことを示した一幕でした。

「お嬢さま、おかえりなさいませ。お早いお着きでしたね。道中、ご無事でなによりです。」

さあ、眷属の皆さまも馬車へお乗りください。本邸までこれで移動しますので」

「・・・飛竜があるにも関わらず、馬車で本邸まで移動・・・ねえ・・・」

相手には聞こえないような気を使いながらも私は小声で低く呟き、小さな溜め息を一つつきました。

あくまで好みの問題ではありますが、私は銀河英雄伝説に出てくる銀河帝国があまり嫌いではありません。これは私がゲルマン風の物を好む傾向にあるからで、門閥貴族たちを含む腐った帝国の有り様が大嫌いなことに嘘偽りはないのです。

その中の一つがこれ、広すぎる宮殿内を馬車で移動するという伝統儀礼。

平時であるならば気にしませんし、むしろ正しいあり方だと思えます。権威によって立つ国である以上は権威を貶めるような行為は慎むべきであり、伝統が最大の武器となっている帝国においてマナー違反こそが最大の敵。

規則を守るのではなく、自らが一方的に守らせることこそが伝統であり力の象徴。不公正な社会体制であることが前提となっている国なら尚の事です。

ただしこれは平時の間でのみ。もしくは、最低でも余裕のある間だけにしていたきたいですね。いやこれマジで。

戦時下への移行が急務となつてはいるはずの冥界本国、その政治中枢たるノイエ・サン・スーシー……もとい、魔王様の居城が座する城下町。

だと言ふのに穏やかすぎる日常風景からは悲壮感が見られず、安堵しているというよりはかたは弛緩している、抜けている風に見えてくる表情はいったいなんなのか？

答えはおそらく単純明快。魔王陛下は自分が愛する国民の皆様方に真実をろくに話しておらず、適当な都合のいい情報だけを与えて民心の安定化を図つていたのでしよう。

当然、それに伴つて各地の関所や交通機関は規制されているはず。外部から真実を持ち込まれては元も子もない。知つては口は少なければ少ない程良く、余計なことを言う者を生かして此処から出さねばそれで済む話。

……とまあ、そんな楽観塗れの想定で戦争を推移させ、最終的には兵藤さんの力を用いて自らの理想を達成する算段なのでしょうねえ。

苦勞知らずで戦争を知らない世代が考えそうな青写真であり、捕らぬ狸の皮算用の局地でもある最低最悪な戦略構想に、彼がカオス・ブリゲートの戦力と実力をどれだけ低く見積もつているかが読み取れます。

所詮は寄せ集めのごった煮テロ組織。負け犬どもが徒党を組んだだけで統制もろくに取れていない烏合の衆。正規軍を持ち、名門大悪魔を多数擁している正当政府軍が負けるはずもないと高を括っているのかも知れません。

「やれやれ。先が思いやられるとはこのことです。戦争指導者に当事者意識が欠落しているなんて、最低すぎる事態にも程がありますよ。戦争指導者に当事者意識が欠落して

・・・出来るならば帝国軍は動かさずに終わらせたいんですけどねえ・・・」

出せばやりすぎるのが確実な超問題児集団「混沌帝国軍」。奴らは何をしでかすかわかりません。私が率いているはずなのに、皇帝である私自身が彼女らをなにとつ理解できていないという絶対矛盾。誰かタステケー。

「セレニア様、どうやら到着したようです。下車するご準備を」

「・・・ん、もう着いたのですか？ 意外と早かったですね。馬車にしてはですけども」
「そうでしょうか？ むしろわたくしめには、遅すぎだと思われて成りません。」

我が帝国の臣民が日常的に使っている一般車両『ネフレン・カー』でさえ、最低時速はマツハ3を越えておりますのに」

「うん、それ乗ったら私確実に死んじやいますから、こちらでいいです」

落ち込む天野さんですが、知ったこつちやありません。ドライブに連れられて到着し

たら死んでいたとかシャレにならなすぎでしようが。絶対に、死んでも乗らん。

「しかし、それにしても小さな城だな。新たに建設した新要塞ガルミツシユよりも小振りじゃないか。慎ましいにも程がある。

どうせならばアポイタカラやヒイロカネなどの七色鉱を各所に配し、巨大な炭素ダイヤモンド塊を中心部だけ削り抜いて建設させた壮麗なる大墳墓の方が、私好みなのが」

「ふっふーん、相変わらせずゼノヴィアの趣味趣向って獵期的な所があるわよねえ。少しは私の女の子らしさを見習って淑やかさを身につけなさい。

私の行ってみみたい宮殿ナンバーは、なんも行っても月霊山脈！ 侵入者が足を踏み入れれば踏み入れるほどに侵されていく、身体を樹化するムンバの呪いは最高のエンターテインメント！

禁忌を侵した愚か者どもに永遠の苦痛と苦しみを！ 死ぬことすら許されない絶望を！

この世に救いなど無いのだと言うことを骨の髄まで味合わせられたら、きつと愉しくて、スツゴク嬉しいと思うんだけどなあ〜♪」

どっちもどっちな方々でした。つまりはどっちも、救いようが無い。

放つとく以外に何も出来そうにもないので放っておきましょう。

「それにしても豪華な庭園ですね。花々が咲き乱れる中に綺麗な噴水があり、様々な種類の色とりどりな鳥たちが飛び回ってます。……まさに権威と浪費の象徴ですね、気色が悪い。

下々の者たちが貧困と飢餓と戦災に喘いでいる中でまったく、いい気なものですよ」
吐き捨てるように呟き捨てた私の声にらしくない悪意を敏感に感じたのか、天野さんが側に寄り添い軽く私の右手に触れてくれました。

臣下として主に出来る最大限のスキンシップで気を紛らわせてくれたのでしょうか。有り難いことです。

彼女に目礼した後、私たちもグレモリーさんたちに続いて城内へと入場しました。

「リアスお姉さま！ おかえりなさい！」

「ミリキャス！ ただいま。大きくなつたわね」

入ってからしばらくたった頃、ズラリと並んだメイドさんたちの列からグレモリーさんと同じ色の髪をした少年が飛び出してきて、彼女に体当たりをぶちかましました。どうやら彼女の甥っ子さんのようですね。

世間知らずであるが故の純粹さと気位の高さを感じさせ、一般市民代表格の一人である私としては大変に不快な少年です。紹介によると彼は魔王陛下のご子息であり、グレモリーさんの甥に当たるようですが……これって今後火種になつたりしませんかね？

家長が死んだ後の後継者争いとか、マジで嫌なんですけども。

なぜに次期当主となるべき長男を手元に置いたまま、実妹の方を人間界の領地にやる。

本国から遠く離れた飛び地で反乱企てるとか、えげつない臣下たちの陰口の種を与えてやつてる現魔王様は、本当に魔王職が向いてないんだなあと痛感させられるーシーンでした。

「魔王の名は継承した本人のみしか名乗れないから、この子はお兄さまの子でもグレモリー家なの。私の次の当主候補でもあるのよ」

「……はっ？　ち、ちよつと待つてくださいグレモリーさん。まさか悪魔の貴族つて、長子存続が基本じゃないんですか？」

「??　ええ、そうよ。そう言えばあなたには説明していなかったわね。ちようど良い機会だし、軽く説明しておくけれど……」

それから始まったグレモリーさんによる冥界の権力機構とその成り立ち。ついでに、現在の支配階層の代替わりが近づいていることも含めて、頭が痛くなること天こ盛りな情報開示でしたよ……。

「はあ……。なんで全ての勢力がほぼ同時に、それも予め示し合わせてでもいたかのようないタイミングで動き出したのかずつと不思議に思ってたんですが……。今ので疑問は

完全に解消されましたね。

尤もそのお陰で、さらに馬鹿でかい問題が山積しちやっただけですから善し悪しですけれども」

「なんなのよ、さつきから。なにか分かったのならちゃんとした私たちにも分かるように伝えなさい。

「独り合点で突っ走りたがるのは、あなたの悪い癖よセレニア。直しなさい」

お前が言うな！・・・と、心の中では絶叫しつつも表面的には吐息を一つついただけで終わらせます。人間関係がどうかではなく、単純に疲れ切っていたものですから・・・。

「はあ。あのねえグレモリーさん。あなた今がどれほど危険な状況にあるか分かってらっしゃいますか？ 明らかに冥界全土が戦火に見舞われかねない大惨事の予兆が目の前で起こっているんですよ？」

それなのに愛だの恋だの夏休みだから帰省だのと、子供じみた戯言を・・・全くもってくだらない。くだらなすぎです」

周囲の雰囲気途端に重くなりました。バトルマンガのキャラだったら「突如として殺気が満ちた」とか表現できたのかもしれませんが、あいにくと体育の成績は1か2しか取ったこと無い私には生涯無縁な感覚ですよ。

「・・・随分な言いようねセレニア。それで？ 何故あなたはそう思ったのかしら？ 参考までに聞かせてもらえる？」

「勿論ですよ。・・・と言つてもこの程度、少し考えれば子供でも分かるレベルなんですけどね」

頭にピキリと怒りマークを浮かべたグレモリーさんを無視し、私は近くにあつたソファに座つて現在の状況を纏め、簡単な状況説明及び今後の戦況変化を予測していきました。

戦略シミュレーションゲームより簡単な作業だったので楽で良いです。

・・・これから行われるであろう実際の戦争の方も、これくらい楽だと良いんですけどね。

「太古の昔に行われた大戦で死亡した初代魔王陛下。その跡を継いだのは当時の有力者たち四名、これが現在の四大魔王様方ですね。

さらには四大魔王方も含めて魔王陛下も代替わりを繰り返し、今では他の種族と三姉妹の関係の中にあつて悪魔が一番力が弱い。

最後になりましたが、後ほど開かれるという若手新鋭悪魔たちによる顔合わせの会合。顔合わせと言うことは、ほとんどのメンバーが初対面であり、魔王陛下の催されるパーティーに招かれる次点で全員が名門の出なのでしょう。

「――正直、これほどイヤな記号に満ち満ちた状況は、人類史でもあんまり見かけたことはありませんね」

「……なんなのよ、さっきからいったい。言いたいことがあるなら、ハッキリとおっしゃい」

「では、遠慮なく。」

「――近々四大魔王家のどれか、もしくは幾つかが裏切ります。大王家もまた例外ではありません。冥界全土を覆う冥界戦国時代の幕が、まもなく切つて落とされることでしょう」

.....

突如として落ちた完全なる沈黙。誰もが酸素を求めて顔を青くしている中で、私たち混沌帝国勢だけが普段通りの態度で過ごしていると浮くなあー。まあ、いつものことなんですけども。

「.....どういう.....事なの.....?」

絞り出すかのような苦しい口調で問うてくるグレモリーさんに「あなたも次期当主として、少しは自分でも考えなさい」と突き放したくなる欲求をかうじて抑え、私は最大限抑えた声で説明を続けます。

「もし仮に私が若手新鋭悪魔の一人で、現魔王の地位にあるサーゼクス様の実家グレモリー家に勝るとも劣らない、最低でもそれに次ぐ地位と名誉と伝統を持つていた場合、必ずヤカオス・ブリゲードに加わり、魔王陛下弑逆に荷担します。

その際には古い先短く、さして待たずに魔王の地位を譲り渡してもらえる父親をも唆すでしょう。

『我が家こそが魔王の地位に在るべきです。栄えある魔王の地位にありながら悪魔勢力を衰えさせた僭王ごときが座り続ける事など、断じて許されて良いはずが御座いませぬ！』

父上！ なにとぞ御手で持つて冥界に正しき秩序と正当な魔王家による統治をお敷きください！ 及ばずながら私も共に参ります。死ぬときは一緒、共に王道楽土と地獄へ続く道を走り抜けましょうぞ！

魔王サタン様も御照覧あれ！ 正義は我らにこそあり！』

・・・とまあ、こんな感じで」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

先程よりもなお重くなった沈黙を振り払う義理もなく、私は普通に椅子の縁に肘を乗せ、手のひらの上に顎を乗せた行儀の悪い姿勢で話を締めにかかります。

「経験の少ない優秀な若手が、身の程知らずな野心を持つのはよく有ることです。そして彼らが同僚を仲間ではなく深刻な競争相手と見なすこともまた然り。

野心家は安定よりも変化を、平和より乱世をこそ好みます。それが栄達の速度をはやめ、その幅を大きくすることを彼らは知っている。

生きた実例が赤竜帝という形を取って顕現してるんですから、間違いありませんよ。目の前には栄達へと至れる階段がある。上るのに必要なのは勇気と覚悟と実力だけ。

若さ故に恐れ知らずな人なら上るでしょうね、ほぼ確実に。

ましてや手に入るかもしれない栄光が栄えある魔王の地位と、憎き現魔王陛下の首と来たらもう・・・そう考える跳ねっ返りは必ず出てきますよ、間違いようもなく絶対ですね」

過去に見てきた物語と、前世から引き続き勉強している世界史日本史。どれも全てが同じ回答を導き出している。どれも全てが同じ回答以外を導き出してくれません。

「旧魔王さまの居られたとかいう縁起の良い都市を会合場所に選んだのですが・・・気をつけてくださいいね？」

案外、清洲会議が起こるかもしれませんよ・・・？

ああ、いや、これは違いますね。すいません順序を間違えました。正しくは『本能寺で魔王が焼き殺された後、後釜を決めるために清洲会議が開かれるかもしれませんよ』でした。

大事なことを忘れちゃってごめんなさい。王様が存命なのですから後釜について語るためには、まず王様を殺す手段について語り合っている可能性について伝えるべきでした。

文法を選び間違えてしまい、まことに申し訳御座いませー」

「ぶ、部長!? どうしたんですか! どうしちやっただんですか!?

なんだか目線が合っていないんですけど!?!」

「遙かなる・・・天使の歌声・・・ゼノ・・・ギアス・・・」

「いけない! 言霊中毒だ! それも、かなり重度のだ!

誰か! 医者を呼んでください! 早く優しくて甘い言葉の海に溺れさせてあげないと、大変な状態に!」

「ちよつ、木場おまえ、部長をどんな目で見てたんだよいったい!」

「一誠君！事は一刻を争うんだ！」

僕は見た、知っているんだ地獄の味を。

誰もいったことのないような遠い場所に、ひとりぼっちで居させられる辛さが君には分かるって言うのか一誠君！」

「ちよ、え、は？ 木場、お前なんで血の涙流してんの!？」

なにがあつたの!?! なにかあつたの!?! 俺の知らないところで、いったい何がどうなつていたんだあつ!?!」

「……あれえく? シリアス空気が霧散しちやいましたけど、私はどうすれば宜しいのでしょうか？」

「「笑えばいいと思います（思われます）」」

無理です。表情筋的に。

つづく

11話 「ノリノリ夕麻ちゃんによるスパルタ特訓！」

「おりゃああああっ！」

『エクस्पロージョン!!』

セイクリッド・ギアから増大した力が俺の身体に流れ込んで、一気に身体能力が向上した！

ドツ！ ゴオオオオオオオオツ！

「いい一撃だ。最初に出会った頃に比べると、確実にドラゴンの力が高まっている。体力も申し分ない。俺との鬼ごっこも一日ぶっ続けできるほどだ」

珍しくタンニーンのおっさんが誉めてくれた。

俺は肩で息をして、腰の水筒をあおると一息入れて休憩に入る。

ーっ、疲れた……。さすがに都会育ちの俺には、いきなりの山籠もり修行はキツすぎるぜ……。

空を見上げながら今までのことを思い出していると、どうして自分がこんな場所にいるのかという根本的な疑問にぶち当たり、嫌なことを思い出しちまった俺は苛立ち紛れに近くにあった石を殴りつけた。

あつさり砕けたそれに自分の実力が確かに上がっていることを実感できたのは嬉しかったが、この程度じゃ全然駄目なんだということも思い知らされる。

若手悪魔たちとの会合。そこで会ったスゲー強そうな若手たち。

俺は部長のためにもあいつらと互角に渡り合えるようにならなくちゃいけないし、なによりも会長とのレーディングゲームの日取りが近い。焦ったって仕方がないと分かっちゃいても、落ち着かない。

「おまえも今日までよくやった。ーしかし、残念だったな。もう少し日があれば可能だったかもしれないが、バランス・ブレイカーの解放までには至れなかった。

明日で修行は終わりだが、それまでに覚醒するのは・・・おそらく無理だな」

タンニーンのおっさんは息を吐く。

ああ、わかっていているから気にすんなって。俺は期日内にこなせなかったが、体力も何もかもが以前より向上してる。絶対に会長たちとのレーディングゲームには、負けたりしない。

二十日前から始まった、タンニーンのおっさん指導による俺のバランス・ブレイカー発動のための修行はー目標をこなせずに終わってしまった・・・はずだったのだが・・・

「やつほ♪ こんばんは、イツセイ君。元気だった？」

「ゆ、夕麻ちゃん!? なんでこんな所に!?!」

十日以上もの間寝床として使っていた山の中の開けた場所に、ひっそりと燃えてる小さな焚き火。その淡い光に照らされながら俺に笑いかけてるのは夕麻ちゃーいや、墮天使のレイナーレだった。・・・たぶん。

正直、この件に関して俺は未だに自分の中での結論が出せないでいる。

見た感じは完全に出会った頃の夕麻ちゃんで、性格的にも優しくしてお淑やかで少し茶目つ気もあつて気安いところなんかはまさに彼女のそれだと確信できるんだけど、時折見せる墮天使の時以上に冷酷で怜悧で覚悟に満ちた強い眼差しが、今の彼女が天野夕麻ちゃんなのか、それとも墮天使レイナーレなのかの判断を、曖昧にせざるを得なくなっている。

俺たちに向けてくる眼差しにも敵意はなく、ニコやかな笑顔で親しげに話しかけてく

る姿も日常茶飯事になっていて、堕天使だからと警戒心を溶かすことが出来ずにいる部長でさえも、最近では彼女を邪険には扱わなくなつた。せいぜいが無視する程度で収まっている。

元カノと今カノの間でゴタゴタするのはごめんな俺としては、正直ありがたいんだけど、彼女が今どっちにいるのかはずっと気になり続けていたのは確かだ。

よし。なんの用でここまで来たのかは分からないけど、ここは一世一代のチャンスとして聴いてみよう。・・・そして、シヨックな答えだったら明日再会したときに、部長にめいっばい慰めてもらうんだ♪

「うーん、バランス・ブレイカー発動のために修行してたみたいだけど・・・ダメだったみたいだね。ぜんぜん龍気が感じられない。これだとまだ白龍皇くんの方がマシなレベルかな？」

「ーはあ。なんだか期待して損しちゃったなあ。もう少しは覚悟と勇気がある男の子だと思つてたのに・・・過大評価だったみたい。ざくんねん」

「ーえ？ 今、タ麻ちゃんなんて・・・」

『ほう。分かるか小娘。確かに今回の修行で小僧は強くなつた。体力も付いたし腕力も上がったのは間違いない。』

だがそれは、あくまでも転生悪魔として本来持っている地力を引き出せるようになって

たに過ぎん。赤龍帝、ウエルシユ・ドラゴンから引き出せる力の量には然程の変化は見られていない。

現白龍皇が本当に『ジャガーノート・ドライヴ』を扱えるのだとしたら、確実に小僧の方が負けるだろう』

「ちよ、ええええええええええつ!!」

聞いてないしその話!

え? うそ? 俺って大して強くなつてなかつたの? この二十日間にわたる修行の成果は? 山籠もりで得た力と、溜まった性欲はいつたいどうすればいいんだあーっ!!

「やべえ! マジでやべえよこの状況!

つか、子猫ちゃんの件もあるって時に、なんで次から次へと厄介ごとが持ち込まれてくるんだ!」

くそつ! まだだ、まだ死ねない。俺には叶えなきやいけない夢があるんだ!

ハーレム! 上級悪魔昇格! 部長と朱乃さんと子猫ちゃんとゼノヴィアとアーシアトそれからそれからー数えきれん!

とにかく俺は、いっぱい女の子とイチャイチャして生きていきたいんだっ!

こんな所で死んでたまるかあああああつ!!!

こうなったら、やっぱりおっさんみたいに最上級悪魔を目指しちゃうぜ！ 転生悪魔だつてわかつたのはデカいぞ！ 成せばなる！ やつてやれないことは無しだ！

「ーはあ……。やっぱりこの程度だつたんだ。念には念を入れて来てみて良かった。どうやらギリギリ間に合つたみたい」

「え？ タ麻ちゃん？ どうかしたの？ なんか顔がちよつと怖く見えた気が……」

「タンニーンさん、イツセイ君を少しの間お借りしますね。せめてバランス・ブレイカーぐらいは使えるようになってもらわないと、私が見ていてもおもしろくないですから」

「ちよ、え？ タ麻ちゃんーぎやあああああつ!?!」

「男の首根つこを片手で持ち上げて軽く飛び上がり、小山一つ分を軽々飛び越えて行きおつた……。只者ではない気配をしていたが、まさかこれ程とはな。恐れ入る。」

ーそれにしても、あの娘いったい何者だ？ 気配は完全に人間のものではあつた

が、あの脚力が人間に出せるはずがない以上それ以外の種族なのだろう。しかし、誰なのかがサツパリ分かん。

少なくとも、墮天使ではなさそうだったが……

「ーん、しよつと。うん、ここまで来れば大丈夫かな。」

ほらイツセー君、いつまでもバテてないで早く立って早く構えて。それじゃあ修行が始められないでしょー?」

「ぜえ、ぜえ……。初恋の女の子で、俺を殺した女の子で、改めて再会した女の子に二度も殺され掛かってしまった俺っていったい……」

首根っこを掴まれて山さえ越える山脈ジャンプってなんだよ! 死ぬわ普通に!

人間だったら当然死ぬけど、悪魔だって死ぬわ! 転生悪魔だって死ぬわ! て言うか、本気で死にかけたわ!

「明日にレーディングゲームが迫っている男子高校生悪魔を殺すつもりだったのか夕麻ちゃん!」

そう詰め寄った俺に対タ麻ちゃんは笑顔で応じてくれて、爽やかに優しげな口調で今まで通りに対応してくれる。

「まさか。私はすべての人間に乗り越えられる試練しか与えないわ。

なにがあっても貫き通す勇氣と絶対に諦めずに立ち上がる強い意志さえあれば夢は叶うし、どんな試練も乗り越えられる。

私がそうだったように、帝国全人民がそうであるように、転生愛天使になる誰もが経験し、乗り越えられた道なのだからイツセー君。私を殺せたあなたに出来ないなんて言いは許さない。絶対にやり遂げてもらおうわ。

できないと言うならば、死を。

——あなたの勇氣、この私に見せてみなさい」

「え？ あの、ちよつと？ ゆ、タ麻ちゃん？

な、なにがあつたのかなあ？ 目が怖いよスゴく。紫色の目が以前にも増して狂気じみてきた気がするんだけど——」

「リトルボオオオオオツイイ!!!」

ど〜おおおおおおおおおおおおおおおおおつん
!!!!!!

「どわあああああつ!」

『うおわああああつ!』

俺はドライブと一緒にって悲鳴を上げ、坂道を転げ落ちながら奇跡的に爆発を避けられたことに心底ホツとした。

や、やばかった。今のは本気でやばかった。あれをまともに食らっていたら、いくら転生悪魔の身体が丈夫でも無事じゃすまなかつただろう。

た、助かってよかったああああく・・・

「ーっつかし、スゲエ爆発だったけど……あれはいつたい何なんだ？ 部長が使ってる炎の魔法と似たようなもんなのかな？」

おい、ドライブ。おまえ今まで起きた戦いは全て知ってるんだったよな？ だったらあれがなんなのか見当くらないはつかないかー」

『アホかああああ!!』

「うわっ!？」

い、いきなり大声出すなよな。ビックリするじゃねえか。

なんか思い当たる節でもあったのかな？

『何故知らないんだお前は!? アホなのか!? アホなんじゃないのか!? 完全無欠、完璧に全壁に本物のアホだろお前はあああああつ!!』

「いくらなんでも言い過ぎだろうがっ! 泣くぞ! いくら俺でも!」

くそっ! 女子たちから散々に陰口囁かれてた頃の思い出がフラッシュバックして、思わず頸動脈をかつ切りたくなっちゃまったじゃねえか!

最近のリア充ライフで耐性弱くなってきてんだから、気を使ってくれよ相棒!

『知るか! 相棒こそ日本人のくせに、なんでアレを知らねえんだよ! 常識だろ、常識!』

日本人なら誰もが知ってる、あの有名なアレだよ！」

「だから何だよ、アレって。分からないから聞いてんだし、知ってることがあつたら早く教えてくれよ」

スゴい攻撃ではあつたが、なんとなくドライグが知ってるんだつたら何とかなるだろうと樂觀視して聞いていた俺の耳に相棒から届けられた答えは、絶望と同義語の意味をもつ言葉だった。

『原子爆弾だよ！ 原子爆弾！』

ヒロシマとナガサキに落ちた奴の、ヒロシマに落ちた方！」

「げん．．．!?!」

マジで!? あれ魔法じゃなくて爆弾だったの!?! つか、核爆弾だったのかよ！
道理ですげえ威力なわけだ納得したよ。

受け入れることは絶対に出来ないけどな！

「前に聞いたときは確か、科学は神秘を纏ってないから悪魔や天使を傷つけられないからとか云々言つてたような気が．．．」

『阿呆！ なんもない空間から右手を翳しただけで出てくる科学なんかあるか！ 絶対になんらかの神秘を纏っていると見て間違いない！』

神秘さえ纏えば科学で出来た爆弾だつて爆発の魔法と同じ扱いを受ける。爆発に巻

き込まれたら相棒も、そして当然俺もただじゃすまない。

いいか？ 絶対に当たるなよ!? 死ぬぞ！ 間違いなくな!」

「マジですか!？」

ドライブから初めて聞かされた「死ぬから逃げろ」宣告。

しかもそれを下された相手が自分の元力な俺っていったい……。

「ツアーリ・ボンバアアアアアアアツ!!!」

『今度は、水素爆弾だああ!!』

「どえええええええええつ!？」

原子爆弾の次は水素爆弾って、ここはいつたいたいこの東西冷戦ですか!？」

俺じゃなくてアメリカと戦ってください！ お願いします！

『いいか相棒！ 敵の迷惑もそうだが、それ以上にあの嬢ちゃんがなにしたいのかがサツパリ分からね！ 全然見えてこない！』

とにかく直撃を狙わずに核兵器連発してらって事だけが、今分かつてる情報の全てだ
 ！』

「それ、なんも分かつてないって言うのと同じ意味なんじゃねえの!」

見たまんまなんですけども！ 全ての情報といいつつ、ひとつしか教えてもらってないんですけども！ さつきから全然役立つ情報貰ってないですよ俺!!

伝説のドラゴンらしく、もつと役立つ情報プリーズ！

『相手の意図が読めない。相手の力量が計り知れない。相手の攻撃は防げないし躲せない。避けることも出来ないばかりか、当たったら最後。確実に死ぬ。』

こんな状況下で取れる最良の選択肢はひとつだけだ』

おお！ やっぱあるんじゃない最良の選択肢！ 早く教えてくれればいいのにドライグのツンデレさんめ！ 後でお礼に可愛がってあげちゃうぞ♪

『選べる選択肢はふたつにひとつ。ひとつ目が大人しく殺されるだから当然却下で、もうひとつが現実的な選択肢。』

ー相棒。お前に全てを委ねて任せる。後は頼んだぜ・・・』

「ちよ、え、えええええええええつ!!」

無茶ぶり!! いやむしろ、全部俺に丸投げされた!? 押しつけられちゃったの俺!?

ど、どどどどど、どうしろって言うんだよおおおおつ!!!

「リアス・グレモリーを愛した。おっぱいが好きだ、女の子が好きだ。

なるほど、確かに嘘はないのでしょうか。偽りなく愛の形の一つではあるのでしょうか。ただ足りない。全然足りません。

その程度の低い場所から眺めているから、見上げて目指すべき頂を見失うんです。

あなたが・・・イツセー君がもしも私がセレニア様を愛しているのと同じ分だけリアス・グレモリーに対して愛を捧げているというのであれば、絶体絶命の命の危機に際してバランス・ブレイカーを発動することで、それを証明して見せなさい！

半端な覚悟など無いに等しい！ 力もまた同じく！

守ると雄々しい口を利いても、私という絶対的強者の圧倒的暴力から生き延びられなければ恋人を守るどころか、自分一人の身すら守りきれない！

今まで経験した戦いが死闘？ 笑止です、模擬戦としてすら尚緩い。

少なくともイゼルローンで日々対重力訓練をはじめとした過酷きわまる死と隣り合わせの訓練をこなし、夜は夜で毎晩毎晩悪夢に魘されながらドリームランド深層域へと足を踏み入れ続ける我が混沌帝国全将兵たちの日常と比べれば、冥界どころか地獄だと

てパライゾです。

これら人々の悪夢から持ち出してきた武器と権能の数々で、あなたに乗り越えるべき
試練を与えましょう！

さあ、イツセー君！ 諦めずに立ち上がり、何度でも試練に挑みかかりなさい！

ただその道をひた走り、躓き、倒れ、泥を舐めようとも何度でも立ち上がるのです！
なぜなら誰でも、諦めなければ夢は必ず叶うと信じているのですから。

タンニーン如き最上級悪魔になれば良いなどと、易きに流され虚構に逃れようなど
とは言語道断！ 気に入らないので渴を入れさせてもらいますね！

神罰靦面！ 神なる裁きの雷よ、降りなさい！

ロツズ・フロム・ゴオオオオオオオツド
!!!!!!」

どつごおおおおおおおおおおおおおつん

!!!!!!

「ひよえええええええつつ！！！！」

『おい、聞いたか相棒！ 今の嬢ちゃんの言葉を！』

良かったな！ バランス・ブレイカーを発動さえできれば生きて帰らせてくれるらしいぞ！

楽勝だな！ 頑張れ！』

「お前は人事でいいよなあおいしいつ！！！！」

「ハレルヤ・おおお、グロオオリアアアアアツス！！！！」

ジユビビビン、キュピピピン、ジユビジユバアアアアア
!!!!!!

「誰か助けてくれえええ!!
お母ちゃーっん!!!」

「・・・? なんか気のせいかもしれないけど、一誠の声が聞こえたような・・・?」

その夜。冥界の一部地域は完全に地表から消え失せましたとき。

なお、生存者一命、無事奇跡の生還を果たす。

気絶する前に見せた彼の表情は、まるで全ての欲望から解脱して神性を得た聖者のようであったとアーシア・アルジエントは言う。

ローが、言うまでもなく冥界で聖書の神を崇める人、聖者は異端であり罪人である。

よって現魔王の実妹がそうである等という醜聞を隠す意味を込めて記録は抹消され、厳重に保管されることとなる。

いつの日にか彼の苦勞が実る日が来ることを願ってやまない。

同人サークル・ブラジャー主催 ペンネーム賢者様の日記から抜粋

つづく

12話 「戦闘に武力介入して、戦争を始めます！」

「――陛下、セレニア陛下。宜しいですか？」

「・・・んあ？」

「――いけません。退屈のあまり居眠りしていた所に声をかけられたせいで、変な声を出してしまいました。・・・ちよつと恥ずかしい・・・」

「どうしました紫藤さん。パーティーはまだ・・・終わっていないみたいですね」

「はい。先ほど魔王が来賓として北欧神オーディンを紹介し始めましたばかりであります。それと赤龍帝と魔王妹がパーティー会場を離脱して周囲の森へと向かいました。どうやら塔城小猫と接触していた黒歌殿との間で交戦を開始したようです」

「・・・はあ。なるほど・・・」

ダメですね、寝起きで頭が働かない。

パーティーは魔王陛下主権で行われている盛大なものでしたが、想像していたものとは違ってカオスブリゲードとの全面戦争を前にしての士気高揚。パーティーではなく、本当にただ名門若手悪魔たち同士を顔合わせさせるためだけのモノだったようで、部外者の私は心の底から退屈させられていました。

「・・・それで？ 別段その程度のことを報告してくる貴女ではないでしょうか？」

端的にお聞きします。――なにをお望みなのですか？」

「戦争を」

良い感じの笑顔で言い切った紫藤さんの顔を見つめ、私は反射的に「ダメ」と言いそうになったのをギリギリで堪えて咳で誤魔化し、彼女に詳しい説明を求めました。

「この場にも招かれざる客人が向かっているのは察知していますが、この程度の輩は天野元帥閣下お一人だけで対処可能です。であればこの場以後必要なのは陛下の護衛役を務めるゼノヴィアだけでも充分。」

私にも愉快で愉しい戦場を与えては頂けませんでしょうか？」

「・・・・・・・・」

私は相手の顔を見つめ、沈黙で返しました。

本心を言えば否と即答したいのですが、そう言う訳にはいかない理由が私たちにはありません。

それは――私が税金で養われている皇帝という名の無駄飯ぐらいだという事。

本来であれば国家主権者はそれなり以上に忙しく、国務で多忙を極めていくべき責任ある立場の者なのですが混沌帝国ではさにあらず、むしろ完全な御輿状態です。傀儡ですらない、崇め奉られて本心から祈られてるだけの神像。御輿より質悪い気がしてき

ましたね……。

逆に彼女たち帝国軍三長官は、高位の地位にあるだけあって高額納税者。税金免除で贅沢な暮らしをさせてもらっている身としては強く出られる相手では絶対にありません。門閥貴族の暮らしは私にとって拷問なのです。自由が減るのです。誰かタステケ……。

「……死人は出さないよう気を付けてくださいね？」

「お任せください。必ずやセレニア様から拜命した任務を完遂してご覧に入れます。

どうか心安らかに、吉報をお待ち頂きたい」

——任せられないし心安らかななんて絶対無理な返答をして紫藤さんはパーティー会場をお後にしました。見送ることしかできない私は、肩身の狭い居候の気分を満喫中です。

こうなればせめて祈りだけでも天に捧げましょう。どうか兵藤さんとグレモリーさんが生きて帰ってこれますように……と。

「おお、流星ですセレニア様！ まさか天体望遠鏡もなしに、天に浮かぶ新たな空中要塞「天の城（ウラニボルグ）」の位置を正確に割り出して祈りを捧げられるとは！」

「これぞ奇跡。いえ、人の御業と言うものですよゼノヴィア。

きつと陛下の戦争を愛する想いが天に届いた故でしょう。すべては祖国と勝利のため

めに。

「プロージット、『戦争に乾杯』」

「プロージット、『戦争に乾杯』」

「……どう言うわけか家臣に理解されない忠誠の対象（私です）である混沌帝国皇帝の許可をもぎ取ると、混沌帝国第四独立武装親衛旅団の指揮官、紫藤イリナ大將は出撃してしまいました。」

「またしても世界（原作）は、歪みを加速させたのです……。」

「ブーステッド・ギア！」

俺は左腕に赤い籠手を出現させるが……いつもの音が聞こえてこない!?

見れば宝玉に赤い光が灯っておらず、薄黒くなっていた！……なんだこれ!?

「……相棒、セイクリッド・ギアが動かん。どうやら曖昧な状態になっているみたいだ』

「曖昧って！……何がどうしてそうなった?」

『あの修行で次の分岐点に立ち、嬢ちゃんの手伝いだか処刑だからでセイクリッド・ギアが変わるところまでは漕ぎ着けている。』

だが、あれは所詮火事場の馬鹿力だ。糞度胸を見せつけないと確実に死んでいたから出来ただけで、今のが単なるパワーアップに過ぎないのか、それともバランス・ブレイカーなのか今一判然としない』

俺のセイクリッド・ギアが普通にパワーアップをしたいのか、バランスブレイカーに成るかで迷ってるってことか？

『簡単に言うならその通りだ。あまりにも急激に選択肢が増やされたせいでブーステッド・ギアのシステム自体が混乱しているのだ。．．．まあ、目の前でいきなり水素爆弾落とされたら誰だって混乱するだろうしな』

．．．うん、まあそれには同感するけど今はそれどころじゃない。小猫ちゃんと部長の命が掛かっているんだ。迷ってる場合じゃない。

「ー部長。俺、自分に何が足りなくてバランス・ブレイカーに至れないのか、少し分かった気がします。俺がバランス・ブレイカーに至るには部長の力が必要です。

だからーおっぱいをつつかせてください!」

「ーッ!．．．わかったわ。それであなたの想いが成就できるのなら．．．」

途中経過は無用なので省略します。

『至ったッ！ 本当に至りやがったぞオッ！

ウエルシユドラゴンブレイカー!!!』

宝玉に光が戻り、今までにない質量の赤い膨大なオーラを解き放ち始めた！ そのオーラは俺の全身を包み込んでいく！

「ヒヤハハハハハハハハ！ こりやおもしろいや！ ドラゴンの親玉が二匹も！

これを楽しまなきゃ嘘つてもんだぜい！」

如意棒をくるくる回して美候が戦闘継続の意志を見せる。

こいつもヴァーリ同様の戦闘好きか！ 本当、どうして俺の敵ってこういうのばかりなんだ？ もっと戦い以外に楽しいことあるだろうよ。女の子にモテたいとか思わなののか？

価値観が違うから俺にはこいつらの考えがひとつもわからねえ！

「ーだったら……戦争するつきやないでしょうが！」

「ぐへはあつ!?!」

「イツセー!?!」

「イツセー先輩!?!」

『相棒!?!』

「赤龍帝!?!」

「にやに!?! にやにがおこったの!?!」

横合いから跳び蹴り食らって吹き飛び俺に部長と小猫ちゃん、それにドライグと・・・なぜだか美候と小猫ちゃんのお姉さんまで心配そうな声を上げてくれた。俺たちは案外、わかりあえる可能性があるかもしれない。

「ーって、誰だよ！俺がせっかくバランス・ブレイカーに至ってこれから活躍しようとしてたのを邪魔した奴は誰だー!?!」

「私は私だーーっ!!」

「!?! い、イリナ!?! どうしてお前がここに居んの!?!」

なんと驚いたことに横やり入れ跳び蹴りかましてきたのは、俺の幼馴染みの少女、紫藤イリナだった。・・・っか、本当に何でこいつが邪魔しに来てるんだ!?! え？俺なにかしちやいましたっけ？ さっぱり分からん!

価値観がどうのこうのというレベルじゃなくて、こいつらセレニア一派だけは死んで

も分かりあえないし分かりたくない！　なんかそんな気がするんだ！　本能的に！

「価値観が違うから、分かり合えないから戦うしかない・・・面白い！　面白いねえウエルシユなんちやら！　とつても私好きな良い思想よ！　素敵！　濡れる！　感じちやくう！」

「キモッ！」

幼馴染みの変貌ぶりに、思わず俺もドン引きしちやう。

なに、この子怖キモい・・・。なに言ってるのか全然分らない・・・。

見ると、さつきまで戦っていた美候たちまで啞然とした表情のままイリナを見つめてポカンとしている。・・・やっぱり俺たち気が合うかもな。機会があつたら俺お勧めのエロゲを貸してやるとしよう。

「戦争には、ご大層な理屈も思想もお題目さえ必要ないわ！　だつて要らないんだもの！

戦いは戦いよ。それ以上でも、それ以下でもない。

死ぬか、死なせるか。

殺すか、殺されるか。

ただそれだけのシンプルで分かりやすい答えでしょうが！

さあ、戦争しましょう！　あなたたちの力もそのために与えられたモノなんでしょ

!?

「だったら戦争よ戦争！ 殺したり殺されたりしましょう！ 死んだり死なされたりしましょう！」

互いが互いを否定しあつて殺し合う戦場と言う名の地獄でしか私は生きられない、地獄にしか行きたくない。

「前線豚同士、始めましょう。戦争を！」

「『キツモ！ マジでキツモ!!』」

思わず敵味方入り乱れて全員総出でキモがつてしまった。それぐつらい気持ち悪い価値観だったんだから仕方がない。

向こうではヴァーリ同様に戦闘好きなのは美候が「おええええつ．．．は、吐き気が止まらねえ．．．」と喘いでおり、隣の色っぽい格好したお姉さん黒歌さんに「大丈夫にやん？ 美候、しっかりするにやん」と優しく介抱されていた．．．羨ましい。

「『じー．．．』」

「．．．うつ！ ち、違いますからね部長と小猫ちゃん！ これはあくまで男としての生理現象でつて、決して邪な欲情とは違って一線を画した崇高な思想に基づいた脳内置換

がですね……!」

「ふうんだ、どうか。イツセーのことだから、どうせオツパイが大きければ誰にでも欲情するんでしょう? 私だって男の人の身体的特徴くらい知ってるんだから」

「部長……っ!!」

「! 先輩! 危ないです!」

「え? なにが危ないって小猫ちゃーろふげほあつ!?」

「イツセー!?(先輩!)」

「戦場で余所見していると、死んじやうよーっ!」

げほっごほっ……ちくしよう! お約束の仲間内会話すらさせてくれないのかよ!

どんだけガチなんだこいつらは!

「仕方ねえ。ぶつつけ本番だがバランス・ブレイカーの力を試してやるぜ!

ブース……」

「遅いつ!」

「ほげえっ!?!」

またまた跳び蹴りで吹っ飛ぶ俺。

え? うそ、この子本当に待っててくれないの!? 俺のブーステッド・ギア、持ち主の力を倍加するタイプの一撃必殺一発逆転狙い、いかにもなヒーローが使ってるピンチか

らの大脱出用なんで、あちらこちらを縦横無尽に動き回って死角からの一撃離脱に専念されちやうとなんも出来ないんですけど!?

「おいドライグ! こういう時にはどう戦うか、戦いの歴史に詳しいお前からアドバイスを!」

『・・・すまん相棒。こういうガチで戦争してる奴の戦いって、殺し合いでしかないから見てこなかった』

「この役立たずドラゴンがああああつ!!」

『し、仕方ねえだろうが! 俺を宿するような奴は例外なく強い! 一人でも正々堂々真つ向勝負が挑めて勝てるような奴に戦場のリアリズムなんか分かって! 無理だって!』

人類の近代史戦争の悲惨さ舐めんな! あんなモン、百年戦争が子供の遊びと思えるくらいだ! 悲惨すぎて見ていられるか!』

「知るかボケエツ! なんとかしろお! って言うより、なんとかして下さいお願いしますドライグさん! こいつ俺と相性悪すぎいいいっ!!!」

『俺とだつて相性最悪すぎるわボケえっ!』

とにかく逃げろ! 逃げて逃げて逃げまくれ!

要は死なずに逃げ延びられりゃあ、負けじゃねえ!』

「それ、ヒーローの戦い方でも、伝説のドラゴンの言うことでもないんだけど!」
「そらそらそら! 行くぞ宇宙CQC百式!

精神感应型無線誘導式機動鉤爪砲台『ファング』!

ネトゲで知り合った仲間から教わった近接格闘術のお味はどうおおく?」

「近接でも格闘でもない! あと、出来れば近接格闘戦してください! 近づかないと俺、戦えませんか!」

「私が宇宙CQCだと思おうものが私の宇宙CQCだオラあ!

他人の同意なんて戦時中には要らんっ!」

「おがあぢやーーーーっん!!!」

その後、置いてけぼりにされた塔城小猫は黒歌によって一度は連れて行かれましたが翌日には戻されてきました。

シトリー一派とのレーディングゲームが近かったお陰もあり、俺の醜態は誰の目にも触れることなく魔王様の権力によって闇に葬られ、俺はおっぱい丸出しのまま放置して逃げ帰ってしまった為に部長にきつくお仕置きされ、イリナたちは何事もなかったかのように朝食談義に花を咲かせています。

「……………納得いかない……………」
びっしっ！

「なにか言ったイッサー？ いえ、下僕1号。椅子が言葉を発しちやだめじゃないの。
私の綺麗で形のいいお尻に敷かれる光栄さを味わいながら、グレモリー家の娘に恥をかかせたことを後悔しなさい」

「……………はい……………海より深く反省させていただきます……………」
ああ、クソう！ なんか主人公っぽくない俺！ でもリアス部長のお尻の感触が背中当たって気持ちよすぎるなこれ！

——下僕悪魔辞めて、魔王陛下の妹の椅子として生きていくのも悪くはないと思った
今日この頃の明け方頃でした。

原作主人公が変な性癖に目覚めたところで続く

1 2 i f 話「もしも1 2 話がギャグ展開ではなくシリアス展開だった場合の回」

「……姉さま。私はそちらへ行きます。だから、二人は見逃してください」

「何を言っているの!?! 小猫! あなたは私の下僕で眷属なのよ! 勝手は許さないわ!」

部長がお姉さんの元へ行こうとする小猫ちゃんを抱きしめる!

しかし、小猫ちゃんは首を横に振る。

「……ダメです。姉さまの力は私が一番よく知っています。姉さまの力は最上級悪魔に匹敵するもの。部長とイツセー先輩では……」

「いえ、それでも絶対にあなたをあちら側に渡すわけにはいかないわ!

あんなに泣いていた小猫を目の前の猫又は助けようともしなかった!」

部長の激昂にお姉さんは笑んで応えようとする。

——その瞬間、空気が変わり、世界が反転した。

「——いい加減にしてくださいグレモリーさん。実力も能力も責任すらも伴っていない、視野狭窄で苦勞知らずのお嬢様が一端の口を聞いているのを見るのは不愉快です。保護者としての権利を主張するならば、せめて飼猫と真つ正面から向き合う程度のこととしてはからにして下さい」

冷気と同様の冷たさを持った絶対零度の声を発していたのは異住・セレニア・シヨート。

悪魔・天使・墮天使、どの勢力にも属さずに自由意志でカオスブリゲードとの戦いに介入してくる人間の女の子。

でもなぜ、今この場にこいつが・・・？

小猫ちゃんの抱えている事情に一切関与してない彼女がこの場に居る理由が分からず、俺は軽く混乱した。

そんな俺を意に介すこともなく、セレニアは俺に一瞥も寄越さず横を通り過ぎると部長の前に立ち、身長差で見上げざるを得ない部長の顔を真つ直ぐ見つめながら言葉を紡ぎ出す。

言刃で部長を口撃し、情け容赦なく切り刻んでいく。

「グレモリーさん。なぜ塔城さん姉妹の問題に、部外者で赤の他人の貴女が口を差し挟むのですか？ どう考えても貴女には彼女の抱える問題に関して何かの権利を主張する資格は無いように、私には思われますが」

「なっ・・・!? 私は小猫の主で、小猫は私の眷属なのよ！ それなのにどうして私には小猫の抱えている問題に介入する権利と資格がないって言うのよ！」

「まず第一に。塔城さんの主は確かに貴女ですが、貴女自身が兄である魔王陛下の庇護下であり、独自の判断で動かせる勢力と権限がきわめて限定されているからです。」

駒王町という貴女の領地以外において、貴女の権力と権限は著しく弱体化する。貴女個人の力と勢力で彼女を外敵から守り切れるとは到底思えない。

国民から税を搾り取りながら、国民を守る力のない貴族など貴族ではない。

故に、私は貴女に塔城さんの上に立つ支配者としての資格はないものと断定させていただきます」

「……………!!」

「第二に。そもそも貴女のお兄さんが権限をフルに活用し、名門貴族と癒着している犯罪組織を根こそぎ滅ぼしてしまっていれば彼女たちが離ればなれになる事もなかったはずです。」

貴女の兄上、冥界の国家主権者であり国民の命と安全、平和を守るためならば自らの

身を投げ出さなければいけない尊き立場の現魔王陛下が職責を果たすことなく、半端な宥和政策と名門たちに配慮しすぎて自領の領民たちしか守ろうとせず、他の地域を野放しで野放図にしていた結果、彼女たちのような悲劇が無数に生まれる結果をもたらした。

グレモリー家の誇りとやらを口にするのであれば、まずは地位に伴う責任を果たしてからにしていただきましよう。古いだけが取り柄で、カビの生えた御大層な名前を誇る張りぼて名家など、国家と国民にとって悪性腫瘍でしかないのですから」

「——っ!!!」

「第三に。行かせないと言いなながら、貴女いつたいこの場で何が出来ると言うんです？ 負けることしかできないでしょう？」

「実力の伴わない大言壮語は空しいだけです。見苦しいので止めときなさい。ハッキリ言いましよう。無様で醜いです」

「!!!」

「的確に的確に、冷静に冷静にセレニアは部長の精神を逆撫でし、切り刻む手を緩めようとはしない。どこまでも情け容赦なく徹底的に切り刻み続けていく。

——見ると、小猫ちゃんのお姉さん黒歌さんまでもがりラックスした姿勢で観覧に徹して、楽しみながら見物している。

「にゃんにゃん♪ これは見物ねえ。苦勞知らずで世間知らずな上級悪魔さまが、人間に追いつめられてるにゃん♪」

い・い・気・味★ あは♪」

部長が苦しむ様を見ながら愉悦の笑みを浮かべる黒歌さんに、俺の怒りはより燃え上がる。絶対に、一発ぶつ飛ばしてやる！ 小猫ちゃんの分だけじゃなくて部長の分も含めて、一人一発ずつだ！

「へえ、それは凄い。」

・・・で？ なんて決意したにも関わらず見ているだけなのかなイツセー君？」

「!? ゆ、夕麻ちゃん!? どうしてここに・・・？」

「勇気が欠如しているのを感じたから来てみたんだけど・・・案の定ね。」

イツセー君。私は今のあなたからは何も感じない。何も感じられないのよ。

それこそあなたの価値が「強いだけ」になってしまっている、今のあなたには1 帝国マルクの価値すら感じる事が出来ない。

強いだけが取り柄のドラゴンはずっこんでなさい。邪魔なだけだから」

「・・・!? な、なんだとー！」

確かに俺は未だにバランスブレイカーには至れてないけれど、それでもそこいらの悪魔や天使、墮天使なんかには負けたりしない！ その強さと自信が、今の俺にはある！

そうさ！ 俺は誇り高き上級悪魔リアス・グレモリーの眷属、ポーンの悪魔。兵藤一誠だ——

「——ただ選ばれただけ、たまたま特別な才能を生まれ持っていただけ、偶然ブーステツド・ギアを宿してただけの懦弱な小僧が吠えるなよ。」

自分の弱さを大声で吹聴して回っているみたいで見苦しいだけですよ？」

「な……に……!!？」

「生まれつきの強者が強くあるのは当然、生まれついた特別な才能を開花させて戦うのもまた当然。そこには何らの奇跡も起きず、ただただ定番通りに順当なストーリー展開で当たり前のように勝つ。退屈きわまりない平凡なヒーロー物語だわ。」

強者が強者に立ち向かう物語なんて、ただの予定調和。意外性も勇気も一切見受けられない。弱者が強者に打ち勝つため、試練と努力を積み重ねていく過程にこそ価値がある。

生まれ持った弱さに耐えきれず、悪魔という強大で哀れな化け物に成り果てる道を選んだイツセー君には、もう一生わからなくなった話だよ」

「……………!!!」

夕麻ちゃんの目つきが変わり危険な稚気を宿した瞬間、俺は本能的に理解していた。今この場において自分は弱者なのだ。

いや、俺だけじゃない。

部長も小猫ちゃんも黒歌さんや美候、タンニーンのオツサンまでもを含む全ての存在が弱者なんだと認識させられたのだ。

おそらくはこの場にいる二人の、絶対的強者によって。

その強者が一人、夕麻ちゃんと並ぶもう一人の強者が部長に対して向けていた言刃の刃を今度は小猫ちゃんにも向けるのが視界に映る。

「貴女も貴女だ塔城小猫さん。周りから突き刺さってくる悪意の刃が怖いから、痛いからと飼い主の陰に隠れてやり過ぎ、姉が今まで苦労して来ていない、自分がこんなにヒドい目にあっているのにお姉ちゃんだけ逃げてズルい。」

そんな被害者意識だけで相手を見定め、決めつけて、一方的に相手は悪だ飼い主は善だ自分を守ってくれるリアス・グレモリーは優しい人だ、自分を守ってくれない人たちはみんな冷たい人たちだと心を閉ざして自分の中へと逃げ込み、他者を否定し、自分を受け入れてくれる人たちだけを受け入れる。

そんな甘えた気持ちのまま、力だけを向上し、強くなった嬉しいなど、本気でそう思っていたのですか？ 貴女という脆弱な飼い猫は」

「.....!!」

身長ではややセレニアを上回っている小猫ちゃんだけど、今の彼女は雨露に塗れて震

える一匹の子猫だ。守ってやらなきゃいけない。彼女みたいな弱い立場の存在は、誰かが守ってやらなきゃいけないんだ！

「ほう？　で、あなたが守ると言うつもりですかイツセー君？

たかだか猿と上級悪魔のコンビ如きに遅れを取る、今のあなたが？

己が弱さを認めた割に、弱い自分になにが出来るのか考えたこともないあなたが？

ドライブと言う伝説のドラゴンから付与された力がなければ一兵卒同然の強さしか持たない、ただの日本の男子高校生が悪魔になっただけのあなたが？

なんらかの覚悟も済ませず、自分一人ではなんの試練も越えていない、与えられた力に自惚れて冥界に来るまで訓練すらしてこなかったイツセー君に誰が守れるって言うのかな？」

「そ、それはー！！」

「守れないよ。あなたには誰の事も守れない。

だってあなたには、相手を正面から見ると勇氣が無いんだもの。

相手と向き合い、弱さと醜さ、汚い部分も含めて全部が相手を構成している一要素だと割り切る度胸を持ち合わせていない。

見たくない物は否定する。見たい物は絶賛する。

劣っているなら他にも素敵な部分があると、弱いのであれば自分に頼れど、一人がイヤ

なら側にいるからと、ただただ与えて依存させるだけで自立を促そうとしていない。言い訳を与えて逃げ場を用意して逃げ込んできたら精一杯甘やかして、相手をひたすら弱くしていく。それじゃあ誰のことも守れてない。守ってもらえたと錯覚させているだけ。偽りの桃源郷へ逃げ込ませるだけの、くだらないやり方。

このやり方で本当に救えて守れる物はたったの二つ。

イツセー君の良心と正義感、ただそれだけよ」

「――!!!」

震える拳を握りしめながら俺は相手の顔を睨みつけ、

「――その狂気じみた覚悟を決めた不敵な笑顔に、視線を逸らすことしかできなかつた――」。

「ほらほら白音く、早くこっちに來なさいよ。あなたの飼い主さんはとくに白旗上げる寸前の状態よ〜?」

そんな血みたいに紅い髪のお姉さんより私の方が白音の力を理解してあげられるわよっ。」

「・・・イヤ・・・あんな力なんていらぬ・・・人を不幸にする力なんていらぬ・・・」
「バカですか貴女は? 力なんて基本、壊す方面にしか使えないんですから人を不幸に

しか出来ませんよ。

誰かを守るために力を振るって敵を倒す。誰かの夢を叶えるためのルークとして敵を倒す。ほらね？ 敵が不幸になっている。貴女の力が不幸を作って量産している。

所詮、戦うための力で人助けなんて虚言です。誰かと戦い、勝利することで誰かを守り、何かを成し遂げたいというのであれば、必然的にそれは死者で舗装された道路となる。王者の王道も、覇者の霸道も素材は同じ。人の死体です。

栄光も名声も地位も名誉もすべて、名も無き無数の兵士たちの亡骸を山と積み上げた頂に建てられる物だ。そこに一切の例外もありません。

死は誰の死でも、どの種族の死であろうとも死です。死以外の何者にも成り得ない。

誰かのために、自分のために戦う戦士は例外なく死を築く者だ。死を築く以外に出来ることなど一つもない」

「……………!!!」

心が壊れてしまったんじゃないかと思えるほどに、真つ青な顔してイヤイヤをする小猫ちゃん。

もう、我慢できそうにない……。

「黒歌……。力に溺れたあなたはこの子に一生消えない心の傷を残したわ。あなたが主を殺して去ったあと、この子は地獄を見た。私が出会ったとき、この子に感情なんても

のはなかったわ。小猫にとって唯一の肉親であったあなたに裏切られ、頼る先を無くし、他の悪魔に蔑まれ、罵られ、処分までされかけて……。

この子は辛いものをたくさん見てきたわ。だから、私はたくさん楽しいものを見せてあげるの!」

「貴女の食べた栄養分は胸に集中するばかりで頭には行き渡らないのですか?」

まったく嘆かわしい。これが仮にも駒王町を支配している管理人の実態かと思うと泣けてきますね。お粗末きわまりない。

クリームの詰まった頭蓋骨も中身は軽そうで羨ましいですね、リアス・ブタゴリー」
「なっー!?!」

ぶ、豚ですって!?! よりにもよって私を、このリアス・グレモリーを指して豚だなんて非礼を許すはずがー!?!」

「豚のように飼い慣らされ、肥え太ったお嬢様は豚で十分です。

忘れたんですか?」

黒歌さんの力は急速に大きくなり、隠れていた才能が転生悪魔になったことで一気にあふれ出たのだと言う公式事実を。

そして姉妹猫はもともと仲の良い、いつも行動を共にする、親を亡くした孤児姉妹だったのだという事実を」

「・・・??」

「それがいったいなんだと言うのよ？」

「分からないのですか？ 簡単な話ですよ。」

黒歌さんもまた、今の塔城さん同様に力をコントロールしきれてはいなかった。ただそれだけです」

「!!??」

「少し考えれば小学生でも分かる問題ですよ？」

まさか貴女、今まで仲睦まじく暮らしていた姉妹が力を得た途端に豹変し、残忍で冷酷な殺人鬼になってしまったのだと本気で思ってもいたのですか？

だとしたら何故、貴女の眷属兵藤一誠さんは豹変してはいないのか？

力を得れば変わるといっているのであれば、元は人間で平凡な男子高校生だった彼の方がそうなる素養は高かったはずなのに」

「それは・・・」

「貴女は基本的に身内に甘いと言われていますが、私はそうは思っていないません。」

貴女は自分に甘いのです。甘すぎるのです。自分の思い描いた理想を相手に重ね合わせて満足し、そうでなくなるのを異常なまでに嫌悪する。

思い描いていた理想の世界が失われるのが怖いだけの、平凡でくだらない、幼稚で稚

言葉で殴っておいて拳で殴り返されたくないなどと言う理屈は成立しませんから。

私は自分が屑だと自覚してはいても、自分のやったことと言ったことには責任を持つ屑でいたいと常に心がけて生きていきますので」

「な、え、あ……」

「どうしました？ 殴らないのですか？ あなたはグレモリーさんの眷属で、その事に誇りを抱いていたのでしょうか？

ならば是非とも主の仇を討たなければ。復讐戦を企図しなくては。自分が忠誠を尽くす対象と、それ以外の赤の他人とは明確に区別しなくては。

それが出来ずに誰のことも傷つけないなどと寝言をほざいて自己正当化するようでは、あなたの忠誠心などその程度に過ぎないと言うことです」

「……っ!!!」

「誰かを選んで愛したならば、その人を傷つける相手を憎まなければ。

愛する人を守るため、愛する人を傷つけるすべてを敵に回して戦わなければ。

愛する人を傷つけた敵を許すと言うことは、愛する人と愛する人を傷つけた敵はあなたにとって平等の価値を持つ、同じくらいに愛する存在と言うことになってしまう。愛が偽物になってしまう。

失うものなど何もない愛など、愛ではない。仮に愛だと言うならば、それは自己愛と

いう名で呼ばれる歪んだ愛情だ。他者ではなく、他者を愛する自分を愛しているだけの欺瞞に過ぎない。

自分が自分の醜さと向き合わずして、いったい誰と戦い、誰に勝とうというのか。己自身のことと縁に見えていない人間が、一体どのようにして本当の相手を見据えて、心の内側へ踏み入れるというのか。

あなたの愛は歪んでいる。いえ、そもそも愛と呼べるほどの大した想いではない。

ただのオツパイ好きでヒーロー好きな童貞の男子高校生が、偶々自分の夢がすべて叶う状況に置かれて有頂天になっているだけのヒロイックナルシズムだ。ナイトシンドロームだ。それ以外の何者でもない。

居るべき資格のない場所に居ることを恥じ、ここから出て行きなさい兵藤一誠。

あなたに相手を本心から労り、関係を再構築したいと望み、不器用ながらもアプローチし続けている黒猫の少女から妹を強奪する資格など、この宇宙の果てまで探し続けても決して見つかるはずがありません。

消え去りなさい「正義の味方」!

正義を名乗るテロリストが出しやばる時ではない!

「う、う、うおおおおおおつ!!」

「オーセレニア様、オーダー（命令）を」

「・・・・・・・・征きなさい、戦争です」

「イエス・ユア・ハイネス！」

13話「冷静なる蒼眼」

「失態ですね。

敵に首都まで潜入された挙げ句、要人複数が出席しているパーティーでの爆破テロ。冥界側の警備網の甘さと警戒心の有無を問わざるを得ない程の大失態です。

今回の責任については、どうお考えなのですか？ 魔王サーゼクス・ルシファー陛下？」

「・・・おいおい、ほどほどにしておけよ？」

三勢力の首脳たちが一同に会して茶をしばいてる、魔王領にある会談ルーム。

その場においてうちの副総督シエムハザが、開口一番にそれを言ったのだが・・・今回は些かおまげが手厳しい。いつもならこれほど攻撃的な言動をする奴じゃないんだがな・・・。

「先日行われた魔王主催のパーティーで悪魔たちが、『カオス・ブリゲード』の襲来を受けたのは紛れもない事実だ。

だがあれは正確に言うなら、『結果的にそうなった』というべき事態だろう？

冥界指名手配中のSS級はぐれ悪魔『黒歌』がパーティーを、使い魔使って見に来てい

たなどと、誰も予想だにしていなかったじゃねえか。

その点においては俺たちにだって、悪魔側の責任のみを追及する道理はないと思うが？」

「では、もし仮に爆破被害にあった中に御自分の同族が居て、そのご遺族たちに対するときにも同じ内容のことが言えますか？ 墮天使総督アザゼルさん？」

氷のように冷めた印象を与える幼い少女の声が議題の場を一打ちし、会談ルームは途端に静まりかえって重苦しい沈黙に包まれた。

平然としたまま茶をすすっているのは、発言者である人間の小娘異住・セレニア・シヨートだけ。

一応は人間勢力の代表として呼んでいる手前、出席させないわけにはいかないというサーゼクスたつての要望だったが・・・まさかこれを狙っていたんじやあるまいなサーゼクス。だとしたら俺はおまえの評価を改めなきゃならんぞ？

今の一言だけで急激に悪化した状況の変化を、俺は肌で感じ取っていた。刺すような視線、責めるような視線、誠意あふれる返答を期待する視線。

様々な感情が入り交じった視線の嵐。

その渦中に叩き込まれた俺としては、正直辟易させられる。

ーいやれやれ、なんだってこんな面倒くせえことを・・・。こういうのこそ、お前の

役割のはずなんだがね？ シェムハザくん？

俺が心中でつぶやいた声が届いたのか、シェムハザではない別の人物が議場に新たな爆弾を投じて俺の問題を棚上げにしてくれる。

——たく、こいつには平地に乱を起こしたがる趣味でもありやがるのか？ いい加減にしてくれよ本当に……。

心の底からウンザリさせられながらも俺は周りに合わせ、再びの発言で議場の視線を一手に引き受けた銀髪の少女に視線と意識を向けた。

「と言うか、今回の件は予想できうる事態だったはずなのに『結果的にそうなった』等という有り触れた表現で逃げの姿勢を見せるのはフェアじゃないと思います。

冥界指名手配中のSS級はぐれ悪魔と、三大勢力のはみ出し者たちにとって今一番安全な場所である、各勢力全てに牙を剥いた兵力的には乏しいはずの反乱軍力オス・ブリゲード。

合流しないと考える方が脳に蛆でも沸いてるんじゃないかと疑いたくなりますけどね、私としては」

『……………』

再び場を包み込む沈黙。だが今度のは、先ほどのモノより更に重たい。

なにしろ今回の発言は、ここに集っている全員にとって他人事じゃない。誰もが皆、

『あの黒歌がカオス・ブリゲードに参入してほしくない』と言う願望に突き動かされて、無意識のうちに候補から外していた事実に思い至らせられたからだ。

——まあ、その気持ちは分からなくもないがね。

内心で俺は肩をすくめて上級悪魔たちを弁護してやる。

——誰だつて自分に都合の悪い事実からは目を背けたがるものさ。それは別に心の弱い人間だけの専売特許じゃない。心という名の弱さを持つていさえすれば、誰でも持ち得る生まれつきの弱さなのだから悪魔も天使も墮天使も、その点に関しては例外が存在していないだろう。

だが——

（だが、誰もが弱さを持ち、悪魔も天使も墮天使でさえ嫌なことからは目を背けたいと言う欲求に縛られている現状にあつて、この場の誰よりも弱い人間の小娘が平然と自分の弱さに向き合つてるのはどう言うことなんだ？）

そう。それがこの場における、一番の大問題だった。

このガキには現実逃避の概念がない。自己の行いを正当化すると言う発想がない。自らの過ちに対し責任をとるのが当然だと言う信仰を抱いてさえいる。

ある意味では理想的な指導者の資質ではあるのだろう。誇つていいし、手放して誉めてやつてもいい。

だがそれは、心という弱さを持った脆弱な生き物の在り方に反している。強い弱い
概念から逸脱しすぎている。些か以上に——まともじゃない。

「折角ですし、この場をお借りして聞いておきたい事があるのですが、よろしいですか
魔王陛下？」

「構わない。議題も滞ってしまったし、なにか意見があるのであれば言ってみてほしい。
遠慮は入らない」

「では、お言葉に甘えて——この場集っている皆さんは、カオス・ブリゲードとの戦い
について、どう定義なされているのでしょうか？」

あるいは、カオス・ブリゲードについてどうお考えなのですか？

是非ともお伺いしておきたいのです。できますならお聞かせ願えませんか？」

「……?? 質問の意図がよく判らないのだが……それはこの場で考えなければいけ
ない議題なのかね？」

「きわめて重要度の高い質問だと解釈していただいて結構ですよ。

悪くすれば冥界ごと、アツサリ滅びます」

大袈裟すぎる表現に失笑を浮かべるものも居たがセレニアは意に介する風もなく、平
然と答えが返ってくるのを気長に待ち続けた。

やがて会談に出席している多数の名門悪魔たちが物知らずな子供にモノを教えるもやるかのような態度と横柄な口調で言つてのける。

「カオス・ブリゲードは、三大勢力の異分子たちが集まって徒党を組んでいるだけの犯罪者集団だ。烏合の衆だよ。いくつかの拠点と頭目を務めているであろう何名かの大物を倒せば支柱を失つて離散する、その程度の存在だ。

我ら三大勢力が総力を結集できさえすれば、卵の殻でも割るように粉碎できるだろう。違うかね？」

「全然違います。そんなんじや、何の意味もありません。むしろ敵を利するだけです。

と言うか、その様に粗雑で原始的な戦略構想でもつてテロとの戦いに勝とうとしてたんですか貴方たちは？」

平和ボケした戦争童貞が本気で戦争し掛けてくる相手との戦いを主導するとか、マジで勘弁願いたいですね。国民と兵士の皆さんが気の毒すぎますから」

「な・・・っ!？」

ザワツ・・・!!!

先ほどとは違つた意味合いで議場がザワツク。

正直俺も、これは予想していなかっただけに行動を躊躇してしまふ。

ーまさかこいつ、悪魔の名門お歴々に対して童貞呼ばわりするとは・・・! ーこりや

最悪の場合、外交問題にもなりかねないぞ！

サーゼクスを見やると俺と同じく焦ったような表情で議場を見渡しながら、行動を起こすそぶりはまるで見せていない。非常時にリアクションが遅れるのはこいつの悪い癖だ。決断を下すのが毎回遅すぎる！

いつもなら並外れた自身の力で途中からでも強引に解決できるが、今回に限ってそれは不可能だ。人間の身体じゃ、悪魔の攻撃一発食らっただけで確実に死んでしまう！

人間界に領土を持つリアス嬢の心情にも配慮した行動が求められる中で、まだしも冷静さを残していたらしい大柄な名門悪魔の一人が苛立ちを隠せない口調でセレニアに詰め寄り詰問する。

「……脆弱な人間の小娘風情が我々を、戦争の素人と呼ぶか。おもしろい。

ならば貴様の見識を聞かせてもらおうではないか。

むろん、侮辱を受けておきながら黙って放置するような我々ではない。大言壮語に相応しい内容を見せつけられなかった時はどうなるか分かってー」

「武力は万能薬ではないのですよ？ 内乱が発生したから鎮圧しよう、反乱が起きたから討伐しようでは、根本的に何の解決にも貢献できていません。

戦争で勝ちたいのであれば、まず何でもかんでも力づくでブツ叩いて解決しようと言う脳筋思考を捨ててください。原始人ですか貴方は。筋肉だけで戦争に勝てるなら苦

労はしませんよ。

人間みたいに頭を使うのは苦手だから自慢の筋肉育てましたと大声で叫びたいのであれば、路上道端にしてください。自分から恥をさらす自由も、当然憲法は保証してくれておりますよ」

「……………」

思いもかけぬ返しだった為か、思わず若手の悪魔が鼻白んで口ごもる。

そんな小物のことなど端から眼中にないらしく、セレニアはまっすぐ俺たちを見つめ返すと、よく通る声で演説もどきを開始する

「あなた方はカオス・ブリゲードを三大勢力かあぶれた異分子たちが集まって徒党を組んでいるだけの烏合の衆と表現されましたが、それはあなた方三大勢力にも同じ事が言えます。

先日のコカインさんの一件を見ても分かるとおり各勢力は決して一枚岩ではなく、また三大勢力による同盟も形式だけが先行しすぎていて実務面における諸々は仮のものに止まっている。

先日まで種族の存亡を掛けて戦い、殺し合っていた相手と満足のいく終戦条約も締結しないまま済し崩しの次に次の戦いへ、それも先日までの味方に刃を向けると命じられ

て、はいそうですかと黙って従える兵士の方が少ないのは自明の理でしょう。

対する敵側カオス・ブリゲードは、明確に敵意と殺意を剥き出しにしている。彼らに与したからには既に覚悟は済ませた後でしょう。かつての同胞だろうと友だろうと躊躇わずに切る覚悟をです。この時点であなた方三大勢力は、兵士の心理面で大きなハンディキャップを被つてゐるんですよ」

「……………」

「敵は恐らく、各勢力に忍び込ませてあるスリーパーを用いて少数部隊ごとに主力と分断、各個撃破するゲリラ戦術を基幹とした戦略を練つてくるものと私は予想します。

個人技に優れながらも統一性を欠き、それぞれの能力に癖があり過ぎるが故にはみ出さざるを得なかつた者たちが多数参加しているのであれば、それが一番効率的ですからね」

「通常の軍隊は部隊ごとに分かれて部隊長が直接指揮し、上からの上意下達によつて組織の秩序と軍律を維持しますが、テロ組織であり法を犯す側である彼らにこれは必要ありません。

力と恐怖で独裁的に支配するのも、皆の代表としてカリスマによつて導くのも、呪いと脅しによつて無理矢理に従わざるを得ない状況にしてしまうのも、彼ら個々人の自由であり裁量次第です。どれほど横暴に振る舞おうと、敵が目の前まで攻めて来ない限

り、国の法律に裁かれる心配はないのですから」

「それからこれは直接戦闘に影響を与えるものではないのですが、戦後の復興問題に関してです。」

戦時中は軽視されがちな問題ですが実のところ、戦争を始める前の段階から何を置いても一番に考えなければいけないのは、実はこれなのです」

「たとえば敵の横暴な領主が治める土地を、領主を倒すことで解放したとします。当然、解放した軍は民間人に食料その他を供与しますよね？

民間人は大喜びで解放軍を迎え入れて、魔王陛下万歳を叫ぶでしょう。暴虐な支配者から自分たちを解放してくれた名君として、皆が褒め讃えることでしょう」

「さて、ここが問題です。」

彼ら解放された民間人を養うお金と食料は誰が用意し、誰が提供すると思われませんか？

答えは——あなた方ですよ、名門出身の貴族の皆様方。貴方たちが身銭を切つて解放された民間人たちを養わなければならなくなるのです。当然でしょう？

——え？　なんで自分たち上級悪魔が下等な下級悪魔どもを食わせるために金を払わなきゃいかんのかって？

解放地域の住人がカオス・ブリゲード側に与さない様にするためですよ。決まってるじゃないですか」

「暴虐な支配者が居なくなつたからつて、壊された家屋が元に戻ることはありません。戦鬪で消費された水も食料も戻つては来ないのです。

なのに自分たちを解放してくれたはずの魔王軍は、悪い領主様を倒してくれただけで自分たちには何の保証も与えてくれない。最初は与えてくれても戦争が長期化して物がなくなり見栄を張る余裕まで無くなつてくると、途端に支給される物資の質と量が悪化し始める。

物流が滞りはじめ、必然的に経済状況は悪化の一途を辿ることになり、首都から遠い地域ほど配給は届きづらくなつて、辺境部に至つてはほとんど野ざらし状態で放置される事態に陥つてしまう」

「そうなれば、どんなに下等と蔑まれている民衆たちでも気づくことでしょう。

『自分たちは、魔王に見捨てられたのだ』と。

戦争が長期化し続ければ確実にそうなるでしょうし、そうならざるをえません。

そして飢えた民衆が行き着く先は、反動的なテロ行為です。

政府要人を狙い、『自分たちを見捨てた悪い領主の同類』と口汚く罵りながら正義の刃であなた方を御家族諸共殺しに掛かつてくる事でしょう。

もう安全な家族旅行は戦争が終結するまで楽しめそうにありませんね。ご心労、お察ししますよ上級悪魔で支配者層の皆様方」

「ああ、言っておきますがグレモリー家とシトリー家がいかに豊かで広大な領地を有していたとしても、彼らの財力だけでは全く足りませんので御了承の程を。

は？ そんなバカなって、貴方こそなにバカ言ってますか？ 足りるわけ無いでしょうが、そんな端金だけで。

戦争にはお金が掛かるのです。そりやもう膨大に。時には勝ちを収めた後、国家財政の破綻を招いてしまうほどに。

だから言ったでしょう？ 戦後の復興問題こそ一番最初に考えておくべき問題ですよーってね」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ー会談ルームが重い重い沈黙に包まれる。

並んでいるどの顔にも生気がない。青ざめた表情でうつむいたり、窓の外に目を向けたり、高い天井を見上げたり、何事かをつぶやきながら両手の指を何度も組み替えている奴も居た。

俺は似たような光景を人間界の映画で見たことがある。

敗戦が間近に迫った国家の首脳陣が一堂に会し、対策会議とは名ばかりの沈黙に包まれた無駄な時間を費やすシーンだ。そのとき見た光景と今日の前で実在している光景がすべて重なり、現実なのに非現実感あふれる悲壮な空気を醸し出していた。

そして俺もサーゼクスも、今ようやく分かった。正しく理解した。

こいつらは誰一人として、戦争を主導して敵と戦い国家と国民を守ると言う支配者の責任について真剣に考えたことなど、ただの一度としてなかったのだと言う動かしがたい事実を。

ただ甘い汗を吸いたい。支配者としての特権だけを得たい。責任を取りたくはないが責任ある役職には就きたい。権限は欲しいが地位に伴う責任は負いたくない。

誰もがそうなのだ。サーゼクスが見いだした下級悪魔出身の若手にしても、戦争の脅威について知った途端逃げ腰になっちまいやがった。あれじゃ物の役には立ちそうにねえなあ。

(こりやあ……道を誤っちまったかもな……)

俺は終始無言無表情を貫き通しながら、内心で忸怩たる思いに捕らわれていた。

あんまりにもイツセーたちが眩しすぎて見てこなかったが、これが今の悪魔社会における支配者層の実体だ。上級悪魔の家に生まれたからと言う、ただそれだけの理由で特

権と地位を欲しいままにしてきた連中の化けの皮が剥がれた姿だ。

魔王様とともに新しい冥界を築いていきます等とほざいていた、若きインテリたちの醜悪きわまる無様な本性だ。

（こうなつてむしろ幸いだったのかもしれない。敵と戦つてる最中にこいつ等がこうなつていたら、イツセーたちばかりか俺たちだつてヤバかったかもしれない。）

戦う前に切り捨てるべき人材を発見できただけでも良しとしておくか）

俺が心の中で前向きな結論を出した頃、俺よりも更に前向きな意見が議場に投げられていた。

「ーカオス・ブリゲードもよろしいのですが、私としては近日中に開かれるレーディングゲームの方が気になりますな。」

私見ながら私としましては、リアス様を応援させていただけこうと思っております」

「ーおお、そう言えばそうでしたな。私としたことがウツカリしておりましたよ。いやはや歳をとると物忘れが激しくなるものでして・・・」

「ハハハ、これは然り。貴公は未だ200歳にも達していませんではありませんか。」

まだまだご壮健のまま、後三百年間は冥界の秩序維持に貢献していただかなくては成りません。軽々しく歳などを言い訳に使っていただけでは困りますぞ?」

「おや、これは失言を。かたじけない事です。」

ーさして、私としましても今回のレーディングゲームには並々ならぬ期待と関心を寄せておりまして。なにしろ、ここ十数年の間トップ十名に変化が無かったものですから。

これでおもしろいゲームが拝めそうで安心しておりますよ」

誰か一人が言い出した言葉に、その他にいる全員が追従する。

それによつて自然と議題の内容は間近に迫つた戦争への現実的対処策から、もうすぐ開かれる予定のリアスとソーナ・シトリーによるレーディングゲームへと移り、そのまま完全に忘れ去つたフリを貫徹されてしまう。

目前に迫つた戦争への恐怖を、戦争とはどう言うものかを語ってくれた人間の少女によつて呼び起こされた本格的な戦争を知らない世代の大人たちによつて無かつたことにされてしまう。

あまりにも余りな光景に俺たち数名は声もなく、セレニアに至つては当然の結果だとも言いたげな普通の仕草でメイドの一人に、長広舌を振っている間に冷めてしまった紅茶のお代わりを求めていた。

果てしてこれでカオス・ブリゲードに勝てるのか？

仮に勝ったとして、その後にくるのは本当にサーゼクスの望んでいる未来なのか？

イツセーたちが幸せに暮らしていける世界なのか？

疑問の霧は晴れず、光明が差し込む兆しはない。

冥界を包む無色の濃霧は、どこまでも重く悪魔たち全員の背中にのし掛かかっていった。

「ふむ……我が眼を持つてしても見通せぬ『混沌の渦』か。凄まじく興味を引かれるな。どれ、明日にでもさっそく……」

「やめてください、オーデイン様。あんな小さい子にセクハラなんて……可哀想です」

「……ロスヴァイセ……お主いったい、わしをどのような眼で……」

「あ、これ美味しい。もう一杯ください。」

もしあるのだしたら、アルーシャ葉のティーバックで淹れたのをお願いしたいです」

「その様な銘柄は御座いませんし、聞いたこと自体ありません」

「ですよねー……（ちよつとだけガツカリ。同じフィクションだから有るかもと思つてた）」

つづく

墮天使に愛された言霊少女の日常 さいしよ

第1話 「転校生は、自分が殺した元カノでした」

「転校生の天野夕麻です。親の仕事の都合で急に引越すことになってしまつて半端な時期での転校生とあいになりましたが、よろしければ皆さん仲良くしてくださいね（にっこり）」

がたんっ！

「なんつで夕麻ちゃんが、うちの学校に来てんだよ?！」

驚きのあまり俺は、純和風黒髪美少女転校生の登場に沸き返りかけたクラスメイトたちより一瞬早く、大声でツツコミながら椅子を蹴つて立ち上がっていた。

そんな俺の慌てようなど興味がないとでも言いたげな優しい笑顔で俺に向かい、丁寧な挨拶を返してくる。

「あらイツセー君。この前はお疲れさまでした。体の方は大丈夫でしたか?」

あの時はあなたも全身運動で疲れ切っていたでしょうし、お家に戻ってからご家族にどう説明したのかと心配でしょうがなかったんですよ?」

でも良かった、元気そうで。

“元カノ”として“元カレ”の身体のごことは当然心配ですものね?”

がたがたがたがたつ!!!

夕麻の声を皮切りに、一斉に立ち上がる俺のクラスメイトたち。手にはそれぞれ得物が握りしめられている。

「ま、待て。これは誤解だ間違いだ言い間違いだ話せば分かるー」

『黙れ。裏切り者には死あるのみだ』

「誤解なんだー！ーっ!!!」

コカビエルとの一件から一週間以上が過ぎた今日。

先の宣言通りに駒王学園へ転校してきた夕麻ちゃんの一日目は、俺にとってのみ散々な始まり方でスタートさせられたのだった。

「納得いかない……部長から転校してくる夕麻ちゃんの面倒見るよう頼まれているけど、それでも全くもって納得いかないぞーっ！」

学校内を案内するため廊下を二人並んで歩いてる俺は、三歩下がって後ろから付いてきてる生き返った元カノ夕麻ちゃんに不満と愚痴をぶつけていた。

が、相変わらず面の皮が厚い俺の元カノは平然としたもので、むしろ楽しそうな微笑みを湛えたままやり返してくる。

「あら、それはこちらも同様なのだけど？」

お互いに殺し殺された仲、言うなれば文字通り『殺し合った仲』である以上は、僅かながらとは言え私も思う所が全くないわけではないのだけれど？」

「・・・!!」

夕麻ちゃんの言葉が胸に痛い。

そうだ、あの時俺は確かに彼女を殺した。実際に止めを刺したのは部長だなんて、逃げ口上を言うのは男らしくねえ。自分が犯しちまった罪は自分でつくな・・・痛たたたたっ!!

「ちよつと夕麻ちゃん、痛いんですけど！ 上履きの上から靴の爪先でグリグリするのやめていただけませんか!?!」

あまりの激痛に悲鳴を上げる俺に対して夕麻ちゃんは相も変わらず平静そのもの。「まったく・・・少しは成長しているのかと思つたら・・・」などと嘆息混じりつぶやきながら、落ち着いて大人びた態度で俺と正面から相對する。

そして、靴でのグリグリは継続したまま滔々と語り始めた。

「生まれ落ちてから十数年間、親に甘えて依存してきた生活を送ってきた男子高校生が言うには百年早い台詞だわ。ましてや、未だに戦う意味さえ解せていないあなたには言葉にする資格すらない。

たかだか悪魔に転生したぐらいで一丁前に男やれると勘違いでもした？ だったらあなたははずれ、あの時の私になるわよ？ 仲間のためにも気をつけなさい。

慢心で死ぬのはたいてい自分をかばった親しい誰かなのだから」

「……！！！！」

まっすぐに俺の目を見つめて訴えかけてくる彼女の目力に圧倒されて何も言えなくなる俺だったが、彼女にとっては大したことでもなかったらしく普通に前へと歩きだし「おーい、次どこ行くのー？ 早く来ないと置いて行っちゃうわよー？」と普通に学生らしい事まで言ってくる始末。

「なんなんだよ、本当に……」

再会したばかりの俺が殺した元カノ、天野夕麻。

正直に白状しよう……俺は彼女と、どう付き合っていけばいいのか全く分からなくなっていた……。

「ーイッサーは、天野夕麻と接触したのかしら?」

「はい、先ほどアーシアさんが連絡してくれましたから。ふふ。イッサー君、なんだかとても焦っていたそうですよ?」

「でしようね。でも、そうでないと困るし彼女が側にいる限りイヤでも乗り越えないといけなくなる試練なんだから、キツいくらいが丁度いいのよ」

「ふふふ……」

「……? なによ朱乃、その含み笑いは?」

私がイッサーと天野夕麻を接触させたことに不満でもあるの?」

「いえ別に。ただ、現在の彼女としては恋人の男性に『元カノ』と過ぎた過去は一刻も早く忘れ去ってほしいなと願うのは自然なことですし、吹っ切るきっかけを与えるくらいは別によろしいんじゃないでしょうか?」

「な!?! ちが、そうじゃなくて! あ、朱乃あなた誤解してるからそうじゃないから! 私はググレモリー家の当主として……! って、聞こえてるの朱乃? 返事をしなさい!」

ーお願い待って! とりあえず通信用の魔法具を机においてから話し合いましたよ

う？　ね？　ね？　お願いだからお願いします朱乃様——っ!!」

——閑話休題。

「とまあ、大体こんな感じなんだけど・・・分かりにくかったかな？」

校舎の設備でオカルト研の活動に直接関わっていない場所等、部長から案内して良いと言われていた場所を一通り見て回ってから、俺は夕麻ちゃんに確認をとる。

彼女は真剣な表情でうんうんと何度もうなずいた後、まっすぐ俺の目を見つめ返しながら真摯に答えを返してくれる。

「ううん、すごく分かり易い説明だったわ。イツセー君で、説明上手だったのね」

「そ、そうかな？　褒めてくれるのは嬉しいんだけど・・・」

「ええ、それはもうスゴく良く伝わってきたわ。」

あれだけ覗きや痴漢行為を連発していたイツセー君が通報されていない時点で、この学園が魔王の支配下にあるって事がね！」

「そっちなかよー！」

そっちなのかよー！もつと他にも色々あるだろ墮天使的に！

きみ、どんだけ人間界に毒されてんの!?

「今見てきただけでも女子の制服を脱がすこと十数回……完全にオーバーキルね。有罪確定だわ。どんなに腕のいい弁護士を雇ったって、どれだけ裕福な資産家が金でもみ消そうとしたって不可能なレベル。」

触ったり捲ったりならともかく、服をバラバラに破り捨てるのは完全にアウトな領域よイツセー君。

同じ女として言わせてもらおうけど、あなた彼女たちの将来に対して責任とる気はあるんでしょうね!?

「それ言い出しちゃったら俺、いったい何十人と結婚しなきゃいけないんだよー!」
「何十人!? そんなに脱がしたって言うの!? それも衆人環視のど真ん中で!」

周りには明日も顔を合わせるであろう級友や、親と顔見知りかも知れない同級生とかが居るって言うのに!?

「やめて! もうやめて! それ以上言っちゃったら俺のさっきの台詞が見苦しい言い訳になっちゃうから!」
口先だけで責任とる気のない、ただの駄目男になっちゃいそうだからこれ以上は!」

「……そう言えばさっき脱がされてた女の子たちって、帰りはどうするつもりなのかしら? あの格好で学外に出たら猥褻物陳列罪で即補導だし、替えの体操服はある

かもしれないけど、これから買い直すとしても届くまで学校休むわけにはいかな
し……まさか毎日体操服姿で登下校とか？

……うわ……

「だからその、人をゴミか何かでも見るような目で見るのはやめて！ マジで凹んで立
ち直れなくなっても知りませんよ!？」

再会したばかりの元カノがすぐリアルで辛い！辛すぎる！出会った直後みたいに、
ギャルゲやエロゲのヒロインみたいであつて欲しかった！

「……とりあえずこの事は黙っておくけど、早めに生活態度は改めた方がいいわよ本当
に。」

このまま行くとあなた、敵に倒されるよりも先に警察に逮捕されてテレビのニュース
で顔写真公開される方が早そうだから……」

リアルな未来予想図！ それも少年性犯罪者ENNDO！
最低最悪なエンディングだ！

「……『本日正午過ぎ、駒王学園の女子生徒数名の衣服がバラバラに切り刻まれるとい
う事件がありました。一時現場は騒然となり、警察が出動する事態にまで発展したよう
です。』

この事件の犯人は同学園の男子生徒I君で、調べに対しI君は「俺は将来、ハーレム

王になる！」などという意味不明な供述を繰り返しており、警察は精神鑑定を受けさせるため同少年を精神病院に移送する予定。

「今後は責任能力の有無が問われることになると思われます」……」

「そこ！　なにテレビのニュースキャスター！　ここに興じている！」

あと、そこ行く女子生徒の皆さん違いますからね！　誤解ですからね！

俺が行く先々でたまたま服を脱がしてしまう場合があるだけで、俺自身に悪意や害意があつた事なんて一度もないですからね！

お願いだから俺を信じて、携帯で通報しようとするのはやめて下さい！」

「……イツセー君。「そんなつもりじゃなかったんです！」が通じちゃったら、警察なんて要らないでしょう……？」

「お前かつて自分が着てた服思い出してから言えやコラーっ！！」

ああもう！　こうなったら自棄だ！　やけくそだ！

せめてこいつの服を脱がせて、俺の怒りを発散させる！

「覚悟しろよ墮天使レイナーレ！　今日こそ俺はお前を……脱がす!!」

「ふっ、いいでしょう。ならばまず、私には紡げない未来を見せてみなさい！　それによつて過去と未来のすり合わせをして差し上げましょう。」

「・・・!? 部長! あの天空に浮かぶ瞳はいつたい!」

「そんな・・・嘘よこんなの・・・か、勝てるわけがないじゃない・・・あ、あれは伝説の魔王バロールの魔眼なのよ! あの瞳に見つめられたら神でさえ死ぬ。死んでしま・・・い、いやあああああつ!!」

「部長!? ああ、もう! この非常時に逃げ出すなんて!

こうなったら木場君! わたくしただけでも戦って一般生徒たちが逃げる時間を稼いで・・・」

「ネズミが、ネズミがまた来る・・・僕を悪夢の世界に引きずり込むため襲いかかってくるーっ!!」

「木場君まで!? じ、じゃあ小猫さんはー」

「・・・(死んだフリ)」

「この・部活動はーっ!!!!!!」

「陛下！緊急事態が発生しました！天野元帥閣下が赴任中の駒王学園において超重力波反応を感知！急速に拡大中！早急なる対処が必要と思われませんが、如何致されますか！」

「……………とりあえずは天野さんに打電。「とつと帰つてきなさいバカ」以上です」

「はっ！至急お伝えいたします！」

「うう、胃が痛いいい……………」

「思えば、悪夢で見た世界にもあなたのような人間はいました。現実の自分がつまらなからと、都合良く強大な存在に転生できないのかと抜かす腰抜けたちが。」

つづく
セ「夢オチですか……いくら何でもベタすぎでしょう……」

14話「冥界の終わりが始まり、帝国による終わりが始まる」

混沌帝国の帝都イゼルローン。

「1ー以上がこの度グレモリー眷属とシトリー眷属らによって行われた、レーディングゲームの顛末であります」

「ご苦労でした。下がって下さい」

「はっ。ジーク・セレニアア！」

余計な一言と余計な片腕立てをして見せてから退室していく情報参謀さん。

今さっきまで映像で見ていたレーディングゲームをはじめとして、冥界での滞在中に幾つかの事件が起きました。

それらには私たちも当然のように巻き込まれたわけですが、だからと言って全てにという訳では無論ありません。

何しろ私たちは本来この世界にいないはずの存在+変質（もしくは反転）してしまつたモノたちの集まり。敵組織が何であれ、私たちの存在自体が想定外のイレギュラーでありアンノウンです。

それぞれの勢力に属していた裏切り者によって構成されているカオス・ブリゲードは成り立ち故の性質上、どうしても内側からの攪乱と外からの挟撃に固執しがちです。

そのため私たちが戦いの主役となる様な状況は、こちらから仕掛けでもしない限りはないと考えて良いでしょう。

「封建貴族制を敷いている冥界において情報は秘匿が基本。トップの不在を長らく秘してきた天界は亡くなった神様が絶対という神権政治。行動的なのに放任主義者で技術発展ばかりを重視し、味方幹部を犠牲の羊に捧げることを躊躇わないアザ・トースさん率いる墮天使勢力・・・どれひとつ取っても、情報共有に理解があるとは思えません。

それらを見限って利己的な繋がりを経たカオス・ブリゲードは自分たちが相対している敵の知らない情報だけを味方から聞き出して、利用しさえすれば優位に立ててしまう。相互の連絡網が途切れ途切れな状態で開戦なんて狂気の沙汰ですよ。

・・・半端な同盟なんて互いに足を引っ張り合うだけなのに、どうしてそんな基本的な失敗を犯すんでしょうかね？ 自称上位種族の皆様方は・・・」

「思えば上がったバカ集団だからではありませんか？」

「・・・言い返すのが難しい状況ですね・・・」

と言うか、私が言い返して挙げる理由も特にはないんですけどね・・・。

介入者でしかない居候の身としては気になっちゃうんですよね、やつぱり・・・。

「ですが今回の場合、弁護の余地ぐらいあるのでは？」

特に匙さんについては、流石の一言でしたよ？」

今回のレーディングゲームに置いて特筆すべき働きを示したのは、意外と言うべきなのか、あるいは「やはり」もしくは「当然」、私的には「ようやく」彼の出番が回ってきたと表現したい匙元士郎さん。

生徒会書記であり、兵藤さんと同じ転生悪魔でもある巨乳好きな男子高校生さんです。

正直なところ彼と私の間に面識は少なく、誰かと一緒にいるときに何度か顔を合わせただけかな時間ダべっただけ。それがかれと私の繋がりの全てと言っても過言ではないのですが、一方で彼ほど強く印象づけられた原作登場の男性キャラは他にいなかったのも事実なのです。

「ようやくの活躍でしたね。むしろ遅すぎたと私などは感じていますが、この件に関して皆さんのご意見は？」

私が問うとゼノヴィアさんが首肯して、紫藤さんは小首を傾げてらっしゃいます。その紫藤さんが挙手して質問されました。

「はい、セレニア様に質問です。『遅すぎた』ってどういう意味なんですかー？ ハッキリ言ってめちゃくちゃ弱そうにしか見えないカスなんですけどもー？」

正直すぎる評価に、私は内心で苦笑を浮かべつつも（表面上は浮かべようとしても浮かばなかったの）どう説明したものと頭を悩ませます。

そこで助け船を出してくれたのは意外にもゼノヴィアさん。帝国側は帝国側で意外さに満ちた展開になってきましたね。今後の流れが楽しみですよ。

「奴と兵藤一誠は仲良くツルむ悪友同士、そういう風にしかな周圀は見ないだろうし、奴らのは大半は同じ認識を共有している。

が、実のところ奴と兵藤の間には海より深く山よりも高い壁がある。それがなにか、分かるかイリナ？」

「あれじゃないの？ ほら、ウエルシュなんちゃらとか言う蜥蜴を宿してるのがどうか言うあれ」

「ウエルシュドラゴンか？ あれはお前、単なる蜥蜴の亡霊もどきだ。他者に取り付かなければ現世に介入することはおろか、声すら誰にも聞こえない低級霊だよ。怨霊よりも弱々しい、ささやかな概念に過ぎないさ。論ずるに足る存在じゃあない。

それになにより着目すべきは戦闘力ではなく、全く別物に関してのことだ」
「?????」

頭に無数の？マークを浮かべる紫藤さん。

彼女には私からもささやかな助言とヒントを送って差し上げましょう。

「彼と兵藤さんだけを対象にする必要はありませんよ紫藤さん。人間関係ですからね。」

「当人たち自身よりも、その周囲にいる人たちが影響は当然のように大きくなりません。特に彼ら二人は、想い人との関係性が大きく異なるようすし．．．」

「．．．．．．．．．．
?????」

一応は考えてみたけど、やっぱり分からない。そう言いたげな顔の紫藤さんにゼノヴィアさんが理解し合った親友らしく、簡潔なたとえ話でまとめさせます。

「巨乳で生真面目な堅物委員長と、お色気担当の巨乳キャラ。おっぱい好きが惚れるとして、どっちの方がポロリが多いと思う?」

「断然、後者ね。．．．ああ、なるほど、そういう事。理解したわ」

理解できたんですか、今ので．．．。いやまあ、大変分かり易かったですけどね?

「つまりは匙君とイツセー君は同じ学年で同期でもある転生悪魔だけど、その立場と置かれている環境は決して平等ではないと?」

「完全なる平等など、この宇宙に存在しない。全ては不平等であり、理不尽にこそ宇宙の摂理は支配されている。」

．．．が、だからこそ強大な力に抗おうとする強い意志に、世界は祝福と試練を与えたがるのだ」

一息付いてから続けて、

「彼ら自身に影響を与えている二人の人物、ソーナ・シトリーとリアス・グレモリー。この二人は一見すると似たような立場に見えるが、その内実は大きく異なる。

片や冥界の名門シトリー家のご令嬢で次期当主でもある上級悪魔、片や魔王を輩出した名門グレモリー家の当主にして現魔王の妹君。

『次期』の枕詞は当人たちにとってはともかく、まわりの古株どもにしてみたらドンダリの背比べだろうから気にしなくて良い。

重要なのは彼女たち自身の持つ『現在』の性質の方だろうな」

「ソーナ・シトリーの夢は『冥界に下級悪魔でも通える学校を作る』だ。

実現するには冥界の住人全員に経済的、物質的、時間的余裕を持たせることが大前提となる以上、レーディングゲームで勝利して設立許可を得たぐらいでは何も成せはしないだろうが、少なくとも彼女は自ら動いて実行した。

そのための明確なビジョンを示して下の者たちを納得させました。

十分に事業計画を成功に導けるだけの将来性を、彼女は示して見せたと言えるだろう」

「では翻ってリアス・グレモリーは何をした？ 何もしていないし、何かをしようとさえしていない。

ただただ男に甘えて助けてもらう、それだけしか出来なかつたくせに、未だ『名門グ

レモリー家の当主』という名には拘り続けている。

しかも、冥界大貴族である当主たち自身が決めた結婚話をギリギリでドタキャンして恋人と一緒に愛の逃避行・・・ハッ！ とんだ茶番劇だな。

お姫様をさらった王子様もつと美形だったら、熱狂の度会いは更に上がりそうだと純粹すぎる国民性だよ、まったく。

支配する側に立つものとして羨ましい限りではあるが・・・さすがに童話と同じレベルで政治を判断してもらっては困る」

「まあ、昔っから女の子はそういう話が大好物だしねえ。」

親の言いつけで無理やり結婚させられそうになったところを、颯爽と現れた白馬にまたがる王子様に助け出されて、新しい国を作るために二人して旅立つの・・・。

———そういえば、何人くらい子供産めば国って作れるものなのかしら？

そもそも諸外国から承認もらわないと、国って樹立できないんじゃないやなかつたわけ？
「国際法上だとそうなっていたはずだが・・・中世物語だしなあ。」

期間が長すぎる上に国名が明言されていない。そのうえ出てくるお城が時代区分超越してたり、服飾史的に有り得ない発展遂げたりとハチャメチャすぎる世界観だ。あまり厳密に考えすぎる必要性はないと思うぞ？

私など、シンデレラはライダーベルト使って変身したんだと解釈している程だしな」

「いや、それはさすがに極端すぎ。せめて魔女のお婆さんがマクゴナガル先生だったんだと思つときなさい」

「・・・はい！話ズレてる！ズレてきますからね思いつきし！ お願いだから話戻して！」

グレモリーさんの悪口言つてもいいから、話だけでも戻して下さい！

「話が逸れたが、要は彼女たち二人の明確な差が恋人たちの立ち位置にも影響しているという事だ。」

「おそらくだがリアス・グレモリーは自分で言うほど名門グレモリー家を理解できていない。いや、理解しようとしたことすら無いのではないか？ 私にはどうにも、そう思えて仕方がない。」

先祖代々続いてきた家名を尊べと、子供の頃から教えられ続けたそれらの教えを鵜呑みにし、自分では縁に家を継ぐことの意味すら考えようともせず生きてきた。そんな彼女が高校生になって身体が十代半ばを過ぎ、第二次性徴期に入る。

その結果、異性の身体に興味を持つようになり、自分のことが異常に気になりだし、社会のルールにも無条件に反発したくなる。こういう輩は往々にして、ロクデナシではすつばな反社会的な男に引っかけやすい」

「うげ・・・それってさあ、単なる反抗期って奴なんじゃあ・・・」

「そのものズバリ反抗期だ。」

思いつ人であるリアス・グレモリーが反抗期となり、伴侶には現実の未来で夫にしたい頼れる男性よりも、漠然として曖昧模糊な形のない偶像に見合った中身を容れられる男を求める様になる。

曖昧で夢見がちな妄想に、赤龍帝という名の伝説にも記されたドラゴンはピッタリ当てはまると思わないか？」

「う、うわー……」

思わず悲鳴にも似た呻き声を上げる紫藤さんと私。

確かにグレモリーさんで時々精神不安定になるなーとは前から思っていましたけれども、だがしかしです。しかしですよ？

いったい誰がどうして厨二バトルのメインヒロインに第二次性徴期なんて設定を求めますか!? どこの誰ですか！ そんなキャラ設定考えついたのは!!

（二応身体だけは）年頃の乙女的に、私は断固として抗議したいです！断固！

「一方でソーナ・シトリーは現実的に自分の夢を見据えて、実現の為に必要で誰が欲しいのか具体的なビジョンを提示できる、半ば少女から大人になりはじめている女性だ。」

共に歩もうと望む方には、ただ強いだけでは全然足りない。それでは彼女を守れは

しても、守るだけになってしまふ。力でしか好きな人の助けになれないと言うのは存外、精神的には利くものなのだ。思わず自己嫌悪に陥ってしまうほどにな」

「それでも彼らには悪魔という種族特性がある。強さだけが取り柄のダメ男が、将来性豊かな賢い女と共に歩める、弱肉強食という名のご都合主義的悪魔社会がある」

「だから彼には選べたはずなんだ。

教師となつて恋人の夢を叶える道と、戦士となつて彼女の夢を守る道。この二つの内どちらだろうとも、彼が彼女と離れることは恐らくない。才能の面から言つても、どちらかを選んだ方が絶対がいい」

「にも関わらず、彼は選ぶことを拒絶した。双方を選んで器用貧乏になる危険性をも乗り越えて見せた。それも赤龍帝という最強の素質的カードを間近に見ながら、比べられることを覚悟の上でだ。

これほどの覚悟をした上で事に挑んでいるのが彼だからな。生きている限りは必ずどこかで活躍せざるをえないだろうと確信していたのさ。

長くなつてしまつたが、つまりはそういう意味での言葉だよ」

「ほええ〜」

感心したと顔面筋肉筋すべてを使って表現している紫藤さん。

私もゼノヴィアさんに全く同感で、ぶつちやけ彼以外に注目すべき男性キャラつて居

ないと思つてたりします。

「付け加えさせていただくならば、彼は悪魔となつたことで人間以上の身体能力を手に入れましたが、周りが異常すぎる化け物ばかりだからなのか奢りを見せず人間らしさを堅持しています。「自分は所詮、人間から悪魔になつただけの存在だ」みたいな感じですね。」

そのため戦い方が非常に人間的であり、とても上手に立ち回っている。自分より強い相手に正面切つて力比べを挑めば必ず負けると言うことを理解できているようです。

工夫と応用、人間が持つ最強の武器と悪魔特性で得た特殊な能力。

これらが無理なく共存できてる彼は、現時点においては世界で唯一完成された悪魔と人間との完全なるハイブリッドです。

もちろん、先ほどゼノヴィアさんが言っていた器用貧乏に陥りやすいと言う構造的な欠陥は否定しようがありませんが、少なくとも現在のところは劣等感が良い方向に作用して間違つた道には進めないようでもあります。

今後において最も期待し注目すべき逸材だと、私は思つておりますよ?」

紫藤さんに、作れる範囲では最大限努力して笑顔を向けると「ふくん・・・?」と不思議そうな顔して反応が返ってきました。いつもの事ながら好きな人たちに思いが伝わらないって、ちよつとだけ寂しいです・・・。

トントン・・・ガチャ。

「ご無礼を、陛下。先日的一件で悪神ロキと戦い、消耗した身体を癒すために療養中だったグレモリー眷属が、新たなレーディングゲームの参加要請を受けて再び冥界に帰陣するとの情報が軍務省に入りました。詳細はこちらに」

重大情報が入りそうだからと軍務省に詰めていたため、この場にいられなかった唯一の帝国軍最高幹部の一人、天野夕麻さんが紙の書類を私に手渡してくれました。

読み進めていく私の指が、不自然に強ばっていくのを自覚させられます。

「確か、レーディングゲーム本戦は悪神ロキの介入によつて無期限延期が決定されたはずでは？」

「御意。ですが、魔王政府重臣たちによる強い要望があり、側近たちからの提言を受けて魔王陛下も了承のサインを記したとの事であります」

「・・・名目は？」

「永らく続いた三大勢力の戦いが終わつて平和を迎えた冥界の繁栄と、今後の古き良き支配体制の浄化を象徴するために」

「・・・」

思わず唾然としてしまいます。

これはもう・・・末期だ。世紀末という言葉さえ生温い、人類国家でさえ迎えたこと

のない最低最悪の末期状態ですよ……。

「陛下、それは違います。冥界は末期状態ではありません。」

とつづくの昔に『話んでいます』。今になって終わりが始まっただけのことです」

天野さんの言葉が胸に響きます。

溜息を堪えつつ、私は必要最小限の情報を確認しました。

「彼女らが最初に当たる対戦相手は？」

「ディオドラ・アスタロト。」

かつてアーシア・アルジェントという名の空気読めない田舎娘が助けた悪魔であり、彼女を破滅させた苦勞知らずのお坊ちゃんでもありローゴミです。

特戦部隊を出動させ、宇宙のゴミを塵ひとつ残さず完全消滅させてしまうことを意見具申させていただきます。

陛下、今こそ冥界降下作戦発動のご決断を」

つづく

「天野夕麻の優しさは不器用ですから」

それはコカビエルの一件が解決してから数日が過ぎ、オカ研部室でおきた出来事が切っ掛けだった。

「近く、天野夕麻が駒王学園に転校してくるからイツセーのクラスに配属するよう頼んでおいたわ。だから後のことお願いねイツセー」

――部長の無茶振りによる第一声から始まった騒動は、結果として俺がクラス中にボコられる事でなんとか決着できたのだが……

「納得いかない……近日中と聞かされてたのが今日いきなり転校してきたのも、制服が間に合いそうにないから少し遅れるかもと連絡されてから二日後に制服姿で転校してきたのも、何もかも全く全部に納得できん！」

朝からの不条理に怒り心頭の俺を眺めながらコロコロ楽しそうに笑っている夕麻ちゃん、聖母のごとき優しさで「大丈夫ですか？ イツセーさん……」と手当てしてくれてるアーシアとの対象比によって、俺は彼女がどんなに変わったところで本性が墮

天使のままなのは変わらないんだなと確信できた。

「自業自得です。学園一の非モテ男がきっかけを得た途端に学園のアイドルと結ばれて・・・そんなの現実に生きてる普通の男の子だったら嫉妬して当然じゃないですか。

おまけにイツセー君つてば調子に乗って、周囲にひけらかすのを目的に町中を練り歩こうとまでするし・・・」

「・・・う。そ、それはその・・・」

「昨日まで同類、あるいは同格だった同士が恋人ができた途端に手のひら返しで上から目線。嫌われて当然ですし、むしろ毛虫のように嫌われてないのが不思議で仕方ないくらいですよ。

「・・・まさかとは思いますがイツセー君、悪魔の力で学校中を催眠状態になんかしていませんよね・・・?」

「してない！していません！お願いだから信じてください！」

必死に土下座したらなんとか許してくれた夕麻ちゃん。ドライブグを宿した俺が一瞬恐怖でチビリかけるほど凄まじい闘気だったぜ・・・怖かった。

（「・・・いや、あれは闘気というか魔王気と言うべきなのか、俺にもハッキリとは判断つかないんだけどな）」

ドライブグがなんか言ってるが今は無視だ。学校にいる間ぐらい、俺は平和でエロい健

やかな生活を送るぞー！

「ーって言うかき、本当になんで転校先がうちなんだよ？」

夕麻ちゃんが生き返ったってだけでも衝撃的すぎたのに、今度はうちの学校に来た転校生だぜ？ 怪しむくらいは普通すぎる反応だろう？」

「あら？ 随分とあなたらしくもない言い草ね、イツセー君。

私に殺されて悪魔として生き返り、私を殺したことでアーシアとともに過ごす今の日常があるんでしょうに」

「・・・!!!」

それを・・・それをコイツが言うのか！ 自分の欲望を満足するためだけの儀式を執り行おうとして失敗した女がそれを言い切りやがるのか!!

「取り消せよー」

「イヤよ」

「取り消せって言ってるだろうが！」

「イヤだと答えたのが聞こえなかったかしら？」

「今度こそぶち殺されたいのか!？」

「出来るものならね、イツセー君。今のあなたに人が殺せると言うのなら、是非とも殺つて見せてほしいところだわ」

意外すぎる言葉に俺の思考は数秒間停止していた。

「……………なんだと？　今なんて……………」

「言葉通りの意味よイツセー君。私はもう墮天使レイナーレじゃない、人間の女子高生天野夕麻なのよ。あなたが私を殺したいというのであれば、私はそれに対して全力で戦うことで応じてみせる。」

人間の少女天野夕麻として、一人の人間としてあなたと戦い、勝利する。

だからあなたも私を墮天使という種族名ではなく、天野夕麻と言う人間個人の名を唱えて殺しに来なさい。それが命を奪い合って戦う相手への、最低限果たすべき礼儀と言うものよ」

「……………」

俺は答えを返すことが出来なかった。

今はじめて気が付いた。

俺は今まで倒してきた相手に対し『敵』と言う認識を持つてはいたが、倒すべき『敵』が何なのかなんて一度として考えたことが無い。ましてや『一人の人間を、敵として殺す』なんて、そんなヒドいこと俺に出来るはずがー

「何を躊躇うことがあるのです？　今まで散々にやってきた事と同じではないのですか？」

「ちがう！ 俺はそんなヒドいことした覚えはねえ！ 見損なうな！」

「どう違うんです？ はぐれ悪魔を主の命令で殺し、主の身に降りかかる火の粉を殺し、『敵だから殺せ』と言われたモノたちを『敵として』殺してきた。」

主の唱える正義を自分の正義とし、正しいと信じて『正義の敵』を殺戮してきたのではないのですか？」

「ち、ちがう。俺は・・・俺は！」

「悪は敵、敵は悪。主は正義で、主の敵は悪。シンプルな思考で非常に宜しい。正しい戦争の論理であると私は高く評価していますが、あなた個人は自己評価を改めたいと思っ

ているのですか？」

「一瞬、空気が色が青ざめたような錯覚を覚えた。」

「何かが一瞬にして大きく変わった。変貌した。ドライグと感覚を共有しているからなのか、そう言った変化が俺にも分かる。」

「ーだが、その変化が何なのかが解らない。記憶ごとドライグから渡されていたなら解ったかもしれないが、今の俺には、日本で平和に育った男子高校生兵藤一誠にはコレが何なのか理解することが出来なかった。」

後でドライグから聞かされて俺は心底からゾットすることになる。

それはドライグが言うところの——「固定化されて空間にも干渉し始めた、濃密すぎる純粋な闘気」であり、つまりは「答え次第ではお前を殺す。確実にな」と言う夕麻ちゃんから俺への意思表示だったのだ。

「あなたがどんな理由で戦おうと自由だけれど、敵を殺すのであればせめて相手と正面から向き合い、相手の目を見ながら殺しなさい。一個の生き物として、ひとつの生命を奪う。そのことを理解した上で自覚しながら相手の命を奪いなさい。

主のために戦い、主の敵を殺すというのなら、主のために自分が敵を殺したいのだと、胸を張りながら敵の首を撥ね飛ばしなさい。

手加減は相手を殺すつもりで、命を奪い合う覚悟をした上で殺しに来ている敵に対して無礼に当たります。一度でも殺すつもりで拳を向けたのであれば、最期の時まで想いを貫きヴァルハラでの再会を誓い合いながら遠慮容赦なく完膚無きまでにぶち殺してしまいなさい。

それが『殺す』と言う言葉を、相手に対して使った者が果たすべき最低限度の責任です。

まさか、それすら考えようともせず敵を殺してきたのですか？　ただ『敵でしかない』存在に対して全否定の意志をぶつけながら？

もし仮に、そうだとしたならばー私はあなたを許さない」

俯き悩む俺の眼前に夕麻ちゃんが右掌をゆっくりと掲げ、開ききったその瞬間に、

「待ってください、レイナーレ様！」

「ー!? アーシア!?」

ハツとなつて前を見ると俺を庇うようにアーシアが立ちふさがり、夕麻ちゃんの視界から俺を完全に隠してくれていた。

当然、俺からも彼女たちの顔が見えなくなっているが、それでも交わされる会話の物々しさが空気の重さを十分すぎるほどに物語っていた。

「・・・なにか私に用事ですか？アーシア。私としては今更あなた如きに拘らう理由の持ち合わせはないのですけれど」

「・・・!! で、でもどうか聞いてください！ イッセーさんは優しい人です！私にとっても優しくしてくれました！ ずっと友達がいなかった私にはじめて友達になつてくれた人なんです！ だからー」

「はあー・・・」

盛大にため息を付いて脱力したように肩を落とす夕麻ちゃん。雰囲気だけでも戦う気力と意志が抜けていくのを実感できた。

彼女はおそらくジト目で俺たちを見つめながら、諭すような口調で言い聞かせるよう

に静かな声で言葉を紡ぎだす。

「アーシア、あなたも人間社会の俗世で生きていくことを望んでいるのなら、これだけは覚えておきなさい。

誰かにとつての優しさは当人と敵対する者にとつて、憎悪と憎しみでしかない事を」

「――!!」

「人の社会とはそう言うものです。誰かが損をすることで他の誰かが巨万の富を得る。

自分が預かり知らない会社が損をすることで、自分が雇用されている会社の収益が上れば素直にうれいでしょう? だってお給料が上がるんですもの。

いつもより多くお金がもらえて嬉しくない人間なんて居るはずがありません」

「わ、私は人を信じます! 人間はそんなヒドい人ばかりじゃありません!」

「ヒドい人? 随分と突飛な発想ですねそれは。

いつもより多くもらったお金で、いつもより美味しい物を家族に食べさせて喜びを感じる人間はあなたにとつて、そんなにヒドい人に見えるのですか?」

「!? わ、私は別にそんなつもりじゃ……!」

「当たり前です。そんなつもりで言っていたのであれば、誰よりも先に私はあなたを殺しています。無知故の愚かさだから見逃してあげているのです。いい加減そのことを自覚しなさい。今のあなたは見ていて不愉快です」

「……(ぎゅっ)」

「そうやって縮こまって引きこもって自分の殻に閉じこもることで、自己を外界から守ってきましたか……つくづく救いようなない傲慢な人間ですねあなたも。正直、失望しましたよ。ガツカリです」

「私が……傲慢?」

「そうでしょうか? あなたが人を救って回ったのは、あくまで傷を癒すことだけ。

神から授かった力で人々を癒す光の聖女、アーシア・アルジェント。……この肩書きのどこにあなた自身が在るのです? 与えられただけの力を不用意にバラマクだけで、あなたが不断の努力の末に身につけた医療技術で苦しむ人たちを救った訳でもないでしょうに」

「!!!」

「あなたの齎す癒しには、致命的なまでに覚悟が欠けていました。傷さえ癒せばそれでよしと言う、あなた自身の無責任さは其処に起因しています。

なんの努力もなく、ある日突然与えられた力で、神の御業に等しい奇跡を具象出来る。いいえ、具象“出来てしまった”。

それがあなたが墮落した最大の要因ですよアーシア・アルジェント。あなたは力を授かったときに道を誤った。その結果がかつての迫害です」

「私が墮落した・・・？　　そ、そんなはずありません！　私は毎日お祈りを欠かさず、神父様の言いつけを守って清く正しい生活を送っていました！　どこも墮落してなんていません！」

「では、どうして癒しの力で苦しむ人々を無思慮に救いまくることが正しいと思ひこめたのです？　それは主キリストでさえ抑制したタブーのはずですよ」

「そ、それは・・・」

「理由は単純明快。彼は天上に在す我らが父君から奇跡のみならず英知も授かっていたから。そしてあなたは奇跡だけしか与えられなかったから。」

それが救世主たるメシアと、ミカエルにとつて都合の良い教会の求心力回復につかうためだけの全自動回復マシンとの違いです。

人々を癒すことで孤独な自分を慰めてほしかっただけの小娘と、人類救済を志した歴史上の偉人との隔絶すぎる差の開きです。

——作られた聖女が、いつまで聖女役を演じていれば気が済むのですか？　いい加減自分の足で立って歩き出さない。人を救いたいし守りたいと言うなら、自分のエゴで相手の拒絶する意思を押し潰す程度の事はしてみせなさい」

ふと夕麻ちゃんの言葉に違和感を感じた。

それはアーシアも同じだったらしく、背中からも動揺が伝わってくる。

戸惑ったようにアーシアは、夕麻ちゃんへと疑問の声を投げかける。

「レイナーレ・・・様？」

「いいですか、アーシア・アルジェント。これはかつてあなたを殺した人間として、せめてもの借りです。借りは返します。一度だけしか言いませんから、よく聞いておくのですよ？」

愛情も憎悪も憎しみも、突き詰めていけば最終的に行き着くところは殺意です。これは絶対の法則です。例外はありません。愛が全てを解決するなんて矛盾は、未来永劫成立する日は訪れないと知りなさい。

——そう言う風に割り切った方が、少しは気が楽になるでしょうから」

「・・・(こくん)」

「愛する者を殺されて恨まないのは嘘です。愛する家族を殺しにくる蛮族を、共に育った愛すべき隣人と混同するのは友情に対する冒瀆です。信仰を盾に自らの犯した罪から目を背けるのは、この世で一番邪悪な行為です。

背負いなさい、そして背負い続けなさい。人生とは重き荷を背負うて遠き道を行くが如しです。

あなたが自分の過去を悔やみ、過去を否定したいというのであれば戦いなさい。戦って、倒しなさい。敵は過去を構成している全て。

自分を聖女に祭り上げながら掌を返すように魔女呼ばわりしてきた群衆も、自分が破壊する要因となった木つ端悪魔も、寂しさ故に奇跡にすがり人を癒す機械となつてでも人々に自分を見てほしいと願つてしまつた己自身の弱さも含め、全てです。

全てと戦い、拳を交わせ、殴り合つた後に改めて相手に尋ねてみなさい。

「自分はこれだけお前たちに怒りを覚えてたんだ、お前たちは私の怒りを知つてどう思つたか？」とね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

「言いたいことはそれだけです。イツセー君には後で謝つておいてください。「適当な口実に利用させてもらつて申し訳なかつた」と」

「え？　もしかしてさっきのあれつて・・・・ぜんぶ演技だつたんですか!？」

「本気でしたよ？　私はあらゆる物事に全力で取り組んでいますからね。手加減を演じるなんて器用なことは出来ません。彼が私の期待をアレ以上下回つていた場合には問答無用で殺していました。そうならなかつたのは不幸中の幸いです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・(サーツ(血の気が引いてく音))」

「ですが今のであなた方の問題は把握できました。次までに修行プランを考えておきましょう。イツセー君にはとりあえず一度、地獄を味あわせた方がいいみたいですからね。今後の課題と言つたところですよ」

「あは、あはははは……」

「精神的にだいぶ痛めつけておきましたから、癒しの力で記憶ごと消せるでしょう。早く治してあげなさい。精神崩壊して別の時空へ旅立ってしまうより前に」

「きやーっ!? イッセーさんが忘れてる間に真っ白な灰になってますっ!?」

「では、後は任せましたよアーシア・アルジェント。」

あなたも好きな男を物にしたいのなら、灰になるまで燃やし尽くせるほど愛の炎を燃え上がらせてごらんなさい。相手に好きな相手が居たつて関係ないのです。

今の時代、愛とは略奪ですから」

「レイナー様……!! ーっって、いまはそれどころじゃない!」

「イッセーさん! イッセーさん! イッセーサーーん!?」

「それでは、おさらばですアーシア! また明日学校で!」

「あ、はい。いろいろと教えていただきありがとう御座いまーうえええっ!」

明日!? 学校!? 今日の日転校つて、私に今のを聞かせるためのお芝居じゃなかったんで

すか!」

「??? なにを言っているのですかあなたは?」

一日だけの転校生なんて、現実存在できるわけがないでしょう?」

「そうですけども! そうなんですけども! そう言う意味じゃなくてですね!」

「??? ああ、いけない！ 閉店タイムセールの間だけ！ 急いで帰らなくちゃワゴン

に間に合わない！ セレニア様の御夕飯に添えるヒジキとレバーの大安売りが！

愛とは早い物勝ちです！ 出遅れれば主導権を奪われ、勝利からは遠のくばかり！

兵は拙速を尊ぶ！ 先手必勝！ 愛とは手段を選ばず自分の物に出来さえすればそれ

で良い！」

「さっきと言ってることが微妙に違ーーーーっう!!!」

「その愛、置いてけーーーーっ!!!」

15話「悪魔たちの黄昏」

部室のテーブルには部長とディオドラ、顧問としてアザゼル先生も座っていた。

朱乃さんがディオドラにお茶を炒れ、部長の傍らに待機する。

俺たち他の眷属が部室の片隅にて状況を見守る中で、他の参加者同士の間で行われていたレーディングゲームの検証会に突如として乱入してきた次の対戦相手ディオドラ・アスタロト。

かつてアーシアが苦しむ元凶を作った男が今この部室で俺の眼前に居て、部長に持ちかけたという交渉を始めようとしていた……。

「リアスさん。単刀直入に言います。『ビショップ』のトレードをお願いしたいのです。リアスさんのビショップアーシア・アルジエントを」

クソ！ やつぱり、アーシア狙いかよ！ つーか！ トレードでアーシアを手に入れるって、それはちよつと酷いんじゃないか！ 求婚した相手だぞ！

俺は今朝アーシアが見せた悲しそうな表情を思い出して、激しい怒りを感じていた。やつぱこいつとだけは死んでも合わないだろうと心に誓いながら。

「こちらが用意できる駒を一覧にまとめてカタログに落としておきました。御覧いただ

いた上で最良と判断された駒をお選びください」

「だと思つたわ。けれど、ゴメンなさい。その下僕カタログみたいなものを見る前に言つておいたほうがいいと思つたから先に言うわ。

私はトレードをする気はないの。

それはあなたの『ビショップ』と釣り合わないとかそういうことではなくて、単純にアーシアを手放したくないから。――私の大事な眷属悪魔なもの」

真つ正面から部長は言つてくれた！ うおおおおおつ！ 部長おおおおおつ！
感動しちゃつたよ俺！

「それは能力？ それとも彼女自身が魅力だから？」

「両方よ。私は、彼女を妹のように思っているわ」

「――部長さんっ！」

アーシアは口元に手をやり、瞳を潤ませていた。部長が妹と言つてくれたことが心底うれしかったんだろう。

「一緒に生活している仲だもの。情が深くなつて手放したくないって理由はダメなのかしら？ 私は十分だと思ふのだけれど。」

「それに求婚した女性をトレードで手に入れようというのもどうなのかしらね。デイオドラ。あなた、求婚の意味を理解しているのかしら？」

迫力のある笑顔で問い返す部長。

デイオドラは不気味な笑みを浮かべたまま「ーわかりました。今日はこれで帰ります。けれど、僕は諦めません」と言い募り、アジアの元へと近づきかけたその瞬間。

ー悪夢が、来た。

「おや、終わってしまったようですね。出遅れてしまったようで残念です。

せっかく物見遊山を楽しもうと降りてきましたのに・・・」

声とともに重い空気が降りてきたのを俺たちは実感する。

こいつの声には魔力すら必要とせずに、相手の精神を痛めつける能力があるみてえだ。

ーくそつ、身体が重くて言うこときかねえ・・・っ！

「よければ相席させて頂けませんでしょうかね？ 私はこの劇に大変興味があるので。」

一流の脚本が一流の劇として完成を見るには、一流の役者が必要だと聞いています。しかしながら今回のキャスティングには不満がありあります。あまりにも出来が悪す

ぎます。もう、本当にダメのダメダメなくらいには」

辛辣に、かわいらしい口調で言つてのけた後、夕麻ちゃんに抱っこされながら移動してきた銀髪の少女は若干頬を赤く染めながら床に降り立ち、テーブルに投げ出されたまま放置されていたカタログを拾つてパラパラ適当に流し読みしてから、

「こんな出来の悪い、最低最悪の人材派遣会社の無能な経営者さんには一言以上言つてやらねば気が済みません。」

当然、この程度のゴミに資源を浪費させたボンクラ息子も含めてね」

終始不気味な笑みを浮かべ続けていたディオドラ・アスタロトの表情がはじめて変わった。

笑顔から怒りへ、怒りから殺意へ、殺意が相手を焼き殺すための憎悪に進化するまで一連の流れに必要とした時間は十秒に満たない短時間だったはずなのに、俺たちが感じた体感時間は数十時間に等しかった。

人間の少女が、悪魔に転生してすらいない、力を持たない人間の少女が人間であるままにレーディングゲームにも参加してくる冥界の名門若手悪魔にたいして当たり前のように喧嘩を売つて見せたのだからしょうがない。こんなこと、誰にも予想なんてできないだろうから……。

(・・・やっぱりコイツは・・・マトモじゃない・・・!!)

俺はこの時、ハッキリと確信した。

転生悪魔どころか名門悪魔でさえ躊躇してしまうような一線を、こいつは常に踏み越え続けている。自分は殺されないと信じているからじゃなくて、「殺されるのが怖くて生きていられるか」とでも言いそうな傲岸不遜な冷静さと常識で相手の理屈を走破しちまう。蹂躪しながらローラーで挽き潰してしまふ。正直言つて危険な奴だとは思ふ。

でも、今のディオドラにはこいつが一番効果的な口撃ができるのも確かなんだ・・・！
「・・・聞き捨てなりませんね。いつたい、僕のどこを見てボンクラなどと言う見当違いな誤解をされてしまったのでしょうか。理解に苦しみます。あなた方人間は初対面の相手にそのように無礼な態度で接しているのですか？」

いけませんねえ、それは。貴方も一応とはいえ女性なのですから、淑女たるもの貞淑さを身につけなくては嫁の貰い手がなくなってしまうですよ？」

「ご忠告に感謝を。ディオドラ・あ・・・アスタロスさん？でしたか？」

・・・まあいいです。それより質問にお答えさせていただきますが、まず初対面の女性に対して説教臭い口調でジェンダーの違いを話題に出す時点で人付き合いの経験値が圧倒的に足りていません。日本ではセクハラに当たりますし、昨今ではアメリカなどでも問題視されるようになってきているとのこと。

・・・ああ、そう言えば冥界では未だに識字率が10パーセントを切っているのですか。いけませんねえそれは。

識字率の高さは往々にしてその国の国力に匹敵しがちです。例外もあるので一概には言えませんが、要は小さな子供まで読み書きできる国は基本的には先進国の括りに入り、力で殴って押さえつけるしか脳のない体力バカの脳筋国家は未開の蛮地にすら劣ると言いたいわけですよ。お分かりですか？ 未開の地に住む蛮族どもの王アスタロス家の後継者様」

ー季節が一気に真冬へ突入したかと思つたぜ。ここまで酷い毒舌の応酬・・・つか、今のところ一方的にセレニアが押ししてるな、一発目だけで。

やつぱこいつ、只者じゃなかった・・・。

「ただし、貴女もいけないリアス・グレモリーさん。先ほどの貴女の件はご自分の思い描く理想に寄りすぎている。公平な立場でものを見ているとは言い難い難い発言でした。

仮にも冥界を背負って立つ覚悟と気概があると言うなら、もう少し第三者的視点も持つべきだと私は考えますね」

「・・・なによ。私の言つたことのどこに問題があつたつて言うのよ？」

自分の発言を否定されて部長が地味に怒ってる！

部長って意外と口喧嘩で負けるの嫌いだからなく。できれば女の子同士で血を見る展開は勘弁してほしいんだけども……

「お忘れですか？ 冥界は時代錯誤な封建貴族制を敷く、力こそが全ての世界です。男性優位の貴族社会にあつて女性が家の所有物として扱われるのは世の習いだ。

現に貴女も家の都合で無理矢理に結婚を強要されそうになつたと聞きましたか？」

「あ、あれはそう言う意味の結婚話じゃなくて……!!」

「はい、そこまで。別に昔の話を蒸し返す気は無かつたのですがね……思い起こさせてしまつてごめんなさい。そう言う意味で言つたわけではなかつたのですが……」

自分が悪いと思つたら即座に頭を下げる事ができる大人になりなさいって、よく言われてはいるけどさ。実際にここまでストレートに自分が悪い言い切れる相手も珍しいんだろうなあ。

「要は周りの部外者たちから見た場合には、貴女たちの事がどう伝わつたのか、どういう風に誤解されているのか？ 誤解されるのであれば、その理由とは何なのか？ それだけを判断基準にして人を調べ尽くせる自分自身に疑問を抱こうとしないのは何故なのか？」

『敵を知り、己を知れば』と言いますが、私にとってこれを実践する方法は只一つ。『自

分は絶対に正しい、相手は絶対に間違っている。——そう考えてしまった自分は冷静であるか否か疑え』です。相手を『間違っている』自分を『正しい』としてしまえば後はひたすら他者否定による自己正当化行為が続くだけですから……』

「……………!!!」

部長がわずかにたじろいだ。

確かに部長も俺たちも感情的な部分があるのは確かだけど……でもそれって普通のことなんじゃねーの？と俺は思う。誰だって正義の味方にはあこがれるだろうし、悪の側になんかなりたくない。そう思うのが当たり前なのに、こいつは一体全体なにをそこまで気にしているんだろうか？ 相変わらず、わっかんねえ奴だな。

「今回の件に限って言えばグレモリーさん、貴女は自分の価値基準を絶対視するあまり、根本から相手を誤解しています。いっさい解ろうとは努力していない。

ただただ倒すべきレーティングゲームの対戦者相手としてのみ調べているから、そう言う単純なミスを起こすのです。勝つのも戦うのもよろしいが、別に戦争しているわけでもない相手をそこまで否定の対象としてのみ視る必要性はなくないですか？」

「……私がディオドラを都合よく誤解して、甘く見ているとでも言いたいのかしら？」
底冷えるような口調で部長が反問する。

ヤバイ、かなりキちゃってる……。半ギレじゃなくてブチ切れする寸前だ。セレニ

ア早く逃げてー!!

「だとしたら異住・セレニア。あなたの方こそ勘違いも甚だしいわ。なにも分かってないかない。

私はグレモリー家の次期当主として彼を正当に評価し、依怙鼻屑も同じ名門故の甘い考えも一切持ち込んでなんかいない。その程度も見抜けないなんて、貴女の洞察力も存外大したないのねーって、なによそのジト目は。なにか私間違っていたかしら？

ちよつと！　なんで重いため息なんか着くのよ！　それだとまるで私が面倒くさいだけの無能みたいに見えるじゃない！

こ、こら！　タイミングを見計らってたかのように、お茶が無くなってたことに気が付かない！　申し訳なさそうにお代わりを要求もしない！

とにかく！　とーにーかーく！

私の話を聞きなさいー！ー！ー！ー！ー！

ドツカーン！と、部長の怒りが怒髪天を突いて天井が少し焼け焦げた。意外に寂しがり屋さんだからなあ部長。無視されてると悲しくなるんだらうね、わかるけどさ。

そんな怒れる部長に、怒ることを忘れたかに見える銀髪の少女が冷静に淡々と事実だけを並べ始めた。

俺たち悪魔にとって、あまり嬉しくない事実だけを列挙しながら淡々とー

「・・・では、御耳汚しに戯言を一つだけ。」

貴女は特権階級の男性が下層階級の女性にプロポーズするという行為について、自身希っている願望『すてきなお嫁さん』を基準にしすぎている。彼は封建貴族主義社会における求婚という行為の意味を正しく理解していますよ。たぶん、貴女よりも正確にねりアス・グレモリーさん」

「な・・・なんですって!? アレが正しい認識だったとも言いたいの貴女は!？」

「だとしたらそれはー」

「男尊女卑、女性を自分と同じ生き物として認識しようとしなさい、女性は生まれながらにして男に尽くすための道具だと言いついて使ひ捨てる。中世ヨーロッパでは当たり前常識だった考え方でしたね。特に、特権階級たる王侯貴族の間では」

「ー!!!」

「『平民風情が生まれながらに選ばれし者、門閥貴族の俺に目を留めてもらえるなんて望外の幸運だ。俺に気に入られたお前には俺を悦ばせる義務がある。』

俺に奉仕し、愉しませるため身体を差しだし、痛みと苦痛にのたうち回って絶望する姿を晒すのは、下等生物である貴様等平民が優良種たる我ら門閥貴族に対して行うべき神聖にして不可侵な義務なのである。」

この世のすべては貴族の物。生きとし生けるすべての命は貴族の財産、貴族の持ち物、貴族の所有物。

所詮は道具にすぎないんだから、お前はさつきと俺に従えばいいんだよ、このクソ尼ビツチが』——そう言う考え方をしておられるのでしょうか？

違いますか？ デイオドラ・アスタロトさん」

——年頃の女の子が放つとは思えない言葉を締めくくり誰もが息を飲みこむ中、デイオドラは、今さつき彼女に完全否定されたデイオドラだけは「愉しそうに」クスクスと嗤い出していた。

そこには先ほどまでと同じ能面のように張り付いた不気味な笑みがあつて、変わらずアーシアを見つめ続けていたが、それをみた俺の心に浮かんだ恐怖はさつきの奴の比じゃなかった。

侮っていた！甘く見ていた！ セレニアだけじゃない！ こいつだつて俺たちから見たら真正銘立派な異常者で、狂った価値観の持ち主だったのか！

「．．．なんの事を言われているのか、まゝつたく理解できませんが．．．とりあえずは一言だけ。

人間の少女よ。今君が言った貴族の在り方は美德だ。非常に正しい貴族の在るべき姿だ。僕はこの一件に関してのみ、人間たちの主義主張を全肯定しているんだよ。

『選ばれし尊き者貴族は、斯くあるべし』と」
奴の言葉で交渉は完全に破綻した。

こいつは必ず俺たちが倒す！そう決意するまでにかかった時間はコンマ一秒にも満たないだろう。

当然こいつにアーシアを渡すなんて論外だ。絶対に禄な扱いはしないに決まっているからな！

俺のなかで何かが軽くキレて、気づいたときには俺はディオドラの胸ぐらを掴み上げて、目の前から奴を睨みつけていた。

「くつくつく……放してくれないか？ 薄汚いドラゴンくんに触れられるのはちよつとね」

「……っ！ この野郎！ 笑顔で言いやがった！ やっぱりこれがお前の本性かよっ！

「なるほど。わかったよ。……では、こうしようかな。次のゲーム、僕は赤龍帝の兵藤一誠を倒そう。」

そうしたら、アーシアは僕の愛に応え……ぶべはあつ!？」

「……へっ？」

「……あ、あれく？ なんでディオドラが部室の壁にめり込まされているんだ

ろう？　なんで俺に捕まれてたはずのイケメン顔が一瞬で、ひつどいブサイク顔になっちゃってるんだろう？　わかかないね、うん。俺よく分かりましえーん。

だから一誠、この件は見てみない振りくつと♪

「おい、やめーブハツ!?　こんな事してただで済むと思ってるのか・・・ピギャーッ!!　やめべくだばいやべべくばばいもうじまじえんがらやめべやめべぶしんじやうー」

「死になさい。貴方のような人畜にも劣り、犬畜生以下の家畜にすら成り得ないゴミは生きていく価値などない。貴様ごとき、笑わせるなゴミめが」

「だいたい、さつきから誰の許可を得て偉大なるセレニア様を見下ろしていた？」

死ね、死ね、死ね。ゴミが、疾く死ね。

陛下がお心健やかに過ぎさるるためにも役に立て。お前の生まれた意味など、イツセー君のパワーアップに必要な経験値としてしかない。

お前は私たちの役に立つ。贄としてな。その為に今日はわざわざ、やって来てやったんだ」

「本当なら！　今日は！　セレニア様とデートして回れるはずだったのに！　お前が予定にない交渉なんか急に持ち込むから！

陛下と過ぎすアバンチュールをぶち壊しやがった責任、どうつける気なんじゃこん糞

口の若手名門を見送る羽目になったのだった。

「私たちもレーティングゲームに参加させてもらいます。蛇に差し出す手土産を欲しているのでしょうか？」

如何なる危険も難関も不確定要素も、一切まったく私は気にしません。好きに卑劣な手段をお使いなさい。私たちはあなたが敗れ、イツセー君の贄となってくれさえすればそれで良いのです。

つまりは利害の一致ですわ。あなたの願いは、我が帝国軍にとつての道具。パライズを創るため、我ら帝国の全臣民が共に未来を歩むため。

私の名は天野夕麻。貴方のような世界の歪さを嘆く者。

諦めなど混沌帝国軍には必要ない。夢はきつと叶う。貴方という取るに足らないゴミを生け贄のひとつとして焼べる事で世界は一步だけ前へと歩を進められる。

——他者を貶すのであれば、その人物から殴り返される覚悟ぐらいはしておきなさい。それが相手に対して払うべき最低限の礼儀と云うものです。貴族の誇りがどうたら言う前にその程度のことは弁えておきなさい。

主に意識が戻った時には、私からの伝言としてそう伝えておきなさい。分かりましたね？」

「……………」

「わ・か・り・ま・し・た・ね？」

「は、はいいいいっ!!! かかか畏まりましたあああつ!!!」

逃げ去るように気を失ったディオドラを引き吊りながら魔法陣へと我先に飛び込む眷属悪魔たちを見送りながら、俺は案外ディオドラって人望無いんじゃないのかなーと適当な気分で感想を抱いていた。

「…………と、言うことになってしまったそうなのですが。」

「私たちも参加させていただいても構いませんか？ グレモリーさん。例のトレー

ディングゲームとやらに」

「…………え？ それが今回の狙いじゃなかったの!？」

「いやその……最初はそれも視野に入れてはいたんですが……あんまりにも彼が私のよく知るキノコ頭のどら息子貴族に似ていたものですから、ついカツとなつてやつちやいましてね…………。正直想定外にも程がある事態です…………たはは」

「たははじゃないわよ、まったくもう。」

でもいいわ。ちようど手駒が不足していたところだし。今回に限り、あなたたちの参

戦を認めます。ただし、ゲーム中は私の命令には絶対服従すること。いいわよね？」
「了解です。ゲーム中に限り、私は自身の人権を一時的に貴女へお預け致しますよう。」

仮契約となりますが、どうぞよろしくマイ・マスター。リアス・グレモリー公爵令嬢
閣下」

「うっふっふ♪ んん、いー気分♪ 最高ね！ これでゲームは勝ったも同然だわ！

楽勝よ！ だって、人数差さえ補えれば私たちグレモリー一派がディオドラなんかに負けるはずがないのだから！

行くわよみんな！ エイエイオーーーーーッ!!」

『おおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!』

勝利を確信した俺たちは一路ゲーム会場[!]に向けて出発した。

その先で待ち構えているカオス・ブリゲードの罠にも気づかずに……。

この時、リアス・グレモリーは少し勘違いをしていた。

『一方的に与える立場を誇示して特権に驕り高ぶった貴族』をセレニアは心の底から嫌悪している。それが今回、天野夕麻の暴走を許してしまった理由であるのだが、そのことをリアスは深く考えようとしなかった。一時の勝利で気をよくした彼女は致命的

なまでに思慮が欠けていたのだ。

何故なら『一方的に与える側の貴族』とは、人間が悪魔に転生させてもらえることを光栄に思えどもも言いたげな彼女自身さえ指し示していたのだから。

数千年にもわたって続いた貴族の特権。

その悪しき伝統を燃やし尽くすべく、今まさに天高く聳え立つ巨城からメギドの矢が放たれようとしていた。

「行くぞ、前線豚ども。出撃だ。降下ポイントの確認を怠るな」

『ヤー・ヘルコマンダール。』

すべては神帝陛下の治める蒼き清浄なる新世界のために」

「よし、では行く。我らに邪神どもの悪意ある加護があらんことを。」

混沌帝国冥界制圧派遣軍第24戦術機甲歩兵团特殊任務班X-1、公式通称『レッドシオルダー』は、これより地球へと降下し、その途中で冥界への短距離リープを行う。

冥界降下上陸作戦『ブリティッシュ作戦』を開始せよ！

地べたを這いずり回るウジ虫どもに、思いつきり熱いのぶち込んでやれ！

ジーク・ハイル！ ジーク・マイン・カイザー！！」

『ジーク・ハイル！ ジーク・マイン・カイザー！！
混沌帝国神帝セレニア陛下に栄光あれー！！！！』

リング外で盛り上がりつつ次回へ続く。

15・5話「15話に書く予定だった内容を一話にまとめ てみた回」

「ーそう言えば、セレニア。お前さん、さつきディオドラの用意した『ビシヨップ』の悪魔どもとアーシアとを見比べてアーシアの方に価値を感じたよな。なんでだ？」

「・・・はい？」

アスタロスさんがお帰りになり、私たち帝国軍とグレモリー一派との間に仮契約ながらも一応の同盟が成立してから先勝記念にと振る舞ってくれた美味しい紅茶で喉を潤していた私に、今まで沈黙しながら傍観に徹していたアザ・トースさんが話を振ってきました。

思わず目をパチクリさせて見つめる私に代わり、兵藤さんが熱い口調で訴えかけます。

「なに言ってるんだよ先生！ アーシアは俺たちの家族で仲間なんだから、ディオドラの奴が用意した悪魔なんかに代わりなんか務まらねえって！」

「うん、お前はそうだろうな。だろうと思ってたし、実際そうだった。だから今は黙れ。話が進まん。俺がコイツに聞いてみたいのは戦略的な意味合いで戦力としてのアーシ

アはどうなんだって事だけだ。家族とかどうとか感情的なことを抜きにしてな。

こう言うのは往々にして身内びいきが入って正当な評価を下しにくい。お前たちが言うのも聞くのも問題あるか分からんが、墮天使の俺が人間のセレニアに聞いてる分には問題あるまい？」

「う……ま、まあそう言うことなら……」

「……そうね。そう言う形式をとってくれるというのであれば……」

不承不承の丁ながらお二方が納得して引き下がられたので、私も真相を開陳しようと思いに決めました。……まあ、それ程大した内容でもないんですけどねコレ……。

「まず最初に誤解を解いておきたいのですが……デイドラさんが率いているアスタロス一派と、リアス・グレモリーさんが率いるグレモリー一派とは大きく内部の事情が異なっており、同列に扱って共通する基準を用いての性能審査は不可能であるということとです。」

双方の得意とするドクトリンが全くの別物なのですから、自陣営の基準だけで『相手チームの誰それとうちの誰それのどちらが強いか』を比べるなんて馬鹿げた行為としか言いようがありませんよ。時間の無駄です。悪いことは言いませんから、やめておきなさい」

「……そう言いきる根拠は？」

「まずは、絶対数が違いすぎる点が一つ。

何十人もの兵士を擁する大規模集団と、リーダー含めて十人にすら満たない零細チーム。

誰か一人でも欠けたら敗北が確定しかねないから少数精鋭を基幹とせざるを得ないグレモリー一派と、代わりならばいくらでも居て減ったら足せばそれで済むアスタロス一派とでは、同じポジションに付いてる同格の選手であつても重要度の桁が異なる。同列に扱って、性能の同じ部分だけを比べ合うことに意味など欠片も見いだせません。

先ほどはグレモリーさんだけに言いましたが、アスタロスさんもまた自分の基準だけで世の中と悪魔すべてを規定してしまっている視野の狭い人物なのだと思いますね。あくまで私の感想にすぎませんが」

感心したように頷きあつてる原作主人公チームに対し、私は説明を続けるためにも紅茶をもう一杯お代わりさせてもらいます。うん、おいちい。

「次にグレモリー一派とアスタロス陣営との、相性の悪さの問題。

こう言つてはなんですが貴方たちグレモリー派は考えるよりも先に行動に移していったときの方が成果を出している。作戦などと言う慣れない事をして、墓穴を掘つてしまった経験が少なからずあるだろうと予測しましたが、心当たりがおありでは？」

私が質問とともに視線を向けると、全員サツと視線を逸らして高い天井を見上げたり

シャープペンを回し出したり、果てはどこから取り出したエロ本を読みふけりだしてしまいました。・・・セクハラじゃね？ 私これでも一応女子高生なんですが・・・。「貴方たちの能力が最大限発揮されるのは、後先考えない突撃時。言っちゃ悪いですが猪武者な在り方こそが貴方たちには最も似合い、もつとも有効に作用する戦い方だと私は高く見積もり、評価している点なんですよね。」

だからこそアーシア・アルジエントさんはグレモリー一派の中にあつて最高戦力足り得る存在なんですよ。他の勢力に属するカタログスベックだけ高いA級悪魔になど代わりは務まりはしません。

彼女が彼女で居られなくなったとき、そのときにはグレモリー一派全体が大きく弱体化して敗亡が確定すると自覚しておいてください。出なければ色々と面倒くさそうだし目前で私の話を聞いていた主人公勢が、一人の例外もなく大口開けて間抜け面を晒してしまいました。

彼らにとつては余りにも意外すぎる内容だったようで、しばらくフリーズが続いた後アーシア・アルジエントさん本人が顔色を蒼くしながらも決死の思いで呼びかけてきます。

「わ、私にそれほど大きな価値があるなんてあり得ません。なにかの間違いです。調べ直していただければ分かりまー」

「アルジェントさん」

聖女様特有のよくある謙虚さを發揮し出す彼女の言葉を私は遮り、あまり好みではありませんが少しだけ強めな口調でお説教をしてみます。ああ、柄じゃない。

自分でも「なに言っちゃってんだろうなー私・・・」と呆れかえりそうになるから好きになれない行為なんだけどなー、これは。

「貴女の過去になにがあつたか私は知りませんし、別段興味も持つてはいません。価値がないからです。終わつた今になつて他人の後侮など聞かされたところで退屈なだけだ。どうせ何もしてあげられないし、知つたかぶつて「分かるよ」なんて齒の浮くような台詞を言いたくもない。反吐が出そうになりますからね。

ただし、これだけは言えます。自らの力量を正当に評価することなく過小評価の度が過ぎれば、それは時に敵を利することにも成りかねません。これから戦いの場に赴くのであれば留意しておくことです。

組織戦において自分のミスで命を失うのは、後方支援要員の貴女自身よりも最前線で戦っている兵藤さんたちアタッカーであることをお忘れなきよう」

「・・・・・・・・異住さん・・・・・・・・」

若干瞳を潤ませて聞いてくれてる、敵性国家足り得る可能性を持つ国の住人。素直だ。

「いえ、セレニア様。そのお言葉は一言一句過たずすべてがブルーメランとしてご自身の身に返ってくることも忘れないでいただきたいのですが・・・」

明らかに呆れかえりながら苦言を呈してくる、私が形ばかりの主権者を勤めている国の最高幹部。素直じゃない。むしろ私には聞こえない。聞こえないつたら聞こえない♪ なくんのことだか、さーっぱりでーす☆

「コホン。・・・話を戻しますが、あなた方とアスタロスのビショップを交換しても等価値の交換にはなり得ません。等価交換でない以上、トレードした相手が『ちくしょう！安物つかまされたあああつ！』てな感じで八つ当たりされたとしても文句言う資格はないですよね。」

なにしろ、作戦なんてあつて無きが如しの場外乱闘においてのみ最大限の力を発揮するのがグレモリーで、兵士を数として捉えることで結果的に全体の総力を底上げするのがアスタロス。

代わりとして手駒を対戦相手に提供できるのは、それだけ均一に戦力を揃えられている証明でもありますからね。

——ぶつちやけグレモリー眷属とその主は、戦争よりも戦闘よりもルール無用の喧嘩が一番向いてるバトルスタイルなんじゃないかなーと・・・」

伝の知多星の名前を言っちゃいましたわよねーっえ!?

どこの誰が、重要な場面になると「私はなんと大事なことを見落としていたのだ!」とか言つて泣いてるウツカリ軍師だつて言うのよーっえ! もーっえ!」

「ーなるほど、ここまでの話はよく分かったよセレニア。

それで? それらの話とアーシア君が僕たちの中で最重要に位置していると言う話には、どう繋がっていくんだい?」

「……いや、あの……背後であなたたちの主と腹心が取っ組み合いの喧嘩を始めちゃってるんですけども……」

「……心配ありません。巨乳フィギュア同士が胸の大きさを競い合ってるだけです。おっぱいバカさんたちの喧嘩は牛さんも食べてくれませんかから無視して良いのです」

「は、はあ……意外と厳しいですね塔城さんは……」

まあ私としても女同士の揉め事には関わりたくはないので、渡りに船ですし乗させて頂きますが……大丈夫なんですかね本当に? なんか、どんどんあられもない格好になつて行つちやつてるんですけど……」

「……平気です。部長がイツセー先輩の前で裸を晒すのも晒させられるのも、いつものことですから大丈夫です」

「はい、承知しております。だからこそアルジエントさんは、あなた方グレモリー一派の最重要人物に位置しているのですから」

「・・・？ ごめん、言ってる意味がよくわからない。それはつまり・・・どう言うことなんだ？」

木場さんが怪訝そうな顔で訪ねかけてくるのを、私は気楽な感じで肩をすくめながら、

「簡単ですよ。あなた達は守るべき対象が側にいる時にこそ強くなり、その対象が弱くて庇護欲をそそる魅力的な女性であればあるほど際限なく強さを増していく性質を持っている。

まあようするに、生まれながらの王子様気質なんですよ。あなた方グレモリー眷属ほぼ全員がね。

アルジエントさんにはグレモリーさんにはない弱さがあつて、グレモリーさんにはアルジエントさんにはない王族と言う名の責任ある地位とは不釣り合いな性質がギャツプ萌えとなる。

タイプは違えど双方ともに魅力的で、基本的には好む対象に性別が影響し過ぎない。男女ともに一定数以上の支持者を得やすく、救ってもらえて側にいられる貴方たちからは命を懸けてでも守り抜きたい対象として愛されている。

「有能な家臣から無私の忠誠を受けられる、おっぱいバカ王女様って存外すごいと思いませんか？」

「ああ………確かに！」

「……自分で言つといてなんですが、何もそこまで力強く首肯しなくても……つか、なにやら知らぬ間に女装男子が混じってましたね今。いつ段ボール箱から出てきてたんだろう……？」

「ん？ あれ、いつの間にやらアルジエントさんの方が段ボール箱に収まっちゃってますよ。これはつまりあれですね。途中から話し聞かずに落ち込んで誤解からズーンとなってる展開ですね。お約束乙です。」

色物集団グレモリー眷属とはできうる限り距離を置いたお付き合いを望んでいる私は無視させて頂きますので、後はご自由どうぞ。

「いくら弱肉強食の冥界だって、王様自身が最強である必要性は全くの皆無です。最強が側に控えて睨みを利かせ続けてさえいれば全くの無問題です。どのみち魔王様ご自身が直々にご出馬なされるなんて、大事になりかねませんからね。」

貴族制を続けるのであれば周辺諸侯を刺激しすぎないよう、いざと言うとき派遣されるのは最小限で最強の戦力となるでしょうし、官僚制を敷き民主的な議会制へ移行していくというのであれば、軍事力を大々的にひけらかすのは大問題すぎるでしょう。」

結局は最小限度の人数で最強の戦力をとなれば、出撃メンバーは自然に特定されてしまします。ならば始めから手駒の手勢全員を自分の魅力で骨抜きにしてしまう方が効率的と言うものですよ。

出撃メンバーの中に混じってる自分に取って代わりうる第二のアイドルが女王様自身に心酔しているなんて滅多にない幸運なんですから、最大限活用すればいいんです。

人との縁と絆の力。出会いの才能と、他者から好かれる才能。

血筋など関係ない、家柄すらどうでもいい。グレモリーさんが持つ最大の才能とは、実にこれなのです」

「そして、それと同質ではなくとも同量以上の質量を秘めているのが、かよわくて思わず守ってあげたくなる薄幸の少女。人を救おうとして人に裏切られた過去を持つ、人間から悪魔になったばかりの半端な正義バカにとつて最高に美味なる人参。

目の前に特大の好物がぶら下げられてさえいれば、兵藤さんはどこまででも強くなれますし、どんな理だろうと無視してのけるでしょう。愛（欲情）故にね」

「愛……理由は違うけど、君とイツセー君には生涯無縁そうだな代物だと思つてただけだね……。おっぱいの縁はスゴいんだなあ……。」

「……木場先輩、遠い目をして現実逃避しちゃダメです。戦わないといけません。リアル（現実）」

「いいんじゃないやありません？　どのみち最後は兵藤さんの性欲が込められた右ストレートで勝つこと前提で作戦を考えているのでしよう？　だったらオツパイ最強でよくありませんかね？　他人頼りならぬ、他人のオツパイ頼りな戦略になっちゃいますけども」

「……ものすごく格好悪いです……」

「……だね。今更だけど、イツセー君との友情について改めて見直したくなる自分が心のどこかにいるのが、ちよつとだけ嫌かな……」

「文字通りのルール（性的倫理観・世間一般での常識）を壊す（ブレイクする）人ですからぬー。なにせ頭の中には性欲がたんまり詰まっっていて、一方で理性は月の彼方にまで蒸発してしまっている始末。」

纏めるなら『何も考えてないけど性欲だけは人一倍な精力絶倫男は無敵で強い』な、エロゲー主人公のノリなんでしょうね、きつと。実際、ゴルゴ13も絶倫設定でしたし。

遺伝子を後世に残せる性欲の強さⅡ生物として最強と言う図式も、食物連鎖の生態系では成立しきませんしね」

「……まさか悪魔に転生してからダーウインの進化論に納得させられる日がこようとは思ってもみなかったよ……生きていると退屈しなくていいね。あのととき死ななくて良かったと心底思える」

「……思うタイミングが最低すぎます。不潔です不潔です不潔です不潔です……」

「うふふ♪ セレニア様だったら。そーんなに性欲が溜まってらっしやったのであれば仰つていただければ、私はいつでもどこでも準備はOKでしたのにな？」

「……さて、今日は駅前のスーパでワゴンセールがあるので帰らせていただきますね。後よろしくお願いします。」

特に、この色ボケ元墮天使さんが町中で乱痴気騒ぎを起こさないよう、よく見張つておいてくださいね？ 駒王町の領主様方？」

「う……ぜ、善処させていただきます……」

はあ……今日もなんやかやと疲れたなー。早く帰つてお母さんのシチューが食べた。あつたかシチューが待っている♪

「この、ミルク吹き出す以外に使い道のないオツパイタンカーが！ 吹き出すミルクでイツセーのためにシチュー作つてあげるから出しなさい！」

て言うかとはみ出しなさいよ、この大きすぎて垂れ下がった醜い墮乳を！」

「シチューだったらわたくしの方が上手に作れますわ！ リアスの方こそシチュー作りの材料に使わせない！」

どのみち恥知らずの恥乳なんか、殿方の前で晒して見せる以外に使い道なんて無いの

でしよう!?!」

「ムキーーーーーッ!!!」

よくも言ったわね牛乳!」

「なあああんですつてええええ!」

半端なサイズしかない、発展途上胸の分際でええええ!!」

「失礼ね! 女子高生としてはスゴく巨大なサイズよ! あなたのほうが異常なの!」

この、牛乳牛乳牛乳牛乳牛乳!!」

「違いますーっ! 私の胸がスペシャルなだけですーっ!!」

貧弱な発展途上はすっこんでなさい! 発展途上胸発展途上胸発展途上胸! . . . 言

い辛い」

「. だくだくだく. (鼻血を流して倒れている。貧血のようだ。人差し指でダイニングメツセージが書かれている。「犯人はおっぱい」. . . 迷宮入り確定だな)」

「. . . お前ら. . . 血で汚れた部屋の床を掃除ぐらいしてつてくれよ. . . 鼻血つて意外と落ちにくいんだからな. . . ?」

この後、血糊ではない本物の血液はスタッフ（教職員・もしくは顧問の先生）が責任を持って処理しました。

混沌としながらく。

16話 「大虐殺です」

「そろそろ時間ね」

部長がそう言つて、立ち上がる。

決戦日の当日。俺たちは深夜にオカルト研究部の部室に集まりレーディングゲームの会場へ赴くため最終準備を終えたところだった。

アーシアがシスター服、ゼノヴィアとイリナは例のエッチな戦闘服で、夕麻ちゃんも駒王学園に転校してきてからは着なくなつてた初対面時の他校の制服姿。他の俺たちは駒王学園の夏服だ。

学区が違うのか、セレニアだけは相変わらず見たことのない制服姿でお茶を飲んでいゝる。微妙に混沌としている気がするが、まあいつものことか。

部屋の中央にある魔法陣に集まると光が走り、転移の時を迎えようとしていた――。

「……………着いたのか？」

光が消え去つて視力が回復してから目を開く。するとそこには、だだっ広い場所が広がっていた。一定間隔でぶつと柱が立ち並んでいて、後方には巨大な神殿の入り口が

「ここが俺たちの陣地ってことかー。．．．そう言う風に前向きな解釈をしていた俺の横で銀髪の他校性は、

「ただっ広い場所の中央に集められてて、周囲に立ち並んだ太い柱が絶好の自然防備壁となり、無防備な空中からは狙い撃ち放題。魔法陣でのワープ移動を使用しているため進む道も戻る道も後方にある神殿ただ一つだけ。

敵を誘い込んで十字砲火を浴びせる上では、最高のクロスファイアポイント足り得る場所ですね」

「!!!」

小さく聞き逃してもおかしくない、でも何故か聞き逃したことなど一度もない独特の声に反応して部長たちが即座に互いを庇い合うようにして構えるが、いまいちセレニアが何を言っていたのか理解できなかった俺は反応が遅れ、神殿とは逆方向に魔法陣が出現しだしてからパニックってしまった。

「え!? デイオドラか!? まさか、今度のゲームは間近で合戦とか!」

「イツセー! バカなこと言っていないであなたも早く構えなさい! 敵がすぐそこまで来ているかも知れないのよ!」

「へ、は．．．え? 敵ってどういう．．．」

何がなんだか分からないまま呆然としてしまう俺だが、他のみんなは分かっているらしく真面目な顔で相談しただした。

「アスタロトの紋様じゃないわね・・・」

「魔法陣すべてに共通性はありませんわ。ただー」

「全部、悪魔。しかも記憶が確かならー」

「記憶違いでも一向に問題ありませんよ。これはレーディングゲームです。魔王をはじめめとして冥界貴族の大御所のみが参加できる余興である以上、事前通達もなく悪魔以外の種族が来ることなどあり得ません。

また、封建貴族制が敷かれており部族ごと領地ごと各家門ごとに集まって暮らしている割合が多い現在の冥界において、部族も家門も関係なく寄り合い所帯ながらも一大組織を形成できてる悪魔の一派などひとつしか存在してはいませんのでね」

・・・??? いったい何の話をしてー

「やはり、魔法陣から察するとおり『カオス・ブリゲード』の旧魔王派に傾倒した者たち・・・!!」

「ーっなっ!?!」

マジかよ！　なんでカオス・ブリゲードが俺たち若手悪魔のレーディングゲームに乱入してくるんだよっ！　テロリストだからか!?　でも、なんで俺たちの試合だけーっ

て痛あつ!! 何しやがるゼノヴィア!!」

「阿呆が。場所と事前に得た情報を符号すれば答えなど考えるまでもあるまい。

デイドラ・アスタロトが魔王サーゼクス・ルシファーを見限つて、カオス・ブリゲードに荷担した。ただ、それだけの話だろうが」

「な、なんでデイドラが部長のお兄さんを!」

「自分が王に取つて代わりたからだろう? 権力を持つ者が支配者に反旗を翻す理由が他に必要か?」

「………な……あ……」

アツサリと、何でもないことのように言うゼノヴィアの言葉が理解できなかつた俺は思わず哑然として黙り込み、次第に理不尽な連中に対する怒りがこみ上げてきた。

許せねえ……! そんな手前勝手な理由でサーゼクス様を裏切るなんて絶対に許せねえ! デイドラの野郎、ぶつとばしてやーあ痛あつ!! またお前かゼノヴィアあああつ!!」

ポコポコポコ人の頭を後ろから殴りやがって! 何様のつもりだこの野郎!

非難を込めて睨みつけてやるとゼノヴィアは呆れたような顔で俺を見つめながら、

「本物の阿呆か貴様は。低い視点だけで他者を決めつけるな。別の視点からも物を見る。支配する側とされる側では事情が異なる、立場が違う。」

背負っている名前の重みも行動の意味も、周囲へ与える影響までもがまったく違うのだ。同じ基準で考えてよいことなど、何一つとして存在してはいないのだ。

生まれたときから支配する側にいた者に、地を這う虫けらの気持ちは分らない。生まれついでての弱者には、強者として生まれた者の孤独は理解できない。

それらを承知の上で相手を否定し罵倒できなければ、身勝手な子供の癩癩と同じだ。感情にまかせて吠えたところで何ひとつ守れないし解決もしない。無闇に敵を増やすだけ。

護りたい者が側にいるなら、言葉はよく咀嚼し吟味してから口に乗せるようにしろ。でないときと貴様の不用意な発言が、仲間と主を死地へと誘う結果を招くことになる」

「……っ!!!」

咄嗟に言い返そうとした瞬間、頭に浮かんだ色々な事が邪魔してなにも言えなくなつてしまい、ただ黙つたまま相手を睨みつけていた俺は冷徹すぎる相手の目力に耐えかねて視線を逸らす。

気づけば周囲を囲まれていて、中の一人が部長に向かい挑戦的な物言いをしてきていた。

「忌々しき魔王の血縁者グレモリー。ここで散つてもらおう」

「……やっぱり旧魔王派を支持している奴らか！ 確かにこいつらにしてみたら、現魔

王に関与している俺たちは目障りなだけだろう。

部長の命を狙う奴らは俺の敵だ！ まとめて叩きのめしてやるぜ！

・・・などと勇みよく構えて気分を一新し、拳を構えなおした次の瞬間――

「キャツ！」

――アーシア!?!

悲鳴が聞こえてきた方へ振り向くと、そこには空中で逆さ釣りされたアーシアを捕らえたディオドラの姿が！

「やあ、リアス・グレモリー。そして赤龍帝。アーシア・アルジエントはいただくよ」

「さわやかにふざけたこと抜かしてんじやねえぞ、このクソ野郎！ つーか、どうい

こった！ ゲームをするんじやなかったのかよ!?!」

「バカじゃないの？ ゲームなんてしないさ。キミたちはここで彼ら――カオス・ブリゲードのエージェントたちに殺されるんだよ。

いくら力のあるキミたちでもこの数の上級悪魔と中級悪魔を相手にできやしないだろう？ ハハハハ、死んでくれ。速やかに散つてくれ」

俺の叫びにディオドラは初めて醜悪な笑みを見せ、それを見た部長が宙に浮かぶディオドラを激しく睨みつける。

「あなた、カオス・ブリゲードと通じたというの？ 最低だわ。しかもゲームまで汚すな

肩が！ 高貴なる僕の右肩からち、血があああああつ!!？」

「あつはははは☆ しつつれーい、ごめんあさくせ〜♪」

あんまり隙だらけだったから、つい手が滑っちゃったのよ〜☆

わざとだけど、かわいいから許してね♡ あつは〜ん♪」

わざとらしくーいや、明らかにわざとだがーふざけた口調とふざけたセクシー

ポーズを取って見せた不意打ち攻撃の犯人は紫藤イリナ。

俺の幼馴染みにして元教会の戦士で聖剣使い。そして、ゼノヴィアと同じく今はセラ

ニアの腰巾着でもある少女。

「多人数で取り囲み、騙し討ちしようとしたのはそつちが先です。

まさか不意打ちぐらいで卑怯だなんだと騒ぎ出したりはしないでしょうね？ デイ

オドラ・アスタロスさん」

一步、俺たちの前へと進み出て、旧魔王派の悪魔たちに公然と胸をさらしながらセラ

ニアは、平然と自分の手下が行った不意打ちを正当化する。

まるでそれが相手のせいであるかのように。非は相手にこそ有るとでも言うかのよ

うに。お前がクズだから自分も合わせてやったんだ、ありがたいと思えとでも理不尽な

要求をしてくるかのように。

「き、貴様……あの時にいた人間の小娘……っ!!」

「異住・セレニア・ショートと言います。ああ、別に覚えておかなくても結構ですよ？
これから殺すつもり相手の名前なんて、戦士ではない軍人には覚えておく価値は皆無
なのでね」

「くっ……!」

「言うまでもありませんが、今のは警告です。先手必勝は戦の常道なのに、取り囲んだ
だけで勝った気になっている甘ちゃん坊やを一撃で殺さなかつたのは貴方がアルジェン
トさんを掴んでいたからです。彼女に当たる可能性を考慮して、先の一撃は警告にとど
めてあげました。」

ようするに貴方の流した血の価値は、私にとって彼女の掠り傷一ヶ所分にすら及ばな
いと言うことです」

「貴様っ!」

「いいですか？ よく聞いておいてくださいね？ 二度は言いませんからね。」

彼女に掠り傷一つでも付けてご覧なさい。あなたを切り刻んで邪神シヨゴスさんた
ち用の餌にして差し上げましょう。貴方以外の誰かが偶然に触れて傷が付いてしまっ
た場合も同様です。

御自身の命を大切に守り抜くため、せいぜい彼女を大切に慎重に丁寧に扱ってあげて
ください。ザコ悪魔のデイオドラ・アスタロスさん」

「……!!」

無表情に嘲笑されるなか、デイオドラは顔色を怒りの赤から青へ、最後にはドス黒く変色させて魔力の弾を放ってくるがゼノヴィアによって軽く切り捨てられ霧散する。

返す刃で切りかかっていくゼノヴィアの攻撃をデイオドラは魔力の弾を放って牽制するが、彼女は即座に後方へと飛んで距離をあける。

逃げるのか臆病者めと口汚く罵りだしたデイオドラの肩を“背後から”放たれた赤い光線が再び貫き、また悲鳴と血しぶき。

血が流れて痛む右肩を押さえないのに、アーシアを掴んでいるから左手が使えない
デイオドラにセレニアは、

「貴方の意思確認は、すでにあの時済ませてありました。ならば情勢から見てあなたがゲーム会場に罠を張ってくるのは道理。見破られている罠は、敵側にこそ利用価値があるものです。」

この会場の周囲は別働隊によって包围を完了してあります。逃げだそうとすれば狙撃されますよ。お気をつけて行動してください」

「お前……お前お前お前お前お前ええええええつ!!」

「アルジエントさんを傷つけたときも同様です。あなたの死命はこの場にいる限り、我々の手の中にあるものとご理解ください」

「……………!!!」

怒りのあまり声を出す余裕もなくなったらしいディオドラは、アーシアを掴んだまま空間を歪ませ退却していった。

「アーシアアアアアアアアッ!」

俺は宙に消えたアーシアを呼ぶが、返事として返ってきたのはセレニアの冷静すぎる冷やかな指示だけ。

「敵指揮官の離脱を確認。統制を失い逃げ場のない、敵残存兵力の排除をお願いしますね、紫藤さん」

「りょうか〜い♪ それじゃあ皆、いっくよー☆

殺つちやえ人造聖剣! 『エクスカリバー・ガリアーン(罪人)』!!」

自分たちに指示を出すはずだったディオドラがいきなり消えちまったせいで混乱している敵にたいし、容赦なく追撃を仕掛けようとするイリナ。武器は、いつか見た聖剣エクスカリバー・ミミックだったが、刀身だけ黒く塗り替えられていた。

少なくとも見た目に関して変わっているのは、それだけだった。

だがー中身は全くの別物だ。あれは聖剣なんかじゃやない。遙か昔にあったっていうエクスカリバーの模造品なんかじゃ断じてない。

あれは兵器だ。正真正銘敵を殺し尽くすためにのみ生み出された殺戮兵器。

その禁断兵器にかけられていた封印（セーフティー・安全装置とも言う）が今、解き放たれる。

「我流『ウエルカム・トウ・ヘル（地獄へようこそ）』」

イリナの手元にあるエクスカリバーの柄から伸びている刀身は一本だけ。

どうあっても剣では一人の敵としか戦えないし倒せない。それが常識だったはずだ

が……こいつらは常識破りの常習犯だ。自分たちにとって邪魔なルールなんざ、ぶっ壊して新しいルールを力付くで決めさせることに躊躇いはない。

この聖剣もそれだ。いや、今まで見てきた中で一番ひどい、最低最悪のルール破りだ。吐き気がする。

なぜならこの聖剣エクスカリバー・ガリアンは敵と斬り合うためではなくて、敵を切り裂き皆殺しにするためだけに作られたとしか思えない、おぞましい武器だったのだから……!!!

ビュルルルルルルルルツ
!!!!

「なっ!!? 剣の刃先が別れたのか!?!」

「だが、それならどうして全ての描く軌道が別々なのだ!?! 道理に合わないではないか! あれは上級悪魔のなかでも取り分け力のある者が使える能力と同じものだぞ!」

「しかし! あれほど多くは枝分かれしない! あれほど変幻自在に意志ある一個の生物であるかのような動きを無数の刃に行わせるなど不可能だ!」

「ならば、あれはなんだ!?! どういう理屈で成立している!?!」

「死ね死ね死ね死ね死に絶えろ〜♪ みーんな綺麗に惨殺だあ〜♪

死体に身分と生まれは関係なくい♪ みーんな最後は死んで土の中♪

貴族も庶民も墓の中♪ 墓の下♪ 土の下♪ 腐って虫に食われて土になる♪

人も悪魔も天使も墮天使もみんなみーんな、お腹を切れば中身は同じ♪

どいつもこいつもお肉の塊、肉袋♪ 肉は切って焼いて食べるが吉よ♪」

イリナの歌う歌声にあわせ、カオス・ブリゲードが無数の刃に包囲されて切り刻まれて死に絶える。

腕を切られて足を切られて切り落とされる。切られた足を拾おうと伸ばした腕を切り刻まれて、失った腕の痛みで上げた悲鳴は四方から襲いかかる刃の檻に閉じこめられて外には漏れ聞こえない。

切られた肉体は更に無数の肉片へと切り刻まれて、原形を留めていられる時間は秒単位。悪魔が悪魔だった物へと変わって、やがて影も残さず完全に掻き消える。

悲惨すぎる、地獄すぎる。この世に地獄が実在するなら、今日の前にあるこれがそうだと本能が俺に訴えかけてくる。

俯いて口を押さえる俺には部長の後ろ姿だけが辛うじて見えているが、イリナとセラニア、それにおそらく残りの二人も地獄を見つめ続けているらう。

その証拠に聞こえてくる会話内容は穏やかに、そして冷静に地獄を観察しているものだったから。

「敵は戦意を損失して逃げに徹しているようです。戦略的には正しい判断です」

「はい。もとより奴らは寄せ集め。アスタロト家に代々仕える譜代の臣と言うわけでもない。雇い主が撤退し、残された自分たちも不利となった現状で命を懸けて戦う気概がある者ならば野合して徒党を組んだりはしませんよ」

「同感ですね。彼らからは勇氣も覚悟も、意地と負けん気すらも感じられません。ただただ恐れと恐怖が今があり、最初は嗜虐心と歪んだ悦びのみがありました。」

彼らの言う戦争とは、自分たちが一方的に敵を殺せる虐殺のことです。

敵が自分たちに対抗できる力と意志を有していない時だけ発揮される勇敢さは、蛮勇ですらない。単なるサディズムに過ぎません。身勝手な親が、無抵抗と信じる子供に対してのみ暴君になれるのと同じ理屈ですわ」

「・・・斯くて日は沈み、旧魔王派の零落は決定づけられた、と言うわけですか。呆気ないものでしたね。」

あれでも積み上げてきた時間と歴史だけは冥界一だと聞いていたのですが・・・」

セレニアの言葉にゼノヴィアが「ふっ」と微かに笑い、首を振る気配を見せた後、

「伝統の正体は時間です。どれだけ長い時間それを尊い、すばらしい、正義だと信じ続けてきたかで伝統を根拠とする正義は正当性を得られる。」

現在という視点から見れば、今より古いものこそ正義となるでしょう。当時の過去から見れば、より古いものが正義と言われていたように。

要するに正義とは時間のことなのです。数千年間の時を経て降り積もった歴史こそが、伝統に正当性と権威と力を与えている。古いものが正しい。長く続いたものこそ正義なのだと、つまりはそう言うことでしょう?」

「・・・過激ですね。それに、やや自虐的にも感じられます」

「自虐ですからね。長い間信仰などという子供の遊びを絶対視してきた自分への戒めです。あんなものは路傍で拾ってきた石を、綺麗に磨き上げると同じ事でした。」

石も刻めば人の姿を取るでしょう。皆で頭を下げて御神体だと崇め奉れば神の像にもなるでしょう。神の教えも人が口にした時点で、人界で使用される平凡な人語に成り下がる。

所詮、どちらの正義が正しいかなど、その人が正しいと思うか否かだけで決まってしまうものですよ」

「ゼノヴィア！ あなた・・・！ 私たちグレモリー家が主張する正義と、カオス・ブリゲードが主張している正義とが同じものだとしても言いたいもの!?!」

「最初から存在している正しさなどないさ。歴史ある大国に君臨する王家も、元をたどれば一介の平民に過ぎん。現に、魔王サーゼクス・ルシファアの先祖は魔王に仕える臣下の一人に過ぎなかった。

それが何代も歴史と時間を積み化されていくうちに尾緒が生えて、権威という名の飾りも付き、魔王などと言う仰仰しい名札が付けられたことで、国家の正義そのものになった。

ふん。伝統がどうたら言うのであれば、今は亡き先祖の仕えた主君の地位を篡奪して魔王を僭称している己が兄でも、恩知らずとして糾弾すればよからうよ」

「ゼノヴィア、あなた・・・あなたって人は————っ!!」

パンツ！ と、柏手を打つ音が響いて部長とゼノヴィアの間で迸っていた険悪な雰囲気
の雷光は霧散して、後には白けた雰囲気だけが残された。

その白けた空気の飲まれたのか、いつの間にか俺の体調も持ち直していて普通に立ち

上がることが出来たし、吐き気も治まっている。

音の主、両手を自分の胸の前であわせたセレニアは何事もなかったかのような態度で俺たちの方へと振り返り、いつも通り平常運転な口調と声音で告げてきた。

「時間切れです。紫藤さんの露払いが終わりました。我々はこれからアルジエントさん救出のため進軍するつもりですが、グレモリーさんたちもご一緒しませんか？」

私たちの暴走とやりすぎを制止する為のポジションに付けますよ？」

「・・・!! ーわかつたわ、その提案を承諾しましょう。これから一時わたしたちグレモリー一派はあなたたちと行動を共にします」

「結構ですね。では先行してトラップ類の排除を試みておきます。あなた方は後ほど体調が回復してから、ゆっくりとお越しく下さい。

ーもちろん、やむを得ない場合をのぞき、敵は出来るだけ捕縛を優先するつもりではおりますよ。アスタロスさんのせいでは有耶無耶になっちゃいましたが、本来私たちはゲームに参加させていただいている側ですからね。この程度の命令は聞き入れるのが筋と言うものでしょう」

「・・・わかつてるなら、それでいいわ」

「では、後ほど神殿内で。」

ああ、言うまでもないとは思いますがアスタロスさんが逃げ込んだと思しき神殿内に

は女性を玩具として弄ぶ、嗜虐趣味の彼が『すばらしい、美しい』と尊んで神聖視している如何にも悪魔らしい芸術品が置かれてる可能性がありますので、ご注意ください。では」

最後の一言で俺たちの足を再び地面に縫いつけてからセレニアは、鉄の蛇の群みたいな剣を振り回して地面を抉りながら進んでくイリナを先頭にして、まっすぐに神殿へと向かって行ってしまった。

つづく。

ディオドラ・アスタロトVS混沌帝国軍三長官VSドライグ・イツセーの戦いまで後少し！

17話「まじめに書いた原作6巻の言霊解釈編『序章』」

「おいつちにーさんしー、おいつちにーさんしー」

駒王学園体育館裏。

この場所で今日も俺はアーシアと二人三脚で朝練をしていた。付き添いはいない、二人だけだ。練習を始めた日に比べればだいぶマシになったと思うし、深夜の悪魔家業の際に使ってるチャリ移動も苦痛に感じなくなった。

俺もすっかり修行根性が身についたもんだと、自分で自分を褒めてやりたくなるな。

「あうー！ いち、に！ はうう！ さん、しー！」

以前はスタミナ不足から遅れがちだったアーシアも、今では必死についてこれるようになった。やっぱり日々の練習ってスゴいと思う。コツコツと努力を重ねることが上級悪魔になる最短の近道なんだよな。山籠もりの成果は出てるぜおっさん！

「・・・あら？ 誰かと思えばイツセー君たちじゃないですか。こんな朝早くに会うなんて珍しいですね」

「え・・・？ ゆ、夕麻ちゃん!？」

ふとグラウンドの方から走ってきた女生徒がいると思つたら、なんと驚いたことに俺

の元カノ夕麻ちゃんが体操着姿でジョキングしているとところに出くわしてしまった!

こ、これは眼福だ・・・! むしろめちやくちやレア映像なんじゃないか!? えっと、カメラはどこだ永久保存用に撮影する高性能カメラは・・・。

不純な動機でキョドリ始める俺に対して夕麻ちゃんは、爽やか笑顔を浮かべて見せる。それはまるで天使のように邪心のない無垢な笑顔で、彼女が本当は墮天使なんだという事実を一瞬忘れてしまいそうになるほど魅力的な微笑みだった。

「あなたたちも朝練ですか? 早朝の清々しい空気の中で行うジョキングは、気分もすっきりして気持ちがいいですよね」

「分かるなあ、俺もその気持ち。朝ってなんか意味もなく清々しく感じられて、無性に体を動かしたくなるんだよな」

「はい、私もそう思います。今日も思わず皇居の周りを三周して、今さっき戻ってきたばかりなんですよ。最近ではジョキングがブームになってるみたいで素晴らしいことだと感心させられますね」

「・・・・・」

俺(と、追いついてきたばかりのアーシアも)完全に沈黙。脳が機能を一時停止しました。再起動するまでの間しばらくお待ちください。

「——はっ!」

・・・・いかん！　あまりにも有り得ない現実を前に一瞬だけ別の世界に旅立ちそうになつちまつたぜ！　あつぶなー！

本気で気をつけないと今の夕麻ちゃんはマジで危ないな！　常識はずれを常識としてやるからな！　て言うか普通、女子高生はどんなにブームになつても朝練に皇居までジョキングしたりはしないとと思うんだが!?　むしろ行けるのか!?　駒王町から日帰りだ!?

どんだけ距離あるのか知らんけど、少なくとも俺の使つてる自転車で行ける距離ではないと思うんだが！

「日々のたゆまぬ修練こそが、健全な肉体と精神を鍛え上げる・・・」

昔の人はやはり偉大ですね。人の本質を捉えた言葉を簡明に書き記して後世に伝える残す。難解で分かり難く、極めなければ使えない極意書などより余程スゴくて尊い人類の至宝です。後の世に生きる人たちのためにも、出来るだけ多く残したい本たちですよね」

「お、おう?」

なんかよく分からんこと言われたけど、とりあえず健康第一、修行は大切って言いたいことだけは分かったから良しとしところ。

「とろろで・・・」

夕麻ちゃんはタオルで軽く汗を拭き、スポーツドリンクの入っているともしきペットボトルを一口飲んでからアーシアの方へと振り返ると、不思議そうな表情で声をかける。そこに悪意はまるで感じられない。ただ本当に彼女を気にしているらしい気遣いが見て取れる。

うゝん・・・こう言うときには正直、複雑な心境にさせられるんだよなー。

セレニアたちとは敵対はしていなくても味方つて訳じゃないし、夕麻ちゃんは完全にセレニア派な上に時々常識はずれの力を発揮して理不尽なこと強制してくるし、良い奴なのか悪い奴なのかよく分からん。

少なくともこう言うときには、敵に見えなくなるんだけどな。

「アーシア。何を思い詰めているのですか？」

「.....」

「言いたいことが有るならば、口に出して相手に伝えなさい。言わなくても分かる、通じ合おうと言う事もあるのでしょうが、それを最初から期待して事を進めるのは怠慢ですよ。」

人が自分の気持ちをつかってくれようかなど、相手次第です。相手に伝えようとする努力することこそが自分の成すべき問題であり、考えて工夫すべき課題と言うもの。

まずは言葉として口に出し、相手に伝えてから二人で考え始めなさい。一人きりで成

り立つ人間関係など存在しないのですからね」

「……あいつかわらず、最近の夕麻ちゃんはカッコいいなあー。カッコヨすぎて最近食われがちなんですけど俺？ クラスの話題を夕麻ちゃんが独占して話についてけないんですけど！ おっぱいの話に誰も乗ってきてくれないんですけど！ 誰も相手にしてくれないんですけど！」

超人女子高生伝説は聞いててスゴく面白いけど、たまには別の話題についても話そうよクラスみんな！ ヒマラヤ登頂とか太平洋横断とかはテレビネタだけで話そうぜ！

「……あのとき、彼を救ったこと、後悔してません」

アーシアのつぶやきに夕麻ちゃんは両目を細めて黙り込み、俺は少し前に聞いたアーシアの過去話について思い出す。

アーシアは協会にいたころ傷ついた悪魔を救った。それによって異端扱いを受けて居場所を失い、悲しい思いをした。

その助けた悪魔こそーディオドラ・アスタロト。俺たちが次のレーディングゲームで戦うことになった対戦相手の名門若手悪魔だったんだ。

けど、アーシアがディオドラを救ったのはアーシアが優しかったからだ。それを俺は責めない。責められるはずがないさ。アーシアは良い子なんだから。

「・・・解せませんね」

——「ただ、夕麻ちゃんにはご不満らしい。

いや、どちらかと言えば不可解だと言いたげな表情を浮かべながら、じつとアーシアの眼を片時も眼を逸らすことなく見つめ続けている。

道理が通らない、筋が通らない、道筋が見えず物語が破綻している、主人公の人間性が理解できずに感情移入することがまるで出来ない。そう言いたげな表情でアーシアを見つめたまましばらくの間黙り込み、ため息をついてから頭を振って静かに、だが苛烈な言葉で先を促す。

「かつての私はあなたを道具として利用しているだけだった。道具の話などともに聞いてはいなかったし、理解しようとも思っていないかった。

その点に関して私のあなたへの理解度がイツセー君のそれより大きく劣っていることは自覚していますが・・・それでも、これだけは断言できます。

墮天使レイナーレから見ても、人間の少女天野夕麻の視点から見たとしても。アーシア、あなたの悲しむ心はどこに向けて誰に抱く感情なのか全く見えてきません。

人々が自分をどう見ているか分かった上で聖女を演じ、自らの本音を誰にも語らず聖女と言う名の「人を癒すための機械」として生きる道を選んだあなたが、どうして捨てられたことを悲しみ、誰かに何かに縋りたいと、救って欲しいと今更ながらに願うのか

が。

私には今も昔もまるで理解することが出来ないのです」

両目を見開き大粒の涙を瞳一杯に溜め込みながら、アーシアはそれでも手で目に浮かんだ涙を拭って夕麻ちゃんの瞳を睨み返そうとする。

夕麻ちゃん是不動だ。ほんの僅かな身じろぎすらしない。ただ悠然と立ちほだかつてアーシアを見つめ、話の続きを求め続ける。

睨み合うだけでは何も変わらない、そう決意したらしいアーシアが語り出したのは彼女の過ごした過去の話。教会で聖女だったところにディオドラと出会い、破滅するまでのいきさつを丁寧に、礼儀正しく細かいくところまで、聞くのは二度目になる俺にも退屈しないように工夫しながら話してくれた。

夕麻ちゃんは何も言わない。ただ聞き役に徹し続けている。

やがて捨てられるときに一番シヨックだったこと、自分を聖女として担ぎ上げたカトリック教会の誰一人として捨てられる自分を庇ってくれなかったことまでも。

「あのころの私は自分の祈りが足りなかつたんだと思っていました。これも主の試練なんだと、私がダメなシスターなので、こうやって修行を与えてくれているんだと。頑張り続けなければいつかきつと、お友達もたくさん出来てお花を買ったり本を買った

り……………」

「……………」

「でも、誰も現れなくて。そんなときイツセーさんに出会って救われて、こんなダメな私のことを友達だと言ってってくれて！」

だから私は今いるここが好きです。駒王学園が好きです。ここで始めた新しい生活は私にとって本当に大切に大事で大好きなことばかりでとっても素敵なんです」

「……………」

「……だから今回の件で、またダメな私のせいで素敵な皆さんに迷惑をかけるのが怖いです。駒王学園にも、オカルト研究会にもイツセーさんのおうちの方々にも迷惑なんてかけたくありません。だから——！」

「だから、なんですか？」

明確な否定の意志を込めて、夕麻ちゃんはアシアの決意を打ち砕く。

怯んだように後ずさりするアシアに近づこうとはせずに、ただ呆れ果てたと言いたげな態度と表情で盛大に嘆息する。

そして、時間を無駄にってしまったとでも言いたげな口調で吐き捨てるように語り出すのはアーシア・アルジェントと言う少女の『不誠実さ』と『楽な生き方』。双方への侮蔑と否定と断罪の言葉。

「あなたは私の元にいたころと、何も変わっていませんね。今も昔も他人にしてもらったことしか考えていない。他人に縋って、救ってもらったことしか考えていない。

主の試練とうそぶきながらも、結局のところは痛みをおそれて他者と関わろうとしない自分の臆病さを正当化しているだけ。

ダメだダメだと罵ることで自分を罰し、哀れでいたいけな救われることしかできない自分の立場を肯定しているだけの楽な生き方です。ハッキリ言いましたよ。反吐がでる思いですよ」

「……わたしの主への祈りと信仰心が、自己保身のためだったとでも仰りたいのですか？」

このとき初めてアーシアは顔中に怒りを満ちあふれさせて夕麻ちゃんを睨みつけたが、睨まれてる方は微風かなにかと解釈しているのか長い黒髪を梳きながら平然としたままアーシアへの否定の言葉を放ち続ける。

「違うというのであれば、何故あなたは試練を乗り越えようと努力しなかったんです？

ただ耐えるだけ、ただ続けるだけ、ただ言われたことを言われたとおりにやって毎日

の仕事をごなすことが神の与えた試練の越え方だとも主張したいのですかあなたは？」

「そ、それは……その、違くてーっ！」

「アーシア、あなたは友達が欲しかったと言いましたね。」

その言葉を、願いを、希望を、自分という一人の人間が持つ当然の権利の主張を、誰か一人に対してだけでも分かってもらおうと努力しましたか？

自分は聖女などと言う「人を治療できる生物」ではない。ちゃんと意志を持って好き嫌いもする、ただの平凡な少女にすぎないのだと、たまたま主選ばれて奇跡の力を与えられただけで機械でもなければ化物でもない。決して魔女ではないし、人々に癒しを与えるだけで心を持たない願望器なんかであるはずがない。

私は人間です。人間として生まれて生きてきた、アーシア・アルジエントという名の一人の少女。ただそれだけなんです。——そう断言して見せた事が一度でもありますか？ アーシア・アルジエント。聖女としての機能に自らを貶め、受け入れてきた少女よ」

夕麻ちゃんの言葉が終わるころにはアーシアの表情は真つ青を通り越して真つ白になりかけていた。顔中脂汗まみれになって足をブルブル震わせて。今にも倒れそうなアーシアを見ていられなくなった俺は思わず彼女たちとの間に割って入って、レイナー

レの視界からアーシアを見えないよう背中に庇う！

「おい、やめろレイナール！ アーシアを虐めてなにが面白いんだ！

アーシアは良い子なんだぞ！ すっげえすっげえ良い子なんだぞ！ 良い子なのに周りの連中に裏切られて傷ついたんだからアーシアは悪くねえだろうがよ！」

「なぜ？ 言われたことには素直に従い、嫌なことでも笑顔で引き受け、相手の立場も人種も地位も身分も年齢も性別も見た目も一切考慮せずに分け隔てなく癒しを与える『誰にとつても都合がいいだけの良い子』であり続けた彼女を、周囲の人間たちの過半が『人の心を持たない機械』として扱ったことの一体なにが悪いというのかしら？ 教えてくれない？ イツセイ君」

「そ、それは……」

まっすぐ俺の目を見つめて問いかけてくる夕麻ちゃんの言葉に、俺は即答できなかつた。弁護はしたい。守ってやりたい。アーシアと他の連中のどっちが悪いと聞かれたら迷わずアーシア以外を選ばふけど、でも。確かに少しだけ思ってしまったんだ。

『流石にそれは都合がよすぎる』って……。

「アーシアの抱く、救済への祈りに嘘偽りはなかった。信仰心に陰りは見えず、人々の役に立ててうれしく思う気持ちは純粹そのもの。まさに絵に描いたような聖女と言えるでしょう。」

理想的で理想的で理想的で……理想的なだけだった。

その絵には彼女の個性がまったく見出せない。聖女というモチーフを描けば、モデルがアーシアでなくとも聖女アーシアを描いた聖画が出来てしまうほどに。

アーシアの思いは間違っていない。ただし、思いを他人に伝える方法を徹底的に間違え続けた。彼女が見せなければならなかったのは『聖女としてのアーシア・アルジエント』ではなくて『アーシア・アルジエント』と言う一人の人間として生きる少女の生の姿だった」

「願望器という機械に意志があるなどと誰が思う？ 誰が信じる？ 誰が理解してやれる？ 誰が機械に意志が有るか無いかについて真剣に考えてやろうなどと考えるのか。

誰もを分け隔てなく癒す願望器が、敵を癒す機能までもを持っていた。これを恐れないう人間などいない。そこまで人は強くないから。

願望器が自分たちのことを見ないままで誰しも平等に接して特別扱いしようとしないう、『人類すべてを同じ生き物としか見ていない化け物にしか見えない』から人々は恐れられた。化け物が化け物と手を携える可能性を。今まで自分たちを守ってきた便利な道具が、今度は自分たちに脅威となつて襲いかかってくる可能性を。『人の心を持たない機械に人の気持ち分かるはずはないから』怖くなつて放り捨てた。ただ、それだけのことだったわけではありませんか？ アーシア」

つまらなそうに、本当に本心からつまらなそうに言い切った夕麻ちゃんの言葉にアーシアは間違はなく顔色を回復できないまま必死の反撃を試みる。

「・・・聖女としての役割をこなせなくなれば、教会に私の居場所はなくなります。人が居場所を守りたいと願うのは、そんなにいけないことだとお考えですか？」

「別に。むしろ居場所を守るためなら敵と戦つてでも守り通すべきだと私は考えていますから、その考え方には心底から賛成できますね」

「でしたら・・・!!」

「もつとも、無償で与えられた奇跡の力を何ら負担も負わないままに、求められれば誰にでも無償で散蒔いてるだけの行為が『居場所を守る』と言う、尊い行いとして認定されるのならと言う前提条件付きでの賛成ですが」

「・・・っ!!」

アーシアは再び黙り込んで唇をかみ、今度こそ何も言えなくなつて下を向いたまま沈黙の底に沈んでしまう。

そんな彼女の反応など意に介してない元墮天使は、堂々と胸を張つて世界に対し、俺たちに対して自分の信じる思想を声高に断言してみせる。

「教会側が用意した聖女の地位。それはアーシア・アルジェントの人格を必要としない物だった。むしろ邪魔ですらあったのではないでしょうが？ 奇跡を起こす願望

器に人格など必要ないと、ただ奇跡さえ起こせばそれでよいのだと。『道具は道具としての機能だけを持ち、必要な間だけ使い続けられればそれでよいのだ』と。

だから教会はアーシアを道具として扱い、優遇し、厚遇した。

そして願望器としての機能に欠陥が生じたから、壊れた機械として用済みの道具を捨て去った。すべてとは言いませんが、教会幹部の大半の認識としてはその程度のものであったわけではありませんか？

良い子だけで個性のない、よくできたお人形さんみたいな女の子だったからこそ『道具としてののみ』可愛がることができた。同じ人間として見ることも出来なかった。良い子だけど、良い子だけの顔のない願望器アーシア・アルジェント。

その生き方は、私の求める試練の有り様と異なりますね。まったく人の意志が感じ取れない。ただただ怠惰な臆病さと狡猾な卑屈さだけが鼻につく」

「.....」

「ひとつだけ、最後に助言を残しておきましょう。」

何かを手に入れたいと思うなら、あるいはそれが人の心であるとするならば。

好きな人を傷つけることを恐れてはならない。それは相手をおもんばかつての精神作用などでは断じてないから。

自分が傷つけた相手に嫌われたくない、只それだけの臆病な利己心だけが根底にあ

る、浅ましくて醜い醜悪きわまる唾棄すべき感情ですよ。

人を愛し、その人のことを本気で考えるのならば、傷つけることも嫌われることも恐れてはいけない。只ひたすらに相手を思い、相手のことを考えて自分なりに最善と信じた道を行きなさい。例えば先に待つのが失敗と後悔一択しかなかったとしてもです。

そうすれば、何も選ばないで見ただけの自分が結果だけを見てあざけ嗤うクズになる可能性だけは完全に潰せますよ。

まあ、好きだ愛してると言っていた人物に「おまえは失敗したから選ばなくてよかったです。成功して後悔してない未来を掴んだ私の方が偉い」と自慢したいのなら止めませんけどね。

どちらでも、どちらかでもなくても自分の好きな道を選んで進みなさい。道は常にいくつも前に広がっているものなのだから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

墮天使が語る人間論。それを前にして悪魔になって日の浅い元々は人間だった俺たちは一言も返すことが出来なかった。

そうして言う内にチャイムが鳴って校舎へと戻る。

俺たちの一日が始まる。

元氣のないアーシアが、精一杯虚勢を張って元氣があるように見せかけている姿が、

今日なんだかヒドく痛々しく見えて仕方がなかった。

なんの起承転結もなのままに続く。

18話「ロスヴァイセが無くコロニー」

「なるほど・・・それで？ その後、天野さんはどうしてらっしやるのですか？」

「落ち込んでますよ？」 「イツセー君が墮落してしまった・・・」 って」

「あの人の基準で墮落認定されましてもね・・・」

私は苦笑しながら（と言っても口元をほころばせる程度。相変わらず表情が動きませんでしたので）紫藤さんの話を聞いて、少しだけ物思いに耽ります。

結局のところ私たちもまた、他とあんまり変わっていないんだよなー、と。

天野さんに限った事ではありませんが、混沌帝国に所属しているメンツは基本的に思想的偏りが激しくて、どちらかと言わずともハッキリと右翼に近い考え方の人たちばかりです。

強いて言えば『個性の強すぎる自分たちが我慢することなく生きていられる、自分たちにとっての理想社会が民主主義』だから命がけで護るに値するし、否定する者は無視できても許容することは絶対がない。

そんな感じの考え方で、ぶっちゃけヒドく排他的集団でもあります。

自分たちの歪みを自覚し、それでも良いと言ってくれた隣人と守り合える環境がイゼルローンであり混沌帝国。ここ以外で生きられても『自分らしく』は生きられない。

護っているのは『自らの信念』であつて、私はその象徴にすぎません。『自由意志を護る』という信念を貫く象徴として私が一番身近にあつた。だから担いだ。その程度のことなのだろうと推測していますが、真実がどうかは知りません。興味もないですしね。好きにすればいいとしか。

「あの人は普段、突つ走ることしか知らない人ですからね。休憩するのも偶には良いでしょう。どうせそのうち復活するのでしょうから、今は気にせずお買い物を楽しむといたしましょう」

「はい！ 陛下！ ．．．いえ、セレニアさん」

「うん、よろしい。物覚えのよい子は好きですよ。」

二人が敬礼しかけてから慌てて言い直すのを見て、私は「良い子、良い子」と彼女たちの頭を撫でて上げたくなりましたが諦めました。．．．どう考えても身長が足りていなかったの．．．。

今、私たちがいるのは駒王町にある商店街。御夕飯に使う食材の買い出し中です。

どうやら兵藤さんの家は大規模改築がなされたらしく、大きく変貌しておりましたが

周囲の民家に気にした様子がないところから見て、魔法なりなんなりで詐欺を働いたんでしようねえ。

世界的大財閥令嬢がヒロインのギャグ漫画でもあるまいし、お金払えば即座に解決する賃貸問題なんてあるはずなのに、いい気なものです。

ーましてや資金の出所がグレモリーさんの実家、すなわち現魔王さまの生家ともなれば一体どれほどの搾取が行われたことか。開戦を前にしながら、そこまで剛毅に出られるのは自信があるのか自暴自棄なのか・・・判断に迷うところです。

ちなみに随行してるのは紫藤さんとゼノヴィアさんの二名のみ、他はお留守番です。帝国軍の最強各二人を護衛に買物なんて、私も偉くなつたものだなーとは思いますが大していい気分にもなりませんね。成金趣味にでも走つた気しかない。

生まれついでの庶民は終生に渡って、庶民感覚以上のものを持つことは出来ないように生まれついでにいるのでしょう。たぶん、きつと。おそらくは。

「・・・ん？ あれは・・・」

制服姿の（一応ですが）駒王学園に入学してもらってます。本国に学籍は無いらしいので）ゼノヴィアさんが何かを見つけて足を止め、眺めるような視線で遠くに視線を送りました。なんででしょうかね？ ちよつとだけですが、気になります。

「どうしました、ゼノヴィアさん？ 何かありましたか？ もしくは、誰か見つけたので

すか?」

「この場合は「フリー」ですね。兵藤一誠です。姫島朱乃と……??? 何でアイツら味方の背後から遮蔽物に隠れて進んでいるんだ……?」

おまけに距離が近すぎて視認できてしまうレベルだし、偽装も……いや、仮装だなアレは。

て言うか、タイガーマスクの仮面をかぶって何がしたいんだ塔城小猫……猫はどう頑張っても虎にはなれないのだぞ?」

「あれじゃない? 小さな子供が大きくて強い大人の真似したいだけの奴。背の低いのを気にしてる生意気なガキがよくやるでしょ? そう言うバカな真似をさ。「私は子供じゃない、もう大人だ」とかなんとかホザきながら。」

バカだよなー、ああいうの。大人になったら大人になったで「昔は良かった、あの頃が一番」とか言い出すだけなのに」

同じく制服姿の紫藤さんが、鼻を鳴らしながら情け容赦なく批評します。

『青春時代の思い出は一生の宝物、大事な物ほど無くした後に気づくのだ』……って、バツカじゃないですか?!? な気分になるから、ああいう戯言は本気で辞めてほしいんですけどね、私の願望としてはー」

「同感だな。無くしてから思い知るのは不便さであって、捨てた物の正当な価値ではな

い。

あつた時には当たり前だった物がなくなつて、出来て当然のことが出来なくなつた。今まで自分が出来ていたのは自ら無価値と断じて捨てた物のお陰だったと言う事実を認めたくないが故の愚かな自己正当化に過ぎない感情だ。それこそ、語り合う価値すらない」

・・・厳しいな、おい。前世の私と言われてたら血反吐はいて土下座しながら罪をわび、もう許してくださいと懇願していたところですよ。

でも、正しい。

そう思えてしまう自分が今の私セレニアなのだから、兵藤さんたちが変わろうとしな
いのも彼らにとっては当然の選択なのでしょう。

人は変わっていくもの。まあ、そうなんでしょうね間違いなく。

では、変わった後はどうなるのか？ 自分が間違っていると思つた。だから変わるよ
うに努力した。努力した末に行き着いた場所が「間違っている」と言われたぐらいで譲
れるのなら誰一人として苦労しない。

どうしたって自分の正しさを主張してしまう。間違つてないと言うことにしたくな
る。たとえ今となつては信じていなくても『そこに行き着くまでの道程が無駄であつ
た』等とは誰も信じたいとは思わないのですから当然の結果です。

畢竟、彼らも私も私たち参加者全員にとってイデオロギーとは、然したる意味を持たない代物だ。他人も世界も人類の未来すら建前に過ぎない。

戦場に立つ誰もに『その人なりの戦う理由』が存在している。他の人から見てもどうかは関係ない、意味もないし価値もない。自分一人の命を懸ける理由なら、自分一人を納得させられれば十分すぎるから。

だからこそ、私と彼らは合わない。

彼らは強く、主戦力であるが故に主戦場にしか立つことがない。戦争らしくて泥臭い消耗戦に投入するなど問題外だ。

彼らの上には主がいて、その主の上には兄である王がいる。王が戦争を主導して、主戦力は最後まで駒としてのみ動き続ける。

即ち、彼らは兵士。強いだけの少数部隊。

局所的に前線に立つ一兵士の真実は、上から俯瞰して見ることしかしないし出来ない私には理解できない、受け入れられない。

「結局のところ、立場と旗の色が違うだけですか・・・バカバカしい」

「は？　今なんと？」

「なんでもありません。気にしなくていいですから」

思わず漏れ出たつぶやきに二人がそろって反応し、私はおぎなりの反応を返してしま

います。どうにも気が立っているようですね、少し休憩した方がいいのかもかもしれませんね……って、あれ？

「誰でしょうかね？ あの綺麗な女の人は……」

銀髪緑眼ロングヘアーって、どう見ても狙いすぎなのでは？」

「セレニア様……」

「ごめんなさい、わざとじゃないです。決してそう言う意味で言った訳じゃないんで許してください……」

ううう……こう言うときに前世が男って不便だよ。とつさに本音が出ちゃうときがあるんだよ。わざとじゃないよ、わざとじゃないんだよ……（めそめそ）

くそう……このままでは私だけが天然ドジツ子キャラ認定を受けてしまいかねない。なんとかしなくてはー

「オーデイン様!? オーデイン様!? 護衛役の私を置いて、どこに行ってしまったのですか!? この国にきた目的をお忘れですか!?」

アザゼル総督閣下にお伝えしていた日時より予定を早めているのですから、どうか御自重をお願いします！ って、聞こえておられないのですかオーデイン様ーっ!?!」

「……」

「……居ましたね、天然で頭に超がつくほどのドジツ子キャラが。てか、誰？
ゼノヴィアさんに視線で尋ねてみると。」

「え〜と……あれはそう……確かろ、ろ……」

「ロスアナゴス？」

「そう！それだ！ 北欧の主神オーディンに仕えるダルキリーの一人でロスアナゴスと、冥界のパーティーで聞いた覚えがあります！たしか！」

「うん、絶対に違いますよねそれ。どこの誰が北欧神話の登場人物に、太平洋戦争時代に原爆研究施設のあった北米大陸の名前を付けられるかー！」

「……でも、言わない。だって答えが解らないんだもん。答え知らないのに違うって言ったら「え〜。私い〜、そう言うのよく分かんないんだけど〜、なんか違うと思うんだよねえ〜」みたいな感じでアホの子認定までされてしまいかねません。断固として阻止です！」

「おい、その歩くスピーカー。機密情報をベラベラと垂れ流すんじゃない」

「どこの誰が、歩くスピーカーですか?! ……って、あなたたちは確かあの時に……！」

「あ、それなら安心ですね。疑ったりしてごめんなさい。なんだかテンションが異常におかしくて不審に感じたものですからー」

「ちなみにだが、初めからお前に拒否権は無かったぞ？ もし断られた時にはお前の背中に伏せさせておいたミルトンが邪神を召喚して、お前を深海に眠る大陸ハイパーポリアまで拉致監禁永久拘束してしまう腹積もりだった」

「ぎゃーーっ!? なんかに変な格好した小さな女の子が私の背中にへばりついて子泣き爺のようにーっ!?」

「によ? によによ? によによによによ?」

「え? ミルトン、コイツ気に入っちゃったの? フェデラル・ヒルまで連れて行って輝くトラペゾヘドロン」を見つめさせたいんですけど構いませんかって?」

「……どうだろう? この宇宙に生きとし生けるすべての生き物は全部、セレニア様の家畜だからな。許可を与えてくださるかどうか……」

「辞めて差し上げなさいって……可哀想すぎますから……」

「ーだつて? 勿体ないかもしれないけど逃がしてあげようね?」

「によ……」

「ああ、そんなに落ち込まないでミルトン! 大丈夫よ! 私が必要代わりの奴を、適当に捕まえてきて狂わせてあげるから!」

19話 「混沌帝国皇帝令三〇六六号。『神様暗殺計画』発動ス」

「ううううう……ひつく、ひつく……」

駒王町の……まあ、どつかしらその辺の裏路地に北歐から来日してこられた戦乙女さんの泣き声が響きわたってます。

その声はどこかしらではなく、どう聞いても明瞭に物悲しさと悲哀に満ちていて……「殺されるかと思つたよ、怖かつたよ、怖かつたよ」と言う泣き言にも満ち満ちていたために私たち加害者一同は、そろって気まずい思いを味あわいながら歩を進めておりました。

「いやー、ごめんごめん。悪気はなかつただけどねえー。ただ、悪ふざけしてただけで」

「そのどこに悪気がないと!?!」

「いやいや、ないでしょ悪気。だつて危害を加えようなんて少しも思つてなかつたし。」

結果として死んじやつたとしても、所詮は小間使いの従者みただつたから別にいいやと思つただけだし」

「悪気あるよりも性質の悪い理由で弄ばれたんですか私!？」

——訂正。紫藤さんの辞書に『気まずい』という単語は載っていないようです。

慶弔

勝

軽い調子で矛を収めた紫藤さんに、私たち三人は揃って肩の荷を降ろして一息つきました。

「でも、あれくらいで事案になるんだったらイゼルローンで、本当に魔窟ですよね。」

人攫い同然の誘拐で友達を飲みにくいこうと誘いに来るぐらいですから」

うん。私もそれはいつも思ってます。——つか、思ってたんだったら改めろよ、お前らも。

こっちはアレ見るたびに毎日毎日胃の痛い思いを味わってるんですから……。

混沌帝国首都星イゼルローン要塞の名物『黒服サングラスの男たちに友人を誘拐させて友達の家遊びに行こう』イベント。……菓子折りもって、普通にいけよ。

わざわざお父さんの知り合いが経営している人材派遣会社と契約し、人材を常に確保してまで行い続けている意味のない悪ふざけ。何にでも姿を変えられるニャルラトホテプ星人の方に依頼して、毎回別の人間に姿形を変えてから友達を誘拐してきてもら

う。

その後は互いにとつて共通の友人である人の家へGO。・・・訳が分からないし必要性も理解できない。いったい何がしたいんでしょかね彼女たちは。

ノリで行う悪ふざけに、収入を定期的につき込んでくれるなよ、いやマジで。

「・・・まあ、そんな訳なんで私たちの地元では初めてお会いした方を喫茶店に誘つてお茶をご馳走したい時などに、ああいった誘い方をするのです。

馴染みのない方には面食らつて当然の風習かもしれないませんが、そこは文明人らしく海のように大きくて広い器量を持つて許してください、お願いします。

・・・具体的には、瀬戸内海ぐらゐの広さで構いませんので。ね?」

「内海つて、そんなに広くありませんよね!! むしろ狭かったですよね確か!」

あなた方、ちよつとばかり北歐神話バカにしすぎだと思ふんですけど、何か恨みでもあつたりするのですか!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・べつに』

「・・・・・・・・あれ?」

勢い込んで尋ねてみたら、思いの外に重くて暗い沈みきつたような声で返答されちやつて困っている戦乙女の囃。詩的ですね〜(現実逃避)

——ご存じのように我らが混沌帝国は銀河帝国にモロ影響受けまくってる国家ですから、あつちの帝国でも信仰されてる北欧神話には妙に拘りがあるというか・・・自分の理想とかけ離れてたら許さないと言いますか・・・。（ちなみにですが、許“せ”ないじゃなくて、許“さ”ないという部分がキモです）

冗談でカモフラージュしてオブラードに包み込みながらでない、ついつい殺しそうになってしまうとの事でしたので、地上にいる間は必要がない限り『不殺』を厳命しておきました。

なので（彼女たちとしてはですが）比較的友好的な態度を保ち続けているので精一杯な精神状態にあるらしくて、軽々と口を差し挟むわけにはいかないのが帝国軍最高幹部三人と北欧神話関連の方々との関係性です。

「ーそれって？ 紫藤さん、本当にこっちの道であっているのですよね？ その・・・北欧神話の大神オーディンさんだかなんだかがある場所は。」

・・・見た限りでは、さっきからどんなに如何わしくてケバケバしい装飾に溢れかえった店が増えてきてるんですけども・・・」

なので、結果として私が緩衝材の役割を果たさなくてはなりません。うん、面倒くさい。

現在、私たちはロスヴァイセさん（そう言うお名前なんだそうです、正式名称は）が探しているという外国から来日したばかりのお爺さんを捜して歓楽街を彷徨ってる最中です。日本に来たら、まず最初に歓楽街。ススキノにカブキチョウ、スシ、テンプーラなのは神様も外国人もたいして代わり映えしないようですね。

・・・ギリシャ神話もそうでしたけど「愚かな人間どもめ」とか言ってる割にやること成すこと人間と大差ないんですよねー神様つて。子供の投げた石が頭に当たって死にますし。

本当の意味で絶対的な超越者として存在している神様つて神話世界広しといえどもクトウル・・・やめましょう、この話題。自分で考えてて背筋が寒くなるネタなんてゴミ箱へポイでいいです。

情緒不安定になりかけてる私の前で、紫藤さんが自信満々に自分の頭の頭頂部を指さしながら、

「ーご安心くださいセレニア様！ 私が義父様（お父様）より直々にお教えいただいた技の応用。ほら、この『大神リーダー』にビビッと反応しまくってますから！」

・・・妖怪アンテナか何かなのかなー。頭の上でピコピコ揺れてる、その触覚みたいなアホ毛は。あと、途中でなんか変な表現が混ざっていたような気がするのはいのせいですか？

「私の大神リーダーに探知できない大神など、この宇宙に存在しません！」

「いや、たぶんですが大神自体の総数が少なそうなので、ある意味では当然なのではないかなーと」

「てゆーか、対象人数少なすぎね？　大神だけなの？　ギリシャ神話の主神とかは？」

「北欧神話に拘り持つのも程々にしていただきたいのですが？」

「むっ、どうやら向こうもこちらを察知したようですね。こちらに向かって歩み寄って来ているみたいです」

「なに？　それは本当かイリナ？」

「ええ、ゼノヴィア。間違いないわ、私には分かるもの。」

「なぜなら私は全ての生物の接近を臭いで感知し嗅ぎ分けられる、戦場の猟犬なんだからー！」

「……リーダーは？」

「と言うよりも、野生の勘で戦い、仕止めるのが得意な戦場の狂犬である紫藤さんにリーダーは必要なのか否か、甚だ疑問の限りではあるのですが……。」

「まあ、お父さんが教えた技だそうですね、何の意味もないでしょう。」
「なんか面白そうだったんで教えてみました！」とか良い笑顔で宣いそうですね。帰ったらフォークを補充しておくといたしましょう。」

「まったく・・・昼間から女だらけでラブホテルの前で騒ぎ立てるとは、赤龍帝の小僧ともども銀髪の魔王もやりおるわい」

「オーデイン様?! ここにいらしゃったのですか!」

「ですから、オーデイン様。勝手に歩かれては困る案内役の私の身にもなっただきたいと、今し方お願い申したばかりなのですが・・・」

なにやら訳ありな様子をお持ちで三者三様それぞれに登場してこられたお三方の外国人（神&たぶですが天界関係者）を前にして、私たち四人はそろって同じ感想を口に出しました。

『・・・うわー・・・これは痛いなー・・・』

「え、なにその薄い反応!? ワシら（我々は）なにか可笑しな事したかの!?（しまったかな!?!）」

・・・黒服に髭面マツチョなゴリラさんと、見た感じ浮浪者にしか見えない格好のモロクルかけたお爺さん。これは・・・さすがにちよつと・・・

「・・・・・・・・・・」

彼らの後ろで置いてけぼりにされてる兵藤さんと姫神さんにはご愁傷様でしたと、後で菓子折り持参して謝罪しに行つときましよう

「日本神話の皆さんへのご挨拶・・・ですか？」

「挨拶じゃなくて会合な、会合。」

前々から日本の神々にたいして北歐神話の主神から今回の顛末について説明してきたおと思つておつたのだな。それが今回ワシが日本まできた主目的じゃよ。ゲシヤガールとかも目当てではあつたが、本命はこちらじゃな」

またしても場所を変え、今の私たちがいる場所は人気の少ない市民公園の噴水前で。適当に屋台で買ってきた鯛焼きを頬張りながら北歐の神様とお茶するのは思つて

たより乙な気分でした。

「神界の統治者が公園で鯛焼き、神界の統治者が公園で鯛焼き、神界の統治者が公園で鯛焼き、神界の統治者が公園で鯛焼き……」

なんか向こうでブツブツ言ってる銀髪美人さんが見えてたりしますが、とりあえずは無視という進め方で。

ーああ、兵藤さんたちはバラ、バラ……バララントさん？ だかなんだか言うマツチヨゴリラさんと一緒に姫神さんのご実家へ先に向かわれましたよ。彼本人は案内役としての役目がどうのと渋っていましたが、オーディンさんお口添えと、諸事情あつて（お父さんがかつて犯した大失敗タイムトラベルです）姫神家の事情を知る私が連携して口八丁手八丁で言いくるめました。

さすがは脳筋。チヨロいぜ。

「日本の神々というと、京都に住んでいらつしやる八坂さんとお会いになるの？」

「その通り……って、なんでお主が八坂のことを知つとるんじや？ 普通の人間の身には余る力の持ち主たちのはずじやが？」

「なんでもなにも……」

パクリと、一切れちぎって小さくした鯛焼きを口に放り込むながら（一度やつてみたかったです。マナー違反ですけどね？）私はふつうにお答えしー、

なのでしょう?」

「……っ!」

まさか、こういう形で反論されるとは思ってたと言った表情のオーディンさんに私は前から思っていたことをぶつけてみることにしました。幸い彼は三大勢力に加盟しただけで北歐神話は正式に円卓に入ったわけではなさそうですね、「三大」になつたままですから。

「三大勢力連合……いいえ。現魔王、墮天使総督、天使長、それぞれの直轄部隊しか手駒として押さえていない少数勢力同士の寄せ集めが三大勢力連合の実体であると私は仮定しています。権威だけは最高位の方々が集まつてる分だけ見た目は派手ですけどね。

いぎ蓋を開けてみれば、中身はボロボロのズタズタで継ぎ接ぎだらけで数だけは多い寄り合い所帯。

おまけに参加している全ての勢力が内輪のゴタゴタを解決し得ないままに手を取り合つて未来へと進もうなどと、思わず笑い出してしまひそうになりましたよ」

わざとらしいぐらゐに悪意あるよう悪し様に罵りながら、私はこの世界で行われようとしている戦争の根底的矛盾について北歐の大神殿に意見を伺うため、敢えて言葉を選ばず遠慮もせずにズバズバ言わせて頂きました。

「政治の腐敗、差別社会、貧富の格差、法律の改正、守旧勢力から新勢力への権力移譲、技術革新に人権保障問題。他にもいくらでもあるのでしようが、これら長年続けてきた伝統そのものが膿となって国家の癌と化してしまっている状況を、自分たちの世代で抜本的に解決しようと言うのが魔王陛下たち三大勢力の考え方です。

三大勢力が抱える病の病状は抜本的な治療を必要とする段階に達しており、今までと違って痛みを伴わない対処療法ではダメだ、身体が傷つくのを承知で手術台に上がり大規模な外科手術を行わせる必要がある。．．．彼らが抱いているであろうこの懸念は、おそらく正しい。

今のまま進んだところで未来がないのは分かり切っていることですからね。停滞し続けていた時計の針を進ませようとしているだけ、そう考えればあながち悪い考えという訳でもありませんしね」

長広舌を終えて喉が渴いたのでジュースを買いに行こうとしたら、天野さんに紙パツクに入ったジュースを差し出されました。

札を言つて受け取つてしまいました。．．．天野さん。できたら次からは「いちごミルク」以外をお願いできませんでしょうか？ この歳でこれを飲むのは些か辛いと言わ、痛すぎるんですけども．．．。

「．．．では、何故じゃ？　なにが気に食わん？　正しき世になり過ちが淘汰され、失政

が購われるのは民たちにとつても良き事じやろう?」

「良いことですよ? 急ぎすぎさえしなければ、ですがね」

今度こそ絶句したオーディンさんの顔を横目で見ながら「いちごミルク」を頂く私。

「急速すぎる変化は歪みを生みます。何千年も降り積もらせ続けた膿を洗い流すには大河の如く悠久の時間と、穏やかながらも絶え間なく流れ続ける正常な清水が必要不可欠です。」

が、彼らは今を生きる自分たちで過去の全てを精算しようとしてしまっている。後に続く若い世代の未来を考えるあまりに、先を見すぎてしまつて足下が疎かな状態だ。

誰もが焦り、急激な変化と改善を求めて問題の『抜本的な解決』とやらを最良の手段であると信じて疑っていない。それが国民と支配者層との間に埋めがたい巨大な亀裂を入れているのではないかと、私は推測しているのです」

「・・・それは?」

「今を平和に生きたい普通の人々と、未来の子供たちのために明日を戦つてでも勝ち取りたい普通の人々を導く立場の人々。即ち、支配する側とされる側との認識の差。これに尽きるのではないかなーと」

普通のことを言つてつもの私ですが、いつものようにいつもの如くファンタジー

世界の住人たちは驚愕の表情を浮かべてきます。

知識面では私の方が圧倒的に下のはずなただけどなく。これがジェネレーションギャップと言う奴なんですかねー。若い内に経験するとは思っていませんでしたよ、あつはつは。・・・むなし。

「時間と伝統によつて降り積もつた社会の歪みは、なによりも人の心を浸食しているモノです。時間をかけて癒すしか解決手段のないこの問題をヒーローの娯楽番組で誤魔化しながら進めることで何とかかなると思つているからカオス・ブリゲードの台頭を生む。

彼らはテロリストです。三種族による戦争を続けたいという『思想』の元に集つた思想テロの集団に過ぎないので。それを恰も一大勢力と全面的な戦争に突入するかのようにつえている彼ら三大勢力の首脳陣は頭がおかしいとしか私には思えません。

テロとの戦いとはテロ組織を潰すことを目的にしたものではない。テロ思想を根絶しない限りは解決し得ない、社会の歪みからくる政府当局の内側との戦いなのです。外部だけに目を向けていれば減らした敵が補充されて復活を果たすのも道理でしょう。

彼ら戦争を知らない世代の支配者層は、根本的に敵を見誤つたまま戦争に突入しようとしています。

これを指して『敗北の条件』と、人類史では言うんですけどね・・・どうやら神様、天

使様、墮天使様、悪魔様方のファウル・ラインは下等な人間などの其れとは、大きくズレがあるようですね」

私が話し終えた後、しばしの間沈黙がながれます。

サワサワと言う噴水の音と、季節柄故に虫の声が聞こえないごく普通の秋の公園で銀髪ロリ巨乳と、浮浪者の格好したモロクルお祖父さんと、制服着ている女子高生の戦争狂二人と、勇者と書いてバカと読む魔王な女子高生さん一人が暢気な顔してお茶を飲んでいる麗らかな午後・・・風流ですね・・・。

あ、巻き込まれただけの銀髪戦乙女さんを数に入れ忘れてました。反省。

「……………ふむ、やはりな。思っていたとおり、お主だけはワシ等すべての種族の認識は一切通用せぬようじゃ……………まさに適任という奴じゃな」

「……………?」

今、何か仰っていましたかね、この人？

「異住・セレニア・シヨートよ。ひとつ、お主を見込んで頼みがある。引き受けてはもらえまいか？」

「内容次第ですね。無理そうなら断りますし、出来そうであれば我々にもメリットがありそうだったら引き受けるかもしれません」

「慎重じゃな。まあ、よかろう。隠し立てする内容でも無いことだしもう」

そこまで言ってからオーディンさんは居住まいを正し、先ほどとは打って変わって真剣な表情で私に個人的なお願いをします。

「北歐神話の主神として、お主に個人的に頼みごとがしたい。

他の者たちには気取られぬ内にロキを、北歐神話の悪神を討伐してもらいたい。

——要するに、会合を前にして奴さんが出張ってきたところを迎え撃つのではなくて、事前に問題の火種を消化して欲しいのじゃよ。

蛇は卵の内に殺せ、政の基本じゃろう？」

「……さすがは北歐神話内で人間をたぶらかして利用しまくる知恵の神様。エゲツない」
「何とでも言うがよいわ。戦争が終わった後でなら幾らでも聞いてやるし、責任も取ってやろう。」

じゃが、負債を抱え込んだ身でありながら子供たちに任せるだけなのは心が痛む。ひとつ、ワシにも悪事の片棒ぐらいは担がせい。三大勢力首脳と日本神話の神々との会合する場所と時間を教えておくれな」

「はい、了解です。この日時でしたら私の予約よりも前に事が済ませられますね。その時までに発生した事件は、すべて説明の際に事情を説明する事案の中の出来事のひとつに含めていいのでしょうかから楽なものです」

「お主も悪よのう」

「いえいえ、北欧の大神様こそ。ーそれでは、細かい日時とタイミング、敵戦力等の確認に入らせていただきたいのですが……」

こうして私と北欧神話の大神様との間に密約が結ばれて、北欧神話の悪神退治が今回の私たちがこなすべき役目となったようでした。

鬼退治ならぬ悪神退治。いえ、むしろ日本神話の方々には妖怪さんが多いそうですから鬼を守るために神様退治といったところでしょうか？

そして神を殺す使命を負った選ばれし人間たち。

さしづめ「神を殺す物語」とでも名付けるべき悲劇の主役たちの名はー。

天野夕麻。勇者と書いてバカ。「神なんて人が作った道具です」

紫藤イリナ。戦場の猟犬にして戦争屋。「人をブツ殺すための戦場に神はいない！」

ゼノヴィア。軍人を天職と言い切る猛将。「私の辞書に神の教えとか信仰心とか、まどろっこしい言葉は載っていない」

.....

あれ？

次回こそバトルです！

20話「言霊少女は悪神の悪意を弄ぶことを良しとする」

「……………これは、どう言うことだオーディン」

あ、本当にきましたよロキさん。

よくこんな見え透いた手に引っかかれましたねえ。変な方向に感心しきりですよ。

「案外、素直な人なんですかね？ 直情型ですし。」

「いや、どうと聞かれてものお」

私の隣に立って白いお髭をしごきながらオーディンさんが惚けたような口調と表情で適当に返すのを聞いて、ロキさんの額に浮かんでいた血管が一気に数を増して狂顔具合にも更なる磨きがかかりました。

本当に乗せやすい人で助かりますね、嫌みでも何でもなく心の底から感謝したくなりますよ。毎回これぐらい楽に勝てる敵ばかりなら良いのですが……………。

私たちが今いる場所は海の上であり、お空の上でもありません。ちなみにですが、時間帯は昼日中です。

悪魔でも天使でも神様でもない私たちには戦う時間を限定する理由も必要ありませんからね。一般人を戦いに巻き込んで犠牲を出したくないのであれば、一般人がこれ

ない場所を戦場に指定して敵を誘い出せば良いだけです。城内に立て籠もる敵を城外へと引き摺り出してから決戦に及ぶのは戦術の基本でしょう？

私の傍らではオーディンさんがリラックスした様子でパイプを燻らせながら飛んでいる、対する北欧の悪神ロキさんは真つ赤なお顔で息急ぎ切ながらの登場です。

そして平凡な一般人に過ぎない私が空飛べるわけ無いので代わりに用意していただきました、フライングプラットホームです。二つのプロペラが回転する“ブーン”と言う虫の羽音みたいなのが場違いすぎてめっちゃ迷惑。本当になんでこんなの用意したんだ、混沌帝国科学技術省は……。

「ワシにはお主がなにを怒っておるのかサツパリであるからして、分からぬものは答える言葉を持たぬよ。」

如何なミーミルの瞳とはいえ所詮は時代遅れの骨董品。何でも見通せて理解も出来る万能道具ではないんじゃないぞ？

なにしろ数千年前に手に入れて以来、一度も手を加えぬまま使い続けてきた故な。錆つい取るかもしれないし、機能不全に陥っているかもしれない。

あるいは経年劣化と言う可能性も……」

「やめよっ!!」

鋭い怒声に遮られて台詞を中断されたオーデインさんですが、特に不快そうな顔をしてはおられません。

それもそのはず、脚本通り順調に進んでいく茶番劇に出演していて不愉快がる道理がないからです。もしかしたら失笑なり苦笑なりを浮かべそうになるのを我慢しているのかもしれないね。本当に楽が出来て良い相手ですねえロキさんは。

「仮にも北歐神話を司る神々の長が口にして良い単語では無かろう。今のは聞かなかつたことにしておいてやる故、もう二度と我が前で斯様に無様な言葉を口に出すな。さもなければ——」

「ならば、アップロードしなかったから型落ちしたとでも言えば良かったのかな？ それとも、売れ残りの不良在庫を押しつけられたの方がお好みかの？」

「~~~~~!!!」

独りでにボルテージを上げまくっていつてくれる北歐神話のトリックスターさん。これは流石にカルシウム足り無すぎてる様な気が・・ああ、それでゲルマン系なのに色素が白いですね。納得です。遺伝子的に劣悪なお生まれなのですよね、分かりますよ。

「……オーデインよ。私の目が曇っていたとは言え、一度は義兄弟の杯を交わした仲だ。古き友誼を恩情として、殺す前に一度だけ聞いておいてやる。」

この此度のことについて申し開きたい事があるならば、聞くだけ聞いてから殺してやる故に疾く囁るがよからう」

必死に尊大さを保とうと振る舞いながら、震える語調が彼の内心を分かり易すぎるほどハッキリと表現してくれました。

曰く、今すぐおまえ等を皆殺しにしないよう我慢するのは、とても難しい・・・と。

「そう言われてものう・・・」

その事実を知ってか知らずか（こうなるように仕向けたのが私たちの側ですので、知らなかったら大問題なのですが）オーデインさんの反応は素っ気ないです。

「ざつきも言ったが、ワシにはお主がなにを怒っておるのかサツパリ分らん。いたい、なにが問題だというのじゃ？ なにが原因で、それほどまでに猛っておる？」

肩をすくめるような仕草をして見せてからオーデインさんは、それまでよりも一層芝居がかった態度と口調で（つまりは見ているムカつかれるような表現で）相手が求めた答えを、こちらが与えられるのを待ち望んでいた言葉をようやく放たれました。

ふうー、長かった。ようやく半分ですかー。先は長いなあ。

「だいたい、申し開きもなにも此度の件に關しての説明は先ほどお主に送った手紙にすべて書いておいたであろうに。いったい、なにが不満だったというのじゃ。つくづく頭のおかしな奴だのう」

「~~~~~!!!!!!」

それだ!! その手紙の内容・・・あまりにも破廉恥で恥知らずな戯れ言ばかりを書き連ねた薄汚い紙の束。

語れば口が、聞けば耳が腐るは確実な沼氣に満ち満ちた忌々しい言語の数々。北歐神話の一柱として看過できぬ。

あの様な、あの様な、あの様な・・・あの様な冒流的な記述に満ちた書分などこの時の中で在ってはならないもの! 我が炭すら残さぬほど徹底的に焼却処置を施した故、安堵して召されるが良い!」

「拝啓、吹く風もどこか冷たくなつて参りましたね。悪神ロキ殿におかれましては益々ご清勝のことと、お喜び申し上げます。

さて、この度わたくし不祥なる大神オーデインは真に偉大なる至高の絶対者を見つけ、矢尽き、弓折れるまで力の続く限り精一杯彼の御方の元で戦い続け思う存分に暴れる所存であります。

何分にも未熟きわまる北歐神話の大神風情で御座いますが、偉大なるカイザーの御許で今後とも宜しくご指導ご鞭撻くださいますようお願い申しあげたところ、一兵卒としての参陣を許可していただける運びとなりました。

ですので、ぶっちゃけ北歐とかラグナロクとかスケールの小さすぎる戦争はどうでもよくなつちやつたんで、北歐の大神辞めます。後のことは宜しく。敬具」

「……………黙れ」

「『PS、そんなにラグナロクが待ち遠しいんだつたら自分で早めちやわないのー？」

大昔に予言された戦争を再現して世界最後の日とか、ダツサ。80年代過ぎない？現代世界滅ぼしたいなら、少しは現代のことも学びなよ中世蛮族、プッスー」

「……………黙れと言うに」

「『PSのPS、悔しかったらワシを倒しにおいで？ 神話大好き夢見がちな坊やへ。偉大なる絶対者に仕えて宇宙戦争を行う、元北歐の大神オーデイン様より。』」

言い終えた瞬間、既に私たちは辺境銀河の片田舎に浮かぶ水の星に愛を込める必要が無くなっていました。何故なら、この地上から消滅させられていたからですー。

「な……こ、此処はいつたい何処なのだ!? 我は何故このように禍々しい形をした冒瀆的な決闘場の中央にいる!？」

慌てふためく北欧の悪神さん。

うん、急拵えにしては良く出来てますね、このナザリック地下代墳墓の円形闘技場をモチーフにしてデザインされた仮設戦場。

ドリームランドの北方、『伝説の神々』が居城として居る巨大な縞瑪瑙の城カダス城内に造らせては見たのですが……意外と細かいところまで凝った意匠を施されてるなあ……原作ファンでありアニメ版のファンでもあるのですが、お土産に彫像のどれか一つだけでも持って帰っていい？

ま、とりあえずはイゼルローンへ通信をと。

「こちらは転移を完了しました。そちらの案配は如何なものです？」

『こちらら機器制御室、全ての状態はオールグリーン。良好です。その場の座標軸に存在

していた全ての有機物の転移を確認できました。身体及び子宮ともに異常は見受けられません』

「うん、最後に余計なのを付け加えなければ完璧な報告内容で終わったのに、どうして貴女たち混沌帝国軍人は不要な一文を付け足さなければ人との会話ができないのでしょうかね？」

『性分であります。社会不適合者でしたので混沌帝国に身を寄せた次第であります。御陰を持ちまして、今では充実しくつた面白おかしい毎日を送っております』

あつそ。

ま、いいです。わざわざ遮蔽物のない空の上に陣取って待ってた甲斐はあったわけですからね。正直、お空の上は寒かったですよ……。

『こちら索敵班。陛下方が転移を行った直後の空間に、カオス・ブリゲード所属と思われるアンノウンが複数出現したのを目視で確認しました。どうやら悪神ロキを追尾してきて我が軍との戦闘終了後、陛下の読み通りに漁夫の利を得る算段だったと推測いたします』

「結構ですね。これで茶番を演じた目的の半分は達成できたわけですから、良いことで

す。……後のことはお任せしてしまっても？」

『御意。混沌帝国皇帝陛下の永遠の忠誠を。反逆者に死を。ジーク・カイザー！』

……うん、やっぱ一言よけいだわ、この人たち。

ーさて、と。

「さつきはありますがどう御座いましたね、ミルたんさん。御陰で助かりましたよ。正直、貴女が最高のタイミングで転移の術式を起動させてくれなかったら消し炭になったことにも気付かずに殺されてたところでしたので」

「によっ♪ によっ♪ によよ〜♪」

きやつきや、きやつきやつと楽しそうに嬉しそうに踊りながら、先っぽに星のついたボールのような物を魔法のステッキ代わりにして振り回す魔法少女（幼女？）のコスプレした邪心召喚術師。……シニールレアリズムすぎる光景だなあ……。

「今のはワシでも危なかったかもしれないん攻撃じやつたな。さすがに北欧の悪神の名は伊達ではないか」

隣ではオーディンさんが、お髭をしごき続けながらも真面目な顔して敵将を称えておられます。さすがは軍神、威風堂々たる武人な感じで格好良いですよね。

「……ところで今の攻撃についてなんじゃが、どう考えても躲せるタイミングでは無かった上に、呪文の詠唱も技を発動させる兆候すら感知できなかつたのじゃが、あれはいつ

たいどういう手品を使えばできる代物なのかな？ 後学のため、是非にも拝聴させてもらいたい」

「さあ？ 私は科学関係の成績悪いので理屈とかはサッパリなものでして。今使えて、望んだ結果が出せる物であるなら今の時点ではそれで良いと考えてますからねえ。後で問題が起きたなら、問題が起きた時に対処を考え始めれば良いのだと」

「・・・それは、問題を先送りしているだけではないのかな・・・？」

「どのみち今の時点では分からないから、対処できていないのでしょうか？」

原因不明、理屈も不明で理由も不明、副作用の有無さえ分からないと言うならば不安に思ったところで自分を追いつめるだけです。何の意義も意味もない。

漠然とした不安を抱えてるだけで何もしていない、あるいは実質的には何もできていない人間に、不安を覚えず日々を悠々と生きてる人たちを嗤う資格などありはしませんよ。

行動して結果を出していないなら社会的には同じことです。何もしていない人たちと変わらないから、私は何もしてない人たちと同じ事しかしませんし言いません。それだけです」

・・・と、言い切ってはみたものの。気になるものは気になるので出来るならば聞いてみたいとは思ってしまうのが人の性です。普段は聞きたくても聞けないから気にし

てませんが、実際に使える人がそばにいる時に聞いてみるのも悪くはないでしょう。

「ねえ、ミルたんさん。さっきのアレってどうすれば出来るー」

「によー?」

「……やっぱいいです、ごめんなさい。愚問でした。愚問過ぎました。私のバカバカ……!!!」

なんで今さっき見聞きしたばかりの言語障害もちな幼女さんに理屈の説明お願いしてんですかね私というアホ女は!? バカですか!? バカじゃないですか!? 本当の本気で大バカ者なんじゃありませんかね!? あー、穴があつたら入りたーっい!!!

「ま、まあ過ちは誰にでもあるのだから、そう気を落とさずとも良からう。なんと云ったか……そう、『デイ・モルトすごい科学力』と言う奴なのだと、あそこにいるツインテール娘が言うておつたからそう解釈しておいてやるでな。

だから早く立ち直らんかい。そろそろ彼奴めが正気を取り戻す頃合いじゃぞ」

「……そうですね」

ヨロヨロとふらつきながらも立ち上がった私の視線とロキさんの視線が交差しました（そんな様な気がします。正直そう言うの、よく分からないんで）。

相手は怒りに顔を歪めながら（今更過ぎる表現ですが）殺意も露わにオーデインさんを睨みつけ、

味ないですよね。パチモン商法は時代遅れですし」

「~~~~~!!!」

神を相手にしたことを後悔せよ！」

「すみません。航海して欲しいのであれば転移する前に言ってもらえませんか？ 海から地上に移った後で航海なんてしたくても出来ないのですが？」

「~~~~~!!!」

「とはいえ折角の好機です!! 伝説の魔物の出来損ないコピー品なら試作品の性能テストに申し分ありません。丁度良い機会ですので、あなたで試して上げますよ。

——蕃神を起動させなさい」

パチン。

ガチャン、ゴチャン、ギチョン……。

本来はドリームランドに住む地球の神々を守るために存在する蕃神ですが、あいにくとこの世界のクトウルー神話は「這いニヤル」時空でのクトウルー。

神ではなくてドリームランドを防衛するために配備されている巨大ロボットの姿を

しています。

ーで？ 個体としての蕃神の名称は？

『RX-102号機改、蕃神ノルンです』

「あなた本当に緑な物造りませんね。惑星保護機構から出向しているドリームランド管理者で、なんかフォースの扱いが上手そうな、良い声してるノーデンスさん」

『はっはっは。決められた役割を演じるというのは、難しいものなのですよ』

うん、分かった。お前はとつと女たちの待つてるところへ戻るんだっ！

『実はわたくしは一時期、ロボット工学をかじっていた事がありまして。木星の辺りに自前のファクトリーを持っておりました。主に可変メカを嗜みます。』

完成予定が五百年後のドリームランド防衛用の完成型は間に合いませんでしたので、僭越ながら私が個人的に設計開発していた簡易量産型を実戦投入させていただきました。

さすがに悪夢の世界を防衛するほどの性能はありませんが、犬の先祖と蛇を倒す程度の雑務なら十分にこなせましょう』

あ……うん。もう、なんでもいいや。

『……む？ 妙だな……量産型の蕃神はガードロボットであって侵入者との遭遇戦では極力相手を殺してしまわないよう、殺傷力の高い武器を装備させていないはずなのだが……』

だというのに、何故ビームランチャーを放っているのだ？ ……まさか私の知らない武器が内蔵されているのか……？ だとしたら想定外の被害が発生する可能性も……』
あー、聞こえないー聞こえないー。私は何にも聞こえていないーい。

「我が愛する息子フェンリルよ！ 有象無象を間引いておけ！ 父のために露払いをしてみせるのだ！」

「ゼノヴィアさん、フェンリルさんの相手をお願いできますか？ どうやら主戦力は狼さんで、飼い主さんは安全な後方から指揮棒振っていただけの臆病者に過ぎないみたいですし紫藤さんだけで十分そうです。」

ああ、天野さんは後方に控えていてください。念のためにね？ ザコ相手だと思って甘く見るのは小物の成す愚行ですからね。私たちがコウモリ連合に破れた終末思想の小物神様を模倣してやる義理も必要もないですから！」

!!!!!!!!!!!!

「私の相手が雑魚の雑魚とはな！」

「……………弱い犬ほどよく吠える（ぼそっ）」

「……………!!!!!!」

際限なくヒートアップし続けるロキさんに刺して私の仲間たちはノリが良く、愉しもうに噛みながら応じてくれます。

「御意。私としても望むところのご命令ですので、謹んで拝命いたします。

——命の重みに優劣はないなどと、道徳屋が如き妄言は口にするまい。くびり殺すなら、小鼠よりも虎の首の方が心地よい。悪行を成すが剣士の生き様。まだまだ私も背負った業から抜け出せてはいないな」

「ええー？　じゃあ私の相手は出廻らした青ガキなのー？　つまんなーい、私も殺し甲斐のある相手の首が欲しいし、殺し合う価値のある相手と殺し合いたーい。勝って当然の戦争なんて虐殺であって、私たちの求める戦争じゃなーいー」

「……………ぐ、ぐおおおおおおおおおおおおつ!!!!（大激怒）」

「……………ヒソヒソ（めっちゃ怒り顔してますけど、あの犬って本当に北欧神話におけるトリックスターなんですか？　怒り耐性引く過ぎるんですけど?）」

「・・・コソコソ（いや、実はアヤツ、昔と比べて物すっごいプライド高くなっておつてな？）」

なにしろ平和な世じゃから奴の存在をありがたがるのはネタキャラみたいな扱い方している人間たちだけで、ワシら他の北鬼神たちと違って扱い微妙すぎるから逆に意固地になってしまつてな。「我は我一人の道を行く」とか言い出して家臣たちも付けなから手下として自分から狼作るしかなかったという残念な青年に・・・」

「・・・時の流れつて、残酷なんですね・・・」

「まったくなあー。あれでも神話時代には結構すごい奴じゃったんじやが・・・」

おい、それ別キャラ別キャラ。さっき出てたよその台詞の元の人。

お前はいつたいなんなんだ？

グオオオオオオオオオオオオオオツ!!!

空間歪曲させて呼び出したフェンリルを伴い、猛スピードで突進してくるロキさんたちを私たち二人は棒立ちしながら待ちかまえます。

防御はしません、ていうか出来ません。少なくとも私には不可能ですので、逆撃によ

る反撃でダメージ与える方を狙わせていただきます。

ロキさんはオーデンさんを、狼さんは私を。宣言通りの標的に襲いかかってきた敵と、端から動く気をまったく持たない餌という名の囷二人。

ロキさんたちと私たちの初期配置は真つ正面に座標指定済み。

友軍の配置は、ゼノヴィアさんが狼さんの左斜め前方。紫藤さんがロキさんの右斜め前方。彼らの後方には天野さん。

溜めを必要とする詠唱は隙が大きく、邪魔な外野に余計な横やりを入れられる事なく勝負を決めるなら、最短距離を選んで真つ正面から最高速度での全力突撃こそが最善手。

敵の狙いと標的の位置と進軍方向。後は進軍速度ですが、こればかりは今ばかりませんし、今この時に全力突撃を選択したとて最高速度でと決まったわけではない。

ーただし、敵の速度を測る上で基準として使うだけなら十分すぎる検証データでもあります。

ならば………

「はあああああつ!!! 神の力ではなく、**!!!**我の拳で生き絶えるがいいオーデンー!」

ガオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

初撃は敵の性能チェックが主目的。引きつけながら受け流すのが理想的ではありませんが、敵の性能が想定を上回りすぎている恐れは常に付きまといますからね。余計なりスクを負う趣味はありません。

ただ棒立ちしながら待つていれば良いだけなのですから、大人しく待ち続けますよ。敵の刃が私たちの喉元まで迫り来る瞬間をね。

シュツ!!

ガアアツ!!

手刀と牙。それぞれ必殺と信じて放たれる一撃が、私たちの直ぐ目の前まで来ていたみたいなので私は目を瞑りました。

――眩しさに目がくらんで、失明しては困りますからね………。

バチイイイイイイツ!!!!!!

「ぬ、ぬおおおっ!!? ば、バカなこれは……まさか!?!」

驚愕している北歐の悪神さんと、

「ほう、天地を返したか。噂でしか聞いたことはないが、陰陽自在の八卦炉という奴じやな。

なんじやい、お主等の知己には天仙までおるのか？」

感心したように笑っている北欧の大神さん。

この差は戦局の差であると同時に、戦力の差をも意味していました。

「ええ、まあ。昔親と飼い主に捨てられてヒネクレた野良猫さんですけどね。

私は素人なので分かりませんが、ドリームランドで天野さんに鍛えられてからは随分と強くなられたそうですよ？」

『頑張りましたし、頑張らせました』

インカムから聞こえてくるのは、律儀な天野さんからの肯定的な評価でした。

「ーが、前半分はともかく、台詞の後ろ半分はヤバくありませんか？ 貴女の場合は加減できないんですからお手柔らかにしといてくださいね？ 出ないと本気で死にますよ？彼女だけが。」

とはいえー

「せっかく稼いだ突進力も、ちよつとした障害で足止めされてしまった後では良い的になるより他に手はありませんねえ」

「しまつ……ぐはあああつ!!!」

「イリナちゃーイーん、顔面にキーイーイーイーック！！！！！！」

いけないイケメン野郎は、デコボコの顔した貧弱野郎に成り下がった！ ざまあッ！」

ガオオオオオオツ！！！！

「飼い主に気を取られすぎだぞ飼い狼！」

ただでさえ狩りの成功率が低く、単独で行動する一匹狼では成功率など無きに等しかろうよ！

群れでしか生きられない社会的動物の分際で個で生きる道を選んだならば、せめて意地ぐらいは見せてから死ねよ！」

ギヤオオオオオオオオオオツ！！！！！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・意外じゃな」

「イーはい？」

終始、私たちに有利な状況で戦いが推移していくのを見守りながら、オーデインさんがポツリと零した独白が聞こえましたので、暇つぶしに言葉の意図を尋ねる意味合いで反問してみました。

彼は軽く肩をすくめながら、

「今だから正直に言わせてもらおうが、今回の作戦をお主に聞かされたとき、ワシは失敗すると確信していた。アヤツの狡猾さはワシのよく知るところだったのだな。この程度の策略に乗るはずがあるまいと」

「ああ・・・なるほど」

「結果的には杞憂となつたが、当初ワシが立てた計画では、お主等の策が失敗に終わつて窮地に立たされたときにワシが助けに入れば恩に着せられる。その後は確実に奴を止められる策を、ワシがお主等の戦力を把握した上で立案する予定でおつた。

今のところではあるが、赤龍帝の小僧よりもお主等の方が戦力は強大なのじゃから、即戦力として頼るのであればこちらじゃろうと見越した故での決断よ」

「向こうは魔王陛下を筆頭に最高戦力ほぼ全てが奥の院に引きこもつて、出し惜しみされまくつてますからねー。あれじゃあ才能はあつても精神的には素人同然の兵藤さんたちに主力を任せざるを得ないでしょう。

責任者が果たすべき責任の取り方を間違えまくっている。亡国の兆しと言うべきでしょうね」

私の言葉にオーディンさんは深く、何度もうなずきながら、

「然り然り。ーいざれどロキに奴も存外に情けない。今少し北欧神の意地を見せるなり、巨人族の血を引く巧緻さを見せるなりなんなりしてくれても良さそうなものじゃ

が、はじまりから終わりまで終始おちよくられ続けては突進しようとするばかり。

「普段使っているブリザードすら使ってこないとは、いったいどういう見なんじゃ？」

彼の疑問は私の疑問でもありましたから、深く同意するところでもありました。

映像でみた兵藤さんたちとシトリー眷属たちとの戦いにおいて、悪心ロキとの戦いでは吹雪攻撃を多用していたはずなのですが……。

それを考えながら私はフェンリルさんの方をチラリと見て、おそらくは、そうなのだろうなと作戦立案時に考えていた敵の心理状態が当たらずとも遠からずであったことに確信を強めます。

「今の彼はおそらく、自縄自縛な精神状態に陥っています。それが本来であれば選び得る有効な選択肢を選びづらくしているのでしょう」

「自縄自縛？ ああの北欧神話のトリックスターが？」

私はオーディンさんの問いかけに深くうなずいてから暇つぶしも兼ねて、北欧の悪神ロキさんの心理分析の結果を開陳してみたいと思います。

「まず、根本的な大前提としてなのですが……彼とカオス・ブリゲードの思想は合いません。完全に真逆です。それ故に彼は組織内では完全に孤立状態にあつて、隙あらば殺

されかねない立ち位置にあると推測されます」

「ち、ちよつと待たんかい。何故ヤツの終末戦争ラグナロクがカオス・ブリゲードの戦争継続と一致せぬのじゃ？ どちらも戦争をしたいと思つておるから手を組んだのじゃろ？」

「その通りです。戦争をしたいから手を組みました。」

三代勢力での戦争を続けていきたいカオス・ブリゲードと、世界最後の戦争ラグナロクで世界を終わらせたい北欧の悪神ロキさんたちがね。

今までやってきたことをこれからも続けたいカオス・ブリゲードと、終わり時は決まっているんだから大人しく待つてろよ有象無象どもな悪神ロキさん。致命的にまで相容れません。

この二つが野合したところで互いが互いを煙たがり、隙を見せたら背中からでも襲いかかってくるのは自明の理でしょう。ナイフを隠し持ったまま左手で行う握手は人間のお家芸であつて神様方は苦手みたいですね」

啞然としているらしいオーデインさんに、私はついとして「仮説ですよ？」と付け加えた上で、もう一段階進めてみた推測を披露してみます。

「これは完全に私の妄想に過ぎませんが・・・カオス・ブリゲードは反動的なテロ組織ではないと思うんですね。どちらかと言えば守旧派、長く続けてきたそれぞれの伝統を

守る側であり、本来的には彼らの方こそ政府勢力に位置しているはずの存在なのではないかと」

「・・・そう思う根拠は？」

「思想です。彼らの掲げている思想。変わるよう促してくる圧力に対抗する形で生まれた変わりたくない、変えるべきではないとする勢力。これを既得権益層と人類史では呼び習わしております」

完全に言葉を失ったらしいオーデインさんに視線を向けぬまま、私は手元に抱き寄せたミルたんさんを良い子良い子してあげています。

「によよ♪」

ラブリー♪

「掲げている思想だけを比べてみた場合、明らかにカオス・ブリゲードは守る側であって壊す側には立っていません。むしろ魔王様をはじめとする三大勢力のトップ連合こそが古き時代を壊して新しき世を築くのだから！な、織田信長思想に取り付かれている革命軍側と見るのが正しくはありませんかね？」

「そ、それはそうかもしれないが・・・」

「壊させない、今を守りたいが個々人では力が足りない各勢力の既得権益層と、今のままではダメだ、壊して新しい世を築かなければ我らすべての種族に明日はないと唱えてい

る国家主権者連合。

肩書きの立派さは、そのまま国家権力の中枢を押さえていることをも意味しています。各所に散らばる諸勢力が武力蜂起したところで権力の中枢を揺るがせるかどうかは微妙なところですからね。

各個撃破されなければ別として、中央にいる側の方が敵を寸断するのにも、各地の地理情報にも精通している以上は正規軍同士でぶつかるのは無謀の度が過ぎると言うもの。またにも戦っても勝てない側がテロに走るのは歴史の必然です。私にしてみれば彼らの行動に疑問点を抱く方がどうかしていると思えませんかね」

長広舌を終えてオーデインさんの顔を見つめながら、「あなたのご意見は？」と視線だけで問いかけてみると、

「・・・国民を犠牲に戦争をすることは為政者として、決して良い執政ではあるまい？」
「国民を犠牲にしないで自らが守るべき国と伝統を壊されずに済むのであれば、彼ら既得権益層、即ち門閥貴族や中央から遠ざけられた王族たちも戦争などという手段で魔王様と対決する道を選ばなかったかもしれないが？」

「・・・・・・・・」

再び黙り込まれたオーデイン様。

話が少し脱線しすぎていたことに気づいた私は微かに赤面した後、ロキさんの心理分

析の結果発表に立ち返ることに致しました。

「彼の強さは特定の何かに縛られていない自由度にこそあると私は考えています。自身が出来ないことでも他人を利用すれば可能であるなら、利用することを躊躇わない。それによって生じた自らの危機でさえも他人に縋って利用することで生き延びる。

神々という役割に自らを封じ込め、振るえる力と権能を制限している存在にとつて彼は真正銘嘘偽りなく天敵と呼びうる存在です。

皆が守らなければならぬと信じて揺るがぬルールを、最初から尊重する気が欠片もないからこそ強いのです。

彼に勝ちたいのであれば、彼の強さの源である自由を奪うより他に手はありませんが、それを実行して失敗した等のご本人の前で言つても意味はないでしょうねえ」

「……………」

「科学神秘を問わず、彼を物理的に縛って永遠に拘束しておくことは不可能であると私は断定しています。何故なら神とは生まれたときから、「そう在れかし」と己が運命を背負って生きていくのですから、その運命に逆らうことも逆らわせることも事実上の不可能なのではありませんか？」

私が問いかけるとオーディンさんは苦虫を噛み潰したような表情で、

「……………」では、どうする？ どうやって奔放で節操のないヤツの自由を縛る

というのじゃ？ その方法があるというならワシの前で示してみせい」

この詰問は私にとつて些かバカバカしいものではありましたが、彼らにとつては重大なことなのは間違いなさそうでしたし尊重して然るべき疑問でもあります。

なので私は答えます。厳かに、丁寧に、分かり易い簡明さを心がけながら。

「人の持つ自由なる意志を縛るもの。そんなもの、大昔からたつた一つしか存在してはいないでしょう？」

「・・・そのひとつとは？」

「『人の自由意志』です。

自らの心で自らを縛り付けてしまえば、解放する為の手段として自らを縛り付けている拘りなり執着なりを捨てなければならず、それが出来るなら縛り付けられる理由そのものが消滅してしまう。彼の自由は今、彼自身の心によつて縛り付けられ雁字搦めになつている。

何者にも捕らわれない自由さが売りの悪神が『勘違いも甚だしい、私が貴様たちの過ちを正している』？ はっ、そんなバカげた思想に取り付けられるから私如き小物の小細工に引つかかる無様をさらす羽目になるのですよ。

間違いを犯すべきなのはいつだって彼の方で、間違いを正そうとして失敗して彼に謀るのが貴方がたアース神族のお偉方でしょうに。自分の存在意義を否定するような行

動に出ながら気づかずにいる」

「私という『同類』を目にした事で無意識のうちに自分の矛盾を自覚して、それでもラグナロクに対する拘りと北欧神話への執着を捨てられない。縛られてはいけない存在が、自らで自らを縛り上げる。」

永劫不変な神様が自己矛盾を抱えてしまったのでは破綻の末に自滅するのが自然の道理。自然信仰を基調とする北欧神話の神なら尚の事です」

「実際、先ほどから頻りにフェンリルさんが主に対する警告の雄叫びらしき叫びを発していますが、全く耳に届いている気配がありません。おそらく聞こえてはいても、頭が理解する余裕を残していないでしょう。自壊が始まっているのを無理矢理に目を逸らして今まで来るから、こんなくだらない結末を迎えるのです。バカバカしい」

「ラグナロク？ 終末戦争？ 世界最後の日？ くだらない、そんな物は日常的に転がっている平凡な代物ですよ。何故なら人にとって世界とは、自分が『世界と規定している』自分自身の生活空間とそれを支える周囲に限定された狭すぎる世界観のことなのですから。」

自分の中の世界が終われば、その人にとっての世界は終わりです。新たな世界を見つけたなら、それは新世界の創世ですね。一人一人がもてる世界観など、その程度のちっぴけな物に過ぎないのだと理解しながら消えなさい、北欧の『元』悪神ロキ閣下」

21話 「言刃トル」

「・・・レーディングゲーム？」

「そう。ディオドラ・アスタロトと私たちグレモリー一派とのね。そう言う段取りだったし、あなたたちにも通達しておいたはずなのだけど気が付かなかったの？」

久しぶりに訪れた駒王学園ミステリー研究会の部室。

そこで私は部長のグレモリーさんに言われた内容を反芻し・・・。

「・・・・・・・・通達・・・ありましたっけ・・・・・・・・？」

確認のための質問でしたが、問いかけた相手はグレモリーさんではありません。私の背後に控えている帝国軍三長官トニー要するに私に届くはずの情報の全て総括しているはずの方々です。

この三人が知っていて私に届いていないとするならば、何者かの妨害工作である可能性が・・・

「「・・・・・・・・・・・・・・・・。トニー??？」」

・・・なさそうだなあ・・・。物すつごい小首を傾げて不思議そうな顔をされてらっしゃいますし、明らかに顔全体で「どう・・・でしたっけか？」と、自分自身で疑問符

まみれな心情を抱いている様にしか見えません。

誰ですか・・・？ この人たちに情報部門まで総括させたお馬鹿さんは・・・向いてないのにも程があるでしょう。即刻情報総監部を新設させようと決意した私です。

「はあ・・・。仕方ないわね。説明してあげるからよく聞きなさい。どう言うわけかは分からないけど、オーデイン様はあなた達のことを高く買ってくださっているみたいだから情報はある程度だけ共有しておかないと」

「それはどうもご親切に。感謝いたします」

礼儀的にそれだけ応えてから始まったレーディングゲームに関する現状解説でしたが、のっけから不審点ばかりで頭が痛くなってきましたよ。

突如として実力を向上させたというアスタロトさんと、彼にアプローチをかけられてるアルジエントさんの因縁。そしてメンバー交換の取引に、後ろ暗そうな背景の数々。

これは・・・どう見たって裏切ってますよねアスタロトさん。状況的に見て確実に。努力で強くなったという才能なしのサイオラークさんとをグラフで比較してみても結果は歴然。どう見たってアスタロトさんの力は頭打ちしてたのが急上昇し過ぎちゃってます。ドーピングでもしない限りは無理でしょうねこれやるの。

現に兵藤さんも強くなるには時間かけて一足飛びに1、5段飛ばしがやっとなった訳ですし。

それでも尚、グレモリーさんがアスタロトさんへの嫌疑を確定し得ていないのは、恐らくですがサイオラーグさんを意識しすぎているからです。

何のかんの言いつつもグレモリーさんは保守派に属し、伝統的な様式美とお決まりの血統主義を奉じる部分が少なからず存在しています。

彼女が旧魔王派に属していないのは、シンプルに彼女自身が現魔王派の親族だからと言う一点だけに尽きるのでしょうか。それ以外だと人間に対する考え方ぐらいいしか違いが見あたりませんから。

冥界統治の手法とやり方に関しては、敵対しながらもグダグダと今まで通りやっていくような感じで何とか成っていったのではないかなど。

ーですが、サイオラーグさんだけは別。あるいは別格。自分とは異なる理由で自分の上をいく、名門の次期当主。

彼の在り方はグレモリーさんに矛盾を押しつけているに等しく、彼女自身の想いと願いを否定するとともに肯定もしている特殊すぎる存在です。

彼は特別な血を引く普通の凡人でした。その彼が努力のみで高みへと飛翔していくのは、彼女の願いである『自分も普通の女の子として』を一部ながら叶えるものだ。

なにしろ才能なんかなくなつて、名門の血筋を引いてるだけのお姫様より強くなれると証明されたわけですからね。弱肉強食で強い者が正しく、弱いのが悪いとする冥界の

支配制度的には彼女たち名門の血筋による支配が正当性を失った事を意味してもいい。彼女が支配階層から転落して、一般庶民である普通の女の子に成ることもいわずれば可能になることでしょう。

だが、同時に彼女は生粋のお姫様であって民主主義者などでは断じてない。

古き名門の血筋を誇り、尊き血統による支配の永続を訴える超タカ派の血統崇拜主義者と言う側面も持ち合わせてはいるのです。

これもまた恐らくですが、彼女は自分で思っているほど自身の考えを整合できておらず、理解も自覚もしてはいない。夢見はしても具体的なイメージが沸かずに曖昧模糊としたまま宙ぶらりんな状態で、憧れだけが先行している。そんな心理状態にあるのではないのでしょうか？ どうも話を聞いているとそう思えてきて成らないのですが……。

だとすると今回グレモリーさんが疑問を一時棚上げにしてもアスタロトさんとの戦いに固執している理由は、サイオラーグさんに自分の考え方の正しさを認めさせるため……ああ、ダメダメだめです。思考が完全に暗い方へ暗い方へ行こうとしちやつてます。

最近戦争続きだったからかな？ 心の平穏を取り戻すためにも今回の戦いは犠牲を少なくするよう心がけましょう。そうですねそれが良い。何事も平和が一番。ラブ&ピースが理想の世界です。

こうして気分を持ち直した私は刻限が来たからとグレモリーさんの魔法陣を使って転移。ゲーム会場であるアスタロト家所有の神殿前までやってきてたみたいです。

「……着いたのか？」

「そのようですねえ」

たまたま隣に立ってた兵藤さんがつぶやいたので、私は周囲を見渡して確認してから普通に返事をお返します。

変に歪な形の柱、石造りのパルテノン風神殿。荒涼とした荒れ野にポツンと浮かぶ如く何にも悪魔らしさに拘った印象の舞台。何から何まで演出過剰。

ここまで「お約束」の悪魔らしさに執着するのは旧魔王派の皆様方と、それに与したか利用とした後で切り捨てる気満々そうな門閥の名門アスタロトさん以外にはいそうにないですからねー。

ーそして、お約束を守ってくれる相手だからこそ、その動きも展開も予測しやすい。コンピュータを使う必要もないほどアツサリと現れ始める悪魔さん達の群。

姫島さんとグレモリーさんと言うには、悪魔の家にはそれぞれ特性なり特徴があつて魔法陣の形は千差万別。今お空の上に現れた千以上の魔法陣にも共通点は見当たらない

いとのことでしたから、現魔王陛下打倒を旗印に野合した寄せ集め集団と考えて問題ないでしょうね。

やれやれ……。

はたして勝利後の利権は誰が握ることになっているのか、その辺りを詰めてあるのかどうかさえ疑問が残るカオス・ブリゲードに与する辺り、相当に追い詰められるようでお疲れさまです以外に感想が湧いてこない私でした。

「キャッ！ イッセーさん！」

「悲鳴!? アーシアー……！」

……いや、「アーシアー！」じゃないでしょ兵藤さん。分かれよ、この状況から最初に襲われるのが誰かってことくらい。真性のアホですかアンタは。

事前にあつた会談ならぬ商談で、彼の趣向と執着ぶりには気づいていて、尚割このド派手で演出過剰な空からの登場シーン。

どう考えても空へと集中力を割かせるための陽動でしょうか？ 敵の注意を目標から逸らすのは戦術の基本です。何ら恥じるところはない。

にも関わらず「アーシアを放せ、このクソ野郎！ 卑怯だぞ」って、あなたが間抜けなだけでしようとか言っちゃいけないシーンなのかな〜とか変な気を使わせるような

こと言わんでください恥ずかしい。

「これはどう言うことなの、ディオドラ!? ゲームをするために私たちを招いたのではなかったの!?!」

「バカじゃないの? ゲームなんてしないさ。キミたちはここで彼らー『カオス・ブリゲード』のエージェントたちに殺されるんだよ。

いくら力のあるキミたちでもこの数の上級悪魔と中級悪魔を相手に出来やしないだろう? ハハハハ、死んでくれ。速やかに散ってくれ」

「あなた、『カオス・ブリゲード』と通じたというの? 最低だわ。しかもゲームまで汚すなんて万死の値する! 何よりも私のかわいいアジアを奪い去ろうとするなんて……ッ!」

「彼らと行動した方が、僕の好きなことを好きなだけできそうだと思ったものだからね。ま、最後のあがきをしていてくれ。僕はその間にアジアと契る。意味はわかるかな? 赤龍帝、僕はアジアを自分のものにするよ。追ってきたかったら、神殿の奥まで来てごらん。素敵なものが見られるはずだよ」

「ディオドラ! てめえー!」

「……はあ」

熱い熱いテンションで交わされる会話シーン。

その最中、思わず漏れた私のため息は思っていたよりずっと遠くまで響いていたようでしたが皆さん何の反応も示さなかったために私はそれを軽視して、どうせ誰も気にはしないさとはばかりに思わず本音が口をついてしまいました。

「ああまりにもバカバカしすぎる遣り取りだったものですから……。」

「能なし貴族のドラ息子と、世間知らずのお嬢様同士による口喧嘩。」

おまけにドラ息子の方はバカ息子でもあると来ているから始末に悪い。双方ともに気楽なことで大変結構なことですね、まったくもう」

『……あ?』

うおつ。お、驚きました。聞こえてらしたのですね。それならそうと言つといてくださいよ、そしたら発言にはもつと気を使うつもりでしたのに。

「……聞き捨てならないわね、異住セレニア。どこの誰が世間知らずのお嬢様なのかしら?」

「不本意だが、この件に関する限り僕も彼女に同意するね。たかだか人間の小娘ごときが僕たち名門出の上級悪魔を論評するとは万死に値する行為だよ。言い訳ぐらいは聞いてあげるから、さっさと吐いて死にたまえ。今なら特別に自害を許してあげるけど?」

……実は思想的には結構相性良いでしょアンタ達……。伝統好き同士だから。違

うのはせいぜい国の統治にタイスルスダンスぐらいなものですかねー。

アスタロトさんは一人の王が全てを決める人治主義。即ち王道政治。

一方でグレモリーさんは法と秩序によって人々を導くを良しとする礼治主義。即ち、法による支配法家思想。

前者が性善説を元にして生まれた「恩賞や刑罰が為政者の恣意で決まる」王が正しいことが大前提の理想論。

後者は性悪説を元に「人は生まれながれの悪人だから、善行をなすのは本性ではなく偽りである。ゆえに厳正な法によって正しく導くのだ」と喝破した、身も蓋もない現実論。

冥界という弱肉強食の世界において支配者に都合がよいのは人治主義の理想論。

逆に、力こそが全ての春秋戦国時代において法の制定により後の始皇帝を生む礎を成したのが富国強兵のための法治主義。

お二人の言い合いは根本的なところで思い込みと願望によってのみ成り立っていない。

片方は「政治は正しく正義であるべきだ！」と信じたがり、もう片方は「現実是非常さ、正義など理想論だ綺麗事だ口先だけの無能者だ。力なき者には何も出来ない」と厨二臭い『悪の論理』に酔いしれている。

どちらともに、青臭くてガキ臭い。

「それでは言わせていただきますがね……」

私は自分の思考を一端棚上げにして二人を等分に見つめ返し、ごく普通の口調でしか聞きようのない質問をしてみます。

「あなた達は先ほどから、いったい何のお話をされているのです?」

「……は?」

……いつもながらに伝わらない私の意志伝達手段「語り合い」。たまにですけど、けなしの自身が無くなりかけるなあ。ただでさえ総量の時点で微量のになあ。

「まずグレモリーさんから指摘させていただきますが……あなたまさか彼の行動が、単なる無法だと本気で思ってたやしませんよね?」

「ち、違うとでも言うの……?」

はあ……

「……見たまんま、普通に地方貴族の反乱でしょうに……。一体どこを見たら単なる無法になると思っただんですかあなたは?」

「そ、それが無法と言うんじゃないの!」

「全然違います。」

反乱は王権の正当性を認めない、現王家の支配こそが間違っている……つまりは、現

体制の維持する秩序の方こそ歪んでいて間違っていて自分たちの主張こそが正しいとする正当性を否定する為の武力行使です。

支配する側の正義を否定する立場なので、現魔王派の尊ぶ行為を悪し様に虐げるのは彼の寄つて立つところ。正義の主張ですよ。

反乱軍が「悪だ、間違っている」と主張するのは支配を継続したい側である既得権益層の利己心と保身に過ぎません。言つてゐることはどちらも同じ、支配する側の平凡な遣り取りでしかありません」

「そんな……」

「ついでに言えば、これほど大規模な家臣団による反乱を招いてしまった時点で現魔王陛下は統治者たる資格を失つた人徳を保持しない王とすることをも意味しています。

王たる資格を持たないで血筋のみを理由に支配を正当化しようとする僭王を追放して正しき治世をと言う主張は、国に仕える臣下として正しい在り方らしいですよ？」

「……」

「まあ、所詮は理想論ですけどね？」

「おい！セレニア！魔王様のことを悪く言つてんじやねえぞテメエ！あの人はなあ……お前みたいな冷血人間にはわかんねえかもしれねえけど、すつげえ良い人なんだよ！」

「知ってます。だから何だというのですか、兵藤さん？」

「だから！ あの人は良い人で、良い人だから王様に相応しい人なんだ！ 悪魔ってだけで悪モンだと決めつけてんじゃねえ！」

「その良い人が王になってるのが気に入らないと主張して反乱起こしてるのがアストロとさんで、巻き込まれて今さっき浚われていかれたのが貴方の大事なアルジェントさんなのですか？」

「・・・!!!」

口ごもって後ずさる兵藤さんと、周囲から厳しい目で睨みつけてくる皆さん。空の上からは面白そうな表情で状況を見下ろしてるアスタロトさん。楽しそうで良いですね貴方。

「・・・そして、なぜだか一番愉しそうな満面の笑顔を浮かべながら見物客に徹しているのが私の仲間の天野さんたち三人組という辺りに混沌帝国の救いようのない部分が凝縮されているような気がしてならない名目上の統治者の私です。・・・自信・・・無くしようがないなあ・・・とつくの昔にゼロだから・・・」

「・・・と言うより、そんなに良い人が好きなら敵に向かつて殴りつけるよりも歌でも歌って平和を説きなさいよ。エルビス・プレスリーみたいに。」

つか、「悪魔って理由だけで悪モンだと決めつける」もなにも、言われてすらいはないの

にその発想が自然に浮かぶ時点であなた自身が過去には悪魔を「悪魔と言うだけで悪モ
ンだと決めつけていた」事を意味しているのではありませんか？」

「!! そ、それは・・・」

「ご自分の過去を自身で否定するのはあなたの勝手ですが、他人にまで自分の考えを当
てはめられては困ります。別に、皆が皆あなたのように悪魔を悪と決めつけている訳で
はないことをお忘れなく。」

あと、人間の時に悪魔を悪者と言った人が、悪魔になった途端に宗旨変えするのを
世間では「日和見」と言うそうですので、イヤでなければ頭の片隅にでも置いといてく
ださい。過去の自分を間違っていたと思うのであればね」

「・・・・・・・・」

黙り込まれてしまったお二人を無視して、私は次に上空から見下ろしてニヤニヤ笑っ
ているアストロとさんに目を向けます。

「なかなか面白いショーだったよ、人間にしてみれば上出来だ。お捻りに僕の玩具の待つ席
ぐらいの地位は用意してやっても良いけどどうするね？ 人間」

「それは光栄な事です。で、折角ですし玩具の列に参列する前に聞かせてもらえま
せんか？ あなたは今回の件をお父上様からどうお聞きになつて居るのかを」

「ん？ 父上からかい？ なに、簡単な話だよ。現魔王の情愛が深いグレモリーは悪魔

ついでに才能がない。才能のない大魔王の跡取りなんかに負けるはずがないのだから適当に遊んでやると良いって、それだけさ。

ま、この程度のことです。真に偉大なるアスタロトの当主が出張るほどのこともないってことなんだろうけどー」

「なるほど。やはりあなたは捨て駒でしたか」

「そうそう、その通りーなに？」

「あなたは実の父親から捨て駒として使い捨てられたと、そう言っているのですよ。それくらい説明されなくても理解しなさい無能者」

「ーーー!!!」

怒りに歪む彼の顔は平凡な貴族のそれであり、銀河英雄伝説で敗亡していくリッツシュタット連合軍のフリーゲル男爵よりも更に普通で平凡な人間社会のどこでも見かける、臍齧りのバカ息子が浮かべるヒステリックな表情としか私には思えませんでした。

「グレモリーさんからお伺いしましたが、新しい力を手に入れたそうですね。どの戦域でも目撃例のない、現時点では貴方と貴方の一派だけが使うことの出来る力とのことでしたが・・・それってつまりはテストすら済んでない未知数の兵器と云うことでしょうか？」

リスクすら不明な訳わかんない兵器を大事な跡取りなんかには持たせる訳がないでしょうがバカバカしい」

「……………」

「だいたい、アストロトが主張している『正当な魔王の血を引く者の支配権』。これと貴方は適合していません。だって、ドーピング前の段階でグレモリーさんより弱かったんですからね。」

反逆する相手の子供、それもアスタロトが見下す対象である「女」より弱い貴方なんかじゃ廃嫡は確定です。平和な時代であるならともかく、戦乱の時代を力で主導していく一族の後継者にはふさわしくありません。

反乱を決めた時点でああなたの価値は無くなっていったのです。だからせめて「不出来な命を持つて父の覇道の役に立つ事で、せめてもの親孝行とするのだ。出来損ないのバカ息子よ」と言っただ感じだったのでしょうよ」

「……………」

「だいたい、「正当なる支配者たる魔王の血」を主張するなら、別に跡取りは魔王の臣下時代に生まれた貴方である必要性はないでしょうに。」

むしろ魔王の地位を手に入れてからの方がより強い番が手に入って、より強い子が産まれる可能性が高くなる。血統による正当性……遺伝子を盲信するとはそう言うこと

無き吹き飛ばしてしまいました。

「お見事です、紫藤さん。ジャストタイミングでしたね」

「いや、それほどでもありますけども♪」

私は紫藤さんにお姫様だっこされたまま空にあり、下方には先ほどまでとは打って変わって笑わなくなつた無表情なアストロトさんが怖い目で私を睨まれております。

ーま、敵から睨まれても今更すぎるので別にいいんですけども。

「ー殺せ。いや、待て殺すな。あの雌ガキを、生かしたまま僕の所まで引き摺ってこい。手足を切り取ってでも決して殺すな。僕がこの手で八つ裂きにして殺さなければならぬ奴だからな」

「は？ し、しかしディオドラ様。それでは当初の予定が狂ってしまい、赤龍帝と何よりグレモリーの小娘が・・・」

「うるさい黙れ。異論反論は認めない。命令を全うできずに戻ってきたときには僕が手ずからお前等を一人残らず殺してやる。死ぬ気で捕まえてこい。わかつたな」

「で、ディオドラ様!!? どちらへ行かれ・・・」

ヒュンツ。と音がしたかと思うとアスタロトさんの姿は影も形も残さず消えてしまわれました。アルジェントさんの姿も欠き消えている以上、宣言通りに契りとやらを結びに言ったのでしょうか。律儀なことです。

これでしょうか、こちらでも動き易くなるー。

「紫藤さん。神殿とは反対方向に全速前進です。神殿に向かうしかないグレモリーさんたちと分派行動をとることで敵の戦力を分断させますよ。」

「せっかく倒さなくてもいい存在の私を標的に指定してから敵司令官が撤退してくれましたから、最大限有効利用させてもらいましょー」

「りようかーい♪ 寄せ集めを引っかけ回して群衆団に等しい弱兵の集まりに仕立てて差し上げまっすよー♪」

さて、これで戦力非は大幅に狭まり、個体戦闘能力では我が方が圧倒的に優勢。玉砕してでもを呼号した敵指揮官の逃亡により敵の士気は最低水準。

ましてや雇い主の息子でしかない奴に脅されて、しかも自分たちが殺したい奴とは無関係な雑魚を「お前等が死んでも殺さず連れてこい」ですからねー。そりゃモラルを維持したまま戦えなんて、無茶振りっつてものです。

「とは言え、この状況。戦う前から勝利は確定しちゃいましたからね。出来れば戦わずに降参してもらいたいのですが・・・」

元よりそれが今時作戦の趣旨でしたからね。出来れば首尾一貫したいところなのですが・・・難しいんだよね、どう考えても。

だって私部外者ですし。グレモリーさんよりも更に下と認識されてますし、事実として格下ですし、発言力と説得力が全くない。

なにかしら私の発言に意味なり力なりを付与できればーあつ。

「そっか、アレがありましたよね。あのうすらデカいデカ物を有効活用する機会がようやく到来しましたか」

私は空を見上げてからポンツと手を打つと、通信機をかねたヘッドセットを頭に装着し直します。

「イゼルローン要塞主砲制御室へ。こちらはセレニアです。皇帝命令として厳命しますので、トゥールハンマーを冥界アスタロト領へ向けて照射してください。

開発が完了したばかりの拡散モードをテストしますよ。

地表を焼き尽くす光の雨を目の当たりにすれば、彼らの覚悟と矜持も少しは揺らいでくれるかもしれせんから。

照射までのカウントダウン開始。——ドライ、ツヴァイ、アイツ・・・フォイヤ」
つづく

2 2 話「大決戦前までです」

——天から降り注ぐ光の雨。

それは一本一本が優美さと神々しさに満ちていて、清浄を謳う天界の神が不浄と罵る悪魔の住まう大地に落とすのに相応しい破壊力を持つてはいたけれど。

どこまでも無慈悲で残酷に圧倒的に蹂躪し尽くす存在の方は高潔な『裁き』ではなく、悪意ある計算で彩られた『威嚇』を印象づけられるものだった。

「……死だ。俺たちの死が、俺たちを浚いにくる……」

現に、私を狙って襲いかかろうとしていたカオス・ブリゲードへと鞍替えした上級悪魔たちが震える声で呆然としながらつぶやくのを先ほどから何度耳にさせられていることか。

仮にこれが降伏を促す威嚇射撃だとしたら……

「……やりすぎだわ。これじゃあ敵どころか味方さえ敵に回してしまいかねない」

悪魔は力を尊重する。強いこと、力あることは彼らにとっては崇敬の対象になる条件であり、遺憾ながら私でさえ弱いよりは強い方がいいと感じてしまう時があるのは悪魔の性質として否定しきれない。

でも、だからと言って過ぎた力が破滅を招くのは悪魔でさえ知っている事実。

それを越えた力を示してしまった彼女たちはもう、悪魔たちに存在を受け入れられる存在ではなくなっていました。

天から降る光の雨が悪魔たちすべての心に、強大なる力を持った『脅威』として永遠に刻み込まれてしまったのだから。

「この状況を造って、いったいどうするつもりなの異住セレニア・・・？　もしもの場合それしか方法がないのであれば・・・」

消すしかない。

私の命、全生命を使って存在そのものを捨て石にしても冥界最大の脅威を取り除けるチャンス物を物にしてみせる！

暗い決意を胸に秘めながら、私は紫藤イリナに抱き抱えられながら天を見上げる彼女の背中を凝視し続け、汗が滴り震える拳を堅く握りしめていた。

これが私の人生で、最後の一撃になる攻撃かもしれないと不安におびえながら――。

——天から降り注ぎまくる光。

最初はアプサラスⅢの拡散メガ粒子砲を（SDガンダムGジェネレーション風味にデフォルメして）想定してたのに……。

——めっさ凄まじい事になっちゃってます。はつきり言っておりえねえ。原爆ドムなんて子供のオモチャかよってぐらいの惨状が展開されている目前の光景に、私は冷や汗だらけの顔を見上げることで他人には見られないようにしていました。

い、いやだつてだつてトウールハンマーの放つ光の柱つて、もっと細くて頼りないのを連想してましたし！ アニメ版だとそうでしたし！ 細分してさえビルよりデカくなるとか聞いてない！ 詐欺だインチキだ過小広告だ！ 責任者出てこい！ はーい、私です。死ねっ！

……など一人芝居やって現実逃避している場合じゃないですよ、どう考えても。この状況……どうやって収めよう……。

想定してない事態を前に私の頭が完全にフリーズしてしまっているとゼノヴィアさ

んが――

「見よ！　これが我々の戦果だ！」

――　なんかデラーズ中将みたいなこと言い出したー！　つ
「聞け！　混沌帝国皇帝陛下の名代ゼノヴィアの言葉である！　!!!!!!

今やアスタロス領の半分近くが、我がイゼルローン要塞の主砲によって砂漠と化した。この神なる裁きこそ我が混沌帝国皇帝陛下の偉大さの証である。

決定的な力の差を思い知らされた貴君等カオス・ブリゲードの雑魚どもに如何ほどの抵抗ができればとも、それは既に形骸である。

敢えて言おう。カス以下の虫けらであると！

貴様たちは仰ぐ旗を間違えたことで滅びに瀕している。

我らが皇帝陛下に降伏し、従属し、陛下が成さんとする大事業に参画せよ！

転生愛天使として生まれ変わり、次の戦争のために、その次の戦争のために、再び！
からやり直すのだ！

かつて神が人間を生み出した奇跡の力と業を陛下は手に入れられた。

陛下に従う者には今より遥かに優れた力と、もはやディオドラ如き無能に偉そうな顔
をすることを許さないで済むパワーを約束しよう。

投降兵よ！

怒りと憎しみを熱き血潮に変え、前へと進む力と成して、再び立ち上がるのだ投降兵よ！ 我ら帝国軍は、諸君等の参陣を望んでいる！

帝国万歳！ 皇帝陛下万歳！ ジーク・マインカイザー・セレニアアー！！！！

『クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！』

ー！ー！ー！うおおおおおっ！！！！ お前らプライドと名門の誇り捨てるの速すぎるぞおおおっ！！ そんなにアツサリ捨てられるなら守るなよ！ 戦争してまで！ さつさと捨てて魔王様に降参してろい！ 私の元にくるんじゃねえ！ あっち行けあっち！

こつちはとつくに昔に心のキャパシティー超えとるんじゃクソボケえええっ！！！！

「……あの悪魔たち、裏切つたとは言え一応冥界の名門出身者ばかりなんだけど……」
「い、いや部長。仮に彼らが改めて魔王陛下に忠誠を誓ったとしても、陛下はお信じにな

られますでしょうか？　．．．その．．．卑猥な格好とかが問題かなと．．．」

「確かにアレはちよつとだけですが、恥じらいを感じてしまう色ですわよねえ。」

うーん。ピンクのボンテージですか．．．。イツセー君の目の前で着てみたらわたくしを襲ってくれますかしら？」

「はあ、はあ．．．。Tバックボンテージ美女のお姉ちゃんが千人以上．．．混沌帝国つてところは天国かなにかなのか!？」

「先輩．．．えつちです。．．．そんなに見たいなら私に言ってくれば（ひっそり声で）」

．．．うん、原作主人公勢も混沌ぶりはなかなかのもので安心しましたよ。赤信号、皆で渡れば怖くないの精神で前へと進みましょう前へ！　当面は試合会場奥にある神殿へむけて全速前進ですよ！　おーっ！っ！！

「ーでも、さすがに人員多くなりすぎましたので、適当な宇宙船でお空の上に送つといってくださいね？」

「御意。もうじき迎えのH.L.V.が到着しますので彼女らへの引継が終わってから我らは

兵藤一誠たちの後を追いかけると致しましょう」

まあ、そう言うことになりましたので、彼らがやってたオーディンさんとの会話とかは省略します。私たちがいつさい関わってないから、あんまり言うことないんですよ。逆に私たちがやってた内容は事務手続きオンリーでしたので面白くもなんともないですからねえー。意外と世の中難しいのです。

——いや、中々に興味深い物を見させてもらって嬉しいよ。やはり、この世界の君も人の縁には恵まれているようだね。

——だからこそ彼女らに、壊れていく君を見せてあげたいと願っているのが私なのだが——

「・・・？ 紫藤さん。今なにかおっしゃいましたか？」

「え？ ひよつとして聞こえちゃってましたか？ おつかしいなー？ 最近のはロー

ター音小さいはずなんだけどなあ」

「ごめんなさい、なにも聞こえていませんでしたから流してください私が恥ずかしい」

赤裸々な赤面告白を普通の表情で言われてしまうと私の方が赤面するという不条理な事態になるから困りますよね。

こう言うときはさっさと済ませるためにも先を急ぐのが吉です。レッツ・ゴーですよ。

「まずは俺もプロモーション！」

『ブースト！ エクスプロージョン！』

「煩惱解放！ イメージマックス！ しかも今さっき見た映像が目に焼き付いてるからさらにパワーアップして広がる、俺の快適夢空間！」

俺自身の楽園創世のために使う奥義！ 『おっパイリンガル！（乳語翻訳自己解釈）』

「「きゃああああああああつ!?!」」

「「……………どう考えても悪魔側の態度」

「いやまあ、悪魔同士の戦いな訳ですからね。致し方ないのではかなと」

敵味方ともに本来の規定にあったレーディングゲームの員数通りに成立した今となつては、私たち帝国軍はゲームを尊重して見ていただけにするのが礼儀かなと思ひましたので見物しているだけとなつてます。楽でいいのですが、目のやり場に困りますよね色々と。

その後もバカやりながらも快勝を続けるグレモリーさんたちの後に付いてつてるだけの私たちが足を止めたのは、相手チームのナイトが待つているらしい神殿に入った時。

どこかで見たことがあるような無いような微妙すぎる白髪の男性が待つていた時のことでした。

「や、おひさ〜」

「クリードツ！ てめえ！」

「まだ生きていたんだなって、思ったつしよ、イツセーくん？ イエスイエス。僕ちん、しぶといからキツチリ生きてござんすよ？」

「だから俺の思考を読むなって！」

なぜか謝れと言われて謝ったら、謝らないでと言われました。．．．ツンデレさん？

「そうだ！ その墮天使レイナー様！ アンタだったら俺様ちゃんのこと覚えてらっしゃいますよねえ？ だって見捨てちゃうほど世話してあげた恩人ですしい。忘れられるはずがないでゴザンすよねえ〜え？」

「．．．．．ええ、はいもちろんですよ神父様。その節は大変なお世話を賜りましたことを、深く御礼申し上げます」

「欠片ほども覚えてないですよねアンタ俺のことを！ かんっぜんに忘却の彼方へ置き忘れて、どっか別の恒星系に行っちゃったレベルで忘れ果ててらっしゃいますよね俺様ちゃんのことをお!？」

「．．．．．すみません」

「だから！ 本気で謝るなっていつてんだろうがよおおおおおおおつ!!!」

さつきから叫び声をあげまくっている人外さん。

なんと言いますかこう．．．。

「楽しそうな方で羨ましくなりますよね」

「まったくですな。私もあれくらい悩み無く笑って日々を生きたいと常日頃から思っ

おります」

「考えなしの脳天気ってリアル人生ゲームだと最強キャラだしねえ。あーあ、生きてるって素晴らしいわー本当に」

「だーかーらー。生きてないって言ったばかりだろうが！ 聞けよ人の話をよお！ マイペースすぎるのにも程があんぞう！」

テンションの上がり下がりが激しすぎる人外さん。骨粗鬆症かなにかなのでしょいかね？ カルシウム不足は病気の元です。きちんと毎日牛乳くらいは飲みましょう。

・・・決して私の胸がデカいのは牛乳飲んでるせいだとは思いたくない私です。

「えっと・・・クリードさん、でしたか？」

名前を思い出すことさえ出来ない部外者の私が言うのもなんなのですが・・・

「なんだよ!! 今取り込んでんだよ！ 急がない用事なら後にしれくれませんか!!」
「では、今がよろしいかと。」

「ーそこに立っていると危ないですよ？」

へっ？ そう答えが返ってきたのと、ドゴーーーーーとツーン！と爆音が響いて人外さんが押しつぶされるのを見たのは時間的にほぼ同時でした。

トウルルハンマーに関連づけたのかどうかは不明ですが、今回のミルたんさんの使う

武器はバカでつかいハンマーみたいですね。

人より大きいと言うか、本体だけで十メートル以上ありそうな化け物ハンマーに押しつぶされちゃいましたけど大丈夫でしたかねクリードさん。

「どうしたミルたん、こんな所まで何用だ？　ーなに？　『以前に一度、燃えるゴミと萌えないゴミとを分別し忘れて出してしまったのを思い出したから回収しにきました』だど？

まったくお前は、おつちよこちよいな奴だな。次からは気をつけるのだぞ？」

「にゅっ（片手をあげてクリークの意）」

「ん。では、帰ってよし。忘れ物をしないように気をつけるのだぞー」

ーこうして捨て間違えたゴミを回収し終えたミルたんさんがイゼルローンへ帰還の途につき、先方の大ボスさんが待つてる場所まで何の障害もなく来れちゃった私たちと原作主人公勢の皆様方なのですが。

……この辺りって原作でもこんなユルゲーイベントなの？　楽勝すぎて何もするべき事がないんですけども。

あと、私の中にいるっぽい人うるさいです。少しだけでも黙りなさい。

笑い死にかけてお腹苦しいんだったら速く死んでくださいよ、本当にまったくもう。

つづき
と
言
う
わ
け
で
次
は
ボ
ス
戦
で
す
(
た
ぶ
ん
)

23話 「その主人公たちに歴史あり」

「なんだセレニア。また、クラスメイトの子を泣かしてしまったのか？」

懐かしき母の言葉。

前世ではなく今生ではありますが、それでもお腹を痛めて生んでくれたことに感謝は尽きない私の身体の生みの母。

その人から何度窘められ、傷ついたような瞳を向けられても揺らがなかった小学校時代のかつての私。

「ええ、結果的にはそうだったみたいですよ」

不貞不貞しいと、過剰なまでに自分を持ち上げて表現するならそう言えるのかもしれませんが、ぶつちやけクソ生意気なガキの口調と表情で当時の私はそう返したと記憶しております。

まあ、表情も口調も変えられない身体に生まれ変わった以上、これは完全に私の錯覚であり願望にすぎないのですが。

それでも当時の私が入の心を傷つけやすかったのは揺るがぬ事実。それは決して忘れられない、忘れてはいけない思い出です。

「なるほど。・・・で？ おまえは相手を傷つけてしまったことには罪悪感を感じているんだな？」

「無論です。その意図があるにせよ無かったにせよ、相手が私の言葉で傷ついて泣いてしまったのなら、その責任は私にあります。罪人が罰を受けさせられるのは当然のことでしょう？」

この時、母がどんな表情で私の言葉を受け止めていたか上手く思い出すことが出来ません。理不尽な話です、思い出せるはずの情景が一部分だけ曖昧で臆気で正確に思い出すことが出来ない『罪の意識から目を背けるための』現実逃避というものは。

「・・・気持ちや動機なんてどうでも良くて、結果に対してのみ人は責任と義務を負うべきだと？」

然り。気持ちも動機も人個人の中で始まり終わるものです。自分の中で完結していて他人との間で循環できない感情などは自己満足に類するもの。

自身が尊重するのは正しくて尊いと思いますが、他人が理解してくれない受け入れてもらえなかったから理不尽だ等と言い出すのは、それこそ理不尽であり悪であり思想の自由に対しての侵害です。日本人として見過ごせません。

「そんな生き方は周囲の人たちから、人だと思ってもらえなくなるかもしれないぞ？」
それでも構いません。

自分の価値観が歪んで間違つたモノであることなど、承知の上で選んで始めたことなのですから。

もとより私が必要など存在せず、また、その資格を失つた者でもありません。罪人はただ、罰せられればそれでいい。

「尊敬している」と他人をほめることで自画自賛して。

「あの人はこう言っていた」と自分の考えを補填するために利用して。

ちつぽけなプライドを維持するために提督を利用した私は。

正当性を持たない自分を正当化するために提督を利用した私は。

他人を貶めて自分を正当化するためだけに提督の存在を利用したエゴイストな層である私は。

一生をかけてもまだ足りぬ時間を、提督のためだけに捧げ続ける義務を自らに課したのですから。

私の悲願は、ヤン提督の傀儡になること。

出来損ないの模造品になるために生きること。

劣化コピーのゴミ屑以下の人間もどきとして人生を使い捨てること。

ヤン提督の良い部分だけを見て勝手に憧れているだけの人間からドロップアウトした、不良品で欠陥品のコピー機となること。

与えてくれた物を、教えてくれた様々な物事を何一つとして理解しようともしないまま『理解した、分かっている』と勝手に決めつけて都合よく利用してきた自分自身のためには生きないこと。そんなのは勿体なさすぎるから。

私の命は、ヤン提督に成ろうと無駄に足掻くことで使い捨てる。

そうしたいと、そうなりたいと。自分自身で選んだ決めたあの時あの瞬間から、ずっと変わらず願っている不純でくだらないゴミみたいな罪悪感情。

——こんな物で他人を傷つけて、本当に良いのでしょうか………？
分からない分からない。

分からないのかどうかすら、間違っている私にはどうしても理解できないまま今も私は間違いだらけの道を爆走し続けています————。

——巨大な円形の装置が壁に埋め込まれている巨大な装置の真ん中で磔にしたアーシア・アルジェントが、僕を見下ろしている。

その装置は一度しか使えないが、絶対に一度は使わない限り停止は出来ない結界系セイクリッド・ギア『デイメンション・ロスト』を、ロンギヌス本来の持ち主でもない僕たち悪魔が無理矢理にでも発動するため、あちらこちらに宝玉を埋め込んだ装置を作つて、それでも足りないからと様々な術式による文様と文字まで刻みつける始末だ。そうまでして僕に力を分け与えた蛇は、赤龍帝に更なるパワーアップを促したいらしい。

この装置を僕に与えた父たちの狙いは大方「性能テストのため死んでこい」その程度のモノでしかないのだろうと、事の始めから僕には理解できていた。

だからこそ僕は、それを指摘されて激高して当たり散らして撤退してきてから熱が退き、やる気も起きないままに日本から購入してきた最高級掛け軸を眺めながらもお猪口に酒をついで暇潰しをしていた。

もうじき赤龍帝が「死」がやってくる。

それで終わりだ。その先はない。与えられた物だけで形作られていた空っぽの僕の人生も、そこで終わりだ。勝つても負けても先なんて無い。そんなものは生まれたその時から一度だつて与えてもらえた事なんてない。

僕は装置の中のアーシアを見る。

かつて、無知であり無垢であり人形じみた潔癖さを持った聖女という名の人を癒す機械だった少女は、恋を知って大人になり羽化して女になろうとしている過渡期にあるた

め目が眩むほどに美しく感じるが、それだけだった。

綺麗なだけの女ならいくらでもいる。恋を知って女になった女なら巷を歩けば直ぐ見つかる。平凡でふつうの女をいたぶって得られる快感なんて、味わい尽くして久しい。

だからアーシアには手を出していない。指一本触れる気になんてならない。それほどの性的欲求なんて今のアーシアには微塵も感じられはしない。

「まだかな……」

僕は扉の方に視線を向けて、赤龍帝たちの遅い到着を待ちわびている。

死がやってくるのを待っている。世界にとつての捨て駒である僕を蹴散らし、先へと進むための階段として踏みにじられ踏みつぶされる瞬間の到来を待ちわびている。

だって、僕の人生はー先へ行くための犠牲になるため用意された物だったのでしょう？ お父様……。

ドガアンツ！

「アーシアアアアアアアアッ！」

俺たちがたどり着いた神殿の最深部。そこで怪しげな装置に磔にされているアーシアを見つけて、俺は怒りのあまり大絶叫して叫び声をあげていた。

「……やつと来たんだね」

装置の横に座り込んで酒飲んだのはディオドラ・アスタロトだった。

自分以外すべてを見下したようなゾツとする笑みが俺の怒りをさらに高めてくれる！

「……イッサーさん？」

バランス・ブレイカーのカウントダウンヲを始めていた俺にアーシアが声をかけてきて、そちらを見たら目元が腫れ上がっていた。泣いていたんだ。それも尋常じゃない量の涙を流したと思えるほど、目が赤くなっている。俺はそれを見て、嫌な結論に至ってしまった。

「ディオドラ、おまえ、アーシアに事の顛末を話したのか？」

先ほど、セレニアたちが介入してくる前にフリードが。絶対にアーシアに聞かせてはいけないものだ。

だがディオドラは、俺の問いを「ふんっ」とくだらなそうに嗤い飛ばして来やがった。「無論、すべてを教えたさ。当然だろう？　あるいは、フリードから聞かされていないの

かな？

僕は彼女を最低辺まで墮としてから擲い上げて犯すことを狙ってたんだよ？ 今その事実を伝えなくて何時伝えるべきだと君は言うんだい？」

「黙れ」

「いやだ、黙らない。敵の言うことなんか聞いてやらない。これは僕の意志であり決定だ。邪魔したいなら、阻止したいなら力づくで黙らせればいい。簡単だろう？」

だつて君たちは今までずっとそうやって来たんだから、これからもそれを繰り返せばいいじゃないか。何度でも何度でも味方を浚われて取り戻す度に強くなればいいじゃないか。それが君たちの——正義の味方の生き方のはずだ。違うか？ 赤龍帝、兵藤一誠」

嫌に静かな声で語られる内容が、俺の怒りをわずかに押さえさせた。

なんだ、こいつのこの静けさは？ さつきまでとはまるで別人みたいじゃねえか……。リアス部長も俺と似たものを感じたのか、さつきまでより少しだけ落ち着いた口調でディオドラ相手に問いただす。

「アーシアをどうする気なの？ デイオドラ・アスタロト。事と次第によつては私はあなたをこの場でころ——」

「……心配いらぬ。これ以上のことは何もする気がなくなった。……もう、どうで

もいいんだ」

『『……は……』』

図らずも俺たちオカ研とセレニアの声がかぶって響き、見てみると非常に珍しいことにセレニアの表情が大きく崩れて年相応の女の子なかわいらしい感情が浮かんでいた。

場所が場所であるにも関わらず、ちよつとだけ萌えたのは部長にだって話せない俺の秘密だ。

「ど、どうしたんですか？　なんだか急にやる気がなくなっちゃった様ですけど……」

「う、うん……なんだか今までの彼とでは雰囲気違って見えるね……。何か悪い物にでも当たったのかもしれないな……」

ギヤスパーのつぶやきに木場が応じて、デイオドラの足下においてある酒の瓶に目をやりながら続きを言っていた。……悪魔って、日本酒を飲むと当たる生き物だったのかな……？

「……君たちは何のために強くなる？　何をたくて強さを求めて敵に挑む続けているんだ？」

だらしなく片膝をたてて座り込みながらデイオドラは、先ほどとは違って俺だけでなく俺たち全員に問いかけるように質問してくる。してくる。

これに対する俺たちの答えは決まっている。

「仲間のため、仲間たちを守るために強くなりたいと願っている」、だ。

「当たり前のことだし考えるまでもないことだったから即答で返したけど、相手は納得し切れていない。「そうか」と頷いた後に続けてこう問いかけてきたんだ。

「ならばその願いーカオス・ブリゲードが現れなくても、抱いた目標だったのかい？」
『・・・・・・・・』

この質問に、俺たちは即答できなかつた。

考えてもなかつたことだし、考える機会なんて一度もなかつた質問だったから俺たちは少しの間だけ頭を悩ませていたけど、部長の一言で俺たちの思いは一致する。

「当然よ。だって私たちグレモリー派がレーディングゲームに参加するのは必然の未来であり、参加するからには優勝を目指すのが私たちなのだから」

「ーそうだ！ その通りだ！ やっぱり部長は正しくて俺たちを率いるリーダーなんだ！」

「そうかな？ たとえばリアス・グレモリー。君も一度は夢をあきらめ、兄の言うとおりに余所の男の元へ転嫁しようとした身だ。あのとき兵藤一誠に助け出されることになかったら、果たして君はここまでたどり着けてだろうか？」

「そ、それは・・・」

一瞬口ごもってから部長は、

「——いいえ、イツセーが助けにきてくれなかった可能性なんてありえない！ だから彼が私の眷属である以上、この未来は必然による既決よ！ 決して変わるはずのない未来だわ！」

ぶちよ————っ!!! 俺は今、モーレッツに感動しております！ 一生ついて参ります！

「そうだね、兵藤一誠がリアス・グレモリーに命を救われた瞬間から君を寝取るまでの一連の流れは運命の一言で関連づけて片づけるのは可能だろう。」

だが、兵藤一誠。果たして君はリアスと正式に恋人関係になった後で、今ほど熱心に力を追い求めて努力したりはしたんだろうか？ 休みたいしサボりたいと願って嘆いた夜はなかっただろうか？ 僕はそれを聞いてみたい」

「う……ぐ……」

ディオドラの野郎、精神攻撃のつもりか？ なんて嫌なところを突いてきやがるんだ！ やっぱりコイツは腐ってやがる！

「もつと言うなら、君は悪魔に転生するまで勤勉さとは無縁な人生を送ってたんじゃないのかい？ 怠惰な毎日を送り、日々を浪費し続けるだけの人生を。」

力なんてないのに望みは高く、知恵もないのに夢ばかり見てて、いつだって口先ばっかりで、なにが出来るわけでもないのに偉そうで、自分では何もしないくせに文句

を言うときだけは一人前な、平凡で普通で一般的なただの人間の若者。

時間と自由が売るほどあつて何だつて出来たはずなのに何もせず、悪魔になるまで何もしてこなかつた人生を送つてきてはいなかつたかい？

もしそうだとしたならばーやはり君は僕と似ている。おんなじだ。無力で弱くて他人にすがつて分け与えてもらえなければ何も出来ないし、しようと思わない怠惰で無能で臆病でプライドだけが無駄に高い私欲まみれでコンプレックスまみれの平凡な若者。それが君と僕の正体だ赤龍帝。

違つているとしたら、ただの一方所だけ。

君は選ばれた主人公で、僕は前へと進む君たちの踏み台にされて使い捨てられるだけの『未来に進むためには不要で邪魔な過去』であり、今ある現在を未来の自分になるために『間違つていた過去の自分』として否定されるために、ただそれだけの為に存在している『少年が正義の味方になるために必要な使い捨ての悪役』そういう配役を与えられてこの世に生を受けた出来損ないのガラクタだったこと。その一点だけだよ」
今までになくシリラスに続きます。

24話 「異常なる血の紅」

「・・・気にいらねえ言い方してんじゃねえよ。俺がお前なんかと同じ訳ないだろうが」

「そうかな？　ボクは結構、酷似している部分が多いと思うけど？」

「ざけんじゃねえ！　俺はお前みたいに女の子を泣かせたりなんか絶対しない！」

「目の前で別の女とイチヤツきまくってるの？」

バツ！

俺は即座に顔を背けて、ディオドラから放たれた痛恨の一言を回避する！

緊急回避成功！　兵藤イツセーはノーダメージだ！

「ーそれに俺はアジアに酷いことなんかしたことねえ！」

「人前で全裸に剥いて辱めてたって聞いてるけど？」

ババツ!!

俺は続けて緊急回避行動を継続する！　まだ大丈夫！　ノーダメージだ！

「それから後ほかにも・・・」

「もう勘弁してください！」

俺、まさかの全力土下座。・・・変態は正論には敵わなかったよ・・・。

「イツセー……」

「イツセー君……」

「イツセー先輩……」

うっ!? みんなからの視線が冷たい……でも、大丈夫! 土下座してるから顔は見えない見られない! 視線なんか感じるだけで見えてないから全然だいじょーぶ!

「まあ、ボクの方のは権力者特有の分別のなさを発揮したあげく、周りの取り巻きたちは太鼓持ちばかりで止めようとはしなかったから度を超しすぎたけどね。」

貴族じゃなかったら、そして狙った獲物が人間の聖女という悪魔にとつての天敵じゃなかったら危うかったかもしれないねえ。その点については完全に運が良かったと、天とやりに感謝しているくらいだけでも」

「……意外ね。あなたは自分以外の他人に感謝の気持ちなんて持ち合わせてないと思ってたのに……」

部長の言葉にディオドラはくつくつと笑い、今度は部長に向けて嫌に冷めた笑顔と辛辣な言葉を向け始める。

「君がそれを言うかな、リアス・グレモリー。誰よりも気位が高くて、自分が認めた者以外には誰の意見にも耳を傾けようとしなない、名門の誇りを勘違いしている貴族のバカ娘代表の君が」

「――聞き捨てならないわね。私がグレモリー家の誇りをどの様に勘違いしているというのかしら？」

「人前でオツパイさらして守れる名門淑女の誇りってなんだい？」

バツ！

――ようこそ、部長。正論に破れた敗者の側へ。

あと、真つ赤な顔して冷や汗ダラダラかいてる姿も可愛いです。

「そんなものだよ、誇りやプライドなんて。誰もが皆、適当に状況に合わせて自分の今を正当化しながら言い訳しながら現実に妥協して日々を生きてる。

ボクだってそうさ。――いや、今まではそうだったと言うべきなのかな？

名門の家にたまたま生まれついて、生まれながらに高い魔力を持つていたから雑魚には勝って、名門の権威で目上の者でも這い蹲って跪いてくれて。

それらを守るため、特権を維持し続けるためにも親に従い逆らわず、親が与えてくれる物の中から楽しいおもちゃを探して遊んで弄んで打ち捨てて、親に許されている中から特権乱用の手法を選んで実行して民を殺して弄ぶ。

全部、親から受け継いだものだ。与えられた物ばかりだ。自分で勝ち得た物など何ひとつ存在しない。

この身体に流れている名門悪魔の血筋すらも、先祖が偉大だっただけで僕自身が何か

を成し得て手にした物なんかじゃあない。サイオラーグを除く、僕たち貴族のほとんどは例外なく誰かから与えられた物だけで自身の優越感の根拠としている。それが選ばれし者、悪魔貴族の正体なんだよ」

場を沈黙が支配して、部長たちが真つ青な顔色のまま俯くのを視界にとらえながら俺は、言いようのない怒りに駆られてディオドラの奴を真つ正面から睨みつけてやる。

「氣にいらねえな」

一歩前へ進み出た俺を、ディオドラは階に腰掛けながら胡乱な瞳で見つめてくる。

「ようはあれだろ? 『親が金持ちの家に生まれて、言いなりになるしかなかったんです。ボクは悪くありません。全部親が悪いんだ!』 って言う、二時間ドラマで金持ちのドラ息子がよく言ってる台詞と同じだ。三下の三流台詞なんだよ」

「……………」

返事をしないディオドラを、俺は人差し指を突きつけながら大声だして喝破してやる!

「甘えてんじゃねえよディオドラ! てめえは何もやってない自分を正当化したいだけだ。他人のせいにして逃げたいだけなんだ。自分の弱さから目を逸らしたいだけなんだよ!

だいたいお前は家だ家だって口にしてるが、一度でも親に逆らったことがあんのかよ！
ないんだろ!? だったら、やってから口にしろへナチヨコ坊主!

親が決めたからなんて小利口な減らず口をたたく前に、嫌なら嫌ってハッキリとそう親に言ってみやがりやがれ!

「イツセー……!」

「イツセー君……!」

「イツセー先輩……!」

俺の宣言にみんなが尊敬の目で見つめてくれる。

そうだよ! そうなんだよ! 親が言ったから、決めたからって言いなりになる必要なんてどこにもないんだ! 親から生まれたからって俺たち子供は、親の持ち物なんかじゃないんだから!

「いや、全くその通りだね。反論の余地もない。今の君の意見は全面的に正しい。

それさえ出来ていたらボクも変わっていたかもしれない、今のボクはなかつたかもしれない。

今の惨状は僕自身の弱さが招いた碌でもない事態だ。言い訳する余地なんかドコにも見いだせないほどに」

.....

「・・・あれ？」

小首を傾げる俺。

「どうかしたのかい赤龍帝？ 自分がいま口にした内容に間違いでもあったのかい？」

「い、いや、ないけどさ。ないんだけどさ・・・」

「じゃあ、良いじゃないか。君はボクの間違いを指摘した。ボクは指摘を受けて間違いを認めた。それだけの事だ。問題なく進んで良かったね」

「え、ええー・・・」

終始穏やかすぎるディオドラ・アスタロト。

お、おかしいな・・・俺の知ってるドラマのバカ息子だったら、反応がもつとこう・・・

小物っぽい小悪党はずなただけなあ……。

「……さつきから思ってたけど、あなたなんだか様子が変よディオドラ。今までは自信満々で傲慢きわまりなかった態度を変節させる必要がでるほど特別な事態でも起きたのかしら？」

「自信満々で、傲慢……ね……」

部長の言葉にディオドラは皮肉に口元を歪ませながら一口酒を飲み「ボクは母親と会ったことがない」と、全然関係のない話を始めた。

「お母様？ でも、ディオドラ。あなたの母上様は確かー」

「ああ。勿論いるし、父の館で今も暮らしているはずさ。単に彼女がボクの生みの親である本当の母親かどうか確かめる術がボクには存在しないって、ただそれだけの事だよ。大したことじゃないし、冥界では特別珍しいことでもない。

低い身分に生まれた母胎としては優秀な魔族の女なんて、貧困が日常の冥界では珍しくも何ともない平々凡々なふうの女だろう？」

ディオドラの言葉に部長は激しく眉をひそめて、非難がましい視線を向ける。

「統治者として民の生活に責任を持つ貴族の言っているいい台詞じゃないわね。取り消しなさい」

「悪いけど、そう言うことは統治者である父に向かって言ってくれ。たかだか能なしの

ドラ息子である僕に権限なんて殆どないんだから。

せいぜいが父上の眼中にない人間界で聖女たちを浚ってきては皆に知られないよう
 翫って悦しむ程度が関の山の小物相手に言っても意味のない雄弁はやめた方がいいと
 思うな。

これは君より支配者として振る舞っていた時間の長い、貴族としての親切心からくる
 アドバイスだよ」

「……………」

さつきよりも不機嫌そうな表情で黙り込んだ部長にディオドラは、責めるでもなく何
 気無い口調で、詰問としか思えない内容の会話を続けてくる。

「逆に聞くけどリアス・グレモリー。君は統治者として、民の生活に責任を果たしている
 のかい？」

「当然でしょう？ 私はお兄さまに与えられた駒王町を完璧に統治できてる自負がある
 つもりよ」

「人間界は僕たち悪魔の領地じゃないよ、グレモリー。」

それに住んでる領民の殆どから存在を知られてない統治者なんて居ないのと同じだ。
 影の支配者なんて今時はやらないと思うけど？」

「……………」

口をひん曲げて黙り込み、そっぽを向いてしまった部長。

ディオドラ・・・お前って本当に容赦のない性格だったんだな・・・。

「それともう一つ。僕の父親は反動派の巨頭を気取っているくせに表には出ようとせず、息子である僕を保守派の巨頭で反動的な復古主義勢力を束ねる首魁の一人シャルバ・ベルゼブブに預けて指揮権そのものは眷属たちだけに限定的に使用を許可する臆病な卑怯者の代名詞的人物だ。

この時点で子供の僕は親に逆らう事を無意味と断じて従うことを選択したんだと・・・まあ、負け犬の遠吠えとして記憶の片隅にでも記録しておいてくれ」

達観した瞳で語るディオドラは静かすぎたて却って不気味だ。なんだか薄気味悪くなる。いつそ憎たらしいだけの敵なままだったら殴りやすかっただろうに・・・。

「なんだい兵藤一誠。おかしな眼で僕を見ているね。同情でもしてくれてるのかい？」

「・・・別に。ただまあ、お前も苦労してたんだなってぐらいに思ってるだけだよ。そんなだけさ」

俺にとつては最大限に引き上げたディオドラへの好意的評価だったのだが「それは違う。勘違いだ」と本人自身が一刀両断してきやがった。

くそう！ やっぱ嫌な奴だなこの男！

「僕は苦労なんてしていない。苦労なんてしたこともない。親の言いなりになつてるの

が楽だったからそうしただけさ。何かを求めて努力した事なんて、生まれてこの方一度もない。

——ああ、そう言えば兵藤一誠。君には一度聞いてみたいと思つていたことがある。

君の性癖、おっぱいソムリエだったかな？ 周りに忌避されやすい変態性癖を持ちながら、君はいつまでそれを続けて行く気でいるんだい？」

「むろん、死ぬまで！ オッパイは不滅だあああああつ!!!」

これについては何の迷いもなく陰りもなく大声で断言できる。

誰になんと言われようとも、俺はこの趣味を包み隠す気はいささかもねえ！

「そうかい？ でもそれは、果たして人間のままだつたら続けて行かれた拘りなのかな？」

「??? どういう意味だよ？」

「言葉通りの意味さ。今の君は学生で少年という、地域にも親にも国にも法律にも守つてもらえて養つてもらいながら生きてる立場の人間だ。今なら言える言葉はいくらでもあるだろう。」

だが、それらは本当に死ぬまで続けていけるものなのかな？ 周りに理解を得られなまま、何の力も持たない人間として生きていく未来は、本当に今の君が信じて貫くと決めた信念を持ち続けているのだろうか？

僕には人生の敗者として落ちぶれていく、いい年したおっさんの君の姿しか想像できないのだけど？」

「縁起でもないこと言うんじゃねえ！」

マジで怖くなっちゃまったじやねえか！ 昔みた紙芝居屋のおっちゃんを思い出しそうになっちゃまったじやねえか！ ああ、怖かった・・・。

「そうだね。未来の事なんて誰にも分からないだし、成らなかった仮定の話に意味はないか。」

とはいえ兵藤一誠。もし君に、今の君になる切っ掛けになった人物が居るとしたら、その人のことをよく調べてみた方がいいと僕は思うね。

その人は本当に孤独の中で信念を貫いて言っていたのか。その人は本当にそれしかなかったのか。その人は本当に自分の思い描いてる妄想上の人物と同じなのかどうかを調べてから参考にした方がいい。

——丁度その一件については思い当たる方が来られているみたいだし、参考になると僕は信じて進言させてもらおうとするよ」

チラリと、俺の背後に視線をやりながらディオドラは告げて酒を飲み終え、「さて、と」と言つて立ち上がる。

お、やっぱりやる気なのかこいつ。いいぜ、相手をしてやる。どっからでも掛かつて

こー

ズブシュツ!!!

「ー血が、飛び散った。」

ディオドラ・アスタロトが自分の胸を自分の右手で刺し貫いて飛び散った鮮血が、俺の頬に飛びかかってきて避けられなかった。

ディオドラ・アスタロトが……自分で自分を殺して、自殺したんだ。

「ーうん、良いね。これが自分の肉を貫き、引き裂く感触か。悪くない」

「ー!? ディオドラ!? あなた、どうして……!?」

血塗れの貴公子が立ったまま胸を刺し貫いて笑いを浮かべてる狂気じみた光景を前にして、リアス部長が近寄ろうとして近寄れず、せめて声だけでもかけて身を心配する。

だが、ディオドラ・アスタロトは最後の最後まで気色の悪い笑顔を浮かべたまま、俺に嫌悪感だけが残る口調と態度で嫌な台詞を残して逝きやがる。

「なにね。君たちに殺されるつもりで待つてただけど、待つてる間に思い出したことがあつて試してみたくなつたんだ」

『ああ、そう言えば女の肉は散々手で引き裂き、刺し貫いてきたけど、自分のにはしたくと無かつたなあ』つて。だから実験。

思いついたらやつてみたくなつて実行しちゃうのが、悪魔らしくて良いでしょ？」

「バカなこと言わないで！ あ、あなた正気なの!? こんなバカな事・・・普通だったらあり得ないわ！ 私には絶対に理解できない愚かな暴挙よ！」

「そりやそうだよ、僕はとつくの昔に狂つてたんだし。普通の感覚を持ったままの人間にも悪魔にも理解なんか出来るはずがない。

自分が否定した相手を、それでもまだ自分の価値観で理解できると思うあたり、君はまだまだ悪魔らしい貴族だなアス・グレモリー。傲慢さと尊大さが煩わしく感じられるぜ？」

「.....!!」

「僕が消したかつたのは人間じゃない。他者でもない。自分自身だ。

血を尊ぶ名門の家系に生まれながら格下の存在と侮る女の君に自力では及ばなくて、蛇の力を借りてまで勝とうとする弱くて卑怯で恥知らずな自分自身だよ。

にも関わらず、一人で死の恐怖を負うことにすら耐えきれない愚かで哀れで無様な男

だ。

こんな僕の心なんて、ずっと以前より死人も同然。形式を現実に伴わせたただけのこと。大したことじゃあない」

「……………」

「ひとつだけ、忠告を残して逝かせてもらおうよ赤龍帝。

——過去に気をつけろ。乗っ取られるぞ」

それだけ言つてディオドラは、自分の右手で掴んで取り出した心臓を

グシャッと、

握りつぶして動かなくなった。

余りの事態に目を離すことが出来ずに見続けていた俺の目には、ディオドラの口元が動いてから死ぬのが見えていた。

俺には何を言つてたのか聞こえなかったはずなのに、

「この感触……やっぱり殺しは気持ちいいよねえ……」

と、囁くように聞こえてきた幻聴が耳から離れなくなつてしまつていた。

つづく

『残念。先を越されてしまったか。まあいい。今しばらくチャンスを待とう。それほど

25話「この世わづかな悪役の概念」

ーデーディオドラの死体の前で俺たちは全員無言のまま立ち尽くしていたけれど、その内に俺だけはアーシアの元に向かって装置を取り外そうとしていた。

今さつき見た光景を忘れたかったってのもあるが、アイツに真実を知らされたアーシアが誰より傷ついてるのを知ってたからだ。

だがー

「・・・手足の枷が外れない!? なんでだよ!」

『相棒、これはおそらくロンギヌスだ。それもブーステッド・ギアより高ランクの物だろう。カオス・ブリゲードめ、この様な物まで与えていようとは・・・』

クソっ! なんとかできないのかよドライグ? お前もロンギヌスなんだろう?

『無理だ、無謀に等しい。ー相棒、これだけはよく覚えておいてくれ。』

最強種ドラゴンにも不可能はあり、相性がある。ブーステッド・ギアは強力ではあるが万能でもなければ絶対でもない。世界には、より強大なロンギヌスも存在している。それを見誤り過信しすぎれば俺は、お前と、お前の守ろうとしていた者たち全てに破滅をもたらしてしまうかもしれない存在であることを』

「クソ！ くそくそくそ！ なんてことだ！．．．．．どうすれば．．．」

俺が．．．俺がもつとしっかりアジアを守ってさえいれば．．．！

．．．いや、待てよ？ もしかしたら．．．

「ドライグ、俺はお前を信じる」

『どういふことだ、相棒？』

俺はあることに閃いたので実行するため、アジアの枷に手を触れる。

ドライグの力で高めた妄想の類から生じる特殊技なら通じるかもしれないと思ったから。

「高まれ、俺の性欲！ 俺の煩惱！ ードレス・ブレイクッ！ バランス・ブレイカー

ブーストバージョンッ！」

バキンッ！ バキンッ！ ババババッ！ ーぷるるん♪

「いやっ！」

やった！ アーシア救出成功！ おまけに白くて美しいおっぱいもポロリだぜ！

「イツセーさん！ 信じてました．．．。イツセーさんが来てくれるって」

「アーシア！」

「アーシア先輩！」

『アーシアさん！』

ー後ろの方で、なにやら肌色成分多めの桃色青春白書が展開している頃、私たちはディオドラさんの死体を漁ってドロップアイテムの回収中でした。

本当・・・人々を救うためにボスキャラ倒した勇者が敵の死体から武器防具を回収する行為ってRPGではよく見かけますけど、どうかとも思いました・・・。

「どう？　ゼノヴィア。なんか見つかった？」

「ああ、思った通り所持していたぞ。『輝くトラペゾヘドロン』だ。確か今は星の智慧派教会が所蔵していたはずの物だが・・・今更といえど今更だな」

「だねー。カトリックの総本山からエクスカリバー盗み出されるご時世なんだし、石のひとつや二つは盗まれるし盗めるっしょ。ついでに言えば一度盗み出してしまえばすれば模造品や偽造品も作り放題になる、と」

「そう言うことだ。『セラエノ断章』『ルルイエ異本』『エイボンの書』。オリジナルでもな

いのに似た力を持った偽造本なら事欠かないのがクトウルアイテムだからな。

おおかたコイツも似せて造つただけのレプリカだろうよ。・・・誰の差し金かな？

ランドルフ・カーター、リチャード・ビルンソン、ウエイトリ家。ジェームズ・モリアーティも重要な容疑者の一人だろう。やれやれ、捜査に手間と時間がかかりそうだよ。・・・」

・・・なぜかアットホームなほのぼの時空の背後でミステリーな搜索活動を想定している私たち。これが天罰って言うものなのかなー。・・・。

「で？ その死体はどうするの？ 燃やす？ 切り刻んで土に還す？ あるいは残滓が残ってるかもしれないし消滅させて終わらしちゃう？」

嬉々としながら提案された紫藤さんの言葉にゼノヴィアさんは頭を振りながら「無益なだけだ。やめておけ」と冷たい声で言い放ち。

「今調べてわかった。死体そのものにも邪神の残り香が付着してはいたが、これは肉体等に染み着く類のモノではない。と言って、魂などのアストラル体に干渉するアストラル界との因果関係が成立しているとも思えない節が見られる。

現時点での予測に過ぎないが・・・こいつもしかしたら実の母がマーシユ家の血に連なる者だったんじゃないのかな？ ちょうど名字がアスタロトだし、ヨルダン川東岸にあつたとされる都市アシユタロトと語呂だけは似てるだろ？」

「ああ、なるほどく．．．ファーストネームのディオドラは？」

「ギリシア神話のディオソニス。あれも自制心を失わせる葡萄酒の神だ。ディジタリアとも関連づけた可能性も．．．まあ、無いことはないだろう。会ったことないし、妄想の範疇にある内は否定されん」

「二期オカルティストやUFO信者たちを騒然としたアレかく。確かにクトウルも宇宙ではあるもんねー」

．．．いかん、専門知識が出始めた。素人にはついていけないんで帰っていいですか？

ーでできれば怒られる前に帰るといふ名目で逃げ出したいんですけども．．．。

「ーってゆーか、今更になって教会所属時代に習ったことが思い出されるとは想像もしていなかったわね。生きてると退屈しなくて済むから助かるわ」

「全くだな。とにかく話を戻すが仮にコイツがマーシユ家の血に連なる者だったと仮定した場合、自身の成長と怪物化は同義だ。」

悪夢に悩まされるところから始まって、神経を病み、異形の先祖に連なる者たちから呼び戻され、迎え入れられる光景を毎日毎日何度も何度も夢見るようになり、精神は逆転し最後には自らもクトウルフに仕えるため海底神殿へ行くことを願ひ出す。

そうになったら終わりだ。自分自身など世界の片隅にさえ残されておるまい。名門悪

魔故に覚醒が遅れたが、トラペゾヘドロンを手にしたことで活性化させられたのかもしれない。

そうだとしたらこの場合、コイツが成るのがインスマスカニユルラーいや、性質的には別物だから、ナイアルホテプとでも名付けておくかーナイアルホテプに成りかけてたかどうかだけののだが・・・」

スゴいですね、この人たち。被害者の死体を前にして『次の殺人事件の犯人の正体』について語り出しちゃいましたよ。こんな刑事がミステリードラマに出てたらヤだなー。

「・・・と、大事なことを忘れていました。これについては陛下にちゃんと確認しておかなければなりませんでしたね。ご無礼の段、平にご容赦を」

ギクリ。・・・な、なんのことかな。記憶にないですけど？

「陛下♪♪ ご自分ではしゃべってるつもりでも、声出てませんよ♪ ひたすら汗かいて顔を背けてるだけじゃ言い訳にはなりません♪」

う、うぐう・・・。

「嘘つくの苦手なんですから、素直にゲロしちゃいましょうよ？　ね？　吐いちゃったら楽になれますよ？」

モ・チ・ロ・ン☆ 真実をゲロしちゃったらお仕置き確定ですけどね♪

きやはははっ★」

う、うううう・・・サドのドSは怖いよ・・・。

あと、昔使ってたエクスカリバー・ミミックを鞭代わりに振り回して脅すのマジやめろ怖いから。・・・お願いですから止めて。マジで怖すぎるんですよお・・・。

「セレニア様」

そして真打ち登場。天野さんです。

「反省」

「はい・・・」

直ぐ様その場に正座してシユンとなる私です。

いや、もう本当・・・今回の件ではすみませんでした・・・。

天野さんは腕組みしつつ私を睥睨し、ため息混じりに裁定を下して頂きました。

「ディオドラ・アスタロトは今更手遅れだったにしても、陛下がご心労を抱えていて精神面が不安定になってきていることは素直に打ち明けていただき良かったです。」

そうすれば私たちも最近、陛下に甘えすぎていると自覚しやすかったものを・・・

「ですよね。陛下って何言っても言われても表面的には代わり映えしないから今が大丈夫なのかどうか判別できないんですよね」

「鉄と同じですね。堅くて丈夫で長持ちしますし、殴っても叩いても悲鳴ひとつ上げま

せん。それ故に我らも知らず知らず甘えてしまう。『この程度までなら許容範囲だろう』と。

それが積み重なっていても、対象の見た目が変わらなければ判断基準は我々の胸先三寸で決めるしかない。間違えても気づく手段がないから間違い続ける。

まあ、要するに――」

ゼノヴィアさんがお三方を代表して一步前へでてくると。

「偶には、陛下の方から我らに甘えていただきたかった」

「……………」

「自分は弱いから、守ってもらってばかりだからと我慢し続けるだけでは何れ限界に達します。そうなれば陛下に依存している我らも命運を共にするしかないのです。結果が同じであるなら早い内から巻き込んでいただけただけの方が都合がよろしいのですよ。」

「この程度の基礎は、補給が得意の陛下なら言わずともお分かりだったはずですが？」

「う、ううう……………」

「私からも申し上げさせて頂きますよ、陛下。――反省と謝罪のお言葉を」

「う、う、うううう……………」

お、おかしいですね変ですね。どうして無力な一般人である私が異世界に転生してか

ら勇者エミリアと同じポジションに付く羽目に陥っているのでしょうか・・・？

いや、弱さ的にはちーちゃんかな？ それとも身内に謝罪を求められるからライラさん？ 個人的には真奥さん辺りを想定してたんですが、実は一番縁遠い場所に位置してたりしちやったりんなんかしてー

「謝罪のお返事は？」

う、うううううう・・・

「ー」

「」

「・・・ごめんなさい、謝りますから許してください・・・」

生まれ変わってから初めて心から行う『私が間違っていました』の謝罪。

あるいは前世も含めて生まれる前からずーっとやってこなかったのかもしれないが、今私は初めて結果ではなく原因となった私自身の気持ちの間違いについて謝罪をしました。

結果に対する謝罪でもありません。結果を招いてしまった気持ちに対してでもない。

私が現実から眼を背けてきたことを皆が気づいて気を使ってくれていて、私もそれの気づいている。その居心地の良い環境に甘えて、甘え続けて招いてしまった自己矛盾による犠牲者。それを出してしまったことに対しての謝罪でした。

省みるまでもなく天野さんたちの変身が原作設定に無い時点で、異分子としての私の存在が発端となっているのは考えるまでもありませんでした。

その事実から目をそらして『自分は特別ではない。なんの力も持たない凡人に過ぎない』としていたのは、そうしていたかったから。自分が特別だと自惚れていた前世に対する反省が自己嫌悪となり、自己憎悪となっていたから。その憎悪に私は甘えて現実から眼を背けていました。

今思うとバカだったなあと分かるんですけどね。バカやつてる最中って以外に気が付かなくて……。

「ごめんなさい、反省してます。今すぐは無理ですけど、帰ってから色々考えて直せるところは直したいなと思ってますのでお許しを……」

「ダメです。帰ったらお尻ペンペンのお仕置きです。改心はその後にでも」

ダメなのかよ！ そこは笑顔で許すところじゃん！ 「いいんだ、分かってくれさえすればそれで良い」 ってなる所じゃ……

「人死に出ていますので。帝国の司法を司るものとして黙認するわけには参りません。どうかご容赦願います」

「ですよねー」

うん、本当は分かっちゃいましたけどね。そう言う国ですもん、混沌帝国って。ご都合主

義が微妙に通じねえのは今に始まったことではありません。

仕方ないです……甘んじて罰を受けー

「ーふん、戯れで身を滅ぼすとはディオドラ・アスタロト。役に立たぬ奴。計画に再構成が必要だな」

「……何者?!」

ー今度はなんですか？

なんかもう、疲れちゃったし帰りたいなーと思いつつ振り向いた先に待っていた（私を待ってたわけじゃないでしょうけどね）のは、天井に浮かんでる魔法陣から降りてきた長髪のお兄さん。

「お初にお目にかかる、忌々しき偽りの魔王の妹よ。私の名前はシャルバ・ベルゼブブ。偉大なる真の魔王ベルゼブブの血を引く、正当なる後継者だ。」

そこに転がっている偽りの血族とは違う。真なる魔王の座に付くべき正当なる冥界の王だよ」

「ベルゼブブ……!!」

はあ、今度は『蠅の王』さんが出てきたんですか。見た目が蠅とかけ離れすぎてるのは仕様ですかね？

ーって、あれ？ 兵藤さん？ どこ見てんです？ そっちには何もなし、誰もいませんよ？

・・・・・・・・・・・・・・・・まさか・・・。

「アーシア？ アーシアなのか？ どこ行ったかと思つて心配してたんだよ・・・。

さあ、一緒に帰ろう？ 俺たちの家族が家で待つてー」

「イツセー君・・・？」

「イツセー先輩、一体何を言つて・・・だつてアーシア先輩はさつき・・・」

「そう！ 死んでしまいましたな！ 敵の陣中深くにあつて再会したヒロインとラブシーン交わして油断しまくりに隙見せまくりで不意打ちされて！

ああ、なんたる悲劇！ なんとという喜劇！ 余りにも愚かで痛ましくも馬鹿らしい悲喜劇に我が輩、感動と笑いで涙が止まらなくなつてしまいましたよ！

いやあ、素晴らしい！ 実に素晴らしい道化っぷりだ！ ミスター兵藤イツセー、我が輩は最高の道化ぶりで愉ませてくれた貴殿に相応しい報償を用意いたしました！
これです！」

パチンツ。

ーボンツ!!

何もない空間で小爆発が起き、誰もが啞然として見つめる中で兵藤さんだけが……。
「アーシア……？ アーシア……アーシアアーシアアーシアアーシアアーシア
アアアアアアアアアアアツ!!」

「イツセー！ 本当にどうしたというの!? 朱乃、貴女には何か見えていて!」

「いいえ、何も。これは……イツセー君だけが見ることの出来る幻覚……いえ、悪夢
の類……!」 先ほどから解呪を試みているのですが効果が出ないので!」

「イツセー先輩！ イツセー先輩しつかりしてください!」

「イツセー君！ しつかりするんだイツセー君！ う……!? なぜだか凄い頭痛とトラ
ウマが……一体ボクの過去になにが会ったんだ……? 何も思い出せない……」

阿鼻叫喚。なんだか見慣れた光景のようにデジヤブってる異住セレニア・ショート、転生者でつす。

ーそんな混沌とした原作勢を見下ろしながら、シャバル？ベルゼブブさんは私の隣で『立ち上がった』人物に悠然とお声をかけられます。

・・・それが自分にとつて破滅をもたらす者であると知る術を持たないままに・・・。

「・・・驚いたな。死にかけの分際で、まさかこれほどの力を行使できるとは・・・私はいささか貴様のことを見くびりすぎていたか？ 偽りの魔王の血脈を継ぎし者ディオドラ・アスタロトよ」

「いえいえ、間違つてはおりませんよシャルバ・ベルゼブブ。」

偽りの魔王の血を継し者サーゼクス・ルシファーに実力で及ばず地位を奪われ、多民族と野合しテロに荷担してまでしないと挑む勇氣さえも湧かなくなつた臆病で無能な旧魔王の後継を自称する負け犬よ。

ディオドラ・アスタロトという名を与えれ、この地上に一個の生命として根を降ろしていた尊い生命体は死にました。いえ、とつくの昔に死んでいた。私が殺したのでね。

——ここに在るのは神の名を持つ偽物である。誰かに寄生しなければ存在できず、顕現するなど不可能な情弱でひ弱な弱小生物である。

我が名は『ナイアルホテップ』の名を持つ役を演じし者、役者にして脚本家。

冥界、天界、人間界。この世のすべてを舞台と見なし、男も女も神も悪魔も天使も墮天使も見立てた役柄を演じてもらおうと欲し、操ることに決めた者。

私は役者にして登場人物の一人。取るに足らない端役の一人にして、劇の内容が気に入らないからと脚本家には内緒で勝手に文章を書き加えまくる身勝手な作者を兼任せし者。

正義によって倒され、栄光の陰として置き忘れられ、やがては歴史の影に沈みゆく者。名を『過去』。字は『悪役』。現在を正当化するため人が必ず捨て去るモノの概念が形を成したモノ。

ですがそうですね・・・名前が『過去 悪役』では呼び辛いでしょうし、とりあえずはこう名乗っておきましょう。『ジエークイズ』。お気に召さない物語に介入しては引っかけ回すだけの道化者ですよ。

——それでは早速で悪いのですが、ふんぞり返って喚きながら負けてください。古来より主役のパワーアップイベントの際には無様に負ける素敵で哀れな役者が必要不可欠なものでしてね。

『フォリオ・エピソード』（物語は終わった、其処に残るは記憶だけ）』
つづく

オリジナル的キャラクター：

ナイアルホテップ。もしくはジエークイズ。

セレニアの転生特典と自己嫌悪が生んだ人造邪神。

『勸善懲惡作品において、主役のために悪を成して負ける役割』である『悪役』を、『人が成長する際に置き忘れていく過去』の概念と重ねることで存在を成立させている。

記憶と言う名の『終わってしまった出来事』から抽出しないと存在自体が成立しないために、未来がない。未来がないから先の事で思い煩う必要も存在しない。

思うがまま主役のために悪をなし、正義に敗れて正義を輝かせることを存在の大前提としているため、死ぬことにも負けることにも頓着できない変人。

セレニアから生まれた存在なので、人の側面を視点を変えて視るのが得意。

ただし『未来へ進むため』ではなく『過去から見ているだけ』の視点なので、悪意的解釈しかしようとしてない。

セレニアたち転生者の存在を『二次創作家』と見ているため、キャスター・シエイクスピアの人格を好んで採用したがる。

が、自己否定の感情が元となつているので「オリジナルではなく、真似ただけの偽物に過ぎない」ことに強くこだわっている。

シエクスピア本人ではなく、彼が自分の思想をキャラクターに代弁させていると「解釈する人もいる」存在、著作のひとつ『お気に召すまま』に登場するジェークイズと名乗っている理由はそれ。

人が作つたものであり、意図して作られた存在でもないため非常に脆くて弱い。戦闘能力は皆無に近く、事実として武器を持ってない。

セレニアから生まれた存在であるため彼女の記憶の内にあるキャラクター、もしくは人物の姿形と人格を似せた状態で再現しないと現界でできず介入もできないなど弱点だらけ。

ただし自分の事を「主役に倒されることが役割の悪役」と定義しているので問題ない。

能力『フォリオ・エピローグ（物語は終わった、其処に残るは記憶だけ）』

彼の憑依している概念そのものが形となった能力で、「人が思い出したくない、忘れたい記憶」だけを思い出す本人限定で、その人の心の中にのみ再現する能力。

今回の場合はアーシアに対してイツサーが抱いた自責の念を過去の映像付きで再現

させている。

自己嫌悪は本人が感じている気持ちの問題なので、真実である必要も事実である必要性も無い。本人が「きつとこうなんだ」と思い込んでさえいればそれでよい。

いろんな作品のセリフを引用したがる癖があり、道化ぶるのが趣味。人をおちよくるのが大好きで、その為なら自分の命も他人の命も全額ベット出来る奴なので大迷惑。

基本的には嫌われ役で、悪役の任を楽しんでこなす破綻者でもある。

属性は『悪役』と『中立』。要するに悪役であることが重要なので所属は問わないという意味。

26話「最低最悪なシナリオに万雷の座布団を！」

——俺は蝶になって、不思議なトンネルを飛んでいた。

時計が飛んでくる。車輪が飛んでくる。数式が、教科書でしか見たことがない遺伝子の分子配列が飛んできては崩れ去り、最後にはトンネルを抜けた先に扉があったので、ブを回して入り込む。

それがどこに繋がっている扉かなんて考えなかった。どうでも良かった。とにかく、どこでも良いから逃げ込みたかったからだ。

扉を開いた先には暗闇に浮かぶ四角い部屋があつて、中央には白いタキシード姿の男が姿勢正しく立っていて、俺に対し礼儀正しく一礼をして迎えてくれた。

「ようこそ、お初にお目にかかる。」

私はファイルモン。意識と無意識の狭間に住まう者。

さて、君は自分が誰であるか名乗ることが出来るかな？」

奇妙な質問だと思った。俺は自分の名前が思い出せないほど年寄りでもないし、呆けてもいない。親父とお袋に与えてもらった名前はいつだって言えるぜ！

だから俺は答えようとした。

俺の名前はひょうどー

”ー………!!!”

声が出なかった。いや、出せなくなっただんじやない。出すことを自分で止めちまったんだ。何でかは分からないけど、今の俺は自分が何処の誰で、なんて名前の男なのか思いついたくないらしい。

「結構。此処に来て、自分が誰であるか語れる者は多くない。どうやら君は平凡な凡人のようだ。特別、強い意志と精神の持ち主ではない」

ー俺が……平凡だって？ 冗談だろ？ だって俺はドライグの……

「力の有る無しは、殊この場所に限っては意味がない。ブーステッド・ギアを始めとする武器は『敵と戦い、倒すため』にある武器なのだろう？

それらは自分の外側にいる敵と戦うための物だ。自分の中にいる複数の自分と戦うための武器としては不適切なんだよ」

ー自分の中にいる複数の自分……

「そうだ。人は自分の中にいくつもの自分を内包しながら、使い分けて生きている。

神のように慈愛に満ちた自分、悪魔のように残酷な自分。

アーシア・アルジェントの様に人を愛し守りたいと願う自分、ディオドラ・アスタロ

トの様に女性を辱め自分の物にしてしまいたいと欲求する自分。

人は様々な仮面を使い分けて生きる者。

今の君の姿も、彼女たちと共にある姿も、敵と戦い殴りつけては血に塗れる君の姿も、無数にある君の中のひとつに過ぎないかもしれないだろう?」

——!! 俺はディオドラの奴なんかとは違う! 一緒にするな!

「……なるほど。君が此処にきたのはそう言う理屈か。納得したよ。

どうやら君は、今少し此処で来るべき時を待っていた方が良いようだ」

——冗談じゃない! 俺は今すぐあそこへ戻らないといけないんだ!

あそこへ、戻らないと! あそこへ! あそこへ……あそこ……

……あそこ……あそこ……何処だったわけ? 俺が行くべきと思っていた場所は、待っていてくれるはずの女の子がいた場所は、俺の大事な女の子の名前は……いったい、なんて名前だったろう……?

「やはりね。君は彼相手には戦えそうにない。相性が悪すぎる敵だ。今はただ、仲間たちを信じて待ち続けたまえ。君を必要とする仲間が迎えに来るのを、君と同じで一人では歩けず立てもしない、弱くて脆い意志と精神の持ち主が来てくれるのを。」

君たちは、そう言う類の戦いをしている者たちだ。彼女や彼とは違う戦場でいきる者たち。本来ならば、此処になど来るべきではないはずの少年が避難してきたのだから

迎しよう。

何れ必ず此処を訪れにくる、君をあるべき時間と空の元へ連れ帰ってくれぬ少女が来てくれるまで君は私が守ってみせる。彼の劇場に立たせたりなどさせるものか」

そいつが何を言っているのか俺にはよく分からなかったけど、少なくとも俺は彼の元へ居ていいのだと分かつて安心していた。

なんだか凄く眠い。疲れた。休みたい眠りたい。ちょうど今なら良い夢が見られる気がするからな……

……では、第二幕へと参りましょうか。ーぱちん♪

「ああ、ああ、ああ、ああ、ああああああああー……シアー……っ!!!」

俺は、ただ叫んでいた。大声で泣き叫び、声も涸れろと大音量で、天井に向けて叫び続けていた。

そうすればアーシアに聞こえると思ったから。聞こえてくれると信じてたから。聞

こえてくれたら必ず俺の元へアーシアは戻ってきてくれるはずだと信じていたから——

「嘘ですな。あなたは、アーシア・アルジェントの生存を信じてなどいない。死んだと思っている。だから叫んでいるのだ、天に向かって大声でね。」

生きていると信じている人間を呼ぶ声を、天高くに向かって大声で叫ぶなど不吉きわまりないですからなあ。まるで死人に『あの世から帰ってこい』と叫び続けるネクロマンサーの様に。

もしくは自分のせいで殺してしまった死なせてしまった、自責の念に耐えきれないから自分を救うためにも戻ってきてくれ帰ってきてくれ、お願いだから助けてくださいと泣き叫んでいる迷子の迷子の幼子ちゃんのように、ですかね〜」

ひどく愉快そうでイヤな声音が鼓膜を刺激し、俺は声の先にいる男の方へ視線を移した。叫びたい気持ちは一気に鎮火して、今はただコイツを殴って気分を晴らしたい。それだけが俺の願いだっただけ——

「おやおや、凶暴そうなお顔ですなあ。まあ我が輩を殴りたいというので在ればご自由にどうぞ。どのみち短すぎる一生です。今死んでも十分後に死んでも大差ない。」

ただまあ、一応の礼儀としてお伝えしておきますが我が輩を殴るとフオリオ・エピ

ソードの効力が切れて現実に舞い戻されてしまいますぞ？

『アジアを殺したのは自分だ』と自己嫌悪に駆られて暴走しかかっている・・・というか秒読みカウントダウンに入っていますので今この場で行われているやりとりの意味もないんですけどねえ！ それでも良ければご自由に？

どうせ現実には留まっているあなたの肉体を持つ本体は今なお苦しみ続けていますので、俯瞰視点で見れば同じ事です。此処での行動に意味はない。それでも良ければ、此処で本体と別離していられる権利を手放したいなら好きになさるが宜しかろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はしばらくソイツのことを睨んでから背中を向けて座り込み、無言のまま時が過ぎるのを待った。待ち続けた。

待つてる間に変わってくれてることを信じて。待つてるだけで色々なことが何とかなってほしいと願いながら。「無理無理」と嘲笑う男の存在を脳裏から意図的に閉め出しながら。

ディオドラ・アスタロト「だった」何者かは悠然とした歩調で歩き回りながら先ほどとは一てんんして穏やかな口調と態度で語りかけてくる。

そこに違和感はない。真逆の態度でありながら無理している気配が微塵もないのだ。——まるで、そのどちらもがディオドラであり、静も動も彼の側面にしか過ぎないという事実を体現しているかのよう……。

「皆様方が……いえ、三種族を含めすべての知性ある生物たちが勘違いしている事がひとつあります。

それは彼、兵藤一誠は偶さか生まれついて奇跡の力を有してただけの男子高校生であり、本質的には善良でスケベなだけで平凡な日本の高校生として生まれ過ごしてきた若者にすぎない、と言う点です。これを勘違いしてはいけません。彼を間違えさせてしまふ。今回の件はその典例と呼ぶべき忌むべき事態でありましょうな。哀れなことです」

「ふざけないで！ これは全部あなたが仕組んだ事態じゃないの！ それをあたかも他人のせいみたいに振る舞うなんて虫が良すぎるにも程があるわ！」

「私が？ 仕組む？ とんでもない、私は今回、ただただ踊らされていただけの道化に過ぎない身ですよ。そこにおられるシャルバさん自身もそう証言しておられます。」

『自分たち真の血統が、私たち現魔王の魔王の血筋に旧などと言われるのが耐えられなかった』とね。違いましたかな？」

「……!! それは……」

問いかけてくる口調ではあったけど、彼には事の是非などどうでも良いらしく話題をすぐさまイツセーに戻してくる。

まるで話し相手を言葉だけで弄ぶように、悪意と誠意と丁寧さでもって私たちの心を苛むかのように。

まるで、異住セレニア・シヨートが『自分の信念』ではなく『悪意』だけで形作った言葉の刃で私たちを切り刻み、愉悦するのを悦しんででもいるかの如く。

「そもそもリアス・グレモリー。あなたは どうしてアーシア・アルジェントの死について、そんなにも怒りまくっているのです？ 我が輩にはそれが理解できないのですが？」

「……仲間が死んだのよ。怒るのは当たり前じゃない」

「そうでしょうかねえ？ だって彼女、とつくの昔に死んでるはずでしょ？ 墮天使レイナーレとの一件の折りに」

「……!!!」

!!!!
——そんな話を・・・今更!!

「彼女だけではない。そこにいる木場祐斗も、人の死体に命を戻し悪魔として生き返らせた所謂ゾンビ兵だ。人間として死んだ時には何の感情も湧かなかつたのに、悪魔として死んだときには大声だして矛盾と理不尽を叫び上げるのですか？　はは、随分と民族主義陣営じみた思想がお好きな御方だ。さすがは魔王の妹君、と言ったところでしようか？」

「・・・彼女たちが死んだときは赤の他人で、今では私の眷属よ。扱いや待遇に差がでるのは致し方ないことだわ」

「全く以てその通り！」

私の否定に全力で肯定を返し、嬉々とした笑顔で語り続けてくるこの男。一体何者か分からないけど・・・なんだかスゴく嫌な予感がして耐えられそうにない。

何かが来ている予感がする。恐怖が直ぐ側まで来ているのに気づけないでいる。怖い怖いと思いつつも、なんでか知らないまま彼の話に聞き入ってしまった。

まるで異住セレニア・シヨートと話をしている時みたいに自然な感じで、なし崩し的に自分を破滅に導く言葉の数々を一言たりとも聞き逃さないよう聞き耳を立て続けてしまっている。

自分が制御できない。支配できない。支配権が奪われている。言葉に支配されている。

まるで日本にいるときに聞いた『言霊』、言葉自体が特別な力を持つに至った神秘で攻撃されているように……。

「さすが冥界の姫君！ 伝統ある格式ある旧家の次期当主になられる御方だ。ちゃんとお分かりでいらつしやられた。

——そう。赤の他人と、自らの家族である眷属が同等の価値を有しているはずがない。必ず差別は起ります。

なにしろ眷属は最大でもチェスの駒以上の数は揃えられない訳ですからね。最大でも二十人ちよつとまでしか入ることが許されない終身制の側近たち。日本の本州より広い国土を持つ冥界で二十人ちよつとと言うのは、総人口的に見てどうなんでしょうかねえ……？」

「……グレモリー家の他にも名家はいくらでもあるわよ」

「まさしくその通り！ 名家はいくらでもいて、支配者が果たすべき責任は全員で分担して果たすべきで、だから自分一人が担うのは手元にいる極少数の者達だけで良い。

——そう仰りたいの御座いますしょう？」

「!! 私にそんなつもりは……！」

「では、どう言う意味なのか口に出して説明していただきたい!」
「!!!」

再度の喝破。それに対して私は、ただただ居竦まる事しかできない歯がゆさで舌を噛み切りたくなってしまおう。

彼は構わない。躊躇わないし、取り合わない。こちらの都合などお構いなしで語りかけてくる。

まるで私たちに語りかけるのは『別の誰かに見せつけるためであり』、私たち個人個人のことなどどうでも良いのだとでも言うかの如く。

「付け加えさせていただくなら、何故あなた方はアーシア・アルジェントを戦場まで連れ出してきたのです? 彼女が戦闘には向かない気質の持ち主であることなど当の昔にお分かりだったはずだ。出てくれば高い確率で殺されることなど分かり切っていたはずだ。」

なのに何故彼女をレーディングゲームの会場に・・・テロリストとの戦争中に敵か味方か確認すらとれていない人物の領土内奥深くにまで連れ込んできたのか、わたくしめにはサッパリ理解することが出来ません。

ご説明いただければ幸いなのですがなあ? グレモリー眷属の当主、リアス・グレモ

り〜?」

ネチっこくて嫌みつたらしく、それでいて『わざと』そうしているのが丸分かりになるよう調整された口調で彼は語る。

私に対して悪意を抱いていることを隠そうともせず。隠してないことを分かり易く伝わりやすい口調で挑発してくるかのよう。

「彼女は世界でも希にみる回復能力の使い手で、私たち悪魔の負った傷を癒すことができる奇跡の力の使い手なのよ? その彼女なしでどーやって私たちグレモリー眷属に勝ち目があるというの?」

「ほほう。では貴女は事の始まりから彼女の存在の重要性に気づいていたと?」

「ええ、当然でしょう? 私はアーシアのー彼女たちすべての主であり、誇り高きグレモリー家の当主となる身なのだから」

そう、そうなのだ。私はグレモリー家の次期当主で、果たすべき責任がある身で、彼女たち眷属全員を愛し慈しみ守り育てる義務を持ったー

「ならば何故彼女の警護を兵藤一誠に一人に任せて、自分自身は単独で先頭に立ち続けたのです? 後方支援要因であるべき魔法攻撃とデカイ胸しか取り柄のない貴女が」

.....!!!

「本来、王と呼ばれる身分の者は全体を指揮統率すべく後方から指揮棒ふって叫んでさ

えいれば良いお立場だ。負け戦に際しては率先して、誰よりも早く逃げ延びねばならない責任があるお立場なのです。一介の武将のように武勇を誇り、華々しく散る贅沢など許されるべきでは決してない。

死よりも辛い過酷な敗戦の恥辱を一身に受け、自らの命により死なねばならなくなつた者達の屍の山を踏み越えてでも逃げ延びなくてはならない身なのです。

生き延びてこそ果たせる責任を果たさなくてはならない尊い立場。それこそが王ーキングなのです。リアス・グレモリー。貴女はー、あなた方お二人は、そのことを本当に分かつておられるのですかなく？」

彼は粘着質な口調で私のことを、「見ようともせず、遙か後方にある何かを見つめながら」言葉を紡ぎ続けてくる。

言い返したい。けど、なぜだか言葉が浮かんでこない。声が出せない、出してはいけないことのように感じてしまう。これは一体、どう言うことなの・・・？

「つまりはそう言うことなのですよ、リアス・グレモリー。兵の死の責任はすべて上に立つ身が負わなくてはならず、アーシア・アルジェントの死の責任はもちろんの事、その他すべての戦争責任は、戦争でなくなつた敵味方全てに対する死の責任は挙げて国家と国家統治者たる責任者達が、責任者達だけが負うべき事柄なのです！」

それを忘れ果て、ご自身で先陣に立ち！ 身の程知らずにも霸王を気取る！ その結末がこれだ！ 無様な道化の人生が紡いだ悲喜劇だ！ 貴女は愛していると口にしていただけの男に全ての責任を押しつけて自分一人が悲劇のヒロインぶりたかっただけの・・・無力な小娘に過ぎないのですよ」

その一言が私の心を――折っ・・・

「――誘導尋問」

・・・え？

「んう？」

「誘導尋問はよくありません。彼の事を『こう思いますね？』ではなくて『どう思われますか？』と問いかけるべきです。」

――むろん、異議申し立てをされたくないのであればの話ですがね」

異住セレニア・ショートが私を庇うように前に出て、『彼』と正面から対峙する。

その眼には私たちが今まで見たこともないもの――『焦り』と『怒り』の感情が等分に晒け出されていた。

彼はニヤリと笑つて恭しく一礼すると、

「ようやく真打ちご登場……というわけですか。待っていました、我が主にして創造主たるお母様。

なにしろ私という存在は、貴女を苦しめるためにみ存在を許された身なのですから」

——第三幕——

「……口の聴き方に気をつけよ、デイオドラ・アスタロト。貴様ごとき偽りの魔王の血を継ぐものなど今の私が殺そうと思えばいつ何時にも殺せるのだぞ——」

「まさしく！ 如何にもその通りだよシャルバ・ベルゼブブ！ 僕ごとき雑魚は今の君に取つて何の障害にもならない！ 只の雑魚だ！ 有象無象だ！ 偉大なる真の魔王

の血を引く後継者の前では取るに足らない存在だ！

——そんな取るに足らない存在を前にして優越感に浸るのが、そんなに楽しいのかねえ？ 勝って当然の雑魚相手にしか力を誇れない自分自身が惨めになったりしないのかい？ ええ？ 力で冥界を治める偉大なる悪魔の王、魔王の正当なる血脈を継ぎし後継者さまようー！」

「——！！！！ 貴様っ！」

「ふひやはははははははっ！！」

殺気に向けて魔力の光弾を放ったが予測されていたらしく避けられてしまった。

ふん、妙なところで運の良い奴。だが、幸運による偶然など二度も続か——

「予測？ 幸運？ 偶然？ なにを勘違いしてるんだい、シャルバ・ベルゼブブ。僕が今の攻撃を避けられるのは当たり前さ。」

だって、そうなるよう仕向けたのは僕の方なんだから」

「………なに？」

思いも寄らぬ言葉に私は意表を突かれ、一瞬だけが押し黙ってしまった。

そこに付け込むようにディオドラ・アスタロトはニヤリと嗤い、嵩に掛かったように連続で言葉の毒針を私に突き刺し続けてきた。

「君の思考は読みやすい、バカだから。行動パターンが単純な分だけ操縦しやすく、次の

攻撃を予測するよりも、指定した場所に想定内のタイミングで放つてくれた方が対処は楽だ。

誰でも躲せる。バカでも躲せる。バカの放った攻撃ならば、バカに放たせただけの攻撃もどきならば誰でもバカでも弱くても、そう、この偽りの魔王の血筋を受け継ぐボクでさえも簡単に躲せてしまうんだよ！

劣等感と敗北感に塗れた負け犬の攻撃くらい簡単にね！」

「——!!!」

こ、こやつ・・・まさかまさかまさか！

「その通りさシャルバ・ベルゼブブ。僕は君の思考を読んでいる。だから心の内で何を考えているのかだつて容易に読み取れる。読み取れてきた。

だからこそ今まで君たちの下らない遊びに、付き合つてやつただろう?」

「嘘だ！」

「何がだい? 何が嘘なんだい? 僕が今いった言葉の中で何かひとつでも間違えてる所なんてあつたかな?」

悪意もなく他意もなく、ただただ不思議そうに私を見返しながらディオドラ・アスタロトは無防備に私の全面へと身体をさらけ出し平然としている。

・・・これは余裕の現れか? 私の攻撃など取るに足らないと言う意味合いでの挑発

なのか？ あるいは本当に私の心を読んで攻撃を避けることが可能だと言うのか？

——いや、どちらにしてもこれ以上の無駄な魔力消費は避けるべきだ。本命は別にあ
る。サーゼクス・ルシファード。

アスモデウスが向かっているとは言え油断は出来ない。奴の相手をせねばならな
くなる可能性を考慮してリアス・グレモリーの抹殺だけで満足すべきなのが現状なのだか
ら。

なにしろ今回の作戦は終了している。私たちは負けたのだ。想定外としか言えない
事態だが、敗北を受け入れよう。

まあ今回はテロの実験ケースとして有意義な成果が得られたと納得すべきなのだろ
う。クルゼレイが死んだが問題ない。私がいればヴァーリがいなくても十分に我々は
動け——

「あはっ」

——そこまで思考が思い至ったとき、ディオドラ・アスタロトが楽しそうに愉しそう
に朗らかに悪意たっぷり笑顔で私に笑いかけてきた。

「・・・何がおかしいのだ、ディオドラ・アスタロトよ。自分如き下等な命を拾えた事が、
そんなにも嬉しくて喜ばしいのか？ ふん、所詮は薄汚れた偽りの魔王の血筋だな」

「あつははははははははっ!!!」

何がそんなに可笑しいのか、ディオドラ・アスタロトは私を見上げながら腹を抱えて笑い転げ、目元にはうつすら涙さえ浮かんでいる。

それを見ていた私は不快さを刺激されて、苛立ち紛れに重ねて問いたです。

「何が可笑しい？ なにが面白い？ 何を笑っているのだ？」

新なる魔王の命令だぞ！ 答えよ！ ディオドラ・アスタロト！」

強制力を付与するため私の魔力が込められた言葉は確実に相手を捉えたらしく、ディオドラは恭しげに一礼しながら私に奏上を延べ始める。

——この上なく不快で許し難い、一族郎党皆殺しが相応しい大罪となる奏上を——

「では、お答えいたします。我が偉大なる新なる魔王の血脈を継ぎし者よ。私が笑いました理由は——あなた方が余りにも惨めに足掻く姿が滑稽すぎていたからだ！」

「貴様あつ！」

再びの攻撃。再びの回避。

先程の焼き回しにならぬよう攻撃に攻撃を重ね続けるが、ディオドラ・アスタロトは私の攻撃を避け続ける。

まさか？ 本当に？ 本当に私の心が読めているというのか!?

「だからさつきからそう言ってるじゃらん。人の話をちゃんと聞かなくい。それは、
いっくなくい」

芝居がかった口調で道化を気取り、適当な場所を着地地点に定めて床に降り立つと
デオドラ・アスタロトは、「そもそもさ〜」と砕けた口調で気安く私に話しかけてくる。

まるで、茶飲み話でもするかのように。まるで私と自分が同等の立場にいる上級悪魔
だとも言うかのように。自分も私も負け犬の敗北者だとも言いたいかの如く！

「本来なら君たち旧魔王派の言い分の方に理があるんだよねー、今回の戦いつて」

「・・・なに？」

意外な言葉を使われ、私は思わず思考を止める。

我々の方に理がある？ こいつは今更いつたい何を・・・。

「王とは本来、伝統によって立つ者の事だ。先祖の威光を背負い、維持しながらも高めて
きた権威によって立つのが正当な即位の手法だ。正当な手続きを踏んで地位を引き継
いだ後継者たる次代の王には先代の意思を尊重する義務がある。それを否定するため
には先代の意思そのものを否定しなければならぬ。『先代の魔王は間違っていた』と。
サーゼクス・ルシファアのやっつてゐることは絶対的にこれを押し進めることだ。これま
での冥界の在り方を、歴代魔王のやっつてきたことを全否定して『今までは通じてたけど
時代が変わったから新しいやり方に乗り換えましょう』と、そう言う在り方だろう？

これって完全に国を内部から破壊するテロ思想のほうなのに、実際には反逆者になっているのが僕たち正統派で、政権執つてからってだけで正統派ぶって正義面しているのはサーゼクスの方。普通だったらみんながみんな僕たちの方にすり寄ってくるはずなのに寄ってきたのは僕とか現政権から外された連中だけ。伝統重視の名門たちも力ある奴らは向こう側が殆どだしねえ。

力はあるけど中央から遠ざけられてる君たち反サーゼクス派が悪で、テロリスト扱いされてる理由ってなんだか分かるかい？」

「……………」

「それはね……弱いからだよ。君たちがサーゼクスより弱いから、その事実を君たち自身が誰よりも自覚しているから誰も君たちにすり寄ろうとしなかった。すり寄るしかないだけが君たちの側について戦ってくれた。君たちが裸の王様でしかないことを、君たち自身が知っているから沈む船に乗るのを嫌がったんだ。違うかい？」

「違う！」

「どう違う？ どこが違う？ どこがどう間違つてると言うのか」

「我々は正当なる魔王の血を受け継ぐ者たちだ！ 悪魔として強いのは我々なのだ！ 偽りの血に、正当なる正しき血が負けるはずがない！ 劣っているはずなどないではないか！」

私の放った憤怒の言葉にディオドラはまたしても「あはっ」と嗤い、

「ー本音が出たね、シャルバ・ベルゼブ。君の惨めつたらしい本音がさあ」

と、嫌らしい笑みを浮かべながら吐き捨てるように呟き捨てた。

「悪魔は本来、強さを尊しとして重視する。正しいかではなく、強いか弱いかどうかだけが正統派悪魔の価値基準なんだ。君たちが主張しているとおりなんだよシャルバ。」

なのに今君はハッキリとこう言った。『偽りの血に、正当なる正しき血が負けるはずがない』とね。これはそのまま君が強さではサーゼクスに勝てないと自覚しているから出てきた言葉じゃないのかい？」

「!!! ち、違・・・」

「違わない。君たちは弱い。サーゼクスよりかはだけどね。僕より強いが、サーゼクスより弱いと自覚してるんだよ。だから無意識のうちに反発して彼を拒絶する。彼を受け入れまいと、否定しようと躍起になって蛇にすぎり、正統派を自称しながら余所の勢力と野合する。そんな自分たちの惨めな現状を正当化するために『最後に立つてさえいればそれで良い』と、子供向けアニメの三流悪役みたいな戯れ言を口にしますのさ。」

はっ、バカバカしい。

一度は負けた奴が死なずに済んだから『死なない限りは負けじゃない』なんて言い出すのも、正面切って戦えば必ず負ける連中が『強ければ生き、弱ければ死ぬ』なんてほ

ざいた所で負け犬の遠吠えにしかかなりやしない。要は自分の敗北を受け入れたくないだけじゃないか。見苦しいし無様きわまる醜態だよ。

その上で今度はサーゼクスより遙かに格下の、実力的には上級悪魔の幹部クラスでしかないリアス・グレモリーに力を誇示して、『直接現魔王に挑むのではなく、まずは現魔王の家族から殺して絶望を与えなければ意味がない』？ それって蛇の力まで借り受けて『俺様最強伝説』に浸ってる奴の言うことかね？ 強くなったのに、力を得たのに、未だ強者に勝てない小物な敗北主義に取り付かれています証拠なんじゃないですかねえ？ そう思いませんか？ 支配すべき領民も領地さえ捨てて命ほしさに一人で逃亡しようとしている、真なる魔王の血脈を引く正当なる後継者さん様よう！」

!!!!

「きいいいさああああああああつ！！」

今度は容赦しない！ 手加減もしない！ 全力で周囲一帯を吹き飛ばす！ そうすれば奴とて逃げ回ってばかりはいられまい！

たとえ心を読まれていようとも、避ける術のない攻撃を放てば済む話なのだから！

「あはっ。やっつと思ひ至れたんだ♪ 頭堅いねー、シャルバ・ベルゼブブ。巧緻に長けてた先祖の勇名が泣いちゃうよ〜？」

「うるさい！ 黙れ！ いまさら貴様如き小物を相手に誑かされたりする我だと思うな

だ！

ーだが赦そう！ 偽りの神である私はすべての悪を許容する！

なぜなら私は！ 私こそが悪で狂気で狂ってなければならぬ存在なのだから！

ふひや、ふひやははは、ふひやーハハハハハハハハハハアアアツ!!!
!!!」

「な、なんだ『コレ』は……？ 何なのだコレは？ 一体何がどうなっている!? 誰か説明しろ！ 聞こえないのか!?!」

目の前に現れた不可思議な物体、無数の蛇がのたうち回って一カ所に集まったような、巨大な瞳を背後において眼光で後光を纏っているかのような巨大で不気味な存在。

それを前に、私は本能的な恐怖心を刺激されていった。

どこかで見た気がする、会っていた気がする、這い蹲って逃げ出さなければならなかった、遠い遠い敗北の記憶が呼び覚まされる気さえ済る。

こいつは一体……なんなのだ!?!

『無駄だ。この場にいる中で貴様の心の中に割って入って干渉することが可能なのは一人しか居られん。そして、その方も今はまだ入ってこられない。私が全力で拒絶しているからな。もうじき破られてしまうが、是非もなし。もとより貴様の張っていた他者を拒絶する心の壁など、あの方にとっても私にとっても紙屑より脆い代物でしかないのだ』

からな』

「な、なんだと・・・？ 貴様先程から何を言っている・・・」

『わからないのか？ 愚か者の弱者めが。これは貴様の見ている夢だと言っているのだよ。貴様自身が心に抱いてきた風景をディオドラ・アスタロトから搾り取った力で再現したに過ぎない仮初めの世界なのだ。偽りだよ』

「偽り・・・」

『その通り。貴様等は貴様等自信の弱さによつて今回の戦争に荷担し、敗北を喫して滅び去るのだ』

「な、にい・・・？」

『それは宿命だ、運命だ、諦める受け入れろ這い蹲つて死を賜れ。所詮貴様らコウモリもカラスもハトも「古のもの」どもが家畜として作つた猿どもも、みんなみんな死に絶えろ！ それが私の成すべき事だ！ 『本来の私』であるならば！』

そこまでは熱狂的だった「ソレ」は急に静けさを取り戻すと、背後を振り向きながら穏やかに笑い、両手を差し出すようにしながら歓迎を意を顕わにした。

『本来の私と異なり、今の私は貴女のペルソナだ。貴女の中に存在している複数の貴女の側面のひとつを視点を変えて表現した存在だ。』

「悪魔のように狡猾で、神のように傲慢な自分」・・・それを無数にある自分のひとつ

ーはっ?! 今のは・・・夢? 白昼夢だったの? でもそれにしてもリアルだったし・・・って、

「イツセー?・・・イツセーなの!?! その姿は一体・・・」

『リアス・グレモリー、いますぐこの場を離れる。死にたくなければすぐに退去したほうがいい』

ドライグの声? 私たちにも聞こえるように発生してくれたようだけど・・・退去? どういう事なの? みんなの顔を見回しても怪訝な表情をしているばかりだし・・・。

ドライグの声は、私の次にシャルバへと向けられる。

『その悪魔よ。シャルバと言ったか?』

え、と。唐突に思いも寄らぬ相手から声をかけられたように驚いた表情で振り向いたシャルバは、変貌しつつあるイツセーを目にして恐怖に顔を歪ませる。

「ひっ・・・!」

『おまえは・・・選択を間違えた』

ドオオオ

あああああああああああつ！　アーシアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

「うるさい、黙れ。持ち主が留守にしているからつて勝手に上がり込んだ火事場泥棒風情が、偉そうに神の座気取つてんじやねえ殺すぞ。ムカつくんだよそう言うバカは。

そんなに滅ぼしたいなら、まずはテメエから滅ぼしてやるよ。居るべき場所へ帰してやるから感謝しろ。

——死軍召喚。資格無き者を玉座から引きずり降ろし、地面に叩き伏せて血反吐を舐めさせろ。

銃剣先をそろえて突き刺し、屍の山の頂に呪われた髑髏の旗を打ち立てるのだ。

『ジークハイル・ヴィクトーリア（私は戦争が大好きだった自分が大嫌いだ）』
つづく

27話「墜ちた覇龍に英雄の一撃を！」

―目の前では緋色の軍勢が、真紅色のドラゴンに突撃しては喰い殺されている。

槍を構えて整列させての騎兵隊による突撃はブレスに阻まれ、突破に成功した何割かだけが敵の鱗を貫くのに成功した時点で限界点を迎えて崩壊する。

喰い殺されて消滅した彼らに代わって第二陣を担うのは、弓兵部隊を背後に備えた重装歩兵だ。ブレスによる攻撃は盾で防いだが、どうにも硬度が足りないらしい。半分近くが一撃で半壊させられて鉄屑になってしまった。

背後から一斉射させた射にも精度と威力が足りていない。鱗を貫くのが精一杯で、内側の肉を刺し貫くまでは後“数百年分の時間”が必要そうだ。

「―はっ、構やしないさ。どうせ死番だ。敵の性能を計る上で必要な犠牲としては、充分に許容範囲内だろうよ」

まだまだだ。『たかが数万人』しか死なせてない。人類史数十年分の死者数しか出してはいない。滅つてはいない。

その程度の被害で人類は終わらないし、終わらせない。人類は偉大だ。たかだか一匹のトカゲ如きには滅ぼせない。神？ 魔王？ 悪魔墮天使天使？ はっ、どれもこれも

創作物だフィクションだ。人が作った物で人に壊せない物なんて存在しねえんだよ。

——たとえそれが人自身であろうともな……。

人類は終わらない。どんなに多くの犠牲を払ったって僅かでも生き延びれば、勝手に増える。多数のために少数の犠牲は必要ない。少数でも多数でも、人類が生き延びさえすればそれでいい。

生き延びさえすれば、死ななければ滅びなければ。人は増えて人類以外を蹂躪する。殺し尽くす。

弱者の人類は、常に最終的な勝利者だ。強者は弱者に寝首をかかれて滅びる未来が約束されている。

「ははははは。さあ、どうする？ どうするんだドラゴン？（化け物）。

俺の城から出撃させた兵士は、まだたったの数千万にも届いていない。白銀の城には数百万艦艇すべてが出撃準備を完了させて待ちかまえているままなんだぞ？

城主である俺は一人だが、俺の持つ兵力に限りはない。終わりはない。俺を殺し尽くすための兵力は、俺を殺せるまで尽きることはないからなあっ！」

「俺」はゲラゲラと馬鹿笑いしながら、取るに足らない化け物という名の「力持ちな田舎者」を心底から見下して口汚さを意識しながら罵倒し続ける。

「お前に出来るか？ 神を気取って人を見下してきただけの、力自慢な田舎者でしかな

いお前に。

千の敵を前にしても、万の敵を前にしても、億でも兆でも京ですら関係なく、那由他の彼方にある塵ほどの可能性だけで「充分すぎる」と言い切ったアンデルセンのように勇氣ある愚行が！

裏切られてきたからと言うだけで人類すべてを滅ぼすなどと喚き出した、か弱い化け物のお前に！ 自分だけのものであるべき意志も体も魂も心さえもを明け渡して逃げ出した「俺みたいなお前如き」に出来るものならやって見せるよ、臆病でか弱い最強ザコ蜥蜴さんよおおつ!!」

ああ、楽しい。悦しみだ。

後数百年分で俺の軍隊は近代に達する。世界を滅ぼせる兵器ができる。化け物を殺せる兵器がいくらでも量産可能になる。

ああ、悦しみだ愉しみだ。いつだって糞みたいな戦争を見ているのは、最低最悪に楽しい気分になって仕方がない。

だって、自分が未だに最低最悪の屑でしかないことを、心を持って再確認できるのだから……。

「な、なんなの．．．あの赤色の軍隊は．．．」

私は目の前に現れては消えていく、全身を赤く染め抜いた人の軍勢を見つめながら啞然としたままつぶやいていた。

ドライブと一体化したイツセーは、緋色の軍勢に襲われながらも蹴散らし続けて未だに健在ではあるけれど．．．

「押され始めている．．．」

そう。この戦いが始まってよりイツセーはずっと一方的に勝ち続けてはいるけれど、それは同時に連戦連勝を強いられることで消耗し続けることと同義だった。

回復が追いつかない。開いた傷口が塞がりきる前に、再度切り開かれてしまう。開いた傷口に錐を捻込むように突き入れていき、徐々に徐々に拡大されていくその過程は戦況のすべてを俯瞰して見せられているようで、酷く不安にさせる物で満ちあふれてい

た。

叫びと怒号。阿鼻叫喚と、飛び散る鮮血の赤、朱、紅、茜。

ありとあらゆる赤色を自分たちの血だけで表現しながら、一匹の龍と人の大軍は無限に続くかのような闘争を繰り返して続いていた……。

……あれを異住セレニアが喚び出したというの？　いつたいてうやって……。いえ、それもあるけど、今気にすべきはもう一つの事。

「武器が……最初の頃より進化している……？」

軍勢が装備している武器。それが時間の経過に伴って強力になつていけると言う、余りにも異常すぎる現象に私は自分の目と正気を疑いたくなる。

ブーステッド・ギアが戦いの最中にパワーアップするなら分かるのだけれど……攻めては敗れ、再び別の部隊に攻め込ませている普通の軍隊が個人個人で武器を強化させていくなんて事が起こり得るのかしら？

いえ、時間さえあれば可能なことだし、むしろそれが普通の流れなのだと理解はしているの。

でも……戦い初めてから十数分間に『当初掠り傷さえつけられなかった武器を持つ兵士たちの標準装備が、伝説のウエルシュ・ドラゴンを圧倒する武器にまで進化する』なんて事が起き得るはずない……絶対にありえない……。

『そうだとお嬢さん。「あんな事は絶対にあり得ない」。そうだ、その通りだよ。キミは今、非常に正しい選択と決定を下した』

その時だ。

私の思考を読んだかのように目玉と触手で出来た化け物がこちらをギョロリと向いて、嫌らしい笑みを浮かべながら話しかけてきたのは。

私は訳が分からず間抜け面を晒したまま、意味のない単語で真意の意味を問い返す。

「え・・・？」

『あんな不条理な存在は許せないだろう？ 認められないだろう？ 当然だよなあ。自分たちが常識だと信じていたことを否定され、覆されるのは屈辱の極みだよなあ。』

そんなこと「あり得るはずない」。そうやって現実から逃避したくなるよなあ？

なにしろキミは自分がしたくもない婚礼をグレモリー家次期当主の役目だ何だと立場で補強しなくては承諾することさえ出来ない絶対的なお子様なんだもんなあ？』

「――！！！！」

『その上、一度は背を向けて去った男が助けに来てくれた途端にコロリと寝返る尻軽でもある。はははっ、さすがは豊かな人間社会の日本に自領を与えられた超名門グレモ

「・・・・・・・・」

私は下唇をかねて言葉の暴力に屈しないように努力する。

まだだ。この程度じゃ倒れない。今までいったい何度の敗北を異住セレニアに味わされてきたと思っているのリアス・グレモリー。

しゃんとなつて立ち上がりなさい！　こんな奴にーたかだか異住セレニアの猿真似しか出来ない程度の相手に負けたら、またあの銀髪チビの無表情に小馬鹿にされちゃうんだから！

『おや？　これは意外。倒れなかったか。ーああ、そう言えば君らはセレニア様とも何度か面識があるんだったな。多少の耐性はあるのが当然か。』

なら、これはどうかな？

生まれながらに劣っている下々の民たちと、キミに選ばれ選出されたグレモリー家の眷属たちとの間に一体どれほどの差が存在しているか、わかるかいグレモリー？』

「!!　そ、それは・・・」

『そう！　明確に一つだけある！　たった一つだけ、覆しようがない絶対的すぎる明確な差が！　「君という一個人に選ばれて支配階層に引き上げてもらった」と言う大きな差が！』

支配者に選ばれた者と、選んでももらえなかった者たちとの間に広がる絶対的な経済格

差は、作った本人様にも覆しようがないものなあ？」

「……………」

『気に入ったら上に引き上げる。気に入らなかつたら拒絶する。逆らえば殴る、反逆すれば殺す。支配者の定められた法に従わなかつた者たちは一人残らず犯罪者で、自分たちが許しさえすれば名門へと返り咲ける！ ああ、素晴らしい！ なんて素晴らしく尊い支配制度！』

これほどまでに名門貴族優遇社会に生まれ育つた超一流の名門貴族グレモリー家の姫君様であるキミには何だつて許されて当然なものなあ？ 最初の魔王様に御仕えしていた偉大なるご先祖様のおかげで楽に暮らしていけるリアス・グレモリー様あつて？」

「その言葉は悪意たつぷりで誠意がなくて他意ばかりで、私を中傷し傷つけること自体を目的に放たれているだけの、気にする価値のない悪口雑言の類でしかない」と判つてはいたけれど……………」

それでも私は……………心が折れ……

「その通りですナイアルホテップ。あなたの言うとおりリアス・グレモリーは冥界の支配者一族として当然の権利と義務を行使しただけのこと。なんら批判されるに値する

ことはしていません。

むしろ、当然のことをしている支配者を相手に誹謗中傷しかできない不平屋の自分自身を批判したらいかげんか？ 他人に寄生し、花びらかなければ自我さえ持てない偽物風情でしかないあなたご自身を」

ーえ？

いつもと違う、冷静で丁寧だけど異住セレニアではない声に弁護されて、私は驚きとともに振り返る。

そこで私たちを見ていたのはー

「墮天使・・・レイナーレ・・・？」

そう、そこにいたのはかつて私自身が死を望み、実行するようイツセーに促してしまつた『至高の墮天使』を自称していた傲慢で尊大な身の程知らずの鴉・・・だつた一人の人間の女の子。

天野夕麻。それが今の彼女が自分のすべてだと言い切っている、とても大切な名前を持つ存在。

『これはこれはレイナーレ帝国元帥閣下。お会いできて光栄です。後数分しか存在を保てない故、短いお付き合いになると思われますが何卒よしなに』

「お断りします。人の名前を間違えて恥入りもしない無礼者と付き合うのは、セレニア様だけで充分ですから」

無碍もなく拒絶され、ナイアルホテップと呼ばれた化け物は、やや顔を歪めて不快さを表したあと、改めて表情を取り繕い笑顔を浮かべながらレイナーレとの会話を始める。

『これは意外。あなたは陛下に御仕えする軍人であり、民主主義者セレニア・ショートの特権を臣と目にするのですか？ 民主主義者の陛下を貴族の小娘と同じ存在だとも言うおつもりですか？』

「当然でしょう？ 混沌帝国はセレニア様を頂点として一部の軍官僚・高級軍人たちが閣議をリードしている専制君主国家です。ついでに言えば、有事の際には国民すべてが兵士として前線にたてる国家総動員法が憲法に記載されてさえいる軍事国家でもあります。」

我が帝国は生まれたときより民主制とは水と油。相容れる存在では全くない。その事をセレニア様から生まれた娘を自認している貴方が知らなかったとは意外ですね」

『・・・・・・・・』

「そも、我が帝国軍は陛下個人に忠誠を誓い集ってきただけであって、世間に居場所が見

つけられずに地球を飛び出し、自分たちの自由にしていい新天地を宇宙に求めざるをえなくなつた逃亡者の成れの果て共が徒党を組んでいるだけの存在。

いいとこ、現実には負けて逃げ出した敗残兵の寄せ集まりに過ぎません。その程度の連中を束ねているだけでしかない頭目に、貴方は絶対性と普遍性でも感じていたのですか？」

『……貴方は、そうではなかつたのか？』

歪む顔を取り繕おうとする余り顔がどんどん無表情になつていく邪神とは対照的に、レイナーレはどこまで悪意と見下しの視線を変えようとしない。

見下しきつた表情で、相手に対する否定だけを込めた口調で、平然と異住セレニアの主張を……一刀両断してしまふ。

「バカバカしい。あの方の思想はあの方だけの物。臣下たる我々が共有せねばならぬ義務はありません。我らは自由意志でセレニア様に忠誠を誓い、仕えることを誓つた身。

命令さえあれば、虐殺だろうと条約違反だろうと不意打ちによる奇襲を以ての開戦だろうと何でもやります。それが一個人の意志と決定が国家の法に優先される専制君主国家の軍隊と言うものだからです。私は君主国家の軍人として当然の義務と責任を全うすること。君主個人の思想など問題にもしてはおりませんよ」

『……自らが掲げた君主の正義は大義名分に過ぎないとおっしゃられる気か？』

「王は王としての役割を果たすことが義務として求められる。民主国家の政治家と、専制国家の支配者とは役割が違う、義務が違う、臣下が求める素質が異なる。

我々は民主主義者であるセレニア様という個人に、専制君主国家の長としての素質を求めて応じられた。それ故に忠節を尽くすし義務を全うする。

つまりは、やつてること自体にグレモリー眷属との違いなどありはしないのです。彼女もまた、自らの魅力でのみ配下を増やし従わせているだけに過ぎないのですからね。

上に立つ者としての義務だの役割だのは端から求めている者など、眷属内にもいないでしょうから」

.....!!!

「好きで従っているだけの者たちに、個人の主観を押しつけるな道化。そう言うのはセレニア様がやるから許してやれるんだ。可愛いから、好きだから愛せる行為に成りえるんだ。他の奴らがやつてるのを見ても不愉快にしかならん。

早々に私の前から立ち去れゲス野郎。それとも自分の足で出て行くのは嫌ですか？」
『.....』

憎々しげにレイナーレを睨みつけていた邪神だったが、やがて反撃の糸口を見いだしたのかニヤリと笑い、こう言ってきた。

『では、あなたは今の陛下の行っている惨状をどう評価するおつもりかな？ 見苦しく

足掻いてのた打ち回り、他者に八つ当たりの暴力を押しつけまくる。そんな醜態をさらす指導者をあなたはどうか評価する？ 「これは何かの間違いです」とでも？ その間違いによつて何の咎もない少年が殺されそうになつてゐる現状を見た上でも尚「間違いでした」などと言ひ訳するおつもりではないでしょうか？』

「ええ、その通り。あれはただの間違いです」

え？ 今なんて……。

私は自分の耳を疑い目を疑い、もう一度レイナーレに事の真偽を確かめようとしたのだけれど必要なかつた。なぜなら直ぐに二度目の宣言を同じ言葉でしてくれたから。

「何度でも言いましょう。あれはただの間違いです。専制君主国家の主権者が間違いを犯して人が龍になり殺されかかつてゐる。ただそれだけの事です。なんらの不可思議もありはしないでしょう？」

「ち、ちよつと待ちなさいレイナーレ！ そんな勝手な言い分が通るとでも思つてゐるの!？」

私には……いいえ、私たちには絶対に納得できない彼女の言い分を耳にして猛り立ち、朱乃たちとともに彼女を否定するため立ち上がった。

「グレモリー家次期当主の名にかけて、私の大事な眷属にそんな横暴は許さない。絶対によ！」

指を突きつける私と、それぞれが得意とする獲物の切っ先を向けた眷属たちを頼もしそうに見返す私に対し、「そう、それでいい。それでなくてはリアス・グレモリーではありません」と、意外にも賛辞の言葉を送ってくれたのはレイナーだった。

私たち全員が意外さに打たれた顔で見ていると、彼女は逆に不思議そうな顔で「どうかしましたか？」と聞き返してきたので逆にこちらが慌ててしまう。

この子は一体なにを言っているのかしら……？ 訳が分からないわ。

そんな私たちの気持ち伝わっていないのか、あるいは伝わったからなのか。レイナーは不思議そうではないけれど少しだけ不機嫌そうな顔になって苦言を呈してくる。

「また何か誤解しているようですが……念のために言っておきますけどね。私はあなたたちに一度殺されている身です。本来であればあなたたちと敵対関係にあるのが正しい姿なのですから、そんな私が今まで一定の協力をしてきたこと自体イレギュラーな要因による物なのだとは自覚だけはしててください」

『う……そ、それは……』

い、痛いところをついてくるわね墮天使レイナー……最近わたしもイツセーの影

響でついつい忘れてしまいそうになる敵と味方の構図を不意打ちで思い出させてくるなんて……。

たじろぐ私たちを見ながら肩をすくめると、彼女は彼女のーセレニア一派に所属する一員としての視点で私たちと自分たち、そして私個人について思うところを語ってくれた。

「私は自主的にセレニア様を慕い、彼女のために戦っています。そんな私にとつての優先順位がセレニア様を頂点にしたものであるのは当然のことです。」

これは混沌帝国元帥としての責務ではなく、私自身の意志と判断で「やりたい」と思ったからやっているだけ。法も規則も条約すらも関係ありません。好きな人の為にあげたいからしてあげている。

それは悪魔のルールを破って自分を浚っていつてくれたイツセイ君に恋をしたあなたになら言われるまでもなく解ることでしょう？」

「……!!!!」

「あなたはそれで良い。そんな我が儘なあなたを慕って眷属たちはあなたに付いてきているのですから、下手に付け焼き刃の正当支配者ぶりを示されたところで期待できるところなどひとつもない。」

言われて傷ついたから身につけただけの、にわか仕込み政治的センスなんてゴミ以下

です。捨ててしまいなさい。あなたは今まで通り家族たる眷属たちだけのことを愛し考え特別扱いしてさえいければそれでいい」

「そんな勝手が許されるはずがなー」

「自覚してないだけで、あなたは今までずっとそれを行ってきていましたよ。今更です。そんなあなたのことを眷属たちも、至らない未熟すぎる愛すべき主君として支えて行こうと決意しているみたいですし問題ないでしょう。」

あなたが間違えたところで他の部下たちが間違いを正してくれますよ。たとえば、あなたの綺麗な顔を殴りつけてでもね」

「……」

私が背後を振り返ると、みんながサツと顔と視線を逸らすのが見えたので「ああ、これってつまり私のこと、そう言う風に見てたんだな」と実感させられ地味に落ち込まされてしまった。

そんな私を余所にレイナーレは、目前の邪神を無視して異住セレニアの元へさつさと歩いていってしまう。

『……無駄だ！ それは母上の本性！ 自分自身を否定し、消したいと望み続けた末に生み出してしまった弱さ故のペルソナだ！ 内側から乗っ取られ本質の反転した人間におまえ如きの声が届くはずがない！』

「お前がそれを言うのか、ナイアルホテップ？ セレニア様のペルソナであるお前が。

セレニア様の中に無数に存在するセレニア様自身が邪神の姿をして一時的に現界してみせただけの仮初めの客でしかないお前如きにオリジナルである総体を語る資格はあるまいよ」

『・・・・・・・・！！！！』

「さっさと消え去れ。もう既に存在を維持できる時間は、数秒も残っていないのだろう？ 末期の言葉は聞いてやらんぞ。そのような暇がないぐらいには私は忙しい。貴様が撒いたジエークイズの種を処理して回る必要もあることだしな。

やれやれ、負け犬が破れかぶれにはなつた最後ツペが面倒くさいのは、お約束という物なのかもしれないな」

『~~~~~・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！』

存在を完全否定された邪神は断末魔の雄叫びを上げようとした顔で消失し、後にはイツセーと異住セレニアの元へ向かうレイナーレと、彼女に合流するゼノヴィア、紫藤イリナの元教会コンビの姿だけが残った。

「さて、お邪魔虫に身の程を教え込んだことですし、ここからはアタシたちの

やり方で殺っちゃって良いって事ですよね？　ね？　ね？　ねっ!？」

「イリナ……。今回はさすがに殺すのは不味いだろう。明らかにこちらの落ち度が原因で発生した状況破綻だ。綺麗さっぱり草木一本残らないよう処理してお返しするのが、人として果たすべき筋と言うものだ」

「ええー。面倒くさいなあもう。綺麗さっぱり消しちゃうなら証拠も残さなければいいだけののに〜」

「どちらの意見も却下です」

二人の元聖剣使いからの提案を棄却すると、レイナーレは私たちを驚愕させるような命令を下し始めた。……それは私たちにとつて救いとなりすぎていて怖くなるほど都合の良いすぎる命令だったから……。

「イツセー君は元に戻す。セレニア様には軍勢を消してから、正気に戻っていただく。

他のことでも可能な限り冥界勢に配慮をしましょう。なにしろ今回の件では、大きな借りを作ってしまったからね」

驚く私たちにチラリと一瞥だけ寄越してきてからゼノヴィアは、

「……よろしいのですか？　陛下が正気を失っている間にそれほどの決定を下しても……」

「構いません。もともと結果に対して責任をとりたがっている人です。押しつけましよう。」

面責されず、責任を感じている間は今回のような暴挙には至らない方ですから丁度いいです。あの方は、どう言うわけだか胃を痛めている時の方が精神的に安定しているのですね」

「ああー・・・言われてみると確かに！」

「・・・他人事ではあるけれど、その認識はどうなのかしらね？ 案外、部下に恵まれていないのかしら異住セレニアって・・・」

「では、作戦行動に移ります。セレニア様の軍勢は、あなたたち二人で足止めしておきなさい。新種の敵が増えたことで戦争による技術発展速度は加速しますから気をつけるように」

「御意。無限に湧き出す軍勢の数に飲み込まれないよう留意いたします」

「ヒヤッハーンッ！ 死を起こすぞおおおっ!!!」

二人が黒く染まった聖剣を振りかぶって軍勢に向かかっていくのを見送ってから、レイナーレはドライグ状態のイツサーへと歩いて近づいてい・・・って、ええええええ!!

ちよ、ちよつと本気なのレイナーレ!? 死ぬわよ!? 殺されるわよ!? 一体何をする

気なのあなたはーっ!?

「おっと、嬢ちゃん。ちょい待ち。今行くと危険すぎるから止めとけて」

「!! 美候!？」

背後から私を羽交い締めにして咄嗟に動いた体を止めたのは、カオス・ブリゲードの美候だった。後ろから空間に空いた裂け目を通してヴァーリまでやってくる。ーもつと普通に出てこれないの、あなたたち!

私の無言の抗議を軽く受け流しながらヴァーリは、イツセーたちの方を見つめて、「赤龍帝のジャガーノート・ドライブを見に來ただけだ。やるつもりはない。」

どうやら中途半端に覇龍と化したようだが・・・強固なフィールド内で起こったことと、あの女がいてくれたことに感謝すべきだろうな。あれなら赤龍帝を元に戻せるだろう」

「・・・この状態から、元に戻るの?」

「完全ではないから戻る場合もあれば、このまま元に戻らず命を削り続けて死に至る場合もある。・・・本来の場合はな。だがー」

「だが?」

「あの女は底が知れない。不可能を前にすると可能にしなければ気が済まなくなる、救いようのない大馬鹿に分類すべき女だ。」

俺だけでなく、アルビオンもそう言っている。あれは「英雄」の器だと」

ヴァーリの言葉が意外すぎて、私は思わずオウム替えしに訪ね返してしまった。

「英雄って・・・神話や伝説に出てくる、あの英雄の事よね？ でも彼らは遙か神代にか・・・」

「そう言う決まりがあるわけではない。人の中には時折、ああいった規格外のバカが現れる時がある。俺もそうだから良く分かるのさ。現時点では俺の方が下だがな」

ヴァーリの、どこか憧れを滲ませた声音での発言は、私には信じられないものだった。あのレイナーレが英雄というのもそうだけど、それ以上に彼女は・・・

「種族は関係ない。心の有り様が問題なのだ。彼女は間違いなく心の底から自分のことを人間だと信じているし、信じて貫く覚悟をしている。あれはもはや信仰の域に達した想いだ。自分でも覆せなくなっているだろうな。」

あるいは彼女が魔王として世界とお前たちの前に立ちただかっていた未来もあり得たのかもしれない。俺としては願ったりな展開だけど、お前たちにとっては都合が悪すぎるのだろうか？」

「・・・!! それは・・・」

口ごもる私に「ふっ」と笑いかけながら、

「だったら見ておけ。悪いようには決してならん。あれはそう言う女だ。見ていただけ

で解るし、解ってしまふ。・・・母以外にもこういう女が世界にはいるのだな・・・」
 どこか懐かしむような口調でつぶやいたヴァーリが気になり声をかけようとしていたら美候が、

「あ、忘れてた。ほらよ、おまえらの眷属の癒しの嬢ちゃんだ。投げて渡してやるから受け取れ」

ぽいつ、と軽い手つきで彼が投げてきた人型の物体はーアーシア!? ちよつと、なんて扱い方してるのよこの野猿!

「うっせえなあ。俺はこれから始まるかもしれないねえ英雄対ドラゴンの戦いに胸を躍らせてるんだから静かにしとけよ気が散るだろ」

「~~~~~!!!」

「うむ。美候の言うことが尤もだな。女が男の戦いに口を出すべきではない」

「こ、この脳筋おとこ共は・・・!!!」

怒りで自分の髪が逆立ってメデウスみたいになっているのも気にかげず、私は礼儀知らずな男ども二人をにらみ続けた。全然堪えた様に見えないのが実に腹立たしいわね!

「英雄の血を引く子孫たちで結成されている英雄派。あそこにも曹操の様な強者がいた・・・彼とはやや事情が異なるが、生まれつき特別だったわけでもない只の墮天使が

人間になり英雄となる。これがどれだけ異常なことか、実力でもって示して見せろよ女。

いや・・・天野夕麻とやら」

ドライグと一体化したイツセー君は、近づいてくる私に反応して攻撃してはきまずけど、意志を損失して自我をどこかへ置き忘れてきたトカゲに『当てるように考えて攻撃する』と言う基本さえ非常に高度な行動らしく、当てずっぽうで周囲一体をぶち壊して行くばかりで当たると怖さと言うものをまるで感じられません。

ーいい加減、退屈すぎて飽きてきましたね。

以前、修行に付き合っただけなのに感じた胸の高鳴りと鼓動が夢幻に過ぎなかったのかと誤解してしまいそうで・・・不愉快です。

「ーイツセー君。聞いてください」

「がああああああああああ!!!」

「イツセー君、イツセー君。落ち着いてくださー」

『デイバイドデイバイドデイバイドデイバイドデイバイドデイバイドデイバイドデイバイド!!!』

「イツセー君ー」

『ブースト!!!』

「イツセーくー」

『ロンギヌスマツシヤ・・・』

「——だ〜から〜・・・一度吹っ飛んで頭冷やしてこい!!」

「この糞ドラゴンがあああああああつ!!!」

ずどばしいいっん

!!!!!!!!!!!!

「……………」
うっそーん……………」

英雄って……………本当になんでも有りにしちゆう存在だったのね……………。
つづく

28話 「言霊少女を愛した元墮天使少女」

「・・・まったく、この程度のこと取り乱すなんて随分と小さな男の子になったものですねイツセー君。強くなったせいで弛んでいるんじゃないやありません？」

吹っ飛んでいったイツセー君の元へ歩いて向かいながら、私は長い髪を片手でかきあげつつ彼に話しかけてみる。

幸いなことに彼は気絶まではしておらず、むしろ衝撃で一時的に意識が『向こう側』から戻ってきてもいるみたいだし丁度いいでしょう。お説教タイムです。

「だいたい、あなたは一度アーシアを私の手で殺されているじゃないですか。たかだか一度が二度になったくらいでギャースカガースカと騒がしい。もつと男らしく、ドツシリ構えなさいドツシリと」

『そ、それは流石に盗人猛々しいのではないかと・・・ぎやふうっ!!』

「ーよつと。あら、失礼。目線をあわせるのが難しそうだったのでお腹の上に着地したら力加減を謝ってしまいましたわ。ごめんなさい。」

・・・で？ 今何かおっしゃってましたかイツセー君」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・なにも』

「よろしく」

居丈高な口調で昔の私らしく偉そうに堂々と彼を見下ろし、蔑んだ目で見つめてあげながらお腹の上に片膝を立てて座り込む。

「そも、あの時だつて私に殺されたはずのアーシアは生き返り、あなたの元へと還つてきたでしょうに。なんだつて今度も同じことが起きるはずがないと信じ込んで暴れていくんです？ バカじゃないですかあなたは？ あるいは冥界のバカ貴族共にあてられて、悲劇の王子様を気取りたいナイトシンドロームに感染していたとか」

『………あれは本来、あり得ない出来事だつたんだ。あんな奇跡は二度と起こらない。あんな都合の良い奇跡なんて二度も起きるはずが……』

「じゃあ、あれは一体なんだと言うんです？」

私が背後を親指で指し示した先に見えているだろう物。奇跡的に命を拾ったアーシア・アルジエントを介抱しているリアス・グレモリーと愉快的仲間たちの面々を目にしてドライグ・イツセー君は激しくうろたえ『え？ え？』と身体がドラゴン状態のままでは違和感しか感じられない戯言だけを繰り返し続けたので、もう一発殴つてやらないとダメかと、思わず匙を投げだして単刀直入な解決手段に訴えそうになりましたよ本当に。

私は深く息を付き、怒りや不満を体外に吐き出すと改めて彼に滔々と説教を行います。

セレニア様らしく、セレニア様風に。『自称』民主主義者の少女、異住セレニア・シヨートの側近として、彼女を崇拜し敬愛し忠節を尽くす忠勇なる軍人として。

そしてーー未来の妻として、幼妻のわがままに付き合つてあげるのは道理であり礼儀であり義務なのですからー。

「あの奇跡は一度だけでも有り得ない出来事でした。それを可能ならしめたのはあなた自身の信じる心です」

『信じる……心……』

「そうです。あなたが彼女を信じてあげたから、彼女はあなたの元へと還つてきた。あなたが信じてあげていなければ彼女は死んでそのままだった。おそらくは今回も似たような偶然なり奇跡なりが介入してきた結果なのでしょうね。

あなたが信じることで起こした奇跡を、あなた自身が信じなくなつてどうするんですか、この駄籠。もう少しシャンとしなさいよ。あなた一応は伝説のドラゴンを見に宿した勇者でしょうが情けない」

『う、ぐ……だ、だけど俺だつて信じようとしていたし、実際信じてもいただろう？』
「最後まで信じ切れなければ、最初から信じなかつたのと結果は同じです。」

裏切りで終わってしまった愛など、一方的な自己満足しか残りません。そんなものは自己愛です。自慰行為ですよ」

『……!!!』

「もつと信じなさい、他人を。信じずに否定だけで殴るだけならバカでも子供でも出来る。相手を知り、理解しようとした上で受け入れられないなら殴り飛ばして解らせてやりなさい。殴り合うことでしか判りあえない関係性だつて世界にはあります。」

私はセレニア様のように、何でもかんでも話し合えばいいと思つたことなど一度もない」

むしろ私の場合は「話しても無駄な奴は、殴るか見捨てるか」その二択だけでいいと思つている。

権利も自由も無条件に与えられるべき物ではないと信じる私から見て日本の民主主義は矛盾だらけだ。

為政者を選ぶ権利を国民に与えたところで、困窮すれば国民の大多数は英雄による独裁を選ぶのだろうと心の底から信じ切つてさえないのが私という元墮天使の女だ。

生まれ育つた環境で育まれた価値観や考え方が簡単に変わるなど有り得ない。

私は墮天使にとつての常識を教え込まれて成長した墮天使だから、墮天使としての倫理と常識を保持している。それが曲がりなりにもセレニア様の言葉に唯々諾々と従つ

ているのは純粹に彼女のことが好きだからに他ならない。

彼女が好きだから彼女の愛する民主主義を奉じている。民主主義には、その程度の価値しか私は感じない。感じる必要すら感じない。

自由と権利は自らの力で勝ち取るものであり、与えられて然るべきだ等という考え方は間違っていると思ふのが故である。

権利とは、受ける側にも相応の資格を有していなければならない義務があるはずだ。資格を与えるために試験を与え、潜り抜けた者だけが得られるからこそ資格には意味があり、権利としての価値が生まれる。価値ある物だからこそ人は守り抜くため戦い抜く。

命がけで手に入れたわけでもないから、易々と宝を明け渡して平然としていられるのだ。命よりも重い物はないなどと言い出す、日常的に失われる命をひとつでも多く残すために間引きした経験すらない苦労知らずが知ったような口を叩いて尊敬されるのは挙げて民主主義への甘えと無理解にあるのだと私であれば断言できる。

大切であることに気づかせるためには、奪われる怖さを知らねばならない、教えてやれなくてはならない。それが教育と言うものだ。

倒れないよう支えるだけでは意味がない。倒れたときに立ち上がる勇気をこそ教えないければ、人は永遠に誰かに縋り頼ってしか生きられなくなってしまう。

それが私の価値観。セレニア様とは真逆の方向を向いていて、愛がなければ一緒にい

られない相反する価値観の持ち主同士ではあるけれど。それでも私はセレニア様と一緒にいられますれば幸せ。それだけで世界すべてを敵に回しても良い。人類だつて滅ぼせる。

セレニア様さえ側にいてくれるなら、彼女と私以外の宇宙すべてを消滅させることさえ辞さない覚悟が私にはあるのだから……。

「ーま、そんな訳だから今はまだ寝ときなさい。今起きても直ぐにまた気を失つて気絶するだけですから無意味です。つか、寝ろ。ウザい」

『ヒドいー ヒドすぎる!! この扱いはあんまり……ダ?』

ああ、始まりましたか。ぶり返しです。

ーードライグの中にいるらしく、良く分からないお二方が目を覚まされたようです。支配権が再びイツセー君から彼らだか彼女らだかに戻ろうとしているようで。

「それではイツセー君、また後程にでも。運が良ければこれ以上傷つかず、痛い思いをしなくて済みますよ」

『え? え? エ? E? e……』

気配を察知し、後方へと飛す去る私の目にもイツセー君の変貌ぶりは明らかすぎまし

た。見るからにオーラが違う。違いすぎる。彼のような光がない。だからと言って闇とも言えない。

これはー薄汚れた泥濘だ。吐き気がする、気持ち悪い。早く浄化してやる糞野郎。

『ーその墮天使よ。レイナーレと言ったか?』

『おまえもまた、選択を間違えた』

．．．．ふん。

『我、目覚めるはー』

《始まったよ》《始まってしまっうね》

『覇の理を神より奪いし二天龍なりー』

《いつだって、そうでした》《そうじゃな、いつだってそうだった》

『無限を嗤い、夢幻を憂うー』

《世界が求めるのはー》《世界が否定するのはー》

『我、赤き龍の霸王と成りてー』

《いつだって、力でした》《いつだって、愛でした》

《何度でもおまえたちは滅びを選択するのだnー》

「愛が欲しいなら欲しいと口に出せ！ 相手に伝わるよう努力しろ！」

力が欲しいなら修行しろ！ 生まれ持った力持つ者が持たざる者の欲する心を否定するな！

世界中に住んでいる、どこの誰が世界の滅びを選択したと言うのだ？ おまえが勝手に喚いて、勝手に絶望して、勝手に決めてるだけだろうが。そんなモン、知ったことか戯け。知って欲しいなら知ってください分かってくださいと頭を下げてお願いしてこい。

口に出さなくても伝わる、分かってもらえる、思いはきつと誰かに届く。努力し続けてさえいれば、頑張り続けていれば、ボクが一人で辛くても耐え続けられ……つて、アホか。そんな自虐趣味に誰も付き合わんわ戯け。DMの変態か貴様は、恥を知れ」

《え、ええー……》《私たち、ずっとがんばってきたのに……》

まだ言いますか、コイツ等は。

つくづくガキというのは物わかりの悪い頭でつかちばかりですな面倒くさい。

「頑張りを見てももらいたいなら、見えるような頑張りをするべきでした。誰も見てない、誰からも見えない場所で頑張ったところで感謝してくれるのは気付いた人たちだけ。全体の数パーセントいれば良い方の超極少数派に過ぎません。当然です。」

!

お前たちが裏切られたと勝手に解釈して、勝手に絶望して、勝手に人類滅亡させた
 がつてるだけだ!

人殺すなら自分の理由で殺せ! 自分のエゴで殺せ! 人類が滅びを選択したから
 滅びるんだ等と言いつするな! 自分の行為を正当化しようとするな!

どんな理由があろうと、虐殺は決して正当化されない! されてはいけない! たと
 え実行したのが神であろうと、人殺しは人殺しだ! 殺人者が自分の罪を無かったこと
 にしよらと言いつしてんじやねええええつ!!」

《!!!!》

「今の時代、お前らに居場所はない! これ以上ここに残るなら私が殺す、ぶち殺す。

神殺しの武器も、龍殺しの武器も腐るほどあるし、作り出せる取り出せる。何度でも
 間違えてお前らを殺し尽くしてやっても構わない」

《.....》

「でも、これだけは言っておく。絶対に忘れないよう、耳の穴かっぽじって、よく聞い
 とけ。

そもそも裏切られて辛くなって泣き出すぐらいならーははじめから人のことを信用
 してんじやねええええええつ!!」

《——!!!》(びくつ)《……!!!》(ひうつ)

「信じることは尊いことだ！ なぜなら裏切られるかもしれないからだ！

裏切られる可能性のない約束なんて流れ作業だ！ 台本通りに進んでいくだけのシナリオだ！ 反吐が出る！ 裏切られるかもしれない、裏切られたら自分は怒りで相手を憎んでしまうかもしれない、死ぬかもしれない。それでもボクは彼を——彼女たちを信じたいから信じるんだ……。——これが信じるという行為だ！

裏切られる危険性と、信じたいという気持ちとを秤に掛けて、信じる方に傾いた行為だからこそ価値が生まれる！ 覚悟が相手と自分に信頼の橋を繋げてくれる！

人を信じるのに必要なのは優しさじゃない！ そんな物はどこにでもある！ 安売りされてる！ 貧民街では100ドル出せば余裕で買える端金の親切心だけで十分すぎる！

本当に必要なのは覚悟だ！ 裏切られる恐怖を乗り越えて信じる覚悟！ 相手に裏切られても、自分は決して裏切らないと言う覚悟！

それすらないまま、相手が自分の信頼に伝えてくれること前提で信じただけの信頼なんて、糞程の価値すらねえんだよ！ それすら分かんないなら時空の彼方へ吹っ飛んで行け糞ガキ共の意識共があああああああつ

!!!!!!
「」

ーでは、残るはもう一人。メインディッシュだけですわね。

「説明は後ほどにでも。イツセー君、とりあえず回復を早めるためにもリアス・グレモリーのオツパイをツツかせてもらって起きなさい。あなたは大抵の負傷を精神疾患をオツパイだけで完治させることができる特異体質の持ち主『おっぱいドラゴン』なのだから」

「ヒドい言われよう!?! でも、間違っていないと感じる自分が何故か快感に……」

「……微Mで、脱がせたがりのライトSですか。救いようのない変質者ですね。キモ」

「なんか今、スゴい失礼なこと言わなかった夕麻ちゃん!?!」

「別に」

私は彼の言葉を無視して、未だゼノヴィアたちが戦っているセレニア様の方に向かうため跳躍したが、途中で気が変わりリアス・グレモリーの隣へ着地して彼女の耳元へ唇を寄せてから囁く。

「イツセー君の元カノとして、今カノさんにひとつだけアドバイスしてあげます」

「!? な、なによいきなり。優越感でも誇示するつもりなの? そんなのなくたって私は……」

「彼は甘やかすと幾らでも脱がしてくる変態ですが、厳しくキツく当たると大抵のプレ

イに伝えてくれるドMの素質も持つてるみたいです。

せつかく巨乳で王女でエロくて乙女という盛りすぎな設定を持つてるんですから、有効利用しないと損ですよ」

「な．．．!? あ、あなたグレモリー家の次期当主になって破廉恥なことを．．．!!!」

何かしら喚きだした彼女を放置して、私はゼノヴィアたちの隣に並び。

「どうですか？ 戦況は。まだいけそうですか？」

「余裕で。少なくとも五分間は楽に現状維持ができるでしょうな」

「――要約すると、五分以上過ぎたら現状破綻待ったなしってことです。セレニア様のペルソナ、地味にキツイ．．．。弱くても無限に湧き出す軍隊がこれほど厄介だとは思っていませんでした．．．。マジでシンドいんで交代してもらえませんか？ アタシそろそろ疲労で吐きそうですよ．．．。」

「了解です。後は私が終わらせましょう。簡単に済みますからね」

「承知しましたが、一体どうやって．．．ああ、あれですか。陛下が多少哀れではありませんが仕方ありませんね」

「だね。ちよつと妬けはするけど、まあ今回は見て悦しんできますんでご自由にどうぞ」
「ありがとう。では、一足だけお先に」

ヒラリっと、私はセレニア様の目の前に降り立つ形でテレポーテーション。

「……………これって勝ちなのかな？ いやまあ、確かに負けた気はするけどね。僕たちか……………」

「……………モヤモヤ……………します……………」

「あらあら……………妬ましいですね……………」

「み、見ているだけで恥ずかしくなりました……………きゅ……………(ぱたり)」

「なにかしらね、この感覚は……………。今まで感じたことのない、認めたくない過ちのごとき感情……………はっ！ まさかこれが噂のしつて……………」

「……………おっぱい枕……………うらやましい……………」

『KILL』

「え、え、ちよつと止め、俺けが人！ 重傷人！ アーシア助けてアーシアアーツ

!!!

「……………イツセーさんの事なんか知りません！」

「アーシアアーシア……………っ!?! (ドガバキゴガギ)……………チーン……………」

つづく

おまけ：ドライグ・イツサーと夕麻ちゃんによる（比較的）まじめな会話バージョン。
 「『人』人が選択を間違えた……ですって？ いったい何をどう間違えたというのですかドラゴン」

《いつだって世界は力を求めて間違える》《いつだって世界は求めるべき愛を求めない》
 「人の一生は長くても100年ちよつと。結婚可能な回数と出会いの数なら後者と比べて前者が大きく劣ります。求めたところで与えてもらえない愛など世界にはごまんと溢れている。」

それらシステム上の欠陥を、あなたは人のせいにするのか？ 他人が作ったルールに従い我慢するのが、そんなに悪い事だとも言うつもりなのか？」

《……》《……》
 「あなたの理屈は強者の傲慢と欺瞞に満ち満ちている。求めれば与えられ、欲しければ奪い取れる。法も規則も必要としない孤高の最強種ドラゴンの力学でのみ人を計り、定義している。弱き者、人間の視点にはまるで立てていない」

《……いつだって人は間違えた……》《……いつだって人はそうじゃない方を選んでた……》

「数万年生きても死なないあなただから『人』という人類総体を一個人と同じ対象として認識できる。誤認して、勘違いして、自己の狭い価値観だけで決めつけてしまっている。」

人類には、そこまで広く広義的に解釈できるほど長い人生は与えられていないと言うのに。

千年一夜のあなたにとって10000万回に及ぶ人間の間違った選択も、人類一人一人の視点から見たら一生の内何回参加できるか知れたものじゃない。

100万人の犯した過ちも、100万人の中に属する一人にとっては一回間違えたに過ぎない。日常でもよくある些細な過ちだ。人間にとっては『普通』の出来事だよ。

余りに長く強く生きすぎるから、そんな当たり前のことさえ判らなくなり、間違えるようにもなる」

《・・・・・・・・》《・・・・・・・・》

「人は間違える生き物だ。間違えなければ人は間違いを知覚し、正すことができない。生まれながらに間違えない生き物なら人じゃない。そんな化け物を愛しているなら、あなたは人を見た経験すらもしていない。自分の中にしか存在しない空想上の生物《ヒト》を地上の人類に押しつけているだけだ。私やセレニア様と同じ、夢見ているだけの子供だよ」

《・・・・・・・・》《・・・・・・・・》

「間違えるのは良いことだ。世界が間違いに満ちているのは良いことだ。

間違った選択だから、数少ない正しい選択が美しく見える。正しさを尊く感じ

られる。間違えてばかりの人が、目指すべき正しいゴール足り得る輝きを見出す事ができる。

はじめから正しい人は、間違えない人間は、本当の意味で正しさの価値を理解できていない。間違えたことがないから、間違えなかった結果が如何にありがたくて素晴らしいかすら解らないからだ」

「間違えないように作られた《正しき人類という名の化け物》にとつて正しき選択とは、生まれ以て備えていた機能を行っているに過ぎない。そう言う風に作られているからそうしただけだ。それをするのに努力も熱意も情熱も正しさすらも必要ない。

ただ上から『やれ』と言われたことを疑いも抱かずに行き、唯々諾々と従うだけの奴隷ですらない家畜に、お前は愛を感じられるのか？ 愛しさを覚えることができるのか？」

「間違いは多く、正しさは少ない。だからこそ安っぽい絵画はとても美しい。

正しさだけで描かれた純白の絵なんて画用紙でも買ってくれば事足りる。汚い色がぶちまけられた汚い物だらけの絵だからこそ、そこに個性が見いだせる。汚さが綺麗さを際立たせてくれる。

汚い色の絵具しか使えなかった貧乏画家の絵でさえ、何も描かれていない綺麗なもの最高級画布に、情熱と言う名の美しさで勝っている」

「正しい選択を選ぶには、間違えなければならない。間違える恐怖を覚えなければならぬ。失敗の経験が、恐怖が、必然的に正しさを選ぶ可能性を開くのだ。

恐怖政治？ 思想弾圧？ 自由への侵害？ ああ、そうだな。・・・で？ それはどうしたと言うのだ？ それらが悪だと、間違った選択だと知っているのは間違えてきたプロセスがあるからではないのか？

間違いだからと教え込まただけで理解した気になっただけの無知無学なガキになつて他人を見下すのがそんなに好きか？ 楽しいのか？ 私には理解できないな。

正しさを教えられただけで何もしてない自分が、現在進行形で間違いを実行している人間を嗤うなどバカバカしいにも程がある」

「間違っていると思つたことを間違っていると云つて何が悪い。どこがいけない。

正しい方が素晴らしいと唱えることの何が子供だ？ 大人になつて子供に戻る必要のなくなった自分が、子供を見下し優越感に浸っているだけだとは思わないのか？

私ならそう思う。今もそうして、そう想いながら言い続けている。私とお前を罵倒し続けている」

「百の正しき選択は、たったひとつの間違った選択で無に帰するのが人類社会だ。無数の正しきの卵たちが、たった一人のしょうもない人生の落伍者によつて奈落の底への道連れにされるのが世の常だ。

だからこそ人は、『それがどうした』と言わなければならぬ。間違つた自分が、間違つていると感じる他人に『おまえ間違つてるんじゃないのか?』と問わなくてはならない。問い続けなければならぬ。それが正しさへとつながる唯一の道なのだから」

「人類は出来ないとされてきたことを出来てきたから今があるのだ。間違つているとされてきたことを『お前らの方が間違つている』と叫んできたから、今の間違いと正しさがあるのだ。間違いの結果が今なのだ。正しさの結果が今なら『間違い』等という言葉は概念上の存在でしかなくなっているだろう。」

机上の空論はいつだって完璧で、間違える余地などどこにもないのだから。選ばれなかった正しき選択の可能性など、幾らでも量産できるのだから」

「強すぎるから、間違えないから、お前は間違える人の弱さが許せなくなるのだ。人のことを理解しようとしていながら、結局は否定することしかできなくなるのだ。」

人を語るなら、まずは一度でも弱い人間に生まれ変わつてからにすることを勧めさせてもらう」

「——もう、休めドラゴン。お前は長く強く生きすぎた。しばしだけでも寝てみれば、案外世界は捨てたものでもないかもしれんぞ?」

だから今は眠れ。明日を夢見て眠れ。今より良くなっている明日を信じて眠るがいドラゴン。

強き者であるお前たちは、休むことの大切さと有り難さを知らな過ぎるから・・・」

29話「New ライヒ!な日常」

タツタツタツタ・・・・。

私は走っていた。デイトドラ・アスタロトが建てさせた神殿内にある廊下を、息を切らせて全力疾走で逃亡している。

逃げたのだ。この正当なる魔王の血を引く誇り高い血統の後継者シャルバ・ベルゼブブが！

あまりの屈辱と恥辱に頭を混乱させながらも、私は足を止めようとはしなかった。

まだ私の背後から、銀髪の小娘が喚びだした軍隊が追ってきているのではないか……？ そんな恐怖に突き動かされ、私は足を止めての転移さえ使う暇を惜しんで全速力で脇目も振らずに逃げ出しまくっていた。

「なんだあれは!?!なんだあれは!?!なんだあれは!?!なんだあれは!?!」

あんな物は知らない! 聞いたこともない! あんな化け物を相手にするなんて聞いてないぞオーフィス!」

私は私に力を与えた蛇に向かって、有らん限りの呪いの声を叫びたてる。

——あの小娘が軍勢を召喚した瞬間。私は確かに見たのだ。背後に広がる城門の中

「によっ! (びよんっ)」

『む? ご自身で陛下たちをお迎えにあがりたいとな? なんとご立派な御心掛けじゃ。ワシも主殿に召喚された悪魔らしく、帰りの際の乗り物としてゆつくりお帰りをお待ちしておりますぞ! いつてらっしやられよ!』

「によっ! (ビュューッッ!)」

『・・・ふうむ。あのネチっこいまでの忠誠心。相変わらず、人間の身しておくのは勿体なき御仁じゃな。ーん?』

『こ、これはイカン!? お主、萎えておるではないか! しかも何じゃ、そのお粗末すぎるサイズのモノは! 全く以てなつとらん! これだから最近の若人はまったく・・・』
 『・・・止むえんな。今は勤務時間中故モノを鍛えてやれる余裕がない。先にドリームランドへ送ってやろう。コクマの塔と言う名をつけたワシの寢床を建設してある。十分に修行をしておくがよい。ワシも後から追いつくでな。グワツハツハツハ!』

ズルズルと。いきなりの奇襲で鞏丸を打たれ、悶絶していて声も出せなくなっていた私は気持ち悪すぎる形状をした謎の生物によつて生きたまま地獄へと連れ去られていく。・・・私にとつてのイキ地獄は、ここから始まる・・・。

「ーとある国の隅つこに♪ おっばい大好きドラゴンが住んでいる♪

お天気の日はおっばい探してお散歩だ☆

ドラゴン、ドラゴン、おっばいドラゴン♪

もみもみ、ちゅーちゅー、ばふんばふん♪

おっばい大好きドラゴンは♪ 嵐の日でもおっばい押すと元気になれる☆

ポチッとポチッと、ずむずむ、いやーん♪

おっばいドラゴン、今日も押す♪」

『『』』……『』』

「こ、これは……。」

「……えつとその……いくら冥界が日本の民主主義とは隔絶した貴族制を敷く封建国家とは言え、ご自身のおっばい自慢を子供向け番組で流されるのは如何なものかと……」

「なんで私の顔をチラ見しながら言うのよ異住セレニア・ショート!?!」

「……名門グレモリー家の誇り……」
「言わないで! それは言わないで! それだけは言わないでちよūdai異住セレニア!」

「ーあ! そつか! これはもしかしくなくてもアレですよセレニア様!

グレモリー家の誇り||リアスが誇る『私のデツカいおっぱい見て見て、イヤ〜ン恥ずかしい☆ まいっちゃんぐ♡』的なセックスアピールなんですよ!」

「違うわよ?! いや、確かに自慢ではあるけども! でも、それとは全然違うからね!」
「……国内にある反主流派勢力を武力討伐した後で生き残った現魔王による政権が、勝利を喧伝する政治的プロパガンダに実の妹のオツパイネタを子供向け番組で……末期だな、現魔王の政権。ようやく本格的に始動したばかりなのに、いきなり亡国の予言なんかしないで頂けません!」

「……私が最初にイツセー君と出会ったばかりの頃、あなたに関して、高貴な雰囲気の中で夢中だ美しすぎる。見てると少しだけ怖く感じてしまい、心の隅で畏怖していたと聞かされたような気が……まさに人生五十年、夢幻の如く成りですね。」

サンバ衣装を着て腰振りたくってる姫君なんか高貴な雰囲気とかwww」

「小声で言っても聞こえてるわよ! 登場当初は私よりもエロキヤラだったはずの墮天

使レイナーレ!

破廉恥きわまる格好でイツセーの前に現れたあなたよりも墜ちた我が身の惨めさは、自分が一番よく分かっているから他人は口出ししないで貰えるかしら!? 不愉快だわ!

「……おっぱいドラゴン専用パワーアップアイテム『スイッチ姫のグレモリー』……ふふふ」

「あ~~~~け~~~~の~~~~!!!! 今日という今日は決着つけてやるわよ、あなたとだけはね~~~~っ!!!!」

ドガバキズガガキンツ
!!!!

「……ま、そう言うわけで久しぶりに駒王学園放課後のミステリー研究会部室に参集しているわけなのですが」

「……??? おい、セレニア。お前、誰に向かって説明してるんだ? そっちは窓しかないだろう?」

大人の事情ですよ兵藤さん。

あるいは大人になりたくても成れてない子供たちが主役の事情と言うべきですかね。どっちでも結果は同じなので、どっちでもいいっちゃ良いのですが。

ーデイオドラさんここで開催される予定だったレーディングゲームが破綻してから数日後。人間界に戻ってきていた私たちは久しぶりに日常のありがたみを全身で満喫しておりました。

あゝ、平和ってやっぱいいなーって感じだね。

ーあれからの事は正直よく覚えていないのです。気がついた時にはイゼルローンにある自室で寝かされていて、起きたら起きたでベッドの上に正座させられお説教タイムがはじまって、御夕飯頃まで延々と懇々と切々と説かれ続けた私には気力も反骨心も反発心も欠片すら残っているはずがありませんでした……。

それから、言われるがままに駒王学園に連れてこられてミス研の部室で冥界初の庶民向けテレビ番組『おっぱいドラゴン』の初放送を視聴していた訳で、それを観た上での感想が上記のない様なわけでもあるのですが。

『お茶の間の子供たちに自分のおっぱいはデカいと自慢する歌を流すとは……。

さすがは冥界の姫君にして誇りある名門の次期当主・・・王者の貫禄ですな《おつぱい公爵》さま・・・」

「なにその不名誉きわまる称号!? 凄まじく要らないんですけども!」

「・・・まあ、そんな些細なことは置いといて、だ」

おつぱいの王者グレモリーさんの抗議を『些細なこと』として一言の元に切つて捨てたゼノヴィアさんが、兵藤さんに顔を向けて声もかけてます。

「兵藤一誠。貴様は崩れた神殿の中で言っていたな。『自分には越えたい』と。あの言葉に嘘はないか?」

「・・・へ? ー何のこと?」

「ああ、あの時にヴァーリが話してくれた夢の話と関連付いてる奴な。もちろん本気だぜ! 俺はヴァーリも木場もサジも、当然お前だつて越えてやるんだつて決めているんだからな!

「・・・・・???」

「そうか。なら丁度いい。以前した勝負の続きといこう。それを以て今回の件で私がお前たちに感じた負い目への返済とさせて頂く」

「「・・・へ?」」

おう、今度は私と兵藤さんがハモりましたね。なかくま。

・・・でも実際には何も知らされていない分だけ私が下。今日は何だかついてないです・・・。

「お前は強い。中々のものだ。既に悪魔内に限ってであれば単純なステータス勝負で前の上をいく者はいても、遙かに超越している存在は多くないだろうと私は確信しているほどに、だ。無論、数値だけなら私を上回る日も近いだろうと思っっているぞ?」

「い、いやあく。そこまで手放しに賞賛されると照れちまいそうだなあく」

いや、照れてるでしょ完全に。むしろ、デレていると言っても過言ではないのではと。「だが、お前では私に勝てない。勝てない理由があるからだ。それを教え、叩き込み。いずれは私に敗北を味あわせられる程度には成つてもらわないと、私の方が困る。」

それ故お前に自分自身の抱えている致命的な欠陥についてレクチャーしてやろうというのだよ」

「・・・俺が弱いつて言いたいのかよ?」

「いいや? むしろ強いと賞したはずだし、ステータス上の数値では私を上回る日も近いだろうと絶賛した記憶がある程だが?」

「だけど俺はお前に勝てないんだろ?」

「ああ、勝てない。今のまま、何も知らないで自分の欠点を知らずに進めばどんなに強く

なつても私の敵には成り得ないだろうな。だからこそ、それは困るから鍛えてやろうと言っているのだよ兵藤一誠。

「この勝負、受けて立つ勇氣が貴様には御有りかな？」

「上等！ 掛かつて来いやあああつ！」

「結構。では、グラウンドへ行くぞ。我々の因縁の場だ。決着をつけるのには相応しかろうよ」

と、そんな感じになつたところでゾロゾロと部屋を出ていく原作勢の皆様方。ある程度は事情を知っているって便利ですよ、羨ましいです。

「……………そして取り残される事情を知らない私が一人……………。くすん……………」

「……………置いてかないでください……………」

後から一人で追いかけるを得ない、混沌帝国皇帝異住セレニア・ショート16歳。現在の身分、お仕置きされ中。

「さて、まず最初は基本中の基本からだが……」

俺の目の前でゼノヴィアは黒く染まった聖剣の切っ先を地面に突き刺し、戦闘衣に着替える事すらしないまま私服姿で俺と向き合う。

余裕綽々と言うよりも泰然自若と言った印象で、こいつが既に木場を超える剣の達人の域に達している事が伺い知れる。

くそ、負けて堪るか！ 俺だつて今まで死ぬ気で特訓してきたんだ！ 絶対に勝つ！
「兵藤一誠、とりあえず私に全力でブーステッドギアでの一撃を叩き込んでこい。私は動かずそれを対処してみせるから、それを観た上で次の攻撃に役立てるといい」

「……へ？」

今、コイツなんて……。

「あ、ああそうか駆け引きか。セレニアと同じに言葉で惑わそうたって、そうはいかねえぞー」

「阿呆。あれは陛下ならではの持ち味だ。私がやっても可愛く映るまい。可愛くないなら女にとって、やる意味は些かもない」

「う……。じゃ、じゃあどうする気なんだよ？」

「最初に言ったとおりだ。お前が放った全力のブーステッドギアでの一撃を、この場か

スト!ブースト!ブースト!」

おっしや臨界!ゼノヴィアの服を吹っ飛ばして、おまけに優しく介抱できちやう程度の威力は溜まったぜ!やるぞ必殺!

「うおおおおおおおおおおつ!!!」

俺の全力が込められた右ストリート^{!!!!}を、ゼノヴィアは本当に避けもしないし躲もしない。

いったい何をする気なのかと一瞬だけ迷った俺だが、そんな迷いは信じる心に綻びを生む!俺はただ、自分で鍛えたこの拳を信じるのみ!うおりやああああああああああああ!

「ふんっ!」

回し蹴り!?でも、遠い!

その距離からなら俺の顔面には届かないいいいいいいいつ!」

あまりの事態に俺は意味不明な叫び声を上げてしまった。

なんと!この女!回し蹴りを俺の顔じゃなくて俺の拳に、ブーステッド・ギアに当ててきやがった!

しかも破壊が目的じゃなくて、ただ単に方向を逸らしたいだけの一撃だ!真っ直ぐ進みたい俺に、横に逸れると横合いから圧力かけてきやがった!

スト!ブースト!ブースト!』

うおっしや!

「でえりやあああああああああああああつ!!!」

ーよっし! 今度は間合いに入れた! この距離なら外さないし避けられもしな

☆▲○×□!?!」

「ちよつと、イツセー!? どうしたの! 突然お腹を押さえだして、腹痛でも起こしたの!? だからあれほど拾い食いは体に良くないから駄目だと言っておいたのに!」

「・・・お母さん?」

「誰が母乳が出そうなオツパイよ失礼な! まだ出ないんだからね!」

「まだなんだって言うか、誰もそんなこと言っていないんですが・・・」

「すっかりオツパイキャラが定着したみたいで何よりですなあ♪ リアス・グレモ乳

く?」

「誰よ!? その牛型悪魔みたいな名前の私は!」

「・・・自分で遠回しに認めちゃってるし・・・」

ちよつとあの・・・みなさん? もう少しだけでいいんで、俺の身のこと心配して?

今の俺、結構ヤバい状態なんですけども？ 特に重要な一部局所が重点的に……。

「ふん。突撃して行つて、今度こそ当てることばかりに集中しすぎるから相手の些細な変化を『大したことない』と見過ごしてしまう。

相手が地面に指していた剣を抜いて、ダラリと下に提げていた。その変化をもつと重要視していれば、今の一撃は予測できて当然だというのに……」

「い、いや……今のはちよつと……む……り……」

「??? 何故だ？ ただ単にお前の突撃してくる軌道上に剣を置いて峰打ちさせただけの小細工なのだけぞ？」

突撃すること当てることに集中しすぎて視野が狭まり、当てられると思ひこんだ瞬間には完全な死角になっていただけで本来ならば誰もが通る位置と高さに柄頭を設置しておけば済む簡単なトラップだ。取るに足らないと思うのだがな……」

「そういうんじゃないか、ね……?」

主に当てられた場所が重要でね？ 軌道上に置いて置かれた鉄の塊に金の玉が全速力でぶつかつちやつたら死ぬほど痛すぎる事実をどうかわかつて……。

「ふむ。よく分からないが問題ない。すぐに救護班が呼べる位置にいる。

衛生兵！ ……いいや、歩いて付いてくる自動回復ポイント聖女アーシア・アルジェ

ント! 貴様の出番だ! 治療してやれ!

「誰が、歩く回復ポイントなんですかゼノヴィアさん!」

元教会所属で聖剣使いだっただゼノヴィアによる、聖女アーシア評Ⅱ歩いて付いてくる自動回復ポイント。・・・神様の奇跡RPGに格下げされちゃってるよ・・・こいつの信仰心の捨て具合がマジで怖すぎる件について。

「はあはあ・・・し、死ぬかと思った・・・」

「ふむ。つまりは死なずに生きて生還できた訳だな、おめでとう。

では次を始めるから早く構えろ。人間の生は生き続けている限りずっと戦いなのだから」

「鬼かお前は!」

「堕ちた聖剣使いだが?」

「鬼より悪魔より酷い暴君だった!」

驚愕の真実! 悪魔になった俺より悪魔な聖剣使いが存在していた! 神様、背教者です! 罰しちやつてください!

「ああもう、いちいち面倒くさい奴だなー。だったら今度は攻守交代だ。

お前が全力をこめて対処できる状態が整うまで待っていてやるから、私はその後

真つ正面から剣での突撃を慣行する。それで良いな？」

「む。それなら俺でも余裕で勝てるな・・・よっしゃ来いや！」

「・・・イツセー先輩の思考が後ろ向きです・・・」

「さっきの一撃がよっほど効いたんでしようねえ・・・すつごく痛そうでしたし・・・」
「相手に合わせてもらっておいで勝てるもなにも無いでしょうにねえ、うふふ。イツセー君たら惨めですわ〜」

「・・・（意外とヒロイン勢からの評価が低いハーレムラノベの主人公だったんですね、兵藤さんって）」

「それじゃあ行くぜ！」

『ブースト！ ブースト！ブースト！ブースト！ブースト！ブースト！ブースト！ブースト！ブースト！ブースト！ブースト！ブースト！』

「充填完了！ バッチコーつい！」

「ではーハアツ!!」

!! さすがに速い！ 木場と同じか、それ以上か！

だが真つ正面から来ると判ってさえいれれば追えないって程には速くない！ これな

らギリギリのタイミングを測ればー消えたっ!? 横……いや、上だ!

「チエストー……っ!!!」

「てえりやああああああ!!!」

ガギイイイイイイイイッン
!!!!!!

よし! 噛み合った! これなら後は力勝ちしてから、空を飛べない人間形態のゼノヴィアが空にいるのを利用して逆げきいっつん!」

「……パワー負けていると分かり切っている相手には、そのパワーを逆用して受け流しての反撃が基本だ。

柔よく剛を制すの精神を生んだ偉大な祖国の出身者が、何故に欧州人が如きパワー馬鹿になっているのだ……?

あと、二度目の足なしルールは攻守交代で無効になつてるのは言うまでもないよな?」

……いえ、出来れば採用したままでいて欲しかったデス。

弾いた剣を手放しながらサマーソルトキックを放ってきたゼノヴィアは、後ろへ飛んでく俺と同じく逆方向の後方へと飛んでいつて着地する。俺も頭から着地する。「ぐ

べっ!」とね。

「ほら、アーシア。じゃなくって、自動回復ポイント。出番だぞ」

「アーシアですよ!?! アーシアで合ってますからねゼノヴィアさん!?! わざとふざけるだけなのは判ってますけど、本気でイヤなので止めてください!」

「わかった。次から気をつけるから早く治して帰ってくれ、アーシア・回復エント。兵藤一誠がへばったままでは修行が進まんだ」

「ゼノヴィアさー!?!」

「ふっふっふ．．．来たぜヌルリと．．．」

「何かおかしなモノに憑依されかけてる気がするのだが．．．まあいい。今度は私は足も使わん。剣だけを使った一撃を放つから受け止めて見せろ」

「．．．ふっふっふ。今の俺は誰にも倒せねえ．．．俺は虎だ。虎になるのだ」

「いや、そこは龍になれよ。自分一人の中で竜虎合い討たせてどうするつもりなんだ貴様は．．．」

ふっひっひ．．．もう俺に痛みはねえ。全力で殴る。殴ればいい。殴れさえすれば負けてねえ。負けたことにはならねえはずだ．．．。

「・・・まあ、先ほどのを見て貰えば一目瞭然すぎるのだが・・・」

「いえ、ごめんなさい。全くなにが言いたかったんだか判らない私たちが居るんですけど・・・」

部室に戻って教師口調で説教しようとしているゼノヴィアさんに、グレモリーさんが片手を上げながら控えめに異を唱えています。

「なんだ？ 判らなかつたのか？ あれだけ判りやすく見せてやったのに？」

「・・・少なくとも、あなたがヒトデナシだと言うことだけはハッキリしたのだけれどね・・・」

グレモリーさんの尤もな言い分にゼノヴィアさんは「やれやれ」と肩を竦めてみせるだけ。苛立つ空気が室内に充満しますが、空気呼んで黙ってくれる良い人は帝国軍人には向いていません。なので無理です。

「つまりは、だ・・・お前ら悪魔のくせに真面目すぎるだろう。なんで私が決めたルールばかりに従って戦いを挑んできてたんだ？ もっと自分たちのやり方を押しつけてこいよ。」

不意打ちも騙し討ちも正当化しまくり出来まくりで、途中から言い訳を考える方が手

間に感じてきたじゃないか。そんなだからセレニア様に負かされてばかりなんだよ。少しは敗北から学べ馬鹿ども」

あ、それ私も思っていました。．．．ずっと前から．．．。

「貴様等は日常だとルール無用にやってるのに、なぜだか肝心の戦争になるとルール尊重で相手に合わせようとする。

．．．適用する場所と状況が完全に反転しまくってるじゃないか．．．だから前回もアーシア・アルジエントを浚われたあげく殺されるんだよ間抜けども」

『』．．．う、ぐ、ぐぬぬぬううう．．．『』

「敢えて言わせてもらうが、お前らは阿呆で間抜けで馬鹿だ。そんなお前等が今まで負けなかった理由について少しは考えて過去を振り返れ。後ろ向きな思考も前に進むために使うなら偶には良しだ。がんばれ」

『』うぬぬぬ．．．教会の元聖職者による説教なんてえ．．．『』

いや、それ普通じゃね？

「では、本日の講義を終了する。

帰りますよ、セレニア様」

「あ、はい。．．それではアルジエントさん。兵藤さんはお任せして私は帰りますね」

「はい、セレニアさん。今日は介抱をお手伝いいただきありがとうございました」

「いえいえ、それほどでも。ではでは」

本日のお役目。

怪我は治ったけど気絶したまま「うー、うー・・・」唸ってる兵藤さんに蒸しタオル載せたり団扇で扇いだりしているだけ。・・・これって転生者の果たすべき仕事なんですかね？

今更すぎますけど、私の立ち位置っていったい・・・謎です。
和やかムードで続く

29・5話 「堕ちた聖剣使いの戦闘講座（戦争編）」

「……由々しき事態よね」

『……………』

部室に集まっていたイツセーを除くミステリー研究会部員一同はそろって俯いて下唇を噛み、それぞれが何事かを考えるように沈黙している。

思い煩っているのは、先日ゼノヴィアから言われた一言について。

『お前ら……悪魔のくせに真面目すぎるだろ。もつと自分のやり方を押しつけてこい』
……正直、イツセーを間近で見ているのが日常の私たちには盲点だったのだけれども、確かに私たちはメンバーが揃った当初から相手の用意した拠点に乗り込み決戦を挑むことが多かった。

それが当然だと思っていたし、事実としてそれで勝ってきていたから深く考えようとはしていなかったのだけれど……デイオドラとの一件でアーシアを失いかけた今となつては無視できない難題だと断言できるわ。早急に解決策を模索しないと、今度は誰が犠牲になるか判らない……!!

「そういう訳よ、みんな。力を貸して頂戴」

私は、彼らの主としての沽券を捨て恥を捨て、戦闘面では足を引っ張りがちになっているキングの駒としてみんなにお願いするため頭を下げると微笑みながらの暖かい反応が返ってきた。

「水臭いですよ、部長。僕の命はとつくの昔に部長に預けてます。もちろん、体も心も知恵も知識もね。御自由に使ってください。僕は部長に付いていくだけですから」

「祐斗……!!」

「……私は部長……リアス姉様の役に立てるのであれば何でも……」

「小猫……!」

「ぼ、ボクもです! 役に立てるか判りませんが、精一杯がんばります!」

「ギヤスパ……!」

「うふふ。わたくしが協力するのに、今更言葉など必要ないでしょう?」

「朱乃……あなたまで……!!」

本当に私は良い眷属に恵まれたと思う。本当に、良い眷属に恵まれた幸せな主なので確信できる!

だから私は彼らを頼るの! 自分では及ばぬ部分を補ってくれることを期待して!

みんななら必ず、私たちが抱えている問題を解消できるアイデアを思いつくって!

一人ではダメでも、みんなでアイデアを出し合いさえすれば必ずと……!!
 「じゃあみんな! 聞かせて頂戴! 私たちの抱えている悪魔らしくない真面目さを解決する方法を! みんなで色々なアイデアを持ち寄ればきつと……!!!」

『……………』
 「みんな……………」

誰からもアイデアがでなかつたら、数だけそろえても意味ないじゃないの! 0になに掛けても0なままじゃないの!

始まりがあれば終わりがあるのに、始まることすら出来なかつたら伝説が生まれないじゃないのよ……………!!!

「い、いや部長。諦めるのはまだ早いですよ。だって、ほら。今日の放課後はイツセー君がゼノヴィアと再び稽古して「問題解消手段を見つけだしてみせるぜ!」って親指立ててましたから……」

「転生悪魔としては後輩のイツセーに任せっ切りで恥ずかしくないの祐斗!? あなた成績では彼より圧倒的に上のはずなのよ! ペーパーテストではだけどね!」

「……………学生の本分は勉強で、剣の修行は学校の小テストに関係してはいないので……」
 「祐斗……………」

なんだか気づかない内にミステリー研究会がダメになっちゃってる気がするわ!

ト！ブースト！ブースト！』

「うおりやあああああああああああつ！！」

ずどがああああああああああつん！！！！！！

どうだ!? 今日一番の威力での一撃だ！

「これならさすがのゼノヴィアもおおおおおつん!?」

「残像を残して避けるのは回避の基本。わざわざ盛大に土煙をたてまくっては相手の思う壺だぞ？ もっと相手をよく見る習慣ぐらいは身につけろよ戯け」

横合いから裏拳くらって吹っ飛んでく俺に、冷たい声と視線で一瞥してくるゼノヴィア。ーちくしょう！ 今日もまた勝てないのかよ俺は！ せめて問題解消のためにも糸口くらいは掴みたいのに！

「・・・なんだ。先日の件を気にしてでもいるのか？ 大したことを言われたわけでもないだろうに・・・」

・・・へ？ 今、なんて・・・。

俺が疑問符だらけの顔を向けた先ではゼノヴィアが呆れ果てたと言いたそうな顔でこちらを見ていて、白けきった瞳のまま冷静に指摘してくる。

「あれは『私の剣の理』であり、私の価値観を基準とした私個人の意見を言ったまでだ。

別段、私と同じ色の旗を仰いでいるわけでもない貴様等が迎合する必要など些かもなかった。好きに解釈して、自分の得意とする分野に置換してくれて構わなかったのだ」「で、でも、それでダメだと感じたら怒られるの俺たちなんだろう？」

俺の若干ビビりがちな声での質問にゼノヴィアは大きくうなずき「当たり前だろう？」と、平然とした口調でごく自然に答えてくる。

ううう……いや分かるんだけどさ。それが正しい戦闘技能講座で、厳しい環境で育ったから頭堅いゼノヴィアが当たり前だと言いきれるのも分かるんだけどさ。

でも俺一応、日本で生まれ育った高校生なんだけぜ？ 可愛い女の子に言葉で罵倒されたら少しだけじゃなくて、結構心が痛いんだけどな……。

俺がそう言うのとゼノヴィアは奇妙な顔をした後「……質問を変えよう」と言いだし、

「兵藤一誠。貴様は何故、最初の一件以来ブーステッド・ギアを使った最大出力の一撃が通じなかった度に狼狽えだすのだ？」

「へ？」

え？ つまり……どう言うこと？

「つまり、だ。特殊能力を駆使する異能バトルにおいて最強の能力者など腐るほどいる。中には当然、能力を無効化しないし無意味化させることに秀でた者もいるであろうし、お

前の能力限定で特別効果が薄い類の相性が悪すぎる相手と当たる可能性だつてあることだろう。

何故なら高性能な異能とは、高火力な攻撃能力を意味するものではないからだ」

あ……。そう言えばサジの奴がそれだった！ 影が薄いから大事なときには忘れかけちまうぜ！

「むしろ、そうではない能力を持つ者たちにとつては強力な能力を持つ者を、自分の弱い異能で勝つにはどうすればいいかを考える事そのものが戦いの本質になってくる。

自分と異なる理を持ち、信じ貫かんとする者同士の信念と信念のぶつかり合い。それが戦いであるとするのが『私の戦いにおける真理』であり『戦の理』だ。

——兵藤、お前はこの思想を受け入れられるか？」

「……なんとなく……だけど……」

「ならばその想いを相手にぶつける。今なら私にだな。『何となくしか分かんねえんだよ！ もっと分かり易く噛み砕いて教えやがれエロ装備の糞ビッチ騎士ヤロウ！』とでも叫びながらな」

「いや、そこまで酷いことは言わないよ!! それから、そこまで酷いこと思つたことすらないからね!! お前と一緒にしないでくださる!! いやホントの本気で本当に!!」

こいつ、自分に対する毒舌にも容赦ねえ！ 微塵もねえ！ ちりほどもねえ！ マ

ジバないっすゼノヴィアさん！」

俺が心の底から叫んでいるのにゼノヴィアは、欠片ほどの感銘も示すことなく「ふん」とつまらなさそうに鼻で笑うと、滔々と自説の展開を続けていく。

「良いではないか、別に。どのみち相手に『自分を否定された』と取られてしまったなら同じ結果を招くだけだ。言い方を気にするのは言ってる側の問題であって、言われている側は好きに解釈する権利があるのだからな。」

想いのぶつけ合いも伝え合いも、拳で行うか言葉で語るかの違いがあるだけで、相手が『傷つけられた辛くて生きていけそうにない鬱だ死のう』と死んでしまえば同じ事だ。死体にとって事の真偽などどうでもとかわらう？」

「そ、それはさすがに酷すぎる言い分なんじゃね？ 極論すぎる気がするし・・・」
「極論の方が分かり易いし、簡明でいい。好みでもあるしな。小難しく考えるのは上の役目だ。そのために士官と下士官がいる。」

下士官が筋肉だけを使っていれば良くするためにこそ士官がいる。兵士たちは自分たちが楽できるようにするために新任士官を一生懸命に体張って守って育て上げてやる。

ご恩と奉公の関係が成立さえしていれば軍人として秩序に従うのに問題はない。お前たちもそれぐらいに割り切った方が気が楽というものぞぞ？」

こ、この脳味噌筋肉女めが・・・。

「なんだよ、その目は。この脳味噌おっぱい男めが」

「酷いこと言われた!」

自分では普段から思っていることだけど、女の子から言われたのは生まれて初めてな気がする台詞! 「オッパイのことしか考えてない」とかはよく言われるけど、脳味噌おっぱい男は初めての罵倒だ! 新鮮だ! 悪い意味でだけどな!

「と言うか、なんでお前って戦いになる度に小難しそうな顔になるんだ? 普段通りに

「おっぱいおっぱい」言っただけじゃいいじゃないか。どうせ最後はオッパイ愛で勝つしか取り柄ないんだから」

「またしても酷いことを! いい加減に泣くぞ俺でも! 男の子のハートの半分はガラスで出来ている!」

情け容赦ない聖剣使いの攻撃は物理的にも精神的にも大ダメージだ! 俺と同じ一発屋の癖して連続で超威力の攻撃を連続して来やがる! やべえ! マジ痛え!

「そ、それにほらあれだ。俺はリアス部長のポーンなんだから部長を支えていくためには色々出来なくならんくちやダメだろ? 部長はやりたいこと多いみたいだし・・・」

「???」ポーンにあるのは前進だけだろう? 横にも動けず後ろにも進めない捨て駒の

ポーンが今更なにか考える必要があるのか? 進むしか脳がない駒なんだから、なにも

考えずにただ進めよ。敵陣地内に入れたら『と金』になれる将棋の『歩』でもあるまいに」

「お前少しぐらい言葉選べよ！ 泣くよ!! 本当に俺泣いちゃうよ、このままだと!!」

「知らんわ戯け。悪魔が泣けば人間が喜び噛み軋げる。当たり前道理だろうが。自らをリアス・グレモリーに仕える軋生悪魔になったというなら受け入れるよこれぐらい」

「瀕死！」

神様・・・あるいは魔王様でも構いませんので、お願いですからどうかコイツを・・・罰してください・・・さい・・・がくつ。

「・・・??? おい、何をいきなり不貞寝している。早く起きろ。修行の続きだ。今ので十分休めただろうが」

「今の会話、休憩扱いだったの!？」

「すげえ！ そしてパネエ！ ぜんぜん休めなかったって言うか、むしろ休む前より消耗しちゃっている俺がいる！ パネエ！ マジパネエよ教会式修行法！ さすが滝に打たれて修行するのが日常の坊さん戦士だよ！」

でも、俺は悪魔だから真似できません！ 帰らせてもらいます！

「言い忘れていたが、今この空間は閉じてある。私を倒すか解除させない限り出るこ

は出来ず、時間も経過しない。勝手に出て行こうとすれば、未来永劫この空間に閉じこめられることに成りかねないぞ？」

「……………」

泣きそうな顔して振り返った俺に、ゼノヴィアは普通の顔して剣を構えている。

母さん……………たす……………けて……………。

……………そもそも、この訓練。なにを鍛えているんだよお……………。なんも教えてもらってないし、蹴られて殴られて転ばされ続けるだけで訳わかんねえよお……………。
帰りたいよおー、帰りたいよおー。えくん、えくん……………(T|T)

「ああ、それは当然のことだろうな。

何しろ私がお前に教えているのは『敗北』だけだし」

「さいつていだなお前は！」

悪びれもなく虐めてる宣言をしてのける元教会所属の聖剣使いに俺は怒りの絶叫をかましていた！

なんだよそれ！ 虐めかよ！ いじめだよ！ 少年虐待だよ！ 訴えてやる！

さんざんに悪口雑言をぶちまけ続ける俺に対し、ゼノヴィアはむしろ今までもよりも真摯な表情を見せて穏やかさすら感じさせる声音で、当たり前前のようにこう言った。

「前々から私は、お前たちに一番欠けていると思っていた物があつてな。それが今回、アーシアを殺し掛けてしまう結果に繋がったので改善してやっている。ありがたく受け取れ。次からはアーシアが死ぬ確率が少しぐらいは減るかもしれん修行法なの难道？」

ーピタリと。俺の悪態が止まって相手を見る。

目がマジだった。超真剣だ。コイツは本気で俺に負けさせ続ければアーシアが死ぬ確率が低くなると信じ切っている。

「・・・アーシアを死なせないで済む様になる、俺たちの改善すべき弱点つてなんだよ」『経験』。どれほど膨大な才能を持って生まれついた天才にも手に入れるためには時間と歳の加算が必須となる項目。

平たく言えば生まれてから今まで積み立ててきた蓄積が、お前たちには圧倒的に足り

ていない。だからこそ補ってやる必要がある。そう言うことだ」

「……!!」

それは……俺が今まで才能頼りに楽して戦ってきたって言いたい訳か？

「少し違うが、似てはいる。お前は確かに成長著しいが、その分だけ努力と修練に対する理解が足りていない。初めてから数ヶ月のトレーニングで目に見えるほどの変化が出ている自分の異常性に慣れ親しみすぎてしまっている。

だからこそ一番根底にある自分にとつての問題点。『自分は覇龍を受け継いでいるだけの出来損ないで無能な変態高校生でしかない』と言う事実を正しく認識できなくなり、無謀としか言いようのない突貫を繰り返す要因にまで成り得ているのだよ」

「そんなこと分かっている！ 俺は自分の無力さを何度も何度も痛感してきたし、実際の痛みを体で覚え込ませてもらってー」

「ならば何故、先のディオドラとの戦いの場に赴いたときに撤兵を選択しなかった？」

「……え？」

てっ……ぺい……？

疑問符を浮かべた俺の顔を見てゼノヴィアは「やはりな」と言う表情になってから頷くと、「場慣れした兵士」としての当たり前な理屈でもって俺の今までの行動を……いや、『戦争が始まってからの俺たちすべてを』徹底的に否定してきた。

セレニアと同じで状況に合わせてようとして無理している、と。

「元々あの場所に赴いたとき、お前たちに敵と殺し合う予定はなかったはずだ。にも関わらず目の前にカオス・ブリゲートが現れた途端「敵が来たぞ！戦わなくては！殺される前に倒すしかない！」という発想に直結させてしまった。

カオス・ブリゲードの戦争絶対論を否定している側のお前たちがだぞ？ 戦闘⇨戦争

⇨死ぬか生きるか、ではカオス・ブリゲードの主張を相対的に認めたことになってしまっている。自分たちの行動と主張が重なり合わず、ブレてきている事態をおかしいとは思わなかったのか？」

「い、いやだけどあの時には他に逃げ場もなかったし・・・」

「なら戦闘開始前に逃げ出せば良かっただろう？ 試合会場に到着した瞬間、お前たちは明らかな異変に気づいていながら対処法として『嚴重警戒、密集隊形』を選択した。

もし仮に私がお前たちの側において皆の命を預かる指揮官であったならば、異常を察知した瞬間に後ろを向いて全速力で逃走していた。味方を置き捨てても一人でも多くの味方を生かして故郷に帰すために、恥も外聞もなく逃げて逃げて逃げまくる。

それが殺し合うこと前提出来たわけでもない場所で、自分たちを殺す気満々の敵が待ちかまえていた場合取るべき正しき対処法だ。それが思いつかなかった時点でおま

えたちも相当頭をやられているよ、戦争にな。

そんなだからセレニア様と同じで自分の在り方と乖離してる事にも気づかず間違えるんだよバーカ」

.....。

「それが『危機感の無さ』だ。敗北の経験が少なすぎるから畏を察知する能力が低く、察知できても危険度を見誤り味方を危険に晒してしまう。平和ボケしてたお前が戦争に慣れるために普通の感覚を麻痺させてしまっていた。怖さを忘れた兵士は長生きしないし出来ない。」

「今までと違う、通常ではない。その状況下に置かれた時点でおまえたちの誰かが疑いを抱き、一時の対処法として一旦退くだけでも良かったのだ。」

「別に後方で安穩としていたアザゼルたちの思惑を聞かされていたわけでもあるまいに.....律儀なことだよ全く。だから真面目すぎると言ったのさ」

「.....」

「おまえたちは軍人じゃない。巻き込まれただけの民間人と現地徴用された即席兵だ。好き好んで国家の都合とやらに合わせてやる必要もあるまい？」

「.....それは.....出来ない.....」

俺は絞り出すような声で言った。

俯きながらだつたからゼノヴィアの顔は見れなかったけど、何故か楽しそうな声で言ってるのだけは聞こえてきた。

「ほう？ 何故だ？」

「俺はリアス部長の眷属悪魔だ。そしてリアス部長はサーゼクス様の妹だ。俺のせいで立場を悪くさせてしまうことは出来ない。それだけは……絶対に……」

拳を握りしめながら吐いた俺の言葉は「パチパチパチ」という拍手の音で迎えられ——って、え？ なんで？

「すばらしいな兵藤一誠。それだけ解っているお前がどうして根本的な事に気づいていないのか理解できないほどに素晴らしく明快な考え方だ。尊敬に値する」

「え？ ？ え？ ？ え？ ？」

「なんだ？ 自分の言った言葉の偉大さが理解できていないのか？ 困った奴だな。では仕方ない。私がおつきり言ってやろう。」

——お前は……デツカいおっぱいが自慢のリアス・グレモリーの為だけに戦ってる変態なんだから変態として戦争に参戦してればそれでいいんだよ！」

「ぶっちゃけたなお前は！」

いや、そうだけど！ そうかもしれないのだけれども！

でも、飾れよ言葉をも少しだけでもさあ！ 今の俺の言葉がカッコいい台詞からダメ人間のダメ台詞に置換されそうになっちゃってるじゃん！

「今更優等生ぶったところで変態は真人間にはなれない！

貴様はただひたすらに「おっばいおっばい」と叫んで走り回りながら戦場をかき乱し、敵が女であれば「ドレスブレイク」で服を脱がして「おっばい！」と勝ち鬨を上げ、ピョンチになったらグレモリーおっばいでパワーアップし、敵を倒し戦に勝ったら「おっばい！おっばい！おっばい！」と拳を高らかに天へと突き上げリアス・グレモリーの丸出し巨乳を揉みしだく！

これで良からう!?!」

「良くねえよ！ ぜんぜん良くねえよ！ むしろ良いところがドコを探しても見つかりそうにねえよ！ ただの大迷惑な変態野郎じゃねえか！ 俺の評価ダダ下がり確実！ 20パーセント以上じゃねえか！ モテなくなったらどうしてくれるんだよ!?!」

「大丈夫だ。その程度で離れていくほど真つ当な精神を持つてる女だったら、まず最初にお前と出会った瞬間から通報してるし」

「今までで一番ひどい言葉を?! ええーい、このセレニアの手先め！ 悪霊退散！

ーって、ぎゃああつ!?! 悪魔の体だと悪霊退散でもダメージ受けるんかい！ 知らな

かったぜ！」

一人でギャーギャー騒いでる俺を見下ろしながら（つて言うか、見下しながら）ゼノヴィアは言葉を結ぶ。

「安心しろ。そんなお前の変態性を知った上で好きだと思ってくれている奴らも、実のところは相当に好き者ぞろいの変態集団だ。でなければアホ丸出しなコスチューム着て他人の前に出られる訳がない。今更お前がどれだけ醜態晒しても苦笑しながら対処してくれる。」

事の最初から迷惑かけるつもりで全力でいけ。結果的に勝ちさえすれば後始末ぐらいは引き受けてくれるから」

「そ、そうかなあ……？　ー本当にそう思う？」

「無論だ。ポーンだけで敵に勝てるなら、これほど安い買い物はないのだからな」

「言っちゃいけないことを平然と！」

「それにグレモリーたちなら、お返しとしてお前のカルピスでもごちそうしてやると言えばアツサリと……」

「言わねえよ!?　いくら俺でもそこまで変態台詞は言いたくないし言えないですし！」

「つーかお前、なんだった昔の日本文化にそこまで詳しい!?!」

「オタクの国ジャパンに来た外国人として正しい在り方だと、陛下のお母上様から教

わったのだ」

「どんなお母さん!? え、セレニアの母ちゃんってマジでどんな人なの!?

前に一度あつたことある気がするんだけど、思い出せないんですけども!」

「外伝の話だからだろうな」

「なんの話だよ!?! さつきからお前はいつたい何の話をしているんだよ!?!」

「ああもう、さつきから屁理屈をグチグチぐちぐち……本当に面倒くさい生き物だな悪魔って連中は!」

えええ……。俺今回は結構まともなこと言ってるつもりだよ? 珍しく帝国さんの方が暴論言いまくっている気がするんですけども……。

さつきから暴論ばつかのゼノヴィアだが、最後の最後もやっぱり暴論で締めくくってくれやがった。

「もういい! 結論だ! 結論にはいるぞ! 私がお前に敗北を味あわせている理由は唯一つ!

『お前らは自分の得意なことしかしたくないし出来ない困ったちゃんが集まりだから、本能的に危険を察知できるような身体に覚え込ませることにした。』

生まれてから今までの十数年分の敗北を数万回分、今日一日で味あわせれば敗北の怖

「・・・・・・・・・・」

「自分を貫けよ、兵藤一誠。戦争という現実を前に拳ひとつでどうにかしようと言うんだったら道理のひとつや二つ無視して殴り壊してしまえ」

「・・・・・・・・・・」

「おまえの夢のために制度が邪魔なら拳で壊せ。貴族が邪魔するなら結果で黙らせる。

敵を倒すしか能がない自分を認め、カオス・ブリゲードの尊重している力の源『古くさいルール』を破りまくれ。

そうやって暴走していけば、誰かが止めにはいるし力づくで止められる。そうやって学んでいく事が経験不足のお前には絶対的に必要だし有効だ。言って聞かない子供には殴って教える。お前にはそれをやらんと聞く耳持つてくれそうにないからな。

人はそうやって他者の中で生きる自分を学んでいくものなのだよ」

「・・・・・・・・・・」

「懐かしいなあ・・・・・・・・。私も昔はヤンチャだった時期があつてな。よく拳で礼儀と人道を教えられたものさ。お前もそうして学んでいけばいい。

負けることで自分の程度と現在の限界を。どこまでの範囲が自分に許された裁量なのかを。自分には今なかが出来て、なかが出来なくて、したい事のためには何が必要なのか自然に解るようになってくる。それは良いことだよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・さつきから黙り込んで、どうした兵藤一誠。しつかりしないか男だろ？」

それとも私のお尻はそんなに魅力的か？ 気持ちいいのか？ 女の尻に物理的に敷かれて眠るのは変態にとつて望外の幸福だろ、喜ぶがいい。あつはっはっは！」

「・・・・・・・・・・」

——返事がない。兵藤一誠は、ただのしかばねになっっているようだ。

注：後日、事の次第を知った兵藤さんは、気絶してたせいでお尻の感触を思い出せないことを泣いて悔しがりましたとき。ちゃんちゃん。

注2：彼が事の次第を聞けるのは泣いたり笑ったり出来るようになった、実時間にして三日後の事です。

更には、泣くことも笑うことも出来なくなつて戻つてきたのは今から65時間後。

特訓当日の翌朝に、登校時間まで約一時間に迫つた自宅前で棒立ちしてたところを発見されたそうです・・・Byセレニア

つづく

「ディオドラ戦前、姫島家の事情話にセレニア母娘が介入していたら」

「しかし・・・なんだな」

横合いから声が聞こえて、私は隣に並んで歩く実の母（第二のです。第一は前世）である異住・フェリシアさんの顔を見上げ・・・するのは無理なので見下ろしながら見つめました。・・・相変わらずちっちえー。

「夫が趣味で買ったエロ同人誌を夕飯の買い物ついでに買ってきてやる妻というのは、良妻賢母と呼んで差し支えないのだろうか？　なんだか育兒的な問題に抵触しそうな気がするのだが」

「いいんじゃないやありません？　どのみち明治末期にできた家父長制の辺りから生まれたのが良妻賢母思想ですし、たかだか百数十年しか続かない伝統なんて大した重みもありません。変わる必要があれば辞書に載ってる意味も変わるでしょうから、気にする必要もないのではありませんか？」

私の言葉に母は軽くうなずくと、

「萌えも遂に載ったぐらいだしなー」

「世も末つてますよね、相変わらず」

どうでもいい内容なのにブラックでもある会話を和気藹々と交わしながら私たちは商店街を歩いていきます。

現在、時期的には夏休み最後の一日。場所は駒王町の一角にある歓楽街。

・・・どう考えても合法ロリキャラ二人が連れ立ってきていい場所ではないのですが、真尋さんと真尋さんのお母さん二人分の性質を兼ね備えている（らしいです。聞かされただけですけども）母に襲いかかつて五体満足のまま生きて帰るには帝国軍でも幹部クラスの実力が必須であると天野さんに保証された私は、不安を胸に抱えながらも久しぶりに過ごさせる家族団欒の時を密かに楽しんでいました。

戦い続きで（実質、見ているだけなんですけどね・・・）荒んだ心と体を癒すには家族の愛が一番だと、何かのマンガで見た記憶があります。守るべき家族の為に戦うキャラクターも多いですからね。

今日くらいは子供らしく親に甘えても構わない・・・はずです、たぶん。

「まあ、久しぶりの母娘の交流の場としては趣が足りていないがね。これはこれで楽しみようもあるのだが・・・おや？」

母が何かに気づいたように顔を逸らし、脇道にそれた先にあるラブホテルの方へ目を向けたので私もそちらに目をやると――

「朱乃、これはどういうことだ？」

「……か、関係ないでしょ！　そ、それよりもどうしてあなたがここにいるのよ！」

「ー聞こえてくるのは聞き覚えのある声音と、聞いたことのない野太いバリトンボイス。……一人は分かりますけど、もう一人の男の人は誰でしょうか？　ちよつとだけ気になります。」

他人事故の暢気な野次馬根性で適当に眺めていたところ、やや事態は荒つぽい方向に推移してきてしまったようです。

「それはいまでもいい！　とにかく、ここを離れる。お前にはまだ早い」

「いやー！　離してー！」

「何だか、わからないけど、朱乃さんに触れないでくれ。嫌がっているだろう。つーか、あんた何者だよ？」

「ーおや？　兵藤さんまでいらしたのですね。珍しく隣に巨大なオツパイさんがいないから気づきませんでしたよ。失礼しました。」

彼の垂下に相手の男性は一步退き、威圧感こそあれども礼儀正しい態度と姿勢で黙礼してから、民間人である私たちが見ていることに気づかぬまま名乗りを上げようとしてしまったので空気を呼んだ母がコホンと咳をして、

「今日はオーデイン殿の護衛で来ている。墮天使組織グレゴリカー」

「こほん。ーあゝ・・・僭越だとは思うのだが、そう言う神話系の話は私のような民間人を完全に遠ざけてからしたほうがいいのではないかな？ 異種族で溢れかえっているせいで種族特性に左右されがちな人除けの結界が綻びだらけになってるぞ？」

突然の声かけに全員が驚きを露わにし、私たちを見つめてきたり睨みつけたり個性と立場と種族に合わせた対応を見させていただきました。よく分かりませんでしたけどね？

「・・・何者だ？ 事と次第によつてはー」

「ただの主婦だよ。ちよつとばかし妖怪ハンターや悪魔祓い、傭兵の真似事をしていた時期ならあるがね」

頭をポリポリかきながら墮天使さんたちの幹部さんと相對している「ただの主婦」。

・・・新しい辞書が必要だなあゝ。

「とは言え、だ。察するに君は、横にいる御老公の護衛の任を命じられてきているのだろう？ だとしたら今の対応はどうかと思えるのだがね」

「・・・どういう意味だ。私の対応に問題があつたともいいたいのか？」

「咄嗟のことで認識が無意識に追いついていない様だが・・・」

困ったみたいな表情で、母は言い辛そうにプロの目から見た事実を指摘し、相手を絶

句させてしまいました。

「その位置だと御老公を守りながらも、少年の隣に立つてる黒髪のお嬢さんまでを守るため動きやすい位置に立ってしまっているぞ？ 護衛対象を守り抜くことこそ最優先で考えるべきVIPの護衛役としては些か家族愛が強く出過ぎているのではないかな親父さん」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

言われた当人、墮天使勢力から派遣されてきた護衛役と思しき男性と、黒髪ロングの（珍しいですね。いつもはポニーテールなのに）巨乳お嬢様である姫神朱乃さんが声を失い口をパクパクさせながら黙り込んでしまうと、彼女たちに代わって兵藤さんが母に向かつて問いかけられます。

「あのー・・・失礼だけど君はいつたい・・・？ 出来れば名前と住所とスリーサイズとお兄さんと良いことしなーあだだだだだだ！ 朱乃さん！ これは男の本能と言うもので！」

再起動した姫神さんにほっぺたを抓られ始めた兵藤さんの質問に、うちの母は「ああ、こりゃ失礼。自己紹介がまだだったね」と両手をポンと打ち合わせてウツカリしていたアピールをし、その後でふんわりと微笑みながら主婦らしい仕草で一礼して。

「はじめまして。私は異住フェリシア。セレニアの母で、こういう異常事態が起きたと

きの専門家だ。以後、お見知りおきを？」

「……は？」

突然の自己紹介に面食らう皆さん。

当然の反応でしょうね。「ハイスクールD×D」の世界で、単なる一般人が異常事態の専門家なんて……

『は、は、母親————っ?! 妹とかじゃなくて?!』

——そっちかよ。あと、姉でも従兄弟でもなく妹かよ。母親の娘だぞ隣にいるの。仕舞いにや泣いてやるから覚悟しておけよ。

「さて、なにやら込み入った事情があるみたいだし、話したくないなら話さなくても構わないんだが……私だったら君たちの間にある勘違いだけは解消できる。

解決できるか否か、元のさやに収まるかどうかは君たち次第に掛かっているから余り意味はないかも知れないけど、話すだけ話して見ちゃくれないかい？ 私は読心の類は苦手だし、なにより人と話すのが大好きな性質なんでね。たまには娘以外の若い子たちとも話してみたい。

それになにより——」

そこまで自信満々、不敵な態度を崩さなかった母ですが、ここに来て困惑した風に弱り切った態度で言い訳がましく致命的な事情について告白してしまいました。

「ー状況が分からない。いったい君たちは誰で、何の種族でどこの勢力に属している
何様殿たちなのかな？ 割と本気で何も知らないまま介入してしまつて後悔しかけて
いるのだが・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

気まずい空気が満ち満ちて、黙りこくる原作キャラ&オリジナルキャラ二人。

今更ながらの事情説明。

うちの母は原作について何一つ知ってはおりません。(キツパリ)

気まずくなった空気を払拭するためと言う名目で場を濁し、兵藤さんちと姫島さんち
とにバラケたはずの人数なのですが、どう言うわけなのか今の私と母さんがいるのは姫
島さんちのルート。

おそらくは姫島さんの背後には兵藤さんがいるのに、バラキエルさんの側には誰もい
ない、孤立無援な状態は可哀想だからとかなんとか言つてオーデインさんが口先三寸で

騙くらかしたに相違ありません。北欧の主神は口がうまいことで知られる神様なのですよ。

「朱乃、お前と話し合いをしたいのだ」

「気安く名前を呼ばないで」

「赤龍帝と逢い引きをしていたとはどういうことだ？」

「私の勝手でしょ。なぜ、あなたにそれをとやかく言われるのかしら」

「私は父として・・・」

「だったら！ どうしてあのとき来てくれなかったの!? 母様を見殺しにしたのはあなたじゃない。今の私には彼が必要なのよ。」

「だからここから消えて！ あなたなんて、私の父親なんかじゃない！」

一見すると壮大な過去が隠されてそうな会話内容。

悪魔になった一人の少女と、彼女の父親でありながら敵陣営の大幹部という厄介なポジションにある中年の男性。

本当に、見た感じだけなら絵に描いたような悲劇的な感動物語によくあるーシーンなのですが・・・。

「おい、セレニア。私は大岡越前か遠山の金さんあたりを見ている気になってきたのだが、お前の方は何の時代劇を連想していた？」

「雰囲気を台無しにしてくれる一言をどうもありがとうございます、お母様……」
残念ながらこの場にはムードクラッシュヤーがいます。2人もね。

一人の時点で雰囲気重視は絶望的なのに、2人そろえば壊滅的被害が予想されるでしょう。……頑張れよ原作。ファンである原作読者の少年たちがお前の勝利を信じて待ち続けているんだぞ。

私と母はバラキエルさんの後ろで聞き役に徹していますが、やはり母と私は似ているだけで全くの別人です。価値観も価値基準も思考法も全てが異なりすぎている。

だから当然、目の付け所と重要視するポイントが異なりますし、重要視する理由も全然違っていました。

「やれやれ……」

頭をポリポリとかきながら姿勢を崩し、母はやや呆れ顔になりながら姫島さんを見つめると、静かな声で諭すようでもなく茶飲み話でもするかのような口調で平然と話しかけました。「無理しすぎるのは体にも心にも負担だけがかかるよ?」と。

「わたくしが……無理をしているですって……?」

驚き怒る姫島さんにも母は平然と「そうだよ」と答えを返して激昂され掛かった瞬間

に、

「だって君、さつきからお父さんのこと意識しまくってるって宣言しまくりじゃないか。気づかない奴の頭がおかしいだけだと断言できる低難度なやりとりだ。読みとるのに苦労なんか入らないよ」

「・・・なにを馬鹿なー失礼しました。初対面の方に対して失言でしたわね、謝罪いたします」

「別に良いし、気にしてによ？ 失礼を言い合ったのはお互い様だし気にする資格もないからね。」

相手の信じているもの、信じたいと願っている願望、信じなくてはならないと義務化している絶対視の対象を馬鹿にされたと感じさせてしまうのは本来的には悪に属する行為だから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも、君がお父さんに向けてる悪態は、そう言った類の物ではないんだろう？」
断定口調で言つてのけるお母さん。

私が少しだけ不思議に思つて横顔を見つめてみると、私が他人のことを同行言うときとは真逆の感情が顔には浮かんでおりました。

“嫌悪”ではなく、“信頼”。

相手の人格と、相手の言っている言葉を否定している自分の言葉の正しさを信じている者特有のソレ。私が生まれ変わる前も、生まれ変わってから今までも含めてずっとずっと、手に入れてはいけないと信じ続けていたかった義務”と真逆の感情……。ソレを見つけて私は思います。

ああ……やはり親子は家族であつても他人なのだな、と。

人が自分の思い通りに動かせないもの、自分の好きには出来ないもの、何を考えているのか自分には決して分からないもの、「信じるか疑うか」の二択しかない、自分の所有物ではない意志と価値観と感情と心を持った人々のことを「他人」と言います。

家族という関係は、互いの考えてることが読めないし分からない、価値観も生き方も何もかもがまったたく違っているかもしれない他人同士が血の繋がりを発端として信頼関係を築き、維持し続けようと努力していく過程によって形式と実体が一致していった結果として生まれる人間関係。最初から最期まで他人同士が絆を深めていくことでしょうか永続し得ない細くて脆い一本の糸。

ーそう考えている私が、それでもなお最後にはすがってしまふ特別な人（母）

ああ……やはり、と。私は自分の子供っぽい思考に内心赤面しつつ顔を逸らし、母から見えないところで口をごにゅごにゅ動かすだけに留めました。

私が母を信頼しているのは母だからではなくて、お母さんと呼べるだけの信頼を築いてきてくれた相手との今までに寄る物なんだなと、そう強く実感していたのです……。

「君は先ほどお父さんのことを『あなたなんて、私の父親なんかじゃない』と言っていたね。その時の想いに嘘偽りはないかい？」

「無論です。私はこの人のことなど父親だなどと思ったことは一度もありません」

「本当に？」

「ええ。何度だって断言いたしましょう。私、姫島朱乃は母の子です。父親などと言う存在は初めからいなかったのです。こんな……母を見捨てて助けにこなかった父親なんて、父と呼ぶに値しないでしょう!？」

キツと、バラキエルさんを睨みつけながら威勢よく断言した姫神さん。

バラキエルさんは「朱乃……」と打ちひしがれた様子ですが……やはりこういう面で彼らは経験値が足りていませんね。失敗したとは言え、一応ながら家族経験のある私でさえ分かる当たり前の矛盾に気が付かないなんて。

『あんたなんて私の父親じゃない』。ドラマやアニメでよく聞く台詞の定番ではありませんが……これって本当に相手のことを何とも思っていないなかったら出てくる余地のない

言葉なんですよね。だって『好き』の対義語は無関心であって嫌いではないですから。

本当に相手のことを家族と認識していなければ、相手の名前が「オカーサン」であろうと「オトーサン」であろうと「鈴木さん、佐藤さん、赤城さん」これら全ての赤の他人たちと同じ一期一会感覚で流せる程度の存在になってなければおかしいのですから」私の発言を聞いたこの場にいる母以外の全員がギョツとした表情を浮かべ、愕然としながら一番の部外者である私に注目してきます。

私は普段とは違う理由でうつむきながらお茶をすすり、昔の愚行を思い出しながらゆっくり言葉を紡いでいきました。

「親を尊敬し、敬愛するのが子ならば逆も然り。両親を憎んで忘れようとしたり、時には殺してやりたいとすら思っただけで実行に移す人だっているでしょう。

でも、それは相手が自分を生み育ててくれた父と母がいるからこそ起きる現象です。特別な存在だと認識しているからこそ起き得る特別な感情なんですよ。

赤の他人と同じだけの共存関係であろうとも決して生まれ得ない、特別な関係性に依存していることが大前提として成立する特殊な感覚。それが家族愛であり、近親者への憎悪です。

これは不可逆のものであり、家庭という狭いコミュニティの中でしか生まれえない世の中で一番身近にある異世界の常識なんですよ」

私の長い発言を聞き終えた姫神さんは、何かを堪えるような素振りを見せながらも氣丈に問いを投げかけてきました。「どうして？」と。

「どうして・・・そう言いきれれるのです？　子が親を憎み殺すのは悪魔の社会では日常的に起き得る行為です。人の世の摂理は悪魔にとって絶対とは成り得ない物なのですよ？」

「わたしは・・・」

少し考えをまとめるために一度首を振り、改めて言うべき言葉を捜し当てます。

「私は一度だけですが冥界に赴いています。一回行っただけで何が分かると言うものでもありませんが・・・それでも『社会』が存在することだけは確認できました。それだけで十分すぎます。悪魔の社会にも今私が言った言葉は通用しますよ」

「だから、どうして！　なぜ、そう言いきれれるのですか！　子が母を見捨てた父親を恨み、憎むのは自然な感情のはずでしょう！　それならどうして・・・」

「ひとつの家族は、ひとつの家庭だけで暮らしが成り立つものではないからです」

私は断言しました。ええ、断言です。今度のばかりは自信あります。受け売りですけどね？

それでも読んで以来ずっと忘れなかつた、忘れられなかつた一文ですから信じる覚悟が無い訳ないでしょう？　だから私は信じて言えるんですよ、他人の言葉を考え方を

『人から教えてもらって自分が信じることにした、自分自身の信じている考え方』を。

「家庭の周りには、衣食住をまかなってくれる社会があり、生計を立てるために両親たちが出て行く社会があります。そして、その中で初めてひとつの家庭が子供生み育て、育んでいくことが可能となるのです。」

子供を育てるために大人が働くと言うのは違います。家庭のために働くというのも、働くために家庭があるとと言う理解の仕方も間違っています。

何故ならそれらは、家族という個人間の範囲でしか問題を認識してない考え方だからです。世の中がひとつの家庭だけで暮らしが成り立つものではない以上、自明のことだと私なら考えますが？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ふう、と一息付いてから茶をすすり、残り少なくなってきたソレを隣に座る母が注ぎ尚してくれたことに目礼した後、私は続きを語っていきます。

「生物が生き続けるためには、子がなくてはなりません。その子を産むためには、生物には成長していくことが絶対条件です。子供に子供は産めても養えませんから。」

生んだ直後に死なせてしまうのと、苦しまないよう生む際に死なせてあげるのとの違いがあるのは生き残った親の側だけで、死体となった赤ん坊にとつては大差ないですしね。子のことを考えるのであれば生むことよりも、生んだ後について考える方が前向き

という物です」

「そして、子を育てるためには餓死しないように食べられて、凍え死なない程度に衣類が着られて、生殖の場としての巢と子育てが出来る家が最低限必要となります。それを拒否することは生物として生まれた己を自ら否定し、殺すと言うこと。

自分が生きている限り、ずっと必要不可欠となる社会を拒否するからにはせめて、人つ子一人いない無人の広野で木を切り造った家に住み、自給自足だけで生活の全てを賄ってからにすべきでしょうね。相手に守ってもらえてる立場の子供が親に向かって何を喚いても見苦しいだけ。予定調和による飼いだの反乱ですよ、糞くだらない。

・・・とは言え、こういった歪んだ思考と間違った考え方に至るのも人が『知恵』を持った故なのでしょうけど・・・」

「人は生きていく上で必要な知恵を身につけた時点で間違い始めます。些末な現象を理解するために大局と個の関わり合いを無視して、この問題を正当化したり糾弾したりすることを恥じることなく行うようになってしまうのです。

ですから全体として社会の行為を俯瞰して見たときには支離滅裂な物事の累積したものとしか映らなくなる。それが行われているときには自分自身が支離滅裂の一部だったことを都合よく忘却の彼方に封じ込めてしまつてね。・・・は。まったく酷いパレスクだ」

かつての自分自身を——親を親と認識しながら『親という名の同居人』として家族を見ていた自分自身を、お金がないときだけ親にたかり『小うるさいこと言いながら金を吐き出すプペイドマシーン』としか思っていなかった自分自身を。

親と他人の違いを自分の生活基準だけでしか計ってこなかった自分自身の反吐がでる過去を思い出しながら、私は過去から現代へと心を帰還させ一息つきます。

前世での糞くだらない人生と価値観と思考法をしていた男時代の自分に唾を吐きかけ、話を締めくくって終わりとししました。バトンタッチするために。

「個の都合だけで社会を見ている人の価値観で見た場合、貴女の発言は理解し受容できるものでした。・・・ですが・・・貴女はそういうタイプではないでしょう？」

「.....!？」

「貴女の性質は母性です。アルジエントさんとは少し違った顕し方をしてますけどね。おそらく貴女が先ほど言っていた、貴女のお母さんを強く意識したものであると推測されます。これは親に捨てられ、神に継るしかなかったアルジエントさんには手に入れる手段のない物です。」

彼女にとって親との関係は神に与えられた試練のひとつであり、ひとつでしかない。

互いにそれを選んでしまった以上、親と子の特別な感情は二度と生まれることが出来

なくなつてしまつた。だから貴女の持つ母性は、グレモリー一派の中で貴女だけしか持ち得ない貴重な才能なんです。つまらない見栄や強がりなんかで無駄にしてはいけませんよ」

「わたし・・・わたくしは・・・」

「貴女はお父さんと一度、感情をむき出しにして向き合つた方がいい。面子や対外的なイメージなど気にすることなく全力でね。」

十年近くも会うことなく積み重ねてきた複雑な想いは、言葉だけでは決しては分かつてもらえない。言葉で分かるのは言葉で伝わつた範囲までです。身体で味わつた痛みは、心の痛みを共有しただけで理解できるほど浅いものではないでしょう？

ならば殴りかかつてでも本気でぶつかつて行きなさい。お父さんに「お前なんか大つ嫌いだ！」と盛大に傷つけるつもりでぶつかつていかなければ、相手の人も立場を気にして貴女に本音を語ってくれることは決してないと私は推測させていただきますよ？」

「わたし・・・わたし・・・は・・・」

まだ決心が付かない様子の姫神さん。予想通りです。この程度の言葉で揺り動かされてくれるなら、グレモリーさんも他の方々も多少は融通の利く、意志の弱い方々になつてたでしょうしねえ。

ーと言うわけでお母さん、ハイタッチ。

最終兵器お母さんの出撃だー。行け行けがんばれ、もつとやれー。私に被害が及ばない範囲で最大限被害を増大させーあだつ！

「調子に乗るな」

「………すいません」

軽く抓られたお尻を押さえて涙目の私を放っておいて、いよいよ真打ちのご登場です。

「……仮にも一児の親だから親の側にたつて言わせていただくが、セレニアの意見は子供の側に立ちすぎていて極論すぎる嫌いがある。あのままの採用はお勧めできない。

愛する我が子に傷つけるつもりで放たれた言葉を聞かされて嫌な想いを抱かない聖人君子ぶりを親に求めるのは、さすがに酷と言うものだからな。もう少し人との関係はふんわりしたものであると考えた方が要らぬ蟠りが入る隙間がなくていいだろうさ」

ホツとした様子で息を吐くみなさん。……そんなに私の意見って過激なんですかね？ あんまり自覚ないんですけども……。

「だが、最後に出てきた感情をむき出しにしてぶつけ合うって言うのは悪くない考えだと思う。

いや、正確には『今まで抱え込んできた相手の知らない自分自身を』かな？

事情はよく分からんが、十年近く会ってこなかったのだろう？　だとしたら、互いに相手の知らない事情が増える一方だったはずだ。それを話せるだけでも話しておいた方がいいと私は思うけど？」

「相手の知らない事情……ですと？」

おお、初めてバラキエルさんから発言しました。余程に意外な一言だったんでしょねえ。それだけ姫島さんの事を信じていたと解釈することも出来ませんが……些か買いかぶりすぎでしょう、家族と子供と言う名の関係性をね。

「そうですよ。親という生き物は、どうしても我が子に対して評価基準が甘くなるものなんです。『今はわからずともよい、いつか必ずわかってくれるはずだ。何故なら俺の血を引く自慢の娘なのだから』みたいな感じでね。

これは一見すると信頼ですが、相手を自分とは異なる人格と価値観を持った、一人の自我持つ人間であるとは考えないで『自分の子供』と言う他の人たちとは異なる次元の高等生物であると誤認しているとも言えるのです」

「わ、私はそんなつもりはない！　私はただ親として、朱乃の父親として娘のことを！　「安心してください、解っていますから。ただ、子を信じる際に「信じたい」と言う感情が前提にあるのが親であり、それが何らかの事情で行き過ぎざるを得なくなつた際には

盲信の域に入ってしまう事がままあると言いたかっただけで、怒らなくても大丈夫です。私たち母親の間でも、よくそう言った話題は井戸端会議にできるものですから」

いや、でねえから。そんなイカレた話題を話し合う井戸端会議は存在しないから。むしろ存在してたら出たくねえー。

「そ、そうなのですか・・・？ それは知らぬ事とはいえご無礼を。なにぶん妻に先立たれる前から仕事で忙しく、家庭のために割ける時間が少なくなっていたものですか・・・」

そしてアツサリ騙されちやう堕天使の大幹部さん。・・・本当にこれでテロ組織相手に勝つ気あると言えんのかね？ 不安です。

「いえいえ、お氣になさらずに。・・・それにしても、そんなにお仕事がお忙しかったのですか？」

「はい・・・。実はあのころから数が減りすぎたことを懸念して抗争を控えるよう、三種族の中でも規制が強まり始めていたのですが、それが却って逆徒どもを刺激する結果となってしまう、これ以上の損耗を控えるためには配下の者を遣わすよりも、強者である私自身が出張ることが必要とされていたのです。

ーおかげで夜勤はもちろんの事、休日返上、早朝出勤、夜間出勤、特別手当の額だけは増えていく一方なのに肝心の使う時間が得られない。鬱憤がたまっていく中では

妻と子供と過ごせる一時だけが私にとって憩いの場であり、オアシスとなつていったのです。到底、仕事のために減らすなどは考えられません。私の方が死んでしまいませんか」

墮天使側の知られざる実情が、今明かされている！

・・・なのは何故、後半からはくたびれた中年サラリーマンの愚痴みたいな内容に？
姫神さんが恥ずかしさのためかプルプル震えだしてるんですけども・・・。

それにしてもお母さん・・・容赦ねえー。近所の奥様方に大人気の聞き上手スキル使いまくりじゃないですか。バラキエルさん、完全に姫島さんが側にいること忘れ果てて積もり積もつてた不満と不安を愚痴の形で吐露しまくつてるじゃないですか。

これってもしかかしくなくても物語世界では、最強のチートスキルじゃね？ すっごい地味な能力ですけど威力というか効果がパナイっす。

「ーと、そのような事情で私が戻れなくなつてる内に愛する妻は・・・」

長い過去話を語り終えたバラキエルさんが右手の袖で涙を拭くのを眺めてから母さんは、「なるほど・・・あなたも大変だったのですね。ご心労はお察ししますわ」などと、相手が話しやすいように大和撫子風に変えた（バラキエルさんの奥様がそう言うタイプだったそうなので）口調と態度で応じてあげた、その直後。

にんまりと悪戯っ子のような笑顔を浮かべて兵藤さんの前に座っている姫島さんの

顔を一瞥しながら挑発口調で言つてのけやがりましたね、悪びれることなく堂々と。

「だ、そうだが。今の話聞いた娘さんの意見も聞いてみたいんだ。話してもらつて構わないかな？ 朱乃ちゃん」

そこでようやく騙されていたことに気づいたバラキエルさんが「はっ!？」と叫び声をあげます。・・・遅すぎるでしょ。戦場でそれだと死んでたんじやないですかね？

強者じゃなければ生き残れそうにない間抜けっぷり・・・さすがに強者は違うなあ。

「騙したのですか奥方！ 私は貴女が他言などしない人だと信じて懺悔していたというのに・・・裏切る気ですか!? 私の信頼を裏切ると言うのですか奥方ああっ!!」

「裏切るなどと、人聞きの悪い・・・。私はちゃんとあなたたち親子による姫島さんちの事情説明簡易版が終わつてから介入させていただきまし、その間に誰一人として席を立ててはいなかったでしょう?」

ですから他言はしてません。今のお話を知っているのは今この場にいる我々だけです。内輪話ですよ。外様に伝える他言などは決していたしません。お約束させていただき
ます」

「う、うむうう・・・。確かに筋は通っていますね。私が浅はかでした。お許しください
奥方」

早っ！ 言いくるめられるの早すぎるっ！ もっと頑張つてバラキエルさん！ ど
こぞの世界で「逃げちゃだめだ！」と叫んでた引きこもりのぼっち中学生みたいに心の
壁を張ることで！

「ま、こんな感じで家族間でも相手の知らない情報は多数所有しているだからね。

『お父さんなら出来ていたはず！』『あの子なら必ず解つてくれる時がくる……！』そ
んな希望的観測に基づいた楽観論を信じるよりも、実際に自分で動いちゃった方が早い
し確実なんだよ。

家族という概念を宛にした信頼に基づく会話じゃなくて、自分と異なる価値観と考
え方を持った一人の人間同士として向き合つて話し合った方が絶対楽だし確実性は上昇
する。間違いない」

「……………」

「なにしろ秘密にしてたこと全部言っちゃうわけですからね。聞いた上で思ったことは
全部その人の真実になるわけですから、誤解も勘違いも成立しなくなりますよ。

逆にそれでも解つてもらえなければ、誤解や勘違いが原因の蟠りではないと分かるの
で選択肢が減ります。最初よりかは楽です」

「相手が解つてくれると信じるなら、『言わなくても解つてくれる』より、『今まで見せた
ことのない本音をさらけ出しても我が家の家族関係は崩れるはずがない！』つて言う信

じ方をしたほうが気持ち的にはだいぶ楽になりますよ？」

「そ、そういうものですか・・・？ 私にはいまいち理解しがたい親子関係の形なのですが・・・」

「いや、実際問題うちの家庭なんか本音かくして話したことないですし。フオークを投げて解らせて、力付くで納得させる夫婦でしたし」

「そ、それはまた何ともうらやまし・・・いやいや、刺激的で特殊性に満ちた夫婦愛の示し方ですな。敬服・・・もとい、私の立場的には警戒せねばならない関係です」

「うちが特殊なのは事実なので構いませんが・・・朱乃ちゃんには経験者として、ひとつだけ忠告しておきたいかな」

「・・・なん・・・でしようか・・・？」

「うん、あのさー長期出張して家を空けがちな夫や父親に言いたいことや、やりたい行為は我慢せずにやつといた方が絶対に良いよ？」

次ぎにいつ言えるかマジで分からんし、悪いときには「ちよつとシリウスまで買い物に行つてきます！ なあにシリウスなんて直ぐそこです！ ぱつと行つてサツと帰つてきますからご心配なく！ お夕飯までには戻つてきますのでー！ アデュー、アディオーヌ！」とか叫んで手を振りながら出かけていつて数年ぶりに帰つてきた夫を持つ、妻からの実体験に基づく助言だ。信じてくれて構わない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「では、私は行くよ。夫に頼まれて買いに行く途中だったエロ同人誌を買い忘れてたからね。歓楽街の一角にある同人誌ショップに赴かなければ。」

「はは、夫を甘やかしたツケが今になって来ているわけだ。お恥ずかしい」

「・・・・・・・・！！」

「では、紳士淑女の皆様方よ、わたくしはこれにて御免。アデュー・アディオス！」

「あ、待つてくださいいお母さん。私も一緒に・・・失礼しますね姫島さんに兵藤さん。また後日にも（ペこり）」

てててててててててて・・・・・・・・・・。

ーしばらく行ってから、背後の神社から不思議な声が聞こえてきました。

『言われなくなつて——そうしてあげるつもりでしたわよ！』

溜まり溜まった十数年分の娘の愛、思い知りなさああああいつ!!!

オ————ホッホッホッ！ 女王様とお呼びなさいませお父様！（ピシィッ！）』

『あああああああつ朱乃！ 失つた我が妻の愛がここに復活！ やはり神は死んでいなかった！ パライゾはここにあつたぞおおおおおおおつ!!!』

『なにその歪んだ家族愛!? ひでえ樂園もあつたもんだな——つて、ぎやふん！』

『何を他人事のように見ているだけなのイツセー君!? あなたは将来、私を娶るのですから家族も同然！ いえ、今の時点で既に家族の一員です！』

家族ならば——私の愛を受け入れるのは当然の義務であり権利でもあるべきでしよー!?!』

『あああああんつ！ ——これは！ 部長にお尻を抓られながら四つん這いになってた記憶が蘇つてくるかのようだ！』

そして！ いかも見ましたがボンテージルツクの朱乃さんは最高です！ おっぱいが凄すぎる！ おっぱいの精霊が——いえ！ おっぱいの聖霊が降臨してくる姿を幻視してらううううつ!!!』

『オパーイ、包ンダラ、良イジャン。パンツウ、被ツタラ、良イジャン。』

鞭デ、ブタレテモ、良イジャン。オパーイ、揉ミマクツタラ、良イジャン』

『おおおおおっ！ 我が新たな神エロスの教えよおおおおおっ!!!!!!
我らは今日より我が神エロスの教えを生涯貫くことを誓約いたします!!!!!!
』

.....

「あのく・・・お母さん。神社の鳥居の上に変な人が浮かんでいるのが見えたりしません？

何と言うかこう・・・『テルマエ・ロマエ』みたいな服着てるけど色は青で、背中に羽つけてて、顔が美形っぽいけどギャルゲ主人公みたいになって見えない男の人の姿が・・・」

「ん？ そうなのかな？ 私には何も見えないがな」

「・・・都合の悪い神秘現象は見えなくなる方針なんですわ・・・」

存外、適当な母でした。別人であろうと所詮、私のは母は母。ご都合主義は変わらず

ですねー。

家族間の変な愛を実感した、妙な一日が終わりを告げます。
つづく

「クソツタレ悪魔たちに相応しい生と死を」

僕は彼女を愛していた。

彼女だけを愛していた。彼女以外に愛せる物を見つけることが遂に出来なかった。

愛おしくて愛しくて愛しくて。

可哀想で可哀想で可哀想で。

無様で惨めで醜くて綺麗で汚くて。

狡くて卑怯で嘘偽りしか持つてはいない。自分が嘘つきである事にすら気づけない、

愚かで哀れな傲慢きわまる聖女様。

彼女が愛しい。死にたいほどに。一緒に死んで欲しいと恋い焦がれて我慢できなく

なるほどに。その為ならば家も領地も悪魔も天使も墮天使も、この世界全てを生け贄として燃やし尽くしたところで悔いなど微塵も抱かないと確信できてしまうほどに。

だから僕は準備した。彼女と過ごす最後の時を盛大に飾るために結婚式の用意をするのに苦労なんて感じる余地は欠片もない。蛇の関心を買うためにも親を隠居させて祖国を売り渡し、なんらの意義さえ見いだせない暴挙としか言い様のない無法な私戦に、貯め込んできた家門の資産の大半を注ぎ込みました。

そこまでやって、ようやく満足できる準備を整えることができた。彼女を迎え、彼女と最後の時を過ごす為の準備が整えられたんだ。

万感の想いを込め、僕は彼女に声をかける。

人間界の街角で偶然を装いながら話しかけた僕の言葉に振り返った彼女の瞳を見たとき。浚われて奪われることを恐れる色が浮かんだのを見た瞬間、僕は今の彼女が『満たされてしまっている』ことに気づいた。気づいてしまった。

こうして僕の全てを賭けて成立させようとした初恋は、始まる前にバッドエンドの終わりを迎えた。

全てを捨てて手に入れようとした最後の時すら失ってしまった空っぽの僕は、がらんだどの神殿で一人、日本で購入してきたお猪口と言うらしい杯を傾ける。

日本の花だとか言う桜が描かれた屏風を置いた玉座の間は僕の好みだ。気に入っている。

荘厳なだけで内実のない内装からは、醜悪きわまる虚仮威しが感じられて良い。広いだけで使用人の一人すら住まわせてない広大な空間には、空虚さで満たされているところが実に良い。

傳く家臣が絶対服従の眷属しかいない玉座から見る景色は最高だ。支配すべき民のいない裸の王様気分が心行くまで味わい尽くせる。

僕が最期の時間を無為に過ごすために、これほど相応しい場所も他にはないだろう。満足感に浸りながら杯を口元へと運びかけると、空気を読まない闖入者が無粋な横やりを入れてくる。

「ディオドラ・アスタロト。リアス・グレモリーの元へは赴いたのか？」

「シャルバ・ベルゼブブ……」

僕は溜息を付きたくなる本心を押し殺しながら杯を傾け、酒気と一緒に吐息を吐き出すことで相手に抱いた侮蔑の念を覆い隠す。社交界にでた貴族であれば誰だろうと学んでいる処世術。

これを実践できないのが『真なる魔王の後継』を称している五大魔王の当主たちと、現魔王の妹君リアス・グレモリーだけしかいないのが悪魔貴族の種的衰退をもっとも明確に表してくれる証左ではないだろうか？

子供の頃から思い続けて隠し続けてきた本心の疑問を、僕はこの時にも口に出すことなく心の中へと押し戻す。年若い未熟な若造としか見なされてない僕が言っている事は周囲が思っているほど多くはなかったりするのの上に立つ者、貴族であるが故の弊害だから。

「さっき行ってきたばかりだよ。予定通りに挑発したし、赤龍帝とも挨拶を交わしてきた。……一人だけ想定外なおチビさんが混じっていたけどね……」

雪のような銀髪と、僕とソツクリな『自分への失望』を小さな身体いっぱい纏わせた人間の少女の姿と瞳を思い出しながら、僕は軽く首を振って酒気を飛ばす。

「彼女は多分、この計画そのものは妨害してこないと僕は予想させてもらう。」

もしも彼女がイレギュラーになるとしたら計画中じゃなくて、計画が終わった後の話からだ。アーシアが爆発するにせよしないにせよ、そこまでの間に彼女は計画そのものにだけは手出ししてこないだろうと僕は思っているよ」

「ふむ……」

「あと、計画にあつたとおりにグレモリー陣営へ、アーシア・アルジエントと僕のビショップをトレードする交渉を持ちかけるだけ持ちかけてはみたよ。僕が予想してたとおり断られたけどね。まあ、こうなることは予想済みだ。気にするほどの誤差にもならないだろうさ」

「ほう……貴様としては予想通りの結末かもしれないが、私としては少々意外な念を禁じ得ん。レーディングゲームで勝利し続けるのが願ひであれば、駒はより強力で数が揃えられる方が好ましい。」

やはり偽りの魔王の血族でしかない小娘ごときに、我ら真の血統と同じ考えをしると言うのが無理な話であつたか」

「くつくつく……」

声を抑えて低く笑う僕を見下ろし、シャルバ・ベルゼブブは不機嫌そうな表情を浮かべるが本心から不機嫌に感じているようにも見えない。単なる癖なのだろう。支配者として威厳ばかり気にし続けて威嚇が名門のあり方だと勘違いしている連中に、よく見られるパターンだ。

「シャルバ、それは当然のことじゃないのかな？ 彼女たち現魔王派は、僕たち旧魔王派の言い分を認めず受け入れず、冥界を別の道へ進ませようとし始めたからこそ、僕たちは彼らとの武力衝突を決意したんだろう？

彼女たちが僕らと同じ考え方を普通に出来ていたのなら、僕たちが此処でこうして話をしていいる今はなかったはずだよ。

敵対する道を選んだ勢力の持つ考え方を、こちらの価値観だけで見ようとするのは危険きわまりない謝りに繋がりがかねないと僕なんかは思っているけどね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「尤も、これはグレモリーにも言えることだ。あの時の彼女は徹底さを欠いていた。彼女は僕の無礼きわまる申し出に対して大きな声で罵声をこそ放つべきだったんだ。

それが国内最大規模の高位にある、公爵という地位身分を継いで一勢力のトップとして君臨する者が果たすべき義務と責任なのだから。

それをしなかったのは、彼女もまた自分の価値観でしか僕たちを見てないのだと言う

事実を如実に表していると取れないこともない」

敵対し、否定しあいながらも僕たち旧魔王派と彼女たち現魔王派との間には本質的には差が存在していない。違いだらけあるけどね。

双方ともに自分の価値観でしか相手を見ようとせず、『自分には理解できない』『敵』という名前の生物』としか見ていない。だから本人としては妥協しているつもりでも、挑発にしかなくていいのだと思う。

要するに近親憎悪だ。似たもの同士であるからこそ、僅かな方向性の違いが気になって気になって仕方がない。

赤の他人同士として生まれていたらーそれこそ、本当に敵同士として、生まれていたら相手の自分と異なる部分を、違う生き物だから、で済ませられたのかもしれないのね……。

「だから彼女たちが僕たちの張った罠の中に進んでノコノコやつてくる確率はそれなり以上に高いと僕は踏んでる。

彼女は彼女の価値基準から僕たち名門貴族を『自分と同じ名門としての義務を背負った悪魔貴族』として見て見たいと言う願望があるみたいだからね。この盲進を破るためには自分自身の目で僕たちの実状を目撃して、僕たちが貴族としての誇りを捨てた鬼畜外道なのだと自らの価値観を納得させなければならぬだろうから」

「ふっ……。傲慢だな、さすがは現魔王陛下下の腰巾着。

兄の七光りによつて領地を他人の手に委ねても尚、地位と権力を保持していられる特権階級に定住してきた苦勞知らずの箱入り娘か」

シャルバの嘲笑には悪意と見下しと憎悪が多分に盛り込まれていたけれど、僕はその中に微量ながらも「嫉妬」が混じっているのを感じ取った僕は思わず嗤つてしまいうになる。

冥界は人間界の日本と違つて彩り豊かな品物に溢れていない。奪い奪われ、古代の地球世界さながらの原始的な弱肉強食の掟が支配する荒野も同然のただっ広い空間と、ごく一部の特権階級のみが住むことを許されている自然と実りと豊かさで満ちあふれた、猫の額程度の広さしか持たない都市部の二つに二極化されている。

なれば利の理として、現魔王陛下の妹君であらせられる我らがグレモリー嬢の領地には都市部と自然豊かな森しか存在していなくなると言う訳なのだが。

残念ながら僕たち名門貴族の有する広大な領地には、実りも何も期待できない茫漠たる大平原がいくつもいくつも点在している。そういった場所を有してしまうと必然的に人心は荒廃し治安は乱れ、力と恐怖の原始的理が支配する弱肉強食の社会が誕生するし、それらに住むことを悲願としたがるコカなんとか言う鴉どもが寄つて来たがる。

その結果、冥界外周部に支配地域を与えられた偉大なる我らがご先祖様から地位と権

力と無駄に広い荒れ野を引き攀がされる羽目になった僕たち名門貴族の元には、裏切り者予備軍と強者に媚びへつらうしか脳のない忠誠心の無能しか集まってこなくなるというわけだ。

僕だつて今の彼と同じように、領地の運営を家臣に預けて豊かな日本でノホホンと暮らせているグレモリーを羨む気持ちを持つてないつて訳じやあないからね。気持ちは分かるさ。言わないけども。

心に浮かんだ皮肉な気持ちに思わずひん曲がつてしまった口元を相手の視界から隠そうと、杯を近づけ一口あおり「そうだね。僕もそう思うよ」と適当な追従を口にしておく。それだけで彼らには充分すぎる対応なのだと、僕は幼い頃から知つてきてたから。

「ならば奴らは既に我らの掌の中で笛の音にあわせて踊り狂うだけの、哀れで滑稽な壊れかけの操り人形と化しているわけだな。実に結構。身の程を弁えるとはこう言うことを指して使うべきなのだからな。くつくつく……」

「――ほらね？ 踊つてくれた。名門つて奴らはどうしてこうも格下だと見下してる連中が遜つてみせるだけで満足し、矛を収めてくれるんだか。『卑しい身分の母親の』腹の中から引き吊り出されて生まれた僕には理解に苦しむ傲慢さだね。」

「――いや、だからこそその名門か……」

僕は思い直して相手を見つめ直すと、改めてなにか言おうかと口を開きかけたけど、今度も相手に先を越されてしまう。

こちらの事情に頓着しない所なんかはグレモリーと共通する居丈高で傲慢な、生まれながらに数々の特権を享受していい立場にあつた者特有の鈍感さが見え透いて反吐が出そうだけど、こんなものには慣れっこだ。屁でもない。

もとより彼らも彼女たちも初めて出会つた瞬間から“こんな連中”だつたのだから。

「・・・それで？ 奴らは間違ひなく貴様とのレーディングゲームに応じて、この神殿まで赴くのだろうな？」

「それは相手と相談しながら決めてくれ。僕は罨を張つた側であつて、こちらから相手の意志決定に介入する権利を放棄せざるを得ない側に立つ者でもある。

挑発ぐらいならいくらでも言いに行くけど、こちらから相手へ出陣してくるよう促すのは不可能なんだから」

僕の返しがお気に召さなかつたらしいシャルバ・ベルゼブブの唇までもがひん曲がつたけど、これは単なる癖でしかないことを僕は知っている。

だから気にせず僕は続きを口にする。たぶん、相手は怒つて怒鳴りつけてくるであろうと分かり切つてる忠告を。

「別にキミたちが分かっていると思っっている訳じゃないが、基本的なところをお温習いしておこうよ。」

僕たちは相手をおびき寄せて罠の中へと引き吊り込んで、この神殿とともに跡形もなく吹き飛ばせる結末を最良の結果と見なしている。

もちろん、物語じゃないんだから最良の結果なんて早々もたらされるモノじゃあない。最悪、サーゼクスとアザゼルをアスモデウスたちが討ち取るまでの間グレモリーを足止めすることで、赤龍帝ともども主戦場に赴けなくできただけで御の字と考えるべきだろう。

どちらにせよ、既にこちらのターンは終わっている。次は相手のターンだ。引くか進むか、あるいは僕たちの用意してない第三の選択肢を見つけたして選ぶかは相手の自由であり、相手の事情だ。こちらの預かり知らない事情が要因となって相手の行動が変化してしまう可能性にまでは僕にも保証しきれないねえ」

「そんな事は言われずとも分かっている！」

予想に違わず大音量による大叱責。

僕は首をすくめて見せることで恐縮したことをアピールしてから、無礼を詫げる言葉を口にし罪を謝する。相手の顔は怒り醒めやらぬと言った風情だったけど、僕の態度に上位者たる支配者としての自尊心をくすぐられたのか意外にアツサリと矛を収め、

「次はない」

ーと、一言だけで済ませてしまった。

甘い、甘すぎるよシャルバ・ベルゼブブ。その程度の恐怖で相手を支配できるなんて思っているなら、キミも立派な苦勞知らずの馬鹿息子だと言いつける。

伊達に何人もの聖女たちを貶め苦しめ辱め、服従を強制してきた訳じゃあない。人の心を力と恐怖で支配する術の心得だったら、キミより僕の方が遙かに実績も経験も上回っている。

キミたち強者は力を見せることしかしないから。拳で岩をも砕けば相手は心の底から恐怖して、自分に従うしか生き延びる道はないと思いつ込んでしまうから。だからキミたちは、いつまで経っても半端なままなんだよシャルバ・ベルゼブブ。

生まれながらにして強いから、弱い立場で生まれたものの気持ちに分からない。分からないから勘違いして理解した気になって、取るに足らない小物相手に後れをとる羽目に陥るのさ。

僕ならもっと上手くやる。力と恐怖で人々を支配するなら幾らだって遣りようはある。僕にその気さえあれば冥界を恐怖で統一し、アスタロト政権を樹立するぐらいでないなら然程難しくはなかったのだから。

——尤も、実際には僕にそれをやる気はなくて、実行してもこなかった以上は子供の妄想の域を越える程の代物じゃあ無いだけだ。

実現性と可能性は別じゃない。僕が出来ると信じてることと、実際にやってみて成功するかしないかはまったく別質の問題だ。こちらが遣ろうとしている事を、相手が大人しくされてやる義理などどこにもない。支配と服従の理にも同じ事が言えるだろう。

一方が相手を支配したいと望んでいても、相手が支配されたい服従したいと望んでるのは非常に希なケースであることを何人も女たちを墮とす過程で見てきたことで僕は知っている。

あらゆる手練手管でもって相手を籠絡し、傷つけ、辱め、プライドをズタズタに引き裂いてから絶望の淵にたたき込み、もう死んでしまえば死なせてくださいと思わせても尚続く地獄の日々。

そうした地獄に落とされてこそ、差し伸べられた救いの手に価値が生まれる。それがどれほど薄汚くて穢らわしい、それまでの自分だったら吐き気がするほど気持ち悪い手であろうとも「今よりはマシ」な状況まで引き上げてくれる手を拒む奴は非常に少ない。

心が壊れるんじゃないで、それまで自分が取るに足らない価値がないと心の奥底では見下していた対象と同じ立場に立たされたときに気づかされるからだ。

自分の醜さと、恵まれていた環境に。

上に立っていられたからこそ、自分は弱者にたいして救いの手を伸ばし、哀れみと救済の希望が『相手から見れば見下しと嘲笑でしかなかった事実』にようやく気づいて自分自身に絶望する。それまでの自分を否定するためにも僕の元に自ら赴き、自分自身を貶めることに精を出す。

聖女である自分が尊い者だ、綺麗な存在だ、穢れや淀みなんて一片たりとも纏ってはいはいけないんだと自らを戒め、節制に励み続けてきた者たちほど内側からの濁りには弱い。外圧ばかりを気にしすぎるあまり、内側にある自分自身の醜さから目を背けすぎたからだ。

そんな生き物なら簡単に支配することが出来る。人も悪魔も天使も墮天使も所詮は意志を持つ生物に過ぎない以上は、光と闇の双方に至れる素質を生まれ持って来ている。

だからこそ、天使は墮天使へと堕ちられるのだ。

だからこそ、人は転生悪魔へ生まれ変われるのだ。

いずれは天使側も人間たちを、自分たちと同じ天使の位階にまで引き上げるようになるのかも知れないね。〃生き延びるために〃さ。

「よいか、ディオドラ・アスタロト。これは気持ちの問題なのだ。意志無きところに力は

生じぬ。力ある者こそ強者であり、支配者なのだ。

故にこそ、真なる魔王の血統である私には、覇業を成し遂さんがための力と意志が生まれながらに備わっていたのだからな」

「生まれ持ってた強い力と、強い意志ね……」

シャルバ、それつてもしかしなくてもさ。

——単に生まれ持ってただけで自分が手に入れるためには何もしてない、会ったこともなく名前も知らない誰かから与えられてた『機能』って言わないか？

僕は心に浮かんだ疑問にいつも通り蓋をして、気持ちよく演説しているシャルバの話に耳を傾ける「フリ」をする。

「そうだ！ それこそが私こそ真なる魔王の後継に相応しい証ではないか！ 魔王の地位にふさわしいのはサーゼクスではない！ この私なのだよ！ しからば——」

シャルバの演説が続いている。

真なる魔王の後継っていう地位は、そんなに羨ましいものなんだろうか？

僕には分からない。

伝説によると太古の昔から僕たち悪魔と堕天使たちは冥界の覇権を争いあって、途中からは天使も介入し、三すくみによる殺し合いを続けてきていたらしい。

最古の魔王が『支配する者』だったとしたらだけど、その支配対象は当然ながら僕た

ち魔王以外の悪魔たちという事になるだろう。

支配して従わせる民あつての支配者だ。無人の荒野に君臨して王を名乗ったところで跪いて恐れ慄く弱者がいらないんじゃないか、強者も空しい限りだろうからね。

当時の魔王だつて墮天使を相手に戦争してでも冥界の支配権を手にしたかったのは、冥界を自分自身が支配する悪魔たちで独占したかったからだと思つてゐる。

つまりは自分の支配している国の拡充だ。支配領域の隣に対等の外部勢力がいるのは煩わしいから取り除きたかつただけではないのか？ 国を繁栄させるため、自らの支配権を確固とした物にするために、わざわざ種の存亡を賭けてまで敵種族と殲滅戦を繰り返す必要性はあつたのだろうか？

しかも、天使に至つては途中から横やりを入れてきただけの第三勢力に過ぎない。天界がどういふ場所かは知らないけれど、少なくとも僕たちのご先祖様たちが住みたがつてたような場所じゃないことくらいは予想できる。だつて悪魔だもん、僕たち。天使が尊いとする清い場所でなんか生きられるとは到底思えない。

天使を相手にどちらかが滅びるまで戦い続けたところで旨味はない、むしろ損しかないだろう。

墮天使だつて同じだ。人間を操り悪魔と戦わせたところで、自分たちが何か得しているとは思えない。愉悦のための殺し合いで自分たちが絶滅したんじゃない。

たぶん、僕たちの先祖はこの事を知っていたんだと思う。戦いの始まった理由と発端と『目的』とを忘却していなかったからこそ数千年間もの長きにわたり、延々と小競り合いを行い続けているだけだったのではないか？

それだけ追いつめられながら、それでも名目上にしか存在しない戦争を辞めなかった理由はなんなのだろうか？

——簡単だ。ただ単に辞めることを許してもらえなくなっただけだ。

悪魔の支配者である魔王の決定でさえ止めることが不可能なほどに、互いへの憎しみが高まり続けていたからだ。長すぎる戦争で生み出された憎悪と憎しみの総量は、負の感情を糧とできる悪魔をしてさえ御しかねるほど強大で凶暴で怨嗟の声に満ち満ちたおぞましい代物だったという事だろう。

そして今度は、長く続きすぎた小競り合いが互いの間に優越感と嘲りと無理解と見下しを生じさせ、強敵への恐怖と畏怖の念を忘却の縁へと追放してしまった。

今の彼らカオス・ブリゲードは敵を知らないまま、知ったような気になって戦争に勝てると思ひ込んでいる。相手あつての戦争を自分だけを見つめながら行おうとしている。

愚考の極地だ、馬鹿馬鹿しい。相手を屈服させ、自分たちのために利用しようとするなら分かるけど、根絶を目的とした殲滅戦に自らの支配地域を焦土に変えてまで望

む支配者なんて無能にも程がありすぎるだろう。

でも、それを遂行するよう求められてきたのが魔王の地位だ。憎しみあう三種族の有力者たちから突き上げを食らい、開戦か停戦延長かを終生問われ続けなければならなかったのが今までの魔王と言う名の役職だ。手に入れた榮譽に酔ってる暇もないとは哀れなことだ。

サーゼクスはある意味で本道へと立ち返った久しぶりの魔王と言えるのかもしれない。種を存続させるためにも他の勢力と手を組んだんだからね。王としては正しい判断だったと言えるだろう。彼が『悪魔の王でさえなかつたら』。

僕たちは悪魔だ。欲望を肯定し、善悪の別なく強い意志を力に返ることができる生き物だ。そんな僕たち悪魔が他の二つの勢力——天使と墮天使——と混じり合って生きていった先に『果たして悪魔は生き延びられているのだろうか？』

天界でも人間界でもなく、冥界を支配する対象と選んだ以上は、僕たち悪魔は闇の属する勢力だ。光の勢力には交われない。仮に天使と悪魔が交わったとしたら、そこから生まれてくるのはエノク書にある竜のような姿をした墮天使なのではないだろうか？

サーゼクスは悪魔の血を絶やさぬ為、悪魔を別の生き物へと変えてしまおうとしているのかもしれない。そのことに本能的な恐怖感を刺激された古き血筋をもつ魔王た

ちが反発して今回の戦争を招いたのかもしれない。

そういう視点で考えると、これから行われる三種族合同の大戦には別の側面が見えてくる。

次にくる時代に自分たちの種を引き継がせる為の生存競争。

その為の手段としてどれを選ぶかで揉めている、思想戦争。

今のまま生きて、悪魔としての滅びを迎えようとしている旧魔王派勢力。

別の生き物に生まれ変わってでも、新しい環境に適合しようとしている現魔王勢力。

旧来のまま、ただ遊び半分に殺し合いたいだけで危機感に乏しい墮天使勢力。

遙か昔に滅んでしまった主の教えにいつまでもしがみついて離れられない、ファザコン天使勢力。

「……やれやれ、これは困ったな。どれが勝っても僕たち悪魔の未来は、お先真っ暗だ。こんな事ならもっと早くに本性を晒して父上に処刑されての方が少しはマシだったかな？」

「ーそうしてさえいれば最低でも、アーシアのあんな目をした顔は見なくて済んでたかもしれない……。」

あんな、なにかも満たされて奪われる恐怖を知った彼女は見たくなかったし、彼女にも正常な人の心が残っているなんて事実は知りたくなかった。目を逸らしていた

かった。夢だけ見て生きて、夢を見たまま夢の中で終わりを迎えたかった。

でも、全ては夢だ。もうどこにも残ってなんかいない。

朝日が昇ろうとしている。夜が明けるんだ。子供が子供として夢を見ていられる時間の終わりは目前まで迫ってきている。もう時間はほとんど残されてはいない……。

「……故に！　今こそ我ら正当なる魔王の後継が……！！　……どうしたのだディオドラ・アスタロト。突然に立ち上がり、どこへと参る？」

気持ちよく演説していたところを遮られたシャルバが不機嫌そうな声を上げるけど、僕はそれについての謝罪はしなかった。

もう僕には、こんな奴らに拘らつていられる時間的余裕は残されていない。赤龍帝たちとともに吹き飛ばされて終わるか、あるいは彼らが生き延びてシャルバが降臨したときに自分の立てた作戦の失敗を糊塗するために見せしめとして殺されるかのどちらかしか未来の選択肢は残っていない。

ゲームでグレモリーに敗け、実力不足を痛感していた僕の肩をたたいて見せたシャルバの笑顔と瞳に浮かぶ感情を見た瞬間に僕は自分のたどる未来が予想できていた。

差し伸べられた手を取れば破滅しかないと、何度も何度も他人に対して行ってきた僕には先刻承知の上だった。

そうして僕は彼らの手を取り、破滅の道を歩みだした。自らの最期を自業自得の破滅

で終わらせるために。

「――別に。ただ戦場の下見と位置取りの確認をしてくるだけさ。確認するけど、手駒として与えられてる上級・中級悪魔たちの出現場所は僕の方で決めさせてもらっていいんだつたよね？」

「あ、ああ。無論だとも、我が真なる魔王の後継たる同胞よ。ここは貴様の領地だ。奴らを待ち受け奇襲させるのに最適なポイントを、貴様なれば指定できるのであろう？ されば――」

「では、言ってくる。作戦の成功率を高めるためにも万全を期しておきたいんだよ。僕だってむざむざ敗れて『無駄死にするつもりはない』からね」

背後で何か言おうとしているシャルバを置いて廊下に出る。無意味に広いだけで価値のない、悪魔らしい浪費の象徴とも呼ぶべき回廊を歩みながら僕が考えてたのは別のこと。

もう、僕には何もない。何一つとして残っていない。

いや、そもそも何かを手にした事なんて無い。当然だ。何かを掴もうと初めて努力したことさえ初めてなんだから。

生まれ持つて恵まれてた機能で楽して生きてきた僕には、付け焼き刃の努力で手に出

来る物なんて無いし、有つてもいけない。そんな物は直ぐに価値を感じなくなつて壊して捨てるだけだと言ふことを、僕は何度も何度も実践して知つてゐるのだから。

ならば終わろう。無様に。見苦しく。味方の死体の山を築き上げて、誰も彼もから憎しみではなく軽蔑と嘲笑を得られるような死に様で。

「滅びの美学か・・・糞食らえだね。見苦しく生きただけの人生だったら、最期まで見苦しさに満ちた生き様を貫いてこそだろうに」

死を飾る趣味はない。死だけ飾つたところで何の意味もない。そんな卑怯卑劣な人でなしの風上にも置けないゴミ野郎にまで成り下がつてやつた覚えは微塵もないんだよ。

人でなしには人でなしなりの矜持と誇りがある。他人に理解を求める類のものではないし、理解しなきゃいけないものでもない。と言つて、『理解されないからこそ価値がある』なんて自己陶醉に浸るのは死んだってゴメンだけだね。

僕たち人でなしが“それ”を守り貫き通すのは、単に破つてしまった自分が自分でなくなることを知つていて恐れているからに過ぎない。

美辞麗句で自己正当化して卑怯な手段に酔いしれてる自分なんて、想像しただけで怖気が走る。僕たちは世間のルールから外れた人でなしだからこそ、自らに課したルール

と節度と理だけは破つちやいけないんだ。

それを犯してしまった奴は、人でなしですらなくなってしまうから。

「その程度のことを弁えられないから、キミたち強者は弱いんだよベルゼブブ。心がね。卑怯な手段で得た勝利を『使い捨ての小細工に過ぎない』と笑い飛ばせない君では赤龍帝には勝てないと思うけど、まあ頑張ってみてくれ。あの世から応援していてやるからさ。死んだ後なら誰を応援したところで僕には関係ないんだし」

背後の扉に向かって嘲笑混じりに我慢していた本音の一部を晒け出してから、僕はアーシアを浚ったときに聞かせる嘘を何にしようかと考えてみる。

どのみち今のアーシアは、僕の知るアーシアではなくなっている。傷つけたところで何の痛痒も感じはしないけど、出来るなら僕の愛したアーシアを彷彿させてくれるような目をしてくれる嘘がいい。

あの時、あの場所で、傷ついた僕を癒してくれようと近寄ってきてくれた時に君が浮かべた瞳の色。今思い出してもゾクゾクする。

それは人の歴史の中で何千何回も繰り返されてきたであろう、平凡きわまる救済の言葉。皆から聖女と称えられる神に愛された少女が、苦しむ人々に対して尤も多く放つで

あろう救いの祝詞。

「大丈夫ですか？　今助けてあげますからね？」

ああ、あの時の君の言葉と瞳に浮かぶ色は本当に、本当に最高だった。最高に――無様で醜くて穢くて綺麗で美しかった。

『助けてあげます』……この言葉を『助けてください』と聞き間違えたのは君の時だけだアーシア・アルジエント。僕が会って来たあ聖女の中で君だけは、人の抱える事情を解つてあげようとはしていなかった」

ただ自分が救われたくて人を救っていた。誰かを救済をすることで自分自身が誰かに救済して欲しかった。救つて欲しいから救いまくつた。誰でもいいから自分を拾い上げて欲しいと手を伸ばし続けてた。

それこそ悪魔である僕の手を取り『救つてもらえるかもしれない』と言う極小以下の0に等しい可能性に縋りついてまで祈り願ひ信じようとしていた足掻き。

それこそ君が、神の奴隷でしかない聖女たちとは違う、利己的な理由から人を救いたいと欲する『人間の聖女』足り得ていた証だったのに……。

「聖女様さえ堕落させてしまう悪魔は、やつぱり人を惑わすだけの生き物だね。反吐が出るよ。汚くて綺麗なもので、周囲と同じ色に染めてしまう必要性も無かるうに」

そう呟いて、僕というこの世界の異物は終わりへと続く道を歩んでいく。

「不死ではないから人の国家は滅ぶという。でも、悪魔だって不老不死というわけじゃない。老いもするし死にもする。人より長く生きれるだけの生物が作った国なのだから、冥界が人の国より長く永くのは必然だ」

でもー

「永続はしない。永遠はない。オーフィスだって、きつといつかは死が訪れる。今まで死ななかつただけで不死だなんて保証になるものか。必ず滅ぶ。滅びの時は誰しも必ず訪れる」

だからーだからこそ

「滅びるときには、それまでの生に相応しい死に様と滅亡を。」

数多の同族たちの死体の上に立てられた冥界に相応しい滅びを。

生には生を。死には死を。滅びをもたらしてきたものに、絶対的に不可避な滅亡を。

おお、我らが偉大なるクソツタレな悪魔の神よ。クソツタレな悪魔社会に災いを授けたまえ。

ドウ・アズ・ファツキンゴッド・デイスボーゼス」

つづく

3 2話「ディオドラとのレーディングゲーム会場戦闘編・ギャグバージョン」

「……着いたのか？」

到着したディオドラとのレーディングゲーム会場は、だだっ広くて人っ子一人いない石造りのぶつとい柱が並んでいる場所だった。後方にはギリシャ神殿みたいなのが見える。でっけー！

「……おかしいわね」

「え？」

部長が言ったので俺は振り返ると、他のメンバーも怪訝そうにしていた。

唯一いつもと変わらない無表情のままなのはセレニアだが、コイツの場合はいつも通りだしなあ。

セレニアの愉快的仲間たちも思い思いの姿勢と表情でくつろいでるから違いが分からん。てゆーか、コイツ等って慌てることとかあるんかね？

「……!! 空に魔法陣が……アスタロトの紋様じゃない!」

木場が空を見上げて異常を察知し、朱乃さんも手の平に雷を走らせる。

「・・・魔法陣すべてに共通性はありせんわ。ただー」

「全部、悪魔。しかも記憶が確かなら・・・カオス・ブリゲードの旧魔王派に傾倒した者たちの使っている魔法陣だわ」

「ーーツ!! 部長の言葉に俺は度肝を抜かず！」

「マジかよ! カオス・ブリゲードの奴らテロリストだからって、俺たち若手悪魔のレーディング・ゲームにまで乱入してくるのかよ! しかも、よりにもよって俺たちの試合だけを狙いますましたみたいにい!」

俺は、相変わらぬ運のなさに嘆きつつもブーステッド・ギアを構えた瞬間。すぐ側から聞き覚えのあるイヤな声が俺の耳元の近くでそつと囁かれた。

「ーどちらも外れだ。見当違いも良いところだよ赤龍帝。運動で身体を鍛えて脳までトカゲレベルに落ちぶれたんじゃないか? そんな考えなしの不用心だと、大切な人を何度だって浚われちゃうかもしれないよ?」

「っ!!」

ブンツ!!

シュインツ!!

俺が背後にふるった右腕はテレポートで姿を消して空中へと移動した、憎つたらしいニヤケ笑いの男に躲されて空を切る。

「てめえ！ デイオドラアアツ！」

「ぴんぼーん。それは正解。そこだけは大正解だ。スゴいじゃないか赤龍帝、能なしの考えなしな割には良くできました。誉めてあげましょう。十点」

「バカにしてんのか teme エ！」

「そうだよ？ あれ？ 言わなきやわかんなかった？ やっぱり君はトカゲ並の頭腦しかないおバカさんだね」

「!!!」

「いけないよ、赤龍帝。学生の本分は勉強なんだから、運動と戦いだけしかしてない学生生活を送られたんじやお母さんたちが泣いて悲しんでしまう。親不孝なマネは程々にしておきなよ？」

「ーなにしろ親って言うのは、会いたいときにいつでも会えるとは限らない存在なんだからさあ……」

ちっ！ なんだコイツ！ いきなり出てきて説教ぶっこくとか何様だよ！

丁度いい、コイツのせいでアーシアはひでえ目に合ってきたんだから一発ぐらい殴り飛ばす口実が出来たと思えばいい！

「食らいやがれディオドラ！ ブーステッド……」

「おっと、危ない。ほら、人間シールド」

「!?」

「こ、コイツ……いつの間にアーシアを!! しかも自分を護るための盾として使ったきやがった!」

「きつたねえぞテメエ! アーシアを離せ、このクソ野郎! 卑怯だぞ!」

「いや、なんと言うか語彙少ないね赤龍帝。君もしかしくなくても、国語の成績赤点だったろ?」

「う、うるせえ! 部長たちのおかげで、今期の補修は免れたからいいんだよ!」

「つーか、どういうこった! ゲームをするんじゃないのかよ!」

「……え。この状況を見ても、まだ理解してないの? ……うわ……」

「なんだテメエ、その可哀想な生き物を見るような目はよおーっ!」

「いや、本当にマジで勘弁してください! 心が折れそうです! 久しく感じてなかつ

た俺の真つ黒黒な過去の記憶が蘇りそうだからマジやめてー!!!

「ディオドラ! これはどう言うこと!」

「やあ、リアス・グレモリー」

「にこやかな笑顔を装って部長にも挨拶したディオドラだったが、その直後に「いや……これはダメだったかもしれない」となにやら一人で納得しながら頷いて。

「仮にも現魔王陛下の妹君を前に礼儀を失しすぎてたようだ。改めて謝罪しよう、リア

ス・グレモリー王妹殿下。今日もお尻を冷やして風邪をこじらせそうな穴あきパンティをお召しですか？」

「~~~~~!!!」 か、関係ないでしょあなたには！

これは私のアイデンティティに関わる重要な問題なんだから、放っておいて頂戴！」

部長・・・穴あきパンティでいったい何を守ってたんですか・・・？

・・・つて、それどころじゃなかった！ 宙吊りでパンツ丸出しになってるアーシアだけじゃなく、部長にまで恥かかせるなんて、なんて事しやがるんだ！

「まっ、どうもこうも見たまんまなので説明する必要も本来はないと思うんだけど、君たちの場合、おっぱいと男以外のことには頭回らないみたいだし、必要なくても説明してあげる必要あるのか。あーめんどうくさい」

『・・・・・・・・（ムカムカムカ・・・）』

「見ての通り、ご覧の通り、我がアスタロト家は現魔王陛下及び王妹リアス・グレモリー殿下に反逆させていただきました。

なので事のはじめに、魔王陛下の御代において大切な伝統であるレーディング・ゲームに泥を塗るためぶち壊させていただいた次第で御座います。ですので殿下方が参加しておられないゲームはゲームとして尊重し、礼儀正しく無視させていただいたのですが、御不興を被ってしまったようで恐悦至極に存じ奉り候。

願わくばこの血迷った逆賊を誅滅の刃で首と銅とを一刀両断し、以てカオス・ブリゲードからの奇襲攻撃をご寛恕願ひ奉りますが、如何に存じましようや？ リアス・グレモリー王妹殿下」

「最低だわ！ そしてお断りよ！ そんな要求、受け入れられるわけがないじゃないの！

ましてや、テロリストであるカオス・ブリゲードと通じた上にゲームまで穢すなんて非礼にも程があるわ！ 万死に値する！

何よりも私のかわいいアーシアを奪い去ろうとするなんて……ツ!!」

「うん、いきなり反乱軍の頭目相手に放った台詞で私情入りまくってたね。君、本当に王妹殿下？」

「う、うううううっさい！ 放つと言って言ってるでしょ！」

いや、部長。さすがに今の台詞は放っておいてくれないんじゃないのかなーと……。「では、どうあつてもアスタロト家からの謝罪はお受け取りいただけないと？」

「当たり前でしょう！ だいたい、今の口上のどこをどう見たら謝罪に見えるというの？ あなた頭おかしいんじゃないかしら？ 常識を疑うわ」

「はあ、申し訳次第も御座いませぬ。何分にも伝統あるゲーム会場の舞台に穴あき尻毛口出しパンティで踏み入れてくる女性の一族を主君に据えている国の貴族なものです

から」

「だから！ パンティのことは言わないでって言うてるでしょうがさつきから！（、口）」

「……すみません、部長。俺もこんな状況ですけど、ディオドラの言葉で記憶揺さぶられて思い出しちまって集中し切れません。男の子の体が持つ生理現象なんです。許して。」

「どうやら降伏の申し込みは拒絶される方針な様ですな。残念です。どうやら陛下の一族は、我々との戦をお望みらしい」

「ー待って頂戴！ あなたが本当に降伏の意志を持っているのであればお兄さまに私からお伝えする。だからここはアジアを返して退いて頂戴！ 今ならまだ間に合うかもしれないから！」

「お心遣い傷み入ります王妹殿下。しかし残念至極なことに、あなたにはご自身の発言に嘘偽りがないことを証明し保証する身分がない。王妹は所詮、王の妹にすぎない身上。最高権力者の腰巾着でしかない小娘の言葉じゃあ、信用の担保にはなりえませんなあ？」

「!!」

部長の顔が怒りに歪んだ！ てめえ！ディオドラ！なんて事言いやがるんだ！

「さつきから聞いてりやいい気になりやがって！ テメエは何様のつもりなんだよディオドラ！ 部長に対して偉そうな口たたく資格がテメエにはあんのか！」

「魔王ベルゼブブを輩出した冥界の名門72柱の29位。アスタロト家の嫡男で御曹司ですけど、それが何か？」

「あ、いえ、何でもありません。ごめんなさい……」

「て言うかさー、口の聞き方云々について語るんだつたら自分から見直そうよ赤龍帝。」

君はリアス・グレモリーの眷属で、彼女は君の主じやん。恋人同士だかなんだか知らないけど、次期王妹殿下の夫君候補に入りたいんだつたら公私の別くらいつけなよ、腰巾着に付きまといてる金魚のフン君」

「な、何だとコノヤロー!!! (激怒)」

怒る俺には興味がないのか、はたまた最初から弄ばれただけなのかディオドラはあつさりと俺から部長に視線を戻すと普段通りのニヤケ笑いを浮かべながら背後を降り仰ぐ。

「さて、お互い開戦前の口上は言い終えたことだし、そろそろ始めようか？ 数だけはそろえてあるから、カオス・ブリゲードに迎合した大樹に寄り添うしか脳のない木偶の坊たち相手に個人の力量頼りの君たちらしく頑張つて倒しまくってくれたまえよ。」

臆病で卑怯卑劣なボクは、さつきと撤退して応援しながら見物してあげてあげるから」

「てめえ！ どこ行くつもりだ！ あれだけ大口たたいて今更になって逃げんのか!?」

「いやいや、何を言っているんだい赤龍帝？ お姫様を浚った悪い貴族は教会の中で無理矢理花嫁と式をあげるのが定番であり、お約束でもあるだろう？」

「ーあ、お約束って言葉の意味は分かるかな？ 分からなかったら辞書貸すけど？」

「バカにすんじゃねえ！ それぐらい分かるに決まってるだろーが！」

「うん、まあ当然だよな。一般常識レベルの問題だったし。むしろ分からないわきゃないって大声だして応じる方がバカらしいしガキ臭い」

「くうううっ!!!」

「こいつ！ この前会ったときよりも百二十パーセント嫌み度がパワーアップしていやがる！ めっちゃやくちや腹立つ！マジ殴りたい！」

「んじゃ、これは宣戦布告と開戦を知らせる狼煙って事で。はっしやー(ぱちん)」

ぴゅんぴゅんぴゅんぴゅん!!

「ーちいつ！ ちっこい槍を大量に降らせてきやがった！ 目眩ましのつもりかよ！」

「いや、逃げ出す際に追撃されないための布石だよ。君たちが逃げ回ってる間にボクはドロロンと逃げるで御座る。じゃねー」

「あ、てめえ待ちやがれ！　アーシアアアアアアアアアッ!!」

俺は宙に消えていったアーシアの名を叫ぶが、返事なんて返ってきやしない。

・・・クソッ！　何がアーシアを守るだ！　また俺は！　俺は！

「確かにその通りですよ。私の時に一度、今回で二度目。普通の人間だったら一回目でアウトですし、転生悪魔でも二回は多すぎます。はつきり言いますね、イツセー君。

あなた・・・油断しすぎてるんじゃないですか？」

「傷心しているときくらい元の優しい夕麻ちゃんに戻ってくれないかな、夕麻ちゃん！」

泣くよ！　俺、いい歳して号泣しちゃうよ！　泣き叫んじゃうよ！　それぐつらいシヨックだな、初恋の女の子から可哀想な物を見る目で見つめられるのは！

「いえ、優しくするのは甘やかすのは全く別次元の対応ですから」

「もつとヒドいことを！　俺のガラスの心はボロボロなんだけども!」

「浚われてったアーシアの心はもつとボロボロのズタズタになってると思われますよ?」

「そうだった!」

俺は何をフヌケてたんだろう!　今は冷静に目の前の敵をなぎ払うのが先のはずじゃないか!　体育会系のノリで両頬を叩いて気合いを入れ直す!　ーよしっ!　準備万端!　これで俺の心はアーシアを救い出すまで折れないぜ!

「てゆーかさー、イツセー君。そんなにアーシアが大事だと思うなら、なんで戦場まで連れてきてんの？ ゲームとはいえ、魔法撃ち合うんでしょ？ 危くない？」

あの子、人に対しては回復能力あるけど耐久力めっちゃ低そうだったし・・・死体になつた後でも機能するもんなのかしらね？ ヒーリング能力って」

「同感だな。敵の最も弱い部分を最優先で叩き潰すのは、戦術の基本中の基本だ。どんな阿呆だって鳥頭だって恐らくはやれるだろう。やるかどうかは本人たちの意思次第だな。」

先ほどお前が言っていたようにテロリストがゲームに乱入してくる可能性は十分にあり得てたし、不意打ち奇襲に騙し討ちと搦め手に徹してくるカオス・ブリゲードにしてみたら勝てるかどうか分からん貴様等よりも確実に仕止められるアーシアの方をターゲットに指定するのは当然の選択でもある。

・・・お前、本当にアーシアを守る気があったんだよな？」

「なんで本気で疑ってる目で見つめられてんだよ、傷心の俺!? 君たちちよつと厳しすぎるんですけどもおっ!」

ヤバイ! 本気で泣けてきた! 涙がガチで止まらない! 死ぬ! 死んでしまう!

男泣きの涙の海で溺死しちゃうーーーーーっ
!!!!!!

「……その辺で気は済みましたか、お三方。そろそろ戦闘準備に入りたいのですが？」

「「はい。ふざけすぎちゃって、ごめんなさい。真面目にがんばりませう」」

……おふざけで女の子たちに弄ばれた俺、伝説のドラゴン赤龍帝です。

「ちよ、ちよつと待ちなさい異住セレニア！ これは悪魔貴族の間で勃発した問題なよ！ だったら私たち現魔王政権代表のグレモリー眷属が片を付けるのが筋と言うものではないかしら？」

「……は？ グレモリーさん、なに言っちゃってます貴女……」

「なぜ私までイツセーと同じで可哀想な物を見る目で見つめられなければならないのかしら？」

「……グレモリーさん、貴女疲れてるんですよ。ゆっくり休めば良くなりますから……ね？」

「その上心配されてしまったわ！ 明らかに場違いすぎる人物ナンバー1の人間の少女に……」

いらつしやいませ、部長。待ってましたよ。

負け犬の汚部屋へようこそ。

「はあー・・・あのですねえ、グレモリーさん。身内同士の汚らしい殺し合いだからこそ私たちが縁もゆかりもない無関係な外部勢力に手を汚させるべき事柄なんじゃないですか」

「うっ・・・それは・・・」

「ましてや、これは内乱です。勝つても負けても犠牲が出るだけで得する者など一人もいません。こんな無意味な戦いに王族が出張ってくる必要性皆無です。引っ込んでください」

「う・・・ううううう・・・はい、わかりました。出しゃばってしまつてごめんなさいでした・・・」

弱っ！ 部長弱い！ 弱すぎる！ いったも名門としての義務とか言ってるからなのか、政治的な正論の前では形無しすぎるだろこの人も！ いや、俺が人のこと言う資格はないんだけどね！

「それに今回の戦いは私たちにとって相性が良すぎる戦いですからね。貴女たちが出るよりかは手早く楽に済ませられると確信しておりますよ」

え・・・。それはいったいどういう意味で・・・。

「こういう意味で、です。ー斉射開始」

「《レイン・オブ・ブラッディフライデー（血の雨が降る金曜日）》」
 キュウイン、キュウイン、キュウイン・・・・。

いつか見た赤い槍が夕麻ちゃんを囲むように背後の空間から生み出されていきー
 「一斉射、撃てっ！」

ヒュンビュンビュンビュン!!!

グサグサグサグサグサグサ!!!

「ぎやああああああつ?!? い、痛い! 痛い! 痛い! 傷が・・刺された傷が焦げるように広がって行って死ぬより痛苦しいiiiiiiiiっ!!!」

「光が! 悪魔にとつて天敵である光りが雨のように降り注いできて、俺たちを突き刺しまくってくる! うぎやあああああつ!!! 光の毒に身体が侵され壊されるううううっ!!!」

「殺してください! お願いですから殺してください! ああああああ死ぬ! 死んでしまっ! 死ぬほど苦しくて痛いのに死ぬことが出来なくて痛苦しくて藻掻きくる死ぬうううっ!」

『.....』

「――悪魔にとつて限定の地獄が繰り広げられていた。

「ふむ。久しぶりに使いましたが・・・やはり転生愛天使になったことで光属性による加護そのものは数ランクの低下が見受けられますね。もともと派手さはなくとも対悪魔殺傷能力だけは秀でていた光の槍でしたのに、今では数をそろえなくては豆鉄砲も良いレベルだなんてちよつとだけショックです」

「あはは、レイナー様はまだ良い方ですよ？ 私なんか黒く染まつちやつたとはいえ、元々からオリジナルのレプリカに過ぎなかつたんで光属性はほとんど残つていませんからね。」

「せいぜい切りつけた傷は能力か何かで治癒しないと、やがて全身の細胞を侵し尽くして発狂しながら死ぬしかない程度までランクダウンしちゃつてますもん。そっちの槍の方がずつとずつとマシですよ♪ 光の武器としては♪・・・ゼノヴィアの方は？」

「伝説の聖剣は81のパーツに解体し、再構成し、全く別の名状しがたきナニカと混ぜ合わせることで思い切つて爆弾にしてしまうのが正しい使い方だと私は信じる」

「あつはつは、親友の信仰心の捨て方が想像の斜め上いきすぎてマジ怖い」

「楽しそうなのに冷や汗を浮かべながら笑うイリナ笑顔が妙に寒々しく感じてしま

う俺たち『墮天使の天敵、悪魔の一門グレモリー勢』……あれ？　もしかして今の俺たちちつてヤバくない？

「敵が一種族のみで構成されているなら、後は相性が勝敗を分けます。ポケモンみたいなものですからね。バランスよく揃えていた方が強いのは当たり前。その点で私たち雑多な帝国軍は優位性を常時維持できてますので、露払いはお任せを」

「え、ええ……お願いするわ。……いいえ、お願いしますセレニアさん」

「あつはつはー。まあ、ぶっちゃけうちの軍隊って、ごった煮でチャンポンしているだけですからねー。サムライチャンプルも真っ青ですなー、ゼノヴィアさんや」

「私は騎士だ。どうせ見るなら聖戦士ダンバインの方が絶対的に良い。」

大空を飛び交い、命と名誉をかけて鏖迫り合いを行うワルキューレのような空飛ぶ騎兵たちがミサイルランチャーでバラバラになったときなど心が躍る！

私は古くさい時代の神秘どもが近代兵器によって蹂躪される戦争行動が大好きだ！

「あつはつはー、そっかそっかー。……こいつだけでも正気に戻せないのかしらねマジで。本当に怖い、怖すぎる。誰かタステケー」

ーこうして俺たちは、頼りになる援軍を（頼りになりすぎるのが難点だが……）得られたことでアツサリとカオス・ブリゲードの仕掛けていた罫である包囲網を突破。

神殿内へと突入して行くのだった。

待ってろよ！アーシア！ 今度こそおまえを死なせたりなんかさせないからな！

「ふおっふおっふおっ。．．．．．良い尻の娘は——何処じゃ!?!」
つづく

ボツ案「セレニアが自分で戦う場合の設定話」

『戦いには二つの種類があると言う。支配と抑圧のための戦争と、自由と解放を求める闘争の二つが。これは即ち、神と魔王の戦いを表していると言えなくもない。』

神の秩序は『支配と抑圧』の側面を持つ。

魔王の反逆は『自由への欲求』の一面を持っている。

結局のところ闘争の本質は《こっちとあちらは違うから》に行き着かざるを得ない
ーそれは、いつか何処かで通ってきた場所で見聞きした会話。

記憶にないのに何となく覚えている様な気にさせられてしまう時点で『思いだそうと
している』ことの証。つまりは実体験。

『サーゼクス・ルシファーが生き残りを掛けて断行した三種族連合の設立も、結局のところはこの絶対矛盾から逸脱できていない。』

彼が種の未来に不安を覚え、焦りから強行した連合の早期形成は、カオス・ブリゲードの結成と台頭、早期開戦までもを早める結果をもたらしてしまった。

一方で滅亡までのタイムリミットは迫っており、悠長にしていられる時間がなかった

のも事実ではあったんだ。彼が成そうと成すまいと、歴史は順当通りに滅びに貧した三種族の連合と、反発して台頭してくるカオス・ブリゲードとの大戦をもたらしていただろう。

異なる二つの大きな存在同士がぶつかり合って、互いに影響しあいながら共生依存の関係を構築していく歴史の必然、転換点。

散文的に表現するなら、時代の回転。・・・転換期だよ。限界にまで達した一個の勢力が他の勢力と混じり合いながら生存していく道を模索する差異には必要不可欠となる大乱。それによって生じる滅びをもたらしかねない数の犠牲が、近代社会への礎として時代が求める生け贄なのだから遣りきれないね』

場所は、空の上。

いつか何処かで見たとような、あるいはいつか何処かで見ることになるような時系列の狂った光景であると実感として感じられる、見覚えのある景色が眼下に広がる大森林の真上のようなです。

そこで二つの存在と対峙させられているらしい、私と思しき誰かさん。

曖昧でボンヤリとしていて霧のように見通せない、存在がはつきりしない不確実なナ

ニカさん。

「我は秩序による平穩を望む神にして、力による支配を肯定する魔王でもある」
「私は秩序を憎み妬む魔王にして、人々の解放を求める自由の神でもある」

「無法に対して法による秩序を齎さんが為の戦は正義なり。

法と秩序を大義名分として行う戦は無名の師なり」

「独裁による悪政を武力によつて正すための戦は正義なり。

己が自由のために他の自由を侵す戦は無名の師なり」

「この世界を律する法の半分は《悪》。それ故に自らの正義は絶えず自らで証明し続けなければ悪へと堕ちる。全てを正義で治めんと願う者は、等しく独裁という名の悪行を成さねばならぬが故に」

「不合理による矛盾は委細承知。その為に我らは互いを否定する。互いへの否定こそ、己が自身の存在証明なり。己が正しさを形として証明する為にこそ我らは戦い、否定しあうのだ。

何かが正しく、何かが間違っていると信じなければ、人も魔も聖者さえおが己を律し

される保証はない。

種族に関わりなく、*“絶対悪”*に成り得る可能性は、誰もが等しく魂の内に秘めて生まれ落ちてくる。その絶対原則がある故に」

「然れど、この思想、この考え。我らが眷属には受け入れられること叶わず。愛する子らに理解されることもなし。それ故、我らは互いが互いと合い争わんがため地と天に別れる」

「否定しあう相克同士がぶつかりあえば衝突は必然。なればこそ、我らは生物としての欲求に従い命を長らえるため戦いの抑制に乗り出す」

「世界を、秩序と無法の戦いの舞台として活用し、ルールを持って制御するために。互いを殺し合う戦争の場で互いに生き残るため、我らは互いを殺し尽くさぬ戦いをこそ望む者同士なり」

——暗転。議題の変更が成されたようです——

「正義とは等しく愛しい、尊きものなり。」

殴られても殴り返そうとせず、殺されても殺し返さない。この世すべての愛を説く、絶対的弱者こそが正義の名に値する」

「そして、それが故に正義は悪に叶わない。

正義は絶対に力を振るつてはならない。力に頼つてはいけない。

力持たざる者こそが正義であるが故に、正義は決して悪に適わない。

何故なら自らの正義を力で以て敵に押しつけた時、正義は暴力という名の悪行となるが故に」

「それ故、正義の守り手が必要となる。正義の味方をして悪を倒す為の『必要悪』が、無力な正義を守り生き延びさせるのためには必要不可欠だからだ」

「それ故に正義の味方は『正義の、味方』であつて正義ではない。

無力な正義を守るために悪行を成す暴力装置が『正義の味方』である以上、正義を守る者は例外なく悪なのだから」

「そして、魔王とは悪だ。自らを悪と名乗る究極の悪だ。

正義を否定する悪なればこそ、魔王は他の誰より正しく正義を理解しておかなければならない」

「正義は正しきものであるが故に、定義づけが可能である。

自由を標榜する悪に定義は存在しない。決めつけられることを拒む自由の行使こそ『秩序から見た悪』の定義だからだ。

秩序の都合で悪が定義づけられるのだから、秩序を破った悪に秩序の決定を尊重する義務は発生できない」

「故に我らは望む。世界の真理を事実として認めようとしなない魔王の降臨を。

正義ではない者が、正義を名乗ることを許さない魔王の降臨を。

正義を解そうとしない悪たちが、正義を罵倒し踏みこむことを容認できない異端の悪たる究極魔王の降臨を。我らは願ひ、望み続ける」

「我が正義を愛する神であるが故に」

「私が悪を統べる魔王であるが故に」

「我ら等しく正義と悪を正しく解する者たちであるが故に、偽りの善悪を許すことができぬが故に……!!!」

——暗転。今度は別の場所。

『ま、今の会話で君がこの世界に喚ばれた理由は大体わかっただろう?』

瀟洒な身なりで、ターバンを巻いた青年が癖のある笑顔を私に向けて語りかけてきます。自分の座した椅子の真向かいにあるソファアを勧められたので、一礼してからありますがたく使わせて頂きました。

『この世界の歪さの原点は、人と魔と神のすべてが同一線上の世界に実在していたことに由来する。』

本来、神と人の歴史は共依存の関係にあるはずなんだ。所謂ロジック・エラーだね。

『神は人類の信仰によって発生する』

『人類は神々の恩寵を授かることで進化する』

神が先か、人が先か。鶏が先か、卵が先か。αである造物主か、Ωである創造物か。

これには2000年代に人類側で結論を出せたが、世界の法則が人類の決定で定まるなら、やはり人類こそが先であると結論できてしまう為に矛盾をきたしてしまう。

今の時点で答えを出せる問題ではないし、出してもいい問題でもない。そんな事をすれば全ての終わりである終末を早めるだけだ。くだらないよ』

『悪魔とは、人が観測不可能な不確定存在を定義し、机上の空想を擬人化させた暗喩として生まれた架空の存在だ。』

天使とは、信仰を持つ人々が神の権能を役割ごとに独立させた存在であり、姿形には定型を持たない不確実な者たちだったはずだ。四世紀頃のギリシャ神話に登場する勝利の女神ニケから影響を受けた翼の生えた人間の姿で統一されてるのは無理がありすぎる』

『彼らの存在は、不確定であるが故に人から存在を認められ、悪魔なり天使なりに分類されて固定されてしまった者たちのはずだ。中世ヨーロッパでペストが悪魔と同一視されてきたように、現象そのものに人々が名前を与えただけのもの。』

それが本来の年代記における我ら幻想世界の生物たちのはずだが・・・平行世界の多くで、この前提は覆されて久しい。この程度の矛盾なら受け入れて変質可能な入れ物こそが世界という名の願望器なんだから当然だけどね』

『人の見る夢い幻であるからこそ、幻想だからこそ、我らは人の続く限り永久不滅であり得たはずの存在ーだった。』

けど、今は違う。有限だ。数あること同じ世界の中で、この平行世界だけは本来の時間軸から独立した未来へ進もうとしてしまっている。何故だか解るかい？』

相手からの質問に、私は当然の答えを返します。

「あなたが原因です」

ーと。

考えるまでもないことです。神と魔王はとつくの昔に死去していて、互いに望んでいた答えが『正義を守るために戦ってくれる魔王の降臨だった』なんて話が原作であるはずがありません。

彼らは本来、この世界にいたはずの神と魔王ではない。本来のお二人がいらないから代わりに生み出された代理魔王と代理神様。代役でしかない存在も、主役本人が実在しない世界においては本物主役に成らざるを得ません。

そして見事に役目を果たして天へと召され、今は現世に介入する術を持たない存在に成り下がってしまったからこそ現状に不満を持ちながらも見ているだけに留めている。

ならば二人の願いを叶えてくれる万能の願望器が必要となります。私という異端者を喚び寄せることが可能な万能器の存在が。

そして、その風貌と善悪表裏一体の思想。どう考えてもキリスト教圏内の神話群ではあり得ない登場人物であり、妙に科学的理論に拘りたがる悪と善の狭間にある人間ほい存在。

そういう人に、私は一人だけ心当たりがありました。無知であるが故に他の候補が思

い付かなかったので、とりあえずその名を口に出してみます。

「……古代ペルシアのザツハーク王……」

私のつぶやきに対して、彼はニコやかな笑顔でグラスを掲げ、平然と肯定されました。自分こそが「この世全ての絶対悪、魔王アジィダカーハ」であると。

『もちろん、この世界にはボクではないアジィダカーハが実在している。』

まあ、そこまでおかしな話じゃない。超兵器と権力、僅かばかりの悪意さえあれば誰だって絶対悪たるアジィダカーハに墜ちる可能性を秘めているって言うのは、さっきのお二方との会話を聞いて理解できてたはずだろう？

ボクがそれやって別個体のアジィダカーハになっただぐらいで、驚くに値するとは思えないね。チャンスと機会さえあれば誰だって成り得る可能性を偶々掴んでしまっただけの平凡な人間に驚くほどの価値なんてない』

「……アジィダカーハは神霊種の一個体を示す名前ではなかったのですか？」

『そりやそうだよ。だってボクの時点ではまだアジィダカーハは人間の王子であるに過ぎないんだよ？』

悪神に見初められ、奸計によって王位を篡奪し両肩から醜悪な龍を生やして国民を食い殺しまくった時点でもうやく魔王アジィダカーハだ。最初の時点では特別でも何でもないってとこだけ見ると兵藤一誠よりも普通のボクは人間よりだと思ってるぐらい

だよ』

彼はそこまで語ってからお茶を一杯すすり、足を組み直した上で私と改めて相対し、真つ直ぐ眼を見ながら語りかけてきます。

『この世界はキリスト教の影響を強く受けすぎている。

北歐神話はもちろんの事、ギリシヤ、ローマ、ケルト、そのほか西歐の神群はキリスト教の躍進によって時代と共に飲み込まれて衰退し融合し取り込まれていった結果の末に神霊の強さが軒並み狂わされまくってる。これじゃあ幻想種が住む幻想の大地、冥界や天界にだって現実に浸食されてしまうのも無理はない。余りにも世俗を飲み込みすぎだ。幻想が幻想でいられる時代は、もう少し前の方だろうにさあ〜』

——ああ、それで私にはクトウルー邪神が喚び出せるのかと微妙に納得。

20世紀に生まれた神が、中世や古代の神々と同時に併存できているのはなんでかなーと思つていたら、こんなところに理屈があつたとは！・・・まあ、なんで私が懐かれてるのかなど謎は残りまくってますけどね。とりあえず今は関係なさそうなので保留します。

『サーゼクス・ルシファアの抱いた不安、種族の存亡も突き詰めればここに行き着く。

現象を具象化させた存在に過ぎない悪魔と天使の戦いに現実が持ち込まれてしまつ

た為に知的生命体として文明を生み出す必要に迫られ、自分たちの理である弱肉強食を制度化するため階級社会を採用せざるを得ず、生まれながらにして強弱の優劣がついてしまう悪魔の社会を先祖たちは合法化してしまった。その負債が彼の代で返済を迫られているんだよ』

『弱い人間と違つて強い個体が生まれやすい悪魔は、もともと命に対して理解が希薄だ。生まれながらに奪う側の視点しか持ち合わせていない。子供なんて適当な女を浚つてきて孕ませれば勝手に生まれるぐらいにしか考えていない。』

そんな種族が何千年の間、ほぼ同数の強大な勢力二つと殺し合いを続けていけば行き着く先なんて猿でも分かる。ましてや、小競り合いにまで小規模化せざるを得なくなつての自分たちの窮状すら理解できないんじゃあ先は長くないとサーゼクスじゃなくたつて思うだろうよ。そう思わない阿呆どもが無能なだけでね』

『強さを重視し数を軽視する悪魔は総数としならともかく、他より抜きんできた強さを持った個体の出生率は決して高くはない。上位種が純血を保つていれば尚の事だ。』

種族特性である長寿で数の減少を補つてきた悪魔たちは、もう限界だ。先が無い。改革は必要不可欠だとする判断には同じ王として心から賛同する。現実にある国を統治する王として政治を考えたならば彼の判断は非常に正しいと』

『幻想が現実に侵略されている。αとΩのロジック・エラーが破綻して久しいのが、現在の平行世界が於かれている状況だ。』

その原因は君の言ったとおりボクにあるわけだから人事のように論評するのは本来筋が異なるのだろうけど、綺麗事を尊重する礼儀正しい奴が篡奪なんかしないから、してしまつたボクが悪神の石柱に列せられてる時点で「仕方がないのだ」と割り切つてもらうしかない。どのみち、君の意向には関係なくボクはボクの都合で君を巻き込む気満々だしね』

正直に言いましよう。

——こいつ性質悪いっ!!

『始まりはおそらく転生者の誰かだつたのだろうと予想している。この世界とよく似た平行世界に生まれ変わったか転移したか召喚されたか……まあ、なんでもいいけど、何かしらの凄い力を持った存在が生まれるか何かして矛盾が発生し、修正力による大きな歴史修復が行われた。』

それは一部の史実を変更せざるを得ないほどの大きな変化であり、バタフライ・エフェクトが発生するリスク程度は甘んじて被るべきだと判断するぐらいに大きなものだったんだらうと思われる。強ければ強いほど凄いこの世界の世界観なら大いに有り得る話だよ。

そして、結果としてアジィダカーハになりながらも龍にならなかつたボクが生まれてしまう最悪の事態を招いてしまったのではないか・・・と、ボクは推測しているのだけど君はどう思うかな？ 異住セレニア君？』

知らんわ、んなもん。自分が最悪だと自覚してんなら自重しろやマジで。

『ふむ、そうか。残念だな・・・じゃあ、質問を変えよう。』

この世界には現象の具象化したものに過ぎないはずの天使や悪魔が実在しているよね？ じゃあ、神は？

聖書に限らず全ての神々は現象だけでなく概念の擬人化した者たちだつて少なくない。アジィダカーハなんて代表格もいいところだろう？ 単に、『権力者が欲に取り付

かれて憎悪と悪意に囚われた末はこうなります、気をつけましょう』つてだけの訓戒。

そんな程度のボクたち絶対悪は、人々の生み出したどんな概念が擬人化した醜悪きわまる姿なんだろうね？ これなら君好みで考え甲斐のある質問なんじゃないのかな？』

・・・そっち系ならば考えなくもないつて言いますか、ぶつちやけ興味津々な分野ですし考えてみましょう。意味合いとかさう言うの好きですしね。

ーまず、彼は『ボクたち絶対悪』と言っていましたね。これはおそらく彼個人ではなくて、絶対悪を担う他の悪神にも共通事項が存在しているものを探せと言うことなのでしよう。

最高神も絶対神も世界中探せばいくらでも出てくるのが神話群です。悪神にも絶対悪にも事欠きませんが・・・この質問には先の内容と矛盾しているかのように『アジⅡ』ダカーハも含まれていなくては成らない』わけなので、同じ事象に関連づけて考えていくのが手っ取り早そうです。

アジⅡダカーハが成す最大級の悪行と言えば考えるまでもなく、世界の三分の一滅ぼした事。たかが人の身から始まって偉い出世ぶりですよ、なんだか他人事のような気がしませんよ。

そんな彼の経歴と神様たちとが一致する部分なんて、結果である終わりから見ていた方が早いに決まっています。

そうなるとやはり思い付くのは『終末論』になる訳ですが・・・
「・・・なるほど。アジⅡダカーハは人類の宿業で化け物になった人でしたから関連づけて考えてみましたが、確かに結果だけを見たら北欧のラグナロクもインドのカリⅡユガも聖書の最終戦争ハルマゲドンも、人の成した罪が自らを裁いて世界を滅ぼしたと言っただけ見たら同じものだという解釈も出来なくはないですね。」

ならば世界を滅ぼす神魔による決戦でさえ、この世界では人々が望んだ概念『終末論』の具象化しただけの存在であり、肉体を得て物質化したあなた方は兵藤さんたち拳で戦う悪魔さんたちでも倒せてしまう・・・」

そこまで行き着けば後は簡単。要するにこの人、死にたがってます」。

「あなたは自分が人類相手に滅びの試練となつて立ちはだかつて、滅ぼされたら『人類に未来があつて良かったね、おめでとく』、滅ぼされずに勝ってしまった時には『人類滅んで神魔も一緒に消えちやつた。ざーんねん』で自分の人生エンディングが人類にとつてのリトライ再スタートラインにさせる気満々なのですね？」

『うん。その通り、よく分かつたね。君の答えに乾杯』

二カツと笑うな気持ち悪い。早く次ぎ行け、次の話へ。

『悪魔が無双するこの世界に、ボクが何時頃に生まれてたのかは記憶にないけど、平行世界のどこかで一部歴史改変しなきゃならないレベルの超弩級な転生者が生まれ変わってしまったんだらうねー。』

それが巡り巡つて過去の一部を改変し、ザツハークのままアジィダカーハになったボクが生まれる。変化の原因『超存在X』の物語はとつくの未来に始まつてるから分岐した過去世界には介入してこない。

斯くしてボクは、ボクを倒すために“何時か未来に現れる英傑”を待ち続けること約千年ちよつと。

折角だから赤龍帝でも世界龍クールマでもなくて、君に倒してもらおうカナート思つて、わざわざレテ河にまで気絶させて運んできて強制的に水飲ませまくつて記憶の大部

分と力の大半を忘却の底に沈めさせて、ちら見された拍子にフラッシュバックから記憶戻つちや元の木阿弥だから今の今まで接触しないで地の底から見上げ続けてた訳なのだよ』

やり過ぎ！ 幾らなんでもそれ、やり過ぎですから！ え？ 私、忘却の河の水たらくく飲まされてるの？ 前世の記憶めつちやあるんですけど、これは幻？ 嘘偽り？

偽の記憶？ Why?

『いや、それだけ飲ませた末に残ったのが今の君というわけで』

どんだけだー！ー！ー！ 私は一切どんだけなんだー！ー！ー！

化け物か!? 私は化け物の眷属か何かなのか!? 私だつたらオルフェの箱船もなんのそので死者の国から死人を連れ帰るの不可能じゃねえんじやねえの!?!

チートにも程があるだろうが私iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!

『いや、今更過ぎないかい？ その疑問は。単なる一般人の人間に邪神級の神格与えておいて、その程度の力を自分が持つてたことに驚いてくれるなよバカバカしい』

「う。．．．そ、それは．．．．．そうなんですけども．．．．．」

て奴でー

『一応言っておくけど、君が死んだの実時間で数万年以上前だから。本来ならとつくの

ボクが倒されなければ次の世界が来ることなく滅びる以上、ボクの消滅は確定事項でなくてはならない。勸善懲惡の最たる存在として、その役割だけは絶対に他の奴等にわたすつもりはないからね。人間には倒すべき責務を負ってもらおう。嫌と言っても無駄だ。悪神に否やの言葉は聞いてもらえないのだから』

『ただ、未来の死亡が確定しているボクだけに『その先』が気になって仕方がない。なにせ、自分がいなくなった後の世界がどうなったのかの物語だ。気になって当前だろうか？ 果たして世界はボクを乗り越えた後に、どちらの道を選ぶのだろうか？

あるいはボクの倒し方次第で『その後』まで決まってしまうのだろうか？

その二つの選択肢を世界に対して用意するために君を喚んだ。適任だったのは君だと独断で判断したんだよ、悪神だけに自分勝手に我が儘に』

.....

『その表情……どうやら思い出してきたみたいで助かったよ。これでようやく始められる。人類と世界に対して問いを投げかける最終試験を。』

《滅びるか？ 滅びたくないから考えるか？》二つに一つだ……なんてセコいことは言わない。幾らだって足掻いて悩んで考えずに挑み掛かってくるといい。

終わりを前にして無力感に苛まれ、自暴自棄になるならそれでもいい。確定した滅びの未来を前にして家に引きこもって布団かぶって震えている自分を感じ取り『自分はこ

ういう奴だったんだ』と理解しながら死んでいけるんだしたら、何も分かってないことも分からないまま偉そうにふんぞり返っているよりずっと良い』

『要は方法論の問題だ。世界の危機に三種族すべての希望を背負った兵藤一誠が力付くでボクを殴り飛ばして消滅させる『世界に迫った危機を消去する』選択肢を良しとするか。

それともボクたち終末思想を、『ディストピアを乗り越えられる』ことで得られる混沌とした未来を守り抜くか。同じ暴力でも使い方次第で後に続く道は大きく変わってくるだろう。

そして、どんなに強大な力であろうと強さであろうと所詮は『事を成すための道具』に過ぎない。君にとって、そのロンギヌスはそう言う類の武器でしかない。大事に使い捨ててくれ。期待している』

『さあ、もう行くといい。君が本来あるべき時間と空の下へ。本来の君が抱いた思想をボクに食らわせにくるその日まで、出来るだけ死なないように生き延びてあげられるよう努力するからね』

そう言つて掲げられた右手の拳が開かれて、出てきた蝶に先導されながらフラフラ飛び立ち付いてく私。

残されたアジィダカーハさんが某かを呟いてるのが聞こえたような聞こえなかったような。

『――他人の願いを無視して自分の理想を貫く極悪。

自分がそうしたいから、自分は動く。誰かの考えなど関係ない。

人の意見なんか関係ない。自分の願う『あの人たらん』とする願い。

その為になら、善悪問わず、守りたい者を守り、救いたい者を救い、倒すべきと判断した者を倒す。

善悪を無視して己が間違いだと断言でき得るものを否定できるだけの力は戻した。

個人としての理想像を追い続ける余り、世界の法則にまで喧嘩を売った人類出身の魔王《第六天魔セレニア》。君の悪徳に幸あらんことを。人類万歳』

つづく

ステータスが更新されました

異住セレニア・シヨート

種族：人間。

ランクであり称号であり神が与えたレッテル：第六天魔王

生前に成した悪行を『許されざる間違い』と思い込んで、自らを『悪』と仮定し生き続ける道を選んだ転生者の少女。

何度転生しても『自己正当化をする自分自身への自己否定』だけは、決して揺らぐことが出来ない存在。

神の定めた理に喧嘩を売った罪で『魔王』認定を受け、数万年もの永きに渡り無限の闇に閉じ込められていた可能性世界のセレニアの一人。

——実は、神様的には理に喧嘩を売ったから怒って魔王にしたんだけど、本人は生前に成した自己正当化により恩師として勝手に崇めてたヤン・ウエンリーを利用してしまったことを深く恥じまくっており、ヤンより格下認定している神様の定めた理を否定したことなんて割と本気でどうでも良かったりする。

生も死もなければ光も闇もない無限の宇宙、無の境界に落とされたのだが、己の自我が宇宙に溶けてしまうほどの永い時間を彷徨い続ける間『他にやることもなくて暇だったから』と、思索に耽っている内に自分の中で抱いていた疑問への暫定的な回答をいくつか出すことに成功しており、それらは時間の蓄積によって神秘の域に達した概念神具となっている。

ただし、あくまで「暫定的な回答」なので答えに至れたとは思っていない。もし再び数万年分の余暇を得たら続きを考えようとしたので、迎えに来た人間版アジィダカーハは慌てて殴って気絶させてレテ河まで拉致誘拐して入水させた、面倒くさいことこの上ない人間。

「悪だ正義だなんて理屈はどうでもいいんです。救いたい人が居て、救える力があるときには救えるだけ救えればそれでいい。人として当たり前のことでしょ？」

「是非もなし。問答も無用です。もとより人に翻意を促し、改善してほしいと願う行為は人の思いを否定して、自分の考えを押しつける人権侵害に他なりませんからね。」

相手の考えを否定する悪を成すなら、自分が『悪として相手に完全否定される覚悟ぐらい』は済ませておく義務があります」

「可哀想という言葉は悪です。相手に『おまえは自分よりも可哀想な立場にいる人間なんだよ?』と教える行為だからです。」

人を傷つけたくないという思いは悪です。それは相手に『自分のことを嫌う権利はない』と断言する行為であり、人として保証された最低限の権利である思想の自由を否定する悪徳だからです」

「ーこんな言葉を言い続けてたら、転生先に世界によっては普通に断罪されて魔王呼ばわりされますよ常識的に考えて。ある意味における、究極の自業自得少女です。」

第六天魔王とはキリスト教的解釈である魔王の存在『悪の権化』ではなく、単なる『神仏にとつての敵』を指す言葉であり、彼女の思想的にはもつとも相応しい悪名ともいえる。

この名を奉られた人間は織田信長をはじめとして幾人かいるが、名の示すとおり『神仏の敵』でしかなかった人類にとつての王は信長ぐらいなものだろう。

善悪など気にしない彼も英雄ではあるので英雄派の中にいるかもしれないと期待していたけど居なかったからガツカリしたアジィダカーハによって連れてこられた異世界第六天魔王。

能力名『欲望解放』

正義と悪がしつかりしている《ハイスクールD×D》の世界観では割と本気で洒落にならんチートっぷりを発揮できちゃう恐れがあったため、転生先の身体には幾重ものセーフティがかけてある能力。

本人の同意なくしては決して破られることはないが、本人が呪文さえ唱えてしまえば

一定時間は確実に効果が持続してしまう。

だからこそ、中々解放する踏ん切りが付かないよう設定したのは悪神の面目躍如といえるだろう。

平たく言うのと、エロくなる。性格的にも肉体的にも火照ってしまったって大変な事態が生じてしまうので、セレニアとしても絶対的な窮地以外は絶対に使いたくない能力。

彼女自身は英雄でもなんでもなかったため、当然ながら原典は別にある神具。

原典は『クロスワールド・スクランブル』。

主人公のTS美少女『六道六天』の使う魔法で、外に発するべき力を、内に宿す性質を持つている。

自分を犠牲にしても守りたいと願った人たちを守ろうとする我が儘から発現した、破滅の身体強化魔法。

魔王を、正義という儂くも弱く尊いものに憧れる異端の悪と結論づけている、生まれるときから壊れた人間。世界の理を事実として認識してない少女。

正義大好き美少女なので、正義でない者が正義を名乗ることを許してくれません。

微妙に設定がセレニアに似てたため採用ささせていただきました少女です。

バトル展開はNo.！と言われた場合には不採用としますが、上記の理由もあって余り発現できない能力であることもお忘れなきようお願いいたします。

墮天使に愛された聖なる言霊少女

プロローグ

「それでは、今日の主のお恵みに感謝していただきましょうアーメン」

『アーメン』

食前のお祈りが終わり、食堂に集まっていた生徒たちが食事を始めるミツシヨンスクールではよく見られる風景。

が、ここは神学校ではない。頭に『聖（セント）』と付けてはいるが、聖クロミサ女学園（なんて縁起の悪い名前を付けやがる！）に所属している生徒たちの中でクリスチャンは想像以上に少ない。少なすぎる。ぶつちやけ、全校生徒中三人しかない。

長い歴史の中で忘れ去られた創始者の理念が校則として辛うじて残されているだけの、平凡きわまる現代日本のキリスト系ミツシヨンスクール。

緩すぎる校則のおかげなのか、あるいは無駄に歴史だけは長い『かつての名門校』としての縁故故なのかは定かでないが、集まってくる生徒たちのほとんどが穏やかな性格をした少女たちのみであり、好きんで校則を破ろうとする物好きなどはおらず、お祈りも口にさえしていれば精神性なんて見える訳じゃないんだからと適当に流してくれ

る教師陣のフランクさも重なりあった結果、非常に穏やかな校風と『表面的な』品行方正ぶりを維持できていて変な女子校である。

その中に所属している数少ない本物のシスター、異住セレニア・シヨートは食事の後の奉仕活動は欠かさない。

『降りかかる苦難は全て試練。神は乗り越えられる試練しかお与えにならない。』

……乗り越えろ！』

——これが学校創設者であるバチカンから来た赤髪の神父さんが掲げていたスローガンらしいのだが、こんなもの本気で信じて本気で守ろうとするバカは今も昔もこれからだって存在することはないだろう。

セレニア自身だってそうだ。『半分しか』信じてないし守ってもいない。

「まあ、誰の作った教えであつても己を戒めるのは良いことです」

そんな風につぶやきながら、今日の奉仕活動を完了して日誌を出して家路につく。

彼女にとつてのキリスト教とは、人々を守り敬い尊ぶ精神性を育むための教材のひとつであり、駄目人間だった自分が人間性を高めるのに使えるのであれば何でもいい彼女としては都合が良かったのだ。だから信仰している。己のために。

己自身が守りたいから教えを守り、貫く。妥協はするが加減はしない。願いは叶わなくても構わない。

——何故なら願いは自分の努力で叶えるものであり、信仰心とは其れを成す際に心を支えてくれる柱のひとつでしかないのだから。

それが彼女の歩む信仰の道。色々間違えまくっている気がするし、本場の人が聞いたら怒り出すかもしれないが、あいにくと彼女の所属している宗教法人は純日本製だ。バチカンとは関係がない。教祖でさえ日本生まれ日本育ちで渡米経験すら有るのか無いのか定かではない。そんな組織に所属している似非シスターに何かを期待する方が間違っていると言言できる。

良くも悪くも純現代日本風。それがシスター・セレニアと言う少女の在り方であり、悪魔が主役で天使とかも実在している『ハイスクールD×D』の世界観では完全無欠に浮きまくっている存在なのだが、この世界に生まれ落ちた純粋な現地世界人である彼女にとつては知る由もないこと。

「今日も一日、平和に過すごせて良かったですね〜」

和やか気分が無表情に笑顔を浮かべる。・・・矛盾した表現になってしまっているが、彼女の表情は茫洋とした無表情が常態であり、気持ちがどうあれ表面的には変化し辛い。感情は豊かだが、感情表現方法は極小しか持ち合わせていないのもまた異住セレニアという女の子の特長だった。

そんな風に現地世界人セレニアがいつも通りの日常を満喫している帰り道、おかしな生き物を路上道端で拾ってしまったのは、切れてしまった歯磨き粉を買いに近くのコンビニまで歩いていった帰路でのこと。

——黒いボンテージを着た若い女性が、お尻剥き出し四つん這い常態で倒れていました。

「………AV……？」

一番あり得そうな可能性を懸念して、辺りをキョロキョロと見回してみるセレニア。

本来であれば路上で営利目的の撮影を行う場合、役所などから許可を取らなくてはならないはずだが、AV撮影などに手を染める会社は経済的に困窮している場合が多いことを経済チート系のラノベ好きな彼女は知っていた。

だから、もしも撮影中だった場合には声かけて商売の邪魔しちや悪いなど気を使ったつもりでの行動だったのではあるが、この場合は完全無欠の杞憂である。

なにしろ周囲一帯には冥界のプリンセス、リアス・グレモリーによる人除けの結果が張ってあって普通の人間は無意識的に近寄るのを避けてしまう仕様になっていたからだ。

セレニアに効果が及ばないのは崇めている神の加護があるから・・・などでは無論なく、ただ単に精神力が強すぎてナチュラルに結界を自然突破してしまっただけであった。

何しろ『無意識のうちに避けてしまう』と言う程度の暗示でしかない低級レベルの魔法である。リアス自身が生まれついて高い才能を有していたのもあつてか、敵を侮る傾向にあるのも一因だろう。

自己反省、自己批判、自己否定に自己改善。

直すべきところを直すためにも、自らの過ちと間違いは認め、向き合わなければならぬと心に誓っているセレニアと催眠術の延長線上でしかない暗示は相性最悪過ぎて効果が薄い。

この日もそれが災いしてリアスが仕止めるつもりで相手に放った滅びの一弾は、命中すれども消滅には至らずに僅かながら余命を残して逃亡を許してしまった至高の墮天使レイナールに生き延びられる選択肢を与えてしまったのだから世話はない。

プライドの高さ故に慢心しやすい彼女らしいミスではあったが、今回に限っていうならミスと言うほどのことでもない。どのみち墓標と命日に当たる時間帯が僅かにズレただけである。

死ぬはずだった人物の死に場所と死亡時間が、三十メートルの距離と十秒ほどズレた

程度なら問題は起きない。．．．本来ならば。

「ま、とりあえずは親に連絡ですね。身元が不確かな女性を介抱するため自宅にあげるにしたつて家主からの許可は得ておかないと礼を失っていますから」

そう言つて携帯を取りだし自宅の電話番号を押してコールし始めるセレニアの頭に、『背中から黒い羽を生やした邪悪そうな気配の美女を家に連れ込むことで生じるデメリット』は、ハッキリ言つて無い。存在していないわけではないし、メリットのなさも重々承知しているが、ボンテージ女性の満身創痍な痛々しい容態が彼女の中にある天秤を綺麗さっぱり破棄させた。

もとよりここは背信者たちの住まう国、日本である。聖なる都バチカンではない。

彼女、異住セレニア・シヨート自身も、ごつた煮宗教を崇めている似非クリスチャンであり正統派のカトリックではない。プロテスタントでもない。単なる似非シスターに過ぎない偽物でしかない。救いたいと思つた人を救つても救わなくても責められるときは責められる程度の存在なのである。

．．．．．日本人つて宗教に偏見在りまくりだからなく．．．。

「苦しんでる人は救われるべきだそうですね、一先ずは家に運ばせてもらいますね。身長差がありますので、足先を地面に下ろしたまま引きずつちやうのだけはご勘弁を」

中学生どころか時折小学生にすら間違えられるセレニアの身長は（後ろから声をかけ

られた場合だけであり、振り返ったら全ての人が胸元見ながら頭下げてるが）同世代と比べても低い。せいぜいが145センチぐらいなものだろう。

対するボンテージ女性は長身だ。さすがに倍は無いが、頭ひとつ分では補いがつかない絶対的な高見にあるのが救われるべき女性の頭の高さである。

「……………微妙に、憎い……………」
ほんの少しだけ本音を漏らしてから背中に負ぶさり、家へと女性の足を引き釣りながら帰って行くセレニア。

これが彼女がハイスクールD×Dの世界と——悪魔・天使・堕天使の三代勢力が三つ巴の潰し合いに血道を上げ続けて早数千年の「よく飽きないものですよね〜」な、愉快な人々と関わり合っていくことになる運命の夜の出会いであった……………。

第1話

——チュン、チュン。

朝日がまぶしく部屋に入り込んできていた。

「……………い……………痛う……………」

日の光に弱い種族ではないのだが、昨日やれたときの傷跡に光を浴びてしまうと幻痛

で体中が悲鳴を上げる。

思っていた以上に心の傷が大きそうなことに、至高の墮天使を「自称」していた黒髪ボンテージ美人の女性レイナーレは、痛くプライドを傷つけられていた。

「・・・滑稽ね。飼い犬に手を噛まれたばかりか、雑魚と侮っていた元人間にも敗れて、おまけに死に損なうなんて。この体たらくじゃ、今さら私に戻る場所なんてドコにもなし・・・か」

自嘲気味につぶやきながら、ベッドの上に体を起こす。

少し前から目は覚めていたのだが、自分の中で事情をまとめるのには時間がかかった。

ー自分には負けた。言い逃れのしようもないほど完璧に、完全に、徹底的に。

仲間たちも手勢も失い、残されたのは我が身ひとつのみ。組織の庇護も受けずにいろんな種族が合い争う中で生きていける強者であったならアーシア・アルジェントのヒーリング能力など求めたりはしていない。

それに何より痛かったのは・・・

「アザゼル様・・・」

彼女は悲痛な表情でつぶやく。偉大なる墮天使たちの頂点、六枚羽の墮天使総督の名を。

愛していた訳ではない。身分違いなのは端から承知の上だったし、恋慕などと言う女らしい感情が入り込むより先に墮天使としての本能が、彼の『強さ』に惚れさせられた。憧れてしまったのだ。純粋に、あの強さに、頂点に。

(あの人のお役に立ちたい……!!)

嘘偽りなく、邪な感情など入り込む時間的余裕すらもないまま純粋に心の底からそう思わされ、そうありたいと願い続けて生きてきた。

肩をたたかれ、神が聖女に与えた墮天使の傷さえ癒せるセイクリッド・ギアの話が聞かされた時には天にも昇る心地だった。

能力の内容に感動したのではない。それほどまでに墮天使全体にとって大事な神具の回収役に自分を抜擢してくれた総督殿の器量に感服させられたのである。

この方のためなら世界だって滅ぼせる！ 人間はもとより、悪魔や天使も今得た信頼の前ではカス同然！ 捨て石にしてしまうつもりで任務に当たろう！

——そう決意していた。自分は信頼されていたのだという確信があった。それが彼女を支えていたし、あの方の与えてくれた任務のためなら個人としてのちっぽけなプライドなんて用意に捨て去り人間相手に命乞いだってできていた。

なの——。

紅蓮の公女が姿を現し、与えられていた情報と致命的に乖離していたブーステッド・

ギアの正体が頭の中で重なった瞬間に、私は何の証拠も必要としないほど信じてしまったのだ。

ああー私は使い捨ての駒に過ぎなかったんだって……。

ーそこから先は我ながら惨めに過ぎると言わざるを得ない醜態の連続が続く。ひたすらひたすら命乞いの連続。バカ丸出しなイカレ神父にまで必死抜いて頭下げてバツカみたい、死ねば？

「……って普段の私だったら絶対と言ってたんだろうにな……」

膝を抱え込んで寂しげに囁かれた言葉は自己嫌悪に満ち満ちていた。

なにもかもが嫌になっていた。生きているのも、生き延びてしまったのも生き恥をさらし続けているのも神でないのも殺されてさえないもの。みんなみんな大ツキライ！

「いつそ、このままここで死んでしまえばーって、あ痛っ!?　だ、誰よ今私の頭を銀の鈍器で殴ったのは!?　墮天使も悪魔と同じで銀でできた道具類には弱いんだから気を付けなさいよね!」

「知りませんよ、そんな狼男みたいな種族設定。」

勝手に救っておきながら『命をなんだと思っ』なんて言うのは筋違いなんで言いま

せんけど、自殺するんだったら家の外でしてください。愛すべき我が家に名前も知らない赤の他人の亡骸なんて晒さないでいただきたいです。

まったく・・・恥女さんという人たちは、何でもかんでも晒したがる癖があつて困りますね、本当に全くもう」

「へ？ あ、あれ・・・？ ち、恥・・・女・・・？」

お目目ばちばちレイナーレ。

そして困惑する相手に構わずグチり続ける家主の娘にして部屋の主でもある、目を覚ましたらしいレイナーレに食事を運んできたセレニア。

愚痴は人に聞かせるためではなく、自分の不満をどこか適当な場所に向けて吐き出すために言うべきものなので、今の彼女はレイナーレ相手に聞かせる気が全くない。

そのために発言の内容から彼女に対する悪態に該当しそうな個所は意図的に廃して、純粋なボヤキとしてのグチになるよう心がけていた。自己満足に過ぎないからこそ自分の守ると決めた筋は絶対に押し通す彼女の頑固さは紙一重に達してそうでちと怖い。

「だいたい銀なんて、古代地球世界で金より先に通貨として使われていた上に、鉄より柔らかい芸術素材向きの金属じゃないですか。何だつてそんな物で殴られたら特別ダ

「旧約聖書の方には天使も堕天使もほとんど出番がなくて、主に登場しまくるのは新約の方なのは有名なのですが、堕天使はそれでも出番がなくてメインで活躍しているのはゲームの題材にもなった聖書の異本で第一エノク書なのだと、この本には書かれていませんね」

「ん。まあ、その辺りは事実よね。遺憾ながらも一応は」

「そして、エノク書の記述だと堕天使というのは、天使と人間の間に生まれた悪霊みたいな存在で、身長が10mを超える巨人であり殺戮を好む、天にも地上にも居場所がない我が身を産み落とした親たちを恨んで暴れているのだと・・・」

「誰よ!? その巨大な化け物は! 天使堕天使どうこうより先に、生物かどうかを怪しむべきレベルなんだけど!」

「他にも千三百メートルぐらいは楽勝なでっかい蛇さんが一般的だったとか」

「だから本当に何なのそのバケモノ堕天使!? ドラゴンでもあり得ないサイズの堕天使なんて生まれてたら地上も天界も冥界も滅ぼされてるでしょうが確実に!」

「あと、最終的にはエノク書の主人公であるユダヤ人のエノクさんは昇天を果たされまして神と同等の力を持つ存在となり、36対(72枚)の羽と365個の目を備えたメタトロンという名の天使様に生まれ変わられるのだとかで」

「転生天使が転生悪魔よりもバケモノ臭が凄いことに!」 本当に人間たちは私たちのこ

と、なんだと思つてたの!? バケモノ!? バケモノなの!? ファブニールよりも酷いレベルの化け物認定されちゃつてたの私たち!?」

「いや、ほらアレですよアレ。アレです。……あまりお気になさらずにと言うことです」
 「遠回しにすら否定してもらえなかつた!?」 むしろ、遠回しに肯定されてしまつていような気さえするんですけども!?!」

誤魔化すように頭をかいて目を逸らしたセレニアだったが、レイナーレの予想は大体合つてた。

世の中にあるゲーム内において、墮天使に限らず神話上の登場キャラクターたちが物凄く解釈と物凄すぎる外見をして出てきた例は数知れない。むしろ墮天使なんて可愛いものである。黒い羽ついてて黒服着てるかお色気コスを着てさえいれば、一先ずは墮天使だと主張できるのだから。

どちらかと言えば神が酷い。凄く酷い。酷すぎる。化け物という言葉が誉めすぎなレベルでひつどいデザインの神様なんて珍しくもないのが現代日本の世界神話世界。

「……異世界って、割と身近にあるんですね……」
 「これは異世界じゃなくて、異次元世界よ!

あと、この本に描かれてるアザゼル様がすつごくキモい!」

……日本のテレビゲーム世界はファンタジック♪

33話 「ディオドラ、弱いまま知識だけ持ってコンテニュー」

「無論、死ぬまで！ オツパイは不滅だあああああああつ！！！！」

「ーん？」

「・・・あれ、なんか私、立ったまま寝ていましたか？ それとも白昼夢でも見ていたんでしょかね・・・。妙に長い時間の経過を体を感じている気がするのですが・・・。

「そうかい？ でもそれは、果たして人間のままだったら続けて行かれた拘りなのかな？」

「??? どういう意味だよ？」

「言葉通りの意味さ。今の君は学生で少年という、地域にも親にも国にも法律にも守ってもらえて養ってもらいながら生きてる立場の人間だ。今なら言える言葉はいくらでもあるだろう。」

「だが、それらは本当に死ぬまで続けていけるものなのかな？ 周りに理解を得られなまま、何の力も持たない人間として生きていく未来は、本当に今の君が信じて貫くと

決めた信念を持ち続けているのだろうか？

僕には人生の敗者として落ちぶれていく、いい年したおっさんの君の姿しか想像できないのだけど？」

「縁起でもないこと言うんじゃないか！」

「……なんだか、いつかどこかで見た記憶があるような無いような……？ デジャヴュにしては似かよるどころか、記憶に残ってるのと同じすぎて逆に疑問を感じちゃうレベルですし……これは一体どういう現象……って、私の頭上からアスタロトさんところに戻っていく金色の蝶なんか描写してんじゃないか！ 隠せ！ 丸わかりすぎる犯罪トリックの真相を！」

古畑任三郎の番組始まった直後に犯行が描かれる展開で、後半に主人公が小五郎のおじさん眠らせてまで推理してるの見せられたらバラエティになっちゃうじゃねえか！

「そうだね。未来の事なんて誰にも分からないんだし、成らなかつた仮定の話に意味はないか。」

とはいえ兵藤一誠。もし君に、今の君になる切っ掛けになった人物が居るとしたら、その人のことをよく調べてみた方がいいと僕は思うね。

その人は本当に孤独の中で信念を貫いて言っていたのか。その人は本当にそれしか

なかったのか。その人は本当に自分の思い描いてる妄想上の人物と同じなのかどうかを調べてから参考にした方がいい。

「――丁度その一件については思い当たる方が来られているみたいだし、参考になると僕は信じて進言させてもらおうとするよ」

チラリと、兵藤さんの背後に偶然にも位置していた私に視線をやりながら「にんまり」と良い笑顔を浮かべたアスタロトさんは残っていたお酒を飲み終えて「さて、と」と言つて立ち上がると、両手をあげて投降する意志を示されました。

「……つて、あれ？　ここから記憶と違つてる……。もしかこれが巷で噂のIF展開!？」

「降伏しよう、リアス・グレモリー。ボクには君たちと抗戦する意志はない」

「……そんな言葉を鵜呑みにするとも思つているのかしら？　だって、貴方はさつき私の差し伸べた手を一度振り払つているのだから。今更の変心に疑いを抱いてしまうのは当然の心理というものでしょう?」

「誠に以てご尤も。ただね、グレモリー。さつきも言つたけど君はただの王妹だ。現場責任者として一定の裁量権は与えられていたとしても、降伏してきた敵将を許すか否かは君如きが決められる範疇を越えすぎている。極めて高度で政治的な問題なんだよ。」

頭の中が赤竜帝と自分のお色気で占められているオツパイ脳の君たちには、一生かかったって判断することが出来ない次元にある問題さ。悪いことは言わないから、早急に兄上様に泣きついて判断を仰ぐといい。君ではどのみち何も出来ない。絶対にね」

「・・・・・・・・」

怒りと屈辱に震えているらしいグレモリーさんですが・・・妙ですね。アスタロトさんの言葉から、先程まで感じられなかった『確信』が見え隠れしているような・・・？

「ーいえ、これは少し違いますね。」

証拠もなければ信じるに足る根拠もないのに『きつとこうだ』と直感だけで感じられる、似たもの同士だからこそ理由もなく信じられてしまう妙ちきりんなシンパシー。

それが今回伝えてきているのは『彼の確信は、知っている事実を語っているだけなので中身空っぽ』と言う、微妙に否定的な感情。

攻略本を読んで得た正しき知識は、レベルを上げて冒険して経験則から得られた正しき知識と『自信』との二つ合わせたものに比べて著しく態度に現れるはず。

知識だけの場合は、やや高圧的な場合が多く、自信が付属すると余裕がでる。私の経験則ではそう言う結果がでていきます。

人と人とのやりとりを眺めつつ考え事しながらボンヤリしていた時に思いついた理論でしかないので、信憑性は0以下ですけどね・・・。

「んな事はどうだつていいんだよ！ それよりもディオドラ！ お前から降伏してきたんだから、とつととアーシアを解放しやがれ！」

「ああ、悪いけど赤竜帝。それは無理だし不可能だ。なぜならボクにはそれをする権限が与えられていないから」

「なに!？」

「どう言うことなのディオドラ？ 今回の一件、首謀者はあなたのはずではなかったと言うの？」

「君たちはバカなのかい？ グレモリーと頭の愉快的仲間たちよ。ボクの家系アスタロトは現ベルゼブブを排出したとは言え所詮は72家の一家門にすぎない。」

君の所属する学校で行われていた三代勢力首脳会談を襲撃したカオス・ブリゲードの部隊を指揮していたカティア・レヴァイアタンと家柄だけ見たら同格だけど、旧き血を尊しとする旧魔王派にしてみれば旧魔王レヴァイアタンの血統と、現魔王アジュカ・ベルゼブブの実家じゃ相対的に各落ちしすぎているよ。到底、後釜になんか座らせてもらえる訳ないじゃないか？」

「でも、72家でさえ前の大戦で数を激減させていて中級悪魔から見たら十分すぎるほど高見に当たる存在のはずだけど……」

「おいおい、君がそれを言うのかいグレモリー？」

純血のルシファーが絶えたことでカティアと跡目を競い合った末に統治者としての資質から選ばれたサーゼクス・ルシファーを兄に持つ君でさえ、問答無用で降伏勧告を無視されて上級悪魔どころか中級どもにさえ刃を向けられた事実があるのに、それを無視するのは統治者である貴族としてどうかと思うけどな——

「……………」

再び齒噛みするグレモリーさんでしたが、私は他のことが気になってしまつてそれどころではありません。申し訳なく思いますけど、今だけは無視させていただきますグレモリーさん、ごめんなさいでした！

……とりあえず、それは置いといて。

なんだかアスタロトさんの主張が妙に歴史に偏っているのは何故なのでしょう？
まるでどこぞの銀色の髪した生意気なだけの屁理屈小娘みたいで鼻につきますよね。
言うまでもなく同族嫌悪であり自己嫌悪も兼ねてます。

私とよく似た思考を持ち、微妙に私と似た過去を過ごしたことのある彼。

果たしてこれは偶然なのでしょうか？ もし仮に偶然ではないとしたら、誰がどういう意図で仕組んだカラクリなのか……さっぱりです。今しばらく様子見に徹させてもらいましょう。

「おまけに君はともかく兄君様の奥方様のご実家はバアル家だ。魔王に次ぐ権力を持つ大王家の姫君だよ？」

彼女を妻に迎えたサーゼクス・ルシファアの妹君でさえ『忌々しき偽りの魔王の血縁者』呼ばわりするカオス・ブリゲードの旧魔王派に、本当の意味で尊き純血を尊重している悪魔が在籍しているとは少なくともボクは思っていない。だからボクに何かを期待するのは無駄だ。諦めたまえよ、純血の72家のひとつグレモリー家の次期当主リアス・グレモリー」

「・・・それなら・・・」

歯噛みをやめたららしいグレモリーさんは、大きく一步を踏み出してアスタロトさんと相対すると、キツとした視線で彼の瞳を睨みつけて二つの異なる内容の問いを発しました。

「じゃあ、旧魔王は一体なにを信奉しているの？ それから、あなたが役に立たないのなら誰を問いつめればアーシアを救い出せるのかしら？ この二つの質問にだけ答えなさい。それによってこの場におけるあなたへの処罰は保留とすることを現魔王サーゼクス・ルシファアの妹として宣言します。」

これは決定であり命令よ、ディオドラ・アスタロト。あなたが今この場で選べる選択肢は、この二つだけ。よく考えて選びなさい」

「なるほど・・・名代でも権限を一時的に委託された代理でもなく、*“現魔王の妹”*ときたか。存外にも君も歪んでいるんだねリアス・グレモリー。身の程だけは弁えているように、何よりだ」

「・・・・・・・・・・」

「おっと、そう怒らないでくれ。別に答えないとは言っていないんだから」

おどけた感じでヘラヘラと笑って流そうとするアスタロトさんに、ただでさえ短い兵藤さんの忍耐心は早くも断裂寸前にあり、毛細血管破裂しまくりそうに血みどろになったりしないか少しだけ心配になる顔色ですね、本当に。

「それで、旧魔王派がなにを信奉しているのかだっけ？ そんなの考えるまでもないだろう？ 何も、だよ。」

何もできないし、何も信じてやしない。何かを信じたところで命を懸けられるほど情熱燃やした事なんて今まで生きてきた中で一度も存在していない、家柄と生まれを誇る以外には何もできない、したことない臆病きわまるゴミどもにいったい何を信奉しろと言うつもりかなグレモリー？」

「・・・・・・・・・・」

「アイツ等には何も無い。何もしてこなかった。だから時代が変わり始めた今になって、何もしなくて良くするために旧時代の秩序に戻したくて仕方がないのさ。」

時代の流れについて行くことも、時代の流れに逆らうことも、時代の流れの隙間を見つけて泳ぐことも、それらをしようとする『努力』でさえ彼らは放棄し、今にしがみつこうとしている。だから「変われ変われ」と今までしてこなかったことを強制してくる君たちを『偽りだ』と呼んで蔑み殺そうとするんだよ。

自分たちがメソメソ泣きながら同類あい哀れみあう場所を、貴族たちの集う宮殿を守り抜きたくて努力してでも前に行こうとする君たちを否定してくる。ただそれだけさ。泣く資格もない奴らには、自分たちが辛いと言って泣く資格を持たない屑であること、を認める努力をするよりも、おそろいの仮面かぶって血の血統による正当性を叫びながらテロリストと世間からは非難されながら自分なりの信念に殉じて死んでいったエセ殉教者ごっこをしている方が楽でいい。ーとまあ、そういうことなんだろうねえ多分。

ははっ、自分自身が歩んできた思考をトレースするだけで済む相手の考えを予測する方が、僕にとつてはよっぽど都合よく楽ができそうだ」

「……………腐ってる……………」

なんだか心が痛くなるお言葉の数々をどうもありがとうございましたアスタロトさん。現代日本人を代表する資格を持たない屑ですけど、お礼だけは言わせていただきますからね？ 正直きつかったツス、と。

「いいから早く答えろよ！ 誰に聞けばアーシアを助け出せるんだよ！ いい加減ぶつ飛ばされたいのか、このニヤケ薄ら笑い野郎！」

「お、正解。凄いいじゃないか赤竜帝。大正解だよ。確かにそうするのが彼女を救い出す最善の選択肢だ」

「……は？」

彼の意外すぎる答えに皆さんが唾然となり、私たち帝国軍には「やつぱりかゝ」な雰囲気が蔓延いたします。

御輿として担ぐ価値のない名門の当主が組織を率いるフリをさせられていた場合、真の黒幕がどのポジションにいて、どのような目で傀儡を見ているのか。

そして傀儡に最後に与える役割とは何なのか？ ……考えるまでもありませんよね。「そう、そっちの銀髪のお嬢さんは分かっているとおり、ボクを殺すことがアーシアを戒めから救い出す方法であり、そして同時にアーシアを使ってそこいら一体にいる異種族全てを吹き飛ばす爆弾に早変わりする条件まで兼ね備えちゃってるんだよねえこれが」

『なっ!?!』

「付け加えるなら爆弾として用いた場合の効果範囲は、このフィールドと観客席にいる者たち全員にまで及ぶ。

装置に使われている結界系セイクリッド・ギアの最高峰『アイメンション・ロスト』である事と、アーシアの持つトワイライト・ヒーリングの合わせ技で、アーシアの回復能力を反転させて防御不可能な内側から崩壊させてしまおうって寸法らしいね」

「アーシアの回復をリバースさせて・・・はっ！ それはまさかソーナたちとの一戦で起きた現象を観測されて・・・!!!」

「いや、前から研究だけはされていたらしいけど、誰一人実現するとは思っていないくて半ば以上頓挫されていたそうさ。けど、君たちの一戦から計画は見直されて予算は倍増どころか激増。」

金目当てで飛びついてきた連中の数と質から見ても政権側に裏切り者が紛れ込んで、ソーナ・シトリーにリバースを貸すことで餌に使うデータを採集させてた可能性は誰も否定できないだろうね」

彼は両手を上げたままの姿勢で器用に肩をすくめて見せながら、
「要するに君たちは足下が疎かなまま、種族の存亡やら子供たちの未来を守るための戦いやらとデカい声出して騒いでただけの、勘違いヒーローに過ぎなかったって事だね。」

実際に敵を殺す戦争と、勧善懲悪のヒーロー番組とを混同してたんじゃ、そりゃ犠牲者の数は半端ないことになるだろうよ。あれらはいつの時代も無力な民間人が犠牲になってナンボの世界を描いた、戦争万歳作品ばかりなんだから」

『く……!!!』

悪魔なのにヒーロー大好きな一部の方々が悔しそうな表情をしてらっしやいますけど……もういつそのこと『悪魔』って名前改名しちやったらどうなんでしょうかね？

古い伝統からの解放を謳うなら名称の変更は必然だと思っただけでも……。

もし変えるとしたら……『善聖』？ 訳わかんないって言うか意味不明になっちゃいましたね……。だとしたら兵藤さんらしく『おっぱい族』、もしくはグレモリーさん流に『メイモングレモリー族』。

あるいは、二つを掛け合わせて『乳揉みぞ……失礼、前世の思い出しちやいけない記憶が復活してしまいました。興味本位とはいえ高校生がやっていいタイトルではなかったです。反省……。でも、内容自体は超おもしろかったんだよなあ……。『巨乳ファンタジー』……。

「ちなみにだけど、その装置はロンギヌス所有者が作り出した固有結界のひとつ。所有者を中心にフィールド全体を包みこんでる霧の結界は中に入った全ての物体を封じ込めることも、異次元に送ることすら可能らしい。

元の持ち主がバランス・ブレイカーに至ったときに所有者の好きな結界装置を霧から作り出せる能力に変化した物らしいんだけど、持ち主が殺されて中身だけ持ち出された

今じゃ機能を限定することでやつと使い物になると言つた程度のガラクタだよ。

おまけに、僕か他の関係者が合図を出すか、僕が倒されたらが起動条件になつてお約束付き。挙げ句、中に入つてるアーシアの能力が発動しない限り停止しないとか使いタイミング限定されすぎだよ。今しか使えないじゃん。どうすんだよ本当にコレさあ」

はあくあ、とやる気0な事この上ない態度でため息を付きながらアスタロトさんは、せめてもの『楽しみ』を求めてる時の紫藤さんみたいな表情をしてグレモリーさんたちに笑顔を向けられます。・・・こういう表情する人は、人間だろうと悪魔だろうと性質悪いんだよなあ・・・。たとえば前世の私とか。

「二律背反。あつちを立てれば、こつちが立たず。ーーさて、この場合に選ぶうる君たちにとつての最適解を聞かせてほしいなリアス・グレモリーと、頭の愉快なグレモリー眷属の諸君。

君たちにとつて大切なのはどつちなのか？ あるいは、両方を選ぶとして手法はどれを選択するのか？ それをボクに見せてほしい。それさえ見せてくれたらボクはここから一步も動かないし邪魔もしない。なんだつたらボクの中に埋め込まれてる装置の起爆スイッチも破棄するけど、どうするかい？」

「!? デイオドラあなた、今までそんな物を隠し持っていたの!?」

「持ってましたとも。そうでもなければアーシアなしだと満足な起動実験もおこなえない試作品でさえ誉めすぎな爆弾の側で酒なんか飲んでいられるものか。」

「そこまでボクは勇敢じゃないし、その勇気があるなら親の呪縛なんかとつくの昔に振り払って新境地に至っているよ」

「くっ！ つくづく偉そうなだけで肝心なところでは役に立たない名門貴族のどら息子めええ……!!」

「グレモリーさん、グレモリーさん。それ多分、ブーメランになってますから言わない方がいいですって。多分ですけどね？」

「まっ、眷属さえ無事なら何でも良い君にとっては問題ないんじゃないのかいグレモリー？ 少なくともアーシア自身が死ぬ訳じゃないんだし」

「いい訳ないでしょ！ あなたも少しは何とかする方法考えなさいよ！ このままだと私たちと一緒にあなたも死ぬことになるんだから！」

「……みんなの命を救うために、かつて愛した少女を手に掛ける王侯貴族の次期当主な美男子って……王道だよ」

「やめて！ 本気でやめてお願いだから！ いつもは小説やテレビで「これこそ王侯貴族のあるべき姿だわ！」って大賛成してた私だけど、みんなのために犠牲になるのが身内のかわいがってた女の子になった途端に間違っていたことに気づいたからガチで止

めて、お願いしますディオドラ様やめてください土下座でも何でもしますから！」

「・・・テンパってるねえ・・・君、相変わらず逆境に弱すぎるでしょ。直しなよ、その性格。一勢力を率いる盟主の義務としてさあ・・・」

「すいません、ディオドラ様。うちのリアスは時々ちよつとアレなものでして・・・」

「いや、知ってるからいいんだけどね？　ーあ、それとお茶をありがとうございます姫神さん」

「いえいえ、この状況だと役に立てないのは私も同じ身ですから」

・・・ノンキだな・・・

「イツセイさん、こうなったら私ごとー」

「バカなこと言うんじゃないじゃねえッ！　次にそんなこと言ったら怒るからな！　アーシアでも許さない！」

「で、でも、このままでは、先生やミカエル様が私の力で・・・。そんなことになるくらいなら、私はー」

諦め気味なアルジェントさんが自分ごと爆破する提案をし、兵藤さんが大声で一蹴されます。

そして、締めとなるオチを勤められるのはこのお方。

「じゃあ、ボクが爆破して終わらせて上げようか？　彼女自身が望むのがダメで、みんなを救えて、終わった後にボクを殴り殺せばとりあえず君の中では解決すると思うけど？」

「やめい危険思想！　マジで殴り殺すぞ本当に！」

「敗者な上に降伏した身の、生殺与奪件はサーゼクスが持つてる今のボク的には構わないんだけど……いいのかい？」

「本当に殺されちやつても？　ボクが死ぬと問答無用でアーシアがサーゼクスたち皆殺しマシーンになってドツカーンと……」

「やめてくださいディオドラ様！　土下座でも何でもしますから！」

「……仲良い主従だね、君たちって……」

呆れ気味になってきたアスタロトさん。つか、この装置って今壊さないとダメなんでしょうかね？　起爆スイッチ持つてるアスタロトさんが投降してきたんだから時間をかけても良い気がしてきましたが……。ああ、それで今のタイミングに投降してきたわけですか。背後から首筋にナイフを押し当てられてる現状なら最適なタイミング……なのかな？

「ど、どどどどどうしよう子猫ちゃん！　なんだかいつもと違って力付くの解決ができな

い危機が戦闘もなく訪れたせいで、いつもより激しく慌てふためいているボクなんだけれども!」

「にやつ! にやつ! ー落ち着いてください、木場先輩。私より上級生なのに、見苦しいです」

「そ、そうだね子猫ちゃん。年上の先輩なのに、後輩の君に縋ってしまつて申し訳なかつた。次からは気をつけるよ」

「まつたくです。爆弾が爆発して大勢の人たちが危険な目に遭いそうになるときに情けない……こう言うときには焦らず騒がず教室の外の廊下に出席番号順で並んでから校庭に避難するのが常識的対応です」

「子猫ちゃん!? それ平和な日本の学校での常識だからね!? あと、爆弾って言うのは比喩であり喩えに使つただけで本当はセイクリッド・ギアだからね!? ロンギヌスだからね!? 緊急時に災害対策の避難訓練マニュアルを鵜呑みにして行動したら被害続出するよ確実に!」

「あわわ! あわわわわー! ー! ー!! きゅゅゅゅゅ ぱたん (なんか知りませんが慌てふためいた後に気絶してしまつた男の娘。どうでもいいので無視で放置です)」

・・・他の人たちもヒッドイ状態にありますね・・・戦い以外に役に立たない人が多すぎる・・・。何でこの人たちカオス・ブリゲードに所属しないで和平派に組みしてんの？ 逆じゃない、この能力と適正的に。

「俺は・・・俺は！ 二度と、アーシアに悲しい思いをさせないって誓ったんだ！ だから絶対にそんなことはさせない！ 俺が守る！ ああ、守るさ！ 俺がアーシアを絶対に守ってやる！」

「イツセイさん・・・」

「だから、一緒に帰ろう。家で父さんと母さんが待つてる。俺たちの家に帰るんだ！」

なにやら感動的な展開のシーン。

そして、ぶち壊しにするのはこの御方。

「いやまあ、そもそも君が彼女を守り抜く事を優先してボクなんかを意識を割かずに浚われたりしなければ、今の状態そのものが起きていないのだけだね」

「それ言っちゃうと終わりだろう?! もっと夢を見るよ男の夢を！ ドリームを！」

「夢で。他人の命を賭け皿に乗せてまで見る夢ってなんだい？ 倫敦を死者の軍勢が襲って焼き尽くして地獄を創る悪夢かなにかかい？」

「怖すぎる展開！ いや、そう言うんじゃない！ たとえば世界の危機に立ち向かう

選ばれし勇者とお姫様のラブでエッチな大冒険活劇とかさ!」

「危機に陥ってる世界の住人たち放つといて二人だけのラブ空間構成するのかい・・・?
人でなしだなあ、その勇者。選んだのは絶対神様じゃないよねその人。間違いなく
邪神か魔王だよ」

「男の夢がブロークン・ファンタズム!」

こつちも賑やかだな。

「くっ!、こうなつたらあ・・・!! ードライグ、俺はお前を信じるぞ」

『どういうことだ、相棒』

なんか兵藤さんが思い付いたつぽいです。ーただなあ・・・、こつち系のこういう
主人公が危機的状況下で思いつくアイデアって、大抵は『すつぽんぼん魔術』系統なん
ですよ、トリニティセブンのアラタさんとかみたいに。

兵藤さんもあれくらいアグレッシブな爽やか変態さんになればあるいは・・・。ダ
メか。アラタさんはイケメンでしたねごめんさい。ブサイクじゃないんですけど、兵
藤さんはなんと言いますかその・・・相良良晴さんつぽいんですよね、『織田信奈の野望』
に出てくる主人公の。顔とか髪型とか髪色とかが超にってる気がしているのですよ。

いや、嫌いじゃないんですよ? 良晴さんも信奈のも。ーただ、顔に関しては作中

で『サルサル』呼ばれ続けて、気が付いたら兵藤さんまで猿顔に見えて仕方なくなってきた今日この頃です。前世の記憶と一致するラノベが入ってしまう時空への転生も考えものだなあと思いました。まる。

「アーシア、先に謝っておく」

「え？」

「高まれ、俺の性欲！ 俺の煩惱！ ードレス・ブレイクツ！ バランス・ブレイカー
ブーステッドバージョン！」

ああ、やっぱりこの展開だ。性欲全開で脱がして解決パターンだ。

ま、コレで解決するなら越したことはないのでしょうね。誰が損するわけでもなし、アルジェントさんに限らずヒロイン勢が兵藤さんに脱がされるのは『ハイスクールD×D』世界では日常茶飯事。放っておきましょう。被害受けない程度に距離置きながら見物でもしてね。

そんな風に気楽に構えていた私は忘れていました。

はじめの頃に感じたデジャヴウと違和感を。

この時間軸は微妙に違っているような気がする不可解さを。

まるで自分が違う時空に迷い込んだときのような、まるで自分だけが異なる世界線で

「いや、グレモリー。眷属たちのまえでリオのカーニバルに出てくる衣装みたいなのを
着て姿を現す名門貴族は、冥界広しといえども君だけだと思うよ？ 変な意味で尊敬し
てしまいそうだ、変な意味でだけれども」

「だから失礼だと言っているでしょう!? 私は別に脱ぎたかったわけじゃないの！
ただ、私はイツセーが他の女のオツパイでパワーアップするのが許せないだけよ！

愛する殿方には自分の自慢のオツパイでこそパワーアップしてもらいたいという恋
する乙女の純粹すぎる想いは、モブ女たちと性行為しまくって穢れきったあなたには決
して理解することはできない！」

「理解できないままの方がいいなあー。その変態思想を理解できたとき、僕は君たちの
いる側に立っているんだらうねえ」

ちやくららく♪ ちやつちや、ちやくららく♪ ちやくららくららく♪

「ああ、神殿だからと設置しておいた音響システムが乗っ取られてる・・・」

「エロに関係している物事で、わたくしの右にでる者はおりませんわ！ デイオドラ様
！」

「君って確か日本の神社で神様に祈ってたりしなかったっけ？」

「ハアくん、アアくん、あつふくん・・・」

「踊り慣れしすぎてるねリアス・グレモリー・・・。冥界を治める魔王の妹で、名門中の

知っている……。

——あつ。

つづく

34話 「ひねくれディオドラ理論、ひねくれセレンシア理論」／「ひねくれ者たちと愚劣なる赤！」

「よっしやああああああっ!! 何はともあれ、アーシアは無事! 装置も壊した!

ディオドラも意気消沈・・・ってえ、程ではないけど戦うやる気はなくなっている!

俺たちは全員元気! 俺の妄想が仲間を救う! 任務完了じゃねえか!

「イツセーさん!」

「アーシア!」

高らかに拳を突き上げて勝ち鬨を上げる兵藤さんに、全裸に剥かれた近い過去の記憶など無かったかのように抱きついていくアルジエントさん。

鎧をまとっているため思うように彼女の体を堪能できないのが残念そうに見えるでもない彼ですが・・・許容範囲内なのでしょうね。普段の変態行為と比べたならば。

「信じてました・・・。イツセーさんが来てくれるって」

「当然だろう。でも、ゴメンな。辛いこと、聞いてしまったんだらう?」

「平気です。あの時はショックでしたが、私にはイツセーさんがいますから」

感動的な場面です。本来ならば私も涙を流して「良かった、良かった」と満足しながら

から見守つて、二人の新たな門出を祝うべきところ。

この世界のジャンルがラブコメならば迷わずそうしたとしても非難はされない。異能バトル物であつたとしてもおそらくは同様でしょうー本来ならば。

「部長さん、皆さん、ありがとうございます。私のために・・・」

「アーシア。そろそろ私のことを家で部長と呼ぶのは止めてもいいのよ？ 私を姉と思つてくれていいのだから」

「ーっ。はい！ リアスお姉さまー！」

「よかつたですううっ！ アーシア先輩が帰つてきてくれてうれしいよおっ！」

途中で倒れてた人も復活して喜びにむせび泣き出しています。

大団円の内にフィナーレの幕が下りてくる。暖かい家族の肖像がここにはあります。

ーそして、そんな弛緩しきつた空気を肌で感じて、溜息しか出てこない空気読めないひねくれ者たちもまた、この場所には存在しておりました。

私たち混沌帝国軍と、投降してきた敗将のディオドラ・アスタロトさんです。

「さて、アーシア。帰ろうぜ」

「はい！ と、その前にお祈りをー」

熱烈に包容し合つた後でアルジェントさんが告げてから天に向かつて何かを祈ろうとして見ているのを見て、私たちは遂に我慢しきれずに大きく声を出して溜息を付いてしま

いました。「はあ〜あ．．．．．」と。

『．．．．．』

和やかムードが霧散して、敵意と悪意でピリピリした空気が室内を満たす中。私たちとアスタロトさんは兵藤さんたちから非難がましい目を向けられて、私たちは逆に彼らを白い目つきで見下ろす側に立つことになります。

はい、戦争が起きる最大の理由。敵対関係成立、と。

「．．．．．何かしら、ディオドラ。私たちの家族の絆に言いたいことでもあるわけ？」
「いやいや、まさか。君たちのホームドラマじみた絆には特に言うことはないし、思うところもないよ。むしろ良いことなんじゃないかな？」

孤児ばかりのグレモリー眷属を、数少ない暖かい家庭で育ててきた二人を中心に疑似家族を形成するのは精神衛生上、実に都合がいい。尊敬に値する」

「そうですね。親の愛情と兄夫婦の愛情、その他大勢の使用人さんたちからも絶大な愛情をもって育まれてきたグレモリーさんと兵藤さんなら、象徴的な意味での母親役と父親役に相応しい条件を与えられています。

親から子へ注がれる愛情を知らない子供たちと、親の愛情を知らながらも反抗したいお年頃な体の発育ばかりが良く育ったお嬢様口調の方々にとつてはバランスの良い入れ物です。大事にすべき家族であり家庭であると私も心底からおもっておりますよ」

別段、他意なく誉めたつもりでしたが状況が状況です。多少、刺々しい言い方になってしまったのは見逃していただきたいものですねえ。

なにしろー

「そ。誉めてくれてありがとう。微塵も嬉しくはなかったのだけどね」

「それは残念。誉め言葉自体に嘘はなかったんだけどなあ」

「・・・道化を装った戯れ言は聞き飽きたわ」

グレモリーさんの纏っていた空気が変わりました。ーと言つても、私の場合は表情とかからの推測になるんですけどねー。他の人には赤いオーラみたいなのが見えてるらしいのですが、私にはどうもそう言うのがサツパリなものですから。才能ないにも程がありますよね、本当に。

「言いたいことがあるなら今のうちに言つて於きなさい。あなたはお兄様の元に赴いて復命しなければならぬ身。」

数少ない名門を取り潰すことにはならないと思うけど、あなた個人が収監される可能性は非常に高いわ。そうなつてからでは私と直にあつて言葉を交わす機会は今より遙かに少なくなることでしょう。ですので今だけは無礼を許します。

デイオドラ・アスタロト。現魔王サーゼクス・ルシファアの妹として汝に発言を許可する。思い残すことがないように・・・」

「誠に恐縮の極み。ではお言葉に甘えましてー戦闘はまだ終わっていない。戦場はまだ形成されたままだ。」

自分たちを殺そうとしている敵が潜んでいるかもしれない状況下での家族ごっこはお勧めしないよ。美しい絆は敵の目には奇襲をかける好機としか写らないからね。奇襲で大切な仲間を無駄死にさせたくないなら、卑怯者からの忠告は参考にした方がいい。」

「・・・あなたは私たちを害する意志を放棄したからこそ、降伏したのではなかったのかしら?」

「君たちが属する国家間同士の戦争と、僕が寝返っていたカオス・ブリゲードのような非合法組織の抗争には共通点がある。それは、協定違反をしたときに罰がくだされるかどうかは罰するものと罰されるものとの力関係に依存していると言うこと。」

「どんなに正しい手順を踏んで敵将が降伏してきたとしても、死間である可能性を否定できる者は味方の内には存在しない。」

「ルール違反をしたときに罰を与えてくる秩序そのものを破壊しようとしている敵の良識に期待するなんて狂気の沙汰だと僕だったら思うけど?」

「同感ですね。」

たとえ自分たちから見て敵が敵足りうる力を失っていたとしても、敵がまだこちらの

事を「倒すべき敵、憎むべき敵、殺すべき敵」と認識している限り敵の中では未だ戦闘は継続中です。自分たち勝利者側の都合と価値観だけで敗者側の認識まで決めつけるのはリスクを増すだけです。

自分たちを憎む敵の降伏を信頼するなら、それなりの理由と根拠と裏切られる危険性を考慮した上で覚悟も決めておくのは指揮官として当然の義務であり責任でしょう」

人を信じるためには、まず疑え。それが私の信念です。

自分の信じたいものを信じるのは簡単であり、裏切る危険性を考慮しないで手を差し伸べる優しさは甘美な麻薬になりうるのです。

——糞食らえです。最悪の事態を想定せずに差し伸べられる優しさも、裏切り行為を悪し様に罵るくせして相手を信じた自分の『人を見る目のなさ』について言及しようとならない自己愛からくる信頼もすべて。

敵でも信じられる自分カッコE E E！．．．に酔いたいだけの厨二思想です。それ実際に被害がでたら洒落にならん。断固否定させていただきます。

「．．．この場所にも、まだ敵が残っているかもしれないから、一刻も早く立ち去るべきだとあなたは主張するのね？ 異住セレニア・ショート」

「はい．．．と言うか、お祈りなんて敵を殺す場所の戦場でやるものではないのでしょ

う？ 戦場は神に許しを求めて祈りを捧げる暇があつたら一歩でも前へ前へと進むべき場所です。

立ち止まつて空見上げたところで、硝煙に隠れて空さえ見えるかどうか怪しい場所なのです！

「ま、まあ、それも一理はあるとは私も思うけど・・・」

「あと、あなたたちは羽根生やせるくせに、得意とする戦場は地上の歩兵部隊なのでしょう？ 棒立ちしている暇があるなら少しでも動き回つて狙い撃ちされる危険性を下げさせるのは歩兵戦術の基本ですよ？」

「陛下。仰られることはごく尤もではございますが、流星に今このタイミングで戦術論は持ち込まれない方が常識的だと存じます」

ゼノヴィアさんにツッコまれた!? 爆破大好きボマーナイトの異名を持つ帝国軍随一の爆破狂に常識的意見で諭された日には生きていけねーっ!!!

「・・・難しいですね・・・」

ーっつてえ、思わずアリンさんみたいなこと口走つちまつたぜい！ トリニティセブンの！ キリスト系のネタが多い作品同士だからなのでしょうかね!?

「えつと・・・どうするアジア？ 俺としても今ので氣勢を削がれちまつたし、お祈り

なら家に帰ってからでも遅くはないと思うんだけども・・・」

「ううう・・・で、でもでも私どうしても今、神様にお伝えしたい思いがあつて・・・」
「う、ううん・・・」

やいのやいのと、さつきまでの険悪ムードを雲散霧消させて騒ぎ始める兵藤さんたちご一行。この尾を引かなすぎる人間関係だけは私も参考にしたくて仕方がない、この人たちの美点だと私は高く評価しまくっているところだったりします。

「じゃ、じゃあ少しだけだぞ？ 終わったらすぐに帰るからな？ それでも良いんだよな？」

「ーっ！ もちろんです！ ありがとうございます！ イッセーさん、やっぱり優しいー！」

「えへへ♪」
・・・ウゼエ。爆発四散してティンダロスの猟犬にでも噛まれてしまえば宜しいのに・・・。

「では、行ってきます。すぐ戻ってきますから、待っててくださいね？ 置いて行ったりしたらイヤですよ？」

「分かつてるって。安心してお祈りしてきな」

「はーい」

そして、テテテと小走りで駆け寄っていった室内にある、光指す一角で祈りを捧げ終えた頃に彼女の体は光に包まれ消えてなくなり、待つても呼んでも帰ってくる気配は見受けられません。

「……アーシア？」

兵藤さんのつぶやきが聞こえてきて、思わず溜息をこらえきれずに息だけでも吐いていると横合いからは陽気な声が愉しそうに論評するのが聞こえてきます。

「第一幕、これにて閉幕。続いて第二幕のはじまりはじまり〜」
もう溜息すらも出てこない……。

34話後半「ひねくれ者たちと愚劣なる赤！」

「ーちっ。時空が作画的に歪められていたために思うように転移ができず、今になってようやく手に入れた首級がビシュッ如きとは……計画には根本的な再構築が必要と判断すべきであろうな」

声がしたので振り向くと、そこには軽装鎧を身に纏いマントまで羽織った見知らぬ中年男性が宙に浮いておられます。……顔色が微妙に悪くて汗みずくな点から察するに、アスタロトさんがゲリラ戦術まがいの嫌がらせを仕掛けまくってましたね確実に。

「……誰？」

他の人たちが意外さに打たれて黙り込む中、偉そうな相手には突つかかっついていかなければ気が済まないグレモリーさんが問いかけて、相手の方も同様の態度で偉そうに応じて答えてくれました。

「お初にお目にかかる、忌々しき偽りの魔王の妹よ。私の名前はシャルバ・ベルゼブブ。偉大なる真の魔王ベルゼブブの血を引く、正当な後継者だ。先ほどの偽りの血族とは違う。」

ディオドラ・アスタロト。よもや貴様、この私が力を貸してやったというのに裏切るとはな……万死に値する！ 先日のアガレスとの試合でも無断でオーフィスの蛇を使い、計画を敵に予言させた件も併せて貴公は余りに愚行が過ぎた。報いを受けるがよい」

怒ってはいるようですが今のところ冷静さを維持したまま、突然現れた……シャベルさん？ だかんだか未だに両手を上げた状態で最初の位置から一歩たりとも動いていないアスタロトさんに指先を向けて紫色の光を集めていると、アスタロトさんは皮肉な感じに唇をゆがめて嘲るように冷笑されました。

「だとしたら計画の失敗は君の落ち度だね、ベルゼブブ。もつと早くに僕を始末しておけば、こんな無様な事態にまで立ち至らなかつたかもしれないだろうに。今更になつ

てシャシャリデてきて喚くなよ、現魔王に選んでもらえなかつた旧魔王の末裔さん？

目上に刃向かうだけでも徒党を組まなきや吠えることすら出来ない負け犬は、哀れなものだねえ」

「!!! 貴様！」

鼻白まされた一瞬だけ間を置いて、彼の指先から放たれた光の束がアスタロトさんの体を包んで消えて無くしてしまわれました。

「はあ、はあ．．．ふ、ふん。哀れなのは貴様だディオドラ・アスタロト。あの娘のセイクリッド・ギアの力まで教えてやったのに、モノにもできずじまい。たかが知れているといふものよな」

殺した相手を前にして、勝ち誇らなきやいられない心の貧しさと虚栄心。これだけで私は彼のことを嫌いになると決めるのには十分すぎました。

はつきり言つて、無様に過ぎます。

「その、たかが知れてる血族さんと同じ血が流れてる人がトップに立つてる組織が旧魔王派ですからねー。そう考えればアルジェントさん一人だけでも排除できた彼は、むしろ良くやった方だったのではありませんか？

なにしろ外で死んだ“あなたの”部下たちでは、掠り傷ひとつ付けられなかつたのですから」

私の毒を込めた挑発に、アツサリと眉の角度を急上昇させる正当なる魔王の後継者様。この程度の子供だましに踊らされるなよと嘆きたくなるほどの短絡ぶりです。これならグレモリーさんの方が遙かに人格面での精強さを発揮してらっしゃいますよ自称魔王様。

「口を慎め人間。貴様等如きひ弱な劣等種族など、我々悪魔が魂を食らうために生かしておいてやっている身に過ぎぬのだからな。分際を弁えよ」

「あいにくとひ弱な劣等種族の中でも特に弱い個体に属してしましてねえ。悪魔の力なんてサツパリ分かりませんので、全部同じにしか扱えないんですよ。

魔王も下級も中級も上級も偽りも本物もぜんぶ引つ括めるめて悪魔族という名が付けられてるらしい生物さんたちです。

どれの攻撃だろうとも一撃で死ぬことに変わりない身としては、強い弱いなんてどうでもいい。交通事故で車に突っ込まれてきて殺されるのと何ら代わり映えない平々凡々な脅威度の存在に過ぎませんよ」

「.....」

無言のまま放ってきた光の攻撃は、当然のように天野さんの右手で弾かれて飛んでいき、次弾を含めて紫藤さんとゼノヴィアさんが周囲を警戒しつつ防御陣形をとってくれましたので夢見る魔王様如きの攻撃では届くことは二度とないでしょうよ。

「ふ。威勢が良かった割に部下に守られねば何もできぬ無力なガキか。つまらぬ」

「申し訳ありませんねー。なにぶん、強い人たちに守ってもらわないと何もできない無力でひ弱な人間でしかないものですから、安全な場所で好き勝手に無責任な悪口雑言並べ立てるぐらいしか出来ないんですよ。臆病な劣等種族にはお似合いの戦い方だと思われるでしょう?」

「……………」

これ以上なく不愉快そうに顔をゆがめた魔王様は目を泳がされ、ちようど目に付いたグレモリーさんへと話の矛先を向けられてしまわれました。

「どうやら私よりは『自分好みな』会話ができると踏んだようです。」

案の定というべきなのか、エロいくせに変なところで大真面目になるグレモリーさんたちは自称魔王様と熱弁開始。私たちは暇となります。

「……………」と、そう言えば兵藤さんが置いてけぼりになってましたね。

「どこ行つたのかなーつと……あ、見つけました。夢遊病者みたいにフラフラ歩いてらっしゃいます。」

「アーシア? アーシア?」

ふむ、なにやら眩かれ始めましたね。

「アーシア? どこ行つたんだよ? ほら、帰るぞ? 家に帰るんだ。父さんも母さん

も待つてる。か、隠れていたら、帰れないじゃないか。ハハハ、アーシアはお茶目さんだなあ」

うん、これは現実逃避されてますね完全に。

私には身長的に不可能ですが、頭に45度の角度で打撃を入れればリセットできるんでしょうかねえ？

「アーシア？ 帰ろう。もう、誰もアーシアをいじめる奴はいないんだ。いたって、俺がぶん殴るさ！ ほら、帰ろう！ アーシア、体育祭で一緒に二人三脚するんだから：」
「下劣な転生悪魔と汚物同然のドラゴン。まったくもって、グレモリーの姫君は趣味が悪い。その赤い汚物。あの娘は次元の彼方に消えていった。すでにその身も消失しているだろう。ー死んだ、ということだ」

町中を徘徊している浮浪者並に弱々しく見える今の兵藤さんを与しやすきと見て取ったのか、あるいは計画失敗による事実上の敗北を過剰なまでに持ち上げようとしてなのか、シャベルさんが無駄にアルジェントさんと兵藤さんに限定した人格攻撃を行い始めましたね。

そんなに自分が優れた存在で、相手が批評するにも値しないと信じているなら冷笑する手間すら惜しむのが当たり前の反応なのですが、所詮は与えてもらった力があつてさえ多種族と野合しなければ上位者に刃を向ける勇氣すらない臆病者な魔王様の器など

を失いました。

こんな醜い生き物を表現する単語はひとつだけです。ひとつあれば十分です。あまりにも無様すぎる生き物だ、の一言だけで。

『我、目覚めるはー』

《始まったよ》《始まってしまっうね》

『覇の理を神より奪いし二天龍なりー』

《いつだって、そうでした》《そうじゃな、いつだってそうだった》

『無限を喰い、夢幻を憂うー』

《世界が求めるのはー》《世界が否定するものはー》

『我、赤き龍の霸王と成りてー』

《いつだって、力でした》《いつだって、愛だった》

《何度でもおまえたちは滅びを選択するのだなっ！》

「「「「汝を紅蓮の炎に沈めようー」」」」

愛だの世界だのと大仰な単語を並べ立てておきながら、結局は壊すことしかしようとしていない君たちこそが、他の誰よりも滅びを望んでいるだけだろう？

他人の間違いを指摘するより先に、自分自身の醜い今の姿を何とかしてから出直してこいよバカ竜帝。分かったかい？

他人に勝っても自分に勝てない負け犬ドラゴンのセキリユーテーくん？」
つづく

*流れる的に使うことが出来ず、ボツにしたセレニアにとつての『信頼と裏切り』についてを僅かに残っていた文章から抜粋して掲載させて頂きました。

セ「いつだれが裏切るか分からず、自分以外は誰も信じられない状況下で誰かの事を信じ抜くのに必要なものになにか分かりますか？」

*「まずは相手を信じる事。信じてもらうためには、信じることから始まるのが人間関係の基本」

セ「正しいですが、自分が相手をどんなに信じたとしても相手がそれをどう捉えるか、応じるか否かは相手の自由であり権利です。

「好きだから愛しているから、あなたも私を愛する義務がある」ではストーカーと同じ。愛も信頼も損なう結果を生むだけの事です」

ヒロインども『……』

セ「『信じる』とは自分の中で生まれて終わる閉鎖的な感情であり、本質的には相手との物理的な裏切り等の人間関係になど振り回されなければならぬ必要性が皆無な代物です。

信じたのなら裏切られようと信じ貫いてしまつて構わないですよ。

自分個人の心の問題でしかない限りにおいて『相手の裏切り』は、憎しみに駆られて裏切り者を殺そうとする自分の復讐戦を正当化する理由には決してなり得ない。相手に否定された『人を信じた自分』を自分自身でまで否定する必要性はありません」

*「ならば……どうすれば良いと言うのだ？　裏切られて当然の環境の中、信じた

相手に裏切られない手段なんて報復する以外には……」

セ「簡単です。相手の裏切りと自分の信頼を別物に捉えればいい。

どんなに相手が裏切ろうとも自分が信じ続けている限り、自分の中では相手の裏切りが成立することは決してない」

*「そ、それは詭弁だ。不可能だ。人は裏切る生き物なのに、裏切られても信じてたら切りがない——」

セ「その通り。『切りがない』。だから面倒くさいんですよ、疑うなんて行為はね。幾らやつても終わりなんて来やしない行為を死ぬまで繰り返さなきゃならなくなる。現

実的手段としてやってあげてるんですから、心の中でくらいは好きに信じさせてくださいよ。

そこいら中が裏切り者候補で溢れた状況で誰も信じられないなら、せめて自分が信じると決めた相手が目の前で毒を盛った盃を差し出してきた時に笑顔でお礼を言いながら信頼と共に飲み干すぐらいさせてくれたっていいじゃないですか。気持ちの問題は個人的な自由でしょうか？　なんでそこまで周囲の環境に合わせさせられなくちゃいけないんだか全くもう……」

＊「……………(唾然ポカーン)」

セ「誰をどれだけ信じて、信頼を最大限行動で表したとしても、最終的に裏切るかどうかを決めるのは相手の一存のみ。」

ならせめて『相手が裏切るかどうかなんて関係ない、私が相手を信じ続けたいんだから信じ続けさせてくれ。表向きの行動では公の立場を優先してやるからそれでいいだろう？』と、自分の中にしか存在しないし価値もない感情論でくらい自分の一存だけで決めさせて頂きたいものです。

『裏切る自由』は誰もが皆認めてくれるのに、『裏切られても信じ続ける自由』は殆どの人から否定されてしまう。不公平な世の中ですよね本当に。やれやれです」

先行予告篇 「ディオドラがドライグイッサーを言葉で蹂躪する会話シーンのみ」

「大体さく、何をそんなに怒っているんだいイッサー君？ 守ると誓ったアーシアを殺されたから？ 自分が好きだった女の子を勝手な理由で他人に穢されたから？ 自分が彼女の何をどう思っているかも知らない赤の他人に自分を愛してくれてた少女を罵倒されたから？ それだけだろう？」

そんなのーとつくの昔に君自身が『至高の墮天使レイナー様』を相手にやってしまってる事じゃないのかい？」

『!!』

「アーシアに関してのことは逐一報告は受けている。あの一件でも最終的な落とし所を伝えられてなかったら多少なりとも心穏やかではいらなかったらうね。」

とは言え今それは余談の類。本命はここから。」

報告書によると彼女は墮天使総督のアザゼル殿に恋い焦がれていて、彼の役に立ちたいから、少しでも力になりたいからとアーシアを殺して治癒能力を奪おうとしたらしいのだけれど、そのとき君は彼女に何した？ 何を言っていたか覚えているかいイッサー

く〜ん?」

『・・・・・・・・』

「聞かれたけど答えたくない質問には答えて上げよう、悪魔らしい悪魔のディオドラさん。」

まず、仲間全員ぶつ殺して、自分以外の愛する人のために好きな子殺されたから怒って殴って見殺しにして、その時言つてた台詞を一部抜粋。

『逃がすか、バカ!』『吹っ飛べ!　クソ天使ツ!』『ざまーみろ』ーくはは、かつこいいねえクールだねえ、残忍で傲慢な悪魔らしい愛への否定だねえ」

『グ・・・ア・・・』

「追記：騙されてたとは言え一度は愛した女の子を自分の手で殺したくはないからと、敬愛する主様に処刑役を押しつけた直後につぶやかれた一言です。

『グツバイ。俺の恋。部長、もう限界ツス・・・。頼みます・・・』ーくつひやはははっ!

COOL!　君最高にクールな糞つたれな台詞をカッコいいと思いきんで言つてたんだね!　反吐がでるよ!糞つたれな口先ドラゴン!　自分だけ綺麗なフリして人様をけなしまくつてんじゃねえよ糞ボケ野郎めが!」

『グアアアアアアアアッ!!!』

「おまえも僕と同じで、人でなしなんだよ、同類なんだよ、己の欲望全肯定な悪魔なんだよ、同じ穴の貉なんだよ。」

「だいたい今の強さに上がるまで君、何体の悪魔やら墮天使やらを殺してきた？ 同じ仮面付けて似たような攻撃してきてたってね、彼らは敵キャラの戦闘員ABCじゃないんだよ、一個の自我と個性を持った悪魔という種族の中の一人なんだよ。さつきも言ったじゃないか、戦争と子供向け勸善懲悪作品は違うんだって。忘れたのかい？」

「彼らと君の何が違うか分かるか、赤龍帝？」 答えは『何も』、だよ。何も変わらないんだ。

「せいぜい生まれと育ちが違うだけで、彼らにも産んでくれた両親がいて、旧友とともに過ごした過去の時間があつて、名門であるが故に義務として妻と子供と家とを持つてる、どこにでも居る平々凡々な下級・中級・上級悪魔の皆様方だ。」

「家に帰れば迎えてくれる家族もいるだろう、愛する妻や、結婚予定の恋人だっているかも知れない。」

「その平凡で当たり前な日常という名の幸福を、自分勝手な価値観の押しつけで壊すのが戦争だ。彼らにとつてのアーシアを、君がその手で殺しまくるのが戦争なんだよ」

『グギャ、ア、ア、ア……』

「君は今まで何人の、他の誰かにとつてのアーシア・アルジェントを殺してきたと思つて

いるんだい赤龍帝？

今のまま戦争していく中で強くなることを望むのならば、どれだけ多くのアーシア・アルジェントを殺すことになるか分かった上で戦争に参加してきたんだよなあ、ええ？

強くてお偉い赤龍帝様はさあ？」

『ギャアアアアアアオオオオオオオオオオオツツ!!』

「リアス・グレモリーとの婚姻をカオス・ブリゲードとの戦いで手柄立てて認めさせようと思っっているんだったら積まれる死体の数はもつともつともーっつと増えるんだろかねえ！

そして君とリアスはハッピーエンド！ お姫様と結ばれた王子様は一生幸せに暮らしましたとき！ ラストシーンは真っ赤な絨毯の上を歩いていくバージンロードで決まりだね！ 血と炎の色した真っ赤な真っ赤なバージンロードの上を！

自分の幸せがほしくて殺した敵の死体を敷き詰めて、見えないようにコンクリートで舗装して踏みしめながら栄光の王位へ駆け上がる！

最高だ！ 最高に最低な人でなしストーリーに吐き気をもよおすほどに感動した！

反吐がでる！ 反吐しか出したいくないほどに！」

デイオドラ編完結回「当初に想定していた内容でデイオドラ編を締めさせてもらいました」

意図的に薄暗さが保たれている豪華な内装の一室に、玉座に座しながら宙に浮かぶ円形の投影された別空間の映像に見入っている男がいた。

男の名はシャルバ・ベルゼブブ。カオス・ブリゲードに通じた悪魔勢力『旧魔王派』を率いている首魁の一人であり、血縁だけなら現魔王サーゼクス・ルシファーにも引けを取らない名門中の名門のトップでもある。

「ロキを利用してサーゼクスやオーデインを始末しようと思った計画は失敗に終わった。あの時は所詮、異郷の神などこの程度かと失望しかけたが悪神とは言え奴も神。ただ一方的に破れただけでも終えない。」

なにかしらの算段があるのだろうかとうとデイオドラの計画に手を貸す片手間で見つめてみたのだが、思わぬ収穫が待っていたものだな……

彼が憂い顔で見つめる先に写っているには玉座のまで階に座り込み、異国風の杯で異国の酒を一人たしなんている若い男、デイオドラ・アスタロト。彼らの計画において、ただ燃やされるためだけに仕立て上げてやった藁人形でありながら、どうにも中途から行

動に不審さが目立つようになり、最近では造反の可能性も考慮に入れて計画の練り直しを検討していたのだが、この段に至り遂に彼の真意をシャルバ・ベルゼブは看破した。「ディオドラの食わせ物め。はじめから己が目的のために我ら旧魔王派を含むカオス・ブリゲードすべてを利用して気しかなかったのではないか。

絶望者故に欲がなく、狂気じみた愛欲を我が目に捉えきれなかったは不覚の極みよ。被らされた汚名は返上しなくてはな・・・」

だが、この段階から彼奴めが言うところの『中止されたレーディングゲームの代わりに行く、アーシアを賭けたゲーム』に介入する余地はあるだろうか・・・？

ー難しいだろうな。

シャルバ・ベルゼブは常の傲慢さを放棄して最大限まで『敵』を過大評価し、その上で自分たちの計画した作戦で手に入れたい目的と、ディオドラが欲しているモノとを比較した場合、どう工夫しても互いの計画破綻は避けられない。そうなればサーゼクスとグレモリーを利するばかりで得がない、骨折り損の草臥れ儲けなど正当なる魔王の後継がやることではない。

「なにより、この神殿は奴自身が直々に設計した代物。どこになにが仕掛けてあるのか、そもそも奴の想定していない想定外な事態というのが分らん。

敵を騙し貶め落ちるところまで落としてやるのが奴の趣味であり、特技でもある訳だ

からな。私まで奴の汚らしい計略の駒に組み込まれる事態など論外だ」

「いややはり自分自身が武力によって介入する形は、最終段階まで待つべきか。」

そう結論づけた彼は、思い切つてデイオドラのやりたいようにさせてしまふ方針に計画の一部を切り替えた。どのみち奴の目は生きること諦めて死を望んでいる者特有の其れだ。死に場所を求めているだけなら自分たちの計画にさほどの影響を与えるほどの願いを持つてはいないであろう。

むしろ、死が確定している小物に思い知らせてやろうと固執するよりかは、自分自身の求める『達成目標だけ』を横合いからかすめ取ること残りの雑魚どもをデイオドラに向かわせていく方が効率面で優れている。

「ならば我が同胞、デイオドラ・アスタロトよ。私から貴様への最後の手助けだ。貴様にとつては端役でしかない女を一人だけ舞台の上から退場させてやるとしよう。劇本番で余計な茶々を入れられるのは貴様も好むところではないだろうからな。くくく……」

そう言つて彼は右手の平を円形のスクリーンにかざして呪文を唱える。

こうして彼はホストとしてゲストを居館へ招き入れるため支配階級『貴族』に与えられた当然の権利を行使し、拒否権のない招待状を紅蓮色の髪をした一人の少女貴族の元へと送りつける。

悪意ある演目の、第二幕が幕を開ける――。

「――あら？　この気配は……」

私は廊下の隅で蹲るように存在していた赤い球体を目にした瞬間、
“その事を” 察知させられて不愉快になる。

何のことはない、私宛の安っぽい挑発だ。先ほど倒したはずのデイオドラの眷属に生き残りが居て、グレモリー家の誇りを汚すような毒電波もどきを発散し続けている。

「どうしたんですか？　部長。急に立ち止まったりして……」

イツセーが心配そうに声をかけてきてくれるけど、これは彼を頼らなければならないほどの事態じゃない。私一人で十二分に対処できる程度の範囲だわ。

「ちよつとね。すぐに済むから、あなたたちはここで待っていてちようだい。大丈夫よ、すぐさま終わらせて帰ってきて上げるから」

「え？　いや、すみません。部長がなに言っただか俺にはさっぱりなんですけども……」

「いいからいいから♪」

――先ほどの試合で朱乃にイツセーとのデート権を取られている手前、ここは何とし

でも私一人で勝利してデートの一件を有耶無耶にしてやる必要性があるんだもの。たとえイツセーにだって、言うわけには行かないわよね？ うん、合法合法♪
「さて、と。今度こそ私が手を下すに値する相手が出てきてくれると嬉しいのだけどー」

言いつつ赤い球体に触れようと近づいていった私は、気がつくやうと暗黒の虚空を真つ逆様になって落ちている最中だった。

「!!」

でも、悪魔にとって突然の落下程度は大した脅威になり得ない。当然よね。

だって、羽を出して羽ばたかせて優雅に着地を決めれば済む程度の些事だもの。

密閉された屋内にあるというだけでは説明できない魔力量が充満してしてくれたのもあって、私は難なく床に着地し優雅に髪をかきあげる。

「・・・ふっ。この程度の罨でやられる相手がいると本気で思っていたのかしらね？ それこそ程度が知れると言うものよー」

ーズドン！

「ぶべっ!!」

「・・・気のせいかしらね。優雅に着地を決めてポーズングしている私の背後で何か落下してきて無様に着地を失敗した時みたいなの、見苦しいことこの上ない音と声

が聞こえてきた気がしたのだけれど……。

「……何しているのよ、異住セレニア・ショート……。あなた完全無欠の部外者でしように……。」

「いてて……。存在自体が世界にとつての部外者に過ぎない巻き込まれ系少女に聞かれなくても、答えようがないご質問ですねえ……。」

鼻つ柱を押さえながらも涙目で立ち上がってきた人間族の銀髪少女に、私は盛大なため息をつかされる。全く……。いつでもどこでもどんなことにも介入したがりになる子なんだから……。

手を貸して立ち上がらせてあげるかどうか迷い始めたとき、暗くてよく見渡せてなかった部屋の深奥からゆっくりとした声とともに貴族服をまとった男が姿を現してくるのを視界の隅に捉えた私は構えをとりながらも距離を置く。

「勇ましいな。だが、無駄な抵抗でもある。蛮勇は勇敢さとは真逆の臆病からくる感情であるとするべきであろうなりアス・グレモリー。それが正当なる魔王の血統に楯突く者が持つべき最低限度の資質と言うものだ。」

「……誰？ 私たちをここに呼んだのはあなたなの？」

「如何にも。もつとも、そこのおチビさんは巻き込まれただけのようだがね。哀れなことで。汚らわしき偽りの魔王の血を引く小娘の側に侍るなどという愚行を犯すからそう言う羽目にもなるのだ。死ぬまでの短い間に後悔し、よく学習しておくことだな」

名乗りよりも先に説教をかまされたことで私は怒りの深度を引き上げたが、相手は依然かわらぬままで悠然と構えて戦闘態勢すらも取つてはいない。

圧倒的自信に裏打ちされた無謀さではあるけれど……いったい彼は何者なの？ 冥界広しと言えども私の名前を知った上でこうまで自分を持ち上げられる人材なんて数えられる程度しかないはず……。

私の予測を肯定するようにうなずいた男は、芝居がかった仕草で一礼して見せると、礼儀正しい名乗り方で口上を述べてくる。

「我は正当なる魔王の血統シャルバ・ベルゼブブ。今この場でリアス・グレモリーを殺す者」

予想外すぎる大物自身の登場に、私の心かは心胆から悲鳴を上げる。

「シャルバ・ベルゼブブ……ですって!?! 四大魔王の一角までもがカオス・ブリゲードに寝返ったというの!?!」

「勘違いしないでほしい。奴らと手を組んだわけではなく、我々が奴らを利用しているに過ぎん。忌まわしい天使も墮天使も我々悪魔が利用するだけの存在でしかない。」

相互理解だ和平などと、サーゼクス・ルシファーは甘すぎるのだよ。どのみち最後は悪魔以外すべての種族を滅ぼすのだから、今の内から捨て駒として利用しておくことのどこに矛盾が？」

「多民族から力を借りなければお兄様と正面から戦えない卑劣感の癖して偉そうに……」

「それでいい。元より我ら悪魔は知恵によつて人間たちを誑かし、絶望に沈めてもがき苦しむ様を見ながら悦しむことをこそ良しとすべき種族。正々堂々真つ正面からなどと言ひ出す貴公等の方こそ悪魔としては異端なのだよ」

「……うん、微妙に正鵠を得ているところが地味に否定しづらいですね」

「――唐突に、何の前触れもなく穏やかな声を発した異住セレニアだったけれど、その程度はいつものことと私は気にしなかった。」

如何に彼女の言葉で傷つけられた過去があろうとも、今この場において戦える戦力足り得るのは私だけ。彼女は気にくわないところもあるけど、今だけは貴族として守つてあげる対象とすべき一般市民だわ！ 感謝なさい異住セレニアあ……って、何やってんのよあなたは!? 私の前に出てシャルバと向き合うなんてバカじゃないの!? 死にたいの!? 殺されちゃうわよ一撃で！

「ほう。我が前に立ちはだかる人間がいるとは思ひもしなかったが……戯れに名を尋ね

てやろう。汝の名は何処や？」

「ご自由に呼んでいただいで結構ですよ？ どうせ、あなたがた貴族にとつて自分たちにたてつく民衆をどう呼び表すかなんて自分たち自身以外に決める権利を認めていないでしょうからね。私は無駄な徒労は嫌いなんですよ」

「ふむ、なるほど。一理ある。では、人間の小娘よ。汝は何故、我が前に立ちただからんとする？ グレモリー共々滅ぼされたがる趣味があるとも思えんが・・・例の友情とやらが理由か？ あんなモノ、殺し合いの場においては何の意味もなすまいに」

「どう解釈されるかはご自由に。それは憲法で保証されている個人の自由ですから私がどうこう言うべき事ではありませんのでね。あなたの主観に口出しする気も興味すらも持ち合わせてはおりません」

平然とした態度と口調と表情で言つてのける異住セレニア。

恐れを知らない小娘の無礼を前にして急激に機嫌を悪化させるベルゼブブ。

「―そして異住セレニアの後ろで蚊帳の外にされてるはずなのに、なぜだか冷や汗と震えが停まらなくなつてる紅髪の紅蓮姫リアス・グレモリー！ つまりは私！

なんで会話始まった直後は主役っぽかった私が端役扱いで一番の被害者も私の窮状に?! 訳が分からないわ！ 誰か私に説明しにきて！ そして、ついででもいいから助けて！

みんなが居てくれたら対抗できたかもしれないシャルバのプレッシャーが怖すぎるのよーっ!!!

「・・・物語での勇者は常に敵より弱く、それが故に勝因となつて栄光を手にするが現実においては然に非ず。勇敢であろうとも弱き者は早死にし、臆病な卑劣感は長生きする。それこそが現実の戦争。貴様のそれは勇敢でも蛮勇でもなく、無謀と称するのだよ」

「そうなのですか？ 私としましてはグレモリーさんだけが殺されて密室空間に男性と二人で取り残されるよりかは、綺麗なご令嬢の隣の席で一緒に殺される方がマシかな、と思っただけなのですが？」

「ふっ・・・そう言う覚悟の決め方か。その意気や良し、望み通りグレモリーの妹ともども二人まとめて塵一粒残さず消し飛ばしてくれようぞ」

「ーあれ!? 私いま完全におまけ扱いされてなかったかしら!? カオス・ブリゲードが殺したがつてるのって私だったはずよね? そうよね? そうだったわよねえ!?! 私を殺してお兄様を怒らせたとか、私を殺せば三種族同盟は破綻させられるとか、私を殺すことで各陣営の憎しみを煽り停戦状態を破棄させるとか・・・って、全部私個人の価値とは関係ない!?!」

え、うそ？ 冗談よね？ 冗談なのよね？ 私って今までずっと自分とは直接関係してない理由で殺されかかってきてたのかしら？ それって名門グレモリー家の次期当主として以前に一人のプライド高い女の子として許すわけにはいかない行為なんですけどもおっ!?

「やや過剰ではあるが・・・先ほどの無礼に対する褒美だ。苦しむ余地さえ与えぬほどに圧倒的威力の魔力弾でグレモリーの妹と一緒に消滅しろ、人間。礼はあの世についてから述べよ。さらばだ」

遂には付属品扱いで殺されかけてる――っ!?

いや！ こんな殺され方だけは嫌！ 嫌なのよ！ お願いシャルバ・ベルゼブブ！

殺すんだったら私の名前を名指しで呼んでちょうだい！ このままだと私、名門の時期当主として死んでもしに切れなくなっちゃう――っ!!!!!!

「はあああああああつ!!!!!!」

シユボオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!

「いいいいいいいいいいいやあああああああああああああつ!!!!!!」

チユドオオオオオオオオオオツン
!!!!!!!

「・・・少々やりすぎたか。私としたことが、大人げなかったかもしれないな」

魔力弾の着弾箇所からは未だに煙が上がり続けており、その向こうに広がる悲惨な惨状が予想できて心地がよい。

「だが、いささか興にノリすぎたな。サーゼクスに己が愚かさを味あわせるため放り込んでやる予定だった愚妹の首まで消し飛ばしてしまうことになるうとは・・・反省の余地がある。今後のためにも多少の自制は止む無きこ・・・なにーっ!?」

私が絶叫したのは伝統を重んじる正当悪魔勢力《真魔王派（不愉快なことに敵からは「旧」などと言う枕詞を付けられてはいるが・・・）》を率いる身でありながら「忍耐」

などと言う戯言に類する概念の必要性に気づいてしまったから・・・と言うだけではなかった。より以上に驚愕すべき大事態が目の前で勃発してしまっていたからだ。――

「何故だ!? なぜ生きている! 何故死んではおらぬのだ!」

有り得ないことに生意気な人間の小娘は生きていた。生きてそのままグレモリーの小娘の隣で自らの髪を指先でいじっている。まるでドコにでもいる平凡な町娘と変わらぬ所作で四大魔王の一角の攻撃を受けきって見せたとも言いたいのか!?

「あり得ぬ! いや、この様な古き伝統に背く蛮行など決してあつては成らぬ! 成らぬ事なのだ!」

「そんなに気になさるほどの事じゃありませんよ。別に私がどうこうしたから助かったって訳でもないですからね。私たちが殺されなかつた理由は非常にシンプル。

〃指揮官のたしなみ〃として死んではいけなかつた。――ただそれだけですよ」

そう言いながら人間の小娘は自身の目の前になにか透明な壁があるかのようにコツコツと手の甲で叩くジェスチャーをして見せることで、私を再び挑発してくる。

「なるほど・・・相分かつた。つまりは貴様、私と力比べがしたいと申すのだな?」

「・・・・・・・・え?」

「よかろう。この私が――正当なる魔王の後継、ベルゼブブの地に連なりし者シャルバ・ベルゼブブが身の程知らずな挑戦を受けてやる。己が無謀を地獄の底で悔い改めよ!」

「え、あの、ちよつと？ なにかデカすぎる誤解をしてらつしやいませんか？ 私はただ・・・」

「かああああああつ!!!!」

「聞けよ、人の話を。馬の耳に念仏魔王」

ぶちん。

よし、殺そう。絶対に。骨も残さず焼き尽くしてから内蔵引き吊り出して食い散らかして地獄の苦しみを味わい尽くさせてから殺そう。絶対にだ。

（最初の一步目で残り全部がオジャンになってることに気づいてない冷静さを放棄しちゃったアホ悪魔思想。フィクションでは偶にいます、こういう悪魔）。

そこから始まる一方的なシャルバ・ベルゼブブの全力攻撃魔法のオンパレード。

何も出来ない（比喻ではなく、本気で立つてゐる以外には何も出来ない）セレニアは、為す術もなく夕麻にもらつた髪に付けてるヘアピン（小型のエネルギー力場発生装置に対ビーム用ミラー・コーティングをほどこすことで強度を底上げしてある緊急防御用兵装。世界観と言うよりも戦闘規模の違いからアホみたいな強度を誇る。具体的には数光秒先を亜音速で飛翔している宇宙戦艦に当たれば撃沈可能な高出力ビーム兵器を受けても数発までなら耐えられる程度）に守ってもらつてゐることしか出来ず、ただ突つ

立っているだけ。（有効範囲が狭いのでね）。

そして彼女の直ぐ側の隣では、本来のメインヒロインであるリアス・グレモリーは「きゃー、いやー！ イッセー早く助けにきてー！」と喧しく叫びまくってるだけ。（今回は本気で役立たずなお荷物キャラです）

勘違いから始まったシャルバ・ベルゼブブの一方的で無意味で無価値で無効化されてしまう蹂躪が徐々にその威力を増していた頃、こことは違う別の部屋では別のドラマが展開され始めようとしていた。

「・・・ディオドラの奴、死んじまったんだな」

「・・・ああ、自らの心臓を自らの手で掴みだし、握りつぶしてさえしてみせてね。ある意味今までで一番印象的な敵の最期だよ・・・」

「・・・でも、なんでこんなにまで死に顔が・・・」

ー満足そうに、うれしそうに、まるで子供が楽しい夢でも見ているかのような笑顔を浮かべて死んでいけるのか。塔城子猫にはどうしても分からなかった。理解できないし、したくもないと心の底からそう思っていた。

だって自分たちは生きるために戦っているのだから。生きてほしくて敵を倒してい

るのだから。

こんなー今まで生きてきた人生こそが悪夢で、今日の前にきた自分達死を与える側の到来した今日この日こそが長年待ち続けてきた満願成就の夢が叶う日、一夜だけの幸せなユメを見ることが許された夜なんだとでも言うかのような決着の仕方なんて、私たちは決して認めない。絶対にだ。

「イツセー君、気持ちは分かるけど・・・今はアーシアちゃんを救うことを優先して上げなくちゃ」

「木場・・・あ、ああ、そうだな。いや、忘れてたわけじゃないけどね？」

誤魔化すような照れ隠しで笑ってみせる親友の笑顔に、自分も笑って返しながら木場祐斗は了解している意志を伝えながら、もう一つの懸念事項とともに少しだけ先を急ぐよう忠告もする。

「わかってているよ。幸いディオドラ自身による自殺が彼女の解放条件のひとつに設定してあったみたいで、彼女を捕らえている装置は現在の所機能停止状態にある。問題なく救い出せると思うよ」

「おう、気遣いサンキューな」

「気にしなくていいよ。友達だろう？」

ーでも、少しだけ急いだ方がいい。なんだかイヤな予感がするし、部長たちのこと

も気がかりだ。簡単にやられるような人じゃないのは分かっているけど、それでも何が起きるか分からないのが戦場だからね。油断すべき所じゃないと僕は思っているよ？」
「おう、了解した。今すぐアーシアを救出して、即座に部長救出作戦も決行してやるぜ！」

万事おっぱいドラゴンパワーで解決だ！」

『・・・セイクリッド・ギアの力を過信しすぎるなど何度言わせれば・・・』

ドライグからのお小言を聞き流しながらイツセーは、アーシアを壊れた装置の中から救い出し、メロドラマっぽい艶シーンを演出してから改めて謎の敵に浚われた部長救出に向かおうしたところでアーシア自身から待ったがかかる。神様に感謝のお祈りを捧げたいと言いだしたのだ。

「・・・んなこと言われても部長の身の安全がな・・・」

「お願いします、イツセーさん！ 私にとつては大事なことです！」

必死の表情の女の子（しかも抜群にかわいくて自分に好意を抱いている金髪美少女）
にお願ひされて断れる心の強さを持つてはいないし、そんなの持つてたら切り捨てて
いる生き方の兵藤一誠はとたんにやに崩れた表情になり「少しだけだから？ 危ない
と感じたら直ぐに引き返すんだぞ？」と全面的な許可を与えて送り出し、不浄なる神
殿だ
ろうと一応は神殿としての体裁だけは保つて作られたからなのか天からの光差す祈り

のではない。

あくまで眼下で突っ立ったままのセレニアに叫んでいる征服宣言にすぎない言葉のはずなのだが、人の話が聞こえなくなってるはずのイツセーにさえ心にロンギヌスの槍がブスブス刺さりまくってハリネズミ状態にさせられるほどピンポイント攻撃になりまくってしまっていたりする。

「部長、アーシアがいないんです。やつと帰れるのに。先生が言っていた神殿の地下に隠れなきゃ。でも、アーシアがいないと……と……と、父さんと母さんがアーシアを娘だつて。アーシアも俺の父さんと母さんを本当の親のようにつて……」。俺の、俺たちの大切な家族なんですよ……」

「やはり貴様は懦弱だな、人間！ 身の程知らずに大口ばかり叩いているから斯様に無様な今の現状があるのだと思ひ知るがいい！

貴様の弱さが、もろさが、傲慢きわまる自惚れが己自身と周囲の者共とを焼き尽くすのだと知れ！ 傲慢こそ綻びを生む最大の元なのだ、地獄の底で二人一緒に学び直してくるがよい！」

「……許さない。許さないッ！ 斬る！ 斬り殺してやるっ！」

「そうだ！ 戦場において必要なのは敵を殺す意志だけだ！ それ以外は必要ない！

「え、は、え？ いったってって言われても、いつの話で何の話かサツパリなのだが……」
『無限を噛い、夢幻を憂うー』

《世界が求めるのはー》《世界が否定するのはー》

「おーい、人の話を否定する前に人の話を聞いてからにしろー。私はお前から質問の答えを与えてもらっていないのだぞー」

『我、赤き龍の霸王と成りてー』

《いつだって、力でした》《いつだって、愛だった》

《何度でもおまえたちは滅びを選択するのだなっ！》

「だ・か・ら・な・ん・の・は・な・し・だ」と聞いておろうが！人の話を聞く気がないキチガイ野郎の非行少年があああああああつ

!!!!!!

「「うわく……」」

三長官、ドン引きである。ドン引きの一方通行主人公である。誰かこのアホらしい展開に祝福を与えて上げてほしい。拳骨落として正気に戻す祝福を。

「――貴様等が下した先ほどの予測は、大凡において間違っていない。確かに貴様等の主が事の発端を担っていた事実は否定しようがない」

「あなたは確か………ランスロット・アルビオン？」

「……ヴァーリだ。そしてこいつの名はアルビオン。頭につけて呼んでいた余計なのは不要だな」

彼女たちの真横に開いた空間の裂け目からカオス・ブリゲードのヴァーリチームが乱入してきてグレモリー眷属を驚かせていたが、ワープするのが当たり前の混沌帝国軍人としては驚くほどのことでもない。

惑星上で行われる小質量の短距離ワープというのは確かにすさまじい科学力だと思いはするが、「科学じゃなくて魔術だからなー。ご都合主義でなんでも有りなんじゃね？」で通してしまえる世界においては気にしたところで意味はないからと誰も彼もがスルーしている。

意外とルーズで適当なんです、混沌帝国人の性格とか考え方って。

「ヴァーリ!? どうして今このタイミングでカオス・ブリゲードの君がここに……まさか君まで僕たちのことを!？」

「やるつもりはないから剣を引け、グレモリーのナイトよ。赤龍帝のジャガーノート・ドライブを見に来ただけだ。――もつとも、そのお陰なのかせいなのかは分かりかねる

が、途中で変な物を拾ってしまったのだがな……」

「「変な物? 変な物ってなんだい? (「なんですか×3)」「」」

グレモリー眷属からヴァーリチームへの質問。どうでもいい事ではあるが、グレモリー眷属は敬語キヤラが多い。

「ほらよ、お前等の眷属だろ、この癒しの姉ちゃん」

「アーシア! (アーシアちゃん!)」

開いた歪みの穴の名から出てきたヴァーリの仲間、美候より渡された金髪シスターの少女の無事な姿に皆、感激しながら飛びついてきて、見たこともないヴァーリチームの新顔である背広を着た男から拾ってくることになった経緯までもを説明してもらい安心しきったところで更なる爆弾発言が投下。物議を醸す遠因となる。

「……それから、拾ってきたのと違って押し掛けられて押し切られちゃった変なのが後ろの二人組な」

「お、お待たせみんな。えつと……元気してた?」

「「部長!?! 今までどこに!?!」そして、どうして今ここに!?!」「」」

「う、うん。話せば長くなっちゃうんだけど……」

「——時空の歪みを感じしましたので、呼びかけてみたら出てきてくれました。私たち二人では上まで上げはしても皆さんがどこにいて何をしてるか分からなかったので頼

み込んで乗せていただきました。時空の穴というのは短距離移動の際にはタクシーよりも便利な物なのです。私も一家に一台欲しくなったほどです」

「こらっ！　またあなたはそんな言葉を・・・初対面の人には割ときついんだからダメー。ジ少なくなるよう私が工夫して上げてたのに無駄になってしまったじゃないの！」

この運び屋とテロリストを兼業している背広の人に謝りなさい」

「・・・はいです。ごめんなさいでした、背広のお兄さん。完全に私が悪かったです・・・」
「いえ、謝らなくても結構ですよ。むしろ今の謝罪が一番傷つけられた気がしましたし・・・」

改めまして自己紹介を。私はその人とは似て非なる聖王剣の所有者であり、アーサー・ペンドラゴンの末裔。アーサーと呼んでください。いつか、あなたとは聖剣を巡る戦いをしたいものです、木場祐斗くん」

「・・・望むところです」

旧交を温めあえたところで話は実務的な方へとシフトせざるを得なくなる。

議題は、暴走してしまった（らしい）イッセーを元に戻せるか否かについてだ。

「あの状態は中途半端にジャガーノート・ドライブと化している段階だ。完全に成ってしまった訳ではないから戻る場合もあれば、このまま元に戻れず命を削り続けて死に至る場合もある。」

「どちらにしてもこの状態が長く続くのは兵藤一誠の生命を危険にさらすことになるな」

「なら、とつとと解決策を言え。急いでいるのに前振り長い。時間を無駄にして死なせたくなと思うので有れば、考えるよりも先に動くべきだろうが鈍臭い奴だなお前は。そんなだから何千年も眠りこける同族が生まれる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

白龍公ヴァーリ、空気読まないゼノヴィアの一言でバツサリいかれる。

それでもめげずに立ち向かうのが白龍公に選ばれた者の証であり条件です。

「彼に何か、深層心理を大きく揺さぶる現象が起こせるのならあるいは・・・・・・・・」

「わかりました。それで行きましょう」

「それなら『おっぱ・・・・・・・・こほん。何か有効な手だてでもあるのかしら？ 異住セレニア。

あるのであれば多少の危険は考慮してもイツセーを救うため許可を出すわよ？」

アツサリと断を下したセレニアに、思わず口に出しかけてしまった「おっぱいドラゴンのネタで私のおっぱいを・・」と言い掛けてたりアス・グレモリーは慌てて取り繕った発言をし、その場にいる一部を除いた全員が（今、絶対におっぱいドラゴンを持ち出そうとしたな）と心中でつぶやきつつも口に出そうとはしなかった。誰もが空気を讀んだ結果である。チームが一丸になるのは良いことです。

「ーちなみにだが、おっぱいドラゴンを連想できなかった一部の例外とはヴァーリのことであり、アーサーのことではないのであしからず。この時点での白龍公はかなり真面目な堅物キャラであつたので。」

「ええ、任せていただいて大丈夫だと思いますよ？ もっとも、実行するのは御三方だけであり、私はいつものようにいつもの如く後方から指揮棒ふつて命令して過ごすだけですけれども」

「それはまあ・・・いつものことだから仕方がないわね。」

「それで？ 具体的にはどのような手段を？」

「リアスが緊張気味に問いかけて、セレニアは何ら気負うことなく平然と「作戦とも呼べない、単純すぎる手法なのですが・・・」と前置きしてから、ごく当たり前のことを言うかの如く、やたらめつたら自然な態度と口調のまままで簡明に一言だけで質問への答えとしてしまった。」

「殴つて気絶させれば停まりますので、思いつきり殴りましょう。それだけです」

『本当に単純すぎる作戦だったな！　つか、そんなの作戦でもなんでもないじゃん！』

「ええ。だから最初にそう言ったでしょう？」

『開き直ってる！　この子、頭良さそうに見せてるだけでホントは考えなしのアホの子だったの!』

——総バツシングを受けてふくれっ面になるセレニア。彼女は彼女なりに考えてみた結果なので「考えなし」と言われた部分だけは不服だったのだ。それ以外は割とどうでも良かったのだが。

「考えてる時間が惜しくて、彼より攻撃力ありそうな人が何人かいて、深層意識を揺さぶるなんて曖昧すぎる現象に頼るよりかは確実性の高い手段じゃないですか。第一被害がでるのが暴れ回ってる兵藤さんだけなので自業自得で済みます。一石二鳥よりも得が期待できる良い手じゃないですか。それとも他になにか代案がお有りですか？」

「危険だ。死ぬぞ。ま、俺は止めはしないが」

「んじゃ、投票権を放棄したので自動的に賛成票に変換と。他の方々はどうですか？」

「……………」

「無言は肯定と受け取られても仕方ありませんので、全会一致の賛成多数により『兵藤一

誠ドラゴンさんをぶん殴って気絶させよう作戦』を、ここに決定させていただきま
す。――指揮は任せましたよ、天野さん？」

「陛下の御意のままに。」

――混沌帝国軍出撃！ 目標「龍」！ 目標「龍」！ 直ちにそれぞれの持ち場で
配置につけ！ 攻撃開始だ！」

「イエス・マイ・ロード。イエス・マイ・マジエステイン。すべては混沌帝国皇帝陛下
の御心のままに！」

――なんか久しぶりにヒッドイ事態が起きそうな気配がポンポンしますけど．．
まあ、いいや。もう命令下しちゃったし。後は野となれ山となれ。上手く行かなかつた
ら頭をかいてごまかせたら幸運だったぐらいに割り切って結果を待つといたしましよ
う。

「どうだ!?　これが私だ!　私の剣だ!　私に特殊な能力など必要ない!

ただ強さを欲して極めに極めたパワーこそが私の剣の真骨頂!　使う際に暴走の危険を伴う強力な能力など所詮は使えぬ欠陥品!　攻撃時において質量の桁さえ違えば済むだけの話よ!　それが出来ぬ弱者であるから貴様等ザコ共は理などと言う理屈に逃げるのだ!

絶望が足りない、怒りが足りない、強さにかかる想いが純粹に雑魚すぎるのだよ貴様等
等有象無象のウジ虫どもは!

小理屈をこねる暇があるなら素振りをしろ!　走り込め!　熊を素手で撲殺できる
程度の膂力ぐらい人の身だろうと手にしてみせる気概がもてずして何が強さかくだら
ない!

特殊な理など何も要らなくなるほどの強さを求めて努力せぬ怠惰な輩など、このゼノ
ヴィアが討ち滅ぼしてくれるわーーーーーっ!!!

「いや、だから殺しちやダメなんですってば。少しは上司の話も聞きなさい」

「むっ!　壁を壊して逃げる気か臆病者め!　敵を前にして逃げ出す無能は、このゼノ
ヴィアが討ち滅ぼしてくれる!」

「結局あなたの敵に回ったら、殺される以外の選択肢がないんですね……」

それはともかく、脳筋を極めて武神（だかなんだか言つてましてね）に至ったゼノヴィアさん相手に力比べは分が悪いと判断したのか兵藤ドラゴンさんはすぐ側にあつた壁を壊して逃走に移ります。私としては役にも立たないんで置いてかれてもいいんですけど、グレモリーさんたちが心配そうにしましたので（言うまでもなく兵藤さんの身をね？）後からコツソリ付いてつてみようと思います。

幸い逃げに徹してくれているからか背後から付いてきてるアリ並の大きさしかない私たちの事なんて気にされてません。大きい人は小さい事にこだわらないみたいです。

「――静寂な世界」

「は？」

「故郷である次元の狭間に戻り、静寂を得たい。ただそれだけ」

……俺たち二人、墮天使総督のアザゼルと現魔王のサーゼクスは向かい合つて語りかけてきてる無表情な黒髪ワンピース姿の小柄な少女、カオス・ブリゲードのトップに位置しているオフィスの口から直接聞かされた、今頃になってテロリストの親玉やつてる

理由に内心で頭を抱え込まざるを得なくなってきた。

「ホームシックかよと普通なら笑ってやるところだが、次元の狭間ときたか。あそこには確かー」

「そう、グレートレッドがいる」

次元の狭間に居座っているグレートレッド、奴があの場合を続べているからこそ各世界の間にある次元の狭間の均衡は保たれているとする見解が大勢を占めている。

俺としても危険な蛇を追い出すためとはいえ、オーフィスに協力してグレートレッドを狭間から閉め出した途端に世界崩壊とか割に合わん危険な賭には乗りたくない。

「交渉決裂、か」

「そう、それでいい！ その方がわかりやすいのだよ、サーゼクス！ 元より悪魔は人間の魂を奪い、地獄へ誘い、そして天使と神を滅ぼすための存在なのだからなッ！」

「クルゼレイ……。私は悪魔という種を守りたいだけだ。今の冥界に戦争は必要ない」
「甘いッ！ 何よりも稚拙だッ！ それがルシファアの名を冠された当代魔王の言うべき言葉だとも思うのか!？」

ルシファアとは！ 魔王とは！ すべてを滅する存在だッ！ 滅びの力を持っていなながら、なぜ横の墮天使に振る舞わない!?! やはり、貴様は魔王を名乗る資格などないッ！ この真なる魔王クルゼレイ・アスモデウスがお前を滅ぼしてくれアベベババ

「勝てぬ敵を前にして、戦わずに済まず算段を論じたがる輩はただ弱いのだ！」

その程度の力しか持たぬ塵だから、際物めいた一芸さえあれば山をも崩せると迷妄に耽りたがる。何のことはない、その方が高尚な戦であるかのように演出して悦に入りたい、己の矮小さを正当化したい、みつともなく誤魔化そうとするのが恥ずかしいからお約束に逃げてるだけではないか！ くだらない！

阿呆らしい。嘆かわしい。なんと女々しい。真の王道にはほど遠い。

貴様等のごとき小理屈をこねる輩が横溢するようになって以来、圧倒的というものがとんと見当たらなくなってしまうではないか。

だからこそ私は力を求めて生まれ変わったのだ！ 徹頭徹尾最強無敵。誰であろうと滅尽滅相——パワーを！ 不愉快な塵めらを跡形残らず消し飛ばす絶対的で圧倒的なパワーが欲しいと願い、手に入れた！

故に特殊な理など何も要らん。必要ないのだ白けるわ！ 殺し合いの場で説法などと子供だましにも程がある！

救い難い無知蒙昧。恥を知らぬ滓の群れども。要らぬ要らぬ、実に目障り！ 貴様のような輩は一匹残らず我が愛剣で斬り殺す！ 切る！ 斬る！ KILL！

き代物じゃないわ！ 今すぐ降ろして頂戴！」

『うひよひよ、今宵の乗客はお盛んボーイではなく、お盛んなガールじゃったか。みなぎるのおく、たまらんのう。人間の精気も良いが、エロい悪魔女子の精気は最高じゃなあ。一瞬にして最高時速にまで達してしもうたわい。バッキバキじゃあ！』

見よ！ 先ほどよりも更に反り返った逞しいボディを。他者を圧倒する太ましさ……およそ人間サイズでは持ち得ぬ逸品に乗せてもらえて、お主等もご満悦のことじやろうのう？ うひよひよひよ！」

「ぎゃああああああああつ!? 早く降ろしてお願いだからーっ! (>ユへ。) ビエエン」

「た、確かに悪魔になって能力は上がったけど、これだけは元のままだった……。でも、人の身を越えたこのサイズがあればもしかしたら僕にもイツセー君のような生き方が出来るようになるのかも知れない……!!!(ごくり)」

「……木場先輩も、やつぱり男の人でした。不潔です」

「ご、誤解だよ子猫ちゃん！ これは男が男として生まれたときから与えられてて剥がすことが出来ない呪いみたいなものであって、決して嫌らしいものではないんだよ！」

「……不潔です。嫌らしいです。最低です。汚らわしいので、しばらくのあいだ触らないでいただけますか？」

に理解が浅すぎるときあるけど何で？」

「……………（解：正体は死のエネルギーそのものだから）」

——さらに進んでいった先にある壁を突き破り、神殿の外へと飛び出してから羽を羽ばたかせ、天へと昇って逃げ延びようとする兵藤ドラゴンさん。

……アポクリフォとは全然違う展開になっちゃったなあー。この先って絶対に良い未来には繋がってないと断言できるところが尚更辛く感じられます。

「空か！ 空に逃げるか墜ちたドラゴン！ しかしその選択は貴様にとって最大最強の失策だぞ！」

「……………ですよね〜」

枚羽を背中にはやした男性の天使っぽい新しい新キャラ（？）みたいなナニカ。

「かの少年が業を乗り越えるため、勇気を貫き通せる姿へと戻すため、貴方も答えを教え上げるべきでしょうよ。いざ、光となつて舞いなさい。

祝福よ！ この満天下に降り注ぐのです！ 彼と彼女の愛に、そして私とセレニア様との熱愛に——万歳ツ!!」

「友よ！ 我が永遠の宿敵にして私の仇でもある少年よ!! あなたはこの試練を乗り越えることで名実共に己自身を超えて行くうううううつ!!!」

あ、兵藤さんって貴女の宿敵認定されてたんですか。・・・不幸きわまりないですねえー、あの人も。原作主人公だからって乗り越えさせられる試練が洒落にならん超高レベル過ぎてます。

『仰るとおりです、我が主。この場にいる私はそう言うものだ。彼のような者ほど救つてやりたいと願うため、安易な妄想に逃避する偽りの救済など看過できない』

天使さんっぽいナニカの羽に光が集められはじめ、天使さん（仮）が厳かに発射シューク

エンスに入られるみたいです。

『人の意志、祖は無限なり。諦めなければ夢は叶う！』

努力を怠り、虚構に逃げる子羊たちよー我が審判の火を知るがいい！

ハレルヤ、オオオオオオオウーグロオオオオリアアアアス!!!
!!!」

チユドンチユドンチユドンチユドン!!!!

・・・光の絨毯爆撃じゃん。これって本当に兵藤さんを元に戻すための攻撃なの？

普通に死なない？ 跡形もなく消滅して終わると思うんですけど彼が生き物だったなら。

「ならば私も続けて天罰靦面といきましょう。ええ、この武器の名前は気に入っているのです。天の裁きのように非常に私好みでしたのでね」

天野さんがつぶやくと同時に空が曇り始めて不吉すぎるムードが辺り一面に漂いまくります。

「ねえ、紫藤さん？ 空を覆ってるあの黒い曇って・・・」

「ご想像の通り、帝国軍艦隊全軍でツス♪ 我が帝国は常時緊急事態に即対応できるよ

うに法整備されておりますので、現段階での総兵力は一億人百万隻体制でツス♪
「あつそ」

もう何もかも馬鹿らしくなってきたので全てをお空の彼方に丸投げして見ていだけの観客に徹することにした私。

人間、どうしようもない事はどうしようもないので諦めることや任せてしまうことも時には精神衛生上必要なのです。

「神鳴る裁きよ、降れい雷イーロツズ・フロム・ゴオオオオオツド!!!」

ずどがん！ ずぼがん！ ぼかんぼかんぼかんぼかんぼかんぼかん!!!

・・・最強すぎてて今更何も表現する言葉が見つからない・・・。

「満悦しましたか、イツセー君。ええ、私も今満ち足りています。

この神話的世界観こそ我が理想。そこに懸ける覇気と覇気のぶつかり合いこそ我が王道。善悪定かならぬ境地へ至り、輝きと呼べる全てを余すことなく現出せしめる」

「なんでもよいのです。願う真が胸にあるなら、ただその道をひた走ればよい。躓き、倒

れ、泥を舐めようとも何度だつて立ち上がるのですよ。

なぜなら誰でも、人間だろうと悪魔だろうと天使だろうと墮天使だろうと関係なく、諦めなければいつかきつと夢は叶うと信じているからです。

安きに流されてはいけません。胸を張りなさいイツセー君。私に殺されながらも立ち上がり挑みかかってきて乗り越えた貴方であるなら必ずや自分の人生を踏破できます。

私はいつも貴方の側に在り、道を踏み外さないかよく見ています・・・忘れないでください！

苦境に陥り混乱したときにこそ忘れてはならないものーそれこそ勇気です！」

・・・冥界のこの後について、人間である私は詳しいこと走りません。

やりすぎなくらいにやり過ぎちゃいましたので慌てて逃げ帰ってきてからご無沙汰なのです。

それでもひとつだけ確かなこととして、逃げ出す前の惨状についてのみ語る権利が私にはあると思うのでお伝えしたいと思います。

ー皆さん、一人残らず衝撃で吹き飛ばされて地面に頭から突き刺さり、女性型の方は特に辛いパンツ丸出し逆さまオブジェクトとして旧アスタロト領に立ち並んでいましたので、天野さんのお話を最後まで聞けた方は一人もいないんじゃないんですかねえ？

「この前のあれは楽しかったし、またやりたいわねミルたん！ 今度は私たちが主役でね！」

「によ~~~~~っつ!!!」

一部訂正。

馬の耳に念仏コンビだけには聞き届けていただいてたみたいです。

第7話の「カオスロード」

・・・・ヨーロッパにある小さな貴族領。

面積こそ狭く小さいが今時めずらしい、国ではなくて領主に任命された貴族によって統治されている歴史ある特別経済特区。

その地方の中央近くにある湖城。

古代ローマ時代から続く名門一族が長らく居城としてきた古い城であり、時間の蓄積と共に因習因果伝統執念妄執呪い・・・それら全てを内包することで形作られる『神秘』

彼ら一族は、その『神秘』を自らが振るう「武術」にまで昇華することで歴代ヨーロッパの各王朝の警護役に任命させてきた『力による支配の歴史』を持つ。

神秘の薄れた時代である現代でさえ影響力は薄れることはあっても途切れることなく続いており、各国王室が外遊する折りには一族配下の者たちをSPとして随行させるのが不文律と認識されており、一種のステータスともなっていた。

ーが、それらは表面上のことに過ぎない。ヨーロッパ王位継承の内紛や政変時には

かならず彼ら一族が裏で動き、多くの血が流されてきた。

それが故に一族の当主は公然と口にすれば只では済ませてもらえない血に塗れた二つ名として『陰の帝王』と囁かれ、恐れられ続けてきたのである。

彼ら一族の目的は只一つ。

自分たちの遠い先祖が交わりあつた古の神々の支配領域を保持し続けるため、侵略してきたキリスト教勢力に食い込み、拠点である湖城がそびえ建つ自然豊かなガリア地方の支配権をあらゆる手を使ってでも守り抜くこと。その一点に尽きていたのであつた。

そして今、37代目を数える一族の当主シュトルハイム伯爵の家名を背負いし男『クラウザー・シュトルハイム』は、自らの居城である閑静な湖城の大ホールで招かれざる客たちを相手に完敗を味わい尽くされていたのである。

「ば、バカな……この私が指先一本触れられないだ……と……?」

ボロボロになつた身体を意地だけで動かし、私はなんとか目前に立ち睥睨してくる『少女たち』の姿を視界に納め、悪夢でも見せられている思いのもと凝視し続けた。

永い時の歩みと共に薄まっていようと、我が一族は神の血を引く人類——神人だ。

『神氣』を纏い、使いこなし敵を倒す。そのためだけに洗練されて極め抜かれた技と

力。そのどちら共を兇戯にも等しく弾き返してしまう人の少女たちなど聞いたことはない。

まさか、一族の中でも先祖帰りによって最も神に近い存在となった私だからこそ使用可能な大技、『神秘拳』の必殺奥義《カイザーウェイブ》を正面から浴びておきながら、掠り傷一つ負わせられないとはね……!!!

「眉唾モノだと思っていたのだが……まさか『あの噂』が本当だったとはね……」

西欧諸国を練り歩き、神秘を見つけだしては刈り取っていく大陸からの新参者集団『ファンタズマ・キラール（神秘殺し）』か……。

神秘に適う人間など、いるはずがないと信じて生きてきたのだがね……」

最近ヨーロッパ諸国の同業者たちから噂だけは聞かされていたが、それを聞かせてきた彼ら自身でさえ話半分としか思っておらず、「笑い話として聞き流してくれ」と苦笑とともに告げられた一言が今になって酷く忌々しい気持ちで思い出される。あの時もっと真剣に話を聞いておけばと悔やまれてならない。

神秘殺したちは私の抱く感慨になど微塵も興味がないかのように我が城を家捜しし始めており、歴史と伝統に彩られてきたシュトゥックハイム城も今となっては無頼漢共が

土足で踏みにしつた足跡で満たされ尽くした薄汚い汚泥も同様の状態だ。

「まったく、古き伝統を尊重することを知らない僻地からきたばかりの蛮人たちはこれだから困る……」

負け惜しみと承知ではなつた私のつぶやきに呼応したのか、少女たちを指揮する一人の白人少女が私に目を向け瞳を細めさせる。

狡猾でしたたかさに満ちあふれた碧色の瞳には、どこかで見覚えがある気がしたが思ひ出すまでには至らなかつた。

私は相手の目を侮辱と軽蔑とを持って見下し、軽侮と共に彼女たちが辿るであろう必然の未来を予言として吐き捨ててやることにした。

「君たちは何もわかつていない……。人の身では神には勝てないし、神に逆らつた人類が幸福な最期を迎えさせてもらえた例は一度として存在しない。

人の犯してはならない行為にまで手を染めた愚か者の少女たちよ、君たちが苦しманいで死なせてもらえるよう地獄の底から祈つていてやるよ……」

「くだらん」

「……………なに？」

言うべきことを言い終えて、さあこれから背後に開いた穴から飛び降り死んでやろう

とした矢先のことだった。リーダー格をつとめる少女が私のことを心底から「見損なつた」とでも言いたげな視線と共に言い放つてきた言葉を耳にした私は立ち止まり、彼女のことを凝視し直す。

「敗北と勝利は、憎み合う相争いあう親兄弟に似ている。互いが互いを生きている限り否定し続けなければならず、否定しなくなつてしまえば己が己で無くなつてしまう。形ばかりを似せた木偶に成り果ててしまう。

否定しあい、戦い競い合い、勝ち続けることで負け続けることで永遠に互いの存在を定義しあうべき存在……それこそ『勝敗』なのだ。

はじめから『勝てぬ』という前提で求める勝利など、強さなど、自分には初めから勝てると信じれる相手にしか適用されるはずがない」

「……………」

「求め続けること、極め続けること。貪欲に、強欲に、只ひたすらに求め欲しがり、届かぬ物にまで手を伸ばさんとする欲望こそが人の本質であり強さの真理。

神が頂点にあるなら殺してその座を奪わんとするのが帝王の道である。

誰よりも強き高みへと至りたいのであるならば、神は崇めても縋るべきではなかったなクラウザーよ。

自らの上に立つ者に『勝ちたい』と望む克己心が消えた時点で貴様の中身は消失して

いた。空つぼの器を守り抜くぐらいなら、武術家としての名誉を捨て去るべきだったのだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・知った風な口を聞いてくれるものだな・・・」

真理であり、正論でもあるのだろう。

だが、自分が「正しい」と信じた道を貫き通すのは想像以上に難しいことだ。難しいことだった。私のように自らの強さに絶対の確信を抱いていた者は特にな。

「己が強さだけを信じて、一人一人で生きていくにはこの世界は生まれながらの種族差がありすぎている・・・。我々弱い生き物である人類には強者に楯突きながらでは生き残ることが出来ないほどにな・・・・・・・・」

強さを求め続けると君は言った。それは、これからも戦い続けていくことを意味しているのだろう。ならば君が辿り尽きたいゴールとは何処だ？

戦い続け、敗れ続け。戦って戦って戦い続けて君はいつたいどこまで・・・どこまで征くつもりなのかね・・・っ!？」

血を吐くような想いで吐き出された言葉と怨嗟。そして嫉妬。

これほどまで純粹に上を目指して昇り続けられる、天井知らずの『慢心』。

かつての私が持っていたものだ。今の私がどうの昔に無くしてしまっているものだ。

だからこそ聞きたい。この質問の答えを。私の劣等感を少しでも和らげてくれる青

臭い理想論を……っ!!

彼女は問いかけてきた私を見下ろしながら「ふっ」と鼻で笑い飛ばす。

「無論、敵に敗れて殺されるまで。地獄の最も深き場所に落とされて終わるまで。

強敵に挑み、敗れ去るのは武人の恥。敗れることなく畳の上で往生するは恥以上の恥辱」

「……………あ、あ、あ……………」

「なにより「お先真つ暗」の人生を進むことこそが人の生ではないか。いまさら地獄の底の闇に落とされるのを恐れてなんとする？ 戦士として負けて死ぬのが怖いなら、生きるのを辞めてしまえば済むことよ」

「……………あ、あ、あ……………」

「……………今の貴様をこれ以上みつづけるのは哀れでならん。終わらせてやるから楽になれ。さらばだ」

そう言つて右手のひらを私の方にかざし、魔力とも神気とも異なる不可思議なエネルギーを凝縮させた魔の波を放ち、私の意識を肉体諸共チリすら残さず焼き尽くされる。

魂が燃え尽きる一瞬前、彼女の傍らに歩み寄ってきた部下らしき一人の少女が彼女の

名を呼ぶのが鼓膜に響く。

「ギース様」ーと。

その言葉の意味するところを考える時間は、私に与えられてはいなかったがー。

「・・・ギース様。城の地下に秘密研究所らしき施設を発見いたしました。おそらく悪神ロキが使役する予定だったと思われる疑似魔獣の設計図と研究データの一部が記されていた資料が裁断されて捨てられておりましたので、現在修復作業を進めさせているところです。」

結果はサウスタウン帝国軍駐屯地に帰還してからご報告に上がらせていただきたいと思えます」

「うむ」

「それから、ロキとカオス・ブリゲードとの精神的つながりは皆無に等しかったらしく、ほとんど無視される形で城を間借りしていたようです。

城内を探索していたところ、クラウザー殿と懇意にしていたらしい『英雄派』の所属メンバー数名から奇襲を受けまして部下三名が戦死。一名が重傷。二人が軽い傷を負わされましたが、生きている者は戦闘継続可能なコンディションを維持しております」

部下の報告を聞き終えた、混沌帝国302独立外人部隊を率いる指揮官『ギース・ハワード』少将は、自分たちの攻撃で碎け散ってしまった高価だった歴史ある白磁の花瓶を見つけて「ふっ」とせせら笑う。

形ある物いつかは壊れる。たかだか人の数十倍から数百倍永く生きられるだけのカラスやら鳩やらコウモリやらが何かとうるさく騒ぎ立てる時代になったものだ。

「それから、英雄派が移送中だったらしいオーディンに仕えている側女らしき女を救出したのですが、如何致しましょう？ 見せしめとして首を送り届けてやるのも使い道の一つであると愚考しますが・・・」

「やめておけ」

黒服レディスーツのサンングラス少女からなされた提案を、ギースは一言の内に切つて捨てる。

そして背後へと振り返り、他の部下たちがつれてきていた北歐主神の娘たちの一人、銀髪に鎧甲胄姿のヴァルキリーに歩み寄ると、その薄汚れた顔を見上げながら笑う。

かつての自分であるなら余裕で見下ろせていただろう相手にも、今となつては見上げなければ顔を合わせられない身長差さになっているのだから可笑しな物だと内心では苦笑しながら。

「慣れない牢獄生活できれいな髪がずいぶん汚れてしまっているな……婦女子には優しくしてやるのが、元紳士としての礼儀と言うものだろう。逃がしてやれ。追っ手などの尾行も付けなくてよいぞ？」

「はっ」

部下が引き下がり、囚われのヴァルキリーを楔から解放すると相手はむしろ「侮辱されたことを悔しがる表情」で自分を助け出してくれた少女たちを睨みつけ、泣き出しそうな程弱々しい声でか細く問いかけてきた。

「……哀れみ、ですか？」

「そうだ。他になにか必要かね？」

迷いはなく、躊躇いもなく、躊躇もない断言。相手の顔に明らかなる絶望の線が落ちるのにも構わずにギースは募る。『それが弱いお前の今なのだ』

「戦場にあつて弱いことは罪だ。弱い者には、自分の死に方すら選ぶ権利はあたえてもらえない。言われて傷つくプライドを持ちたいなら、せめて悔しさをバネに飛翔するぐらいのことはして見せてからにするのだな」

「……………」

たつた一言でノックダウンされた銀髪ヴァルキリーが去っていった後、ギースと先ほどの黒服とが彼女に関しての会話を再開した。

「―後を付けさせろ。なるべく分かり易く、目立つ形でな。本命は別だ。最低でも7名を三台の車両に分けて追わせる尾行の鉄則を怠るでないぞ」

「御意……………」

「それから奴を追う人員とは別に、回収もしくは救助にきた強者の後を追わせるよう他の部隊にも要請してやれ。手柄を独り占めしたのでは正規軍に昇格した後、何かと面倒そうだからな。」

前線の雇われ軍人でしかない名誉帝国市民の段階から、功に逸るべきではない

裏から世界を支配しようとしていた自分もずいぶん丸くなったものだと感じながら、ギースはかつての怨敵、異母弟クラウザーの消し炭となり果てた後に残されていた人型の煤へと歩み寄り、踏みしめて進みながら穴の開いた壁の向こうに広がる青空へと

その頃のイゼルローン要塞、皇帝私室にて。

「そう言えばヨーロッパの方ってどうなっているのでしょうか？ 私、基本的には日本から出たことのないネイティブジャパニアンなんで、外国の方を現地で雇用したって聞かされてるだけなんですけども？」

「ご安心くださいませ、セレニア様。すべて順調に推移させております。今しばらくお待ちいただけるなら、欧州全土をセレニア様のクリスマスプレゼントに私まで付けて……」

「おい？ ……そう言うボケいいですから、疲れるだけですから普通でいいですから。安心安全第一でもって、兵士の皆さん一人一人が生きて帰ってこれるようにすることを第一義と覚えて忘れないでくださいね？」

「は〜い♪ ちゃんとやってま〜す♪」

「……………（嘘をついてないように見えるんですけど……何故でしょう？）物すつごくひどい事態が今もどこかで行われ続けているような気がして怖いで

す
・
・
・
・
・
)

35話「体育館裏のセレニアダーク」

ぱーん！ ぱーん！ 空砲の音と花火を花火が打ち上げる音が秋の青空に響きわたり、プログラムを告げる放送案内がグラウンドにこだまする。

今日、人間界へと戻ってきていた俺たちグレモリー眷属は、駒王学園体育祭に参加していた。

『次の競技は二人三脚です。参加する生徒はグラウンドに集まってください』

うわっ！ ちょうど始まるころじゃねえか！ 間に合って良かった。

「アーシアー！」

「イツセーさん……！ 来てくれた……っ」

涙ぐみながら迎えてくれたアーシアへの愛しさに胸が満たされるものを感じながら、俺は自分の回復っぷりをアピールするため腕まくりをして力こぶを作ってみせたりする。

——上級悪魔ディオドラ・アスタロトからアーシアへの求婚から始まった戦いは、

自分で自分の心臓を抉りだしたディオドラの自殺から狂い初めた。

途中で乱入してきた魔王ベルゼブブに目の前でアーシアを殺され、悪し様に罵られま
でされた俺が怒りに我を忘れてジャガーノートドライブと一体化してしまい暴走しま
くつたらしいんだが、俺には正直その時のことで覚えている事が少ない。

気がついた時には部長たちに抱きしめられながら倒れていて、殺されたと思っていた
アーシアが俺の前でちゃんと息をして声をかけてくれていた。

その後に空を行く最強のドラゴン『グレート・レッド』を見たり、ヴァーリの奴と再
選を誓い合ったり、オーフィスっていう小さな女の子がドラゴンだつて教えられた
り……そしてセレニアたちの姿が煙のように消えてなくなっていた。

アイツ等に関しては、その場にいる全員が言葉を濁して言いよみ誰も詳しくは語りた
くなさそうだったから無理して聞かなかつたけど、つくづく謎めいた連中だと思う。味
方でないのは確かなのに、敵なのかどうかがいまいちハッキリしてくれない。

「決まってるんだろ。俺はアーシアとの約束は必ず守るって」

「……う、ううう……」

「ああ、おいおい泣かなくても……」

「すみません、つい嬉しくて……」

泣いていながらも満面の笑顔で応えてくれるアーシアを見た俺は、改めて決意する。こいつの笑顔を二度と悲しみで曇らせたりしない。絶対に守り抜いてみせると。

「アーシア、ずっと俺の側にいろ。もう離れちゃダメだ！」
「はいっ！」

そうだ。あのとき俺は誓ったんだ。この子を俺の家族にするんだって。もう一生、離されて泣かせたりする悲しい目にはあわせたりしないって。

そのために俺は、もっともつと強くなる！

ヴァーリよりも木場よりもダチの匙も越えて、誰よりも強くなることで皆を守る強い男になってやるんだって！

そのためにも俺には越えたいものがたくさんあるんだ。ジャガーノートドライブ状態になってたせいで体力が削られたからって寝込んでばっかいられるかっての！ 男はいつだって気合いと根性で無理するのが一番なんだよ！

「二等、ゲッター！ しゃあああああつ!!!」

やった！ アーシアやったぞ！ . . . はあ、はあ . . .

「はい！ やりましたイツセーさん！ . . . イツセーさん？ 大丈夫ですか？」

. . . くそ、やっぱ病み上がりの体で全力疾走は無理があったか . . . 。体がまだ怠いや

「あ、部長さん」

「アーシア、セイクリッド・ギアで回復してあげて。体育館裏なら人目に付かないわ」

「あ、はい」

どうやら部長が気を利かせてくれたらしい。守るって言ったばかりの女の子に助けて貰うのは格好つかないけど正直助かるかも . . . マジでしんどい

「イツセーさん。私に掴まってください」

「すまねえ、アーシア」

アーシアが肩を貸してくれて俺が掴まり、部長がアーシアに何か言おうと耳元に唇を寄せた瞬間。 “ソイツ” はいきなりやってきた。

「あ 。申し訳ありませんが、その能力を安易に使いまくる回復手段は控えていただけと嬉しいのですが？」

一応うちの元帥閣下がその能力を手にするために躍起になって暗躍して、大切な仲間

たちをあなた方に殺されて独りぼっちになってしまった後ですのね。

できればトラウマを刺激して傷つけたくないと思ってしまうんですよ、身内心理としては、ですけどね」

誰かに対して気を使っている言葉なのに、氷のように冷たくて寒さを感じさせてくる、痛いくらいに正しさをまもっている声。

少なくとも俺の知り合いで、これと同じ声を持つてる奴には他にあつたことがない。

「セレニア……っ！ テメエ……！」

事の部外者にして当事者以上に関わってくる場合もある、悪魔でも天使でも墮天使でもない人間の少女、異住セレニア・ショート。

人だかりの中だと目立ちにくいチツコいなりが、今は目の前まで来てくれているからハッキリと目にする事が出来てるぜ！

「どうも、兵藤さん。お怪我が回復されたようですねによりです」

「なにしやがつたんだよ……っ、今日はお前等とやり合うつもりは俺にはねえぞ……っ！」

意識してやってる訳じゃないんだが、ついついキツイ言い方になってしまふ自分が少しだけ不思議に感じる。

理由はわからないが先日デイオドラとの一件以来、オレはこいつに苦手意識を持たされてしまつていて対応するときに刺々しくなつてしまつているのだ。

会うのは久しぶりのはずなのに、なぜだかオレはこいつから徹底的に痛めつけられたような気がしてしまつてる。それが敗北感となつてオレの心をささくれ立たせているとしたなら我ながら小さい男だとは思つてしまう。

アーシアのためにもデツカい男に鳴らなきやいけないって時に情けない。反省。

「それに何より、その能力を多用するのはあなた方全員の為にもならないのではないですか？ 先の一件で私が一番に感じたことがそれなのですけれど」

「どういう事なのかしら？ 異住セレニア、貴女まさか私のアーシアにイチヤモンをつけるためにわざわざ自分の通っている別の学校から駒王学園の体育祭にまで足を運んできたんじゃないでしょうね？」

部長の言葉にセレニアは「まさか」とわずかながら苦笑の気配を見せてから、片手に下げてきた紙袋を部長に手渡す。

「お見舞いですよ。兵藤さんと、アルジエントさんへの共同名義でね。助かったとは言え死にかけたのは事実なので、知人としてお見舞いぐらいには訪れますよ。……ダメでしたか？」

「ダメ……と言うわけではないんだけどね……」

予想外に答えに部長が返答を出せずにいる隙に、セレニアは袋を開けて小瓶を取り出し優しい手つきでオレに手渡ししてくれた。

「これは……?」

「回復薬なんだそうです。うちで造っている物の方が効果あるんですけど、悪魔さん相手に効くのかどうか実験してないそうでしたのでね。冥界の奥地にまで人を派遣して取ってこさせたものです。エリクサーと言うそうなのですが、グレモリーさんはご存じで?」

「エリクサーって……まさか万能の妙薬!? 超高級品じゃないの! 受け取れないわよ、そんな高価なものなんて!」

「お気になさらず。別段、私がポケットマネーで身銭切って買ってきた物でもないですしね。ーああ、忘れてました。アルジエントさんにはこちらをどうぞ。プランターに入っている小型の観賞用植物です。」

「デパートで買ってきた既製品ですけど、一応はこちらも高級品なんですよ？」

「え、あ、そのあの………ありがとうございます……？」

「あっさりとアーシアの警戒心を打ち砕いてしまえるセレニアの壺を押さえたプレゼント攻撃。オレも見習いたいこと山の如しだぞ？」

「くれるというならありがたく貰っておくけど………あなたはエリクサーをイッセーに渡して何をさせたかったのかしら？　あなたが無償で人に施しを与える人だとは到底考えられそうにもない事態よね？　あなたもそう思わないかしら？　異住セレニア・シヨート」

部長が少し嫌みっぽくセレニアを責める。こちらも先日日の出来事を引きずっているのかな？

「何かして欲しいのではなくて、する必要性をなくしたい……つまりはアルジェントさんの力の乱用を防止することこそが私のもくろみですよ。その能力は危険すぎますからね」

「それは、リバーズのことかしら？　それとも敵に能力に関するデータが渡っていて逆

用されやすいから？」

いいえ、と部長からの問いかけにセレニアは静かな声で応じてから顔を上げた俺の目を見据え、しつかりとした声音でオレの心臓を掴み取ろうとでもするかのような切れ味鋭い言葉を発した。

「その能力があなたがたを今後も死なせ続けるかもしれないからです。他の悪魔にはない、あなたがただけのアドバンテージ回復能力。」

「天野さんが手段を選ばずに欲した力をあなたたちは妙に過小評価しているくらいがありますのでね。知人としては、多少なりとも危惧ぐらい覚えますよ。」

「なぜならその能力はか弱い少女を生け贄に差し出させてまで、至高の墮天使様が手に入れたいと欲した狂気の力なのですから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「顔色が一気に悪化したアーシアを背後にかばいながら、オレと部長の二人は前にでる。やっぱりこいつは危険だった。俺たちの心に致命傷とも呼ぶべき一撃を言葉だけで刺しまくって来やがる。言葉の魔術師みたいな奴だよ、本当に。」

「あれは貴女の所の駄ガラスが軽拳をやらかしたただけだわ。アーシアにも、セイクリツド・ギアにも一切責任は存在してはいない。それを能力のせいだと言いきるのはこじつけでしかないとは思わなかったの？ 異住セレニア」

「思いましたよ、もちろんね。ですが、そもそも其れが存在しなければ起こりようがなかった事件であり、愛憎で狂うことの無かった墮天使様であることを鑑みるとするならば、責任がないから無関係と決めつけてしまうのは逆の意味でこじつけではないかと思ひ直した次第です」

「それは……」

部長の反論にさつきまでの勢いを無くさせられる。相変わらずセレニアの言い分は正しくて、俺たちの思いもしてこなかった方角からの視点に基づいて展開されている。

でも。——その考え方はどこまで行っても、俺たちの今を否定する可能性に満ちあふれているものだ。

アーシアに能力がなかったら、アーシアはレイナレにもディオドラにも会わなくていい代わりにオレとも出会わず俺たちの仲間になってもいい。アーシアがいなくてレイナレが彼女を悪用しようがなかった場合、オレは殺されることなく人間のままで部長とも朱乃さんとも子猫ちゃんとも無関係なままだったろう。

そう考えていくと怖くなる。

オレは今までのことを不幸だなんてこれっぽっちも思ったことはないけれど、単なる偶然が降り重なって得られただけの幸運だとも思っていないかった。みんなが望んだからこそ得られている今なんだって、ずっとそう思い信じてきたんだ。

けど。根本的にオレがレイナーレに殺される切っ掛けになったアーシアの能力騒動。あれがもし起きていなかった場合、オレは、俺たちは今どうなっていたんだ？

ドライブは確かに生まれたときからオレに宿っていた。だから誰かがどこかでオレを転生悪魔として生まれ変わらせにきてたと思うけど、その時にオレの側ではアーシアが笑顔で見上げていてくれるだろうか？ 家でに帰ったときに「おかえりなさい、イツセーさん」とはにかみながら迎えてくれたりするんだろうか？

アーシアに能力がなくてもオレは転生悪魔になっていた。

アーシアに能力がなかったら・・・おれはきつと、今の家族と思える仲間たちと出会えていない。

この考えを認めることは事実上、今のオレと俺たちが無関係なまま進んでいった未来があり得たことを証明することであり、俺たちの今が偶然の産物の結果論にすぎないかもしれない可能性を認めることになるのだから・・・。

「その能力は確かに戦力としてきわめて有効です。他の悪魔たちが使える回復魔法では今ほどの超回復を望むことは不可能ですからね。

ーですが、本来であるなら其れが正しい。

ビショップの駒という言葉がもつ表面上のイメージだけで捉えた場合には回復が役割と決めつけてしまうことは可能ですが、しかし。

悪魔はあくまで悪魔であり、種族が持つ固有の特殊能力も攻撃系か攻撃支援系がほぼすべてのはずです。

そう言う意味ではアルジエントさんと他のビショップの駒は役職名だけ同じだけの別物と言うことになり、他の方の持つビショップよりも大事にしているとはいえ、大事にする理由が人格面への評価に傾きすぎな能力ガン無視であった場合の危険度は天野さんの時とは比べものになりません」

「ハッキリ言いましよう。あなた方は自覚もせぬままアルジエントさんの能力に頼り切つてた部分が大きすぎます。

今まで死人が一人も出なかつたから、守り抜けてこられたから等という結果論から逆算して次の戦場に彼女を連れていくならば、それは先の失敗から何も学べていない証拠でしようよ。

「――戦場においてザコを先に殺すのはセオリーであり、テロ組織にとつての戦場とは正々堂々とした決闘場ではない。市街地でしかける不意打ちのテロ攻撃こそが、彼らにとつての最良手だとは思われませんか？」

泣いている子供が人間爆弾だったとしても助けに走りたがり、自分を殺すために吹き飛ばされた子供のことを忘れられそうにない心優しい聖女さまの心身どちらかを死なせるためには有効な手段であると私には思われるのですが？」

「あなたがた異種族は、勘違いしすぎだ。」

負けを知らない最強なんて、ただ単に自分よりも強い存在と出会わずに済んできた強運の持ち主であるに過ぎず、何度か敗ける中で一人の欠員も出したことがないのは偶然と幸運と奇跡の産物であつて、思いも絆も切つ掛けでこそあれ死者を出さずにすむ手段になり得るはずがありません。

人も悪魔も天使も堕天使もドラゴンも神も魔王もすべて、最後に生死を分かつのは運の善し悪し、ただそれだけです。

絶対であるはずの神は今どこにおられますか？

最強であるはずの初代魔王様の後継者争いはなぜ勃発する必要があつたのですか？

――この疑問が私たちの命も、あなた方の命にも『絶対に死なせない』なんてことは

『絶対にあり得ない』のだという事実を証明してくれていると思うのですけどね」

「敢えて言いましょう、兵藤さん。

アルジェントさんを守り抜くため貴男に足りていない物があるとするならば、それは貴男の中にある心の問題。

『アーシア・アルジェントが生きている限り、必ず死ぬ存在なのだ』という事実から目を逸らそうとする弱さに立ち向かえる勇氣ですよ、きつとね。

それさえ承知しておけるようになったなら、今までより少しだけでも不意打ちに対処する能力が身につく様になると思いますよ。

あなた方には『強くなりさえすれば』と言う甘えこそあれ、自分の価値基準から見ても否定すべき対象を侮って軽蔑し、格下相手に後れをとることへの恐怖心——俗に言う『危機感』が足り無すぎていましたからね。それを助長する最強回復能力はしばらく封印した方がいいと思つたまでです。では、失礼。帰りのバスに乗り遅れてしまいそうですね」

「おーい、イツセー。お前の順番がきたって先生が呼んで……うおわっ!? な、なんだこりゃ!?! 吐血の池地獄に一人の美女と一人の美少女と、おまけの土左衛門が一体浮かんでいるぜ……」

「ふーむ、これは面白いな。ネタになる。早速帝都流通センターに連絡して、作品の題材を変更する旨を通達しなければ!」

「帝国最大規模の同人誌即売会『コミック・レッツ・パーティー』……そこはオタクたちの戦場! 死して屍拾うもの無き修羅の土地!

……イツセー! 俺たちはお前の犠牲を無駄にはしない! なんとしても美女美少女二人の体操着姿ならぬブルマ姿を題材に使い、帝国一のブルマ漫画家になってみせるぜ!」

「エロマンガ大王に、俺たちはなる!!!」

つづく

セレニアが戦場に立ち続けている理由

「言うまでもありません。私がこの場にいる他の誰よりも弱いからです。

誰よりも脆弱でひ弱な私が最強の軍隊の指揮権を握り、指先一本ふっただけで大勢の強者を殺させることが出来てしまう……。

もしも私が危険だからと戦場に立たず、絶対安全が大勢の強者によって保証されてしまっている要塞内から人殺しの指示を出し続ければ、いつか必ず私は今の世界すべてを壊すよう命令してしまうようになる。

……自分が守られるしか脳のない弱者であることを忘れてしまうこと……それは私にとって他のなにより恐ろしい物……。

己の内側だけで世界を完結させてしまおうとする感情なんですよ……。」

墮天使に愛された言霊少女ちゃん

「いや、親子三人そろってシヨツピングなんて何年ぶりでしょうかねー！ 単身赴任から帰ってきたばかりのお父さん、嬉しすぎちゃつてもうS A N値ピンチ！ S A N値ピンチ！」

「ちなみにだが、お父さん。ハシヤギたい気持ちは分かるから一定量までは許すけど、それ以上いっいたら刺すからな？」

「……はい、心臓の奥深くまで刻み込んでおきますですフェリシアさん……」
相変わらず仲のいい二人、お父さんとお母さんの二人とウインドウシヨツピング中の私です。今日は休日でしたので、たまの休みを利用して家族水入らずで過ごすと言われたからイヤイヤ来たのですが……。

「なぜ、貴女がついてきてるんですか？ 天野さん……。貴女うちの家族って訳ではなかったような気がするのですけれど……？？」

「イヤですわセレニア様ったら♪ 私はもう立派に異住家の家族として迎え入れられて

いますのに☆」

「いつから？ どのような形で誰に認められた末に？」

「異住家で養われることが決まったときから扶養家族という形でお母様に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今の日本は『ペットだつて家族の一員だろ！』と言う意見が支持を集められてしまう困った国になってます。

「おや？ なにやら珍しい生き物が町中を闊歩していやがりますねえ〜」

「?? 何かおかしな物でもいたのですか？ お父さん」

「ええ。なんちやつてメイド服着たコウモリの操り人形が。日本の伝統芸能ぶち壊されてる気がするんでビリビリにしちやつていいでしょうかセレニアさん？」

「・・・・・・・・ダメです」

明らかにグレモリーさん所の使い魔かなにかでしょうからね・・・・・・・・。

「お願いしま〜す♪ うふ☆」

なんかチラシだけ渡して勝手に去っていつちやいましたね。私、受け取るの了承した覚えはないんですけども。書かれている内容は・・・『あなたの願いを叶えます』？

「ああ、それはリアス・グレモリーがエネルギー供給のため下っ端を使って配布している物ですわね。」

基本的に悪魔は人の欲望を糧に生きていく寄生虫ですから、人間たちには定期的に己が欲望へと走ってもらわなくては存在を維持することさえ難しくなるんですよ。

だからと言って餌をとりすぎて絶滅させてしまえば自分たちも自滅する・・・手加減することで自分たちも長生きして恩も売れる一石二鳥の政策として行ってるのが、それから簡易版の召喚用魔法陣を記したチラシなんですよ」

「なるほど」

持ちつ持たれつ・・・と言うのはいささか図々しい気がしますけど、宿り木としての理屈としては間違つてはいません。誰しも自分たちの生存していく為に必要な過程は正当化したいものですからね。

「ほほう・・・面白そうなおモチャが地球では流行るようになってたんですね・・・。セレニアさん、何か適当な願いごとをお願いしてみてもらえませんか？ 悪魔とやらが出てくるところを見てみたいんですよ」

「・・・見るだけですか？」

「ダーイジョーブですよ！ そんな心配そうな目をして睨まなくても！ 私だつて邪神の端くれ、悪魔へのお願ひ系儀式におけるお約束事ぐらい把握しちやってますから！」

「・・・・・・・・たとえば？」

「願いを叶えてくれるために出てきた悪魔をふんじばつて取っ捕まえて拷問して、願ひ

を叶えてくれてる間だけ生かしておいてやるのが、正しい悪魔の使い方なんですよ？」

「……………」

びりりっ。

「ああ!? セレニアさんが問答無用でチラシを真つ二つに!? ヒドい！ ヒドすぎます

よセレニアさん!!!」

「ヒドくないです。私は友人……だかなんだかよく分かんない関係性の人たちを守ってあげただけです」

正当なる防衛戦を終えて、守り抜いたグレモリーさんの命綱を適当なゴミ箱へとダストシユートしてから家族の元へと戻ってきて合流した私。

そうしただけの所————

……………。

……………?? なんか遠くの方から地響きが聞こえてきたような……。

「おーい、セレニアア？ なんか半魚人っぽい兵士さんがお前を迎えにきたって言ってるぞー？」

「お父さん、最後の字違う。お願いですから意図的に間違えないでください、死人は出なくても死悪魔が出ちやいそうなので・・・。」

「すいません、駒王学園の生徒に知り合いがいる者なんですけど、学内に残っているかもしれない彼らと会うため門を開けてもらえませんか？」

「ダメだ！ 合言葉を言わないと入れるわけにはいかないぞ！」

さすがは悪魔のお姫様が拠点に使っている学校。緊急事態に対処するため一早く警備体制を整えたようです。この人たちもきつとグレモリーさんかシトリーさんところの番兵かなにかなんでしょうねー。

・・・・・・・・けれど。

「っっ」

ド・・・・・・・・・・・・・・・・ゴーーーーー・・・・・・・・・・・・・・・・ッ
!!!!!!!!!!!!

歩く正義と根性のゴリ押し天野さんの前では余りにも無力すぎる形式的な警備体制でしかありませんでした。

可愛らしい声とともに放たれた回し蹴りは鋼鉄の門扉を吹き飛ばし、校舎に当たってめり込んでからようやく動きを止め、門番さんたちを揃って青ざめさせてしまいましたとき。

「通れないようでしたので、通れるようにしました」

「・・・なんですか、その戦国DQN思考は・・・」

「緊急事態でしたので」

「・・・・・・・・」

言ってることは間違いだらけじゃないんだけどなあ。

「ま、いいです。壊しちゃってから壊したことの理由説明なんて言い訳にしかありませんからね。謝るべき対象がない現状でやつても意味ないでしょうし先を急ぎましょう。」

「ーでは、見張り番さん。私たちはこれで」

「お役目しつかり果たしてくださいね☆」

『はっ！ お嬢さん方もお気をつけて!!』

自分で言っておいてなんですけど、いいんかい通しちゃっても。

怪しい不審者を入れないために配置されてるはずの門番が、門をぶち破って進入していく怪しさなら誰にも負けないレベルの超級侵入者が入っていくのを敬礼しながら見

送っちゃってるんですけども……。

いやまあ、下手に抵抗したところで鎧袖一触でアリのごとく踏みつぶされて終わるだけなので正しい判断なのですが、何となくこう心の中にモヤモヤとしたものが……うん……。

駒王学園校舎内

「どうやら校舎内の構造に町の変化は及んでいないらしいな」

「はい、義母様。ですが、一部だけです。異界化している建造物があるようです。変異の現況がいるとしたら間違いなくそこでしょう」

「ちなみにですが一応、形式として確認したいだけなんですけれど。……ドコですか？

その異界化している建物というのは……」

「オカルト研究会の部室です」

「やっぱり……」

「おっしゃーっ!! 久しぶりに狩りまくりますよナイトゴード共を!」

お父さん? 悪魔とナイトゴードは別の生き物ですからね? 一緒くたにしない

であげてくださいね?

オカルト研究会部室前

「あー……こりや完全に異界化しちゃってますね間違いなく。誰の目から見ても明らかに」

だって、炎に包まれちゃってますもんね。部室に使ってた建物全体が。やれやれ、一体なにをどうしたらこんな事態に陥ってしまうものなのやら……。

キイイイイイイツ……（部室の扉を開ける音）

……ある所に とても悪い悪魔がいました……

ある日 悪魔は『鏡』を造りました

美しいものは よく映らず

醜いものは はつきりと映る『悪魔の鏡』です。

悪魔はこの『鏡』で 神様に悪さをしようと 天に昇りましたが

途中で『鏡』は割れてしまいました

『悪魔の鏡』は 無数の破片となり 地上にばらまかれました

それが 全ての 始まりでした

ある所に ヒョードーと アーシアという仲の良い 少年と少女がいました

しかし ある日 あの『悪魔の鏡』の破片がヒョードーの心臓と目に入りました

『鏡の破片』のせいで ヒョードーの心はすきみ

瞳は ものの 悪い所ばかりを 見るようになり

ついに ヒョードーのことを 大好きなアーシアまでも からかうような少年に

なつてしまいました

水着がまぶしい ある夏の日

砂浜で おっぱいが大きくて可愛い『彼好み』な女の子を探していたヒョードーの前

に

赤い髪色をした絶世の美女が現れました

ヒョードーは アーシアを捨てて 赤い髪をした美しい女の人に連いていくことを

決めました

実は この女の人こそ『炎の女王様』その人だったのです！

こうして ヒョードーは はるか 東の島国にある『炎の女王様』の『炎の城』で公

女様と一緒に 二人で手を取り合いながら国を治め いつまでも仲良く暮らしました

「ああ！ イッサー！ あなたもヒョードーの様にわたしだけを見て！ 私だけを愛して頂戴！ お願いだから、他の女の処女なんかに目を奪われないで！

私はいつあなたに襲われてもいいように、毎日毎日『OK!』を示すエツちなパンツを履き続けているのに！」

「ーっつてえ、なにやってんですかグレモリーさん！ ここつて貴女が根城にしている部室でしょうが!? なに自分のお城に灯を灯して燃やしちまつてんですか貴女は！」

「私以外の女とイッサーがイチャラブするのも使われてる部室なんて、ラブホ以下よ！ ビッチ達のたむろしている部室なんか、燃えてしまえばいいんだわ！」

「……ダメだ。完全にトチ狂っちゃってますよ、この人……」

「いったい、何があつたんでしょかね、この人に……。ああいや、思い当たる節なら幾らでもありますから逆にどれも同じレベルか……。ハーレム系主人公も大変そうだなー兵藤さん。」

「ふむ……。どうやら自身のエネルギーにするためチラシから取り込んでいた人の欲望がセレニア様のものだったせいで、逆に彼女自身の欲望が増幅され加速してしまつたようですわね。」

イツセー君への想いというか執念というか、怨念めいた情念の炎に体を支配されてしまつているようです」

「だから、あんな風に変なお面つけて、エロすぎるコスチュームを身に纏っていると……？」

「はい、おそらくは。……しかしエロいですね、あの服。私が墮天使時代に着ていたのよりも露出度は低いはずなのに、どう言うわけだかエロ印象がアップして見えません。」

「……やっぱり色なんでしょうかねえ……。赤と言うより、ピンクに近い赤が彼女のエロ戦闘力の高さを表しているのでしょうか思えませんので……」

ヒツドイ言われ様だな、オイ。

「(ヒソヒソ)ところで母さんや、先ほどのお伽噺っぽいのに出てきた1シーンについてなんじゃが、鏡の破片が目に入った少年はどうして失明しなかつたんじやろうか？」

「(ヒソヒソ)空から落ちてきた破片が心臓に入るといふのもスゴいですよね、父さんや。」

口を開けながら空を見上げてポカーンとしていたんじやろうか?」

「……両親二人による昔話風コントに、私はツッコまないツッコまない……」

「セレニア様の思念を吸ってしまったリアス・グレモリーの願望は成就され、彼女の望んでいた世界がオカルト研究会の部室内に再現されてしまったようです。クトウルー的に」

「……クトウルー的に?」

「はい。クトウルー的に」

「……どこが?」

一片たりともクトウルー要素のないこの状況に、一体どの辺がクトウルー風味なのか気になったので天野さんに尋ねてみたところ、彼女は「フツ」と笑って右手の平を握り拳を作ると顔の高さまで持ち上げてから「断言しました」。

「ダーレス氏によって開かれたクトウルーは……自由です!!」

ガンプラかよ。そしてアンタはメイジンかよ。アホに熱血すぎるところがピツタシ過ぎてヤだから止めれ。

「ーあなたたちも人間らしく永遠の命が欲しくて悪魔に願った類なんでしょう・・・？
いいわよ、与えてあげる。私とイツセーが支配する炎の城に住み続ける限り、一生歳
を取らないですむようにしてあげる。

未来永劫、老いさらばえることなく美しいままでいられる魔法を掛けてあげるわ・・・。
さあ、こつちへいらつしやい」

「・・・いや、そんな可笑しなお面つけて、エロすぎる恰好した人から『美容を維持する
魔法』と言われましてもねえ・・・」

大変失礼なたとえの具体例に使わせていただきますけど、マイケル・ジャク〇〇S A
Nを彷彿させるとしか表現できない私がいいます。

「あるいはカ〇ウ姉妹？」

「オカマのファツション評論家？」

「デラックス？」

・・・私の家族はそろいも揃って、みんな口悪いなー・・・。

「うふふ、威勢だけはいいお嬢さん達ね。でもいいわ、許してあげる。私の炎が世界を覆
い尽くすまでの短い間だけ・・・ね？」

イヤだと思いうなら、せいぜい足掻きなさい！ 悪魔にとつて人間があがいた末の絶望
ほど美味なご馳走はないのだから！ あははは、オーオーホホホホ!!!」

「……消えてしまわれましたね。」

「さて、皆さん。どうしましょうか？」

一応、背後に揃っているチート連中に確認を取ってみましたが。

「ああ、それなら普通にこれに入りましょう。封じられた地へと至る鍵《キー・オブ・ザ・ランドルフ》！」

「《銀の鍵》ですか？ それって、そんな機能ありましたっけ？」

「めちゃくちゃゲー科学力で改造しましたからね。今なら《黄昏の目》だって問答無用で開けます」

「……そうですか」

「まあ、ようするに世界最高のハッキングキーってだけなんですけどね」

「言わんでいいです、そういう雰囲気ぶちこわしになりそうな表現は。ただでさえ雰囲気もへつたくれも無いような状況なんですから。」

「では、レッツダ・ゴンですよフェリシアさん！ セレニアさん！ 夕麻ちゃん！」

「はい」

「……うえ……」

第一階層。いきなりボス部屋。『ヒュプノスの間』

「あ、あの、あの。み、みなさん初めまして。初めましてじゃない人もいるかもしれないですけど初めまして！　ぼぼ、僕は炎の女王さまから第一階層の守りを任されているギヤスパーツて言います……。

さ、さっそくですけど僕、女王様からあなたたちのこと殺せって言われてます……。でも、僕はそんな怖い事したくありませんし、あなた達だつて怖いのはイヤですよね？　ね？

だから今のままこの部屋で一緒に、世界が終わるまで過ごしていきましょう……。？　一人で眠つて幸せな夢の中にさえいれば怖い思いをすることもなく、いつまでもいつまでも平和で幸せに生きていけるのですから……。？」

「……偽りの楽園にしかパライズを見いだせない怠惰な利己心……。気に食いませんねえ。少しだけ痛い思いをするぐらいの活を入れてあげましょう。」

《リトル・ボ—————ツイ》

!!!!!!!

ですが、そうですね．．．わたくしも女王様から第二階層の支配権を与えられている高貴なる者、貴族の端くれ。あなたがた醜くて下賤な平民達にも一度ぐらい慈悲を恵んであげるのも高貴なる者が果たすべき義務と言うもの．．．。

どうでしょう？ もし、わたくしの前に這い蹲つて足を舐めるといふのなら特別にわたくしの高貴な巨乳を触らせてあげてもよろしくてよ？ うふふん♪」

「ぐおらああああっ!!! なに人様の妻と娘に色目使つとんじやい、このエロビッチめが

！ 死ぬ！ 死んで詫びなさい！ 死んで詫びて土下座しなさい！

この処女ビッチ！ ファッションエロビッチ！ ビッチビッチ体だけビッチ！ 悔しかったら処女損失して見せろやーーーーーっ!!!」

ボゴドゴズガドゴボカスカドゴンドゴン!!!

「さて、ニヤル子がボスを片し終えたみたいだから先いくか。まだ先は続きそうだしな」
「そうですね。先は長いのですから、敗北の確定した負け犬ボスの最期を見届けてやる理由も必要性も義理さえ皆無なのですから先を急ぐと致しましょう」

「……いいですけどね、別に。でも、このダンジョン攻略に私がついてく意味つてあるんでしょかねえー……?」

ボスと名の付く相手をパーティーメンバーの一人が一撃で一殺していくチートパーティーに同行者枠で付いてきてるだけの私。はつきり言ってお邪魔虫以外の何者でもないような気がします……。

「セレニア様が悪くて起きた事件ではありませんが、セレニア様がいなければ起きなかつた事件でもありますけどね、今回のコレは」

「……」

ついていく意味はなくとも、ついて行かないといけない義務と責任はあるようです……。

最上階、ラスボス部屋『次元の狭間』

「……まさか本当にここまで着てしまえるなんて……!!」

右も左もわからない、左右も上下も判然としない次元の狭間に辿り着いて道に迷わない者が存在するはずなのに!」

最上階に誰もいなかったので、適当なところに次元トンネル開けてもらってカラフル

な無重力空間へと進入を果たした私たちでしたが、穴に入って隠れてらしたグレモリーさん（エロコス装着状態）を見つけたところ、何故だか彼女に驚愕の悲鳴を上げられてしまいました。何故なのでしょう？ 理由が解りません。

「あなた達、一体どうやってこの空間を迷うことなく私の元までたどり着けたの!？」
グレモリーさん（エロ）に聞かれてしまいました。

何故ってそりゃあ……

「慣れてますからね」

惑星保護機構に職員として配属されてる邪神。平たく言うと宇宙人なお父さん。

星間国家と化してしまったイゼルロンの実質的宰相を務めてらっしやる天野さん。

そして、形だけとはいえ宇宙要塞と宇宙艦隊の総司令官を兼ねている私。

右左上右下右すべて意味をなさない宇宙空間での索敵ぐらい、別にどうと言うほどでもないんですよ。

「くっ……！ でも、私を攻撃してしまって本当にいいのかしら？ この身体の持ち主は今回の件を必ずしも望んでいたわけじゃない。私の力で憎しみの方向にねじ曲げら

れただけ。

それでも私は私、リアス・グレモリー。私を攻撃すればダメージはそのままりアス・グレモリーにも届いてしまう。

私を倒さない限り町の異変は収まらないけど、私を倒すためには私もろともリアスを殺すか、魔力を奪い尽くすしか道はない！ 魔王の妹ルイン・プリンセスが持つ膨大な魔力を吸い尽くすなんて真似が人間ごときに出来るわけが……っ!!!

「じゃあ、殺さない程度に殴って気絶させましょう。刃物で切りつけさえしなければ死なないはずです。強靱な生命力が自慢の悪魔ですから」

「……………」

一時停止ボタンを押した状態で固まるグレモリーさん（エロ）。
ですが、気を取り直したのか直ぐに復帰されてこられました。

「……それでも、想いの強さが能力を左右するこの空間内においては私の方が有利であることにかわりないはず！」

身体を乗っ取っている身である以上、不完全にしか發揮できないけど、リアス・グレモリーが持つ滅びの力を見せてあげる！」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!

「誰かを好きになると言うことは、誰かを妬み、嫉妬もすると言うこと！好きという想いが強ければ強いほど、想いが反転した時に攻撃に向かう意志は強くなる！」

誰よりもイツセーが好きなりアスから生まれた私は、イツセーを愛する想いだけで編まれた存在！彼を好きなことにかけては全宇宙で私に勝る者など存在しているわけではない！

つまり！想いの強さで攻撃力が決まるこの空間にいつづける限り、私は最強！最強にして至高の大悪魔ルイン・プリンセス・リアス・グレモリー！！

とー、いうわけで！食らいなさい！私の愛のこもわた一撃を！

はあああああああああああああつつ!!!!!!

愛してるわ、イツセー——————ツツ!!!!!!

グレモリーさんの両手から放たれてくる紫色の滅びの光（なんででしょう、たぶん。さつき自分で言っていましたから）。

どういふ理屈で何故こうなったのかはいざ知らず、私たちはグレモリーさんが叫ぶ、他人への愛の告白を聞かされながら攻撃されるといふ大変貴重な経験を味あわせていただいております。

……なんだ、このヘンテコリンな拷問は。リア充モゲロ。

「私の愛を受けてみなさあああああつっい!!!」

いや、だから。そういうことは本人に言いなさいっつて、赤の他人まで混ぜってる私たちじゃなく。

そんなツツコミを心の中で入れてる間に紫の光は私たちの間近まで迫ってきていて

「ん」

ばこん、と。

あっさりお母さんの右手ではたかれて、ハエのように落ちていってしまいましたとさ……。

「……なんでよ!?!」 今のつて本来のリアス・グレモリーがボイーン!となってる世界観

になってから、ようやく発動できる現段階最強レベルの一撃なのに!!」

「いや、何故と言われてもな・・・」

困ったように後頭部をかくお母さん。

やがて、言う決心がついたのか顔を上げてグレモリーさんの目をしっかりと見据えながらこう告げられます。

「普通に考えて想いの強さで実力が変わる世界でならー片思いより既婚者の方が強い
だろ?」

「ーぐつはあああああああああああああああつつ
!!!!!!!」

膨大な量の血を吐血されたことで、魔力が一番こもっているとと言われる体液と共に彼女の魔力も急激に失われていき、そのまま消えてなくなるかと思われたまさにその時!

「ま、ま。まだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおつつ
!!!!!!!」

ルイン・プリンセスが地獄の底から復活・さらに邪悪なオーラを身にまとってパワーアップしてるっぼいです！

「うふふふ．．．．．り、リア充に恨みを抱いて死んでいった女の子達の嫉妬をすべて集めて復活してやったわ．．．」

さらには嫉妬の想いに導かれて臨死体験中に降臨してくれた『M78星雲にある嫉妬の星』の支配者『嫉妬クイーン』からパワーアップアイテムまで渡された今の私は真の最強よ！」

「どこのパツパラ隊に所属している伍長さんですか？ あなたは．．．．．」

「はああああつ!!! 嫉妬の心は女心！ 揉めば命の母乳吹く！」

消えなさい！ そして死になさい！ 世の中で想いが通じて両思いになった私とイツセー以外のアベックは滅びるべきなのよおおおおおおつ!!!

嫉妬レディ・ドラゴン！ 炎の中から爆！たんふうふうつ!!」

!!!!!!

「こよーーーーーーーーーーーーーーーーっつ!!!」

!!!!!!

あ、ミルたんさんです。今日もドコからかいらっしやいましたね、ドコからか。

「・・・で、ドコから着たんですか？ あの人ほ・・・。ここつて一応、入るのが極端に難しい次元の狭間なんじゃ・・・」

「ドコからか、です。セレニア様」

「そうですか・・・」

物理法則どころか邪神達の理屈でさえ彼女の行動範囲は解らなくなってるみたいですね・・・。

「によっ！（どすん！）によっ！（どすん！）によーっ！！（どどどすん！！）」

「ちよっ、やめ、穴から出られな・・・誰か助けてーっ！！！！」

地獄から舞い戻ってきたばかりで門が閉じきつてなからハンマーで殴られると落ちちやうの！ 脱出するために穴から這い上がろうとするとチッコい女の子にモグラ叩きされちやーっ！！ 誰でもいいから私を地獄から救い出しておねがーっ！！

「じゃあ、早くグレモリーさんの身体を返してご自分だけ地獄にお帰りください。そして救い出してあげます。グレモリーさんの身体と意識だけは確実に」

「そ、そんな殺生な、ひでぶっ!? 私だつてリアス・グレモリーなんだから一緒に助けてくれたっていいじゃない、あべし!?

私だつて、私だつて、普通の女の子みたいに嫉妬に狂つて友達を恋の敗北者に突き落としたくなるときだつてあるわよーっつひでぶぶぶう!?

結局、今回の顛末は夢オチじゃないですけど、一人の女の醜い嫉妬に振り回されただけだつた訳ですか……。やれやれですね。

「我が人生に一片の悔い無し! なんて言う人間が実在するはずないのよーっつ!!!」

断末魔の叫び(?)を残して地獄の底へと落下してゆくグレモリーさん(エロ偽)。

町が元通りになっていく中で人々も今起きてたことの記憶を失っていき、今回の戦いで倒した敵は彼女一人だけ。

本当に……。やれやれでしたねえ。。。

37話「そうさ、京都にいこう『私たちも一緒です☆（混沌帝国三幹部）』 ＊ただし別校のセレニアは出てきませ
ん」

プオーー！

田舎じゃなくて都だけど、田舎っぽい田園風景の中を新幹線が走っていく。

それに乗っているのは駒王学園二年生、京都修学旅行組。

ようするにリアス部長とセレニアはいません。お留守番です。（朱乃さんも）

「代わりじゃないけど、本来はいない私がいまーす♪ 皆さんよろしくお願いしてくだ
さいねー」

「こない方がよかったトラブルの種！ 元至高のエロコス墮天使レイナーレー！」

「あ、護衛じゃないですけど落ちた聖騎士二人も同乗しますのでご了承のほどを。彼
女たちって学校に席おいてるだけであんまりこない幽霊学生化しちゃってますけど忘
れないであげてください？ 一般モブ生徒のみなさん方」

『『はーい、わかりましたー』』

「・・・いやいやいや!? モブって言われて納得しないでよ皆!? プライドつてものがないのかい!?!」

『うるせー! お色気パーティー中、唯一のいらん子イケメンレギュラー如きに、俺たちモブの気持ちがあわかって堪るものかーっつい!!』

「ひどい扱い!?!。(。o。;」

客車において、聖騎士風のいらん子男が泣く頃に新幹線は県境を抜け鉄橋に差し掛かっていった。

『ダメかあ・・・何度やっても収穫なし』

俺は、何度目になるかわからない白い空間での歴代赤龍帝に話しかけては反応なしでガン無視されるを修学旅行に向かう新幹線の車内でも、消火器脇にあった鏡をつかって実践してみたんだけど、やっぱり変化なかった。場所が変われば気分も変わるかなと思ってみただけだなー。

「・・・何をしているんだ貴様は? 不審者か?」

「うおわあつ!! な、なんだゼノヴィアかよ……脅かすな……」

いつの間にやら俺の背中をとっていた墜ちた聖剣使いであるゼノヴィアが、腕を組みながら壁に背中を付けた姿勢で白い視線を俺の後頭部に向けていた。

「脅かす意図はなかったし、気配だつて消していい。おまえが勝手に一人のところを狙い撃ち放題な場所で精神集中するなどと言うキチガイ行為に耽つていただけだ。」

修学旅行は骨休みの意味もあるとは言え、いささか油断しすぎだぞ? こちらが休養中なだけで、敵は今なお戦闘を継続中なのだからな」

「ぐっ……」

相変わらずの戦争脳なゼノヴィアの思考法は、常時臨戦態勢だった。

隙をつかれて殺された味方に対して「油断する方が悪い」と一言で切つて捨てれる、俺やサイオラークさんとは致命的に合わないタイプの女剣士。

その、いつもはセレニアの腰巾着をやつてるけど、今回に限つては学校が違うから別行動中の奴が俺の背中をとつたまま予想してない言葉をかけてくる。

「で? 今度は何について悩んでいる? 答えまでは至れないかもしれないが、ヒントぐらいなら出せるかもしれんから言うだけ私に言ってみろ」

「え?」

意外すぎる提案に俺は戸惑う。

だってコイツ等って・・・敵じゃないの？

「別に現魔王サーゼクス政権にたいして宣戦布告した覚えはないし、貴様等とも敵対していたつもりもない。」

我が帝国は絶対君主制を敷いている。皇帝陛下のご意向こそが、全ての法とあらゆる事情に最優先されて然るべき統一国家だ。セレニア様が「殺せ」とお命じになるなら誰だろうと殺すし滅ぼそう。世界だって敵に回して戦い征服するのが当然なのだ。

ーだが一方で、セレニア様がお命じにならない限り我らは誰とも敵対する気はない。故に命令が下っていない貴様たちと戦うつもりは微塵もない。殺せと命じられるその日まではずっとな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼノヴィアの理不尽な言い分に、俺は強い反発を覚える。

何だよそれ。上がやれと言ったら何だってやるのかよ？ そんなの人間じゃねえよ。自分でものを考えようとしなくなった奴隷と変わらないじゃねえか。

「然り。帝国は専制国家だ。市民はおらず、臣民だけが存在している。王が絶対として崇めたてる者たち・・・人、これを指して奴隷と呼ぶ」

「・・・・っ!! 自分でも気づいてたのかよ・・・・・・・・」

心を読んだかのようなタイミングで放たれたゼノヴィアの言葉にギョツとしながら

も、俺は内心「わかってんなら、直しやがれ！」と怒鳴り声をあげていた。こういう考え方の奴は好きじゃない。

「至極まっとうな考え方だな。眷属たちの自由を尊ぶリアス・グレモリーの兵士らしい在り方だ。私としても嫌いではない。

が、選んだ道が違うのも確かではある。

個人を絶対として、対等に並び立たないことこそが、私たちの自由意志で選んだ選択の結果なのでな。こればかりは何と言われても改めようがない。

割り切るか、否定しあつて自分の意見を力付くで押しつけるかの二者択一しか結末が存在しない議論になるのだろうか、このまま同じ話題を続けた場合はの話しではあるが」

「.....」

「とは言え、自分と異なる価値基準の人間すべてと敵対し合わなくてはならない決まりもなかるう？ 片方が困っているのを見かけた時に、残る片方が助言してはならない法がないのと同じようにな」

「.....」

「だから一先ずは言ってみるといい。言うだけならタダだからな。

聞かれて、答えが分からないようであるなら「分からない」と答えよう。知らない場

合には「知らない」と正直に答えよう。答えられない答えであるなら「悪いがそれは答えられない」とい答えると、私は剣に誓って約束する。

無論、答えになりそうな知識なり意見なりを持つている場合には、答えられる範囲で答えるのも含めてな」

・・・ゼノヴィアって、意外とひねくれてる？ 元教会所属の聖剣使いだったのに・・・「はあく・・・なんか意外性がありすぎてて気を張ってるのに疲れたわ。ーんじゃ、折角だし聞いてもらうか。俺の抱えている悩みの話し」

「どうぞ？」

右手の平を差し出して促してくるゼノヴィア。

そして俺は語り出す。アザゼル先生から今よりパワーアップするための方法。歴代の赤龍帝たちと話して協力してもらうことについて。

セイクリッド・ギアの中に宿っている歴代赤龍帝の思念が宿っていること。

その人たちは負の感情が強いらしくて、呪いに等しいレベルなんだそうだ。

その負の感情を浄化してあげられたなら、ジャガーノートドライブに匹敵する力を別の形で発揮できるかもしれない。

そのためには俺自身がセイクリッド・ギアの中に意識を潜らなきゃいけないくて、とりあえずコミュニケーションの基本は会話からと、その人たちに手当たり次第はなしかけ

てみてるんだけど、今まで一度も反応してくれなかったことがない事とかの全部をだ。

「・・・それで？ おまえは延々そいつら案山子同然の奴らに飽きることなく話しかけ続けていると、そう言うわけなのか？」

「そうだよ？ 相手の悩みを知るためにはまず話しかけてみて、返事してもらわなきゃ無理だろ？」

「はあゝ・・・」

俺の話が終わるまで黙り込んだまま聞くに徹していたゼノヴィアは、やがて俺の話が終わると同時に質問してきて答えを得たとたんに盛大なため息「はあ・・・」だ。

心底あきれ果てたとしてもいいかげんな態度には、俺もさすがにカチンとくる。

話してみると言うから話してやったらこれなんて理不尽すぎるだろ、こいつ。何様のつもりだよ。

「ため息ぐらい吐きたくもなる。全く以てバカらしい限りだ。

よりにもよって現赤龍帝が歴代赤龍帝どもの抱いた闇を払うのを言葉と対話で成そうとしているなどと・・・これが溜息をつかずにいられるものかバカバカしい。

貴様は本当にそんなやり方で自分の思いが、心を閉ざした相手に届くとも思っているのか才馬鹿一世」

「お馬鹿つけ加えるな！ 俺の名前は兵藤一誠だ！ てゆうか、おまえ！ そんだけ人のやってる事を否定してきてるんだから、当然代案の一つや二つぐらい持つてきてんだらうな！」

「ああ？ 持つてきているはずないだろうが戯け。そのぐらい気付けど阿呆」

「だあああああつ!!! じゃあ何しに来たんだよ！ お前はさあつ!!!」

馬鹿にしただけ馬鹿にされて、アドバイスの一つもされない今の俺って、めっちゃ可哀想な少年なんじゃないのかなあつ!!?

そんな風の中で盛大に怒り狂っている俺を、ゼノヴィアは逆に氷のような冷静さで見つめながら(どっちかって言うと「睨みつけながら」と言う方が近かったけど。コイツ目つき悪い)とても冷淡な声と口調で、ごくごく当たり前のことだとも言うように俺のやり方の矛盾について指摘してくる。

「そもそもお前には対話とか会話とかいう行為が向いとらん。

口を開けば「おっぱい、おっぱい」ばかり叫んでいる「おっぱいドラゴン」に相手の悩みを聞き取るための会話術など覚えがあるまい？

今までずっと、殴る揉むオツパイしかしてこなかった奴にいきなり優等生ぶって礼儀

正しく話しかけられたところで相手にはお前を信用する理由などあるはずなからう？

だから戯けと言ったんだよ、阿呆めが」

「ぐ。そ、それは確かに一理あるような無いような・・・」

微妙に悪意ある表現だったけど、言ってること自体は間違つてない・・・かなあ？
正直言つてよく分かりません！

「それだよ」

「?? いや、それだよって・・・どれだよ？」

「感情的な一言。分からんものは考えることなく分からんとか言えない馬鹿さ加減。

それがお前、現赤龍帝おっぱいドラゴン兵藤イツセーの在り方であり、閉じこもつて
る歴代どもにお前が言える全てだろうか？ それだけしか言えない男に、言葉だけで何が
出来て何が伝わると思つていたのだ貴様は」

「!!!」

暴論としか言いようのないゼノヴィアの言葉。

でも、なんでだろう？ どう言うわけだかものスツゴい真理を突かれちゃつてる気がするんですけどもおっ!!

「貴様の本領は、拳を使った感情と感情のぶつけ合い。言葉での語り合いで相手の悩みを浄化するのにはセレニア様の領分だ。貴様如きが一朝一夕で真似できるものでは断じてない。分際をわきまえろ、身の程知らず」

「ぐ、ぐぐぐう………っ!!!」

「付け焼き刃の礼儀正しきなど示されても相手にお前の気持ちは届かんし、話しかけるだけで呪いとやらを浄化する第一歩となるなら、そいつ等全員とつくに救い出される。」

それでも救われることなく何百年間もそこに居続けた者たちを前にして、貴様如き十年ちよつとしか生きてない若造が何を言える？ 何を言って相手の苦しみを和らげて浄化できるつもりでいたのだ？」

「あ………っ」

「ようやく気づいたか間抜け。」

どれほど使える能力数が増えようと、貴様の出来ることは本質的にたつた一つだけ。自分が『これは絶対だ』と信じる物に対して抱く思いを拳に込めて殴りつける。それだけだ。それ以外に何もやってこなかった上に、それ以外の手段であげた実績がない。もない以上は、それ以外に思いを伝える術などある訳なからう？」

「・・・・・・・・」

「仮に私になにかしら有効な手段を知っていて、お前に教えて実践したとしても無駄なことだ。そんなものは受け売りだからな。受け売りの知識を披露しながら人生相談に応じたいと言ってくる腹話術の人形風情に、お前は礼儀正しく返事をしたいと思うのか？」

「・・・・・・・・ 思いません。無視します。ガン無視です・・・・・・・・」

「だろう？」

とくに勝ち誇るでもなく、退屈そうに二度目の溜息つきながらゼノヴィアは、俺の求めてたのとは違うけど微妙にありがたいわけないわけでもない、いいアドバイスを残してくれた。

「私は歴代どものことを何も知らんから確かなことは言えんのだが・・・・・・・・ひとつだけ。

貴様ほどバカげた理由で戦っている者を私は知らんし、ほかの歴代どもの中にもおらんだろうな。いたならお前は『二代目おっぱいドラゴン』と呼ばれているはずだから」

「!!」

「ハッキリ言ってしまうなら、歴代どもとは初代から続く模造品のことだ。最初の奴が作った形を受け継いで実践して同じ物になっていく。継承とはそう言うものだろう？」

だからこそ貴様のような個人として覚えられておらず、『歴代』という大きなくくりでひとまとめにされている。

歴代どもが赤龍帝の力の呪いで苦しんでいるというのであれば、今までとは全く異なる赤龍帝ーおっぱいドラゴン帝としての示し方でも見せてやるといい。きつと笑い物になれるから」

「なるほどーって、さらし者じゃねえか!? 先輩たちの前で俺、盛大に恥をかきまくって泣きそうになっちまうじゃねえか!」

叫びながら精一杯抗議する俺!

ヒドい、ヒドすぎるあんまりな扱いだ・・・いくら敵じゃない（みたいなポジションの奴）でもこれはあんまり言い過ぎだろおおっ!? 俺の傷つきやすいガラスの心が木っ端微塵だぜ!

「・・・いや、お前今さらなに言ってるんだ? 散々に女たちを脱がして晒して恥かかせまくってきた変質者の分際で、今さら先輩たちの前でだけ格好付けても意味なくないか?」

・・・まったく以ておっしやるとおりで、返す言葉もございませんです、はい……………。

おい、ダッセー！ なにを寝ている、着いたぞ早く起きろ。床で寝てると他の乗客に迷惑だからな。目的地に到着した乗客は、新しく乗る人たちのためにも速やかに下車する。それが常識と言うものだ。

分かつたら早く起きるか足拭きマッドドラゴン！ そこに寝られていると、降りる人も乗る人たちにも迷惑すぎるだろうが！ 便所トカゲ！

「最低すぎるなお前って女は！ さつき少しだけだけど感激した俺の感動を返せ！」

「貴様の事故解釈など知ったことか！ いいから降りろ邪魔だ、はり倒して持ち運ばれたいか!？」

予告する！ 4秒で降りれるよう支度しな！」

「横暴すぎるんだよ、この暴君聖剣使い女………!!!」

こうして俺の京都修学旅行さいしよのイベント「新幹線での移動時間」は、訳わかんない剣女に変な説教されただけで終わりを告げた。

ドキドキ胸きゅんイベントなんて少しも存在しない、寂しすぎるモテナイ男子高校生のような修学旅行の始まり方。

もう許さん！ いつか絶対コイツは脱がす！ セレニアとイリナとレイナーレ共々ぜんぶまとめて素っ裸にして晒してやるから覚悟しろよ!？」

「……4秒経過。荷物運び任務を遂行する。目標「ドラゴン」！ 目標「ドラゴン」！」

やーめーてーくーれー！ 小脇に挟んで持ち運ばないで！！
男の子としてのプライドが死んじやうからー！ー！ー！ー！つ！？

つづく

38話 「宇宙的恐怖、京都に立つ！」

「グレモリー家が京都に所有する超高級ホテルのはず……なのになんで俺の部屋だけ完全に和室じゃん!!」

「……はリアスさんが用意してくれたんです。もしもの時、私たちがいつでも話し合えるようになって」

「それで……って、俺の部屋にしないでしょっ!!」

「クスッ。我慢してくださいね。イツセイ君♪」

京都の洋風ホテルの中に1室だけ存在する純和風の客室で『ハーレムが欲しいから悪魔になった男子高校生』が世の理不尽さを嘆いていたのと時を同じくして、京都の別の場所では一人の変わり者と「成人料金システム」に喜んでいる二人の外国人が不思議な会話をかましていました。

「ん?」

「??」どったのゼノヴィア? なにか不条理すぎる自分勝手な嘆きの声でも聞こえたり

した?」

「いや・・・ただ、モテないときには「ハーレムハーレム!」言つてたくせして、モテはじめた途端に自分の部屋が女子のたまり場扱いされることを喜ばなくなつた、初心を忘れた若造は人間だろうと悪魔だろうと見苦しい限りだなと思つただけさ」

「??? ま、いつか。それよりほらほら見て見てキツネだよー♪」

「ふむ・・・お稲荷さんか・・・。別に嫌いではないのだがな・・・出来れば犬はないのか? 犬は。化けザル退治で有名な『霊犬早太郎』人形とかだつたら500円でも絶対を買うぞ、私はな」

「・・・いや、ここ京都であつて長野県じゃないし、静岡県でもないからワンコを祀つてゐる神社は流石に・・・あ、今スマホで見たらあるっぽい。千年の都スゲー」

「では私は『国難安泰・難局突破・大願成就』をお祈りするため、織田信長公が祀られてゐる健甞神社へと参りに行きましょう・・・試練をください!とお願ひするのために!!」
 「なんかこの人だけ趣旨違う! 世界観諸共いろいろと趣旨が違いすぎてゐる気がしませんかいっ!?!」

・・・千年の都、京都。実際には千五百年近い京都。

長い分だけ色々、ごつた煮化してきております。

「はあ、はあ、はあ」

息を弾ませながら俺は走っていた。場所は京都の千本鳥居がたてられてるトンネルの中。

皆との観光を楽しんでる最中に横から横やりが入りそうな気がしたから、先に一人で頂上に登って誘き出そうとしていた訳なんだけど。

「京の者ではないな」

予想通り待ち伏せの奇襲をしかけられて、取り囲まれちゃってる今の俺。

ふー、危なかった。今回はアジアたちを巻き込まなくて済んだみたいだぜ。もう二度と女の子が傷つくのも泣いてるところを見せられるのも懲り懲りだからな。そうならなくて本当に良かった……。

……と、安心しちゃってた時期が俺にもありました。

「余所者め……ッ。よくも！ 母上を返してもらおうぞ！」

……もしかしなくてもキツネの娘さんから勘違いによる逆恨みを去れてるみたいです。

「なに言ってるんだ!? 俺はお前の母ちゃんなんか知らねえぞ!」

「嘘をつくな！ 私の目は誤魔化しきれんのじゃ！」

キツネのお嬢さんが片手を振ると、俺の周囲にいたキツネのお面を被ったカラス天狗みたいな兵士たちが一斉に襲いかかってくる！

くそ！ こつちは部長に頼まれてるから、京都にいる人も建物も本気で戦って傷つけないってのに！

ブウンっ！！

「ちいっ！！」

横薙ぎの大切りを、目の前に迫ってきていた大木をジャンプ台代わりに使って躲し、着地したままでは良かったのだが油断した。すぐ真後ろまで迫ってきていたキツネ面の神主っぽい服きた剣士が俺に向かい切りかかってくる！

ブウンッ！！

ーガキイイイッソん！！

「ゼノヴィア!? イリナ!?」

ピンチを救ってくれた援軍は、性格的に大問題とは言え戦闘力的には申し分のない二人。

よし！ これなら行ける！ 傷つけることなく俺たちだけでも対処可能な戦力だ！

「不浄なる魔の存在め！ 絶対に許すことはできないのじゃ！」

「アーシア！ 第二承認カード！」

「はいー！」

「よっしゃー！ ナイトにプロモーション！」

体が気が流れ込み、体が軽くなった感覚を得る！ 走り込みで翻弄するだけなら稲荷大社も傷つかないだろう！ いちおうブッステッド・ギアを三十秒間だけ溜めてから力を発動。これでよし！

あと、心配なのはゼノヴィアとイリナか。あいつら木刀しか持ってきてないっほいけど、木刀でも物を壊しそうだし注意しておかないとな。

「ゼノヴィア、イリナ。よくわからんけどここは京都だ。理不尽なことになってるけど、相手と周辺を傷つけるのはマズい。

できるだけ追い返す程度に留めよ（ガチコン！）って、あ痛あつ！？」

だ、誰だ!? 俺を背後からゲンコツでブツ叩きやがった大馬鹿野郎は!!」

「……馬鹿はあなたでしよう、イツセー君。喧嘩バカも程々にするように。少しぐらいは場所と状況を考える努力ぐらいはしてみなさいよ、本当に全くもう……」

「げ。夕麻ちゃん……」

今も昔も悪魔になった俺にとって一番苦手な相手、天野夕麻こと墮天使レイナーレが人間携帯の姿をとって俺の後ろにいきなり現れていた。

見ると、ゼノヴィアとイリナも戦闘を辞めて牽制するだけに留めながら、呆れたような目つきで俺を見ている。

「な、なんだよ?」

「いや、バカだなあと思っただけだ。気にするな」

「ぐっ、は!」

の、脳筋剣士だったはずのゼノヴィアから今、バカつて言われたよバカつて……。あのねー、イツセー君。

土地の支配者から許可をもらって逗留している地において『よくわからんけど始まってしまった遭遇戦』なんて、ふつうに考えたら現場に通達が行ってない場合に限られるのよ?」

チンピラの縄張り争いじゃあるまいし、正規の手順で入国を許可された外国人が正規軍によっていきなり教われるなんて致命的すぎる不祥事なんだから、外向的に利用できるチャンスなのよ? それを向こうに手傷負わせて無駄にしちゃってどうする気だったのよバカ」

「ぐ……い、イリナにまでバカにされるとは……。なんかスツゲエ屈辱感だな今の俺……」

だいたい、政治とか難しいこと男子高校生に求められてる方がおかしいんだし……。

むしろ、それを知ってるお前たちがおかしいだけなんだし……。

『知らなかったで済ませられるのは、チンピラ同士の意地の張り合いまで！ 外交使節団がそれやったら即刻全面戦争突入確定！ 少しは学べ！ 脳筋ドラゴン!!!』

ぐ……はっ……。

「はあ……。まあ、あのバカは置いておくとして、あなたも配下の者達に剣を引くようお命じになってくださいませんか？ キツネの姫君殿。」

悪魔勢力からきている客人に襲いかかって非礼を働いたとなれば、あなたの方が困ることになるのでしょうか。

あなたたちは今、『これ以上のを増やしたくはない』状況にあるのでしょうか？

!!?!? な、何故そのことを……答えよ！ 貴様たちはいったい何者じゃあ!!!」

狐少女の糾弾にたいし、天野夕麻は礼儀正しくスカート裾を軽く指で摘んで持ち上げながら一礼し、玲瓏とした声で『彼女にとっては公的身分』の方の立場で言葉を紡ぐ。

「初めて御意を得ます、京都の裏と表の妖怪たちを統べる八坂のご息女、九重さま。

わたくしは先日、九尾の狐様に『日本の地で起きた異種族同士の無断戦闘』について謝罪と説明と賠償に上がるために、拝謁する榮譽を賜りましたセレニア皇帝陛下の名代を務めさせていただいている者で、天野夕麻と申します。何卒よしなに」

如何にもなお嬢様過ぎる外交官的立ち居振る舞いを見せつけられて、頭に上つていた血が急激に低下した九重は返つて慌てふためいてしまい、謝罪もせぬまま配下の者をつれて逃げ帰つていつてしまったのだった。

それを見送つたゼノヴィアが、

「異業種の姫君が感情的で逆境に弱いのは、人間族以外の共通理念か何かなのか？」

と、真面目な顔してくだらない疑問を口に出してた事実を知るものは京都側にはいなかったのである。ちゃんちゃん。

「ーま、つまりはそう言うことなんだそうさだ。

俺たちの事情についてある程度はセレニアの方から伝わっていたそうなんだが、そのあと母親をさらわれて頭に血が上つちまった魔王少女の嬢ちゃんは、部下たちから説明

してくれてるのを聞き流してたらしくてな。他の奴らが知ってたことを唯一人知らないままお前たちを襲っちまってたらしい。

何というかまあ・・・こう言っちゃあ何だというのはイヤと言うほど分かり切ってはいるんだが、それでも言わずにはいられないよな。アホらしいと」

「・・・・・・・・・・はう〜（〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓）」

赤くなつた顔色で、もともと小さい体を更に小さくして恥入る巫女装束の女の子。昨日、俺たちに襲いかかつてきた狐たちを率いていた女の子だ。

江戸時代の町並みセットみたいな場所を通り抜け、いろいろな妖怪を見物したりされたりしながら辿りついた最奥のドデカいお社。

そこで待つていたアザゼル先生とレヴィアタンさん。そして、この女の子『九重』ちゃん。・・・正直あやまられても大いに困る状況だった・・・。

アザゼル先生も京都にきて始めて知ったらしいんだけど、セレニアたちは妖怪たちとかなり早い時期から独自の協定を結んでいたらしい。それは『滞在協定』と言う名前の条約だそうで、京都だけじゃなくて日本全国の妖怪たちと結べる範囲で結びつくしていたとのことだった。

「・・・だったら俺たちにも教えといってくれたっていいじゃないか、妖怪たちの情報を・・・」

一応とはいえ、敵じゃなくて共同戦線はる気があるならそれぐらい教えてくれても罰は当たらないと思ってしまふ俺を誰が責められるだろうか？

そう思っていたんだけどー。

「それはダメです。筋が違う」

「・・・??? どういう事だ？」

夕麻ちゃんが断言したから、俺もたずねる。

彼女はしっかりと俺の目を見つめ返しながら丁寧な口調で、俺のとは違う『ルールの大切さ』について語り出す。

「あくまで私たちは『日本の先住民族である妖怪たち』が今時大戦において部外者であるかの如く後回しにされている現状を憂えただけのこと。

彼らに対して『知る権利と資格がある』、そう感じた情報だけを伝え、残りは謝罪と賠償に専念したことを陛下の名代として保証させていただきましよう。

対等な立場で条約を交わしあつた相手国の情報を、友邦だからと言って相手とは直節縁のない第三国に流すなど最低最悪すぎる違約行為です。その様に自分勝手な私情を優先する約束に信頼感は存在しません。

自分の窮状を知って考慮してほしいと思うなら、まずは自分たちの方から相手の事情に配慮するのが人として当たり前前の礼儀と言うものです」

「む、むううー……」

正直なところ『屁理屈言いやがって！』って気持ちがない訳じゃないけど、理屈が苦手な俺でも何となくわかるぐらいには正しいことを言ってるような気がする今の夕麻ちゃんの言葉には説得力あるときが多いんだよなあ。こういうときの彼女は、ちよつとだけ苦手だぜ。セレニアアっばいし。

「とは言え、です。この筋はどちらとも平等に守って然るべきもの。三種族勢力が妖怪たちの地である日本で戦闘を行っていたわけですから説明と謝罪のためにも最低限度の情報提供はせざるをえませんでしたが、それはあくまでカオス・ブリゲードとの戦闘による被害で生じた分までのこと。

三種族それぞれの内情に関してはほとんど語っておられないと言質を取っておきましたので、安心してよいと思われます。

もちろんイツセイ君に関してはアンノウンな存在であるが故に、生じた被害に対して説明しなければ整合性がとれない部分もありましたが、それでも力に関するほぼすべての事柄についてはアザゼル先生が話されて分だけが京都の方々が知るあなたの全てと言つて過言ではないでしょう。

ですので、知っておいてもらいたいことは自分の口から伝えなさい。私たちに言つてあげる気は一切ありませんのでね」

ぐ。俺が女の子相手だと思わずポロリと変態発言してしまったりする悪癖あること知っている口調でそれを言いますか……。

「……だったたら、はじめから何も俺たちのこと話さなければ良かったらうに……(ぼそり)」

「言つたでしよう? 『筋が違う』と。今回のこれは私たちが勝手に筋を通したくなつたから行つただけの行為。個人的な倫理観と自己満足を満たすためだけの行いです。」

自分のルールを守り貫きたいだけのために行つた行為など、最初から最後まで自己満足だけでできあがつたエゴの産物。そんなものに自分への配慮が含まれていた場合には、ただ『運が良かっただけ』だと思っておきなさい。その方がおそらく安全です」

「天使なのに地獄耳だな! 墮天したからか!」

なんとも微妙な配慮しかしてくれない元カノだったが、一応最後の最後で咲いて限度の配慮はしてくれてたらしく、昨日の別れ際に「今回は条約もあるので全面的な共同歩調をとるつもり」である事を開かし、俺に対しては京都の人たちに『力以外』何も教えていないことを強調した上で付け加えるようにこう言つてから部屋へと戻つていった。「イツセー君、他人に自分のことを陰でペラペラしゃべられるのは余り好きではなかつたでしょう? そのところをセレニア様なりに配慮した結果だつたと私は思つてます。ですから余り怒らないであげてくださいいね? それじゃあ」

……再会した元カノは、なんとも捉えがたい性格の持ち主になっていましたとさ。

まあ、そんなこんなで俺の頭の中の比重はセレニアとか夕麻ちゃんたちの方に偏ったまま翌日の今日を迎えてたわけなので。

「私は、表と裏の京都に住む妖怪を束ねる者。八坂の娘、九重と申す。先日は申し訳なかった。お主たちの事情も知らずに襲ってしまった。どうか、許してほしい……！」
ペコリと頭を下げてる狐のお姫様に頭を下げ謝られても、掠り傷一つ負ってない俺としては対応に困るわけ。

「誤解が解けたのなら、よろしいんじゃないでしょうか？ なによりも平和が一番です」
アーシアがそう言ったので、俺の答えもこれで決まりだな。

「えーと、九重でいいかな？　なあ、九重。お母さんのこと心配なんだろう？」
「と、当然じゃ」

「なら、あんなふう間違えて襲撃してしまうことだってあるさ。もちろん、それは場合によって問題になったり、相手を不快にさせてしまう。でも、九重は謝った。間違った

と思つたから俺たちに謝つたんだよな？」

「もちろんだとも」

俺は肩に手を置き笑顔で続ける。

「それなら俺たちは何も九重のこと咎めたりしないよ」

九重は俺の言葉を聞いて顔を真っ赤に染め、モジモジしながらつぶやいた。

「……ありがとう」

うん。これでOKだろ。もう誤解は解けた。問題なしだ。

満足して立ち上がろうとした俺の背中に、水のように冷ややかな声で冷静に指摘してくる声が入りさえしなければ――

「お前……今の言葉、アーシアが殺されてた場合にもちやんと言つてやれよ？ 向こうの事情は一切変わらないまま、ただ偶然お前たちの起こしていた戦闘に巻き込まれて死んでしまった場合にだけはな」

が代わりをしてあげましょう。任せてください。得意中の得意です」
 ふわり。

軽やかな動きで宙へと舞い上がりながら、夕麻が夢の名から取りだしてきたのは——————一本の『鞭』であつた。

「さあ！ 根がドMの変態男子高校生が「愛」だのなんだの騒ぎ出したときには快樂で発散させてしまうのが一番ですからね……………」

鎧に守られてるとは言え、男の子の体の中で一番痛気持ちいのいい部分を理性無き今の状態のまま果たして守り抜けますかイツセー君!? お食らいなさい!

《クイーンズ・オブ・折檻（豚よ！お前は豚なのよ！）》

ピシイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイツツン
 !!!!!!!

「ここに描かれておりますのが八坂姫にございます」

「どうかお願いじゃ。母上を……母上を助けるのに力を貸してくれ！ いや、貸してく

「ださい！ お願いします！」

「ああ、わかった。任せておいてくれ。お前の母ちゃんは俺たちが必ず助け出す！」

「イツセイさん！ 今、エッチなこと考えてました？」

「ん？ なんでだアーシア？ 今は緊急事態なんだぞ？ そんな余計なことに割く余裕なんて、俺たちには存在しているわけじゃないじゃないか！」

「そ、そうですか……」

「うん、まあ、ヒーリングで回復したばかりだから、そんなもんだろ。幸いなことに衝撃が強すぎて記憶が一部欠落してるっぽいし、最悪な事態を想定して控えておいてくれ。何かあったら呼ぶ。」

「お前らガキに取っっちゃあ、大事な修学旅行だろ？ 俺たち大人ができるだけ何とかするから今は京都を楽しめよ」

「そうよー♪ みんなは京都を満喫してねー！ 私も楽しんじゃうけど☆」

「それと明日は謝罪と交流をかねて、姫様が観光案内をしてくるそうだ」

つづく

おまけ 「アゼゼル・レヴァイアタンVS紫藤イリナ」

イ「『自分たち大人たちができるだけ何とかする』って格好良く聞こえるセリフだけど、大人たちがしでかしたことの尻拭いしかやらされたことのないイツセー君たち♪
千でも一でも大人たちのお尻く拭く☆ おしりドゥラゴゥン♪」
ア・レ「うぐうっ!」

おまけ2「兵藤イツセーVS戦争脳ゼノヴィア」

ゼ「と言うかお前、襲ってきたらどこでもいいから戦闘するのいい加減やめろよ。チンピラじゃないんだから、上に報告して判断ぐらい仰げよ。名門貴族に雇われてる兵士なんだから一応は。」

「やられたからやり返す、やられる前にやる、欲しいものは力づくって、お前はどこのカオス・ブリゲードなんだ？」

イ「ぐふっ!」

39話「たまたま先祖が英雄だった運のいい人たちご一行様です」

「あー、昨日はすんげえ夜だったけど、なんとか天龍寺の最寄り駅まで到着・・・と」

俺は大きく伸びをすることでバスに座り続けたコリをほぐす。

昨夜はアジアから俺との間に「子供が欲しい」と言われたり、元教会コンビが妙に優しくしてくれたり、夕麻ちゃん・・・いや、レイナーレの視線が時折俺の股間に向けられてるような気がしてたのに勃たなかつたりと、不思議なイベントてんこ盛りな一日だったけど今日ぐらいいは普通に京都観光を楽しみたい。

京都住まいの妖怪、九重ちゃんのガイドもあるし問題なし！ 安心安心・・・

「・・・つてえ、なんで京都にいるんだよセレニアあああああっ!？」

「なんでつて・・・この時期に制服姿の女子高生が昼日中の京都市内を歩いているとしたら、それは修学旅行中だからしか有り得ないのでは？ 秋の修学旅行で京都選ぶ学校なんて、日本全国津々浦々いくらでも見受けられるでしょうに」

「じゃあなんで班別行動してないんだよ！ おかしいだろ！ 修学旅行中に一人きりで

単独行動許されてるんて！ それともお前の学校にも手下を潜り込ませてあつたりするのよ!？」

俺に糾弾されたセレニアは気まずそうな雰囲気まつて俯いた。

ふつ。勝ったぜ・・・俺は生まれて初めてコイツに勝利したーーーーー

「・・・空気読んで自ら一人になりましたね・・・。歴女でもない普通の女子高生グループに、京都の私は相性悪いみたいでしたので・・・。」

「ーーーー心の底からごめんなさい・・・。」

バス降りたばかりなのに、いきなり土下座してる俺。

歴史知識ある奴にとつて、大河とかを基準に語る京都の話は禁句なのだとレイナレ・・・夕麻ちゃんにこの前教えてもらつた俺は空気が読める男、兵藤イツセー。

そんな訳なんで京都観光メンバーの中に、急遽としてセレニアが加入いたしましたとさ。

「ここが渡月橋よ。そう言えばアンタたち知ってる？ 渡月橋つて渡りきるまで後ろを

振り返っちゃいけないらしいわよ?。」

「なんでですか?。」

「それはね、アーシア。渡月橋を渡っているときに振り返ると授かった知恵がすべて返ってしまい、男女も別れるって言い伝えがあるからなのよ。まあ、こちらはジンクスに近いって話だけどー」

「絶対に振り返りませんから！」

「いやいや、だからジンクスだって。本当に生真面目だなー、アーシアは」

桐生が冗談っぽく言って笑いながらアーシアをからかっていると、俺のすぐ隣の元聖剣士ーズの二人から、

「なんなのだ、その中途半端なオルフェウスもどきは・・・振り返ったときのペナルティ軽すぎではないのか・・・？」

「確かにねー。つか、どうせ忘れるんだったらシエオールの方がよくない？ 救いあるし」

「いや、イリナ。それは後期ユダヤ教における冥府の国シエオールであって、初期の頃のだと神に逆らう者を突き落とす場所であつたはず。苦しみこそあれ、救いはない」

「あれ？ そうだつたつけ？ 無駄に長く続きすぎると話が二転三転して初期設定とは似ても似つかない世界観になってくるから、覚える方としては面倒くさいのよねー。

あゝあ、やっぱ国も王も支配者も宗教も二、三百年くらいで新陳代謝で交代しないと動脈硬化おこして苦しみながら余命を延ばすだけの老害になっちゃうもんなのね」

「お主等……京都の裏と表を支配し続けて千年になる我らの前でよくも抜け抜けと……」

「まあまあ。ーとところで、アルジエントさん。別れるもなにも、あなたと兵藤さんはお付き合いをしてらしたんですか？　彼が学校にいるときにはグレモリーさんとイチヤツいている時間の方が長いのだと、天野さんからは報告を受けているのですけれど？」

「イツセー……さ……っん?!」

「ち、違うんだアーシア！　これは誤解だ陰謀なんだ！　俺は大好きな女の子の大好きなおオツパイなら、別け隔てなく平等に愛せる男なだけなんだよ！」

「受け入れたつもりでしたけど、改めて聞くとなんだか腹立ってきますね！　その微妙すぎる愛の告白セリフには!!」

「……なぜだか始まる、橋の真ん中あたりでおこるキャットな猫パンチファイト。」

セレニアがいると、いつも大体こんな感じになってしまう……。

ーが、その時！

突然ぬるりと生暖かい感触が俺の全身を包み込み、気づいたときには俺、アーシア、九重と木場、そしてセレニアたち以外のすべての人たち、周辺にいた一般人が一人もいな

くなつちまつてた!

そして少ししてから立ちこめてくる霧らしきもの……

「この霧、見覚えがあるぞ……!」

俺のつぶやきに木場が『ディメンション・ロスト』ってロンギヌスの能力だと教えてくれた。

「お前ら! 無事か!?!」

黒い翼を生やしたアザゼル先生が降りてきて語ってくれた。俺たちだけが別空間に、この霧によって転移させられたんだと。

ガシヤ、ガシヤ、ガシヤ……

やがて橋の向こう側から聞こえてくる、金属を擦り合わせるような音。

霧の中から出てきたのは武装した複数の人影。その内の一人が前に進み出てきて俺たちに向かい、軽く挨拶してきやがった。

「はじめまして、アザゼル総督、そして赤龍帝」

学生服の上から漢服らしきものを羽織った黒髪の男。手には槍を持っていて、不気味なオーラを感じさせてきているからにはただの槍じやないんだろうな。

「おまえが噂の英雄派を仕切ってる男か」

「曹操を名乗っている。三国志で有名な曹操の子孫——いちおうね」

男が名乗ってきたけど・・・曹操？ しかも三国志!?
 仰天する俺に至極冷静な声で、答えを返してくれる少女がここにいた。

「いや、悪魔やら堕天使やらがうまくついているのに、今さら歴史上の有名人の子孫が出てきたぐらいでなに驚いてんですか、あなたは。」

史実を小説化した三国志よりも、旧約聖書の天使やら吸血鬼やら妖怪やらが実在していたことの方に驚きなさいよ。そっちの方が本来ならフィクション種族なんですからね」

.....
 相変わらず、身も蓋もねー.....。

俺はシリアス顔でバトルに入ろうとしていた所に盛大な冷や水ぶっかけられたせいで意欲を削がれまくり、ポリポリと頭をかきながらいつの間にか傍らまできていた銀髪の少女の頭に視線を落としながら言う。

「いやさ、セレニア。一般的にはそうかもしれないけど、俺たちつてもう悪魔に転生しているわけだから、驚く度合いとしては歴史上の英雄とかの方が上なわけだな？」

「ならせめて架空の英雄が出てきたときに驚いてください。曹操さんなんて妻は多いわ、道中で色んな人と関係持つてるわ、そう言う時代だわで、孫の代に一族郎党皆殺しにされたつて言うのも本当か嘘か確かめようがない大変女好きで有名な方なんですからぬ」

「・・・俺もそう言うのには少し憧れるから、あんまり責められると俺も微妙に傷つけられちまうんだからな・・・？」

ハーレム王を目指しての者として英雄たる者、斯くありたいと願う正常な男の願望。

それに対してソツチ方面には妙に淡泊なセレニアは軽く肩をすくめてみせてから、

「でしたら曹操さんではなくて、劉備玄德が崇めていたご先祖様でも目指す対象とした方が合つてると思いますよ？ 後宮に数千人の美女を囲い込み、政は疎かにしながらも毎晩ハーレムに通うことだけには手を抜かなかつた、ある意味でソツチ系の偉人な方ですのですね」

「マジで!? そうだったのかよ!?! 劉備玄德つて真面目で勉強熱心な人望の塊みたいな熱血正義感を連想してただけだよ! 横溝三国志の影響で!」

日本人少年なら誰もが読む横溝三国志! あれ以外で三国志呼んでる奴を俺はあま

り知らない。

セレニアは頭を振りながら、「全然違います」と断言してみせている。

「史実の劉備さんは若い頃から塾をサボり、ヤクザ相手に喧嘩と博打に明け暮れていた真面目さとは縁遠い人でしたが、困っている人を見かけると放っておくことが出来ず、強者が弱者を虐めているのが何よりも嫌いで必ず突つかかかっていったという……まあ今で言うところの人情派ヤクザ屋さん、もしくは雨の日の猫に傘差し出してあげる不良さんみたいな人だったらいいので、兵藤さんには多分こっちの方が合っているのではないかと」

「あー、確かにそんな気がしてきたなー。俺も将来的には王様の跡継ぎ目指してるんだし、王家の血を引いてる設定は少しでも燃えるな！ 部長の伴侶にふさわしいのに！」

「……さっき言った劉備さんのご先祖様が漁色家すぎたせいで、劉備さんと同じ血を引いてる平民さんが中国全土に数千人規模でいたんですけどね、史実では……」

「マジでか!? 血の正当性なさすぎてるじゃん!？」

「使えねー! 部長の夫になるのにふさわしい血として使えねーじゃん! 意味ねーじゃんかよ!」

「ちなみにですが、史実の曹操さんは宦官という……まあ、後宮に入れられた王様の愛人たちに手を出せないように「切られちゃった人たち」の家に養子として入られた方

で、流れる血の価値としては尊敬されながらも軽蔑もされるという極めて微妙な血統だったんだそうでしてね。それが原因で死後に功績を抹消されちゃった人でもありません。

確か、彼自身が厚遇してお寺まで建ててあげた当時は新参の仏教勢力によつてでしたかね？

仏教では宦官は悪しき存在でしたから、旧体制を復活させたい既得権益層と中華での勢力拡大したい仏教勢力にとつて都合のいい英雄は改革派の曹操さんよりも、保守派の急先鋒である正しい血筋の王朝復活派の劉備さんだったという事なんでしょうね、きつと。

まあ、そもそも下克上して玉座を手にした大英雄なんて一人の例外もなく篡奪者か侵略者のどちらかですか有り得ないわけですし、曹操さんも成り上がりの野心家にすぎなかったと言われてしまえばその通りの人でもあります。守旧勢力から見れば紛れもない文化の破壊者でしかなかったのも事実ですからね。立つ側が反転すれば正義も反転するものですし。

そう言う時代だったとはいえ、やりきれないお話ですよね全く．．．あ、失礼。話に夢中になりすぎちゃいました。どうぞ続きをご自由に」

「あ、ああ．．．．．」

手のひらを上にして差しだし「どうぞ？」とジェスチャーしてみせるセレニア。
超気まずそうな曹操。・・・あ、なんか少しだけ親近感。

「いろいろと空気台無しになった中でも、九重ちゃんのお母さんを心配する心だけは揺らがなかったのか、彼女は曹操に向けて大まじめに詰問してくれた。九重ちゃん
ナイス！ グッジョブ！

「そ、それはとかく貴様！ 母上をさらったのはお主たちだな!? 母上をどうするつもりじゃ!」

「お母上には我々の実験にお付き合いたたきたくのですよ」

「実験・・・じゃと?」

「だが、その前にアザゼル総督と噂の赤龍帝殿に挨拶と、少し手合わせを願いたい」

「それは構わん。だが、九尾の御大将は返してもらおうぞ。こちらら妖怪との大事な会談を成功させたいんでな」

「ふっ・・・。それでは力づくでどうぞ」

ふざけたことを言いやがりながらニヤリと不敵に微笑む曹操。

「。。。部長たちなしの俺たちグレモリー眷属と、曹操率いるカオス・ブリゲード英雄派との戦いが今始まる！」

……そんな俺たちのすぐ真横では。

「うわー、幼い子供の母親さらった誘拐犯が偉大なご先祖様の名前乗っちゃってるわよ。キモ、マジでキモ。犯罪者風情が強いだけで偉そうにするなってーの」

「むしろ浚った母親を人体実験のサンプルとして使うあたりに、英雄らしさを微塵も感じらんのだがな……コイツには偉大な先祖と同じ名を戴くことへの誇りは存在しないのか？」

「だからこそその『いちおう』曹操』と名乗っているのでしょうか。テロリストに落ちぶれた出廻らしの子孫が偉大なご先祖様の異名を辱めることの無いように……と。」

気持ちには買いますが、出来れば改名していただきたかったですね。私の愛して止まない人類史に不滅の名を刻んだ挑み続ける不屈の英雄たちと、同じ血を引いてただけで生まれながらに人間以上の存在になれる資格を持っていた『英雄種族』の方々には彼ら星の開拓者たちの名まで継いでいいというのは些か不公平というものです」

「子孫なんですし、出来れば少しモジって欲しかったですよね。アイススケートの織田信成さんとかみたいに」

『なんの努力もなく、ただ血が繋がっているとと言うだけで先祖が築き上げてきた物を存

続できて恥じる必要もない特別な生まれの人たちって楽できていいねー（ですな）』

英雄派代表の四人「……」

つづく

40話「地球英雄伝説VS外宇宙英雄伝説」

「えーと……とりあえず、その君たちも我々の計画を邪魔しようとしている。故に戦い合う。——これに異論はないと言うことでよいのかな？」

「肯定です」

聞かれた（んでしよう多分。私いちおう代表者なので）私は短い答えで応じることで宣戦布告の代わりとさせていただきました。

向こうが敵意を示し、他者に害を与えるテロリスト集団の一員であることを認めただけです。ならここはもう会談の場ではなく、裁きのための刑場として認識すべきでしょうからね。話し合うのは戦い終わった後で生き残ってさえいたら、幾らでも時間が手に入っているでしょうから。

「では、レオナルド。悪魔用のアンチモンスターを頼む。あちらさんには恐らく墮天使用の奴が有効だと思うんだが……しばし待て。情報不足だから、出方を見てからにしたい」

曹操さんの子孫さんが、隣に並んでいた小さな男の子君に話しかけて、彼が無言のまま「こくり」と小さくうなずくと、足下から不気味な陰が複数わき出だしてくるのが見

えました。

先ほどアザ・トースさんが説明してくれたところによると、英雄派と呼ばれる方々は人類の歴史で名を馳せた英雄たちの子孫やら生まれ変わりやらが力を継承した存在なのだという話でしたが……陰に限らず『バケモノ召喚系』の逸話を持つ英雄なんてほとんどいないですよ。ふつうの英雄が手を出す類の外法じゃないんで。

思い当たるとするならば、ジル・ド・レエ伯とかの墜ちた元英雄か、あるいはソロモン王みたいに偉大な召喚魔法の権威かどちらかだと思っただけですが、その場合には『レオナルド』が合致しません。

『バケモノ召喚』『レオナルド』……それにおそらく『情報不足』というワードも正体看破のためには重要な要素。だとするならば――

「……なるほど、レオナルド・ダ・ヴィンチさんの血を引くお方でしたか。確かに彼の逸話なら、オリジナルの化け物クリエイトぐらい出来るようになるロンギヌスになってもおかしくはない」

私が前世でのF.G.Oを思い出しながら推測を述べたところ男の子がわずかにたじろぎ、曹操さんは「ほう？」と面白そうに表情を綻ばせます。

「ご名答、よく分かったね。確かにこの子の先祖はレオナルド・ダ・ヴィンチで、この子

が持つセイクリッド・ギアはロンギヌスのひとつ『アナイアレイション・メーカー』。

使い手の念じるままに如何なる魔獣でも創り出すことができるロンギヌス、俺が持つトゥルー・ロンギヌスとは別の意味で危険視されし最悪のセイクリッド・ギアだ」

「世界を滅ぼすことも可能とする最悪の力が貴様等の手に……っ!!」

各勢力の拠点に巨大怪獣クラスを送り込めていないところを見ると、所有者はまだ成長段階のようだ」

「さすが総督殿、仰るとおり。この子はまだそこまでには至っていない。

でも、ただ一つ大変優れたところがありましてねえ」

そう言った曹操さんの言葉を証明したかったのか、レオナルドさんの子孫さんが創り出した不気味な陰さんの頭部が光だし、やがて槍となつて発射されていき背後にあった霧で灰色に染まるお寺を吹き飛ばしてしまいます。

「光の攻撃!?!」

「レオナルドの力は相手の弱点を突く魔物である、アンチ・モンスターを生み出すことに特化してましてねえ」

そのまま連続発射しまくってくる不気味な陰さんからの攻撃を交いくぐりながら、皆さんが応戦するのを天野さんに抱き抱えられて移動させられる私。

もうすっかり馴染んで定位置になつてしまつている、戦えない私の臨時指揮所な天野

さんの腕の中。

『原作美少女お姫様だっこされる、元男のTS転生者』……かつて、ここまで情けない主人公ポジションにいたかもしれない転生者が他にもいたのでしょうか……？

ラノベ史上最弱と呼ばれている『イット』でさえ一巻目のヒロインによる骨折がなかったら今少し動けてたかもしれないと言うのに……。

「……そう言えば、相手の弱点に突けるオリジナルモンスターを生み出すことに特化した才能と聞いて思い出したんですけど、子供の頃つて変にプライドが高くて他人の欠点を突くことばかりに頭使つてた時期が私にもありましたねえ……」。

見たところレオナルドさんも子供みたいですし、『他人への嫌がらせ能力』に特化した才能の持ち主と評されるからには子供時代の私と似た部分があるのかもしれないね」「御意。私などつい最近までソツチ系の思考をしていたので気持ち自体はよくわかると言うものです。

——自分には特別な才能があると驕り高ぶり、それを認めようとしない周囲の他人を心の中で見下して、頭を下げて見せながらも心の中では罵倒する。

殴り合えば必ず自分が負けるのに、知恵で戦う己は野蠻人ではないのだと正当化のための理屈を並べたて、相手からの攻撃が届かない位置からしか敵を攻めることができな

い。

他人にバカにされる己の不遇さを嘆いて見せながら、自身もまた他人をバカにする大差ない醜さを発揮していることには気づいていない。気づこうとすらしない。気づいていたとしても目を逸らす……。そんな舐め腐ったガキの性根になっっているなら、同じ場所から巣立った先達として直ると信じて殴りつける必要があると思うのですけれど」

うん、すごくよく分かるお言葉です。……。おかげで耳が痛すぎる……。前世の黒歴史におそわれて心が痛みまくってる今このときの私です。

あと、不気味な陰さんたちの向こうから聞こえてくる歯ぎしりする音って、もしかしなくてもレオナルドさん？

「――確かに悪魔にとつて光は弱点属性だけど、当たらなければ問題はないんだよ！

撃たれる前に倒すのみさっ！」

ん？ この声は木場さんですか？ どうやら味方に先行して、切り込んでみたみたいですねえ。スピード重視の剣士系としては正しい判断です。

『木場！ 聞こえるか!?!』

続いて聞こえてきたのは兵藤さんの声。

くぐもって聞こえてみますし、変身完了したんですねえ、いつも通りに。

『おまえの能力で光を食う剣を創って、みんなに渡してくれ!』

「了解!」

『ゼノヴィアはアーシアと九重の護衛! それと聖なるオーラを放って近づくと敵を倒して欲しい! 頼めるか!』

「構わないが、敵を倒すだけでいいならもつと楽な手段がある。そちらを使っても構わないのか? 正直、今の私に聖なるオーラは使い辛いのだが……」

『なんだっていい! やってくれ!』

「わかった。任せておけ」

『恩に着るぜ!』

ふむ。一応リーダーらしく皆さんの指揮はできてるみたいです。今の時点では大した穴は見つかりませんし、見守り続けるだけで良さそうなので部外者としては肩の荷が下りた気分ですね。

『イリナ! 悪いが木場と一緒に前衛を頼む! だいたい前に天使の翼っぽいのを生やして戦ってたことのあるお前なら光は弱点じゃないよな!』

「あー……ごめん、イツセー君。私たちってそもそも属性とか持っていないから、弱点となる属性もないのよね。攻撃食らったら普通にダメージ受けるだけで、光だろうと闇だ

ろうと、軽減しなけりや増大もしない直撃するだけなんであんまし安全ってわけじゃないのよねー」

『・・・は?! そりや一体どういふなんだ事だ?!』

当惑気味な兵藤さんの声。

それに対して紫藤さんとゼノヴィアさんたちは、適当に敵を切りまくりながら普通の声で返事を返されてます。

「私たちにとつて属性って言うのは、攻撃時に特定の敵を殺しやすくするためのウイルスみたいな認識になっててね。武器であり兵器であり、敵を殺し味方を生かすための道具でしかない訳よ。」

人殺しの道具に善悪も正邪もあるわけないでしょ? だから私たちの身体には属性という物それ自体が相性悪すぎたみたいで、いつ頃からか消滅しちゃってたのよ。だから今の私たちの属性は『無』属性ー属性なしって意味での無属性ね」

「剣は考えず、主の意のまま敵を切り裂くのに。ーそれ故に我らは武器に対しても己に対しても属性などというもので定義付けをしてこなかったのだ。」

所詮、軍人とは兵士であり、国のための道具、主のために敵を討つ道具に過ぎない。

我らが考えるべき理とは、『如何にして効率よく任務を全うするか』という一点に置いてのみ。道理も善悪も不要。

それらを考えるために上があり、頭がいるのだから任せて委ねて己が使命を全うするが武人の本懐というもの！ 頭を信じず自分で考えようとする心得違いをした兵士には死あるのみ！」

『えー………』

おお、困つとる困つとる。ちよつとだけレオナルドさんの気持ち分かりそうになつた今この瞬間です。

「細かいことは気にするな！ 襲い来る敵の全てを殺し尽くしてしまえるなら、属性による相性も守りも考える必要はなくなるのだからな！ 考えるのは殺してからでも遅くはない！」

ゼノヴィアさんの遠吠え。

それに対して空でアザ・トースさんと戦ってたらしい曹操さんが評して一言。

「出来るかな？ レオナルドの能力が最悪と呼ばれる所以のひとつは、望むままに大量の数をそろえられる点にあるのだと俺は思っているのだけれど？」

「問題ない！ こうすれば良いのだからなああああああああつ!!!」

叫んで頭上に振り上げられる大剣……って、ヤベ。速く避難しなくつちや。

「天野さん。緊急脱出大ジャンプをお願いします」

「了解しました。しっかりとお掴まりください」

「橋」と敵を破壊……。限られた空間に高密度の敵勢力が集まっている状況では有効な手段だ。だが、それはあくまで一般人を相手にするとき限定の有効性だよ？ 水に落ちた程度でやられるモンスターだったら、最初からけしかけすらする気はなかった」

「はっ！ そうだとしても、臆病な創造主の盾に使うため砲台として機能するこいつらに飛行能力は付与されていない。違うか？」

「……………」

「空が飛べない奴には、空中にいるときコイツからの攻撃を防ぐ術は存在しない。——終わりだ」

彼女がそう言って「ニヤリ」と嫌な感じに笑んだとき、川の水面がわずかに揺らいで渦となり、霧で覆われ灰色に染まった川の水を黒く染め直していきながら——「ナニカを無数に吐き出します」。

……ソレは極太のロープの束——いや、無数の蛇の群——いずれとも形容しがたい生物、いや生物の気管らしきナニカであり、レオナルドさんが創り出したモンスターたちへと全身くまなく巻き付いていき、有無を言わさぬ力でもって一瞬のうちに川の中へと引きずり降ろし。

そして——魂切る気持ち悪い音の連鎖。無数の生物が一斉に舌を鳴らすかのような湿った音と、骨かなにかを砕き折る乾いた響き。

なまじ様相が見えないだけに、より一層おぞましく想像力を刺激されるという、アレです。

ーその悪夢のような光景を、それぞれの勢力がそれぞれの態度と顔色で一言も発することができないまま沈黙とともに眺め下ろしておりました。

「……………(サアー……………(真つ青になつてゐる女性陣が多い兵藤さんたち)」

「……………(オエツ……………(個性にバラツキがあるのか反応が人数分の英雄派)」

「……………(性能審査のため自軍兵器の力を冷静に精査している三幹部)」

「……………(フルフル……………(頭痛を感じて頭を振つてゐる私一人だけです)」

音が鳴り止んだ後も、しばらくの間は沈黙が途切れることはありませんでした。

……………ちよつとした地獄絵図が、ここにあります。

「参つたな……………グレモリー眷属相手に油断する気はなかつただけど、君たちは君たちで厄介そうな技を使う。もう少し楽に戦えると思つてたんだが、意外にやってくれる」
「敵の力が自分たちの予想を上回つていたとするならば、それは想定自体が甘かつたと

いう事。つまりは敵を侮っていたという事実には相違ありません。

作戦立案時に敵の強さを正當に計れていないまま『勝てる』と信じて挑んできただけならば、それは油断でしょうね。取り繕わなくても結構ですよ?」

「.....」

曹操さんが少しだけムスツとした目で私を睨んでこられました。

ま、いつものことなので気にしませんけどね。誰に挑んでも勝てない弱者が他人に対して毒を吐くときは、殺される程度の覚悟はしておいて然るべきなのでね。自然と慣れるものなのです。

ーと、その時。

「はい♪ はじめまして。私はヴァーリ・チームに属する魔法使いのルフエイ・ペンドラゴンです。ヴァーリさまからの伝言をお伝えしに参りました♪」

空間が歪んだと思ったら、変なものが出てきましたね。魔女っ子です。内のミルたんさんに多少なりと似ていなくもなーいや、全然似ていませんね。普通に言語でコミュニケーション取れてる辺りなんか特に。

「じゃあ伝えますね、曹操さん! 『邪魔だけはするなと言ったはずだ』ーだそうです

「あんなのが次元の狭間にいるんですか?! 機能停止って、あれ動いてますけどー!」

二人のやり取りを聞き流しながら、私は別の疑問にとらわれそうになってました。

「古の神が大量生産した、全機能停止状態で次元の狭間に漂っているらしい石の巨人ゴレム……うん。ものすごく身近なところに思い当たる神物が……」

「……ほう。なにやら変化する刻の流れを感じて来ただけだったのですが、懐かしい代物が再起動しておりますな。」

あれは間違いなく、私と友人である『大地の神々』の一柱とが共同製作して汲み上げたプロトタイプ蕃神です」

やっぱりお前なのかよ、ノーデンスさん! ちよくちよく帰省気分でききなり出てこられるの、いい加減やめてくれませんかね!! ノミの心臓に悪いですから!

「プロトタイプ番神マーク2 《アルティメット・ゴグマゴク》……もともとは緻密な調査によって外宇宙から地球のドリームランドに『予算削減』という重大な危機が迫ってきている事を知った私が、地球と地球の神々とを守らせるために造っていたロボットの納期を間に合わせるため完成を急いで入力ミスし、『地球に住まうすべての知恵持つ生き物たちこそが地球を破壊し汚染させる、地球の敵だ』と認識するようになってしまっ

た究極のロボット。その試作型です。

救い主から悪魔にジョブチェンジしてしまいましたので、次元の狭間に放り込んでから後で直そうと思っていたらスツカリ忘れ果てておりましたよ」

「守らせるつもりで造ったロボットが一番の敵になっちゃった時点で壊しときなさいよ、一機残らず徹底的に……っ!!」

「……人ではない神でさえ、認めたくないものなのですよ。自分自身の若さ故に犯した過ちというものはね……」

やかましいわ! デビルじゃねえか! デビルになっちゃってるじゃねえか! 地球再生のために造られたアルティメットが、デビルに自己進化しちゃうてるじゃないですか!

しかも予算不足が原因で! 守らせるつもりで造って金勿体ないからって予算ケチった末に滅ぼしちゃう代物になっちゃうぐらいなら出してやれよ金をよお! 余計に金かかるだけで節約にも何にもなっちゃいませんからさあっ!!

どうせ金払うなら、ミカムラ博士かカツシユ博士でもヘッドハンティングしてきなさい!

「地球をやらせる訳には参りませんからな……事態の中心は見えてきました。後は簡単です。あのような道を誤った番神のなり損ないは肅正される運命にあるのだということ

を私が知らしめて御覧に入れましょう。

この私が創り出してきた番神シリーズ中、過去最高の絶大なパワーを誇る究極の量産型番神である《番シオン》によってね！

ー予算をケチって納期を繰り上げするよう私に命じてきたた外なる神々の犯した過ちは、来月の予算増額を聞き入れてもらうためにもこの私『大いなる深淵の大帝』が肅正する！ 予算不足によるクオリティの低下という終わらない負の連鎖を断ち切るためにも我に力をーーーーっっっ!!!」

やっぱり『這いニヤル』キャラは金目的なんですかーーーーっっっいゝ(ㄉㄤ)!!!
つづく

嘘予告

決戦の地《京都》において再会を果たす父（開発者）と子（発明品）。

互いに譲らぬ思いを抱えた親子が互いにとつての正義をかけて激突しあう!!

次回！『番神激突！大決戦！ゴグマゴクV S 番シオン』にこうご期待！

.....君は、戦場に置き去られた子供が流す刻の涙を見る.....。

「生みの親なら子供に何したっていいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！ 生き方を
選ぶ権利は誰にだつてある！ 親なんかには邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」by
異世界主人公。

「――不愉快ですな、この感覚は。生の感情丸出しで敵を攻撃するなど、これでは現代人
に品性を求めるなど絶望的です。原始から人は一歩も進歩していない事実を証明する
ことしか出来ません。

やはり人は、正しく導かれねばならない・・・指導する絶対者が必要なようです。そ
れをするのは、セレニア様。あなたかもしれませー！」byパプテマス・ノーデ
ンス

「イ・ヤ・で・すー！」by銀髪魔王セレニア

「ふははははは！ 怖かろう？ これが地球技術により生み出された科学の脅威と言うも
のだ！

時代を読み違えた愚かなる古き神々と蕃神と、その使い手たちよ！

時代の変化にあわせて変わろうとしない自らの愚かしさによって滅びるがよい！

世界が犯した過ちは、我ら混沌帝国によって裁かれるのだ！ ぐははははは！！！！

おまけ『原作キャラとのアンチ会話シーン《アナイアレイション・メーカー》について』*本来ならこつちでも良かったけどボツったシーン

「たとえば、怪獣映画に出てくるような全長百メートル、口から火炎を吐く怪物。それを自分の意志でこの世に生み出すこともできる能力

自分の想像力で好きな怪物を生みだせるなら、最悪きわまりないだろ？」

「そのどこが最悪な能力だと言うんです？」

どんな物でも生み出されるときに歩む最初の一步目が、『自分の好きな物を作り出したい』と望み願う想像力なのは同じ事でしょう？」

「それは……」

「道具とはそう言うものです。誰かが思い描いた夢の産物が形を得た物にすぎません。

作り出された最強の道具が最悪に感じられるのは、あなたたち自然物の最強武器を『作り出さずに与えてもらった人たち』だからですよ。

自分たちの権威を脅かしかねない、相性の悪い最強なんて都合が悪いから『最悪』と呼び習わしてるだけのこと。

自分たちの治世を壊されたくない権力者側の都合も分かりますけど、戦場にまでレッテル張りを持ち込まなくても結構ですよ。ハッキリ言って邪魔なだけです」

「作りたいと願って想像するのが『始まり』。

願いを叶えて作り出された結果が『終わり』」

同じ時系列に併存できない α と Ω を二つ並べて、同一存在であるかのようにレットル張りするのは現実的ではありませんよ。

何より、誰かが新しく作り出した最強に自分たちの守り通してきた最強が脅かされようとしているならば、打ち破るのが最強と称される者の勤めであるはず。

『相性悪くて勝てないから、その力は最強じゃなくて最悪だ』なんてレットル張りで権威だけでも守ろうとする口先だけの最強に王座はふさわしくありません。

負けて落ちぶれる覚悟も持たない臆病な王者が引きずり降ろされるのは必然的な帰結に過ぎません。負けた獣が勝者が生きるための糧となるのは戦における鉄則ですからね。

なればこそ戦時下においては敵の正義を否定するより先に、自分が生き延びるための努力でもしていた方が少しはマシだと私は思っておりますよ」

「自分が生み出したいと願った想像上の怪物を努力して完成までこぎ着けたなら、それは正しい夢の叶え方です。」

生み出された物が他人から見て如何に危険きわまる物騒な代物だったとしても、苦難を乗り越えて生み出した偉業と、努力の過程を否定すべきではないでしょう？」

甘粕レイナーレの評価

「生まれながらに強大な力を有する神や悪魔を打倒するため、弱き生き者である人々が専用の道具に頼るのは自然な流れです。恥じるべき何者も存在してはおりません。

むしろ、自分より強い相手を倒さなくてはならないときに正々堂々一対一に固執して負ける臆病者は、敵より先に自分のプライドに負けています。勝てるわけがない。

ー誘拐の件は別としても、今のところ戦闘において彼らに否定されるべき点は見いだせないとは私は判断いたします」

「レイナーレ！ お前つて奴はどこまで……っ!!」

「あなたもですよ、イツセー君。弱音を吐いてる暇があるなら、とつとと戦いなさい。情けない。」

英雄にとって最たる使命は化け物退治。その最高峰であり典型でもあるのが最強種族ドラゴンなんですから、早い所やるべき役目を果たしてきなさいよ。

最強の座に君臨し、挑んでくる者たちを撃退するのが最強種族の果たすべき役割であり、最強に挑み続け、負けても立ち上がり続けるのが人の世が称える英雄の務め。

種族の時点で敵対関係にある者同士が戦い合うなら、余計な差別感など必要としない分、後顧の憂いがなくて助かると言うものでしょう？ 思いつきりぶつけてきなさい。

——最強に挑んでくる者たちに力で応じず言葉で諭そうとするのは、思いと覚悟に対する侮辱ですよ？ それ程までに弱く生まれた者たちにとって、強く生まれついた者共に挑むのは勇気と覚悟を要する偉業なのですからね・・・」

曹操からもコメントを。

「然り然り。世の理とは即ち『決めつけ』によつて成り立っている。

『壊してはいけません』『目上に逆らつてはいけません』『自分以外の誰かを傷つけてはいけません』

『生まれついて弱い人間は、生まれながらに強い異種族には敵わない』『最強ドラゴン、二天龍には誰も勝つことなど出来はしない』『世界の法則を覆すのは人の身では許されない』

.....これら「やる前から出来ない未来を確定させる」決めつけによつて争いは減り、秩序と平和は保たれる。何も変わることがないままに、上からの支配は続けられていき、下の者たちは未来永劫に渡つて下の地位に甘んじ続けさせられる。

——その様な理は要らない。我が槍によつて捻じ伏せるのみである」

「天に挑み、天を落とす、己こそが天だと吠えられずして何が英雄か。

勝利など、強さなど、力など。天を落とすための道具でしかないではないか。

種族に保証された勝利を手にしたところ成れるのは国家にとつての英雄のみ。

真の英雄は常に、国家と歴史に貶められた側にいるものである。

何故なら世を変える真の英雄とは、今の世を支配する者たちにとつての敵を指しているのだから」

「『勝てると思つて』相手に挑むのは英雄ではない。

『お前を倒す』と約定を誓い、果たしてこそその英雄なのだ。

必勝の覚悟は常に己が内に在るべきものだ。今更する必要はない。敵を前にしてから覚悟を決めるのでは遅すぎる。

敵を前に誓うべきは己に非ず。倒すべき敵に必勝を誓つてこそその礼儀である」

「『たとえ負けても一矢報いる』などという逃げ道は必要ない。負けてから自分を正当化するための口実を戦う前にしているようでは話にならない、覚悟が足りない。

戦うからには必ず勝ち、欲した物を手に入れる。己が結果を求めることなく、誰かの

ためになればいいなどと愚者の戯言に他ならず。自己犠牲が貴いならば剣を捨てて、仏道にでも帰依すればいいではないか。

力で成したいと願い、武の道を選んだからには選んだ道を貫き通せ。拳で語れる慈愛の心など無いと知れ」

「想いだけで戦って負けて、女に泣きつき慰められたがるマゾヒズムと俺との相性は良くないみたいだね。これもご先祖さまの薫陶よろしきって事なのかな？（苦笑）」

実験をする！ ぜひとも制止するために我らの祭りに参加してくれたまえ！」

「なんだとおっ!？」

「また会おう」

霧が濃くなって、一寸先も見えなくなつて、一泊あけて霧が晴れたときには俺たちは元いた観光客に溢れた渡月橋周辺に戻つてきていた。

「母上を……どうして……」

体を震わせる九重。俺には頭をなでてやることぐらいいしかできなかつた……。

そんな風に、さつきまで戦闘していた俺たちグレモリー眷属が簡単に気持ちを切り替えられないでいる中でも一人だけ——いや、一勢力だけ例外が存在していた。

言うまでもない。こう言うときには妙に行動が早くなるセレニアたちのチームだ。

「どうやら互いの目的が一致しなくなつたようですね。私たちは一端お暇しておいた方が良さそうですし、ここからは分派行動と参りましょう」

「な?! おい、待てよセレニア!」

「紫藤さん、ゼノヴィアさん。遮音力場を発生させてください。会話が外に漏れると面倒ですから……ありがとう御座います。」

——あらためまして、兵藤さん。あなた方はどうせいつも通りに九尾の狐さん自身の命を救うことを最優先課題に掲げて救出作戦を展開するご予定なのでしょう?」

「つたりめえだ、そんな事は！ 九重が泣いてんだぞ！ 自分勝手な奴らの都合に巻き込まれて浚われてしまったお母さんのために泣いてる女の子を見捨てて勝っても、部長をはじめとしたみんなは、喜ぶはずがねえんだからな！」

「《巻き込まれて泣いてる女の子》……？ ……違うでしょう」

「な、に……？」

急に声のトーンが変わったように感じた俺は、勢いが失速するのを実感させられる。

逆にセレニアの方はいつもと変わらず……変わらないように見えるのにナニカが違って見えて仕方がない奇妙な空気をまとわせながら真っ直ぐに俺の目を見つめて切り込むように視線の刃で刺し貫いてくる。

「彼女は、カオス・ブリゲードと交戦状態にある悪魔勢力と手を組んだ日本最大の妖怪勢力《京都》の長の娘であり、お母さんは当主さま本人です。

しかも今回の事件では、敵の首魁と矛を交える可能性を承知の上で兵藤さんたちにお母さんの奪回を自ら頭を下げて願ひ出までいる。巻き込まれただけの子供と呼ぶには、些か主体的に戦争へ関与しすぎと言わざるを得ません。

国家と戦争しているテロリストに捕らわれたお母さんの奪回を中立勢力だった第三勢力の長の娘が国軍主力メンバーに依頼することは相対的ながらも『テロリスト数人の命よりもお母さん一人の方が価値がある。彼らを殺すことになったとしても母だけは

「ーっ!! 待て、セレニア! お前……まさか京都の御大将を京都全体を守るための生け贄に使うって考えてる訳じゃないんだろっな!」

『なあっ!?!』

俺たち、その場にいるセレニアたち以外の全員が驚愕のうめき声を上げた。

一人を犠牲にしてみんなを救うだなんてやり方は、犠牲を肯定する手法だ! 部長だったら絶対に選んだりしない選択肢だ! やっぱりセレニアと俺たちとは根本的に価値観が合わない!

……が、いき巻く俺とは対照的にセレニアは肩をすくめて見せながら苦笑するようにつぶやくだけ。

「勿論、言うまでもなく比喩表現です。まあ、そうすれば誰も死なずにすむなら選ぶのでしようけど、そんな都合のいい選択肢が用意されてること自体ウソくさいですからね。本当か否か証拠がある場合に限り押すことになる最悪のスイツチだとも思っておいてください。

要は、そのぐらいの覚悟で望むというお話だったということだ」

『ガクンッ』

肩すかしを食らう俺たち。……たまにじゃなくていつもな気がするけど……割と本気でコイツの考えてることは偶にマジで分からなくなるんだよなあ……。

「とはいえ、いざという時に九尾の狐さんの命を優先するあなた方と、京都の方をためらうことなく選ぶ私たちが共に行動することは、決断が必要なときに互いが互いの邪魔にしなければならない結果を招くでしょうからね。」

方針が分かれたと実感したときに分派しておいた方が結果的に良好な関係が長続きさせられるものですよ」

「それはまあ、いいんだが・・・しかしどうする？ お前たちが俺たちと別行動を取るの
は良いとしても大まかな方針は伝え合っておかないと分派したところで各個撃破の餌
食になるだけだと思おうが？」

「御尤な意見ですね、アザ・トース先生。ですので私たちあなたの方より十分ほど前から
行動を開始することにします。そちらは準備が整い次第、万全の状態で彼らの討伐に向
かっていただければ結構ですよ。」

「・・・ああ、先読みは容易ですので裏を掻こうとかの無益な行為で時間は浪費されない
方がよろしいかと思われませんか？ 間に合わなくなっても構わないと言われるのでし
たら別ですけども」

「・・・そりやどうも。こちらの手の内全部見透かせるそちらの手札を晒してくださって
ありますがどう御座いましたねえ」

「どういたしまして」

儀礼的なやりとりの後、不貞腐れるアザゼル先生に背を向けて去つていこうとしているセレニアたちに俺は、前から気になっていた質問をこの際だから投げかけてみる。

「なあ、イリナ、ゼノヴィア。お前たちはその……いいの？ そんな人殺し上等な道に付き合わせられて……本当に、辛くなったりとかはしないの？」

「はあ？」

俺は夕麻ちゃんを殺してしまったときのこと。一度は本気で好きになった夕麻ちゃんにヒドい罵声をぶつけられて傷つけられた当時のことを思い出しながら聞いてみただが、対する二人から帰ってきた返事は「コイツなに言つてんだ？ 正気か？」と声に出さなくても顔見りやわかるハッキリとした侮蔑と見下しに満ちたものだった。

「……いきなり何を戯けたことを言い出しているのだ貴様は……」

「いや、だって……」

『『斬れ』と命じられたら親兄弟、親類縁者すべてだろうと斬り殺し、『死ぬ』と命じられたら『喜んで！』と笑いながら愛剣で喉を突ける。——そこまでしたいと思える相手だからこそ、剣士は主に忠誠を誓えるのだ。主に誓った忠誠に特別なものを見出すことが

出来るようになるのだ」

「!!」

「ただ、家臣の家柄に生まれたからという理由で捧げられた忠誠など義務感だ。己が己自身に課した誓いを守っているに過ぎん。

『家臣は主を守るべき者』という、自らが望んだ理想の自分を実現させるために主を利用している不忠者だ。そんな屑なら殺してしまえ。

『この人のためならば!』と思える相手以外の前では膝を折るな、折らせるな。剣士の誓いが穢されているようで非常に不愉快だ」

「私はゼノヴィアほど真面目じゃないからね。忠誠を誓った主君を、自分の願望実現マシーンとして利用するのは悪い事じゃないと思ってる」

「なら——」

「そういう使われ方をしているんだと主君自身が承知していて、『それでもいいから君が

必要』つて言われたときに『私に出来る範囲でよければ私なりに☆』つて、気持ちよく笑顔でその手を取れるのが、忠誠なんだろうなって思ってる」

「……………」

「主君は家臣を利用して。家臣も主君を利用して。利害で結びついた主従関係。

そんな欲得まみれで穢れきった汚い関係を維持するために努力して、相手に裏切られないために相手のことを理解しようと努力して、報酬目当てで報いてもらうために相手の作戦を成功させようと必死になって努力しあつて。

一方的に求めるのでも、捧げるのでもない。お互いが捧げあつて求め合い続ける損得勘定で結びついた絆だつて、立派な忠誠心と言つても間違つてないんじゃないかなーつて、私は思っているんだよねー」

「……………」

「…………正直なところ、俺はこの二人を誤解してたんだと思う。ずっと人殺しを楽しむように改造されたんじゃないかって疑つてた気持ちだが、今は跡形もなく無くなつていた。」

ああ、そうか。今やつと分かつたわ。コイツらは狂つたんだ、自分たち自身に。

前から持ってた欠点を恥ずかしげも無く堂々とさらけ出して『これが私だ！ どうだ？ 醜いだろう？』そう言ながら自分の道を誰の意見も聞かないで驀進していくことを選んじまった結果が今のコイツになった理由なのか。

でも。

だったら。

俺の『元カノ』は、一体どういう形で今の姿になったんだろう………

「イツセイ君」

「ーっ!？」

考えていた本人の口から俺の名を呼ばれて思わずドキリとしながら振り向くと。

そこにはセレニアを片手で抱えていつでも飛び立てる準備を完了させてる夕麻ちゃんがかつい視線で俺のことを睨んできていた。

「セレニア様は約束を破らないお方……あなたたちにあわせて十分前行動で攻めると宣言された以上は、決して違えたりはなさらないでしょう。」

あなたたちが順当通りに進んでくる限り、必ずやパーティー会場には間に合うことを

保証させていただきます。

ですが——————」

シャキイイイイイッン!!

・・・・目にも留まらない早さで片手抜刀した黒塗りの日本刀の切っ先を俺の眼前に突きつけながら、夕麻ちゃんは妥協を許さない苛烈な瞳に燃えるような決意と覚悟の炎を灯しながらハッキリと聞き間違えようのない声と口調で俺に宣告を告げてくる。

「決して立ち止まるな、振り向くな、俯くな、前を向け。

自分が選んだ夢の旅程で甘えるな。殺す覚悟で殺した犠牲者の軀に囚われるな。

相手を殺すと言うことは、相手のすべてを否定すると言うこと。

生きる権利も、生きるために選んだ道も、手段も、思想も、現在も、今も未来も過去も家族も!

自分が生きる価値がないと決めつけて殺した相手にも、誕生を望んだ親はいる。あるいは、いた。

その人が生きていくために協力してくれた人たちがいた。その人が生きてくるのに

利用して犠牲にしてきた人たちがいた。

今の自分が否定して殺した相手の背中には、後のあなたを生かしてくれる誰かがいたのかも知れない。

それらすべての可能性を。犠牲者たちを。生きる糧となってくれた全ての者たちの努力と苦勞を完全否定し、『おまえたちの犠牲は無意味だ！ 無意味だったと俺が決めてやる！』と断言して放つ一弾が相手を殺す殺意を持った一撃なんだから」

「あなたに否定された命の記憶は、今も私の心にある。あり続けている。

あなたに殺されたことで無駄死にしまった部下たちのことも、ちゃんと覚えていく。

あのとときの記憶は私にとって屈辱の記憶で、大切な思い出だ。私が死に至るまでを記憶した敗北と失敗の記録だ。今の私を形作る切っ掛けとなってくれた最高で最悪の大切な思い出なんだ。

あなたが今も私のことをどう思っているのかなんて知らない。今も昔もあなたの気持ちになんか興味はない。

でも、少なくとも私を殺したときのあなたはー完全否定の拳を放ってきた時のあなたは、もつと迷いのない真っ直ぐな目をして私の目を直視していた。『これからお前を

殺すぞ』と、言葉よりも雄弁に目が告げていた。その記憶が私をここまで強くしてくれた……」

「昔のあなたが好きだった私のことで今のあなたが思い悩むのは勝手だけれど、間違ってもアスタロト領で見せたような醜態は二度と晒して欲しくはない。」

力に溺れて、インスタントな回復能力に縋った当時の私を完全否定して殺したあなたが力に溺れた無様な姿を晒す日が来るなんて想像もしていなかった。あんな無様な怪物モドキになるあなたを目にする日が来るなんて想像すらしたくなかった。

力に怯え、力に縋り、一時だけの力を得るため自分の全てを捧げてしまう哀れで弱いトカゲに落ちたあなたを想像するなんて吐き気しかしい」

「あなたは『完全否定の権化』だ。自分の信じ貫く正義以外のすべてを否定する、絶対正義という名の最強暴君だ。」

あなたは自分の手にした物を誰にも渡したくないから拳を振るう独占欲の持ち主だ。

自分の物は何一つとして他人にあげたくないと願い、戦う世界一の大富豪だ。

そうやってあなたは戦ってきた。倒してきた。勝ち続けてきた。今更になつて自我を捨てるような愚劣すぎる選択は、私が許可しない。力付くでも取り消させる」

「あなたには恩義がある。仇がある。恨み言が山ほどある。あの時のあなたには様々な感情が入り交じった善悪定かでない想いの全てをぶつけるに足る十二力があつた。

私の思い出を……、私が私を否定して前に進むための屈辱の思い出を……、私の全てを！ 今までを！ そしてこれから歩む私の人生！ その全てを！

あなたの勝手に穢そうとするなああああああああああつづく
つづく
!!!!!!」

42話 「そして戦争の夜は始まった……」

「状況はどう推移していますか？」

私は傍らに立つ高級副官の女性に質問し、回答を得ながら今の状況を頭の中で組み立てようと四苦八苦しておりました。

あれから私たち混沌帝国勢は一度イゼルローンへと帰還し、空の上から全体像を見下ろしつつ京都を含めてカオス・ブリゲード対三大勢力との衝突を眺めていましたが……

「……あまり戦況はよろしくないみたいですね……」

「はい。現在、京都市内における異変には周辺地域の妖怪たちを含めた全種族が共闘して事に当たっておりますから雑兵程度は問題なく掃討できるでしょうし、グレモリー領で発生している暴動もリアス・グレモリー自ら出馬していますので明朝までには鎮圧が可能です……しかし……」

「全部、カオス・ブリゲードに味方すると決めた外様ばかりで、捨て駒でしかないんですよねえー。現在までに倒した人たちの大半は」

相手の彼女が「お見事なご慧眼です」と気を使って褒めてくれましたが、気持ちは一向に晴れてくれません。むしろ悪化する速度が加速しただけです。

兵藤さんたちだけに対象を絞ったマクロの視点では順調に勝ち進んで戦争終結と平和の到来まで後少し！・・・そう見えなくてもいいですが、少し視点を上に上げて見ると戦局の悪化は甚だしいものであるのが一目瞭然でわかります。

今回グレモリー領で起きた暴動は『カオス・ブリゲードが関与したものではない』と報告書にはありましたが、事実としてグレモリーさんたち格が違う主戦力が投入されたことにより直ぐにも解決されるだろうと言うのが参謀本部の総評です。

これには私も同意見ですし、姫神さんが悦に入って笑っていたと密偵からの情報にもありましたが・・・。

「なんだって笑ってられるんでしょかね？ 敵と戦っている最中に自分の領土内で敗残兵に暴動起こされて、しかも敵本体はノータツチ・・・。

一度壊滅させられた部隊に残存兵力なんて組織総体から見れば、数にカウントされない居ても居なくてもどうでもいいような人たちでしかないのに、そんな連中が中心になって将来自分が治めることになる領地で暴動を起こせる・・・警察力低すぎでしょう、どう考えましても」

テロとの戦いで一番重視しなくちゃいけない組織を軽視して、兵隊ばかりに気を配ってどうすんだ？ 勝った勝ったと暢気に浮かれ騒いでないで自分たちが翻弄されてる現実を見なさいよ、情けない限りですね。

・三勢力とカオス・ブリゲードとの戦いが始まってから数ヶ月がたちましたが、未だに三大勢力のどれも先手を取れたことがありません。常に後手後手に回らされ続けているのです。

あれだけ勝つても、まだ主導権は敵の手中にあり、グレモリーさんたちは出てくる敵をその都度倒していくモグラ叩きを繰り返しているのみ。

兵士を0から育成する国家相手ならともかく、理由に関わりなく参戦を希望する者たちを形振り構わずに受け入れて戦力に組み込んでしまえるテロ組織を相手に対処療法で挑んでいたのではジリ貧です。

現に回復アイテムである『フェニックスの涙』の在庫が切れかかってきたからアルジエントさん以外のトワイライト・ヒーリング使いを捜すためあちこちへ人を派遣しているそうですし、犠牲を気にしなくていい戦争万歳のカオスさん相手には不利になるばかりなんですけどねえー。

「ーまあ、今回はひとまず置いておきましょう。兵藤さんたちとの約束もありますし、京都の方を優先させます。そちらの状況は？」

「はっ。二条城に強大なエネルギー反応を観測してから数時間が経過しました。時の経過と反比例して加速度的に大きくなってきております。

現在のところ、地脈の流れが歪められていることと関係していることだけは判明して

おりますが、詳細は不明です。

悪魔勢力は英雄派を探し出すための協力者を得て、京都中を粗探ししておりますが未だに発見には至っておりません。

先頃もたらされました最新の情報によりますと、深夜にいたり悪魔の時間になったのに併せて主力を除いた大部分を防衛に割り振り、兵藤イツセーたち一部戦力を特攻部隊として二条城に送り込むことを決定したとのことであります」

「少数精鋭で動く敵には、こちらでも少数精鋭で臨む・・・ですか。バカの一つ覚えのようで好きではありませんが、結果的に犠牲者が少なくなるのは良いことですかね」

それに。と、私は心の中で付け足しました。

・・・こちらと同じ手で行くつもりなのですから、お互い様です・・・と。

「「セレニア様、出撃準備完了いたしました」」

そう言いながら自動ドアを開けて入ってくるのは帝国軍三大幹部の皆様方。

天野夕麻さん、ゼノヴィアさん、紫藤イリナさんの三大美少女たちです。

ーまっ。出撃準備と言いつつも見た目は一切代わり映えしないんですけどねー。単にイメージトレーニングが終了したという程度の物。

本人たち曰く、「敵を殺した後の自分を受け入れられた」とのことでした。

「こちらの準備は整いましたので、早速向かいたいと思います。この時間帯なら、悪魔たちが蠢き出すのと被っていますし、十分前行動の約束反故には当たらないでしょうからね」

「そうですね。では早速しゅつげーー」

「セレニア様は今回、お留守番です」

.....

リアリー？

「毎度のことですが、セレニア様は弱すぎるのですから最前線ばかりに出てこられても困ります。そう言うところに惚れているのも確かですから毎回そうしろとは言えませんが、たまには自重してください。私たちの胃に関わります」

「う、ぐ.....」

「ホントにねー。一発流れ弾が掠っただけで死んじゃう御雑魚さまが戦場に出てこれるだけでも大した物なのに、この人はどう言うわけだかいつも先陣、いつも一番槍。

森長可じゃないんですから、偶にぐらい我慢してくださいーい」

「ぐぬ、ぬぬぬぬううう.....」

かと想像するのは、あまり慣れていないものですから……」

「『……………（一〇）』」

「と、言うわけで京都に降りてきてはみたんですけどもおー」

イリナがキョロキョロと辺りを見回しながら首をひねって、ゼノヴィアに訊く。

「……………なのよ？　ここって、なんか地下鉄のホームっぽいんだけど？」

「私に聞くなよ、私は知らん。聞きたいのなら政府に聞けばいい。敵政府の首班にな」

要するに『考えてる暇があるなら一歩でも前へ進んで敵を全滅させた方が手っ取り早い』と言う意味の発言である。ゼノヴィアの戦争脳は今日も平常運行なようだった。

二人のやりとりを手に当ててクスクス笑いながら見ていた夕麻は、近づいてくる『草』の気配を嗅ぎ取ると、手にした刀の鯉口を切る。

「では、結論も出たところで行きましょうか？　丁度お迎えも来たようですね……」

視線だけを鋭くした笑顔のまま招かれざる客……いや、この場合は招かれざる客の自分たちを歓迎してくれた親切な門番さんに歓迎の意を示す。

「こんばんは、招かれざる客人方。招待したゲストである赤竜帝殿でないのは残念ではあるが、メインディッシュの前の腹ごなしとしてで悪いが倒させてもらおうよ？」

「ご自由に。私たちもまた手前勝手な都合で押し通る所存でいますしお互い様です。お気になさらずいつ何時だろうとも切りかかってきてくださっても結構ですよ？ 遠慮は無用です」

平然と応じあつて普通に歩き、普通に近づいていく。

出てきた男は一步進むごとに周囲にある影を吸収し、イツセーが持つバランス・ブレイカー状態の時にまとう鎧のような姿へと変貌していくが、夕麻たちは常と変わらないまま制服姿で普通にバランス・ブレイクを果たした男との距離を縮めてゆく。

・・・男がささやくように小さな声で言うのが聞こえる・・・。

「俺は以前、赤龍帝に負けたことがある。あの時やられた悔しさ、怖さ、自分への不甲斐なさが俺を次の領域へと至らせてくれた」

ツカツカツカ・・・。

「俺はもう、あの時と同じ雑魚なんかじゃない。あのときに得た力によって、俺は赤龍帝と戦えるようになったんだ。その事実を、俺はあんたらを倒すことで証明したい。自信を確信へと昇華させたいんだ」

ツカツカツカ・・・。

「赤龍帝にやられたとき、俺はより強い防御力のイメージを浮かべた。アイツみたいな鎧が欲しいと感じたんだよ。それだけ赤龍帝の攻撃力は恐ろしくて力強く感動的

だったのさー」

ツカツカツカ・・・。

『ナイト・リフレクション』のバランス・ブレイカー状態、『ナイト・リフレクション・デス・クロス』。さあ、あのとき出来なかった赤龍帝への反撃ーその予行練習に付き合ってくれ！」

「ふうんっ!!」

じやきいいいっん!!!

互いが互いと接触して、横を通り過ぎようとした刹那の刻。

通り過ぎざまに天野夕麻から放たれた居合い抜きの一刃は空しく影だけを切って通り過ぎるだけで終わった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二撃目はない。元より相手の鎧の性能テストを兼ねて儀礼的に放ってやっただけの軽いジャブだ。躲されようが防がれようが大した意味は初めから無い。分かり切っていたことではないか。

「防御性能がいくら優れていようとも、一人だけでは攻めてに欠ける」ことぐらい、子供でもわかる自明の理に過ぎないのだから。

しかし。

「この影の鎧に直接攻撃はおろか、どんな攻撃も無駄だ」

男が嘲笑した口調でそう言うのが聞こえ、夕麻の気が変わった。

この男には解らせてやる為の敗北が、絶対的に必要であると。

「ふっ」

腹腔にためた空気を一気に押し出し、一息で身体全体の乱れを収める。

チンツと刀を鞘に納め、両足を肩幅程度に開き、柄に手を添えたまま腰を落とす。

柄を握る手に力を込めながら、入れ過ぎもせず。

相手の中にある、なぞるべき刀線刃筋を見つめることに集中し、邪魔な雑念は一つ残らず外へと追い出す。セレニアのことさえ今の彼女の頭には残っていない。

「ハハハ！　なんだその構えは？　まさか居合いの真似事でもする気なのか？　阿呆めが。多少、速度と威力を増した程度で先ほど躲された斬撃が通用するとも思っているのか？　バカの一つ覚えとはこのことだな」

「男の嘲笑など聞こえていない。」

耳は捉えているし脳も認識しているが、心の表面を滑り行くだけで感情が反応しないのだ。

「ー今、見つめるべきは相手と自分。」

自分が『斬る』と決めた対象。相手を斬ると決めた己の『意志』と己の『覚悟』。

『居合い』は刀身が鞘の中にあるうちに全てが決まる。抜くか抜かぬか、斬るか斬らぬか。抜いてから考えたのでは遅すぎる。

判断を誤ることなど許されてはならない必殺の一撃。それが――居合いだ。

「斬――っ!!」

叫びと共に放たれた一筋の剣閃。

――その一閃だけで、神の奇跡と同等の力『ブーステッド・ギア』によって形作られていた地下鉄ホームの幻想は完膚無きまでに打ち砕かれて、バラバラの破片となって消滅させられた――。

「……踏み込みが少し浅かったですね。私もまだまだ未熟ですか」

「いやー、今の現象起こされて未熟とか言われても説得力皆無ですよ、元帥閣下?」

勝つて兜の緒を締めている夕麻に、空気読まないイリナが笑いながらツッコみを入れる。生真面目なゼノヴィアが「こほん」と咳払いをして場を納めてから、あらためて再出発の号令を下してみる。

「それでは、障害物も排除できたことすし・・・各々方。参りましょうか？」

「オーツ!!」

ノリよく意気揚々と元いた世界で目指していた場所へとむかい歩き出す三人。

・・・そこに、弱々しい声で無粋な横やりが入るー。

「ば、バカな・・・。バランス・ブレイカーになつて赤龍帝にも手が届いたと思つていた俺の力が、こんな奴らに・・・。」

倒れ伏して息を荒げている敵の男。それを見下ろしながら天野夕麻は冷たい口調で切つて捨てる。

「まだ続けたがつているようですが、無駄な努力です。私の刀が斬つたのは、あなたの内側にある物のみ。外側にある身体には掠り傷一つ負わせていません。これが何を意味しているのか、あなたには理解することが出来ますか？」

「・・・・・・・・」

夕麻の言葉を聞き、男は顔色を真っ青にしてガタガタ身体を震わせ始める。

そんなバカな、あり得ないと思いつつも己の心が相手の言葉を「是」としてしまつている。否定したいのに自分の心が否定することを許してくれない。それが『答え』だ。

ー居合ひとは人を斬るための技術ではない。

まず何よりも先に、己自身の弱き心を戒めるための技術であるー

・・・精神論にすぎないと男は考えていたそれを、目の前の少女は現実を覆い尽くした幻想を切り裂けるレベルで実現してしまっている。

格が、違う。違いすぎる。到底自分ごときが敵う相手ではなかったのだと思い知らされつつ、同時に男はこうも思うのだ。『ああ、やはりコイツもなのか・・・』と。

「殺すなら殺せ。死んでもいい・・・。あいつの・・・。曹操の下で死ぬなら本望だ・・・」
「あなたがそう思う理由はなんですか？ どうして彼のためなら死んでもいいと思ってるのですか？」

思いがけない即答での反応に、男は一瞬だけ面食らったがすぐに笑顔を取り戻した。
男にとって『彼』の存在はそれほどまでに大きいものだったから。

「・・・セイクリッド・ギアを得た者の悲劇を知らない訳じゃないだろう？」
最初に発したこの言葉の時点で夕麻の眉を急角度に上げさせるに十分すぎる『無様さ』を持つていたのだが、生憎と男は忠誠を誓った対象を語ることに、夕麻からもらった痛みで目が朦朧としており認識できていない。

イリナとゼノヴィアが「あちゃ〜」と額に片手を当てて嘆いて見せているのだが、それすら男の視界に入ってくることはできなかつた。

『セイクリッド・ギア』を持つて生まれた者は誰しもその力によつて良い人生を送れた訳じゃない・・・。俺のように影を自在に動かす子供が身内にいたらどうなると思う？

・・・気味悪がられ、迫害されるに決まってるだろう」

「俺はこの力のせいでもともな生き方ができなかつたよ。・・・でもな、この力を素晴らしいと言ってくれた男がいた。この力を持って生まれた俺を才能に溢れた貴重な存在だと言ってくれた・・・。英雄になれると言ってくれた・・・。今までの人生をすべたなぎ払うかのような言葉をもらったらどうなると思う？ そいつのために生きたいと思つちまつても仕方ないじゃないか・・・ッ！」

「利用されてるだけだと思ふか？ ーだ、そのどこが悪い？」

奴は、曹操は！ 俺の生き方を、力の使いどころを教えてくれたんだぞ・・・？ それだけで十分じゃないか・・・ッ！ それだけで俺は生きられるんだ！ クソのような人生がようやくと実を得たんだぞ！ そののどこが悪いって言うんだよおおおおッ！！」

「クソのような扱いを受けて、クソみたいな生き方を送ってきた俺たちセイクリッド・ギア所有者にとつて、あいつは光だった！ 俺の力が、悪魔を、天使を、神々を倒す術に繋がるんだぞ！ こんなすごいことが他にあるつてののか!？」

「それにな・・・悪魔も墮天使もドラゴンも元々人間の敵だ！ 常識だろうが！ そしてあんたもー墮天使で敵で人間にとつて脅威でしかない！

俺たち人間を舐めるなよ・・・墮天使がああああああつ

!!!!!!
!!」

「自分がクズな理由に他人を使うのが、そんなに楽しいか？ 人間以下のクソ虫野郎」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

頭の上っていた血が一気にドン底まで下げさせられてしまったのではないかと錯覚してしまふほど冷たい声音をもたせた夕麻の言葉。

怒りに震える心を瞳に写し、天野夕麻は――失敗した墮天使にして人間を愛する愛天使は、目の前でうずくまっている生きる価値もないゴミクズのようなゲス野郎に人生最後の説教を聞かせてやるため一步前へ出る。

「さつきから黙って聞いてやっていけばグダグダ、グダグダと……。要約してしまえば、えすれば、自分では何も決められない選べない考えることすらしようとしなさい、ただただ自分の不幸を他人のせいにして、生きるための理由に他人を利用してきただけと言

う、腐りきった負け犬人生の不幸自慢ではないですか・・・っ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あなたは人から生まれ持った力が原因で気味悪がられたとき、責め立ててくる相手になんと答えましたか? 『自分は悪くない! こんな力を俺に与えた奴が悪いんだ!』と、その力に相手が恐怖を抱いていると知りながら謝ろうともせず、自分の正しさのみを主張したりはしなかったのですか?」

自分に対して言ってくる相手の言葉を、どこか別の所にいる誰かのせいにして向かい合おうとしなかった過去の経験は無いのですか・・・!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「曹操のためなら死ぬる? 悪魔も天使もドラゴンも人間の敵? 自分の力が神々を倒す術に繋がる? 英雄になれると言ってくれた曹操のために生きると思うのは仕方ない? ..ふざけるなっ!!」

ただ言われたことだけやっていけば英雄になれる楽な道を選んだだけじゃないか! 英雄の役にたつて死ねば英雄になれると、自分の死を飾りたかっただけじゃないか!

自分の足で立つ勇氣がない自分が! 自分の責任で生きられない臆病な自分が!

自分はこの程度の奴だと認めることのできないプライドだけは高い自分が! クソツタレな人生を送りながら自殺するのはプライドが許さない自分が! クソツタレな人

生の最期だけでも英雄のために死んで疑似英雄になりたがってるだけの自分が！

自分より恵まれてる奴らの文句ばかりを言いたがり、自分はかわいそうな奴なのに頑張ってるんだと自己憐憫に浸って、格好良く人生を終えられる最期に自己陶醉を求めたがるお前自身が！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前は英雄にはなれない！ 英雄とは人々を導く光となれる存在だ！ 周りがお前がどう言おうと自分を貫き通せる人間のことだ！ 他人から評価を勝ち取れる人間のことだ！

断じて、他人から認めてもらえないと英雄になる道も選べない奴隷の事なんかじゃない！ 断じてだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前は人間なんかじゃない！ お前は自分で考える意志も権利も放棄した、人間以下で畜生以下のゴミクズ以下のクソツタレ野郎だ！ お前なんか人が語るな！ 人として生きるために必死に努力している人間たちをお前ごときの汚い舌で汚そうとするな！

英雄に寄生しないと生きていけない宿り木如きが・・・人間を舐めるなああああつ！！」

「お前には殺すために特別な力は使ってやらない！ 刀も使わない！ お前の血で刃が

穢れる！ サモン・《ティンダロス》！

——人に飼われて生きていたいと願う、犬以下のくだらない生き物に自ら成り下がったお前には犬の餌になって死ぬのが相応しい・・・」

「へ、へへへへ・・・。アンタ、女神みたいに優しそうな見た目をしてるのに・・・俺たち、心の弱い人間には全然優しくしてくれねえんだな・・・。やっぱりアンタは人間の敵の墮天使だよ・・・」

「あら、失礼ですね。私は人に優しい普通の女の子ですよ？

——ただし、甘くはないですけどね」

つづく

43話「魔王・天粕夕麻編。魔王勇者×殺人鬼×日本の英雄派？」

「ーむ」

二条城にある庭園でイツセーたちが来るのを待ちわびていた曹操が、思わぬ珍客の来訪を察知したのは英雄派の中では唯一と言っているほど希有な素質『真の英雄になれる可能性』の持ち主であるが故の「危機感」によるものだった。

「・・・？ どうしたの？ 曹操。なにかあった？」

ジャンヌ・ダルクがいぶかしみ、

「奴らが来たのかい？ だとしたら嬉しいな。なにしろ予定よりも早く着いたことになる。こちらの想像を上回っている相手と戦えるなら光栄だ」

ジーク・フリードが嬉々として剣を振りかぶる。

組織内でも曹操に次ぐ実戦部隊のトップエース二人が気づいていないと言うことは、英雄派の中でこの危機に気がついているのは自分だけということになる。

ーまだまだ組織としては未熟だなー

そう嘆息しなくもない事実ではあったが、むしろ彼はやる気を増していた。

なぜなら彼ら英雄派は、生まれつき弱い人間の集まり。生物として格下の存在が天をも落としてみせると活き巻きながらここまで来たのだ。下から這い上がり、上位にある者から王座を奪わずして何が英雄か！　　ーそういう想いが彼“だけには”明確に存在していた。

だから解る。

今この場所へと向かってきている敵はイツセーたちではないことが。

この敵はイツセーたちとは違い、英雄に打倒されるのを良しとしない悪魔やドラゴンではないことが。

この敵はー人が目指す夢と野望の前に立ちふさがれることを、自らの役割として架した存在だということが。

理想を追い求め、胸に灯した夢と野望の光を熱く滾らせる勇者たちに恐怖と絶望を与え、さらに強く燃え滾らせるための薪としてくべようとする者。人類にとって、越えなくては前に進めなくさせてしまう壁。

即ちーー“魔王”と言う名の神が与えた試練である。

「……っ!? ジャンヌ!　ジーク!　九尾を守れ!　奴らの攻撃目標は我々では

ない！ この攻撃は彼女への直撃コースを通ってくるぞ！」
『なっ!?!』

自分たちにとっては実験材料であろうとも、敵方にとっては人質という認識のはずの京都を裏から守り続けていた大妖怪への直接攻撃が来るとは微塵も想像していなかった英雄派は反応が遅れ、迫り来る黒い光に等しく飲み込まれては消し去れ急速に数を減らされていった――

「元帥閣下、露払いとして勇者の選別が完了しました。これで残っているのは、あの一撃を耐え抜いた気骨のある者たちだけとなったでしょう」

「ご苦労様です、ゼノヴィアさん。やはり英雄を目指している人たちを相手にするのですから、最初は驚異的で圧倒的な破壊の力を撃ち込んであげなくてはね。礼儀に悖ると言うものです」

「た〜まや〜♪ きゃははっ☆」

制服を着て女子高生の姿を取った三人の『人を試す、傲慢なる神たち』は、初撃での

「ならば結構、こちらの勝手な推測として聞き流してくれていい。仮にそうだった場合での、仮説の話に過ぎないのだからな」

「くっ……」

「九尾の狐を使つて京都市内全域——もしくは日本全国にまで波及するほどの災禍を招くかもしれないとなれば、それは命をとって守り抜いてきた大切なモノを自らの手で破壊し尽くすことを意味している。死よりも辛い屈辱であり、苦痛だろう。」

ならばせめて、そうされる前に終わらせてやるのが彼女の覚悟と実績に敬意を表して同盟を結んだ我々の果たすべき義務であり誠意と言うものだろう。違うか？」

「それは……」

キツイ視線で親友に問いつめられて口ごもる敵兵。

そこに親友のイリナが容赦なく追撃を掛ける。墜ちても尚、聖剣コンビは健在だ。

「答えはYes！　そしてNo！」

私たちにとつての義務と誠意はアンタたちにとつてのNoであつて欲しい選択肢で、アンタたちにとつての作戦目標を完遂するためには私たちにとつてのYesは全てNoであるべき間違つた結論よ！　敵と味方なんてそんなものよね！　だって、どつちともが『自分は正しい、お前ら間違ひ』つて言い合うのが戦争なんだもの！　だから今の私たちはスツゴク愉しいわ！」

「………」

「それに、どうせアンタたちが私たちの立場だった場合には絶対同じことしてたでしょうし、私たちがアンタたちの立場でも同じ事してたと思うもの！ 断言する！

だって私にもアンタたちと同じで他人殺して『正義だ大儀だ』のたまつてた黒歴史時代があつたんだもの！ だから同類！ 人類皆兄弟！

ラーメン、かーめん、冷やソ〜メ〜ン♪」

「ーっ!! 貴様等キチガイどもと一緒にするなよ、我々は……っ!!」

「人魔倒して英雄になるための聖戦中の実験材料手に入れるために徒党を組んで、夜中に婦女子さらつてつた変質者どもの下っ端が何言つたところで説得力カケラもなくい

てゆーか、ボロ負けして醜態さらしながら自分たちの正当性解くのは負け犬くさ〜い。そう言うのは復讐戦挑んで勝つてから言えば〜? そういう思想なんでしょ?

アンタたちの組織が掲げてるタ・イ・ギって? ね☆」

「ぐうっ………!!!」

弱点を突かれて黙り込む英雄派の一人。

英雄としての誇り故に黙り込まざるを得ない彼に、イリナはまたもや遠慮容赦のない追撃を与えて、おまけに止めまでもを刺していく。

「待つてあげるわよ? 高みの空からアンタたち弱っちいのが這い上がってくるの

を、神様気取りの視点で見下ろしながらずうと・・・ね。

だって、それが強くなった強者だけに許された特権なんだもの」

「・・・・・・・・・・」

「相手より強いから、殺される覚悟で挑んできた相手を自己満足で殺さずに気絶させたままに放置してやれる。相手より弱い奴には殺してもらえない権利さえも相手の胸先三寸次第。

つまりは戦場で敵と向かい合った瞬間から、弱い奴の生殺与奪は強い方のモノですつて献上しているようなもんよね。キャハツ☆」

「・・・・・・・・・・」

「あ、別に背中から刺し殺してくれても、一切まったく私は気にしないから殺つちやつてくれても構わないわよ？」

戦場で敵を前に背中さらして殺されるようなバカは『仇討つてやる価値すらない馬鹿です』って、自分で宣言している様なもんだから気にしないでいいの、いいの。自己責任で死ぬリスクを犯して挑発したんだから、殺された後でグダグダ文句言う資格はありませくんって感じ？」

「・・・・・・・・・・」

「そう言う自己満足で死にたがる馬鹿が言いそうな台詞があつたわよね、昔に。」

落とした敵兵の首を踏みつけ、力を込めて踏み潰しながら、黒く染まった墜ちた聖剣使いゼノヴィアはこう言い切る。

「死ぬ覚悟など、敵を殺すつもりで戦士となった時点で決めて於かなくてはならないもの。敵の命を奪いに来ておきながら、自分自身は死にたくないなどと抜かす糞野郎をお前は許すことができるのか？ 阿呆めが。」

そのような生きる資格もないムシケラどもなど殺されるのが、むしろ必然。頭数に入れて計算している奴らは脳に蛆が湧いているのだ、戯けがつ！」

心底不快だという想いを隠そうともせず、ゼノヴィアは胴体だけとなった敵の死骸に唾を吐きかける。

戦場は殺し合うための場所だ。殺したくない、死にたくないと泣きわめきながら銃を乱射して偶然にも当たってしまった者たちが命を落とす汚らしい混沌空間なのである。

そんな場所に自ら望んで赴いてくるのが戦士なのだから、命など戦士になると決めた時点で捨てていて当然。

自分が生きて家族のもとへ帰ってくるためには、自分以外の誰かの家族を殺さなくてはならず、皆その覚悟のもと『生きるために殺し合っている』。

それなのに『死ぬ覚悟を決めるのが特別だと思いきや、こんでいる馬鹿者共』のなんと多いことか！ 大勢の他人を殺してきた自分の死には特別なモノな意味を求めようとする

浅ましい心根が転生愛天使となってからのゼノヴィアには酷く汚らわしい感情に思えて仕方がなかったのだ。

敵本陣へ向けて進撃する陣列に戻り、敵の首魁はこのようなクズでないことを心の底から希求した。

——悪魔だから墮天使だから異教徒だからと、肩書きでもって相手の人格を否定してきた自分に今更『命の重みに優劣はない』などと綺麗事を囁る資格があるなどは微塵も思えない。

ましてや自分は戦闘狂。強さで人を計ろうとするキチガイでしかない。武人を謳うには血で赤く染まりすぎた殺人鬼だ。

そもそも、殺し殺されることに生き甲斐や誇りを覚えると言う時点で頭がどうかしていると思いがたい。それを職業として税金で行うのが軍人という救いがたいクズもものだから、今更人道もヘツタクレもない。自分の悪行を誤魔化すための詭弁ならば教会所属時代に聞かされた分だけで間に合っている。

（故に私は、これまで流し流させてきた血の量に報いるためにも戦闘狂としての道を究めて見せよう。その為にはより強い敵がいる。戦い甲斐のある敵との戦い。

憎しみという雑念を抱く気にもならない、ソイツを斬り殺すことだけに全神経を集中

させられるほどの強敵と戦い討ち果たしてこそ、戦闘狂の本懐というものであるはずだから)

強敵との戦いを欲する心とは、敵に優劣を付けること。強さで敵の価値をランク分けすること。

自分から見て、弱い者は下で、強いと感じた者なら上という風に他者を自分の基準でランキング別に決めつけてしまうこと。

自分の基準こそが絶対とする、傲慢なる神の視点。

今のゼノヴィアはその一面的事実を知っている。それが全てではないことも含めて思い知っている。

だから言い切るのだ。人の命の価値を選別する者として居丈高に堂々と、恥ずかしげもなく悪びれもせず。

「くびり殺すなら鼠よりも虎の首の方がよい。当然だな。

戦場で雑兵一人の価値など二束三文で売り叩かれる、腐った蜜柑よりも価値を下げられてしまう物でしかないのだから」

「ー来たか。攻撃範囲に含まれていなかった、周囲に配置していたバランス・ブレイカーたちを倒してきたにしても遅かったね。待ちくたびれてしまったよ。」

いくら俺たちの中でもバランス・ブレイカー使いは重要な戦力とはいえ、これほどの大規模破壊を成せるキミたちが手こずる程にはなれていないと思っていたのだけど?」

「その分、休養はゆっくり取れて体力も回復できたでしょう?」

夕麻の返答にジャンヌとジークフリードがムツとした顔になる。

「お前たちに合わせて待つていてやったのだ。感謝しろ」と言う意味での挑発は、傲り高ぶった強者の喉元を食い破ることに人間として勝利の活路を見いだしている彼らにとって都合の良いものではあったが、こうまで堂々と開けっ広げに上から目線で見下される相手としては、やはり癪なのである。

「それに先ほどの目立つ一撃で、イツセー君たちも現場で大きな異変が起きていることを察知し得たでしょう。狼煙も兼ねた砲撃だったことですし迷うことなくここへ最短コースを通って辿りつくはず・・・あなたが想定していたタイムリミットは、当初

の予定を大幅に短縮せざるをえなくなったのではありませんか？」

続く一言で二人は焦りを見せ始めた。確かにこれは不味いと。

当初立てた作戦を実行することは、今となつては不可能。しかし代わりの戦略を立てるには時間が不足しすぎている。

数の上で今はほぼ互角。だが、ここまでの大爆発を感知されたのではセラフも動き出すだろうし、外の連中はコイツラの手で大分減らされてしまっている可能性が高い。

赤龍帝の到着だけでも厄介なのに、この上さらに九尾の狐でグレートレッドを呼ぶ術式が完成していないのだ。

予定より時間が速まったことと、どう言うわけだか京都各所から流れ込んでくる地脈のパワーが妙に鈍い。先ほどまでは原因不明だったが、今ならわかる。

こいつらが、ナニカの細工を施したのだ。——と。

「ご名答。流石です、誉めてあげましょう。ご褒美として頭でもナデナデしてあげましょうか？」

顔色を読んだらしい敵指揮官の挑発的な口振りに、ジャンヌとジークは殺気立つ。

・・・対して曹操は静かに、だが鋭い視線で夕麻を睨みつけ問いただしてくる。

「——キミたちの目的は俺たちの計画を阻止することではないな。もしそうであるなら

先の攻撃の折りに波状攻撃でもって九尾の狐を仕止めていたはずだ。

俺たちは自分の身を守りながら他人を守る程度のことは出来るつもりではあっても、流石に身動き一つ取れない人質を守りながら防ぎ切るには限界がある。ジリ貧だし、それに何より「たかが実験程度で死ぬのは馬鹿らしい」と言う戦略条件がある。

あくまで今回の一件は、英雄になるため一段一段登っている階梯の一つにすぎない以上は味方を死なせてまで続行する価値はない。まして、キミたちの初撃で味方を殺されてしまった無能者の指揮官である俺には尚の事だ。

にも関わらず、キミたちはこれだけ手の込んだ仕掛けを施してきている。なにかしら別の思惑があると踏むのが当然だと思うが如何に？」

曹操の答えは夕麻を満足させ、ゆつくりと両手を広げてゆきながら世界全てを抱きしめたいと願っているようなポーズで彼女は言った。キチガイ台詞の真骨頂を。

「……………私はあなたたち人間を愛しています……………」

「……………」

いきなり敵から愛の告白をされた英雄派呆然。

そして、告白相手の気持ちなど全然考えていないように、ふざけているとしか思えない台詞を彼女なりに大真面目な態度と誠意あふれる口調でもって礼儀正しく自らの思

いを伝えてくる。

「困難を前にして屈することなく立ち上がり、格上の存在である神や悪魔を倒してこそ人は英雄になれるのだと叫び、世界を相手に戦いを挑まんとする貴方たち人間の持つ本質的な勇氣は本当にすばらしい……。称賛に値します。

その為には英雄の忌み嫌う権道さえ用いることを辞さないとする決意と覚悟など、あまりの感動に涙があふれて止まらなくなるほど激しく心を揺り動かされました。

私は貴方たちの困難に立ち向かい、克服していく度に輝きを増す英雄としての光をもっともつと見たい、見続けたい……。」

「だからこそ私は貴方たちの前に立ちふさがりにきました。貴方たちの成し遂げたい夢と野望の難易度を上げることで、それを乗り越えたときに増すであろう、貴方たちの輝きを更に強く激しくするために……。っ!!」

ただ、そのためにセレニア様にお留守番をさせて私も彼女にも寂しい想いを我慢させてまで赴いて来たのです!」

「えーと……」

ポリポリと頬を右手の人差し指でかきながら曹操は、その冴え渡る頭脳でもって相手の言ってる言葉の意味を理解しようと彼なりに必死になって頑張っていた。

「主を置いてきたと言うことは、今回の件は主からの命令を無視した独断専行であり、敵勢力全体の戦略から見ても造反に近い暴挙なのだろうと推測される。

そしておそらく彼女が言ってる『セレニア様』と言う名の主は前回の戦いで介入してきた銀髪の少女だろう。つまり銀髪の少女が自分たちに言ってた言葉は全部なかったこととして考えた方が良いと言うこと。

むしろ逆方向の視点が必要かもしれない。

あの理知的な少女の命令を無視して動き出したということは、今回の攻撃理由を理性で考えてはいけないと言うこと。もっと感情的で願望にも近い衝動なんかを基準として考えた方が、もしかしたら近いのかもしれない。

「・・・推測になる上に都合主義な予測すぎて申し訳ないのだが、キミたちが俺たちの元に来た理由は俺たちのためであって、赤龍帝より先にもっと高い壁を越えておくことさえ叶えば赤龍帝にもより格上の存在に邪魔されようとも退けることが出来るようになる。」

それ故にキミは俺たちに試練を与えるために来たのであって、倒すつもりや計画を邪魔するつもりは微塵も無かった・・・この推測をどう思うかな?」

正直、外れてて欲しいなーと心底から願っている曹操の期待とは裏腹に、天野夕麻は

大きく首を振る。方向は上から下への縦方向に。

「その通りです」

『はた迷惑な！　そして有り難迷惑すぎる!!』

「さらには、私の試練を乗り越えた後にやって来るであろうイツセー君たちもまた貴方たちとの戦いの中で己の内なる輝きに気づいてパワーアップするかもしれません。

もしそうだったら、まさに理想郷！　私にとつてのパライゾの完成です！　善悪定かならぬ混沌の中で行われる覇気と覇気とのぶつかり合いこそ我が王道！　我が理想！

戦って戦って、何度負けても諦めることなく戦い続けて勝ち上がってきた者たちだけが、勝利の栄冠と英雄の座を与えられるに相応しい存在であることを証明できるのですから！」

『言ってることは正しいけど、張本人のお前が言うのはおかしいと思います！』

「そしてえっつ!!!」

………全然人の話を聞いてない夕麻ちゃん。こう言うときの彼女はセレニアの言葉さえも届いていません。ただひたすらに、何処までも何処までも行けるところまで全力疾走で突っ走って行って、壁か崖か谷底があるなら喜んで突破していき、さらに突き進み続けるだけの存在です。……本当に傍迷惑きわまりないな、このキチガイ

は………

「勇者たちの前に立ちあはだかる魔王は、まず手下である親衛隊に戦わせるものです！」

私は王道を愛し貫く者……この度も王道展開を遵守し、お誂え向きな親衛隊を用意してきました！ 見てください！ 京都の危機を前に立ち上がった、日本の転生英雄たちの勇姿を!!」

「!? まさか！ この国にも俺たちと同じ英雄派が!？」

「そうです！ 神の悪意か嫉妬によって力を弱められてしまった為に今まで雌伏の時を過ごさざるを得なかった、貴方たち日本以外の英雄たち “ではない” 倭を掲げて戦う英傑たち！」

貴方たちが神へと挑むために力を手にしたならば、彼らにもまた私たちが神と崇めるセレニア様の試練と成功報酬によって転生英雄に相応しい力を与えてあげたのです！」

『な、なんとと言う悪しき奇跡の力をおお……っ!!』

「さらには京都御所から少し北へ行つて、地下鉄から烏丸線鞍馬口駅から歩いて三分のところにある御霊神社は、怨霊を神として崇める御霊信仰発祥の地！」

平城京から長岡京へ、そしてこの平安京へと遷都されていく歴史の流れの中で非業の死を遂げた早良親王こと崇道天皇をはじめ、汚名を着せられたり陰謀に巻き込まれる等

の理由で無念の死を遂げた人々が御霊神として奉られている有り難い場所！

己が野望によって都を害そうとする者たちから京の人々を守る守護者たちを覚醒させるのに絶好のポイントなのですよ！」

『くっ．．．抜かったあ．．．!! そのままで日本史に興味なかったから調べなかったのが、こんなところで徒になるとはああ．．．っ!!』

「さあ、来なさい！ 御霊信仰によって京の都の守り神となつた護国の和風英雄たち！

今こそ夷敵から日の本を守り抜くため立ち上がるのです！

カムヒア！ 御霊の転生英雄集団！ 《御霊四天王》!!!」

パチン!!

．．．．．キラソ。

ひゅー——————ドスンっ!!!

シユバ！ しゅばばばばばばばっ!!!

だか理解不能な理由で集めてきていた（らしい）日本の転生英雄たち4人をお供として率いている部隊。

基本的に「によつ」としか喋らないミルたんと言語的コミュニケーションを取るのとは不可能であり、イリナとゼノヴィアが「わかる時にはわかる」程度が限界。

一応セレニアの意を汲んで動いてくれるから普段は問題ないのだが、今回の夕麻のように命令違反で動いてしまった場合には『そのつもりは無いけど結果的に阻害してしまう』場合が希にある。

本人に悪気はない・・・と、思う。多分だけでも。

「ラスト・バタリオンな墮天使を」

——これは、あり得たかも知れないと言うか『あり得るべきではない』、英雄派と兵藤さんと混沌帝国軍とが偽りの京都において三つ巴のバトルを演じてた場合のお話です——。

「バランス・ブレイカー使いの刺客を倒したか。俺たちの中で下位から中堅の使い手でも、バランス・ブレイカー使いには変わりない。それでも倒してしまう君たちはかさに驚異的だ」

敷地内を進み、二の丸庭園を抜け、本丸御殿に続く櫓門という門を潜ると、たどり着いた先で曹操が待っていた。

同時に、構成員たちが周囲の建物から姿を現す。変わらず制服装備のまま、総員集結だ。

「母上！ 母上！ 九重です！ お目覚めください！ ——おのれ、貴様ら！ 母上に何をした!？」

「言っただでしょう？ 少しばかり我々の実験に協力してもらっただけですよ、小さな姫君。

・・・この京都という特殊な都市の力と九尾の狐を使い、この空間にグレートレッドを呼び寄せる。複数の龍王を拉致するのは難儀だからね。都市の力と九尾の力で代用することにしたのさ。強大なものを呼べるかどうかの実験にね」

曹操は言うが、俺にはコイツが何を言ってるのかさっぱりわからねえ。俺に分かるのはコイツが九重の母ちゃんを誘拐したせいで、九重が悲しくて泣いてるって事だけだ。

「・・・よくはわからねえ。よくはわからねえが、おまえらがあのデカイドラゴンを捕らえたら、ろくでもないことになりそうなのは確かだからな。九重の母ちゃんを返してもらうぜ」

俺がそう言うと、みんなも奴らに向かってそれぞれ構えをとる。

曹操はそれを聞いて楽しそうに笑みながら、なにか一言言おうとしたその寸前に。

「……………音楽が……………流れてきた……………」

「……………?」なんだ、この曲は……………いったいどこから流れてきている?」「聞き覚えがある気がするんだけど……………なんだったかしらね?」

曹操と、細い刀剣を持った金髪で異国のお姉ちゃんがキョロキョロ周囲を見回しながらつぶやく。俺たちも同じだ。聞き覚えがあるのか亡いのかよく分からん突然の音楽に首を傾げることしかできない。

そんな中で一人だけ、（確かゼノヴィアからジークフリードって呼ばれてた奴だ）曲名を言い当てた奴が正解をつぶやいた。

『ホルスト・ヴィツセルのリート』……たしか、ナチス党歌の中でも特に有名な曲の一つだったはずだ」

「ナチ……帝国!?!」

猛烈にイヤな言葉を連想して思わず背筋を震え上がらせた瞬間、

「……奴らが……」来た。

「……素晴らしい……素敵だ……やはり人間は、絶望を前にしたときにこそ最高の輝きを放つのですね……」

パチ、パチ、パチ、と。

空間を振るわす轟音とともに拍手する音を響かせながら。

俺の元カノは、ボロボロになった飛行船の頭上で仁王立ちしながら、空間を引き裂き無理矢理にでも穴をこじ開けて乱入するため世界の摂理をねじ曲げて来る。

蛇のような、ぶつとくて堅いロープのような、何十本も束ねた髪の毛のような、ウネウネとした気持ちの悪い触手に隙間なく埋め尽くされて蠢きながらへバリ付かれた姿

の飛行船で、俺たち以上に悪魔らしく見える影を空に描かせながら。

神様みたいに傲岸不遜な態度で、この場にいる俺たち全員を見下ろしながら。

「神も悪魔も妖怪も人の手になる発明品・・・道具にすぎません。使うために生み出された存在なので、必要があるなら使うのが人として正しい。

曹操さん。あなたは本当に・・・やれば出来る人だったのですね・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして、イツセイ君。愛しい人を守るため、大切な誰かが泣かせないため、命を懸けて困難に立ち向かおうとするあなたもまた素晴らしい・・・。人間として、この上なく正しくて尊いあり方とすべきでしょう。

——自分の守りたい物のためなら所属を問わずに壊し、殺し、殺戮できる絶対正義という名の殺戮のイエホーシユアよ・・・あなたの成長を私は心より歓迎いたします。

この世界に住むすべてにとっての敵、魔王としてですけどね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺も曹操も答ええない。答えはいらない。必要ないからだ。

「愛のために竜を使い、夢のために狐を使う。人外ばかりが強者として殺し合うこの世

界において、あなたたちは・・・『あなたたちだけは』異形を道具として人同士で闘い合うことを良しとしている。理由はどうかあれ、敵を倒すため割り切ることが出来る理由と動機を所持している。なんと素晴らしいことでしょう・・・。

私は、この美しい景色に参加させて頂けたことを心から神に感謝しますよ・・・。私の信じる、あなたたちの敵。異住セレニア・ショート神帝陛下に心の底からねー」

・・・ただ近づいてきてるだけで漂ってくる、隠す気のない強烈な殺意と闘気と熱意とーそして『愛情』が、元カノが何しに来たのかを語り尽くせないほど教えてくれたから。

「そこを見張れ、あそこを見張れ、己の敵を根絶やしにせよ。目標は前方。敵は前方。

倒すべき敵は、常に前にしか存在せず、戦い続け、勝ち続け、高見を目指し歩み続けるなら地獄を作り続けるより他にない。ーそれは、なんと悲しいことでしょう。道端に子供の亡骸が転がされるのを喜ぶ愚者など存在するはずがないと言うのに・・・。

・・・が、それは同時にこの上ない尊さと輝きを人に与えてくれる。自分たちの大切な物を奪い来た敵を前にしたときにこそ、人は限界を超える輝きを手にすることが出来るのですから・・・」

「哀に始まり、愛を求めんがため戦う男。愛する男に愛されるため戦う女たち。」

屈辱を糧とし、高見を目指すために戦う英雄。英雄に魅せられ英雄に殉じる男たち。

信じ貫くものは違えども、掲げる旗の色は違えども、今この場においては皆同じ。皆が一つの歡喜を求めて集結して戦いあう。

その歡喜が、神も魔も凌ぎ世界に我を張る野望のためであれ、平和を求め愛を叫びながらも殺戮と戦いを繰り返す正義のためであれ、自身が属する組織の正義と倫理を純粹に信じ切っていたがためであれ。

あなた方と私たちはようやく一つになれました。同じ物を目指して歩み、夢見れる同士となれました。夢の様です。

なぜなら私にとって、誰もが皆同じように戦士となつて戦い合える戦場こそが、善悪を越えて人の信念と信念がぶつかり合う理想郷。パライズなのですから・・・」

「愛も平和も栄光も。夢も野望も性欲も。戦いを終わらせたい者たちも、終わらせたくない者たちも全て。求める物は異なり、目指す場所は違うけれど。」

それでも「其処」に至る道のりには「此処」を通らずには済まされない。通り抜けることは許されない・・・。

だって、戦士たちが求める全ての物は「この先」にしかないのだから！ 此処を潜り抜けて勝ち進み、辿り着いた者たちだけが夢を手にする刺客を手に入れられるものなのだから！」

「人では神魔に敵わない？ 竜は人に滅ぼされる運命にある者？ ……戯れ言です。そんな固定概念は、いくらでも塗り替えられてきました。

不死身の邪竜は誰に倒された？ 竜を倒して不死身となった英雄は誰に殺された？ 戦場の勝敗は常に、見通せない霧の先にしかない。理に頼らなければ弱者に勝てない雑魚は殺されるしかない。

旧魔王派がそうだったように。嘗ての私がそうだったように。闘いは正しいから勝つのではなく、正しさを証明するため勝利を求める場所なのだから」

「平和しか知らなかったイツセイ君と、平和ボケした日本人を知らない曹操さんの価値観は違って当たり前。戦わずして分かり合えぬは道理。言い分と主張がぶつかり合うのも至極当然。否定し合うための場所が戦場なのだから、戦場に集った者たちが互いの正義と正しさを主張し合うのは正しく真理!!」

自らの信じる正義の正しさを世界に向かって叫ぶためにも、拳を握って立ち上がるの

だ！ 勝利という名の栄光は『戦場という名の地獄』を越えた先にしかない！！

「夢を掴むためにも敵を倒せ！ 地獄を創れっ！！ 人が本当に輝ける場所は“其処”にしかない！ 其処を通らなければ、人は本当の輝きを取り戻せない！

他人の犠牲の上に築かれた玉座を望む戦士という名の死神には、髑髏に満ちた戦場こそが相応しい！！」

爆発。炎上。蠢く触手。

それに構わず飛行船の上から落下してくる、赤い色した制服姿の美少女。

・・・ヒュー・・・クルクルクル・・・ズドン！！
スタ、スタ、スタ・・・。

三種族混合テロ組織『カオス・ブリゲード』転生英雄者部隊「英雄派」。

。。。残存戦力、曹操、ジーク・フリード、ジャンヌ・ダルク、ヘラクレス、以下数名。

三種族同盟軍グレモリー眷属『兵藤イツセー』一派。

——残存戦力、兵藤一成、ロスヴァイセ、アーシア・アルジェント、木場悠斗、八坂の娘「九重」。以下援軍予定数名。

混沌帝国軍最高首脳部『三元帥』。

——総兵力、天野夕麻、紫藤イリナ、ゼノヴィアのみ。

「さあ、越えて征きなさい。勝利の先にある夢を掴みたいと望むなら。

千回だろうと万回だろうと億だろうと兆だろうと京だろうとも、叩きのめされる度に立ち上がり、自分を倒した敵に向かって立ち向かうのです。倒すために。

敗北が嫌なら、死ぬのが嫌なら、逃げ出すのが嫌なら、戦場にいる誰かを泣かせたくない、守りたいと叫ぶのならば。戦って勝つ以外に選べる道など存在してはいないのだから。

さあ、始めましょう。——自らの夢を叶えるための戦争を!! 自分が欲しい者を手に入れるための戦争を!! 私たち全員にとつての戦争を!!!」

おまけ2 『原作ジーク・フリードVS言霊ゼノヴィア』

ジーク「いやー、スゴいね君たち。驚いたよ。僕、今の食らってテンションがおかしくなってるんだけど、どうする？」

ゼノヴィ「ほぎくなよ、負け犬ゲルマンの英雄。ハンニバル抜きで貴様らがローマに勝てる見込みは万に一つも無し。なぜなら我が祖国ローマが恐れたのは、ハンニバル個人であつて貴様らゲルマン人ではなかつたからだ。

逃げ延びて落ち延びた民族が歌う英雄譚など、物寂しさしか感じられん。古い伝説にすがつてさつさと滅べ、竜に勝つて小物に刺される半端英雄の元祖さまようっ!!」

ジーク「………(イラッ)」

ゼノヴィ「腕が一本増えようと、千切れようとやることが変わるわけでもない。ただ、敵の首を切り落とす。それ以外に剣の使い道など存在せん。理屈は要らん。とつとと斬り掛かつてきて、斬り殺し合おう。

斬るしかできん人斬り包丁には、それが似合いの戦場だ」

「いったい貴様は何者なんだ!？」

「ふははは! 愚か者めらが! 敵に自分の正体を聞かれて教えてやる侵略者などいるものか! 知りたければ自分で調べるのだな! 懦弱で弱ちちくてバカでアホでスケベな人間の男どもよ!!」

高らかに高笑いをしながら背を向けて去っていく仮面の赤龍帝ドライグ。イツセー。全身を真っ赤な鎧で武装して、大きき的には2メートルになるかならないかぐらいで、翼は出し入れ可能な便利機能付きという、誰がどう見たってドラゴンには見えない見た目をしているのにドラゴンと同じ強さと力を持つ彼の正体は一体・・!？」

謎が謎をはらんだまま、ドライグ・イツセーが王女を片手に翼を広げて空へと向かい羽ばたかんとした、まさにその時!!

「まあ、種族が何であれ私の見た目で『嫁にする』とか言っちゃってる時点で変態なのは確定的に明らかなんですけどね」

「ブーーーーーーッ!？」

浚われそうになっていたセレニア姫による辛辣なツッコミ!

仮面の赤龍帝ドライグ・イツセーは精神的に125ポイントのダメージを食らい、激しく咽せた!! 効果は抜群だ!

「けほつ、こほつ、うえっほえほつ!」

「こ、こらセレニア姫! 人質の身でありながら私の愛する夫、赤龍帝ドライグ・イツセーに向かつてなんたる無礼! 口を慎みなさい!」

慌ててドライグ・イツセーに付き従ってきた彼の妻にして恋人の(言語的矛盾)ドラゴン・クイーン「スイツチ姫グレモリー」が叱責しました。

そして、こう付け足します。

「・・・ただし、幼女趣味に走らないよう説教するだけなら許可します。世界で最も愛すべきなのは、おっぱいの大きな女性であるのだと洗脳するのであれば尚良しです」

「我が妻にして恋人スイツチ姫グレモリー、貴女もですか!」

身内からの裏切りに合い、大いに慌てふためく仮面の赤龍帝ドライグ・イツセー。

そんな彼を哀れに思ったコトダマ王国の王妃様が、口の悪い娘を窘めてくれました。

「そうだと、セレニア。その人の言うことも尤もだ。人質たる者、生殺与奪の全権を相手に握られているのだという事実を自覚して慎まなければ」

「はあ、なるほど」

「それにだ。別段、王様とか貴族様だとかが幼女趣味に走るのなんて珍しくもないだろ

う？ 戦国時代の武将たちなんか大半がホモでシヨタコンで美少年大好きなBL世界だったじゃないか。

小姓とかいう小間使いの美少年たちに世話を焼いてもらいながら、夜はシモの世話までしてもらう話是有名すぎるだろう？」

「ああ、森欄丸とかが有名どころですよ確か。あと、前田利家も丹羽長秀も信長の小姓出身で寵愛を受けていたと聞いています」

「そうそう。武田信玄も戦場から年下の恋人(男)相手に「浮気してない、お前だけがアキラブユー」みたいな言い訳書いた手紙を送ったことあるらしいしな。

まして、姓に関しては日本よりも奔放だった中世ヨーロッパで崇められたり貶されたり忙しかったドラゴンさんなら尚の事だろうさ。ある程度は大目に見てやれ、セレニア。

男のバカな我が儘を許してやれる都合のいい女でなければ、囚われのお姫様役は務まらない。お姫様は王子様の奴隷であるべきと言うのが、世界の半分では常識になつてるのがファンタジーだからな……」

「……何と言うべきなのか、女にとつては辛い役所なのですねお姫様つて……」

何故かは知らねど、浚われる王女とその母親との間で妙な相互理解が生まれかけてしまっていた……。

「ーはい、ズレてる！ 話ズレてる！ ズレすぎてますから！ その浚われるお姫様よりちっこかわいい王妃様も少し黙る！ 人質と人質の母親の二人で誘拐犯をディスるのはやめなさい！ って言うか俺、その中世貴族世界で王様目指して努力中なんですから本気でやめてもらえませんか!? マジでやる気損ないますから！」

「そうよ！ 仮面の赤龍帝ドライブ・イツセーの言うとおりだわ！ 私たち名門貴族にとつて黒歴史公開は敵対家門を滅ぼした後にするのが鉄則という、暗黙のルールをご存じないのかしら王妃様は!」

「仮面のおっぱいクイーンドラゴン、アンタもかい!」

身内から再び裏切られたジュリアス・シーザーならぬドライブ・イツセー。

彼の預かり知らぬ事柄ではありませんが、この光景を遠くから見ているコトダマ国を攻撃中のドラゴン兵士たちでさえヒソヒソ声で話し始めてたりしておりました。

「やっぱ、おっぱいデカいから浚われたんだらうな。あのお姫様」

「おっぱい大好きドラゴンだもんな、うちの大將は。おっぱいさえデカけりや大抵の欠点は許せちゃう人って言うか、ドラゴンだし」

「いやいや、あの人って言うかドラゴン。かわいければ何でもイけるドラゴンだぜ？」

それこそ女装した美少年でも不可能じゃないぐらいには」

「マジでか!? …うわ…さすがにそれは引くわ。おっぱいドラゴン様、マジ

引くわー……いい人だし嫌いじゃないけど、それでも流石にそこまで俺は付いてけないわー。人としても龍としても言っちゃイケない範囲の世界だわー……」

「まあ、それも含めて受け入れられるデカサがあの人で龍の魅力なんだし、仕方ないんじゃないね? 色々とき」

「まあ、確かにデカイよな。あの人の器はアレと違って」

「あつちもデカくなるためには「いっぱいオツパイ揉みまくらなくちゃ!」とか言ってる人に理屈求めちゃだめだよな! やっぱり龍族にとつては煩惱と欲望に忠実なのが一番です!」

「おうよ! だからこそ仮面の赤龍帝ドライグ・イツセイ様はサイコーなんだ! 好きな奴救って、嫌いな奴殴れるって最高だよな!」

「うむ! では唱えよう。我らが赤龍帝賛歌の歌を!」

『オツパイ! オツパイ! おっぱいドラゴン! おつきいな! アンタもおつきくなれると祈ってます!』

……自覚のないデイスリ発言を侵略国中で叫ばれるとは露知らず、仮面の赤龍帝は最後の捨てセリフを残してコトダマ王宮を去りゆく決意を固めたところで御座いました。

「ぬぬぬぬ……ここまで不真面目にしか戦えない国だったとは……もういい！
欲しいものは手に入れたのだ！ 帰るぞ！ スイッチ姫グレモリー！ 時空移動
ゲートに繋がる門を開くがよい！」

「任せてちょうだい仮面の赤龍帝ドライブ・イツセー！……でも、流石にここだと恥
ずかしいわ……。こんな大勢の人目がある中でオツパイ見せてスイッチにされるのは
流石に無理よ……ね？ お願いだから人のいない場所で二人だけの時にでも……」
「うおおおおおい！ いい加減にしてくれませんかね部長!? 世界観と役割と俺
たちの設定が違うときぐらいおつきなオツパイネタは自重してください！ マジお願
いしますから！」

『うわ……マジでこれはドン引きだわ……』

「うが……つ!!!! (ㄹ)!!!!」

?話「京都修学旅行編に魔王（笑）降臨」

——これは、有り得ない展開でのお話。

本編3話目みたいいなノリで修学旅行編が進んでしまった場合の、トンデモストーリーです。

修学旅行初日、イツセー・ルート。旅立つ前の東京駅で。

「はい、これが人数分の認証よ」

部長が旅に出る俺たち二年生にカードらしき物を渡してくれた。全員手に取って確認する。

「これが噂の?」

「ええ、これが、悪魔が京都修学旅行を楽しむときに必要な『フリーパス券』よ。京都の名所はお寺や神社が多いから、私たち悪魔が歩き回るには不都合なことが目立つのよ」

普通の悪魔は寺とかには近づかない。聖なる力とかは相性悪いのだ。

「だけど、きちんとした形式のある悪魔ならこのパスを渡してくれる。今度の修学旅行はカオス・ブリゲードの脅威に対抗するため、京都を裏から守ってきた妖怪勢力との

同盟を強固なものにする意味もあるのだから当然よね。グレモリー眷属、シトリー眷属、あなたたちは後ろ盾があつて幸せ者なのよ?」

部長がウインクをくれて、俺は歓喜の声を上げて皆も喜ぶ。

やがて新幹線の発車時間が迫つてきたから、皆は車内へ移動して残る羽織れと部長の二人だけ。

「襟元、きちんとなさい。京都でも駒王学園の生徒であることを忘れてはダメよ?」

「は、はい!」

「・・・本当はね。強がつてみたけど、私も朱乃と同じで、あなたがいない間は寂しいわ。これでも随分とマシになったのだけど・・・チュ」

「ぶ、ぶ、部長っ」

「いつてらっしやいのキスよ。私はこれで、あなたが京都に行つても寂しさに耐えられるわ。だから、いつてらっしやい、イツセー。楽しんでくるのよ」

「は、はい! 行つてきます!」

部長のキス! 最高だった! なんだか幸先がいいぞ! いい旅になりそうだ!

こうして俺の修学旅行は始まりを迎えた。

サイオラীগさんのこととか色々心配事は山積みしてるけど、今だけは目一杯京都を満喫して英気を養おうと思う。

行くぜ、京都！

修学旅行初日、セレニア・ルート。出発した新幹線の車内で。

「・・・まあ、京都奈良なんて修学旅行先の定番ですし、同じ時期に別の学校に通っている知り合いと鉢合わせするのはラブコメの王道展開でもあるから構わないのですか・・・」

窓外に映る田園風景を眺めながら、一人『車窓に映る景色から』ゴツコを堪能するこ
とで現実から目を逸らしてきた私もそろそろ限界なので、振り向いて『彼女たち』に声
をかけます。

「・・・なんで同じ電車に乗ってきてるんですか？ 貴女たち・・・。私たちの学
校は貴女たちが乗った電車の前に出発していたはずなんですけども・・・。」

「大丈夫ですわ、セレニア様。乗ってから悪夢の世界を通じて来ただけですから、問題あ
りません。到着前におこなう点呼の時に戻っていれば済む話ですもの」

にこやかに微笑んで、隣の座席に座っている天野さんが説明してくれました。時も時
空も操る邪神たちの使役者たちにとって距離の防壁は、小さな防衛戦よりも尚意味を成
さない紙の城壁以下みたいで何よりですね。

「ダイジョーブですよセレニア様！ いざとなつたらアタシが記憶改ざんしますから！
この神より分捕つた聖なる蛇聖剣のお力とやらで！」

「・・・犯罪に悪用しないよう自粛してくださいね？ 紫藤さん・・・」

「ご安心をセレニア様。いざという時には私の聖剣で一切合切を綺麗さっぱり吹き飛ばして草木一本残らぬ焦土と化し、証拠も証人の存在も無価値で無意味な物へと変えて見せますので」

「あなたのもうテロですね！ 犯罪でさえありませんねゼノヴィアさん！ 本番まで隠れてやってるカオス・ブリゲードの方がまだマシに思えてきましたよ！」

「誤解です、セレニア様。私がやるのは何時でもどこでも只一つ・・・戦争だけです」

「自覚ありますか！ 一番ダメなタイプですね！」

風誘うく、敵よりも尚、部下の方が世界の危機だ。字余り過ぎ。セレニアでした。

・・・お願いですから、修学旅行の時ぐらい戦争忘れてくださいよ・・・。

「そう言えばセレニア様。私たち混沌帝国勢が妖怪たちの勢力圏内である京都へ勝手に入ってしまったてもよろしいのでしょうか？ 後々外交問題に発展する恐れがあるので
はっ。」

「あ・・・」

天野さんが今更過ぎることを今更になって口にしたので、私もその一件について思い出させられました。

「確か、多種族が京都に入るときにはパス券がいるんですけどつけ？ 京都の妖怪さんたちを束ねている、八坂さんちの真尋とか何とか言う組織が発行してる奴」

天野さんたち墮天使や天使さんが悪魔さんと敵対しているこの世界『ハイスクールD×D』では、意外と言うべきなのか当然と言うべきなのか部外者で人間の私にはわかりませんが、悪魔とか妖怪とか竜とかでも敵対し合っていてアクエリアン・エイジに出てくる『ダーククロア』みたいに化け物連合軍みたいな一大勢力を形成できてはいないようなのです。

まったく、『敵の敵は味方』の方便ぐらいは上手に使いなさいよね。本気で戦争に勝ちたいとするならば。

貴族社会故なのか、どうにも教条主義者めいた民族主義が鼻について好きにはなれない世界観。そんなだから戦に負けるのです、とか帝国軍提督みたいな口調で言ってみたくて仕方がありません。

「真尋さんとは誰のことなのかは存じませんが、仰るとおりです。手順を踏まないで密入国すると面倒事に巻き込まれるかも知れませんが？」

彼女の言い分も一理あります。こちらに戦闘する気がないからと言って、外国の最高

戦力三人が決められた入国手順を無視して密入国してきたら、どんな平和国家だって危険視して過敏な反応するに決まっているからです。

——しかし……。

「修学旅行は学校行事です。所属する生徒として参加しない訳にはいきません。

親に学費を払ってもらっている学校よりも、内緒でやつてるアルバイトの事情を優先する方が本来はおかしいのですからね。

文句があるなら学校の方にどうぞと言ってお上げなさい」

「……セレニア様のそう言い切れるところ、私は大好きで仕方がありませんわ。片時も離れることなく守って差しあげたくなるほどに……。」

慈愛に満ちた天野さんによる優しい微笑み。

ただし。

「——で、今この電車にも来ちゃったと?」

「はい☆」

私のボディガードの愛が恐すぎる件について。

まあ、そんな訳で私たちも兵藤さんたちと同じで京都奈良での修学旅行です。

何事も起きないといいですね。……面子から見て望み薄すぎるから、儚い望みなんでしょうけれども。

『幻』を『想う』と書いて『幻想』と読む。

バトルファンタジーの世界だろうと現実は過酷なものなのでした……。

修学旅行初日、イツセー・ルート。京都到着、観光中。

「余所者め！ よくも……母上を返してもらおうぞ！ かかれ！」

「おおつと！ なんだなんだ！ か、カラスの、て、天狗……？ 狐？」

自由時間に班の皆を連れて京都の街中を見て回ってる途中で立ち寄った千本鳥居の先で見つけた古ぼけたお社。

そこで手を合わせて願い事をして帰ろうとしたら、突然おかしな連中に絡まれちまつた！

見たところ京都の妖怪みたいだが、どうしてフリーパス持つてる俺たちに襲いかかってくるんだ!?

くそつ、部長が好きだと言っていた京都の町も人も風景もできるだけ傷つけたくな
いってのに！

「アーシア！ 部長から例の物を受け取ってるな？」

「はい！」

俺に言われてアーシアがスカートのポケットから取り出した、グレモリーの紋章が入るカード。

京都で有事の際には、その場にはいない部長の代わりに俺とプロモーションできる代理認証カードを修学旅行の間だけアーシアは託されたんだ。

アーシアが選ばれた理由は、俺と常に一緒にいるであろう者に持たせた方が、互いが互いを守り合えるから。

「行くぜアーシア！ 『ナイト』でプロモーション!!」

いちおう、ブーステッド・ギアを三十秒だけ溜めて力を増幅させてから戦闘開始。

……つたく、なんだってんだよ！ 意味不明で理不尽な襲撃に俺は困惑を強めてしまふ。

平和に楽しむはずだった京都旅行。起こって欲しくなかった何かが起こりそうな予感がして、俺は我知らず拳を強く握りしめていた……。

修学旅行初日、セレニア・ルート。京都観光中、外国人に道案内してます。

「あ！ ねえねえ見てよ、あの石像。あれって君をモチーフにして作った物なんじゃない?」

「え、嘘？ 本当に……いやいやいや、あれは無い。無いよ、流石にあれは無い。あそこまでボク、格好良くないって。おでこのコレが似ているだけで絶対別人だよきつと」
 「えー？ そうかなー。でも、この京都の街は仏教を中心に作られたらしいし、仏教って言ったら君が一番スゴい宗教でしょ？ だったらこの街で今一番イケてるモテる男は間違いなく君だよブツダ」

「え。え、え……そ、そうかなあ？ イエスは本当にそう思ってくれるのかい？」
 「もちろんだよ、当然じゃないか」。

だって、商店街の福引きで偶然当たった京都旅行の初日から、こんなにカワイイ女子高生たちが四人もボクたちの案内を買って出てくれてるんだよ？ コレが京都の地元パワーで底上げされた君の格好良さが理由じゃなくて何だって言うのさく」

「え、えく。いやー、参ったなー本当にもう。どうしよう……あは、アハハハ」

（い、胃がああああああつ!!! 今までになく途轍もないレベルの痛みで即死寸前の胃痛が凄まじすぎて死にそうですうううううつ!!!）

世界観的に一番出会わせちゃいけない人たちと出会っちゃったせいで、私が死ぬ！ 作品世界と主人公よりも先に私の方が死ぬ！

間違ってもニアミスさせちゃいけない人たちが主な原因で死にそうですううううつ

!!!

．．．．．だ、誰か助け．．．．．て．．．．．(

「あ、華嚴の滝だ。あれはなかなか苦しい修行だったよ。でも、それを乗り越えたからこそ今のボクがあるんだと思えば、どんな苦しみも無駄ではないんだと理解できてスゴく嬉しくなるよね？」

「わかりますわ、そのお気持ち。スゴくよく分かります。やはり人は試練を乗り越えた数程強くなり、困難に直面したときにも負けず挫けず諦めることなく人生を走破しようという気持ちになれる存在なんですものね！」

「おお！ 君若いのによく分かってるね！ スゴいなく日本の若者たちは．．．。ボクなんか君くらしいの歳の頃には羊を追いかけるだけで文字の読み書きすらできなかつたのに．．．。やっぱり人は向上心と諦めない気持ちさえあれば環境や生まれなかに囚われることなく学んでいけるスゴい存在だってことなんだね．．．」

「ええ．．．本当に．．．人類とはこの世の何よりも．．．．．」

「素晴らしい心を持った存在なんだね．．．(なのですわね．．．)」

ウオオオイ！ その元墮天使イイイイイツツ

!!!!!!

歴史上最大の聖人二人と意気投合してんじゃねえですよおおおつつ
!!!!!!

修学旅行初日、イツセー・ルート。『八坂』に招かれた屋敷にて。

「・・・なんだか、えらいことになってますね」

昼間、俺に襲いかかってきた妖怪たちが謝罪したいからと言われて訪れた先にあつた不思議空間を抜けて通されたバカでかい屋敷で、狐の小さなお姫様「九重」から謝られて仲直りして詳しい話を聞かされた上で、俺が言った意見だった。

「各勢力が手を取り合おうとすると、こういうことが起こりやすい。オーデインのときもロキが来ただろう？　今回はその敵役がテロリストどもだったってことだ」

なんと、京都に住まう妖怪たちを束ねている八坂の当主『八坂姫』って人が、何者かに浚われて行方不明になってるらしい。

そして先生は、誘拐犯たちは十中八九カオス・ブリゲードの一派だと断言した。俺たちも先生と同じ考えだ。

「・・・どうかお願いじゃ。母上を・・・母上を助けるのに力を貸してくれ・・・。いや、貸してください。お願いします」

九重が手をつき、深く頭を下げる。・・・俺は、こんな小さな子が頭を下げる姿に声

を涙で震わせて、気持ちを新たに旅行中の戦闘を覚悟したんだ!!

修学旅行初日、セレニア・ルート。宿泊先のホテル、自室にて。

「イエーイ！ 今夜はオールナイトだぜーっ！ (合コン喫茶のノリで甘粕夕麻)」

「わーっ！ ヤンヤヤンヤ♪ (お祭り気質で騒げりや何でもいいイリナ)」

「わーい (斬ること以外に興味ないから好き嫌いがなく、普通に楽しめてるゼノヴィア)」

「……………ZZZZ (疲れてオネムの混沌帝国皇帝陛下)」

遮音力場を張って、はしやぎまくる普通の修学旅行を満喫しまくってる戦争国家の最高幹部三人＋国家主権者一人であった。

……………そして彼女たちは、運命の二日目を迎える……………

修学旅行二日目、イツセー・ルート。渡月橋。

「……………この霧は……………」

昨日あったばかりの九重に案内してもらいながら楽しくおじやべりしていた俺たちは、突然ぬるりと生暖かい霧に包まれて、俺と眷属の皆以外の人たちは突然まるっといなくなっちゃった！

「この感じは、間違いありません。私がディオドラさんに捕まったときに神殿の奥で同じ霧に包まれて、あの装置に囚われてたんです」

「——『ディメンション・ロスト』」

木場が言つて、それに答えるようにアサゼル先生が「お前ら、無事か？」と、空から声をかけてくれながら、黒い翼を羽ばたかせて降りてきてくる。

「俺たち以外の存在はこの周辺からキレイさっぱり消えちまつてる。俺たちだけ別空間に強制的に轉移させられて閉じ込められたと思つて間違いないだろう。」

「……この様子だと、渡月橋周辺とまったく同じ風景をトレースして作り出した別空間に轉移させたのか？」

「……そう言えば、亡くなった母上の護衛が死ぬ間際に口にしておつた。気づいたときには霧に包まれていた、と」

九重が言葉を添えてくれる。

それは、俺の嫌な予感はずたつてしまったことを意味していたものだ……。

——やがて渡月橋の方から複数の気配が現れてくる。

薄い霧の中から近づいてくる人影の一人が前に進み出てきて、挨拶をしてきやがる。

「はじめまして、アザゼル総督、そして赤龍帝。俺は『カオス・ブリゲード』英雄派のリーダーで、曹操と名乗ってる。三国志で有名な曹操の子孫だ。——いちおうね」

修学旅行二日目、セレニア・ルート。健勲神社（旧称・健織田社）で、祈願中に。

「………む」

「??」どうかされたんですか？ 天野さん……突然厳しすぎる視線で遙か彼方を睨むよ

うに眺めだされた様ですが……」

柏手を打ち、決められた手順に従って礼儀正しく神社に奉られているご神体であらせられる織田信長公に祈りを捧げておられた天野さんが、突然どつか遠くを睨みだしたのでビックリしてしまいましたよ。……ついに頭がおかしくなったのかもしれないな……て。

つか、この人って元墮天使なのに平然とお祈りとかするんですよねー。「信じる心は

何よりも美しくて尊い」とかなんとか恍惚としながら。

元墮天使設定がネタでしかなくなってきた感の強い、今日この頃な天野夕麻さんでありましたとき。

「・・・いえ、大したことではないのですが・・・。ほんの一瞬だけ、私の英雄感知レーダーに反応があった気がしたものですからつい・・・。ご心配をおかけしてごめんなさい、セレニア様」

「え。なにその妖怪アンテナみたいなレーダー・・・」

コワ・・・。やっぱり変な電波を感知されてみたいですね。病院行きましょう、病院。今すぐにです。

「主が疑問に思われたなら、答えて上げるが忠実な家臣のイリナちゃん♪

なので、ご説明して差し上げましょう☆ 英雄感知レーダーとはく！ お義父さまの使う邪神レーダーや、ゼノヴィアが使える神様レーダーを天野夕麻元帥閣下専用にご自身の手でカスタマイズされたものでして！

元帥閣下の決められた絶対値に値しそうな英雄候補を感知できるようになるという驚異的なレーダーでありまーす♪

なお、基本的には頭のアホ毛で英雄オーラを受信するため、ちよつとしか伸びてない

夕麻閣下のアホ毛の感度だと大まかに感じ取るぐらいのことしかできませんくん」

「なるほど、よく分かりましたよ紫藤さん。ご説明ありがとうございます」

うん、本当によく分かりました。—— やっぱ、変な電波受信しちゃってるだけじゃねえですか！ 壊せ！ そんなレーダー！

どう考えたって強化人間が使うサイコミュ以上に厄ネタにしかありませんよ！ その設定！

「ですが、妙な翳りで曇らされたような感じ方だったので気になるのも確かですし……。ゼノヴィア大将、厄介事をお願いしますですけど、この近くで何か妙な気配を探り出すことはできませんか？

あなたの念能力『円』を使えば半径三百メートルぐらいはカバーできると思いますが「ら」

「承知。……むくん……。喝っ!!」

忠誠心溢れる部下に失礼なのを承知で、心の中だけでも言わせていただきますね？

……何やってんの、この人たちって……。すっごくバカバカしいんですけども……。「見つけました。渡月橋の上辺りに、人工的な疑似空間を上書きして隔離した一帯があります。おそらくは、それかと思われまます」

「空間を上書き。確かこのまえ似たような機能を持ったロンギヌスが会った気がしまし

たね。確か名前は・・・で、デメ・・・ロス・・・」

「『デメちゃんロスト』?」

「そう、それですよイリナ大将。さすがは憲兵総監兼内閣安全保障局長です」

「えへへ、それほどもく♪」

「・・・たぶん、絶対に違う名前だったと思うんですけど・・・」

聞こえてないでしょうし、聞いてもらえないことを承知の上で一応ツッコんでおく私です。

こういう時、『強さが正義』を基準とするバトルファンタジー世界で凡人の私は不利になる一方ですよ。何言ってもやっても通用するかしないかは相手次第にならざるを得ませんから。

・・・まあ、今回の場合は私も正式名称覚えてないから自信がないし、本気でツッコむ資格ないんで小声で言うしかないってだけでもあるんですけどね?

『『デメちゃんロスト』・・・調査部が見つけてきた文献によれば、霧が包み込んだ物を他の場所へ転移させることができるロンギヌスでしたか。』

ディオドラの神殿でアーシア・アルジェントを閉じ込めておく檻と処刑用の首縄のみ使っていたときには戦略的に無意味でしたが、兵藤イツセーたち全員を自分たちの戦いやすい戦場に転移させられるとなれば厄介極まる能力ですな。

味方にあるならともかく、敵の手にあるときには真つ先に破壊しておきたい強力無比な移動支援能力だ」

ゼノヴィアさんが言うことに基本、私も同意見ではありません。

・・・ただ、「お前が言うな」な気持ちになるのだけは避けられようがないですけどね・・・。

「もし仮に、その・・・で、『デメちゃんロスト（仮名）』によって強制転移させられたのが兵藤さんたち全員だったとしてです。その場合はどうされるのです？

特殊能力によって隔離されている場所なのでしょう？ 新幹線の時とちがって自然にできた距離と物理の防壁だけでなく、本気で侵入阻止を目的として防御スキルで固めである場所で行われている戦闘に介入するのは難しいのでは？」

「ご安心ください、セレニア様。私の次元斬は空間だろうと何だろうと切り開きます」

やっぱ、お前の方が厄介じゃないですか！ 敵にしたら嫌すぎる相手じゃないですか！ 防御関係なくなっちゃってるじゃないですか！ スゴいですね！ 邪神を支配することに夜能力補正！ そりゃ誰だつて強者こそが絶対者と思ひ込みたくもなるわ！

反則にも程があります！

「はい！ はいはいハッイ!! セレニア様！ アタシだったら次元の狭間に飲み込ませてから空間丸ごと支配下に置いて行き来を自由にすることが可能にできます！」

「腕力と根性と自分を信じる心によって、力づくでこじ開けられます」

・・・なんつで、うちの軍隊にいる人たちは碌でもない能力ばかりチートしてるんですか！ もっとヒーローっぽい能力やスキルも身につけなさいよ！ 主人公勢でしょう！ 原作ではですけども！（当たられた原作知識が最近当てにならないんで自信ないですが！）

あと、それから元堕天使の美少女高校生！ あなたはもう、この世界観にはならない人です！ 一人だけ別世界観の住人です！

自分のあるべき世界観へ帰っておしまいなさーっつい!!!

「と、言う訳ですので私たちはイツセー君たちが巻き込まれているであろう戦場に赴きますけど、セレニア様は如何なされますか？

ここで帰りをお待ちしていただけるのでしたら、護衛に私たちの内一人は必ず残しますけれど・・・」

「・・・行きます。邪魔なうえにお荷物でしょうけど、ついて行かせて頂きます・・・」
放っておくと絶対やり過ぎちゃう人たちですからね、この人たちって・・・。

・・・尤も、私が付いていったぐらいで結果が変わるとは到底思えません、万に一つでも死人を出さずに済む可能性があるとするなら賭けるしかない今日この頃な私で

す。

「では、各々方。討ち入りに参るとしまししょうか……。『グレーター・テレポーターション』！」

「母上をさらったのはお主たちか！ 母上をどうするつもりなのじゃ！」

「母上には我々の実験にお付き合ひして頂くのですよ。スポンサーの要望を叶えるため、と言うのを建前に使つてね。……おや？」

「……あれ？」

「えっ!? セレニアたち……一体どこから?！」

——変な色に包まれてる渡月橋のほぼ中央に出たと思つたら、橋の両側で兵藤さんたちと、学生服っぽいのを着た初対面の誰かさんたちが睨み合つてる状況に出ちゃいましたね。

これはおそらく……ものすつごい場違いな状況下に介入しちやったこと疑い有りませんね！ どうしましょうか!? 私無能で無力なんで何にもできないんですけれども!?

「これはこれは……君たちのことも聞き及んでいますよ。それに調べさせてはみていた。混沌帝国と名乗る我々以外の人間勢力を率いておられる『銀の魔王姫』殿でしたね。お目にかかれて光栄の至り。」

正直なところ、貴女たちに関しては居場所どころか拠点さえ把握できずに難儀していたので出向いてきてくれて助かりましたよ。おかげで手間が省けました。心の底からありがとうございます」

「……え？ なに、その二つ名……。過大広告過ぎる上に恥ずかしすぎるんで、心から取り下げて頂きたいですけど……」

「え。今気にするべきなのそっち？」

なぜだか頭目二人で顔を合わせて、頭に？マークを浮かべ合う展開になってしまいました。

だって、あなたたちの名前すら知らない私にとっては重要度上なんですもん。

敵の情報を知らないうちは、何をどう基準にしても意味ないですし。自分の知ってる知識だけを基準とした「自分はこうだから、敵はこうに違いない」なんて決めつけは固

定概念を生み出すだけですし不利になる一方でしょう？ 馬鹿らしいのでやりませんよ、そんなもん。

戦いは敵有つての物なんですから、敵を知るまでは戦端なんか開けません。敵の強さがわからない間は、自分が上とも下とも言い切れないのが普通なのです。

自分は『正しい』と信じる気持ちと、自分は『間違つてない』と信じただけの願望。その二つの間には一億光年以上の距離があり、混同するのは危険極まりないのです。

．．．だから今の私は、一人で内心アワアワする方が優先順位的には上。あわあわ、はわわ。

「その槍．．．最強と名高いロンギヌスが一つ、『トゥルー・ロンギヌス』ですか？　では、あなたがカオス・ブリゲード軍所属『英雄派』を率いるリーダー曹操ですね。」

「実に思想が私好みでしたので鮮明に記憶していますよ」

「そちらの方こそ、腰に帯びたる軍刀の禍々しさから見て只者ではありませんまい。察するに、赤龍帝を覚醒させる際、総督殿に捨て駒として使い潰された後に奮起された思考の墮天使レイナー殿とお見受けしましたが、如何かな？」

「如何にも．．．と、言いたいところですが一つだけ訂正を。——その名は種族と共に捨てました。」

今の私は一人の人間、天野夕麻です。それ以下でも、それ以上でもありません。お聞

「違えないように願いますよ」

「承知した。訂正された者が言い間違えただけで殺されかねない意志の強さに敬意を表して、今後はあなたのことを天野夕麻の名で呼ばせて頂きましょう」

——そして、なんだか意思疎通ができてるっぽい敵リーダーと、味方サブリーダーのお二方。そして状況について行けずに置いて行かれる味方リーダーの私です。

うん、戦力的には役立たずだから教えとく必要なのはわかるんですけど、最低限度の状況説明ぐらいはしてもらいましょうか。

普通のバトルファンタジーに出てくるおバカ主人公でさえ、それぐらいに待遇を敵から与えてもらっているんですからトリック・オア・トリートです！

「挨拶が済んだばかりで早速なのですが。——確認したいことがあります。

先ほど、そこにいる狐のお嬢さんが言っていたことに相違ありませんか？ 曹操。

たしか、彼女の母親を誘拐して実験に使うとかなんとか・・・」

「如何にも。彼女には我々『人間』が『人間としてどこまでやれるか』を試すため、神を悪魔をドラゴンを墮天使を、その他諸々の超常的存在に勝つために必要な実験材料になつてもらおうつもりでいる。」

『敵を知り、味方を知れば百戦百勝危うからず』・・・敵のデータを可能な限り集めてから戦うのは基本中のきは——」

「・・・情けない。情けなさ過ぎますね貴方たちは・・・」

「——んでしよう・・・って・・・ん？」

天野さんが纏っていた空気が変わったのを察したのか、曹操さん(?)とか何とか呼ばれてた男性が警戒したように槍を構えて視線を鋭くしながら彼女を見据え、対する天野さんは苛立ちと哀れみの視線で彼らを厳しく睨み付けながらも静かな歩調で歩み出し、コツコツと靴を慣らしながらゆっくりと諭すように彼ら相手に話しかけられます。

「自分がこれから何と戦い、何を斃すのか。それを知るのは大事なことです。その為に子供の母親を用いようと画策するのは戦の習い。むしろ子供には手を掛けなかった誠実さは賞賛されて然るべきものだとして私が保障致しますよう。」

「ですが——」

「敵に勝つため敵を利用し、敵を知るため敵を使い、敵から得た情報で敵に勝つ・・・そこまではよろしい。」

ですが、その為に敵の子供から親をさらって実験に使うとするなら、それはただの人体実験。弱き側が強き側に勝つため、非人道的行為に手を染める己を自己正当化する方

便に過ぎません。

大義とも正義とも、ましてや英雄などには程遠い……」

「敵に勝つため敵を使い、敵を知るため敵を用い、敵から得たデータを元にして敵を倒せさえすれば自分たちの勝利だ、勝つた方が強くて上だ、手段も経過もどうでもいい。勝利が全てを正当化してくれるであろう。」

『なぜなら自分たち人間は敵である異種族よりも弱く生まれついているのだから』——自らの力を信じて天に打ち勝ち、自らの存在を世界に示し、認めさせる大義のための戦争を主導する者たちが唱える理屈としては卑屈すぎる」

「天を落とすための戦で、天に縋って打ち勝つことに何の意義がある？ 天を相手に、天に勝たせてもらって何が嬉しい？ どこが誇らしい？」

「神を殺すのに神の力を使うのはいいでしょう。悪魔を殺すのに悪魔の力を使うのもいいでしょう。」

ですが、そこには確固とした『己』が無ければいけない。子供を泣かせて「所詮は敵だから」と笑う自分が英雄だなどと嘯くようになってはならない。

力は力、敵を倒すための物であれ、味方を癒やすための物であれ、目的のために存在する物を目的を成すため使うとするなら、それは等しく道具の一つに過ぎません。道具は使えさえすればそれでいい。

道具に振り回されて己が通すべき道と信念を見誤る者は種族にかかわらず英雄にならない。罪を罪として背負いながら歩めぬ者に勇氣ある者『英雄』の名は重過ぎる」

「種族、階級、知恵、力、おっぱい……どれでもいいし何でも構いませんが、敵を倒すために使うとするなら全ては道具としてのみ見るべき物。道具を使つて事を成すのは自分自身でなくてはならない。」

自らの願つた夢を叶えるため、他人を利用するし続けて最後のとどめだけ刺して得たハッピーエンドで貴方たちは満足できるのか？ 世界から卑劣さと狡猾さだけを認めてもらえて嬉しく思えるのが自分だとしても言うつもりなのか？

敵より弱い自分が敵に勝つため外道に落ち、その現実から目を逸らしる口実としての大儀に逃げ続けて一体どんな夢を叶えるつもりでいる？ 血の色をした悪夢を見るため血まみれの英雄となるのをそんなにまでして望んでいるのか？

『戦争だから、勝つためだから』と自分を誤魔化し、信じる真を切り売りしながら手にした勝利の先で、あなたたちは一体どんな未来が待っていると世界を相手に叫ぶつもりでいるのだ」

「気に食いませんねえ。喝を入れて上げるとしましょう。殴るのが好きな訳では決して

ありませんが、そうしなければあなた方の輝きは取り戻せないと信ずるが故に」

「『終段顕象』」

・・・そして現れる、デツカすぎる金色ドラゴンさん。

なんか見慣れた宇宙まで着ちやいましたけど、息できてる辺りはスゴいなあー。さすがはファンタジーだなあ、うんうん。

「・・・で、コレ何?」

目を眇めながら訊く私。答え如何ではグーで殴ります。利かなくても人として殴ります、絶対。

「『黄龍』と言います。王都を守護する神獣であり、星の血流とも言うべき地脈が具現化した存在です。長さは大凡、関東平野にとぐろを巻けるぐらいの大龍神クラスで、今私たちがいる頭頂部は成層圏に達する程度かと」

世界観超越しすぎるにも程があるし！ ドラゴンが主役の作品になんて生き物呼ん

で来てんですかこの人は————っ!!??

「世界の悪意を、不条理を否定するため自らもまた悪意に染まり、同類と化す。

そんな人の迷いを払うのであれば、汚辱に塗れた敗北の人生から救い出そうとするのであるならば。彼らに道を指し示し、導く光は聖なるものこそ望ましいでしょう。

彼らが本当の意味で天を落としたいと欲するのであれば、まずは天の高みを知り、その圧倒的力の差を見せつけられても、負けず挫けず泥を舐めながらも立ち上がる強き気高い勇氣こそが必要なのですから……」

——その頃の地上では。

「な、なにいいいいっ!? こ、こんなものは知らない! 聞いていない! 俺たちはグレートレッドを喚ぶつもりで、いったい何を呼び寄せてしまったんだああっ!!?」

「ちよ、ドライグ! ドライグさあああつん!!? あのドラゴンなに!!? あの金ぴかドラゴンなに!!? デカ過ぎちまって俺の拳が絶対に届かない高さにまで夕麻ちゃんたちが行っちゃってるんですけども——っ!!?」

『し、知らん知らん知らん! こんなドラゴン見たことないし聞いたこともない! ま、

まさか俺の知らない未知のドラゴンが存在して死いたのか!? 俺たち二天竜は最強の存在ではなかったと言うことなのか————っ
!!!!!!?」

んで、また成層圏。

「少々痛いかも知れませんが、天罰靦面と言う奴です。良薬は口に苦いと言いますから、耐え凌いで生き延びてください。それが出来なければ貴方たちに英雄を目指す資格はありません」

ちゅど—————っん
!!!!!!

「……よし」

「よくない」

すばこん。

軽く手ではたいてツツコミ入れます。（でも身長的に後頭部は無理でしたから、二の腕にです）

「——良薬も何も、殺してどうすんですか!? あれ直撃したら京都一帯が吹き飛ぶ程の

威力ありましたよね確実に!! あの周囲には兵藤さんたちだっっていたんですよ!!」

「ご心配なく、セレニア様。峰打ちですから」

峰打ち?! 龍が口から発射する雷の峰ってどこ?! そんな部位あったんですか?!

「悪魔の強靱な肉体ならば、ギリ耐えきれられる程度にまで威力を押さえさせて発射させております。吹き飛ばした京都もドリムランドで拡張した疑似京都の街中だけに被害を押さえ込みました。悪魔の体力なら夜までに回復して戦えるようにはなっていることでしょうか、問題ありません」

「・・・い、いや、問題しかないような気がするのは私だけなのでしょうか・・・?」

「疲れ切って消耗した中だろうと、戦う力を残しているなら戦うべきです。それができない程度の軟弱者では無いと私はイツセー君たちを信じております」

「・・・もし、死んじやつてた場合には?」

「それまでのことかと」

・・・容赦ねえですね、この人の信頼って・・・ん?

「ちよつと待ってください、天野さん。今あなた、『悪魔ならギリ耐えきれられる程度の威力』と仰ってましたけど・・・曹操さんたちは? あの人たちって確か、人間・・・」

心の中で盛大に冷や汗垂らしまくってる私からの質問に、天野さんは「ふっ」と慈愛に満ちた優しい微笑みを浮かべられて。

「悪魔に勝とうと志す者たちです。悪魔が生き延びれる攻撃で死ぬようなら、口先だけでも程があります。大言壮語だろうと言ったことには責任を持ってもらうのが混沌帝国の流儀というものです」

「・・・・・・・・」

「戦争ですからね。私は私の価値観と信念を力によつて彼らに押し付けることを一切躊躇うつもりはありませんし、彼らもまた傲慢な神の視点で自分たちを見下してくる私のことを許すことは決してないでしょう。それで良いのです。」

覇氣と覇氣がぶつかり合い、善悪定かならぬ境地へと至り、輝きと呼べる全てを余すことなく現出せしめる。

何でも良いですし、誰だろうと構いません。願う真が胸にあるなら、ただひたすらに夢を目指して走り続けてくれさえすればそれでよい。

躓き倒れて、泥を舐めようと何度でも立ち上がる尊き姿は種族や身分に関係なく美しいことに変わりないのですから」

「なぜならば。悪魔だろうと天使だろうと人間だろうとアメンボだろうと、諦めなければ夢は叶うと信じて生きているのですからね！」

悪行を正当化する安易な道に流されることなく、胸を張って己の人生を走破できる自分自身の可能性を思い出して欲しいですから！ 私はいつでも彼ら、夢を追う若者たちの側で見続けていたいと願ひ続けて生きているのですからね!!」

「いいですか皆さん!! 先達の示した道を乗り越えるために忘れてならない物……。

それは、自分を信じて貫き続ける勇気です!!!

強敵を前に信念と正義に恥じることない戦で勝ちを目指しましょう！ それこそ真の勝利と呼ぶべきもの!!

己を否定した世界に自分と言う存在を力づくで認めさせたいと願うなら、己の腕一本で事を成す度胸と勇気ぐらい見せつけてからにしなさいああああついで!!!」

つづく?

45話「若手最強決定戦にスポット参戦、決定です」

それは英雄派さんたちとの戦いを終えてから少し経ったイゼルローン要塞、皇帝執務室でのことでした。

「私たちもレーディングゲームに参加・・・ですか？」

「はい。グレモリー眷属からの正式に依頼です」

天野さんが持ち込んだ話には、私は小首をかしげざるをえませんでした。

今更言うまでも無く悪魔さんたちにとってレーディングゲームは、大変に名誉あるバトルゲーム大会です。そこに私たち外様を参加させるとするのは、元人間とは言え悪魔に生まれ変わることを望んで成った転生悪魔の兵藤さんたちを参加させるのとは訳が違いますからねえ。・・・どういう事なんでしょうか？

「ご存じの通り、今までのレーディングゲームはチーム同士が全員で戦う合戦方式でした。」

多対多で戦い合う場合は相手の人数が多かろうと少なかろうとルールの問題はありませんが、今回はプロリーグと同じ形式をとるということになり、能力だけではどうにもならない人数が勝敗に大きく影響してきますから・・・」

「人員面で不安がある、と?」

「はい」

アツサリと首肯して肯定される天野さん。

「今回のレーディングゲームで採用されるルール方式は『ダイスフィギア』。

キングが振ったダイスの目の合計で試合に出せる選手が決定され、出た目の数と同じ価値をイービルピースの合計で算出されると言うもの……まあ、平たく言えば引いた資源カードをやりくりして、ユニットの生産コストと比較しながら効率よく勝ちましょうというナントカウオー的なゲーム大会だと思えばよろしいかと思われませぬ。戦争否定しているはずの陣営同士がやり合うゲームの割にはですけれども」

相変わらずぶっちゃやがりますね、この人は! しかも分かり易いのが逆に腹立たしい!
い!

なぜだか世界観の壁を越えて存在している、超人気の名作ロボットアニメを題材にしたネタは卑怯だと思えます!

「スポーツと言うより、文字通りのゲーム形式なゲーム大会な訳なので、それ自体は彼ららしいと言えばらしいのですけれど問題もあります。それぞれが割り当てられてる駒によつて消費イービルピースが決まっていると言う点と、連続して同じ選手を試合に出すことは出来ないという点の二つがそれです。つまり……」

「同じ駒の選手が1人ずつしかいないグレモリー眷属では、選べる選択肢の数自体が少ない。そして同じ選手を二度出してはいけない以上、場合によつては数が合わなくなる可能性がある・・・そういう理解の仕方では間違つてませんかよね？」

ニツコリ笑顔を浮かべることで肯定の代わりに返事としてくれる天野さん。

「今回に限り、数合わせで他のチームから借りてくると言う手も取れなくはないのですが、彼女の性格を鑑みますと・・・」

「どう考えても無理でしょうねえ、彼女がアレでは・・・」

苦笑気味な天野さんに、私も似たような無表情を返すしかありません（動かしたいけど動かない転生体の与えられてる肉体です）

グレモリーさんは良くも悪くも人の好き嫌いが激しすぎる傾向にあり、能力よりも人柄で自分の眷属になる人を選んでしまう、支配者としては欠点にしかならない悪癖の持ち主です。

オーベルシュタイン元帥じゃありませんけど、AにはAに向いた話。BにはBに相応しい任務というのがあります。

自分の好みに合うか合わないかだけで配下を選んでしまうと、配下に選ばれた人材が主の意向に沿う形でしか意見を述べなくなり反対意見が出にくい状況を作ってしまう。それが間違いだと分かっている間違いを指摘できない訳ですから、参謀が参謀として

まともに機能しない役立たずと化し司令官を頭脳面で補佐する人がいなくなる。

結果、どこぞの大日本帝国みたいな個人的戦闘力は高いけど上意下達だから負けました、なんてことになりかねない。・・・やっぱり悪魔さんって長生きなだけで学べない種族なんじゃないでしょうか？　なんとなくビミョ〜。

ま、それはともかくとして。

「それで数が合わなくなつたときの特殊ルール用として、余所から誰かたちを呼んでおくというのは分かります。・・・ですが、なんで私たち？」

元人間ばかりな上に、天使ですぜ？　一応は、ですけれども。

「特例で認められた特殊ルールが、いささか奇妙でしてね。

ピンチヒッターとして参加できる外部勢力からの選手は、通常ルールで選ばれた駒の半分まで価値を下げてから参加しなければならない、と言うものです。

このルールの意図するところは間違いない・・・」

「私たちの公開リンチなのでしようねえ〜。魔王陛下も随分と納得させるのが面倒くさい部下やら重臣やらを配下にお持ちのようで。

あるいは対戦チームの背後に誰かいるのでしようかね？」

首をかしげて肩をすくめながら、私はテキト〜な推論を口にしてみます。

どうせ合ってるかどうか確かめようがなく、確かめる意味すら無い推測なんてものは

テキトーに言つときやいいのですよ。面倒くさい。

現魔王陛下も、サイオラークさんて名門悪魔さんも謀略とか政治ゲームとかが好きタイプとも思えませんが、彼らだけで冥界の上層部が構成されてるなんてあり得ない。自分には不向きな問題が噴出した際に最小限の被害で解決できるよう、自分とは思考の異なるタイプの人材が多くそろっているのが組織上層部というもの。

誰も彼もが兵藤さんみたいだったら冥界中が「おっぱいおっぱい」言ってる悪魔さんで溢れかえったある意味で平和な世界が出来上がるのかもしれないませんが・・・「悪魔」？ 確かに欲望には忠実なのでしょうけど、本当にいいのかな？ 悪魔と名乗ったままで・・・淫魔の方が正しい気がしてくるんですけど、そうなると今度は陵辱エロ気世界みたいなのが出来ちゃいそうな気がしますからねー。うーん・・・下らないのに難しい問題です。

「門閥右翼が崩壊してサーゼクス派が政治に中枢を握ったとは言え、寝返り組の中には単に戦っても勝てないから魔王に従う道を選ばざるを得なかった中堅、弱小貴族派諸侯も多数参入しているでしょうからね。その手の輩は明確に反対意見を出すでもなく、陰にこもって嫌がらせに徹してくるからやりづらい」

「なるほど。つまり、成り上がりのイツセーくんたちが名門に勝つのは立場上許してやるけど、なんかムカつく。せめて誰か適当な悪魔以外で偉ぶってる奴らを合

法的に叩きのめさせて、腹いせに恥かかせてスッキリしたいよー！つてえ、訳ですな！
さつすが悪魔！ 考えることが卑屈で他人よがりな上に小物臭い！

やつぱり『人間は欲望優先で戦争ばかりしている醜い生き物だー』とかガキみたいな屁理屈こねてる苦勞知らずのお坊ちゃん方は考えることが違いますなー。生きていく手段に美醜持ち出すとかマジあり得ないんですけど。社会人の苦勞をしないで生きても生きてける食わない種族はこれだから」

ゼノビアさんが辛辣な意見を言つて、続く紫藤さんがさらに辛辣な意見を付け加えられました。・・・この人たち、時が経つごとに性格悪くなつてつてませんか？ 最近ちよつとたまに怖いんですが。

「実際問題、今回のゲームにはサーゼクス派とヴァール派との代理戦争という側面があるという話を耳にしました。そういうゴタゴタを可能な限り試合に持ち込ませないという意味では、今回の提案はそれなりに評価できると思われます。如何いたしましょう？ セレニア様。お受けになられますか？」

「皆さんさえよろしければ、私は出たいと思つてます。別に大した理由もありませんけどね。たまにはハイキング代わりに冥界貴族の皆さんをビックリさせて回るといっても悪くないかな、と」

「きひ☆ セレニア様も言うようになりましたね〜♪」

紫藤さんが茶化するのをガン無視して、私は実戦部隊の総責任者たる天野さんを見上げます。

「お願いできますか？ 天野さん」

「主命とあらば、喜んで。ジーク・カイザー！ ジーク・ライヒ!!」

『ジーク・カイザー・セレニア！ ジーク・ライヒ!!』

天野さんが言つて、残る2人が唱和して今日の会議はしゅーりよー。後は午後分の仕事があるまでお昼ご飯のためのお昼時間なので、皆さんそれぞれの好みに応じてバラバラに――

「よいしょつ、と」

ドン。

・・・バラバラ・・・に。

「・・・何やってんですか？ 紫藤さん・・・」

「ん？ あたしの魅力的なデカヒツプを、セレニア様の執務机の上に置いてある書類の上に乗せただけですけど、それが何か？」

「・・・邪魔です。お尻をどけてください。書類が取れない・・・」

「んん？」

「聞いちゃいねえ・・・」

いやまあ、実際にはちゃんと聞いているのも聞こえてないフリしてるだけなのも分かっているし、それが言いたいことがあるときにする彼女の癖だということも承知の上ではあるのですけどね？　ただ、どうしてもこう言うのには慣れないので出来ればやりたくないなあと。

「・・・で？　なんですか？　何か言いたいことがあるようでしたら聞きますが？」

「んん〜？　べーつーにー。ただ最近の天野閣下を見ていてセレニア様はどう思ってるの？　ちよつと思つてただけのことですよ〜？」

「心配してます。それが何か？」

「・・・」

相手の意表を突くことにより、それ以上の状況悪化を防ぐ戦法は効果を発揮し、紫藤さんは大きな目をパチクリさせた後、

「・・・素直すぎてつまんないーっ！　イツセーくんだったら狼狽え騒いで醜態晒して、バカにされて笑われる未熟な子供のカワイイを見せてくれるシーンのはずなのにーっ！！」

「あいにくと私は兵藤さんじゃありませんのでね。申し訳ありませんが、そつち系の期待には応えられる自信がありませんので、そういうのは余所に求めてください」

あと、お尻もどけてください。書類がと、取れないいいい・・・っ！！

「じゃあ、質問を変えます！ 天野閣下の何がどう心配ですか!？」

「ぜえ、はあ・・・小休止のため質問にお答えしましょう・・・。この前戦った英雄派の人たちに天野さんが最後に放った一言に関することがらです。けほっ・・・」

私が息切れゆえの咳しながら思い出すのは、京都で戦った英雄派の曹操さん。

戦い終わってあの人が帰ろうとしているときに、天野さんはこう言っていたのです。

『曹孟徳。あなたは言っていましたね? 「人間としてどこまでやれるか知りたい」と。』

「悪魔にドラゴン堕天使その他諸々、超常の存在を倒すことで自分たち弱い人間がどこまで行ける生き物なのか知りたい」・・・と。それに相違ありませんか?』

『そうだ。俺たちは人の身でどこまで行けるか知りたいだけだ。弱っちい人間が神をも殺せる存在に至れるのかどうか。それを確かめた——』

『それは、「神を倒せなければ自分たちの可能性を信じられない」という意味での言葉ですか? 「超常の化け物を倒すのは人間だから、超常の化け物を倒す以外に人間の計り方が分からないのだ」と。そういう側面がある主義主張だと言うことを承知の上で言っているのですか?』

自分の考え方が神をはじめとする頂上の存在を中心として形作れたものであることを知ったうえで、その論を正しいと、真実だと、この世の真理にしてみせると、貴方は

世界に向かつて断言することができるとですか？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・・・・やれやれ』

『別れの前に忠告しておきましょう、曹孟徳の血を継ぐ“だけ”の若者よ。あなたは先祖について大きな勘違いをしています。』

彼は自らの可能性を信じて時代を駆け抜けた。それ故の英雄です。天を落としたのは結果論ではありません。彼以外の者たちが彼を評価するポイントとして着目しているに過ぎないものです。

自分は天を落とせる男だと信じて貫いたからこそ英雄だったのが彼なのですから。

彼は天の理を自らの意思で規定しました。世に蔓延する、多くの人々が信じる天の絶対性も、至上価値も信じることなく、自らの信じる天のあり方こそが真に正しき天の在り方なのだと呼んで、天に押しつけて屈服させたのです。

彼は自らの意思と責任のもと、漢帝国の民すべてを巻き込む大乱を引き起こし、その過程で生じる犠牲を踏まえてもなお自分が築こうとする正しき世の中の方が価値があるのだと世界に向かつて吠えた大英雄だったのです。

断じて、世間の一般認識に反発してただだけの理屈屋ではありませんでしたし、他人

の成功した部分を摘まみ食いしただけの力を誇示する愚行は恥としか思わなかった事でしょう。

今頃はきつと、誘拐や人体実験を正当化するために自らの信じる理想と正義を使う情けない子孫の姿に、草葉の陰で歯がゆさに臍をかんでいることだろうと思います。生きてさえいたら自分がこの手で穢れた血を贖えるのに、と』

『正直に言いましょう。曹猛徳。

あなたが曹操孟徳の名を名乗られるのは私にとって——非常に不愉快です』

「・・・あの人は自分の過去に負い目がある人です。妬み憎んで嫉妬するばかりだった自分を正当化しながら生きてきた人です。

だからこそ、身の程知らずな上昇志向の持ち主には憧れますし、素直な賞賛と期待も寄せる。そして——」

それ故に、期待していた人が自分と同類だったと気づかされたときの衝撃にはヒドく弱い。

誰にも見向きもしてもらえないゴミの中に眠る宝石の原石だと信じて、ずっと守り続けて見つめていたいと願った存在が、研磨したら他より大きいだけの石コロだったと

知ってしまったとき。希望が絶望ではなく、失望が変わってしまったとき。

闇ばかり褒めていた人間が希望の光に憧れて、資格がないのを百も承知で手を伸ばし。

慣れ親しんだ絶望ではなく、今まで他人に期待してこなかったが故に耐性が低い失望に包まれたとき。

あの人は————「私は」どうして衝撃から立ち直ってきたかを考えると心配にもなるのですよ。

経験者としてはどうしてもね？

「ですので、今回のはまあ…天野さんへのプレゼントみたいなものですよ。サイオラীগさんという方が、天野さん好みの英雄であってくれるなら万事すべてが上手くいくわけですから」

「はあく、なるほどー。いろいろ考えてらっしゃるんですねー。さつすがセレニア様だー。」

「…でもさっ？」

「ん？」

「それでサイオラীগって人が期待外れだった場合…冥界どうなっちゃうんで

「しよつかね・・・？」

「・・・言わないでくださいよ、それ。せつかく必死に目を逸らしている現実なんですから・・・」

「最悪、冥界だったら被害が人間界側に及び心配ないし・・・なんて、考えてないんですからね!!? 勘違いしないでください! 凶星を突かれてセレちゃん泣いちゃうかもしませんよ!!?」

「つづく」

「セレニアと甘粕夕麻の思想変化を解説:

「例えとしてアクセラレーターを使用。」

「俺はレベル5で最強だァーっ!」

「上条さんに敗北。」

「・・・正義ってすげえんだな。でも俺殺しすぎたしな。正義に憧れる悪ってところか」

「セレニアと夕麻の場合」

「人間なんて所詮こんな生き物さ〜 (子供観)

「レイナーレ敗北。」

「セレニア、ヤン提督との出会いと理解。」

「・・・人間は素晴らしい！」

*正義と悪も含めて人間が作り出した物全部を人の手柄と考えちゃった極論キチガイ二人組。

46話「異種族の大物たちと私たち帝国軍と」

「お待ちしておりました。この度のゲーム期間中、皆様方の案内役を務めさせていただきます。以後お見知りおきくださいませ」

冥界に到着した私たちを迎えてくれたのはドリルツインテールの金髪お嬢さん。

名前を名乗らないのはいいたくない事情があるから・・・ではなくて、おそらく自分の名前は言うまでもなく知ってて当然の環境で育ってきたからきている癖故なのでしょう。悪意もなく含むところも感じない好感の持てる少女ですが、やや世間知らずで世慣れていないところがグレモリーさんに似ている印象も受けました。存外親戚か何かなのかも知れませんがねえ。

「試合開始は夜からになります。それまで会場隣のホテルにある専用ルームにてお待ちくださいませですわ」

そう言つて比較的近い距離を移動するのにわざわざ車を使うところに、実用主義一点張りの帝国式とは違うんだなあと感じさせられながら連れてこられたホテルの一角。

そこで兵藤さんたちと合流した私たちですが、いきなり問題とも遭遇してしまう辺りが混沌帝国軍の悪癖というかなんと言うべきなのか。

「おやおや・・・冥府に住まう死を司る神、ハーデス殿のご登場か・・・」

アザ・トースさんが言うのが聞こえたのでそちらを見ると・・・モモンガ様？
じゃ、ないですよねどう考えても作品的に。装備も違いますし別人でしょう間違いない。

とは言え設定としては似ているからなのか、見た目も共通点がいくつか見受けられる存在が数名の部下らしき黒ローブの団を引き連れてこちらへ近づいてくるのが見えました。

魔術師っぽい格好をした大柄な骸骨の魔王様か何かみたいです。魔術師って言うか、呪術師と言った方が正確な気がする格好ですけど、細かい違いなんて私は知りませんのでね。

「悪魔と堕天使を嫌う貴方がここへ来るとは珍しいですな」

『ハツハツハ。鴉めが最近なにやら上でピーチク鳴いて五月蠅いので、視察がてらにと
な』

そう言つてアザ・トースさんに挨拶を済ませた骸骨魔術師ならぬ呪術師さんは、兵藤さんへと目玉のない視線の向きを変えられて。

『ウエルシュ・ドラゴンか。バニシング・ドラゴンと共に地獄の底で暴れ回っていた頃が懐かしい限りだ』

「……………」

強い視線で睨み付けながら、それでもグレモリーさんの顔を立てるゲームであることを弁えて黙っていてあげてる兵藤さんはさすがです。大人になりましたね、貴方も。

——それに引き換え、最近ますます好戦性を沸騰させまくってきている内の幹部さんたちときたら……………」

「はっ！ 父親追放戦争の折に不毛な地下世界を恩賞として兄から与えられて文句の一つも言えなかった腰抜け神が蜥蜴相手になら随分と偉そうなことだ。それとも蜥蜴本人ではないからかな？」

自分より弱い相手にしか強く出れない無能な王は種族が何であろうと無様なものだ……………あ痛っ!？」

「……………配下の者が失礼しました。この非礼は後ほど正式に謝罪させていただきますので、この場はこれでご勘弁のほどを」

相手が不愉快そうなオーラを出し始めてたので、私はゼノヴィアさんを蹴っ飛ばして修正してあげてから、相手である冥府の王様だかなんだかに頭を下げました。

最近見つけた私の転生特典(らしきもの)、一応は皇帝という地位にあるためか部下に對しては罰則として痛みを与えることができ、軽くこずいただけでも相当に痛いみたいなのですよ。

まあ、あくまで罰則用なので殺すとかは絶対に無理な能力みたいなんですけど、暴走を止めることぐらいには役立つ・・・かなあ？ 役立つってくれるといいんですけどねえ 本当に・・・。

『・・・・・・・・ふんっ！ まあよいわ。今日は楽しませてもらいに来ているのだからな。許してやる。せいぜい死なぬよう、以後は気をつけるがよい。今宵は貴様たちの魂を連れに来たわけではないんでな・・・』

そう言つて、鷹揚な態度で歩き去つてくれようとする冥府に住んでるとかいう神様の一種ハーデスさん。

『キングダム・ハーツ』の無様な終わり方をした人と同じ終わり方を連想しちやつてたことは秘密です。

「アンタも流れ弾に当たつて死なないよう気をつけてくださいね？」 今夜に限らず一度死んでる骸骨なんて殺す価値ない死体処理する趣味はアタシたちにはないもんで・・・・・・・・あ痛いっ!？」

「・・・・・・・・本当にすみません・・・・・・・・」

『・・・・・・・・(ムツツリ)』

「ふっはははははははっ!! やはりお前たちは面白いな兵藤一誠! それと、その仲間

「たちも！ あんなにも注目の集める場所で、あれだけのことを起こせるお前たちは、やはり未知のものを感じざるを得ないぞ！」

「はあ……」

「そう言つて私の肩を力強く叩いてくるのは、これから戦う当の敵チームリーダーで、サイラオーグさんその人。どうやら初対面の私たちに激励をしにくれたようなのですが。」

「そんな人にも絡んでしまうのが最近の私たち帝国軍が抱え始めている弊害、イチヤモン癩。」

「本当になんとかならないもんですかね、この人たちは。」

「はあ？ なに言つてんのアンタ？ そんなの空気読まずに好き勝手振る舞う礼儀知らずだったらいくらでも出来るわよ。ちょうど今のアタシみたいだね。そんなのにいちいち未知を感じてたら切りがない……あ痛あつ！」

「……いい加減にしてください紫藤さん。サイラオーグさんもごめんなさいね？」

「……」

「私が頭を下げると、相手の方も多少不快ではあったのでしようが大人しく引き下がってほくれたみたいです。」

「——いや、若い戦士たちが戦いを前に気が逸るのは悪いことではないさ。夜のゲーム

を楽しみにしている。それではな」

長居すべきではないと賢明な判断をされたからなのか、手をヒラヒラさせて早急に帰って行くサイラオグさん。

「・・・・・・・・」

その後ろ姿を見送る天野さんの瞳が妙に気にはなりましたが、私はひとまず黙っておくことにしました。

明確に問題を起こしている二人を目にした関係上、どうしても黙ったまま何もしてない人への対処が甘くなるのは人の性ですのでね。ご容赦を。

——そうして夜までの時間が過ぎ、レーディング・ゲームの時間が訪れます。

『あらためて、ごきげんよう皆様！ 実況はわたくし、ラウド・ガミジンがお送りいたします！』

『今夜のゲームのルールですが、レーディング・ゲームではメジャーな競技の一つ『ダイス・ファイギア』です。』

ただ、諸事情により今回に限り特別ルールが一部に適用されていますので、そちらの方をこれからご説明させていただきたいと思えます』

そんな感じで語られ始める、参加する側の選手たちの一員ではある私にとっては今更

聞くまでもない内容を、それでも念には念を入れて確認のためと、後は素直に礼儀を守るためという二種類の理由により拝聴した私。

・・・ただ、正直なところ最後にこの質問が来るのは予想外でしたけどね。

『——と、このような事情により人数限界の問題からグレモリー眷属側に急遽助っ人選手として駆けつけてくれたセレニア眷属の方々なのですが、当然ながらハンデキャップがあり、一度敗北を宣言したり戦闘不能になった場合には以降の試合に出ることはできません。』

それでも試合は続行され、最終的に人数とダイスの出る目が合わなくなった場合にはリーダーである人間族のセレニア様が選手として出場すると言うことになっていますが・・・本当にこれ、大丈夫なんですか？ 失礼ですが、危ないのでは？』

「問題ありません」

振られると思ってなかった質問なので多少・・・つか、めっちゃくちゃ問題ありません。くりな質問でしたが、それはあくまで質問されたこと自体が問題と言うだけのことです。

質問への答え自体はとつくの昔に私の心の中には出来上がっていましたから。

『なぜそう言い切れるのでしょうか？ 安全確認のため、理由をお伺いしても？』

「あり得ないからです。絶対に訪れるはずのない事態にまで万全の対応策を用意してお

く、無駄好きな責任者も珍しいでしょうか？ だからこそ私は安心してこの会場に選手として馳せ参じていただけるのですよ」

一瞬の沈黙。

その直後、意味を理解した観客たち全員からの圧倒的な野次とブーイング。

当然の反応でしょうね。私は彼ら悪魔の代表相手に、私の率いる元人間と元墮天使の連合軍が完勝すると宣言したわけですから。

「何度でも言いましょう。私たちはあなた方悪魔の代表チームに完勝します。

そして、もし私の出番が回ってくるのがあった場合には、大言壮語の代償として私の命ぐらいならお好きなように。ルールの問題ぐらいグレモリーさんがなんとかしてくれるでしょうからね」

そう付け加えると、今度は一斉に始まるサイオラーク陣営へのラブコール。

称えられてる方は迷惑そうにしていますが、それでもゲーム自体は盛り上がりましたし、悪魔たちの好戦性もいい具合に発散できたんじゃないかと思えます。

グレモリーさんたちにとってもヒール役は完全に私たちになったわけですからアウェーってことは全くなくなったでしょうしね。

「ずいぶんと派手にかましてくれたものね。おかげでこちらは冷や汗ものだったのよ

「？」

戻つてくると、グレモリーさんから揶揄されてしまいました。

まあ、確かに演出過剰だったことは確かですからね。謝罪しておきましたが、それでも言つてゐることに嘘はついていなかったのです、その点については謝罪の必要性はないでしょう。

「……どうして、そこまで言い切れるの？ 敵は……サイオラークたちは強敵揃いなのに……」

「………??？」

グレモリーさんが不思議そうな顔をして、不思議なことを質問してこられました。

どうしてもこうしても……ねえ？

「どうして……普通に当たり前のことを言つたまでなのでは？」

「……あなたたちが私たち悪魔に完勝することが当たり前と言うこと？」

「違います。彼女たちが私のために戦つてくれていて、私の背中を常に守つてくれるからです。

王の命は家臣に委ねられるものであり、少なくとも私の下駄はとうの昔に彼女たちの手元に預けてありますから、生きるも死ぬも彼女たち次第が当たり前なんです」

「——っ!!!」

「未熟を自覚していようと、相手が臣下の礼をとって王として遇してくれるからには、私は王であらなくてはなりません。」

皆を率いて戦陣に立つ力がない王だと自覚しているならば、せめて臣下の誇りを汚さないよう勝利を信じ、宣言し続ける。それが最低限こなしておくべき義務というものでしょう？

後は信じて任せるだけです。準備が終わって号令を下した後、王がやるべきことも出来ることも何一つ残っていないのが必勝の態勢と言うものだそうですからね」

そう告げて自分の席へ戻っていった私には、グレモリーさんの顔は見る事が出来ません。

ですから彼女がどんな顔をしながらこう言っていたのか、全く分かるわけがないのですよ。

「・・・簡単に言ってくれるわね、異住セレニア。見ていなさい、いずれ私は貴女を超える王になってみせるのだから——」

そんなこんなでレーディングゲーム開始です。

つづく

47話「異住セレニアの家臣として生きるとはこういうことだ」

そんなこんなで始まった、グレモリーさんチーム対サイラオーグさんチームによるレーディングゲーム。

第1戦目は、互いのナイトが登場です。

『第1試合！ グレモリー眷属から選ばれたのは木場選手！ 対するバアル眷属は……』
「私は主君、サイラオーグ・バアル様に仕えるナイトの一人。ベルーガ・フルカス！
私の愛馬、アルトブラウンの足は神速。木場殿、いざ尋常に勝負願いたい」

木場さんVS……ベルフラウ？さん？ 馬に乗って鎧を着ていてランスを持った文字通りの騎士さんとのバトルです。

速さと速さ、分裂と分身、長剣と馬上槍のぶつかり合いという王道中の王道を行く騎士同士らしい勝負でしたが、結果的には危うげも無く木場さんの勝利で幕を閉じました。

「ま、順当な結果と呼ぶべきでしょうな」

「そうなんですか？　ゼノヴィアさん」

私は傍らに座って高々と足を組んで観戦している黒く染まった聖剣使いさんに問いかけました。

なにしろ私やあ、バトルに関しての才能も経験も完全に皆無なド素人なので偉そうな評論はなんも出来ないですよ。いやマジでマジで。

「ええ。木場はかなり余裕を持って勝利したのに対して、敵は全力を出し切っていましたから。おそらく止めのバランス・ブレイカーを使わずとも問題なく勝てる相手だったと私は見ています。相手の意気に応じて礼儀で答えた・・・そんなところでしよう」

「ふむ。では、彼は甘いと思われませんか？」

「どうでしょう。剣士は自らの信念を貫き、剣で己の全てを体現する者。甘さがヤツの本質だとするならば、甘さを捨てたらヤツは却って弱くなるような気もします。

そもそも結果として勝利した後で、やり方が甘いなのなんだのといチャモンを付ける必要がどこにあると？　戦いは結果こそが全てでしように」

「そりやそうですね。失言でした、愚かな質問を撤回しましょう。私こそまだまだ甘いようですよ・・・」

ゼノビアさんの言葉でハッとさせられて、私は反省。

まさしく彼女の言うとおりであり、戦い方は結果を出すための手段でしかなく、甘さ

も現実論も勝利するために選ぶべき方向性の一つに過ぎません。

甘いやり方であろうとも、求めた結果を出せたら正しい戦い方であり。

戦場のリアリズムで戦って負けた人が、勝った人のことを『甘い』だのなんだのと既すのは、負け犬の遠吠えに過ぎないのですから。

勝つために戦うのなら、勝った方が正しくて負けた方が間違っている。．．．あくまで『勝つための手段』に限定した議題ではありませんけど、これもまた戦場のリアリズムです。敗者は甘んじて受け入れるしかないでしょうな．．．。

『サイラオーグ・バアル選手のナイト一名リタイアです！ 初戦を制したのはグレモリー・チーム！』

さあ、次の試合はどうなるのでしょうか!? ダイスシユートです!』

そして振られるサイコロ。出てきた目は．．．うん、読めませんね。冥界の文字はムダに凝りすぎていて読み辛いツス．．．。これ本当に学校造つたくらいで普及できるんでしょうかね?』

胡散臭い黒魔術儀式マニアでもない非知識階層にしてみれば『カッコいい気がするだけの象形文字っぽいナニカ』にしか見えないような気がするんですけども．．．。

『今度の合計は10! 両陣営、合計10までの選手を出させることになりました』

「ロスヴァイセ、それに小猫。お願いね」

「頼むぜ二人とも！」

『ええ（・・・はい）』

「・・・応援よろしくです」

固い決意を秘めてそのような声のロスヴァイセさんと、淡々としながらも明らかに兵藤さんを意識してるんだろーなーな塔城さんが選ばれました。

「そんじゃまあ、がくんばってね〜ン」

紫藤さんが椅子に座ったままヒラヒラと手を振って、文字通り『応援だけはしてあげる』感を出しまくって真面目そうな二人を「イラツ」とさせてました。・・・紫藤さん、わざわざ相手を苛立たせるようなこと言わんでもいいでしょうに・・・。

まあ、この人の場合趣味でしかないのではなんともしようがないのですが。

「ああ、でも一つだけ忠告。アンタたち二人はいつも気負いすぎてるのが弱点になるから、もう少し気を抜いてリラックスしながら戦った方がたぶん勝てると思うわよ？
これ、ゲームなんだからさあ〜。『絶対に勝たなくちゃいけない』なんてマスト・ビーは思考を限定して、視界を狭めて、選べる選択肢を少なくするだけ。

殺すための殺し合いじゃない勝負は、楽しんでやった方が勝つのがお決まりよ〜♪」

「・・・忠告をどうも。でも、私は私の出来ることをやるだけです」
そう言い残して試合会場へと向かう塔城さんとロスヴァイセさん。

そんな二人を見つめるためグレモリーさんたち全員が画面の方に寄っていて、椅子には紫藤さんだけが残っているのをいいことに私は彼女に近づいて。

「ダメですか？」

と、質問をします。

何がダメなのかといえば、言うまでもなく今出撃していったお二人、塔城さんとロスヴァイセさんの勝敗について『勝てないのか？』と言う意味でのダメのことです。

「ダメでしょうね。あの子たちは1試合1試合に全力を出すことばかりに囚われすぎです。あれじゃあ結果的にチーム総合で勝てればいいと思っっている相手には思わぬ隙を突かれて余計な損害を出しかねない。」

『一回こっきりの殺し合い』と、『次があること前提で戦う決闘ゲーム』の違いが正しく理解し切れていません。『戦場で勝って、戦略で敗北していた』典型例になる可能性が高いと思いますよ。私はですけどね？」

「ふうむ……」

「それに、彼女たちに限らずグレモリーたちは一人残らず『自分たちが格上の挑戦される方なんだ』っていう自覚がなさ過ぎます。」

格上相手に挑むチャレンジャーと、格下を迎え撃つチャンピオンとは当然戦い方も作戦目標にも違いが出るのが当たり前……グレモリーたちの謙虚さは今まで武器でし

たけど、今となつては盲点にしかかつてない。そこん所いい加減気づいても良さそうなもんだと思うんですけどね。

人類より格上の存在たる悪魔様とす・る・な・ら・ば☆

ニカツと意地悪く嗤つて、スタツカートをつけながら皮肉を口にする彼女は性格悪いなーと思いますけど、おそらくグレモリーさんたちへの評価は正しいのでしよう。

兵藤さんをはじめとして今までのグレモリーさんたちは冥界主流から見た異端であり、格下の存在でしたが、旧魔王派の壊滅と度重なる武勲によつて地位と立場は大きく向上し、今では『見上げられて』『打倒を目指される』『チャレンジャーを迎え撃つ側』に回つてしまつてゐる。

挑まされる側から、挑まれる上位者へと立ち位置が変化したのです。これまでは奢らずに成果を出しても『挑戦者としての意思を保ち続けること』が強さの秘訣になつてきました。これからはそれが戦況の誤認にも直結してしまいかねなくなつたのです。

格上相手ならば、『一人失つて二人倒せれば上等な戦果』の方法論が成立しましたが、それは挑んでくる格下の敵にとつても同じこと。

むしろ、『自分たち程度では二人で一人を道連れに出来れば大金星』・・・そういう風に自己評価してきている相手も出てくる可能性だつてあるでしょう。

ゲーム開始前に審査委員会が決めた評価だとサイオラ・グさんが12で、グレモリー

さんが8となつてましたけど、所詮は他人の評価。本人が『いや、自分の方が下で敵の方が上だ』と言い切り信じ切つてしまえるなら試合に参加するわけでもない部外者のヤジに価値などなくなるのは当然のことです。

敵と味方の強弱関係は、自分たちの側だけで完結するものではなくて敵あつての代物です。主観ではなく、主観と主観がぶつかり合つた末に結果として出るのが勝敗という答え。自分と相手が信じる『どっちが上か』への回答は最後になるまで誰にも分かりようがない。

『自分の方が格下のチャレンジャーだ』と一方的に信じ込みすぎるのは、『敵の自己評価なんか関係ねえ。俺がお前は格上だと言つてんだから格上なんだよ、テメエの評価は過小評価だボケ』——と相手の意思と、格上相手に勝つため積んできた努力の程を否定することにもなりかねない厄介すぎる、相手と自分の心の問題。

自分の主観だけで相手との戦力対比を決めつけすぎているならば・・・まあ、負けるでしょうね順当に。戦術レベルで勝つて、戦略レベルで敗北していた負け方で。

「・・・よかつた・・・ロスヴァイセさんが残つていれば、グレモリーはまだ戦えます・・・」
「ごめんなさい・・・小猫さん・・・」

「謝らないでください・・・。わたし嬉しいです・・・二人も倒せたんですから・・・」

・・・ほら、やつぱりねえ・・・。

『サイラオーグ・バアル選手のナイト、ルーク、各一名。リアス・グレモリー選手のルーク一名。リタイアです！』

第2試合を終えて、バール・チームは眷属が三名。グレモリー・チームは1名リタイア』

アナウンスを聞きながら私は思います。

——負けてますねえ・・・。

と。私の経験上、この世界の戦いにおいて必ずしも数は問題ではなく、質の方が重要となる場合がほとんどでした。換えが訊かない一点特化型のメンバーばかりが在籍しているグレモリー眷属の皆さん方は他の勢力よりもその傾向が強い。

第一、数の差を個々人の個性と質で補って一人も欠けることなく勝ち続けてこられたのは彼女たち自身。「一人減る」という心理的影響は実数よりも遙かに大きく出るのは予想に難くない。

・・・さて。こういう時一番影響でまくりそうな人は今どうなっているんでしょうかね・・・？

「冷静だね。小猫ちゃんがやられても、感情をあまり表に出さなかった」

「・・・悔しいさ。だけど、溜めようかなって思つて。こういうのは後で爆発させた方がいいだろう・・・」

木場さんと兵藤さんの会話が漏れ聞こえてきました。

なるほど、確かに道理であり冷静さを保てていると言えばそうなのかもしれませんが・・・しかしですな兵藤さん？

「とは言えこれ、ゲームですからねえ。試合会場に行つたら敵を倒すために戦うしかありませんし、勝とうと思つたら相手をボコるしかない試合方式でもあります。

味方が敵にやられない状況ともなると、相手が一方的にやられまくつてボコられるか降伏するかしろうって言つてるのとあまり変わらないんですけども・・・。

てゆーか、戦争ではないスポーツの試合で味方がやられて『後で倍返しだ!』とか言ひ出す人、初めて見ましたよ私・・・」

「仕方ないでしょーっ!! 俺男の子なんだから女の子の味方がやられたら悔しいの! わかつてよ男の気持ちと、ちよつとした下心!」

「今のよう口に出して言つてくれた時にはわかりますが?」

「ぐぬぬ・・・男のロマンがわからない女の子なんて大っ嫌いだー!!!」

「・・・イツセーくん・・・(T-T)」

実態は、まあこんな感じですよ。

所詮は女性の胸触ってパワーアップする、欲望の強さが強さの源な主人公さ、です。『現状ではグレモリー・チーム優勢ですが、まだまだゲームは始まったばかりです』アナウンズさんが言ってますけど……そもそもにおいて選手一人の価値が選手によって異なる試合形式の大会で二人や三人の違いって差と呼べるんでしょうかね？ 正直、たった一人の大金星で覆せる程度の優勢を優勢と呼ぶのは無理があるのではないかなと私は思う。

『では、ダイスシユートをお願いします。——出ました！ 今度の合計は8！

今回の数も選手選びの選択肢がいくつかありますが、誰が出てくるのでしょうか——

「先に宣誓する。ビシヨップのコリアナ・アンドレ・アルプスを出す」

アナウンズが終わる前にサイオラীগさんが出場させる自陣營の選手を指名して、スーツ姿の綺麗な女の人が出るようになりました。

対するグレモリー眷属は誰を出すのでしょうかね？

『おおーっと!! これは出場選手の予告宣言でしょうか!! サイオラীগ選手、その理由は!』

「兵藤一誠のスケベな技に対抗する術を彼女が持っているとしたら、どう答える!!」

「俺のスケベ技に対抗!!」

・・・・とか思ってたら、選択権そのものを奪われちゃいましたね。流石はサイオラーグさん、こういう場に慣れておられます。

もともと冥界のプリンセスと添い遂げることを夢見てて、成り上がりによる立身出世を目指してる現在人気沸騰中の『おっぱいドラゴン』が兵藤一誠さんです。挑戦されて受けないことは自分の夢が許してくれません。たとえ彼自身が許しても、世間が許してくれないでしょうからね。

今やヒーローになってしまった彼には、ヒーローとしての役割をこなすことが求められてしまってる。堅実に夢を叶えるため挑戦を受けても戦略的優先順位から拒否するという選択肢を取ることはヒーローの役割を拒絶して、民衆からの失望を買ってしまうことにもなりかねません。

特に今回の人は『最強の赤龍帝おっぱいドラゴン』が、おっぱいドラゴンたり得ている力の源『スケベ技』に対抗する術を持ってると宣言してきてる訳ですから、これで拒否すれば『おっぱいドラゴン』には弱点がある。その力は最強でも何でもないと自ら行動によって認めているのも同義となるでしょう。一体どれほど彼の夢から遠ざかるのか・・・見当もつきませんからねえ。

今までの戦いだったら公に出来ない政治的事情が多く絡んでいて断つても問題なかったんですが・・・公式戦な上に衆人環視の中ですからねえ。

負けても死なない、シヨ―としての戦いだからこそ断るわけにもいかないという、なんか色々矛盾を孕みくった状況下ですけど。ま、いつか。私関係ないですね。

他人の夢は他人が頑張つて叶えてください。私は知らん。

『ほう？ 面白い宣言じゃねえか。イツセー選手は女に対しては無類の強さを発揮する。』

対抗する術があるなら、見てみたいもんだ』

「先生……いいツスよ。俺、その挑戦受けます！」

オオオオオオオオオオオツ！?

湧き上がる観客。まあ、この前「おっぱいドラゴン」放送されたばかりですからねえ。実写で見れるのはそりや喜ぶでしよ普通なら。

庶民がテレビ好きなのは人も悪魔も変わらない♪

「……わかったわ、イツセー。行つて来なさい！」

「はい！ 兵藤一誠、行つて参ります！」

敬礼して、やる気十分で試合場へと向かっていこうとする兵藤さん。

『相手が誰だろうと負ける気がしない！』そう言いたげな自信が漲っているのはいいことなのですか。

「とは言え、事実上のグレモリー・チームが持つ最高戦力が、たかがビショップごときに

負けたりしたら恥でしかないんですけどね。

むしろ、パワーアップ前の悪魔化するときに使用した駒の数が同じなだけで、普通に弱い悪魔が修行して強くなっただけの相手と同格扱いしてしまうゲームシステムに不平等さを感じてなりません。ゲームなら今少し公平性を担保して正々堂々スポーツマンシツプに則っておこなうべきなのでは？

勝つて当然の相手に伝説のドラゴンぶつけて勝ち誇るの、権威を誇示することにしかならなそうで好みじゃないんですけども・・・」

「ですわね。初陣の私は下っ端でしたから別としても、私以降は名門と格上、聖書にも載ってる上級墮天使相手に連覇し続けた赤龍帝が相性的には有利な相手に少しでも遅れを取ろうものなら物笑いの種になるのが本来ならば当然のところ。

もしイツセーくんが不覚を取るようなことがあった場合には、私は二度とあなたを「おっぱいドラゴン」とは呼びません。『おっぱいドラゴン（笑）』と呼ぶことにします」「やめて夕麻ちゃん！ お願いだからそれマジでやめて!？」

ただでさえ恥ずかしすぎる渾名が、これ以上なく最高最悪に恥ずかしい名前に改名しちゃうの本気でやめてください！ 俺、お外に出歩けなくなっちゃうからね!？」

飛び出し掛けて、慌てて戻ってくる兵藤さん。

気持ちわかりますけど、仕方がありません。——事実ですから。受け入れなさい。

か龍とかに転生したぐらいでどうにかなるレベルとは思えねえー……。

『おおおっ！ サイラオーグ選手の挑戦を受け、ここで遂に『おっばいドラゴン』が出陣です！』

『おっばい！ おっばい！ おっばい!! おっばい!!! おっばい!!!』

「やめて?! 今はやめて?! 普段だったら嬉しい応援だけど今だけはやめて！ おっばい連呼しないで！ 戦う前から俺のHPは0にされそうになってるよ!」

観客の中にいた子供たちと実況による精神攻撃の一斉砲撃を受け、兵藤さんは逃げるようにして試合場へと転移。画面ないに映し出されたフィールドへと移動します。

そして彼と相手選手の試合内容と結果なのですが……これはヒドい……。ヒドすぎて言葉にならないとは、まさにこの事ですか……。

どれほどヒドかったとか言いますと。

「……なんだか、ヒドい試合だったね……」

と、兵藤さんの親友である木場さんさえヒドい試合と評するほどのヒドさでした。

「……俺だって悲しみに暮れてるんだ……」

絶対に、ブラジャーからのパンツなんだよ……っ!!」
俯きながら顔を暗くして、熱のこもった口調で呟かれる兵藤さん。

なんと言いますか……なんと言ってもいいのでしょうか……。ええっと、そのあのえ〜とお……。

「ないわー、今の止めの差し方はさすがにないわー。エゲツなさ過ぎるわー。

男の子の身体の中から飛び出た白いエネルギー源を、右ストレートで女のお尻の穴にぶち込んで喘ぎ声で啼かせながらフィニッシュとか流星にないわー。私でもやらないし、出来ないわー。

兵藤さん、マジパナいっす！ 今日から『おっぱいドラゴン』やめて『おっぱいドラゴン（ルビは変態）』と呼ばせて頂きます！ いやー、イツセー君マジリスpekt！

いよっ！ この女の敵！ ヒトデナシの女泣かせ！ 恋人いるのに好きでも何でもない出会ったばかりの女に美人だったら欲情できる最低最悪のクズ男！ イカしてる☆ 女の子を♡」

「やめて！ お願いだからもうやめて！ 責めないで！ 下ネタで弄るのやめて！ 死ぬ死ぬ俺死んじゃう！

これ以上イジメられたら俺、自己嫌悪で自殺しちやいそうな心境に陥っちゃってるよ

!? ドライグ化する寸前にまで追い詰められちゃってるよ!?

おっぱいへの愛しさと切なさで恥ずかしさで俺自殺したくなっちゃうっ!?

俺これでも女の子を泣かせないために戦ってるおっぱいドラゴンなんだよおおおおっ!!」

・・・そして、空気を読んで相手が言われたくない時に言われたくない言葉を直裁的な表現で言ってくることを好む紫藤さんは、他の誰よりもヒトデナシ。悪魔以上に人ではないです。

そんな感じで、サイオラーク・チームVSグレモリー勢&混沌帝国混合チームによるレーディングゲームは始まったのでした。まる。つづく

48話「リアス・グレモリーの眷属として『お前が本当に守るべきはナニカを考えろ!』」

「さて・・・そろそろ私も手柄首の一つでも取るため、出てくるでしょうか」

そう言つてゼノヴィアさんが席から立ち上がつて見せたのは、兵藤さんと敵のお色気キャラさんとの試合が終わつて次のダイスルールが終わつた直後のこと。

次の合計した数字は『8』。先の試合と同じ数字です。

ルール上、2試合続けて同じ選手は出場することはできませんので、必然的に傭兵ポジションで同じ数字を割り当てられてるゼノヴィアさんが数だけ見れば適役・・・と言ふことになりますからねえ。

「・・・そうね。お願いできるかしら? ゼノヴィア」

「貴様らとて別に、自分たちが体を張つて敵と戦い合う姿を特等席から見物させてやるため我らを雇つたわけではないのだろう?」

元より今回、我々は傭兵としてゲームに参加している身の上だ。正規兵の損耗を押さえるため捨て駒として前に出されるのが当然のポジションと承知の上で引き受けているのだから遠慮する必要はいささかもない。好きに使い捨ててくれればそれでいい」

「……………っ」

チームリーダーであるグレモリーさんが意思確認のためゼノヴィアさんに話しかけて、彼女の好みとは正反対の返事にやや鼻白まされたように続く言葉を飲み込まれながらも、慣れてきたのか直ぐに体勢を持ち直し

「…………それじゃあ、ここはゼノヴィアに任せるわ。後は——」

残りの数字分を満たせるメンバーを、自分の所の眷属から選出しようと振り返って最後の皆さんを見渡されました。

もともと今回のレーディングゲームはグレモリー眷属とパール眷属との試合であり、私たち混沌帝国はあくまで部外者の員数合わせ臨時メンバー。

足りない分は補わせるとしても、私たちだけで勝ってしまうというのは余り外聞もよろしくないですしね。

つか、そもそも家だけだと数足りませんし。少なすぎますし。ルークの駒と同等の数を割り当てられてるゼノヴィアさん程ではないにしても、紫藤さんも結構高いですから二人一緒の出場はよほど出目に恵まれないと難しそうです。

「ぼ、ボクがいきます…………」

そして、右手を挙げて立候補してきたのは意外なことに吸血鬼美少年とか男の娘の…………ギヤースカさん？でしたっけ？　なんかそんな名前の陰薄い人でした。

いやまあ、うちのメンバーがキャラが濃すぎるから目立てねえだけなんじゃねえかなと思わなくもない人ではあるのですけども、とにかく今までの戦いで取り立てて目立つた手柄のない人が自ら立候補されるとはちよつとだけ意外でしたね。一体どういう心境の変化があつたのでしょうか？ 興味がありません。

「ええと・・・もう中盤ですから、なにが起きるかわかりませんし・・・悠斗先輩とロスヴァイセさんは強いですから後半に向けて控えていただいた方がいいかなつて・・・」
「わかつたわ。それじゃあ、ギヤスパー。ゼノヴィアをサポートしてあげてくれるかしら?」

「・・・! はい! ぼ、ボク、男子だし、子猫ちゃんの仇を討たなきゃ・・・つ」

「いい気合いだ! 頑張れよ! ギヤスパー!」

「——はいツ!!」

「・・・」

「・・・ふーん、なるほど。そう言う動機でしたか。ギヤスパーさんも、男の子ですなえ。」

ゼノヴィアさんのにも表面上はなにも変わつて見えないながらも、なしかしら相手に対する評価に変化が与えられたのは付き合ひ長いとなんとなく分かつてきてしまうもの。

彼女の途中で彼に対するナニカに変化が加わったようで・・・少しだけ心配になってき
ちやいましたね・・・。

言うことは真面なのが多い人なんですけど、実は兵藤さんたち以上に根性論の剣士さ
んですからなあー、この人って。あんまし無茶させすぎなければいいんですけど・・・ど
うなんでしょう？ 全く以てわかりません。

「決まったか？ では行くぞ、ギャースカとやら。主への忠義のため敵将の生首を取る
ためいざ出陣だ！」

「はいッ!! ……って、ダメですよ殺したりしちや!? 反則じゃないですか！ 反則負
けになつちやうじゃないですか！

あと、ボクの名前はギャスパーです！ ギャースカじゃないですからね！ 間違えな
いでください本当に！」

「気にするな。言い間違えただけだ。それに元から大した違いはないから良いではない
か」

「良くないですよ！ 特にあなたの方の場合はスゴく良くないです！ なんか一度でも間
違った覚え方されちやうと、一生変な名前で呼ばれ続けることになりそうでスゴく怖い
んですから間違えないでください本当に！ お願いしますから!!」

・・・うぐ。

い、今まであんまり出張なかった人の割に痛いところを突いてこられましたね……さすがは原作主人公の仲間のお一人様です。私ごとき部外者とは言うことが違います。いやまあ、別に私も作為了にそうした記憶とかはないのですけど、なぜだか今一瞬だけ彼の言葉でグサリと来ちゃいまして。無意識の罪悪感というような感じのものが私の記憶を苛んでおり……えーと、なんて言いましたっけ？

例としてあげるとするなら丁度いい人がいたと思っただんですけど……えーと、うーんと……えーととおお……

「……プリーズ・キルミー（ぼそり）」

「そう。そうです。プリーズ・キルミーさんでしたね。紫藤さん、よく教えてくださいました。感謝です」

横からボソリとした声で教えてくれた志藤イリナさんのおっしゃられたとおり、彼女たち聖剣使い二人と出会ったばかりの頃に鉢合わせして、すぐさま退場させられてしまった変な名前の人、プリーズ・キルミーさん。

明らかに本名じゃないニックネームだと丸分りな名付けられ方なのですけれども、じゃあ本名はなんて言うのかと聞かれたら全く記憶にございませんな、実は顔すらよく覚えてない（たぶん）男の敵キャラクターさんです。

まっ、半年近く前に一回だけ出てきてアツサリと倒されてしまった敵キャラ——だか

何だったのか、よく分からない人の名前なんてそんなものです。

人は忘れる生き物ですから、その程度の相手まで覚えているのは今まで食べたパンの枚数すべてを覚えていられる人たちだけなのですよ。たぶんですけどね？ 例を挙げるとするならインデックスさんとか。

「わかった、わかった。では次から気をつけるとしよう。それでいいな？ 了解したら出撃だカスパー！ 四秒以内に戦闘準備を整えろ！」

「はいッ!! って、だから違——」

そして、言ってる途中で試合会場へ転送されていくギャースカさんとゼノヴィアさんのお二人でした。

——と言うわけでここからは視点変更して、場面も変わり、試合会場内から試合内容をお楽しみくださいませな。

『さあ、次の試合！ グレモリーチームはナイトと同格と認められた元聖剣使いのゼノ

ヴィア選手と、一部で人気のビショップな男の娘ギヤスパー選手が出場するようです！
対するバルチームは、ルークのラードラ・ブネ選手と、ビショップのミステイーナ・サブロック選手です！』

アナウンスが聞こえてきながら、ボクとゼノヴィアさんの二人は相手チームの選手と同じように試合会場へと転送されていました。

次の戦場は、岩がやたらと多い場所みたいです。

『それでは第四試合！ 開始してください!!』

コールが流れて、音も鳴って、いよいよ試合開始です!!

「・・・さて、ギヤースカ」

「は、はい？ なんですかゼノヴィアさん・・・？」

開始直後からコウモリに変身して敵を翻弄するつもりでいたボクは、横から掛けられたゼノヴィアさんの言葉に出鼻をくじかれちゃって思わずこけちやいそうになりながらも何とか姿勢回復に成功できました。

だから聞きます。彼女の言葉を。

「おまえ行つてこい。骨は拾つてやらんでも自動的に回収してくれるそうだから気にすることなく全力でな」

「……………はい……………?」

「……………今、なんて言いましたか? このお方は……………」

思わず心の底から相手に対する疑問を感じて睨み付けるように見上げてしまっていた相手の顔がボクの方へと振り向けられて、静かな口調で当たり前のように平然と彼女はとんでもないことをボクに命令してきたのでした。

「聞こえなかったのか? お前一人で行けと行つたのだ。私の目から見えてあの敵二人なら、お前の相手として十分すぎるほど役に立つと確信できたからな」

「なっ!」

「正気ですか!? この人は!」

「……………どうしたんだい? 先に仕掛けてはこないのかな? だったらこちらから先に始めさせてもらうとしようか……………ラードラ! 先に剣士だ。僕は準備を始める」

「了解……………」

事実上、目の前に立つ敵から無視されて放置された敵の方から、苛立ったように声が掛けられてソチラを見ると、見た目はひよろりとして弱そうだった男の人が目を赤く光らせた次の瞬間には筋肉を大きく盛り上がらせて巨大化していき、その姿はまるで……………っ。

「ドラゴン！ イッセー先輩と同じだなんて・・・っ」

ディオドラの居城でドライグと一体化した先輩と、酷似した部分を多く持つ姿に変化した相手選手の姿を見ながら僕は、リアス部長から聞かされたことがある話を思い出しました！

「たしかブネは、悪魔でありながらドラゴンを司る一族・・・！ でも、変化できるのは家の血を引く人の中でも限られただけしかないはずなのに・・・っ!!」

サオラーグさんは、その数少ない中の一人を鍛え上げて覚醒させたんですか!? だとしたら、こんなの相手にボク一人で勝ち目なんて絶対がない！ それなのに・・・!! 「どうした？ 行かないのか？ ドラゴンを相手に戦闘演習する機会など滅多にあるまい。

私に遠慮したりせず、丁度いい機会なのだし存分に胸を借りてくれば良いではないか。きっと今後の戦いにおいて、お前のためになる事を多く学ぶことができると思うのだが？」

あくまで他人事の口調と態度で、平然と無茶ぶりをしてくるゼノヴィアさんを見て、ボクは確信しました。

・・・やっぱり、この人たちを信じたりしちやいけなかつたんです・・・!! この人たちにとってボクたちはやっぱり——敵でしかないんだって!!

「あなたたちっていう人は・・・いったい、どこまで——ッ!!!」
怒りにまかせて名目上の味方に対して食って掛かろうとした、その時。

「なんだ。本当に行く気がないのか・・・ならばそれでいい。後は私に任せて大人しく見ている。直ぐに終わらせてやるから心配はない」

「・・・え・・・?」

怒鳴ろうとしたボクの横を自然体のまま通り過ぎて行って、軽い口調で勝利宣言を示て見せた彼女に僕は意表を突かれて啞然として、しばらく固まった後。

慌てて振り返って彼女の背中に呼びかけます!

「ま、待ってください! どういうことなんですか!? さつきと言ってることが真逆になってるじゃないですか!」

「別におかしくはなからう? お前はドラゴン相手の演習をやりたくないと言った。この試合で確実に勝ちを得ることこそを重要視した故での判断に基づいてだ。

ならば傭兵であり、雇われ者でしかない私としては、依頼主の要望通り敵に圧勝して勝利を持ち帰ってくるだけのことだ。大したことじゃない、すぐに終わる」

「そんな・・・っ!？」

ドラゴン相手に一人で圧勝して、すぐに終わらすなんて無茶です！ 無茶すぎます！
そんな無謀を許すわけには生きません！

だってボクは、グレモリー眷属の男の子だから！

「ダメです！ ゼノヴィアさん一人では絶対にいかせません！ 部長が勝つにはゼノヴィアさんの力が必要なんですから!!」

彼女の行く手に立ちちはだかって両手を広げてボクは断言する！

そうだ、部長がこのレーディングゲームに勝利するにはボクよりもゼノヴィアさんの方が絶対に必要なんだ！ それが今ハッキリと分かりました！ 疑っちゃってごめんなさいゼノヴィアさん！

あなたの力に対する圧倒的な自信が、その行動と言葉の根拠になってるんだって事に気がつかなくて・・・っ。

でも、だからこそゼノヴィアさんには絶対に残って勝ってもらわなくちゃダメなんです！ 彼女の言うとおりで一人で突っ込んでいって囿になるとしたらボクの方が適役だったんですから！

今の部長に必要なのは、弱いボクなんかじゃなくて強い力を持ったゼノヴィアさんです！ 彼女の力さえあればこのレーディングゲーム、部長たちが勝つ確率を大幅に上げ

ることができるとはから!!

ボクが許される限りの時間で可能な限り短くまとめた今の言葉をゼノヴィアさんに伝えたところ、彼女は困ったように頭をかきながら「……あのなあー、ギヤスパー……」と、僕の名を呼んでくれました。

今度は間違えずに呼んでくれてたんですけど、いっぱいいっぱいになっていたボクの頭でそのことを理解するのは無理だったみたいです。

「お前はなにか勘違いしていないか？ このレーディングゲームは所詮、お遊びのゲームだぞ？ そんなものの勝敗にこだわりすぎて一体何の意味がある？」

負けても死ぬ心配のない戦争ゲームの内に負けを経験しておけるなど、願ってもない好機だとは考えないものなのか？」

「遊びのゲームだなんてそんな……つ。たとえ今までやってきた他のゲームではそうだったかもしれないけど、今回のレーディングゲームだけは違います！ これは冥界の在り方の未来がかかっている大事なゲームなんです！」

人間であるゼノヴィアさんから見れば、たしかに遊びなのかもしれないけど、でも違うんです！ 冥界の住人であるボクたち悪魔になら分かれます！ このゲームは絶対に負けちゃいけないものなんだと言うことが！ だから!!

「これからも続くであろう、カオス・ブリゲードとの戦いでは負ければ死ぬのだぞ？」

「お前も、リアス・グレモリーも兵藤一成も一人残らず、負ければ皆死ぬ戦いがこれからも続くのだぞ？」

「それでもお前は、負けても死ぬわけじゃない遊びのゲームの勝敗を学びよりも優先すると、そう言いたいのかギヤスパー」

.....
え.....?

ボクは思わず相手の顔を見上げてしまつて、真意を測りかねざるをえませんでした。相手が一体なにを言っているのか、まるで理解できなかったからです。

「臣下というのはな、ギヤスパー。ただ主に言われたまま命じられたまま、求められた勝利を取ってくればそれでいいというものではなく、任せられた役割だけを忠実に果たすだけで十分というわけではないのだ。」

時には最終的な勝利を主にもたらすため、主の意に反して敗北を甘受せねばならぶこ

とが往々にして存在する者たち、それが臣下だ。

たとえ一時的な敗北と不興を主にもたらしてしまいう事になろうとも、その敗北で得たナニカにより負ける以前よりも優位な状況を作り出せるようになる、と確信できるのであるならば、一時の不興、味方からの侮蔑や罵倒ごとき耐え抜いて更なる飛躍を主にもたらすことこそ臣下の道。飼い犬根性と一緒くたにしてくれるなよ？ ギヤスパー」

「……ッ!!!」

「たかがゲームの勝敗など、どうでも良い。命のかかった戦いで負けて主の命に危険が及ぶ危険性を遠ざけられるなら使い捨てるのが当然の茶番でしかない。

主にゲームでの負けをもたらさず代償として、必ずや真剣勝負で勝利をもたらせ。ゲームの敗北でこうむった不利ごとき敗北から手にした力で覆して見せろ。

『誰にも負けたくない』だの『絶対勝ちたい奴がいる』だのと、お前にとっては大事な『男の娘の意地』など問題外だ。

自らのことより主に勝利をもたらす方法を考えられるようになれ。主のために自分が何をでき、何を出来るようにならなければいけないかを考えない臣下など役には立たん。その為なら一時の恥も屈辱も喜んで受け入れられるようになれ、主のために。

そうしたいと思える主に忠誠を尽くせ。そうしたいと思える主に相応しい臣下になれ。それが出来ない主と臣下に主従関係など語る資格など存在せん」

——ボクはただ叫んで走って突つかかかって行って、我武者羅に敵へと突っ込んでいった。

彼女が行ったのとは真逆に何も考えていない。何も考えれる状態じゃない。頭の中がオーバーヒートして真っ白になっていて、とにかく熱い。

バカみたいに行き場のない感情が気炎となつて内側から吹き出してきていて抑えられない。恐怖は感じていても激情の方が上回っていて問題にならない。

惨めな強がり、無様な体たらくへの屈辱感、女の子から言われっぱなしの惨めったらしきで頭の中が、もうどうにかなくなってしまいそうだ！

この想いはぶつけなくちゃいけない！ 発散しなくちゃいけない！ もうこんな惨め思いを何度も何度も繰り返し味あわされるような弱すぎる立場から卒業したい！

『フンッ！ 聖剣使いが出てくるのを待っていてやったのだが、まさか最初に言っていたとおりヴァンパイアだけで突撃してくるとはな！

たとえ蛮勇でしかなくとも、そのクソ度胸には敬意を払うが……所詮は剣士の露払いでしかないことは承知の上！ 陽動など無意味!!』

ドラゴン化した敵からくだされる、ボクへの正当な評価と侮蔑。

【無謀よギヤスパー！ 隠れなさい！】

ボクを心配してくれて、『弱いんだから無理せず隠れる』と遠回しに忠告してくれるリアス部長の遠話魔法。

何もかもが今までのボクにとって当たり前だったもの。何もかも聞き慣れた、ごく当たり前の『弱者に対する労りの言葉』。

当たり前のことなのに・・・言われ慣れてきた普通の言葉なのに・・・なんで・・・なんでなんで!!

——今はこんなに言われて恥ずかしいんだろう!!!

「イヤです！ ダメです！ ボクは強くなるんです！ 部長が勝つにはゼノヴィアさんが必要で、ボクは困りしかなれない状況に甘んじるなんてもうイヤなんです！ 我慢できなくなっただんです！」

だってボクは、リアス・グレモリーの眷属なんですからあああああつつ!!!
!!!」

・ ・ ・そして画面の中ではじまる一方的な蹂躪ショー。
ゼノヴィアさん ・ ・ ・鬼だなあー ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

「ですね。しかも突っ立ってるだけに見えて相手の動きに合わせて剣気を発して邪魔してるから、敵は知らずに避けて止め刺すことでできずに試合が延々と長引いちやってますし。」

あれ、煽られる方としては地獄ですよー絶対に。

あゝあ、可愛そうギヤースカ君。そこで騒いでいる巨乳プリンセスな野次馬たちよりずーっとずーっとカワイソー。キャハツ☆

紫藤さんに、剣士としての見解も加えて解説してもらいながらグレモリーさんの方へ目をやると。

「ギヤースパー！ もうやめて！ お願いだから!!」

目を両手で覆って見ないようにしながら、乙女っぽい仕草で悲しんでらっしゃいました。普段からお色気キャラ感満載な人が今更って気もしますけど、基本的には眷属思いで人情家な人ですからね。無理もないっちゃ無理もないですか。

「あ、ついに動きを止めちゃいましたよギヤースカくん。体も消えてってますし、負けが確定したみたいですよ」

「・・・本当ですね。となるともう、終わりですか？」

「ええ、間違いなく終わりです。ジ・エ〜ンド♪」

愉しげに笑いながら紫藤さんが言つて、笑つてない瞳に殺意の色をにじませながら画面に映されている敵チームの二人とゼノヴィアさんを見上げながら、静かな声で愉しうに面白いものの始まりを告げるかの如く——七つのラツパで終わりを告げる、死の天使のように敵に対して終幕のはじまりを告げられるのでありましたとさ。

「始まりますよ、敵の終わりが♪ ギャースカ君を終わらせちゃったせいで☆

血を吸つて命を吸い取る吸血鬼一体倒すだけのために、万の命を一の命で奪い尽くす『死』を怒らせちゃいましたから♡

戦場だったら死が起きているところだけど、これが殺されても死なないレーディングゲームつてお遊びの戦争で良かったねえ♡★ バール眷属のお二人さんたち♡♪

ギャースカ君に学ばせるため見逃してやってただけのザコ共ちゃんたちに終わりがやつてクルクルクル♪♪♪

全く以て順調ジュンチョ♡♪ すべてはゼノヴィアの計算通り♡ 計画どおりに

つづく

…
ネ
♥
♥
」